

松山外環状道路（空港線）整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

ようごなかのこいせき

余戸中ノ孝遺跡 1・2・4・5次調査

ようごやないだいせき

余戸柳井田遺跡 1・2・3・6次調査

ひがしはぶはったんじいせき

東垣生八反地遺跡 1・3・4次調査

みなみよしだみなみだいいせき

南吉田南代遺跡 1次調査

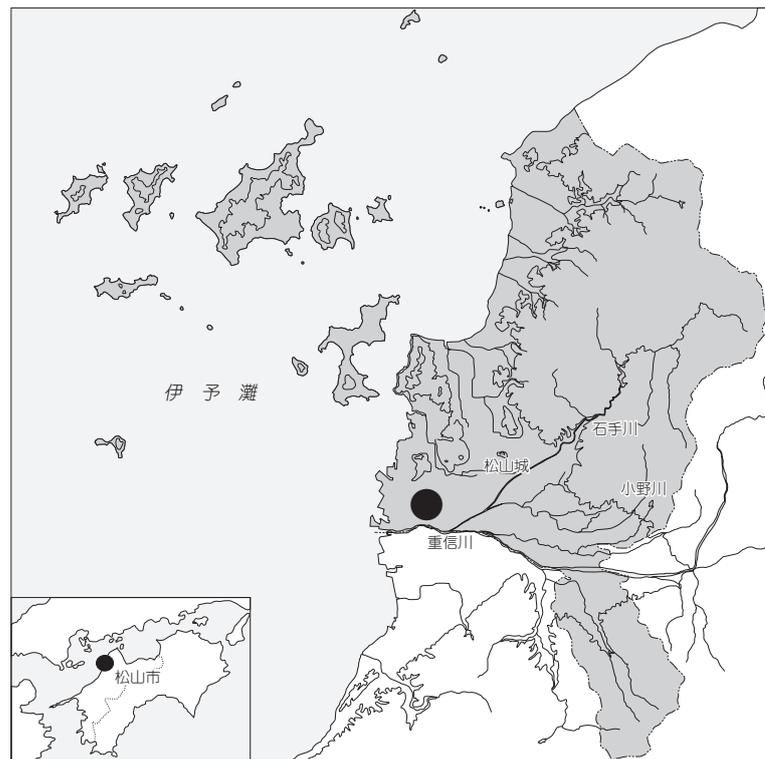
2019

公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団

埋蔵文化財センター

松山外環状道路（空港線）整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

ようごなかのこいせき
余戸中ノ孝遺跡1・2・4・5次調査
ようごやないだいせき
余戸柳井田遺跡1・2・3・6次調査
ひがしはぶはったんじいせき
東垣生八反地遺跡1・3・4次調査
みなみよしだみなみだいいせき
南吉田南代遺跡1次調査



2019

公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団
埋蔵文化財センター



巻頭図版 1. 調査地全景 南半部 (南東より)



巻頭図版2. 調査地全景 北半部 (南東より)

序 言

本書は、公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団が、松山外環状道路（空港線）整備に伴い、松山市の委託を受け、平成 26 年度から平成 28 年度にかけて実施した 12 遺跡の発掘調査報告書です。

本調査地が所在する松山市余戸西・東垣生・南吉田地区は松山平野の沿岸部付近にあり、近年の調査で弥生時代から中世までの集落や生産に関する遺跡の存在が明らかになってきました。

今回の調査では、弥生時代から室町時代までの集落遺構や生産遺構を発見しました。南吉田南代遺跡 1 次調査の堆積層から出土した大量の土器は、この付近に弥生時代から古墳時代にかけての集落が営まれた証であります。余戸中ノ孝遺跡、余戸柳井田遺跡、東垣生八反地遺跡では、鎌倉時代を中心とした集落の広がりが明らかとなり、なかでも余戸中ノ孝遺跡 1 次調査の土壙墓は、周溝を伴う中世墓としては県下では初例となります。さらに室町時代になると調査地一帯は、水田として土地利用されたことがわかりました。これらの成果は、平野沿岸部における集落様相を解明する重要な手がかりとなるものです。

このような成果を得られましたのも、埋蔵文化財に対する関係各位の深いご理解とご協力の賜物と厚くお礼申し上げます。本書が埋蔵文化財の保護思想の啓発や調査・研究にご活用いただければ幸いです。

平成 31 年 3 月 22 日

公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団

例 言

1. 本書は公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団埋蔵文化財センターが、平成27年1月から平成28年11月までの間に松山市余戸西・東垣生町・南吉田町内において、松山外環状道路（空港線）整備に伴い実施した埋蔵文化財発掘調査の成果をまとめた調査報告書である。
2. 遺構は、呼称名を略号で記述した。
 堅穴建物：SB、掘立柱建物：掘立、溝：SD、土坑：SK、井戸址：SE、性格不明遺構：SX、
 柱穴：SP
3. 本書で使用した標高値は海拔標高を示し、方位は国土座標を基準とした方眼北で世界測地系に準拠している。
4. 本書で報告した遺構埋土及び土層の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』（2006）に準拠した。
5. 本書掲載の遺構図や遺物実測図の縮分は、縮分値をスケール下に記した。
6. 報告書作成に伴う遺物の復元・実測・製図及び遺構の製図は、担当職員である河野 史知・宮内 慎一の指示のもと、三好 友香里・原 富美・紺田 明日香・松本 美代子が行った。
7. 本書掲載の遺構写真は担当調査員が撮影し、遺物写真の撮影は作田 一耕が行った。なお、写真図版の作成は河野・宮内が行った。
8. 発掘調査における基準点・水準点の設置は、株式会社ウエスコ愛媛事業所、株式会社エクセル調査設計、セントラルエンジニアリング株式会社、有限会社四国測量設計、南海測量設計株式会社、株式会社真鍋設計事務所に業務を委託した。また、空中写真撮影は南海放送サービス株式会社に業務を委託した。
9. 本書の執筆と編集は河野・宮内が担当し、浄書は平岡 直美が行った。
10. 本書で作成した図面・記録類及び出土品は、松山市立埋蔵文化財センターで保管している。
11. 報告書抄録は、巻末に掲載している。

本文目次

第1章	はじめに	〔河野〕	1
第1節	調査に至る経緯		1
第2節	調査・整理・刊行組織		2
第3節	遺跡の立地と歴史的環境		3
第2章	調査の概要	〔河野〕	7
第1節	調査の経緯		7
第2節	層位		10
第3節	検出遺構・遺物		11
第3章	余戸中ノ孝遺跡1次調査	〔宮内〕	15
第1節	調査の経緯		15
第2節	層位		16
第3節	遺構と遺物		16
第4節	小結		30
第4章	余戸中ノ孝遺跡2次調査	〔宮内〕	35
第1節	調査の経緯		35
第2節	層位		35
第3節	遺構と遺物		38
第4節	小結		40
第5章	余戸中ノ孝遺跡4次調査	〔河野〕	43
第1節	調査の経緯		43
第2節	層位		44
第3節	遺構と遺物		48
第4節	小結		62
第6章	余戸中ノ孝遺跡5次調査	〔宮内〕	67
第1節	調査の経緯		67
第2節	層位		67
第3節	遺構と遺物		68
第4節	小結		79

第 7 章	余戸柳井田遺跡 1 次調査	〔宮内〕	83
第 1 節	調査の経緯		83
第 2 節	層位		84
第 3 節	遺構と遺物		88
第 4 節	小 結		90
第 8 章	余戸柳井田遺跡 2 次調査	〔宮内〕	93
第 1 節	調査の経緯		93
第 2 節	層位		94
第 3 節	遺構と遺物		98
第 4 節	小 結		103
第 9 章	余戸柳井田遺跡 3 次調査	〔宮内〕	105
第 1 節	調査の経緯		105
第 2 節	層位		106
第 3 節	遺構と遺物		112
第 4 節	小 結		132
第 10 章	余戸柳井田遺跡 6 次調査	〔河野〕	141
第 1 節	調査の経緯		141
第 2 節	層位		142
第 3 節	遺構と遺物		144
第 4 節	小 結		154
第 11 章	東垣生八反地遺跡 1 次調査	〔河野〕	159
第 1 節	調査の経緯		159
第 2 節	層位		160
第 3 節	遺構と遺物		165
第 4 節	小 結		193
第 12 章	東垣生八反地遺跡 3 次調査	〔河野〕	203
第 1 節	調査の経緯		203
第 2 節	層位		204
第 3 節	遺構と遺物		207
第 4 節	小 結		212

第13章 東垣生八反地遺跡4次調査……………〔宮内〕 ……	215
第1節 調査の経緯……………	215
第2節 層位……………	216
第3節 遺構と遺物……………	216
第4節 小結……………	229
第14章 南吉田南代遺跡1次調査……………〔宮内〕 ……	235
第1節 調査の経緯……………	235
第2節 層位……………	236
第3節 遺構と遺物……………	238
第4節 小結……………	250
第15章 調査の成果と課題……………〔河野〕 ……	256

挿図目次

第1章 はじめに	
第1図 松山平野の地形分布図…………… 4	第2図 周辺遺跡分布図…………… 5
第2章 調査の概要	
第3図 調査地位置図…………… 8	第4図 調査地測量図・土層柱状図…………… 13
第3章 余戸中ノ孝遺跡1次調査	
第5図 調査地位置図…………… 15	第12図 SD2測量図・出土遺物実測図 …… 23
第6図 1区南・東壁土層図…………… 17	第13図 SK1測量図・出土遺物実測図 …… 24
第7図 2区南壁土層図…………… 18	第14図 土壌墓1測量図…………… 25
第8図 遺構配置図…………… 19	第15図 墓壙測量図・出土遺物実測図…………… 26
第9図 掘立1測量図・出土遺物実測図…………… 20	第16図 周溝1出土遺物実測図…………… 27
第10図 掘立2測量図…………… 21	第17図 柱穴出土遺物実測図…………… 28
第11図 SD1測量図・出土遺物実測図 …… 22	第18図 包含層出土遺物実測図…………… 29
第4章 余戸中ノ孝遺跡2次調査	
第19図 調査地位置図…………… 35	第22図 SK1測量図・出土遺物実測図 …… 39
第20図 南・西壁土層図…………… 36	第23図 SP1・2測量図…………… 40
第21図 遺構配置図…………… 37	第24図 包含層出土遺物実測図…………… 41
第5章 余戸中ノ孝遺跡4次調査	
第25図 調査地位置図…………… 43	第28図 4区西壁土層図…………… 46
第26図 区割図…………… 44	第29図 遺構配置図…………… 47
第27図 2・3区西壁土層図…………… 45	第30図 掘立1測量図…………… 48

第31図	SD1 測量図	48	第43図	SD11 測量図・出土遺物実測図	55
第32図	SD1 出土遺物実測図	49	第44図	SK1 測量図	56
第33図	SD2 測量図・出土遺物実測図		第45図	SK2 測量図	
第34図	SD3・4 測量図	50	第46図	SK3 測量図・出土遺物実測図	57
第35図	SD3 出土遺物実測図		第47図	SE1 測量図・出土遺物実測図	58
第36図	SD4 出土遺物実測図	51	第48図	SX1 測量図	59
第37図	SD5 測量図・出土遺物実測図		第49図	SX1 出土遺物実測図	
第38図	SD6・7・8 測量図	52	第50図	SX2 測量図	60
第39図	SD6 出土遺物実測図	53	第51図	SX2 出土遺物実測図	
第40図	SD7 出土遺物実測図		第52図	SX3 測量図・出土遺物実測図	61
第41図	SD9 測量図	54	第53図	4区柱穴・6層出土遺物実測図	62
第42図	SD10 測量図・出土遺物実測図				

第6章 余戸中ノ孝遺跡5次調査

第54図	調査地位置図	68	第60図	SB1 出土遺物実測図 (1)	74
第55図	1区・3区北壁土層図	69	第61図	SB1 出土遺物実測図 (2)	75
第56図	2区南壁土層図	70	第62図	SD1 出土遺物実測図	76
第57図	3区遺構配置図	71	第63図	SP5 出土遺物実測図	77
第58図	1区・2区遺構配置図	72	第64図	包含層出土遺物実測図	78
第59図	SB1 測量図	73			

第7章 余戸柳井田遺跡1次調査

第65図	調査地位置図	83	第69図	1区足跡検出状況図	88
第66図	1区東壁土層図	85	第70図	出土遺物実測図 (1)	89
第67図	2区東壁土層図	86	第71図	2区足跡検出状況図	
第68図	遺構配置図	87	第72図	出土遺物実測図 (2)	90

第8章 余戸柳井田遺跡2次調査

第73図	調査地位置図	93	第78図	水田址出土遺物実測図	99
第74図	遺構配置図〔第1面〕	95	第79図	SD2 断面図・出土遺物実測図	
第75図	遺構配置図〔第2面〕	96	第80図	SD3 断面図・出土遺物実測図	100
第76図	西壁土層図 (1)	97	第81図	SD4 断面図・出土遺物実測図	101
第77図	西壁土層図 (2)	98	第82図	包含層出土遺物実測図	102

第9章 余戸柳井田遺跡3次調査

第83図	調査地位置図	105	第91図	掘立3 測量図・出土遺物実測図	115
第84図	東壁土層図 (1)	107	第92図	掘立1 測量図	
第85図	東壁土層図 (2)	108	第93図	SD1・2 測量図	117
第86図	東壁土層図 (3)	109	第94図	SD1・2 出土遺物実測図	118
第87図	足跡検出状況図〔第Ⅱ④層上面〕	110	第95図	SD3 測量図	119
第88図	遺構配置図〔第Ⅱ⑦・Ⅲ①層上面〕	111	第96図	SD3 出土遺物実測図	120
第89図	掘立2 測量図・出土遺物実測図	113	第97図	SD5～8 断面図	121
第90図	掘立4 測量図・出土遺物実測図	114	第98図	SK3 測量図・出土遺物実測図	122

第 99 図	SK4 測量図・出土遺物実測図 ……	123	第 104 図	SX1 出土遺物実測図 (2) ……	128
第 100 図	西壁土層図		第 105 図	第Ⅱ⑤層出土遺物実測図 (1) ……	129
第 101 図	土墳墓 1 測量図・出土遺物実測図 ……	124	第 106 図	第Ⅱ⑤層出土遺物実測図 (2) ……	130
第 102 図	柱穴出土遺物実測図 ……	126	第 107 図	第Ⅱ⑥層出土遺物実測図 (1) ……	131
第 103 図	SX1 出土遺物実測図 (1) ……	127	第 108 図	第Ⅱ⑥層出土遺物実測図 (2) ……	132
第 10 章 余戸柳井田遺跡 6 次調査					
第 109 図	調査地位置図 ……	141	第 118 図	SK1 測量図 ……	149
第 110 図	区割図 ……	142	第 119 図	SK2 測量図 ……	150
第 111 図	1 区西壁土層図 ……	143	第 120 図	SK3 測量図	
第 112 図	1 区第 1 面水田足跡 ……	144	第 121 図	SP37 測量図	
第 113 図	1 区第 1 面水田足跡①②③ ……	145	第 122 図	柱穴出土遺物実測図 ……	151
第 114 図	1 区第 2 面遺構配置図 ……	146	第 123 図	SX1 測量図・出土遺物実測図 ……	152
第 115 図	SD1 測量図・出土遺物実測図 ……	147	第 124 図	1 区北側トレンチ・北端粘土中 出土遺物実測図	
第 116 図	SE1 測量図 ……	148	第 125 図	1 区包含層出土遺物実測図 ……	153
第 117 図	SE1 出土遺物実測図 ……	149			
第 11 章 東垣生八反地遺跡 1 次調査					
第 126 図	調査地周辺位置図 ……	159	第 150 図	SD12 測量図 ……	177
第 127 図	区割図 ……	160	第 151 図	SD12 出土遺物実測図 ……	178
第 128 図	1 区西壁土層図 ……	161	第 152 図	SD13 測量図	
第 129 図	2 区東壁土層図 ……	162	第 153 図	SD14 測量図 ……	179
第 130 図	1 区遺構配置図 ……	163	第 154 図	SD14 出土遺物実測図	
第 131 図	2 区遺構配置図 ……	164	第 155 図	SD15 測量図・出土遺物実測図 ……	180
第 132 図	水田址測量図 ……	165	第 156 図	SD16・17・18 測量図	
第 133 図	掘立 1 測量図 ……	166	第 157 図	SD19 測量図・出土遺物実測図 ……	181
第 134 図	掘立 1 出土遺物実測図 ……	167	第 158 図	SD20 測量図	
第 135 図	掘立 2 測量図・出土遺物実測図 ……	168	第 159 図	SD21 測量図 ……	182
第 136 図	SD1 測量図・出土遺物実測図 ……	169	第 160 図	SD22 測量図	
第 137 図	SD2 出土遺物実測図 ……	170	第 161 図	SD22 出土遺物実測図 ……	183
第 138 図	SD2・3 測量図		第 162 図	SK1 測量図	
第 139 図	SD3 出土遺物実測図 (1) ……	171	第 163 図	SK2 測量図・出土遺物実測図 ……	184
第 140 図	SD3 出土遺物実測図 (2) ……	172	第 164 図	SK3 測量図・出土遺物実測図 ……	185
第 141 図	SD4 測量図		第 165 図	SK4 測量図	
第 142 図	SD4 出土遺物実測図 ……	173	第 166 図	SK5 測量図 ……	186
第 143 図	SD5 測量図・出土遺物実測図		第 167 図	SK6 測量図	
第 144 図	SD6 測量図・出土遺物実測図 ……	174	第 168 図	SK7 測量図・出土遺物実測図 ……	187
第 145 図	SD7 測量図		第 169 図	SK8 測量図	
第 146 図	SD8 測量図・出土遺物実測図 ……	175	第 170 図	SK9 測量図	
第 147 図	SD9 測量図・出土遺物実測図		第 171 図	SK10 測量図 ……	188
第 148 図	SD10 測量図・出土遺物実測図 ……	176	第 172 図	SK11 測量図	
第 149 図	SD11 測量図・出土遺物実測図 ……	177	第 173 図	SK12 測量図	

第174図	土壙墓1 測量図	189	第178図	柱穴出土遺物実測図	191
第175図	土壙墓1 出土遺物実測図	190	第179図	SX1 測量図・出土遺物実測図	192
第176図	SE1 測量図・出土遺物実測図		第180図	SX2 測量図	
第177図	SE2 測量図	191			
第12章 東垣生八反地遺跡3次調査					
第181図	調査地位置図	203	第186図	第2面遺構配置図	208
第182図	区割図	204	第187図	SD1 測量図	209
第183図	西壁土層図	205	第188図	SD1 出土遺物実測図	
第184図	第1面水田址測量図	206	第189図	SX1 測量図・出土遺物実測図	210
第185図	SK1 測量図	207	第190図	包含層・水田面上出土遺物実測図	211
第13章 東垣生八反地遺跡4次調査					
第191図	調査地位置図	215	第199図	SE1 測量図	223
第192図	北壁土層図	217	第200図	SE1 出土遺物実測図	224
第193図	足跡検出状況図〔第Ⅱ②層上面〕	218	第201図	SE2 測量図	226
第194図	遺構配置図〔第Ⅲ①層上面〕	219	第202図	SE2 出土遺物実測図(1)	227
第195図	SD1～5 断面図	220	第203図	SE2 出土遺物実測図(2)	228
第196図	SD1・2 出土遺物実測図	221	第204図	柱穴出土遺物実測図	229
第197図	SK1 測量図・出土遺物実測図	222	第205図	第Ⅱ③・Ⅱ④層出土遺物実測図	230
第198図	SK2 測量図				
第14章 南吉田南代遺跡1次調査					
第206図	調査地位置図	235	第213図	中央トレンチ出土遺物実測図(2)	245
第207図	東壁土層図	237	第214図	中央トレンチ出土遺物実測図(3)	246
第208図	南壁土層図	238	第215図	南壁トレンチ出土遺物実測図(1)	247
第209図	遺構配置図	239	第216図	南壁トレンチ出土遺物実測図(2)	248
第210図	SD1 測量図・出土遺物実測図	240	第217図	西壁トレンチ出土遺物実測図(1)	249
第211図	第Ⅳ層取上遺物実測図	243	第218図	西壁トレンチ出土遺物実測図(2)	250
第212図	中央トレンチ出土遺物実測図(1)	244			
第15章 調査の成果と課題					
第219図	余戸柳井田遺跡・東垣生八反地遺跡合成図	258			

表目次

第1章 はじめに		
表1	試掘調査一覧	1
第2章 調査の概要		
表2	調査地一覧	9
表3	検出遺構一覧	12
第3章 余戸中ノ孝遺跡1次調査		
表4	掘立柱建物一覧	31
表5	溝一覧	31

表 6	土坑一覽	31	表 13	土壙墓 1 (墓壙) 出土遺物觀察表 (土製品)	32
表 7	土壙墓 1 (墓壙)		表 14	土壙墓 1 (周溝) 出土遺物觀察表 (土製品)	33
表 8	土壙墓 1 (周溝)		表 15	柱穴出土遺物觀察表 (土製品)	
表 9	掘立 1 出土遺物觀察表 (土製品)		表 16	包含層出土遺物觀察表 (土製品)	
表 10	SD1 出土遺物觀察表 (土製品)		表 17	包含層出土遺物觀察表 (石製品)	34
表 11	SD2 出土遺物觀察表 (土製品)	32			
表 12	SK1 出土遺物觀察表 (土製品)				
第 4 章 余戸中ノ孝遺跡 2 次調査					
表 18	土坑一覽	42	表 20	SK1 出土遺物觀察表 (土製品)	42
表 19	柱穴一覽		表 21	包含層出土遺物觀察表 (土製品)	
第 5 章 余戸中ノ孝遺跡 4 次調査					
表 22	掘立柱建物一覽	63	表 33	SD7 出土遺物觀察表 (土製品)	65
表 23	溝一覽		表 34	SD10 出土遺物觀察表 (土製品)	
表 24	土坑一覽		表 35	SD11 出土遺物觀察表 (土製品)	
表 25	井戸址一覽		表 36	SK3 出土遺物觀察表 (土製品)	
表 26	性格不明遺構一覽		表 37	SK3 出土遺物觀察表 (鉄製品)	
表 27	SD1 出土遺物觀察表 (土製品)	64	表 38	SE1 出土遺物觀察表 (土製品)	
表 28	SD2 出土遺物觀察表 (土製品)		表 39	SX1 出土遺物觀察表 (土製品)	66
表 29	SD3 出土遺物觀察表 (土製品)		表 40	SX2 出土遺物觀察表 (土製品)	
表 30	SD4 出土遺物觀察表 (土製品)		表 41	SX3 出土遺物觀察表 (土製品)	
表 31	SD5 出土遺物觀察表 (土製品)		表 42	4 区柱穴・6 層出土遺物觀察表 (土製品)	
表 32	SD6 出土遺物觀察表 (土製品)				
第 6 章 余戸中ノ孝遺跡 5 次調査					
表 43	竪穴建物一覽	79	表 46	SD1 出土遺物觀察表 (土製品)	81
表 44	溝一覽	80	表 47	SP5 出土遺物觀察表 (土製品)	
表 45	SB1 出土遺物觀察表 (土製品)		表 48	包含層出土遺物觀察表 (土製品)	
第 7 章 余戸柳井田遺跡 1 次調査					
表 49	出土遺物觀察表 (土製品)	91			
第 8 章 余戸柳井田遺跡 2 次調査					
表 50	溝一覽	103	表 52	溝出土遺物觀察表 (土製品)	104
表 51	足跡出土遺物觀察表 (土製品)	104	表 53	包含層出土遺物觀察表 (土製品)	
第 9 章 余戸柳井田遺跡 3 次調査					
表 54	掘立柱建物一覽	133	表 61	SD3 出土遺物觀察表 (土製品)	135
表 55	溝一覽		表 62	SD3 出土遺物觀察表 (木製品)	
表 56	土坑一覽	134	表 63	SK 出土遺物觀察表 (土製品)	
表 57	掘立出土遺物觀察表 (土製品)		表 64	土壙墓 1 出土遺物觀察表 (土製品)	
表 58	掘立出土遺物觀察表 (木製品)		表 65	柱穴出土遺物觀察表 (土製品)	136
表 59	SD1 出土遺物觀察表 (土製品)		表 66	SX1 出土遺物觀察表 (土製品)	
表 60	SD2 出土遺物觀察表 (土製品)	135	表 67	第Ⅱ⑤層出土遺物觀察表 (土製品)	138

表 68	第Ⅱ⑥層出土遺物觀察表（土製品）	139
------	------------------	-----

第 10 章 余戸柳井田遺跡 6 次調査

表 69	溝一覽	155
表 70	井戸址一覽	
表 71	土坑一覽	
表 72	性格不明遺構一覽	
表 73	SD1 出土遺物觀察表（土製品）	
表 74	SE1 出土遺物觀察表（土製品）	156

表 75	柱穴出土遺物觀察表（土製品）	156
表 76	SX1 出土遺物觀察表（土製品）	157
表 77	1 区北側トレンチ・北端粘土中 出土遺物觀察表（土製品）	
表 78	1 区包含層出土遺物觀察表（土製品）	158

第 11 章 東垣生八反地遺跡 1 次調査

表 79	掘立柱建物一覽	194
表 80	溝一覽	
表 81	土坑一覽	195
表 82	土壙墓一覽	
表 83	井戸址一覽	196
表 84	性格不明遺構一覽	
表 85	掘立 1 出土遺物觀察表（土製品）	
表 86	掘立 2 出土遺物觀察表（土製品）	
表 87	SD1 出土遺物觀察表（土製品）	
表 88	SD2 出土遺物觀察表（土製品）	197
表 89	SD3 出土遺物觀察表（土製品）	
表 90	SD3 出土遺物觀察表（石製品）	198
表 91	SD4 出土遺物觀察表（土製品）	
表 92	SD4 出土遺物觀察表（石製品）	
表 93	SD5 出土遺物觀察表（土製品）	
表 94	SD6 出土遺物觀察表（土製品）	
表 95	SD8 出土遺物觀察表（土製品）	199
表 96	SD9 出土遺物觀察表（土製品）	

表 97	SD10 出土遺物觀察表（土製品）	199
表 98	SD10 出土遺物觀察表（石製品）	
表 99	SD11 出土遺物觀察表（土製品）	
表 100	SD12 出土遺物觀察表（土製品）	
表 101	SD14 出土遺物觀察表（土製品）	200
表 102	SD15 出土遺物觀察表（土製品）	
表 103	SD19 出土遺物觀察表（土製品）	
表 104	SD22 出土遺物觀察表（土製品）	
表 105	SK1 出土遺物觀察表（土製品）	201
表 106	SK2 出土遺物觀察表（土製品）	
表 107	SK3 出土遺物觀察表（土製品）	
表 108	SK7 出土遺物觀察表（土製品）	
表 109	土壙墓 1 出土遺物觀察表（土製品）	
表 110	井戸（SE1）出土遺物觀察表 （土製品）	202
表 111	柱穴出土遺物觀察表（土製品）	
表 112	SX1 出土遺物觀察表（土製品）	

第 12 章 東垣生八反地遺跡 3 次調査

表 113	土坑一覽	213
表 114	溝一覽	
表 115	性格不明遺構一覽	

表 116	SD1 出土遺物觀察表（土製品）	213
表 117	SX1 出土遺物觀察表（土製品）	
表 118	包含層・水田面上出土遺物觀察表 （土製品）	214

第 13 章 東垣生八反地遺跡 4 次調査

表 119	溝一覽	231
表 120	土坑一覽	
表 121	井戸址一覽	
表 122	SD1 出土遺物觀察表（土製品）	232
表 123	SD2 出土遺物觀察表（土製品）	
表 124	SK1 出土遺物觀察表（土製品）	

表 125	SE1 出土遺物觀察表（土製品）	232
表 126	SE1 出土遺物觀察表（木製品）	233
表 127	SE2 出土遺物觀察表（土製品）	
表 128	柱穴出土遺物觀察表（土製品）	234
表 129	第Ⅱ③層出土遺物觀察表（土製品）	
表 130	第Ⅱ④層出土遺物觀察表（土製品）	

第14章 南吉田南代遺跡1次調査

表 131	溝一覧	251	表 135	中央トレンチ出土遺物観察表 (土製品)	252
表 132	SD1 出土遺物観察表 (土製品)		表 136	南壁トレンチ出土遺物観察表 (土製品)	254
表 133	SD1 出土遺物観察表 (木製品)	252	表 137	西壁トレンチ出土遺物観察表 (土製品)	255
表 134	第IV層取上遺物観察表 (土製品)		表 138	西壁トレンチ出土遺物観察表 (石製品)	

写真図版目次

巻頭図版1. 調査地全景 南半部 (南東より)

巻頭図版2. 調査地全景 北半部 (南東より)

第3章 余戸中ノ孝遺跡1次調査

図版 1	1. 調査地全景 (東より)	図版 4	1. 出土遺物 (SD1: 3・6、SD2: 8・9、SK1: 14・17、土壙墓 1: 21・24、周溝 1: 26)
	2. 2区完掘状況 (西より)		
	3. 1区完掘状況 (北西より)	図版 5	1. 出土遺物 (SP56: 30、包含層: 36・41・43 ~ 45・48 ~ 50)
図版 2	1. 掘立2検出状況 (東より)		
	2. 土壙墓1検出状況 (北東より)		
	3. 土壙墓1断面 (北東より)		
図版 3	1. 土壙墓1人骨出土状況① (南より)		
	2. 土壙墓1人骨出土状況② (南より)		
	3. 現地説明会風景 (北より)		

第4章 余戸中ノ孝遺跡2次調査

図版 6	1. 表土掘削状況 (北より)	図版 7	1. 出土遺物 (SK1: 2、包含層: 4 ~ 10・13・14)
	2. 南壁土層 (北より)		
	3. 完掘状況 (南西より)		

第5章 余戸中ノ孝遺跡4次調査

図版 8	1. 調査地から余戸柳井田遺跡を望む (南東より)	図版 11	1. 出土遺物 (SD1: 3、SD5: 12、SD6: 18、SD10: 22、SD11: 23・24・26、SK3: 30)
	2. 1区遺構完掘状況 (北より)		
	3. 2区遺構完掘状況 (北より)	図版 12	1. 出土遺物 (SE1: 32、SX2: 41・43・45、SP15: 48、SP17: 51)
図版 9	1. 2区SD1遺物出土状況 (北より)		
	2. 3区掘削状況 (東より)		
	3. 4区遺構完掘状況 (南東より)		
図版 10	1. 4区掘立1完掘状況 (東より)		
	2. 4区SD11完掘状況 (南より)		
	3. 4区SE1半截状況 (南より)		

第6章 余戸中ノ孝遺跡5次調査

図版 13	1. 1区完掘状況 (東より)	図版 14	1. 3区西壁土層 (東より)
	2. 2区完掘状況 (東より)		2. SB1検出状況 (東より)
	3. 3区完掘状況 (東より)		3. SB1遺物出土状況 (北より)

- 図版 15 1. SB1 出土遺物①
図版 16 1. 出土遺物 (SB1 ②: 15 ~ 17、SD1 :
19・21・23・25・27、SP5 : 28・30)

第7章 余戸柳井田遺跡1次調査

- 図版 18 1. 調査地全景 (南東より)
2. 1区完掘状況 (南より)
3. 2区完掘状況 (北より)
図版 19 1. 1区東壁土層 (西より)
2. 2区足跡完掘状況 (西より)

- 図版 17 1. 包含層出土遺物

3. 1区足跡検出状況 (南より)
4. 作業風景 (北西より)
5. 出土遺物 (第II②層:1、第II④層:
2・3、第II⑦層:4、1区トレンチ:5)

第8章 余戸柳井田遺跡2次調査

- 図版 20 1. 1面完掘状況 (南より)
2. 2面完掘状況 (北より)
3. 西壁土層 (東より)
図版 21 1. 1面足跡検出状況 (北より)
2. SD2 ~ 4 断面 (東より)
3. SD2 ~ 4 検出状況 (南東より)

- 図版 22 1. 出土遺物 (SD2:2、SD3:3、SD4:4、
第II⑫層:5・6・8 ~ 12、第II⑭層:
13・15・17・18)

第9章 余戸柳井田遺跡3次調査

- 図版 23 1. 調査前全景 (南より)
2. 1面足跡検出状況 (北より)
3. 1面足跡検出状況 (西より)
図版 24 1. 2面完掘状況 (北より)
2. 掘立1 ~ 3 検出状況 (北より)
3. 掘立柱材検出状況 (南より)
図版 25 1. SD1 ~ 3 検出状況 (北より)
2. SD1 ~ 3 断面 (南より)
3. SD1 遺物出土状況 (南より)
4. SK4 検出状況 (南より)
5. 土壙墓1 検出状況① (西より)
6. 土壙墓1 検出状況② (南より)

- 図版 26 1. 出土遺物 (掘立3:4、SD1:7・10・
11、SD3:20・21・25)

- 図版 27 1. 出土遺物 (SK3:26、SK4:27、土壙
墓1:28・29、SP92:35、SP113:42、
SP39:43 ~ 45)

- 図版 28 1. SX1 出土遺物

- 図版 29 1. 出土遺物 (第II⑤層:93・101・104・
106・108、第II⑥層:128 ~ 130)

第10章 余戸柳井田遺跡6次調査

- 図版 30 1. 調査地全景 (北西より)
2. 1区水田面完掘状況 (北より)
3. 1区西壁土層堆積状況 (東より)
図版 31 1. 1区SE1 掘下げ状況 (北より)
2. 1区SE1 の木組材
3. 1区柱穴内から出土した瓦器椀
(北より)

- 図版 32 1. 1区遺構完掘状況 (北より)
2. 1区南側遺構完掘状況 (西より)
3. 2区掘削状況 (北より)

- 図版 33 1. 出土遺物 (SE1:8・10、SX1:25、
包含層:36・37・43)

第11章 東垣生八反地遺跡1次調査

- 図版 34 1. 調査区全景 (南東より)
2. 1区遺構検出状況 (南東より)
3. 1区西北隅壁土層 (南東より)
- 図版 35 1. 1区第2面水田面完掘状況 (西より)
2. 土壙墓1人骨・木棺検出状況 (西より)
3. 土壙墓1棺外遺物出土状況 (北より)
- 図版 36 1. SD3遺物出土状況 (南より)
2. 1区遺構完掘状況 (北西より)
3. 2区遺構完掘状況 (南東より)
- 図版 37 1. SE1木片出土状況 (北より)
2. 2区遺構完掘状況 (南より)
3. 2区掘立1完掘状況 (西より)
- 図版 38 1. 出土遺物 (掘立1:3、SD3①:18・20・22・23・26・27・29)
- 図版 39 1. 出土遺物 (SD3②:30・36、SD4:38・40、SD10:50・51、SD12:58)
- 図版 40 1. 出土遺物 (SD14:63・64、SD22:72、SK7:83、土壙墓1:84~87、SP152:94、SP138:95)

第12章 東垣生八反地遺跡3次調査

- 図版 41 1. 水田面足跡完掘状況 (北より)
2. 遺構検出状況 (北より)
3. 第2面遺構完掘状況 (北より)
- 図版 42 1. 第2面遺構完掘状況 (南より)
2. 出土遺物 (SD1:5~7、SX1:9・10、包含層:14・17~19、水田面上:20)

第13章 東垣生八反地遺跡4次調査

- 図版 43 1. 調査区全景 (南東より)
2. 1面目遺構完掘状況 (西より)
3. 2面目遺構完掘状況 (西より)
- 図版 44 1. SE1半截状況 (北より)
2. SE1完掘状況 (北より)
3. SE2検出状況 (北西より)
- 図版 45 1. SE2木柁検出状況 (南より)
2. SE2曲物出土状況 (南より)
3. SE2曲物取り上げ状況 (西より)
- 図版 46 1. SP26遺物出土状況 (東より)
2. SP20遺物出土状況 (南より)
3. 現地説明会風景 (東より)
- 図版 47 1. 出土遺物 (SE1:5・11~14・19・20、SE2①:21・26・29)
- 図版 48 1. 出土遺物 (SE2②:30・31・35・39、SP47:40、SP19:43、SP20:44、第II③層:49)

第14章 南吉田南代遺跡1次調査

- 図版 49 1. 調査地全景 (東より)
2. 東壁土層 (西より)
3. 遺物出土状況① (南より)
- 図版 50 1. 遺物出土状況② (西より)
2. 遺物出土状況③ (南より)
3. SD1検出状況 (東より)
- 図版 51 1. 出土遺物 (SD1:6、第IV層取上遺物①:7・9・10・12)
- 図版 52 1. 出土遺物 (第IV層取上遺物②:13・17・18、中央トレンチ①:19・23・24・26)
- 図版 53 1. 中央トレンチ出土遺物②
- 図版 54 1. 中央トレンチ出土遺物③
- 図版 55 1. 南壁トレンチ出土遺物
- 図版 56 1. 西壁トレンチ出土遺物

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

2013（平成25）年10月、松山市都市整備部道路建設課（以下、道路建設課という。）より松山外環状道路（空港線）整備に伴う埋蔵文化財の確認申込書が松山市教育委員会事務局文化財課（以下、文化財課という。）に提出された。確認申込書が提出された松山市余戸西、東垣生町、南吉田町は、これまで本格的な発掘調査は実施されておらず、遺跡の様相は不明な地域である。

このことから、文化財課は道路建設課と協議の結果、道路整備予定地内における埋蔵文化財の有無を確認するため、試掘調査を実施することになった。

試掘調査は公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団埋蔵文化財センター（以下、埋文センターという。）が主体となり、平成25年度から27年度までの間に6回実施した。試掘調査の詳細は、表1のとおりである。調査の結果、工事対象地の内の数箇所で見つかった弥生時代から中世までの遺跡が発見された。この結果を受け、埋文センターと道路建設課との間で協議が行われ、埋蔵文化財を確認した地域を対象とした発掘調査を実施することになった。

発掘調査は松山平野西部地域における弥生時代から中世までの集落様相や古地形・古環境復元を主目的とし、埋文センターが主体となり、文化財課と道路建設課の協力のもと、2015（平成27）年1月13日より開始した。

表1 試掘調査一覧

試掘No. 申請No.	地番	面積	トレンチ数	試掘期間	遺構検出 トレンチ	検出遺構	出土遺物	備考
212 H25-141	松山市余戸西四丁目2420番外51筆	15,416.15㎡	53	平成26（2014）年 1月14日～同年1月28日	T1・2・3	溝 2条 柱穴3基	土師器・須恵器 瓦器・陶磁器 石器・木片	余戸中ノ孝1・2・4・5次 余戸柳井田1次
213 H25-142	松山市余戸西四丁目2169-1、2189-1、松山市東垣生町817-1、819-1、823-7、827-1、829-1、832-1、899-1、900-1	3,377.60㎡	11	平成26（2014）年 1月14日～同年1月22日	—	—	土師器・須恵器 瓦器・陶磁器 木片	余戸柳井田6次 東垣生八反地1・3次
180 H26-141	松山市余戸西四丁目2187番、2188番、東垣生町816番1、905番1、822番1、824番7、824番1、825番1、825番7	1,706.19㎡	9	平成27（2015）年 2月10日～同年2月17日	T2・5・6	溝 2条 柱穴7基	弥生土器・土師器 須恵器・瓦器	余戸柳井田3次 東垣生八反地3・4次
33 H26-224	松山市南吉田町8番4、8番5、8番6、10番5、10番6、10番8、10番9、11番8、11番9、11番10、11番11、12番10、17番24、323番8、327番10、328番23、331番6、332番4、332番5	2,539.98㎡	15	平成27（2015）年 5月12日～同年5月18日	—	—	弥生土器・土師器 須恵器	南吉田南代1次
27 H26-226	松山市余戸西四丁目2407番5	297.87㎡	1	平成27（2015）年 5月18日	T1	溝 1条 柱穴3基	土師器・瓦器	余戸柳井田2次
129 H27-133	松山市東垣生町818番7、818番10、818番9	487.99㎡	2	平成27（2015）年 10月16日	T1・2	溝 1条 井戸1基 柱穴9基	土師器・須恵器 瓦器・陶磁器 木片	東垣生八反地1次

第2節 調査・整理・刊行組織

発掘調査は平成26年度から28年度までの間に実施した。調査報告書の刊行については埋文センターと道路建設課との間で報告書作成に伴う整理業務委託契約が締結され、30年度は報告書の印刷及び発送に関する委託契約を締結した。なお、発掘調査及び整理事業は、以下の体制で実施した。

〔平成26年度 調査組織〕（平成26年4月1日時点）

公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団	理事長	中山紘治郎
事務局	局長	中西 真也
	次長兼総務部長	紺田 正彦
施設利用推進部	部長	玉井 弘幸
埋蔵文化財センター	所長兼考古館館長	田城 武志
	（調査・研究）主査	山之内志郎
	（調査・研究）主査	橋本 雄一
	主任	宮内 慎一（調査担当）
	嘱託	大西 朋子（写真担当）

〔平成27年度 調査組織〕（平成27年4月1日時点）

公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団	理事長	中山紘治郎
事務局	局長	中西 真也
	次長兼総務部長	紺田 正彦
施設利用推進部	部長	渡部 広明
埋蔵文化財センター	所長兼考古館館長	田城 武志
	（調査・研究）主査	山之内志郎
	主任	宮内 慎一（調査担当）
	主任	河野 史知（調査担当）
	主任	水本 完児（調査担当）
	嘱託	大西 朋子（写真担当）

〔平成28年度 調査組織〕（平成28年4月1日時点）

公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団	理事長	中山紘治郎
事務局	局長	中西 真也
	次長兼総務部長	橘 昭司
文化振興部	部長	梶原 信之
埋蔵文化財センター	所長兼考古館館長	村上 卓也
	（調査・研究）主査	梅木 謙一
	主任	河野 史知（調査担当）
	主任	水本 完児（調査担当）

〔平成 29 年度 整理組織〕（平成 29 年 4 月 1 日時点）

公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団	理事長	中山紘治郎
事務局	局長	中西 真也
	次長兼総務部長	橘 昭司
文化振興部	部長	渡部 広明
埋蔵文化財センター	所長	村上 卓也
	考古館館長	梅木 謙一
	主任	宮内 慎一（整理担当）
	主任	河野 史知（整理担当）
	主任	水本 完児（整理担当）

〔平成 30 年度 整理組織〕

公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団	理事長	中山紘治郎 （前任、～ 5/29）
	理事長	本田 元広 （5/30～）
事務局	局長	片山 雅央
	次長兼総務部長	高木 祝二
文化振興部	部長	小田 克己
埋蔵文化財センター	所長	村上 卓也
	考古館館長	梅木 謙一
	主任	宮内 慎一（整理担当）
	主任	河野 史知（整理担当）
	嘱託	作田 一耕（写真担当）

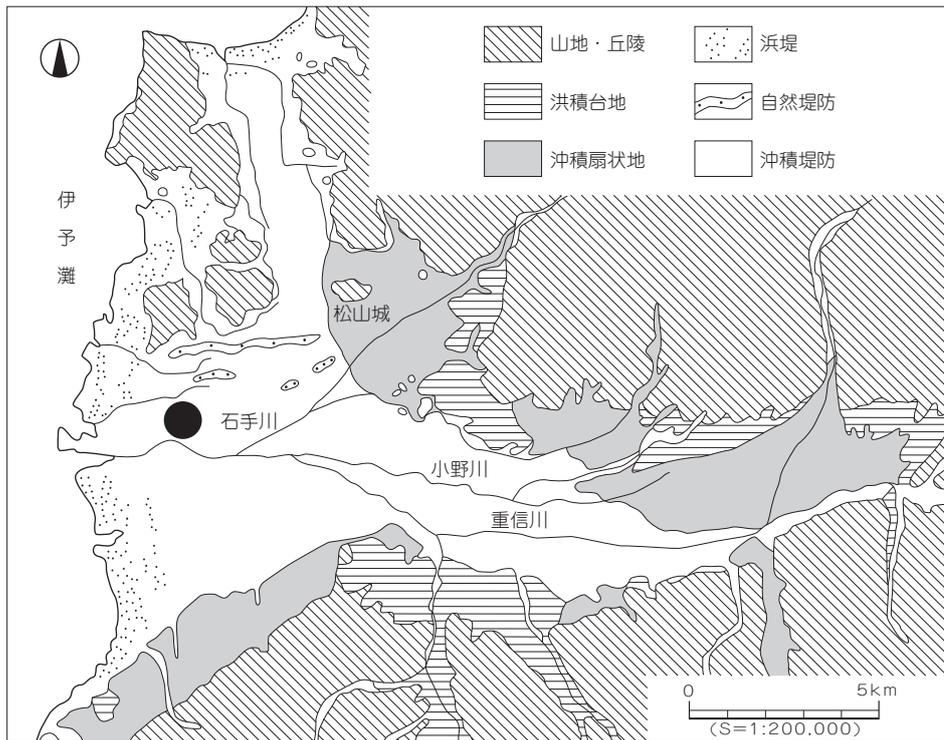
第 3 節 遺跡の立地と歴史的環境

1. 遺跡の立地

松山平野は四国西北部に位置する県下最大の平野であり、西に瀬戸内海の斎灘、伊予灘、北に高縄半島、東は四国山地に囲まれている。平野内は、一級河川の重信川や石手川などの大小河川で形成された複合扇状地堆積物と沖積低地や浜提などで形成されている。このうち、重信川は東三方ヶ森の南麓に水源を發し南流しながら東温市で向きを西流に変え、支流である石手川や砥部川などと合流しながら伊予灘に注ぐ。今回調査を実施した 12 遺跡は、松山平野の西部に所在する余戸・東垣生・南吉田地区にまたがり、調査地東南端の余戸地区は重信川下流に接し、調査地西北端の南吉田地区は伊予灘に接する沖積低地上の標高 4～5m に位置する（第 1 図）。

2. 歴史的環境

ここでは、松山平野西部の沖積低地及び周辺平野部の遺跡分布を概観する。調査地周辺の重信川下



第 1 図 松山平野の地形分布図

流域右岸から北方約 2km の津田中学校構内遺跡と東方約 3.5km の古川遺跡までの範囲は遺跡の空白地帯であったが、近年の松山外環状道路建設に伴う発掘調査で集落遺構や生産遺構の様相が徐々に浮かびつつある（第 2 図）。

縄文時代

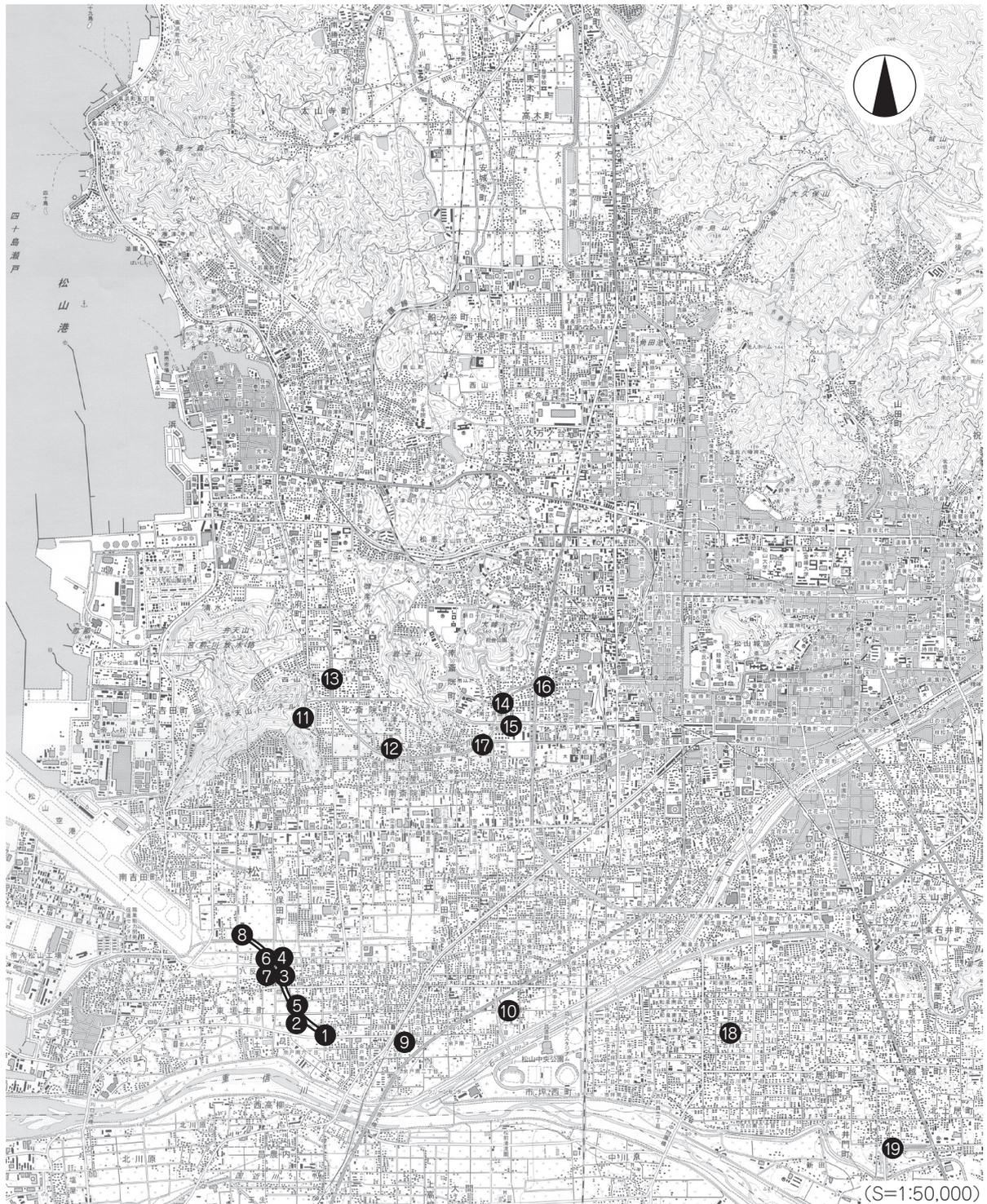
古照遺跡の堰を覆う砂礫層中から後期を中心に前期末から晩期までの土器片が出土した。また、大峰ヶ台丘陵東北麓の朝美澤遺跡 2 次調査の包含層中から後期の土器片が少量出土した。

弥生時代

現在の重信川河口から約 3km 上流右岸の標高約 7m に位置する余戸弘川遺跡では、前期末から中期初頭、中期、後期後半の掘立柱建物や溝・土坑で構成する集落を検出し、3 時期に及び集落が継続的に形成されていたことが確認できた。余戸弘川遺跡から東方約 900m の余土中学校構内遺跡では前期から後期にかけての溝や土坑、柱穴を検出した。溝内には弥生土器片に混じり石器の未成品が数多く出土しており、調査区近辺で石器製作が行われていたと考えられている。丘陵裾部の津田中学校構内遺跡では弥生時代末の土錘、石錘などの漁網具 13 点が出土した。宮前川遺跡では、弥生時代末の焼失建物 2 棟がある。

弥生時代～古墳時代

余戸中ノ孝遺跡 3・6 次調査から竪穴建物 SII6 から祭祀後に廃棄されたと考えられる弥生時代末から古墳時代初頭にかけての一括性の高い遺物が大量に出土しており、竪穴建物の廃絶後に廃棄土坑に転用されたと考えられている。



- | | | |
|---------------------|-----------------|--------------------|
| ① 余戸中ノ孝遺跡1・2・3・5次調査 | ② 余戸中ノ孝遺跡4次調査 | ③ 余戸柳井田遺跡1・2・4次調査 |
| ④ 余戸柳井田遺跡3・5・6次調査 | ⑤ 余戸柳井田遺跡7次調査 | ⑥ 東垣生八反地遺跡1・2・3次調査 |
| ⑦ 東垣生八反地遺跡4次調査 | ⑧ 南吉田南代遺跡1・2次調査 | ⑨ 余戸弘川遺跡 |
| ⑩ 余土中学校構内遺跡 | ⑪ 津田中学校構内遺跡 | ⑫ 北齋院地内遺跡 |
| ⑬ 宮前川遺跡 | ⑭ 南江戸鬮目遺跡2次調査 | ⑮ 古照遺跡 |
| ⑯ 松環古照遺跡 | ⑰ 南齋院土居北遺跡 | ⑱ 古川遺跡 |
| ⑲ 北井門遺跡 | | |

第2図 周辺遺跡分布図

古墳時代

余戸中ノ孝遺跡3・6次調査の竪穴建物 SII7 はカマドを伴った前期の建物であり、須恵器の把手付鉢が出土する。また、中期後半から後期にかけての竪穴建物8棟の内、カマドを付設する建物を3棟確認する。宮前川下流域の古照遺跡1・2次調査では、前期の大規模な灌漑用施設「堰」3基を標高約8mで検出し、堰材には高床建物の柱材が転用されていた。津田中学校構内遺跡1次調査の後期の竪穴建物はカマドや炉址を伴う。古照遺跡9・10次調査では旧河川に伴う中期前半の祭祀遺物群から一括土器群が出土した。重信川の支流である内川右岸の沖積低地の北井門遺跡から出土した須恵器の一部は胎土分析の結果、市場南組窯跡で生産された可能性が高いと考えられている。

古代

古照遺跡は、大宝律令以後は温泉郡に属し、周辺には現在も条理的地割が残っている。大峰ヶ台丘陵東裾部の親和園前遺跡からは澤廃寺に関連する瓦や掘立柱建物が検出されている。

中世

大峰ヶ台丘陵南麓には大宝元(701)年創立の大宝寺があり、同寺本堂は県下でも最古の鎌倉時代前期の建造物で国宝に指定されている。その近辺の松環古照遺跡や南斎院土居北遺跡からは方形館を区画する溝を検出し、南江戸鬮目遺跡2次調査では、大量の輸入陶磁器が出土している。その南方から西方に広がる古照遺跡や北斎院地内遺跡からは、掘立柱建物、溝、土坑、墓、水田、畝などを検出し、12世紀後半から16世紀後半の居住域や生産域、墓域などの中世村落の様相が解明されつつある。

近世

大峰ヶ台丘陵東南裾部の南江戸桑田遺跡から桶棺墓を多数検出し、古照遺跡6次調査で江戸時代中期の洪水により埋没した水田や畑、大畦畔などが検出されている。

【参考文献】

- 古照遺跡調査団 1974 『古照遺跡』松山市文化財調査報告書 IV
森 光晴・大山 正風 1976 『古照遺跡II』松山市文化財調査報告書 第10集
西尾 幸則・栗田 茂敏 1987 『宮前川遺跡』松山市文化財調査報告書 第18集
栗田 正芳 他 1993 『古照遺跡-第6次調査-』松山市文化財調査報告書 第35集
岡田 敏彦 他 1993 『一般国道196号松山環状線埋蔵文化財発掘調査報告書I 松環古照遺跡』(財)愛媛県埋蔵文化財調査センター 埋蔵文化財発掘調査報告書 第41集
栗田 正芳 他 1995 『古照遺跡-第10・11次調査-』松山市文化財調査報告書 第47集
栗田 正芳 1996 『古照遺跡-第8・9次調査-』松山市文化財調査報告書 第53集
梅木 謙一 2001 『斎院の遺跡II -鳥越・津田中学校構内・北斎院地内-』松山市文化財調査報告書 第80集
中野 良一 他 2004 『南斎院土居北遺跡・南江戸鬮目遺跡(2次調査)』(財)愛媛県埋蔵文化財調査センター 埋蔵文化財発掘調査報告書 第113集
梅木 謙一 2005 『宮前川流域の遺跡』松山市文化財調査報告書 第102集
眞鍋 昭文 他 2013 『北井門遺跡3次』(公財)愛媛県埋蔵文化財センター 埋蔵文化財発掘調査報告書第177集
増田 晴美 2014 「余戸弘川遺跡」『愛比売-平成25(2013)年度年報-』(公財)愛媛県埋蔵文化財センター
岡 美奈子 2016 「余戸柳井田遺跡4次」『愛比売-平成27(2015)年度年報-』(公財)愛媛県埋蔵文化財センター
河野 史知 2016 「余土中学校構内遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報28』
小笠原 善治 2017 『宮前川流域の遺跡III』松山市文化財調査報告書 第190集
三好 裕之 2017 「余戸柳井田遺跡5次・東垣生八反地遺跡2次」『愛比売-平成28(2016)年度年報-』(公財)愛媛県埋蔵文化財センター
岡 美奈子 2017 「余戸柳井田遺跡7次」『愛比売-平成28(2016)年度年報-』(公財)愛媛県埋蔵文化財センター
三好 裕之 2017 「南吉田南代遺跡2次」『愛比売-平成28(2016)年度年報-』(公財)愛媛県埋蔵文化財センター
三好 裕之 他 2018 『余戸中の孝遺跡3・6次』(公財)愛媛県埋蔵文化財センター 埋蔵文化財発掘調査報告書 第193集

第2章 調査の概要

第1節 調査の経緯

調査地は松山市余戸西一丁目から東垣生町、南吉田町に位置し、松山外環状道路（空港線）の側道部分が主な調査対象地となる（第3図）。調査実施面積は、4,725㎡である。なお、工事区分の関係上、道路中央の本線部分は公益財団法人愛媛県埋蔵文化財センター（以下、県埋文という。）が発掘調査を担当した。

調 査

事前に実施した試掘調査の結果に基づき、発掘調査は平成26年度から28年度までの間に実施した。遺跡名については現在の町名と昔の字名を踏襲し、以下の4遺跡（12次調査）とした。なお、余戸中ノ孝遺跡3・6次調査と余戸柳井田遺跡4・5・7次調査、東垣生八反地遺跡2次調査及び南吉田南代遺跡2次調査は県埋文が調査を担当した（平成28年度末時点）。

- ・余戸中ノ孝（ようごなかのこ）遺跡 - 1次・2次・4次・5次調査-
- ・余戸柳井田（ようごやないだ）遺跡 - 1次・2次・3次・6次調査-
- ・東垣生八反地（ひがしはぶはったんじ）遺跡 - 1次・3次・4次調査-
- ・南吉田南代（みなみよしだみなみだい）遺跡 - 1次調査-

まず、平成26年度は3箇所の調査（余戸中ノ孝遺跡1次・2次調査、余戸柳井田遺跡1次調査）を実施した。平成27年1月13日、余戸中ノ孝遺跡1次調査に着手し、併行して余戸柳井田遺跡1次調査を行った。その後、同年3月には余戸中ノ孝遺跡2次調査に着手し、同月31日に調査を終了した。

平成27年度は3名の調査員により、6箇所の調査（余戸中ノ孝遺跡4次・5次調査、余戸柳井田遺跡2次・3次調査、東垣生八反地遺跡1次調査、南吉田南代遺跡1次調査）を実施した。平成27年9月24日より余戸柳井田遺跡2次調査に着手し、調査終了後は引き続き余戸柳井田遺跡3次調査に取り掛かった。同遺跡調査中は併行して余戸中ノ孝遺跡4次・5次調査を行い、平成28年2月29日に終了した。3月1日からは東垣生八反地遺跡1次調査に着手し、調査は次年度へ継続した。

平成28年度は前年からの継続調査を含め4箇所の調査（余戸柳井田遺跡6次調査、東垣生八反地遺跡1次・3次・4次調査）を実施した。平成28年11月29日、松山外環状道路（空港線）整備に伴う発掘調査を全て終了した。

ここで、具体的な調査方法について説明する。まず、調査を実施するにあたり、国土座標第IV座標系基準点から調査地内に座標の移動と打設を専門業者に委託し、これを基準とした5m方眼のグリッドを設定した。グリッドは遺構の位置表示や遺物の取り上げ等に利用した。発掘調査は重機（バックホー・不整地運搬車・ダンプカー）を使用して表土層の掘削を行い、その後、10～15名の作業員による手作業にて遺構検出や遺構掘削、測量作業を行った。また、専門業者に委託し、ドローンを使用して上空から遺構検出状況や完掘状況の写真撮影も行った。

調査の概要



第3図 調査地位置図

表2 調査地一覧

遺 跡 名	調 査 場 所	調査面積 (㎡)	調 査 期 間
余戸中ノ孝遺跡1次調査	松山市余戸西二丁目2331番1の一部	140	平成27年1月13日 ～同年3月31日
余戸中ノ孝遺跡2次調査	松山市余戸西一丁目1981番1、1982番3、1983番1・6の各一部	110	平成27年3月16日 ～同年3月31日
余戸中ノ孝遺跡4次調査	松山市余戸西三丁目2484番6・7、2485番4、2486番4、2493番4	803	平成28年1月25日 ～同年2月29日
余戸中ノ孝遺跡5次調査	松山市余戸西一丁目1981番1、1982番2、1983番1、1983番6の各一部、余戸西二丁目2331番5・6	250	平成28年1月5日 ～同年2月29日
余戸柳井田遺跡1次調査	松山市余戸西四丁目2405番1の一部	400	平成27年1月13日 ～同年3月31日
余戸柳井田遺跡2次調査	松山市余戸西四丁目2407番5	190	平成27年9月24日 ～同年10月31日
余戸柳井田遺跡3次調査	松山市余戸西四丁目2187番3、2188番3	450	平成27年11月1日 ～平成28年2月19日
余戸柳井田遺跡6次調査	松山市余戸西四丁目2189番4の一部	715	平成28年6月23日 ～同年9月30日
東垣生八反地遺跡1次調査	松山市東垣生町818番6・7・8・9・10、899番3・4、900番3・4の各一部、899番5	874	平成28年3月1日 ～同年5月31日
東垣生八反地遺跡3次調査	松山市東垣生町905番6、817番8の一部	236	平成28年6月1日 ～同年7月25日
東垣生八反地遺跡4次調査	松山市東垣生町816番4	177	平成28年10月24日 ～同年11月29日
南吉田南代遺跡1次調査	松山市南吉田町6番3、7番3、8番3の各一部	380	平成27年12月16日 ～平成28年1月29日

整 理

整理作業は平成26年度から発掘調査と併行して実施したが、本格的な報告書作成に伴う整理作業については、平成29年度から開始した。平成29年度には調査で出土した遺物の復元、実測及びトレース作業と報告書掲載図面（土層図・遺構図）の作成及びトレース作業を行った。翌30年度には報告書掲載遺物の写真撮影と図版作成、編集作業等を実施し、報告書の刊行後は全国の図書館や博物館、関係機関へ報告書を発送した。

説明会

発掘調査中には、平成26年度と28年度に遺跡説明会を開催した。平成26年度は余戸中ノ孝遺跡1次調査及び余戸柳井田遺跡1次調査を対象として平成27年3月28日に説明会を開催し、地域住民や道路建設課、松山市教育委員会の関係者など80名の参加者を得た。また、平成28年度は東垣生八反地遺跡4次調査を対象として、平成28年11月26日に既往の調査成果を含めた説明会を行い、156名の参加者を得た。

第2節 層位

1. 基本層位

本稿で掲載した遺跡の基本層位は、以下のとおりである。土層番号については、検出した遺構や遺物より中世の堆積層及び水田層を第Ⅱ層、古代の堆積層を第Ⅲ層、弥生時代から古墳時代の堆積層を第Ⅳ層とした。なお、各層は遺跡により土色・土質が異なるため、調査ごとに枝番号（第Ⅰ①層、第Ⅰ②層、第Ⅱ①層）を付けて表記している。

第Ⅰ層：調査前の現況は既存宅地や水田、雑種地である。第Ⅰ層は近現代の造成及び農耕に伴う客土で、地表下0.2～1.0mまで開発が行われている。現況の標高を測量すると、調査対象地南端の余戸中ノ孝遺跡1次調査地が標高5.0mと最も高く、暫時、北西に向かって傾斜をなし、調査地北端の南吉田南代遺跡1次調査地では標高4.6mとなる。

第Ⅱ層：中世段階の堆積層及び水田層で、第Ⅱ層には室町時代以降の水田層や水田を覆う洪水砂、及び鎌倉時代の基盤層などが含まれている。本層は全ての調査地で検出され、黄灰色土や灰黄褐色土、褐灰色土等を基調とし、層厚は30～80cmである。なお、水田土壌は灰色粘質土や青灰色粘質土であり、調査対象地中央部付近の余戸柳井田遺跡と東垣生八反地遺跡で検出された。最大で3面の水田面を検出し、人や牛の足跡が数多く確認された。水田層下面からは、平安時代から鎌倉時代の集落遺構を検出した。本層上面の標高を測量すると現況と同じく、調査地南端の余戸中ノ孝遺跡が最も高く、暫時、北西に向けて傾斜をなす（比高差40cm）。第Ⅱ層中からは鎌倉時代から室町時代の土師器や須恵器、瓦器のほか国産陶磁器（備前焼・亀山焼）や輸入陶磁器（白磁・青磁）、鉄器、木器等が出土した。

第Ⅲ層：古代の堆積層で、余戸柳井田遺跡1次調査を除く調査地で検出された。余戸中ノ孝遺跡や余戸柳井田遺跡、東垣生八反地遺跡では明黄褐色土や浅黄色土を基盤層とし、本層上面にて平安時代から鎌倉時代の掘立柱建物や溝、土坑、柱穴のほか土壙墓や井戸址等を検出した。本層上面は第Ⅱ層と同様、東から西に向けて傾斜をなし、比高差は1.2mである。なお、南吉田南代遺跡1次調査では河川もしくは自然流路に伴う堆積物（淡黄色微砂や灰色粘質微砂等）がみられた。一方、余戸中ノ孝遺跡5次調査では第Ⅲ層中より平安時代後期の土師器や須恵器等が少量出土した。

第Ⅳ層：弥生時代から古墳時代の堆積層で、余戸中ノ孝遺跡5次調査と南吉田南代遺跡1次調査にて検出した。暗灰色土や黒色粘質土で、層厚は10～50cmを測る。とりわけ、南吉田南代遺跡1次調査では本層掘り下げ中にて古墳時代初頭の遺構を検出したほか、本層中からは弥生時代前期から古墳時代後期までの遺物が大量に出土している。

第Ⅴ層：弥生時代までに堆積した土層で、余戸中ノ孝遺跡5次調査と南吉田南代遺跡1次調査にて検出した。余戸中ノ孝遺跡5次調査では、明黄褐色粘質土上面が調査における最終の遺構検出面であり、本層上面の標高は3.1mである。また、余戸中ノ孝遺跡5次調査では本層下面にて灰色の砂礫層を検出したほか、南吉田南代遺跡1次調査からは第Ⅳ層下にて緑灰色砂質土を検出しており、弥生時代以前には自然流路もしくは河川が存在したものと推測される。

第3節 検出遺構・遺物

本稿掲載の遺跡からは、弥生時代から近世までの遺構・遺物を検出した。検出した遺構は竪穴建物1棟（古墳時代）、掘立柱建物址9棟（鎌倉時代）、溝54条（古墳時代～江戸時代）、土坑25基（古代～江戸時代）、土壙墓3基（鎌倉時代）、井戸址6基（鎌倉時代）、柱穴672基と水田址（鎌倉時代以降）である（表3）。ここでは、時代別に検出した遺構と遺物の概要を説明する。

（1）弥生時代

弥生時代の遺構は未検出であるが、南吉田南代遺跡1次調査検出の第Ⅳ層（黒色粘質土）中より弥生時代前期末から終末期までの遺物が数多く出土している。このことから、調査地周辺には該期の集落の存在が示唆される。

（2）古墳時代

古墳時代では、竪穴建物1棟と溝2条を検出した。南吉田南代遺跡1次調査では前述の第Ⅳ層掘り下げ時に古墳時代初頭の溝を検出したほか、該期の遺物が大量に出土した。このほか、本層中からは古墳時代後期の土師器や須恵器片が少量出土している。一方、余戸中ノ孝遺跡5次調査では古墳時代中期前半の竪穴建物と後期後半の溝を検出した。このことから、調査対象地北西端と南端において古墳時代集落の存在が明らかとなった。

（3）古代

古代の遺構は、余戸柳井田遺跡3次調査にて溝を検出した。溝からは平安時代後期から鎌倉時代の遺物が出土したが、この中には植物の葉を模った板状の木製品が含まれている。第Ⅲ層中からは平安時代後期の土器片が少量出土した。なお、余戸中ノ孝遺跡1次調査や余戸柳井田遺跡、南吉田南代遺跡1次調査からは河川もしくは自然流路と思われる堆積物が検出されており、古代において河川や自然流路が調査対象地一帯に数多く存在していたものと推測される。

（4）中世

今回の調査の中では、中世の遺構・遺物数が最も多く、掘立柱建物址や溝、土坑、土壙墓、井戸址のほかに水田址を検出した。建物址は余戸中ノ孝遺跡1次・4次調査、余戸柳井田遺跡3次調査及び東垣生八反地遺跡1次調査で検出されており、余戸柳井田遺跡3次調査からは数本の柱材が柱穴内に遺存していた。また、建物址が検出された余戸中ノ孝遺跡4次調査以外の前述の3遺跡からは各々の遺跡で土壙墓が検出され、人骨や棺の一部が出土している。このほか、井戸址は余戸中ノ孝遺跡4次調査と余戸柳井田遺跡6次調査、東垣生八反地遺跡1・4次調査で検出され、曲物が井戸枠として使用されていた。これらは全て鎌倉時代の遺構と考えられる。

水田址は検出層位や出土遺物より室町時代、または室町時代以降に構築されたものであり、調査対象地中央部付近の余戸柳井田遺跡と東垣生八反地遺跡に集中している。水田に伴う畦畔や水路等の施設は検出されず、人や牛の足跡を多数検出した。足跡は、全て洪水砂により埋没している。調査結果より、鎌倉時代までは集落域であったものが室町時代以降は生産域として利用されたものと推測され

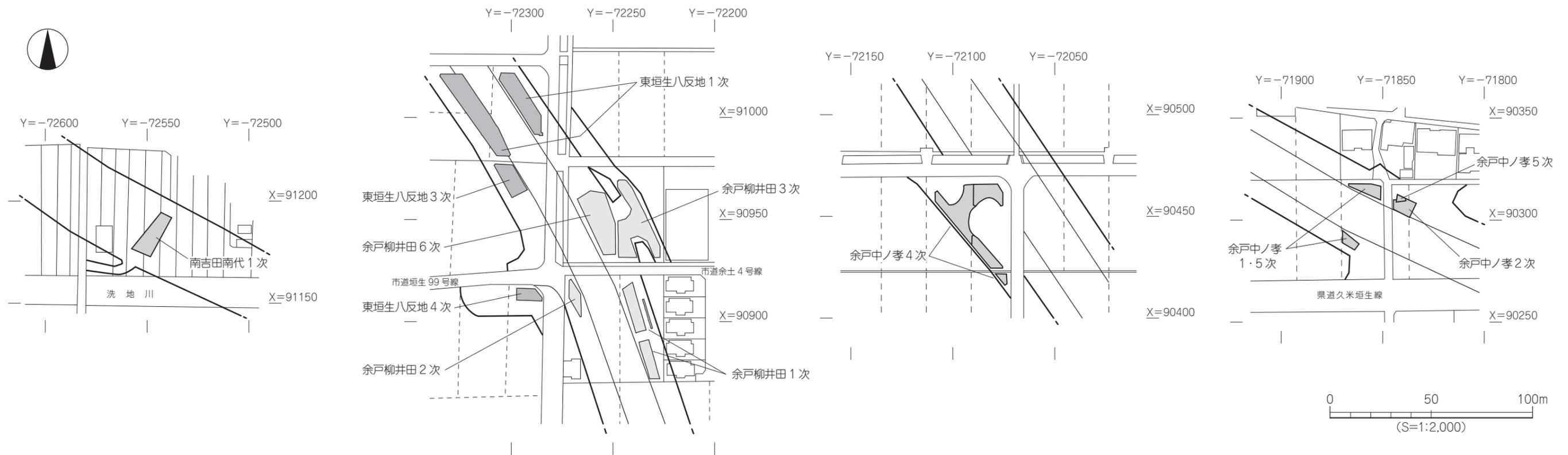
る。遺物は土師器、須恵器、瓦器、国産陶磁器（備前焼・亀山焼）、輸入陶磁器（白磁・青磁）のほか鉄器や木器、骨、種子等が出土した。

（5）近 世

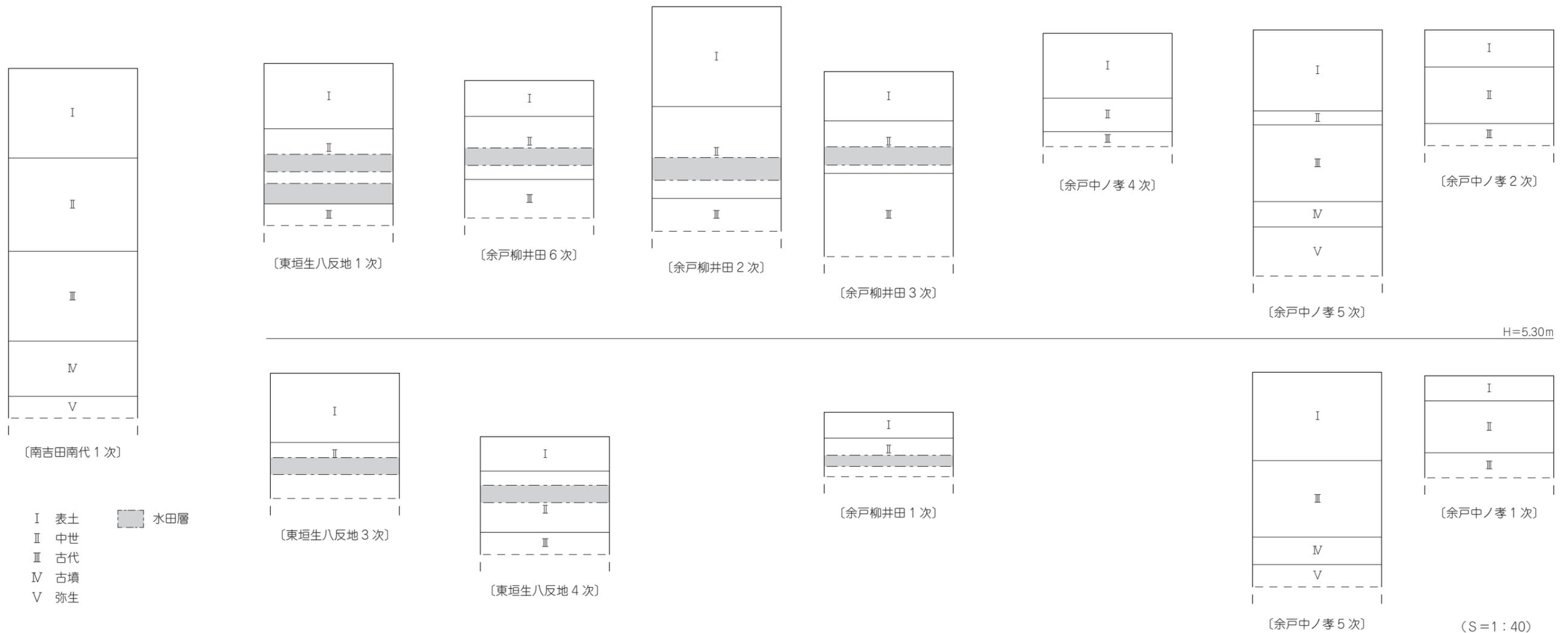
近世の遺構は未検出であるが、余戸柳井田遺跡1次調査からは江戸時代の陶磁器（砥部焼・肥前焼）の破片が少量出土した。

表3 検出遺構一覧

遺 跡 名	弥生時代	古墳時代	古 代	中 世		江 戸
				鎌倉時代	室町時代	
余戸中ノ孝1次				掘立：2棟 溝：2条 土坑：1基 土壙墓：1基		
余戸中ノ孝2次				土坑：1基		
余戸中ノ孝4次				掘立：1棟 溝：10条 土坑：2基 井戸：1基		溝：1条 土坑：1基
余戸中ノ孝5次		竪穴：1棟 溝：1条				
余戸柳井田1次					水田址	
余戸柳井田2次				溝：3条	溝：1条 水田址	
余戸柳井田3次			溝：1条 土坑：1基	掘立：4棟 溝：6条 土坑：1基 土壙墓：1基	水田址	
余戸柳井田6次			土坑：2基	溝：1条 井戸：1基 土坑：1基	水田址	
東垣生八反地1次				掘立：2棟 溝：21条 土坑：12基 土壙墓：1基 井戸：2基 水田址	水田址	
東垣生八反地3次				溝：1条	土坑：1基 水田址	
東垣生八反地4次				溝：5条 井戸：2基 土坑：2基	水田址	
南吉田南代1次		溝：1条				



H=5.30m



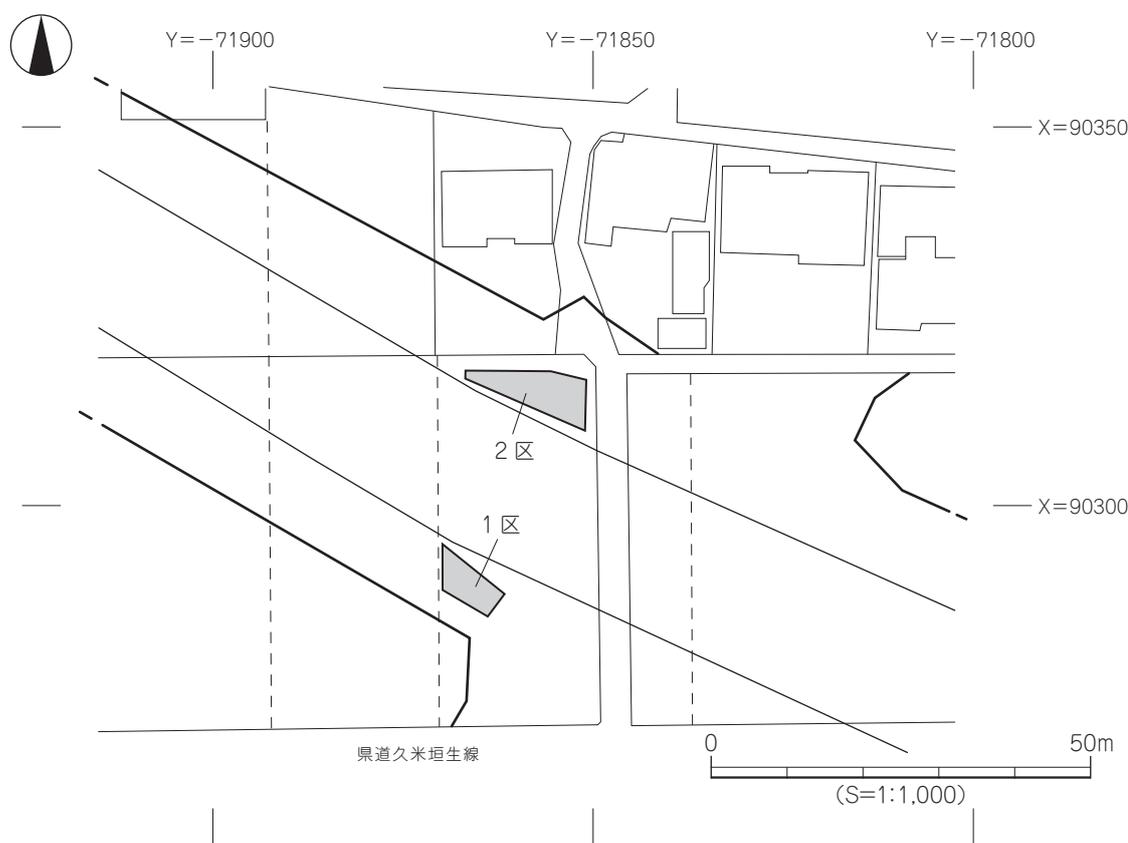
第4図 調査地測量図・土層柱状図

第3章 余戸中ノ孝遺跡1次調査

第1節 調査の経緯

余戸中ノ孝遺跡1次調査は、松山市余戸西二丁目2331番1の一部を調査対象地とし、調査面積は約140㎡である。なお、調査対象地は二箇所に分かれていることから、南側を1区、北側を2区として調査を実施した。以下、調査工程を略記する。また、調査は第7章で説明する余戸柳井田遺跡1次調査と併行して行っており、調査期間は平成27年1月13日から同年3月31日である。

平成27年1月13日、調査事務所の建て上げと発掘機材等の搬入、及び調査地内の安全対策用にフェンスや杭等を設置する。1月16日より重機を使用して、表土の掘削作業を開始する。1月20日、地表下約30cmの地点で中世の遺物を含む包含層を検出したことから、作業員による掘り下げや遺物の取り上げを行う。1月23日、余戸中ノ孝遺跡1次調査を一時中断し、本日より余戸柳井田遺跡1次調査を開始する(2月19日終了)。2月23日より、余戸中ノ孝遺跡1次調査を再開する。遺構検出作業を進め、溝や柱穴等を検出する。2月25日より、柱穴の半截作業を開始し、その後、溝や土坑の掘り下げ、測量等を実施する。3月24日より、土坑の調査を開始する。先行トレンチを掘削した結果、人間の歯と棺の一部と思われる木片が出土したことから土壌墓であることが判明した。その後、慎重に調査を進めた結果、ほぼ完全な形の人骨や棺に使用された木蓋を検出した。3月28日、周辺住民



第5図 調査地位置図

を対象とする現地説明会を開催し、約80名の参加者を得る。3月30日、土墳墓の調査を終了し、重機を使用して埋め戻し作業を行う。3月31日、全ての作業が終わり、発掘調査を終了する。

第2節 層位 (第6・7図)

調査地は、調査以前は水田として利用されていた。調査で確認した土層は、以下の9層である。なお、第2章で説明した基本層位のうち、本調査では第Ⅰ層、第Ⅱ層及び第Ⅲ層を検出した。

第Ⅰ層：近現代の水田耕作に伴う耕土で、土色・土質の違いにより3種類に分層される。

第Ⅰ①層－耕作土〔灰色土(5Y 4/1)〕で、層厚は5～20cmである。

第Ⅰ②層－旧耕作土〔青灰色土(5BG 5/1)〕で、層厚は5～15cmである。

第Ⅰ③層－床土〔黄褐色土(10YR 5/6)〕で、層厚は3～10cmである。

第Ⅱ層：中世段階の土壌で、土色・土質の違いにより5種類に分層される。

第Ⅱ①層－灰白色砂(10YR 7/1)で1・2区にて部分的にみられ、層厚は1～10cmである。土層観察の結果、本層は第Ⅱ②層上面に存在した水田を覆う洪水砂と考えられる。

第Ⅱ②層－浅黄色土(2.5Y 7/4)で、層厚は3～20cmである。検出状況より、本層は水田土壌の可能性はある。

第Ⅱ③層－ぶい黄色土(2.5Y 6/3)で粘性が強く、層厚は6～22cmである。

第Ⅱ④層－褐灰色土(7.5YR 5/1)で、層厚は5～18cmである。本層中からは、中世の土師器や須恵器、瓦質土器の破片が比較的多く出土した。

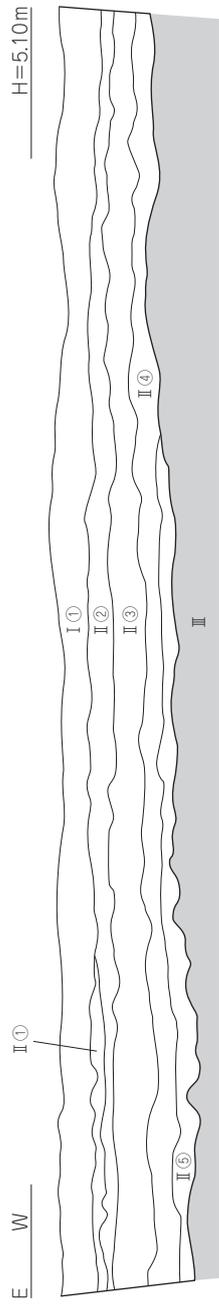
第Ⅱ⑤層－黄灰色土(2.5Y 6/1)で1・2区にて部分的にみられ、層厚は3～20cmである。本層中からは第Ⅱ④層と同様、中世の遺物が出土した。

第Ⅲ層：明黄褐色土(2.5Y 7/6)で、やや砂質を帯びる土壌である。層厚は、20cm以上を測る。本層上面が、調査における最終の遺構検出面である。検出した遺構は溝や土坑のほか、多数の柱穴と土墳墓である。

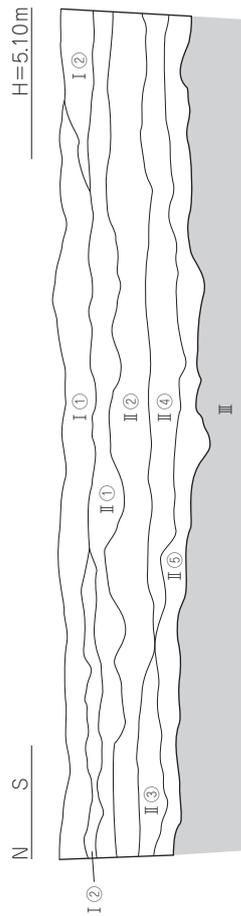
なお、調査にあたり調査区内を5m四方のグリッドに分けた。グリッドは西から東へA・B・C・D、北から南へ1・2・3……7とし、A1・A2……D7区といったグリッド名を付した。グリッドは遺構の位置表示や遺物の取り上げ等に利用した。本調査の座標値は、X=90285～90315、Y=-71850～-71870である。

第3節 遺構と遺物

余戸中ノ孝遺跡1次調査では、掘立柱建物2棟と溝2条、土坑1基、土墳墓1基のほか柱穴90基(掘立柱建物柱穴11基を含む)を検出した。遺物は遺構及び第Ⅱ④・⑤層中より鎌倉時代から室町時代の土師器や須恵器、瓦質土器、陶磁器のほかに石器や木器、骨、種子等が出土した。なお、遺物の出土量は収納箱(44×60×14cm)約4箱分である。ここでは、検出した遺構ごとに説明する。



〔南壁〕

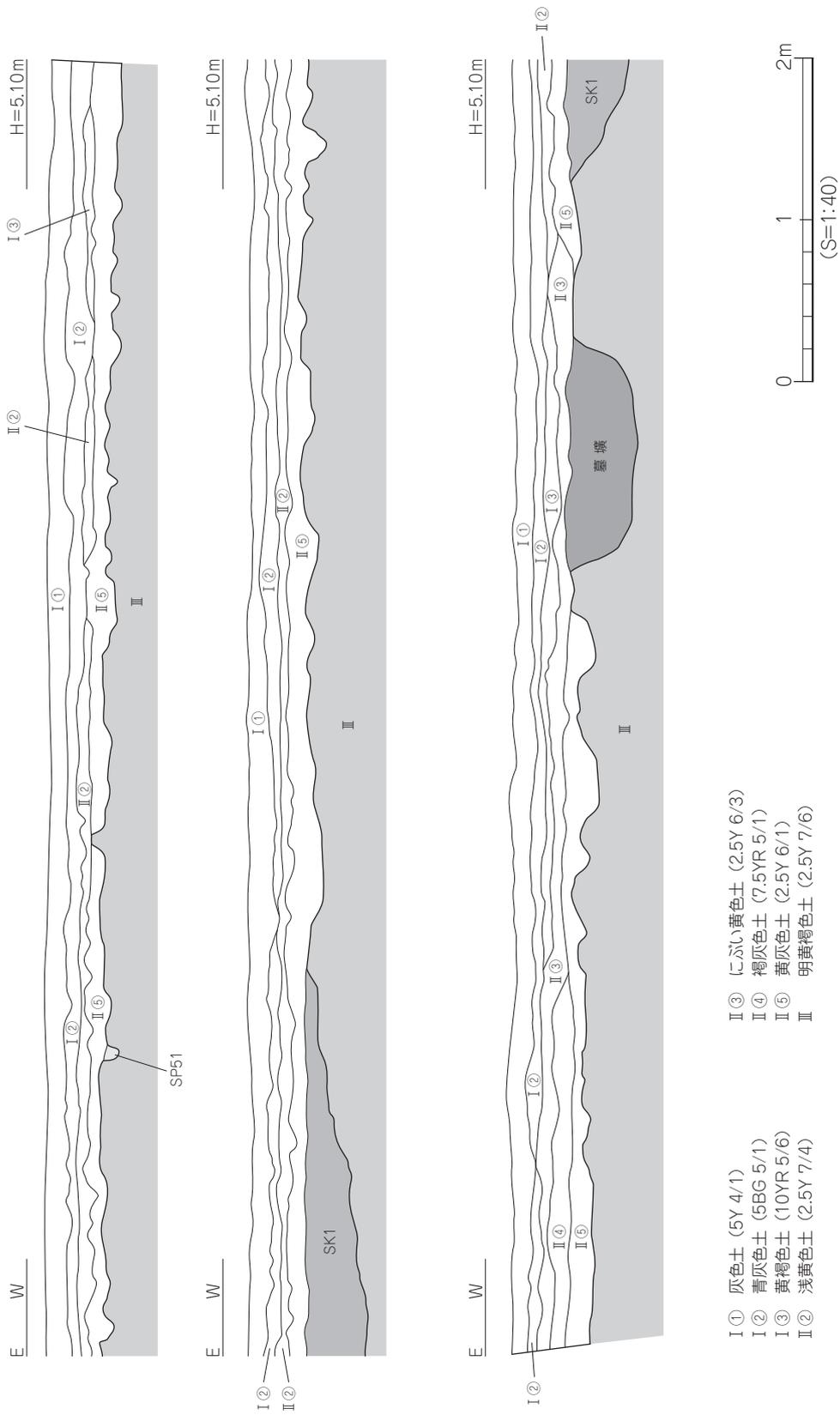


〔東壁〕

- I ① 灰色土 (5Y 4/1)
- I ② 青灰色土 (5BG 5/1)
- II ① 灰白色砂 (10YR 7/1)
- II ② 浅黄色土 (2.5Y 7/4)
- II ③ にふい黄色土 (2.5Y 6/3)
- II ④ 褐色土 (7.5YR 5/1)
- II ⑤ 黄灰色土 (2.5Y 6/1)
- II ⑥ 明黄褐色土 (2.5Y 7/6)

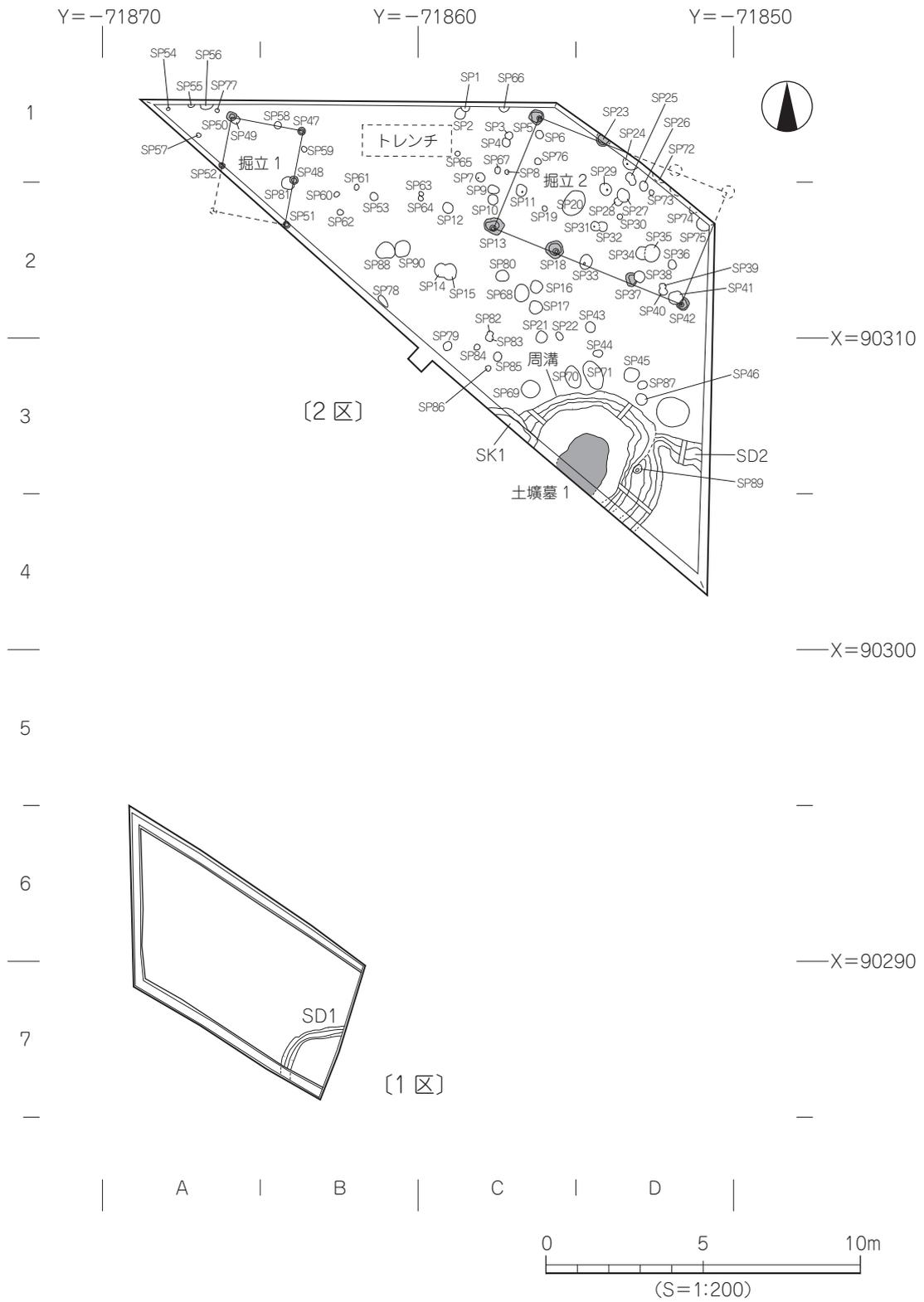


第6図 1区南・東壁土層図



第7図 2区南壁土層図

遺構と遺物



第 8 図 遺構配置図

1. 掘立柱建物

掘立 1 (第 9 図、図版 2)

2 区西側 A1 ~ B2 区に位置する建物址で、5 基の柱穴 (SP47・48・50・51・52) で構成される (残りの 1 基は調査区外)。東西 1 間、南北 2 間規模の南北棟で、建物方位を N-10°-E にとる。桁行長 3.08 m、梁行長 2.33 m の小規模な建物址で、建物を構成する柱穴の平面形態は円形または楕円形をなし、規模は径 13 ~ 27cm、深さ 6 ~ 20cm である。柱穴掘り方埋土は褐灰色土 (7.5YR 5/1) 単層であり、埋土中には炭化物が少量含まれている。遺物は掘り方埋土中より土師器や瓦器の小片が出土したほか、SP50 の基底面付近からは厚さ 3cm、径 10cm の扁平な礫 (安山岩) が出土している。

出土遺物

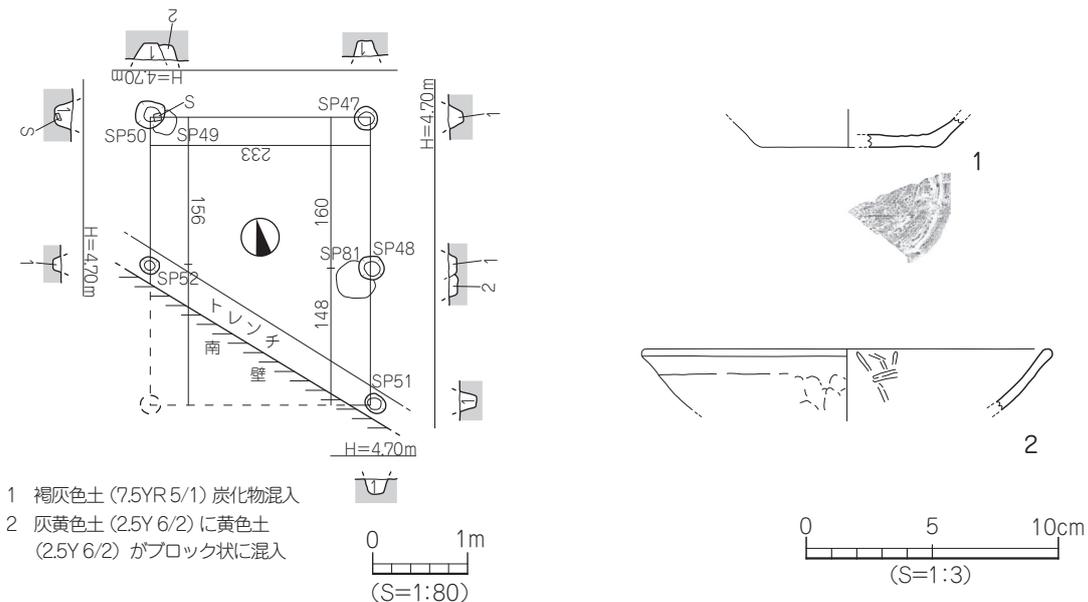
1 は SP50 出土の土師器杯。底部片で、底部の切り離しは回転糸切り技法による。2 は SP51 出土品。瓦器碗で、外面はヘラミガキ調査、内面には平行線状の暗文がみられる。

時期：出土遺物の特徴より鎌倉時代、13 世紀代の建物址とする。

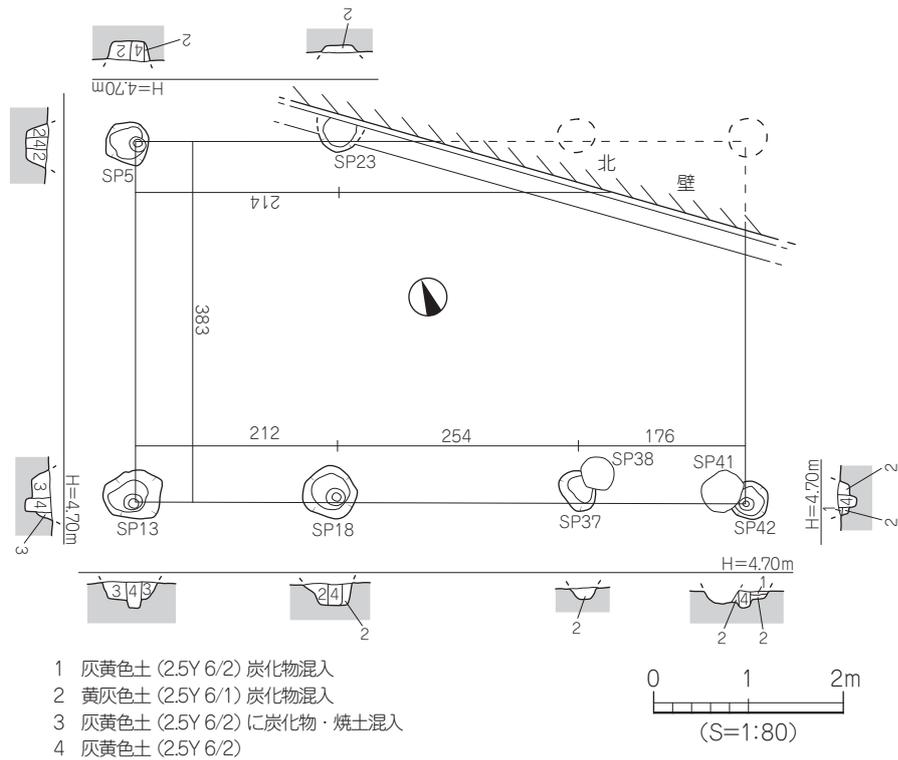
掘立 2 (第 10 図)

2 区北東部 C1 ~ D2 区に位置する建物址で、6 基の柱穴 (SP5・13・18・23・37・42) で構成される。東西 3 間、南北 1 間の東西棟で、建物方位を N-22°-E にとる。桁行長 6.42 m、梁行長 3.83 m の建物址で、建物を構成する柱穴の平面形態は円形または楕円形をなし、規模は径 35 ~ 60cm、深さ 13 ~ 23cm である。柱穴掘り方埋土は黄灰色土 (2.5Y 6/1) や灰黄色土 (2.5Y 6/2) を基調とし、埋土中には炭化物や焼土が大量に含まれている。遺物は掘り方埋土中より土師器や須恵器、瓦質土器の小片が少量出土したが、図化するものはない。そのほか、SP5 と SP13 からは割れた石の破片 (長さ 3 ~ 5cm、幅 1 ~ 3cm、厚さ 1 ~ 2cm) が 10 数点出土している。

時期：時期特定しうる遺物の出土はないが、同様の埋土をもつ柱穴からは鎌倉時代の遺物が出土していることから、概ね鎌倉時代の建物址と考えられる。



第 9 図 掘立 1 測量図・出土遺物実測図



第 10 図 掘立 2 測量図

2. 溝

SD1 (第 11 図)

1 区南東部 B7 区で検出した半円状の溝で、溝上面は第Ⅱ⑤層が覆う。規模は幅 0.4 m、深さ 10cm で、断面形態はレンズ状をなす。溝基底面には凹凸がなく、埋土は褐灰色土 (7.5YR 5/1) 単層である。遺物は埋土中より、土師器や瓦質土器の小破片が数点出土した。

出土遺物 (図版 4)

3 は土師質の土釜。体部は内湾し、口縁端部は丸く仕上げる。口唇部より下がった位置に丸味のある断面方形の鏝が付く。4 は土師器環。体部は内湾し、口縁端部は尖り気味となる。底部外面には、回転糸切り痕が残る。5 は瓦器椀。底部片で、形骸化した高台を貼り付ける。6 は瓦質土器の土釜。脚部片で、ナデ調整と指頭圧痕がみられる。

時期：出土遺物の特徴より鎌倉時代、13 世紀後半の溝とする。

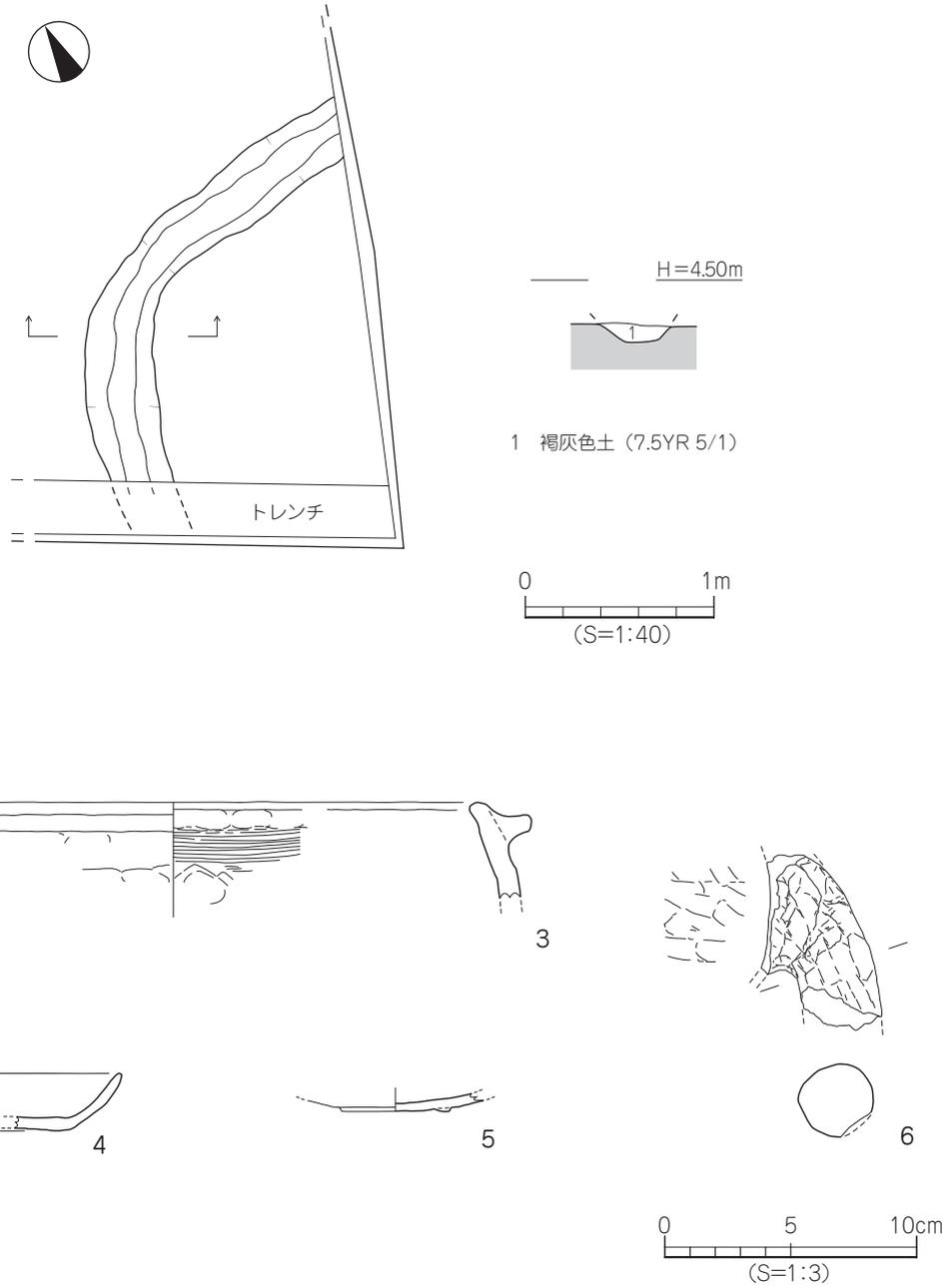
SD2 (第 12 図)

2 区南東部 D3・4 区で検出した「L」字状に折れ曲がる溝で、溝中央部は土壌墓 1 に伴う周溝と重複する (前後関係は不明)。第Ⅲ層上面での検出であり、第Ⅱ⑤層が溝上面を覆う。規模は幅 0.40～0.80 m、深さは最深部で 17cm である。断面形態はレンズ状をなし、埋土は褐灰色土 (7.5YR 5/1) に黄灰色土 (2.5Y 6/1) がブロック状に混入するものである。溝基底面は平坦で、遺物は埋土中より土師器や瓦質土器の土釜や東播系須恵器こね鉢のほか白磁の破片などが出土した。

出土遺物 (図版 4)

7は土師器坏。体部は直立気味に立ち上がり、口縁部は内湾する。底部外面には、回転糸切り痕が残る。8は土師質の土釜。体部は内湾し、口縁部は内傾する。丸味のある断面三角形の鏝が付く。9は白磁皿。口縁部は短く水平にのび、胎土は灰白色で透明釉が掛けられている。

時期：出土遺物の特徴より、13世紀後半とする。

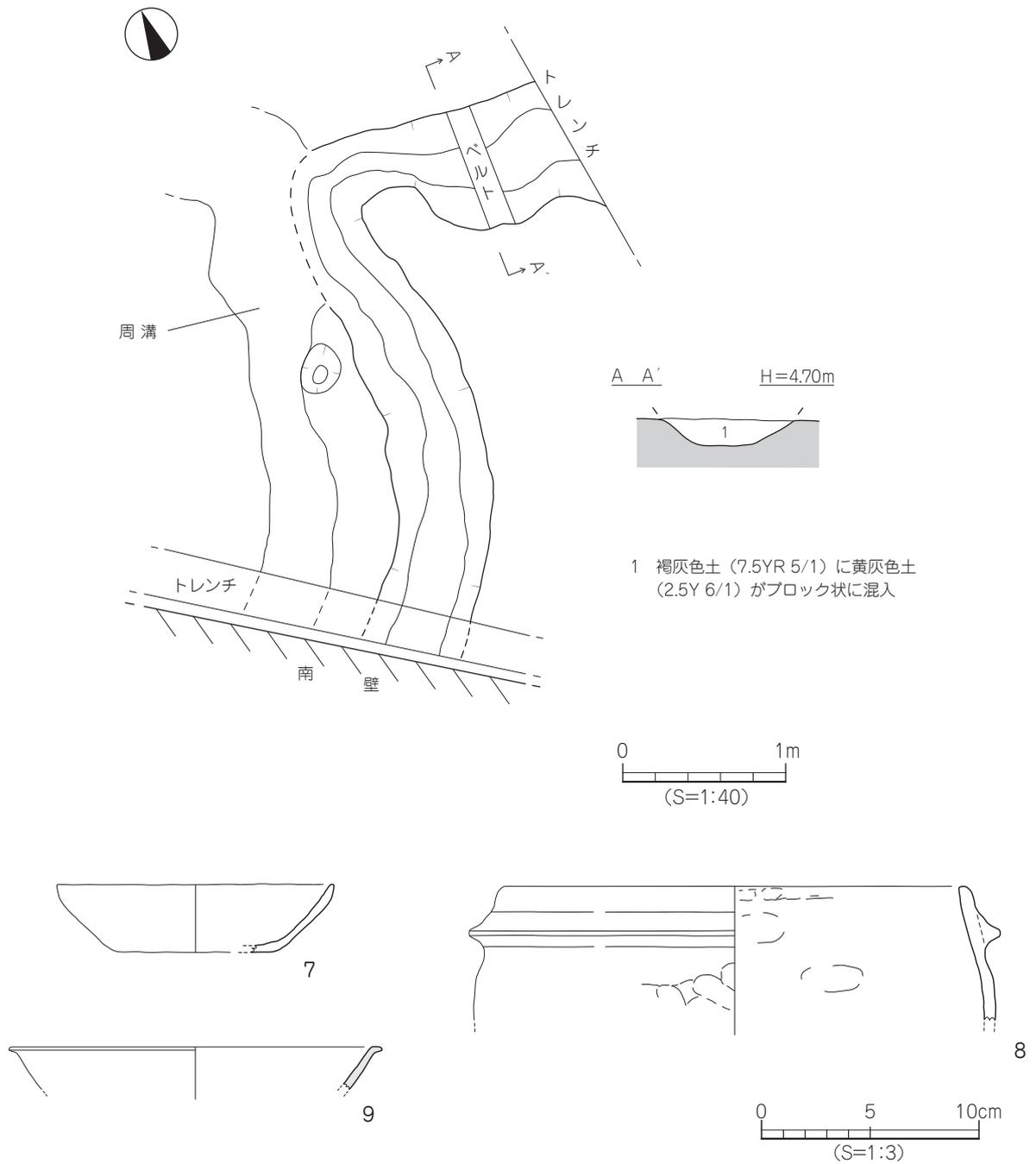


第 11 図 SD1 測量図・出土遺物実測図

3. 土 坑

SK1 (第13図)

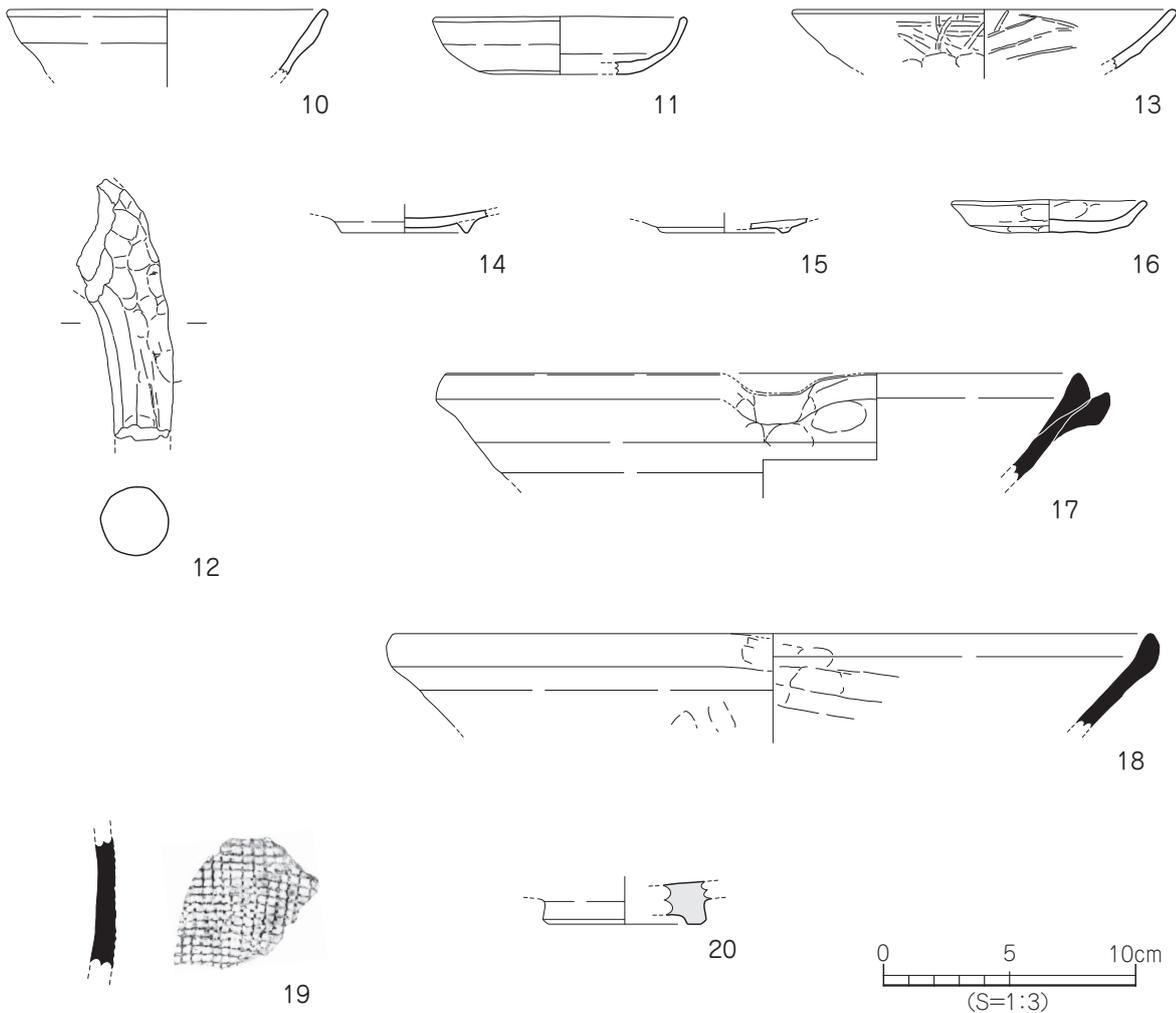
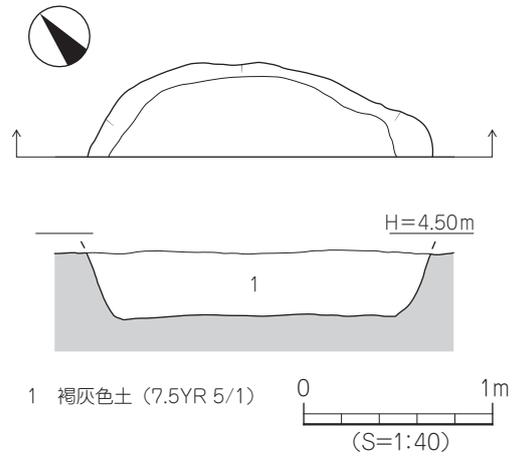
2区中央部南寄りC3区で検出した土坑で、土坑東側は土壙墓1に伴う周溝と重複し、SK1が後出し、遺構南側は調査区外へ続く。平面形態は楕円形をなすものと思われ、規模は東西検出長1.80m、南北検出長0.52m、深さは32cmである。断面形態は逆台形状をなし、埋土は褐灰色土(7.5YR 5/1)単層である。土坑基底面は平坦で、遺物は埋土中より土師器や須恵器、瓦質土器のほか陶磁器片が出土した。



第12図 SD2 測量図・出土遺物実測図

出土遺物 (図版 4)

10・11は土師器坏。体部中位に稜をもち、口縁端部は丸く仕上げる。11は体部が内湾し、口縁端部は丸い。底部の切り離しは摩滅の為、不明である。12は土師質の土釜。脚部片で、ナデ調整と指頭圧痕がみられる。13～15は瓦器椀。13の内外面には丁寧なヘラミガキ調整がみられる。14・15は底部片。14は断面三角形の高台、15は断面方形の低い高台が貼り付けられている。16は瓦器皿。口縁部は外反し、底部は丸味をもつ。色調は暗灰色をなすが、内面は銀化している。17・18は東播系須恵器。17は片口鉢、18はこね鉢である。両者



第 13 図 SK1 測量図・出土遺物実測図

共に、口縁部は上方に肥厚する。19は瓦質土器の甕。胴部外面には、格子目叩きを施す。20は龍泉窯系青磁碗。削り出し高台で、高台畳付は無釉である。なお、胎土は灰色で、濃緑色の釉薬が掛けられている。

時期：出土遺物の特徴より鎌倉時代、13世紀後半とする。

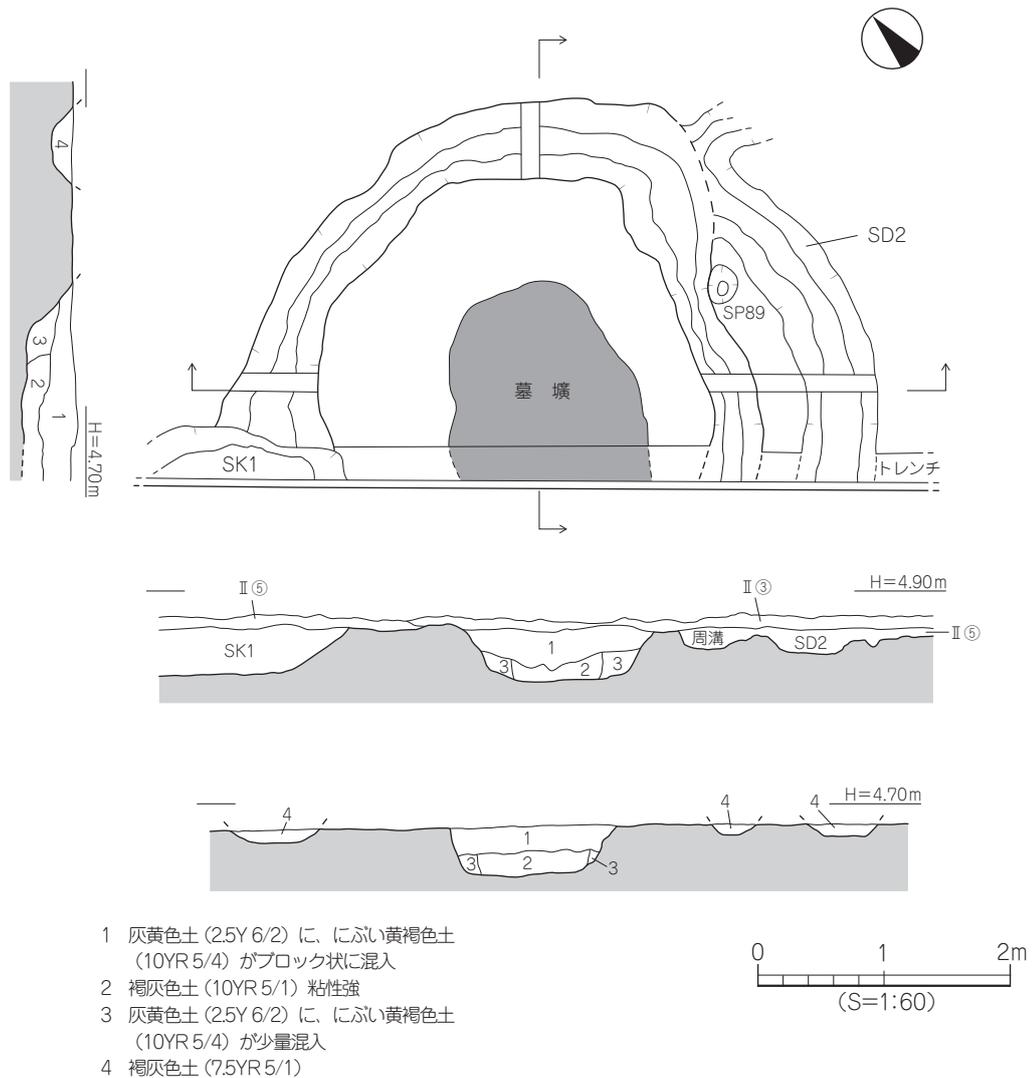
4. 土墳墓

土墳墓 1 (第 14・15 図、図版 2・3)

2区南東部C3～D4区に位置し、土坑南半部は調査区外に続く。第Ⅲ層上面での検出であり、第Ⅱ③層が覆う。土墳墓1は中央部に埋葬施設である墓壙を掘削し、周囲には楕円形状に溝(周溝)を巡らせている。ここでは墓壙や周溝について説明する。

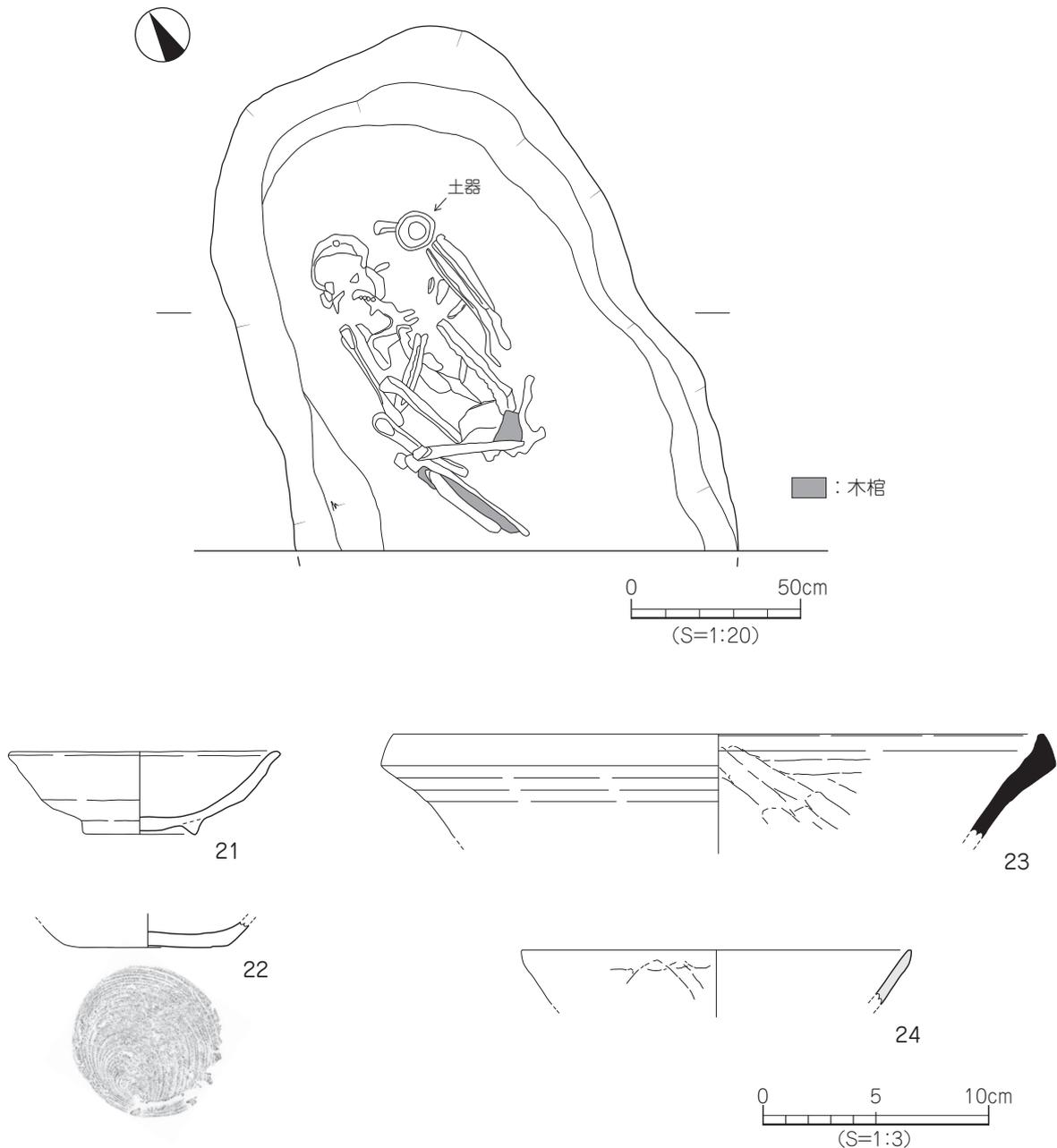
(1) 墓 壙

平面形態は楕円形をなすものと思われ、規模は検出長 1.5 m、幅 1.2 m、深さは 40cm である。断面形態は逆台形状をなし、埋土は以下の 3 種類を検出した。1 層は灰黄色土 (2.5Y 6/2) に、にぶい黄



第 14 図 土墳墓 1 測量図

褐色土（10YR 5/4）がブロック状に混入し、2層は粘性の強い褐灰色土（10YR 5/1）、3層は灰黄色土（2.5Y 6/2）に、にぶい黄褐色土（10YR 5/4）がブロック状に少量混入するものである。検出状況から、2層の堆積部分には棺が埋葬されていたものと考えられる。墓壙内からは墓壙上面から10cm程度掘り下げた際、墓壙南東部より木片（幅10cm、長さ30cm）が出土した。検出状況より、棺に使用された蓋の一部と考えられる。さらに掘り下げを進めると、頭蓋骨が墓壙中央部付近から出土し、大腿骨の一部と思われる骨と、その傍に鉄釘1点が出土した。その後、10cm程度掘り下げたところ、ほぼ完全な人骨を検出した。人骨は北側に頭部があり、顔は西の方向を向いているが、下顎は流入土の影響からか、やや東側にずれている。脚は「く」の字状に折り曲げられ、腕は胸のあたりで交差するように曲げられている。なお、頭部の東側からは完形の土師器椀が出土している。



第15図 墓壙測量図・出土遺物実測図

(2) 周溝

幅 40～80cm、深さ 15～25cmの溝で、溝東側はSD2と重複し（前後関係は不明）、溝西側はSK1と重複する（SK1が後出）。なお、溝南側は調査区外に続く。第Ⅲ層上面での検出であり、第Ⅱ③層が溝上面を覆う。半円状に巡る溝で、溝の外径は約5mである。断面形態はレンズ状をなし、埋土は褐灰色土（7.5YR 5/1）単層である。溝基底面はほぼ平坦で、凹凸はみられない。遺物は土師器の坏皿、羽釜や瓦質土器、東播系須恵器などの破片が出土した。

出土遺物（第15・16図、図版4）

21～24は墓壙内出土品。21・22は土師器。21は吉備系の椀で、完存品である。口径11.1cm、底径5.0cm、器高3.7cmである。体部は内湾し、体部中位に稜をもつ。口縁部は外反し、断面三角形状の高台を貼り付ける。色調は、内外面共に浅黄橙色である。22は土師器坏。底部片で、底部の切り離しは回転糸切り技法による。23は東播系須恵器。こね鉢で、口縁部は上方に肥厚する。24は龍泉窯系青磁碗。体部外面には蓮弁文が描かれ、胎土は灰色で、濃緑色の釉薬が掛けられている。

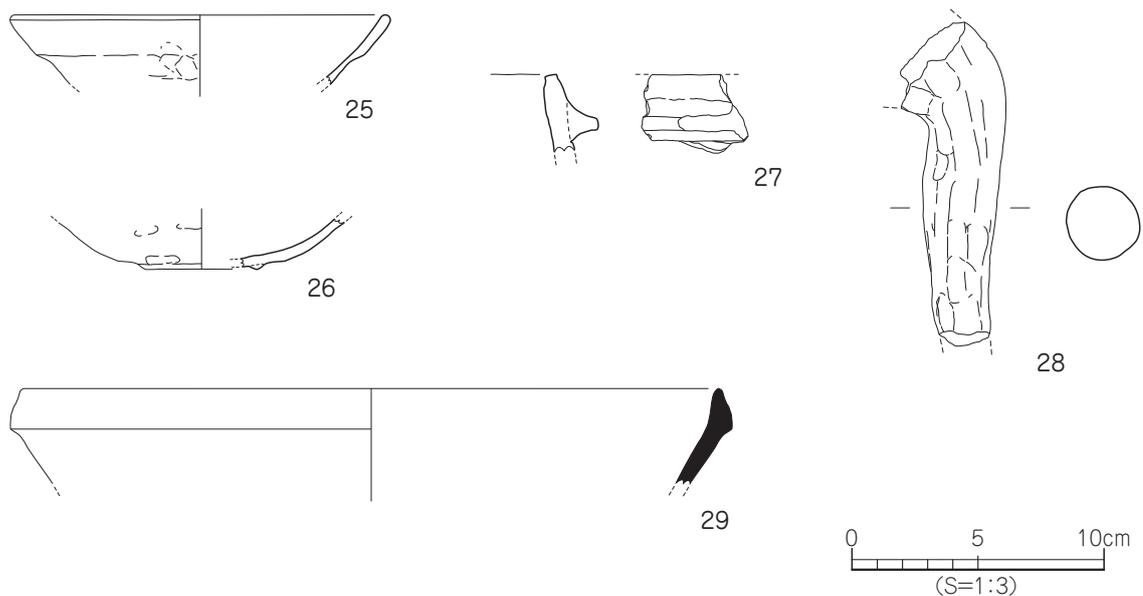
25～29は周溝出土品。25・26は瓦器椀。25の体部中位に稜をもち、外面はナデ調整と指頭圧痕がみられる。26は底部片で、断面三角形状の低い高台を貼り付ける。27は瓦質土器。土釜で、断面台形状の鏝が付く。28は土師質の土釜。脚部片で、ナデ調整と指頭圧痕がみられる。29は東播系須恵器。こね鉢で、口縁部は上方に肥厚する。

時期：墓壙から出土した土師器椀や周溝から出土した遺物の特徴より、土壙墓1は鎌倉時代、13世紀後半と考えられる。

5. その他の遺構と遺物

(1) 柱穴

調査では、90基の柱穴を検出した。柱穴掘り方埋土は、以下の3種類に分類される。



第16図 周溝1出土遺物実測図

①類-褐灰色土 (7.5YR 5/1) …… 13基 (SP12・47・48・51～57・61・63・64)

②類-黄灰色土 (2.5Y 6/1) …… 58基 (SP1～11・15～18・20・22～33・36～38・40～46・50・58～60・62・65・67・69～77・79～81・89)

③類-灰黄色土 (2.5Y 6/2) …… 19基 (SP13・14・19・21・34・35・39・49・66・68・78・82～88・90)

検出した柱穴内からは主に鎌倉時代から室町時代に使用された土師器や須恵器、瓦質土器のほか、国産陶磁器や輸入陶磁器の破片が出土した。

出土遺物 (第17図、図版5)

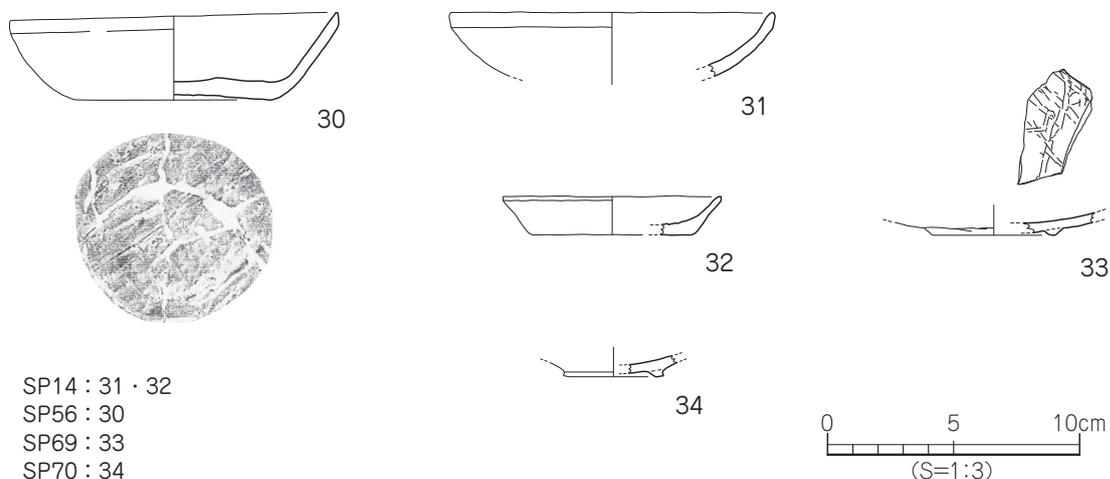
30はSP56出土品。土師器の坏で、体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部は直立する。底部の切り離しは、回転糸切り技法による。31・32はSP14出土品。31は土師器坏、32は土師器皿である。32の底部外面には、回転糸切り痕が残る。33はSP69出土品。瓦器碗の底部で、内面にはらせん文と平行線状の暗文を施す。34はSP70出土品。瓦器碗の底部片で、断面方形状の高台を貼り付ける。

(2) 包含層出土遺物

調査では、主に第II④層である褐灰色土中より数多くの遺物が出土した。この中には石器(砥石)や鉄滓、種子(モモ)なども出土している。

第II④層出土遺物 (第18図、図版5)

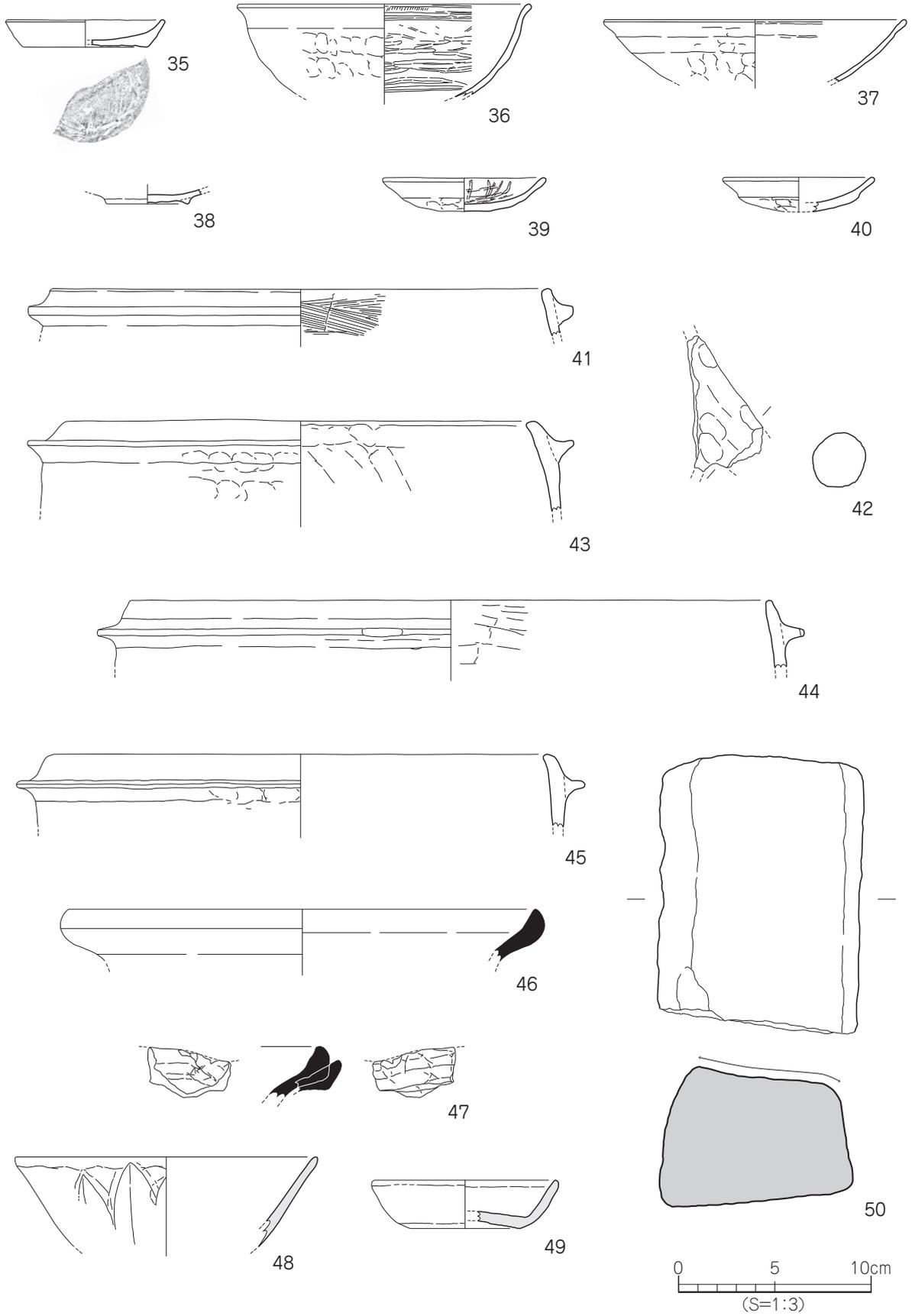
35は土師器皿。体部は内湾し、底部外面には回転糸切り痕を残す。36～38は瓦器碗。36の口縁部は外反し、内面には平行線状の暗文を施す。37は体部上位に稜をもち、38は断面三角形状の高台を貼り付ける。39・40は瓦器皿。体部は内湾し、口縁部は外反する。39の内面には、平行線状の暗文を施す。41～45は土釜。41は土師質で、断面台形状の鐙が付く。42～45は瓦質土器。42は脚部で、ナデ調整と指頭圧痕がみられる。43～45の体部は内湾し、口縁部は内傾する。断面三角形状の鐙が付き、41と44の外面には煤が付着している。46・47は東播系須恵器。46はこね鉢、47は片口鉢で、口縁部は上方に肥厚する。48は龍泉窯系青磁碗。外面に鎬蓮弁文を施し、胎土は灰白色で薄緑色の釉薬が掛けられている。49は白磁皿。口縁部内面と底部外面は、釉薬が禿ぎとられている。胎土は灰白色で、透明釉が掛けられている。50は砥石。砂岩製で、1面の砥面をもつ。



SP14 : 31・32
 SP56 : 30
 SP69 : 33
 SP70 : 34

第17図 柱穴出土遺物実測図

遺構と遺物



第 18 図 包含層出土遺物実測図

第4節 小 結

余戸中ノ孝遺跡1次調査では、平安時代から室町時代の遺構・遺物を確認した。検出した遺構は掘立柱建物址2棟、溝2条、土坑1基、土壙墓1基と柱穴90基である。

掘立1は褐灰色土を埋土とする1間×2間の小規模な建物址で、倉庫もしくは作業小屋のような用途で使用された建物址と推測される。一方、掘立2は黄灰色土や灰黄色土を埋土とする1間×3間規模の建物址で、桁行長6.42m、梁行長3.83m、床面積は24.58㎡である。両建物を構成する柱穴からは鎌倉時代、13世紀代に時期比定される土師器や須恵器、瓦質土器の破片が出土しており、該期の建物址と考えられる。なお、柱穴埋土や検出層位より、掘立2が掘立1に先行する建物址と思われる。

本調査で注目される遺構は、土壙墓1である。楕円形状の墓壙と、その周囲には円形状に巡る溝（周溝）を伴っており、墓壙内からは、ほぼ完全な姿の人骨が出土した。人骨は頭部を北に向け、脚を折り曲げた状態で埋葬されており、木棺の蓋と思われる木片と鉄釘が出土した。なお、頭部の傍らには完形の土師器椀が副葬されていた。形態の特徴より、この土器は吉備地方で制作されたものである。松山平野内における中世遺跡では、吉備系の土師器椀が出土する事例は極めて少なく、平野内では流通しておらず、このことから副葬された椀は人の手により持ち込まれたものと推測される。これにより、埋葬された人物は吉備地方と強いつながりを持つ可能性が高く、吉備地方からの移住者である可能性がある。なお、分析の結果、この人物は成人男性であることが判明している。

このほか、1区検出のSD1は円形状に巡る溝であり、埋土が周溝と酷似することや、出土した遺物が土壙墓の時期と同様であることから、土壙墓1と同様、墓に伴う周溝の可能性もある。

遺構一覧・遺物観察表 - 凡例 -

以下の表は、本調査地検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。

(1) 遺構一覧表

地 区 欄 グリッド名を記載。

規 模 欄 () は現存値を示す。

埋 土 欄 複数の土層がある場合は、以下のように記載している。

例)「黄灰色土 他」

出土遺物欄 遺物名称を略記した。

例) 土→土師器、須→須恵器、陶→陶磁器、石→石製品、木→木製品

(2) 遺物観察表

法 量 欄 () : 復元推定値

胎 土 欄 胎土欄は混和剤を略記した。

例) 石→石英、長→長石、金→金ウンモ

() の中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例) 石・長 (1~2) → 「1~2mm大の石英・長石を含む」である。

焼 成 欄 焼成欄の略記について

◎→良好

遺物観察表

表 4 掘立柱建物一覧

掘立	地区	規模(間)	桁行長(m)	梁行長(m)	床面積(m ²)	柱穴埋土	出土遺物	時期	備考
1	A1～B2	1間×2間	3.08	2.33	7.17	褐灰色土	土・瓦質・石	鎌倉時代	
2	C1～D2	1間×3間	6.42	3.83	24.58	黄灰色土 他	土・須・瓦質・石	鎌倉時代	

表 5 溝一覧

溝(SD)	地区	方向	断面形	規模 長さ×幅×深さ(m)	埋土	出土遺物	時期	備考
1	B7	南北	レンズ状	(2.40) × 0.40 × 0.10	褐灰色土	土・瓦質	鎌倉時代	
2	D3・4	南北	レンズ状	(3.40) × 0.80 × 0.17	褐灰色土 (黄灰色土混入)	土・須・瓦質・陶	鎌倉時代	

表 6 土坑一覧

土坑(SK)	地区	平面形	断面形	規模 長径×短径×深さ(m)	埋土	出土遺物	時期	備考
1	C3	楕円形	逆台形状	(1.80) × (0.52) × 0.32	褐灰色土	土・須・瓦質・陶	鎌倉時代	

表 7 土壇墓1(墓壇)

土壇墓1	地区	平面形	断面形	規模 長径×短径×深さ(m)	埋土	出土遺物	時期	備考
墓壇	C3～D4	(楕円形)	逆台形状	(1.50) × (1.20) × 0.40	灰黄色土 他	土・須・陶・木・骨	13世紀後半	

表 8 土壇墓1(周溝)

土壇墓1	地区	断面形	規模 長径×短径×深さ(m)	埋土	出土遺物	時期	備考
周溝	C3～D4	レンズ状	(5.00) × 0.80 × 0.25	褐灰色土	土・須・瓦質	13世紀後半	

表 9 掘立1出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
1	坏	底径 (6.8) 残高 1.2	底部片。底部外面に回転糸切り痕あり。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰白色 灰白色	密 ◎	SP50	
2	椀	口径 (16.0) 残高 2.4	瓦器椀。内面に平行線状の暗文あり。小片。	ミガキ	ナデ (指頭痕)	黒色 黒色	密 ◎	SP51	

表 10 SD1 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
3	土釜	口径 (24.0) 残高 3.8	体部は内湾し、口縁端部は丸く仕上げる。断面方形状の鑿が付く。小片。	ヨコナデ	ハケ (8本/cm)	茶褐色 茶褐色	石・長(1～3) 金 ◎		4
4	坏	口径 (10.8) 底径 (6.6) 器高 2.3	体部は内湾し、口縁端部は尖り気味。底部外面に回転糸切り痕あり。1/5の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	褐色 褐色	密 ◎		
5	椀	底径 (4.2) 残高 0.8	瓦器椀の底部。形骸化した高台を貼付ける。1/2の残存。	ナデ	ナデ	灰色 灰白色	密 ◎		
6	土釜	残高 7.0	瓦質土器。土釜の脚部。断面円形。	ナデ (指頭痕)	—	黒褐色	石・長(1～3) ◎		4

表 11 SD2 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
7	坏	口径 (12.6) 残高 3.1	体部は直立気味に立ち上り、口縁部は内湾する。底部外面に回転糸切り痕あり。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	茶褐色 茶褐色	密 ◎		
8	土釜	口径 (20.6) 残高 6.2	体部は内湾し、口縁部は内傾する。丸味のある断面三角形の鐙が付く。小片。	ナデ	ナデ	茶褐色 茶褐色	石・長 (1~2) ◎	煤付着	4
9	皿	口径 (17.0) 残高 2.0	白磁。口縁部は短く水平にのびる。小片。透明釉が掛けられている。	施釉	施釉	灰白色 灰白色	密 (灰白色) ◎		4

表 12 SK1 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
10	坏	口径 (12.2) 残高 2.6	体部は内湾し、口縁端部は丸い。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰黄色 灰黄色	密 ◎		
11	坏	口径 (9.8) 底径 (5.6) 器高 2.3	体部は内湾し、口縁端部は丸い。1/4の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰褐色 灰褐色	密 ◎		
12	土釜	残高 10.4	土釜の脚部。断面円形。	ナデ (指頭痕)	—	茶褐色	密 ◎	煤付着	
13	椀	口径 (14.8) 残高 2.4	瓦器椀。小片。	ミガキ (指頭痕)	ミガキ	黒色 黒色	密 ◎		
14	椀	底径 (5.0) 残高 0.9	瓦器椀。断面三角形の高台を貼付。1/4の残存。	ナデ	ナデ	灰色 灰色	密 ◎		4
15	椀	底径 (5.0) 残高 0.4	瓦器椀。断面方形の低い高台を貼付ける。1/4の残存。	ナデ	ナデ	黒色 黒色	密 ◎		
16	皿	口径 (7.6) 底径 (4.0) 器高 1.3	瓦器皿。口縁部は外反し、底部は丸味をもつ。1/3の残存。	ナデ (指頭痕)	ナデ	灰色 暗灰色	密 ◎		
17	片口鉢	口径 (25.0) 残高 4.3	東播系須恵器。小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		4
18	こね鉢	口径 (29.6) 残高 3.7	東播系須恵器。口縁部は上方に肥厚する。小片。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 灰色	密 ◎		
19	甕	残高 5.1	瓦質土器。小片。	格子目叩き	ナデ	灰色 灰白色	密 ◎		
20	碗	底径 (6.0) 残高 1.7	龍泉窯系青磁碗。削り出し高台。高台置付は無釉。1/5の残存。	施釉	施釉	濃緑色 濃緑色	密 (灰色) ◎		

表 13 土墳墓 1 (墓壇) 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
21	椀	口径 11.1 底径 5.0 器高 3.7	吉備系椀。完存品。体部は内湾し、口縁部は外反する。断面三角形の高台を貼付。	ヨコナデ	ナデ	浅黄橙色 浅黄橙色	密 ◎		4
22	坏	底径 6.8 残高 1.1	底部片。底部の切り離しは、回転糸切り技法による。底部完形。	ヨコナデ	ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎		
23	こね鉢	口径 (28.6) 残高 4.6	東播系須恵器。口縁部は上方に肥厚する。小片。	回転ナデ	ナデ	青灰色 暗灰色	密 ◎		
24	碗	口径 (17.1) 残高 2.4	龍泉窯系青磁碗。体部外面に蓮弁文あり。小片。	施釉	施釉	濃緑色 濃緑色	密 (灰色) ◎		4

遺物観察表

表 14 土墳墓 1 (周溝) 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
25	椀	口径 (14.6) 残高 2.8	瓦器椀。体部中位に稜あり。小片。	ナデ (指頭痕)	ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎		
26	椀	底径 (4.4) 残高 2.0	瓦器椀。断面三角形の低い高台を貼付。1/4の残存。	ナデ (指頭痕)	ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎		4
27	土釜	残高 3.0	瓦質土器。口縁部片。断面台形状の鑿が付く。小片。	ヨコナデ	ナデ	暗灰色 灰色	石・長 (1~3) ◎		
28	土釜	残高 12.8	脚部片。断面円形。	ナデ (指頭痕)	—	褐色	石・長 (1~2) 金 ◎	煤付着	
29	こね鉢	口径 (27.4) 残高 3.3	東播系須恵器。口縁部は上方に拡張する。小片。	回転ナデ	ナデ	暗灰色 灰白色	密 ◎		

表 15 柱穴出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
30	坏	口径 12.8 底径 7.1 器高 3.5	体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部は直立する。底部の切り離しは回転糸切り技法による。2/3の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰黄色 灰黄色	石・長 (1~3) ◎	SP56 黒斑	5
31	坏	口径 (12.7) 残高 2.5	口縁部小片。口縁端部は先細りする。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰白色 灰白色	密 ◎	SP14	
32	皿	口径 (8.6) 底径 (6.2) 器高 1.5	体部は直立気味に立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。底部外面に回転糸切り痕あり。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰白色 灰白色	密 ◎	SP14	
33	椀	底径 (4.8) 残高 0.9	瓦器椀。断面三角形の高台を貼付、内面にらせん文と平行線状の暗文あり。1/2の残存。	ヨコナデ	ミガキ	暗灰色 暗灰色	密 ◎	SP69	
34	椀	底径 (4.0) 残高 0.8	瓦器椀。断面方形の高台を貼付。1/4の残存。	ヨコナデ	ナデ	灰色 灰色	密 ◎	SP70	

表 16 包含層出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
35	皿	口径 (8.0) 底径 (6.4) 器高 1.4	体部は内湾し、底部外面に回転糸切り痕あり。1/3の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰黄色 灰黄色	石・長 (1~2) ◎		
36	椀	口径 (15.1) 残高 4.7	瓦器椀。口縁部は外反し、内面に平行線状の暗文あり。1/3の残存。	ナデ (指頭痕)	ミガキ	灰色 灰色	密 ◎		5
37	椀	口径 (15.6) 残高 3.2	瓦器椀。体部上位に稜あり。小片。	ナデ (指頭痕)	マメツ	灰色 灰色	密 ◎		
38	椀	底径 (4.2) 残高 0.7	瓦器椀。断面三角形の高台を貼付。小片。	ナデ	ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
39	皿	口径 (8.4) 底径 2.5 器高 1.7	瓦器皿。体部は内湾し、口縁部は僅かに外反する。内面に平行線状の暗文あり。1/3の残存。	ナデ (指頭痕)	マメツ	灰色 灰色	密 ◎		
40	皿	口径 (7.8) 残高 1.8	瓦器皿。体部は内湾し、口縁部は外反する。1/5の残存。	ナデ (指頭痕)	ナデ	暗灰色 暗灰色	密 ◎		
41	土釜	口径 (26.0) 残高 2.3	口縁部小片。断面台形状の鑿が付く。	ヨコナデ	ハケ (9本/cm)	褐色 褐色	石 (1) ◎	煤付着	5
42	土釜	残高 7.1	瓦質土器。脚部片。断面円形。	ナデ (指頭痕)	—	灰色	密 ◎		
43	土釜	口径 (24.4) 残高 4.7	瓦質土器。体部は内湾し、口縁部は内傾する。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰白色 灰色	密 ◎		5

包含層出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
44	土釜	口径 (32.8) 残高 3.5	瓦質土器。口縁部は内傾し、口縁端部は面をもつ。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰色 灰色	石・長 (1~3) ◎	煤付着	5
45	土釜	口径 (25.5) 残高 3.7	瓦質土器。口縁部は内傾し、口縁端部は丸い。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	暗灰色 灰色	石・長 (1~3) ◎	煤付着	5
46	こね鉢	口径 (24.2) 残高 2.2	東播系須恵器。口縁部は上方に肥厚する。小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
47	片口鉢	残高 2.5	東播系須恵器。口縁部は上方に肥厚する。小片。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 灰色	密 ◎		
48	碗	口径 (15.4) 残高 4.6	龍泉窯系青磁碗。外面に蓮弁文あり。1/4の残存。	施釉	施釉	薄緑色 薄緑色	密 (灰白色) ◎		5
49	皿	口径 (9.3) 底径 (5.7) 器高 2.5	白磁皿。口縁部内面、底部外面は釉薬を禿ぎとる。1/2の残存。	施釉	施釉	灰白色 灰白色	密 (灰白色) ◎		5

表 17 包含層出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
50	砥石	一部欠損	砂岩	14.0	10.1	7.2	1,910	砥面：1面	5

第4章 余戸中ノ孝遺跡2次調査

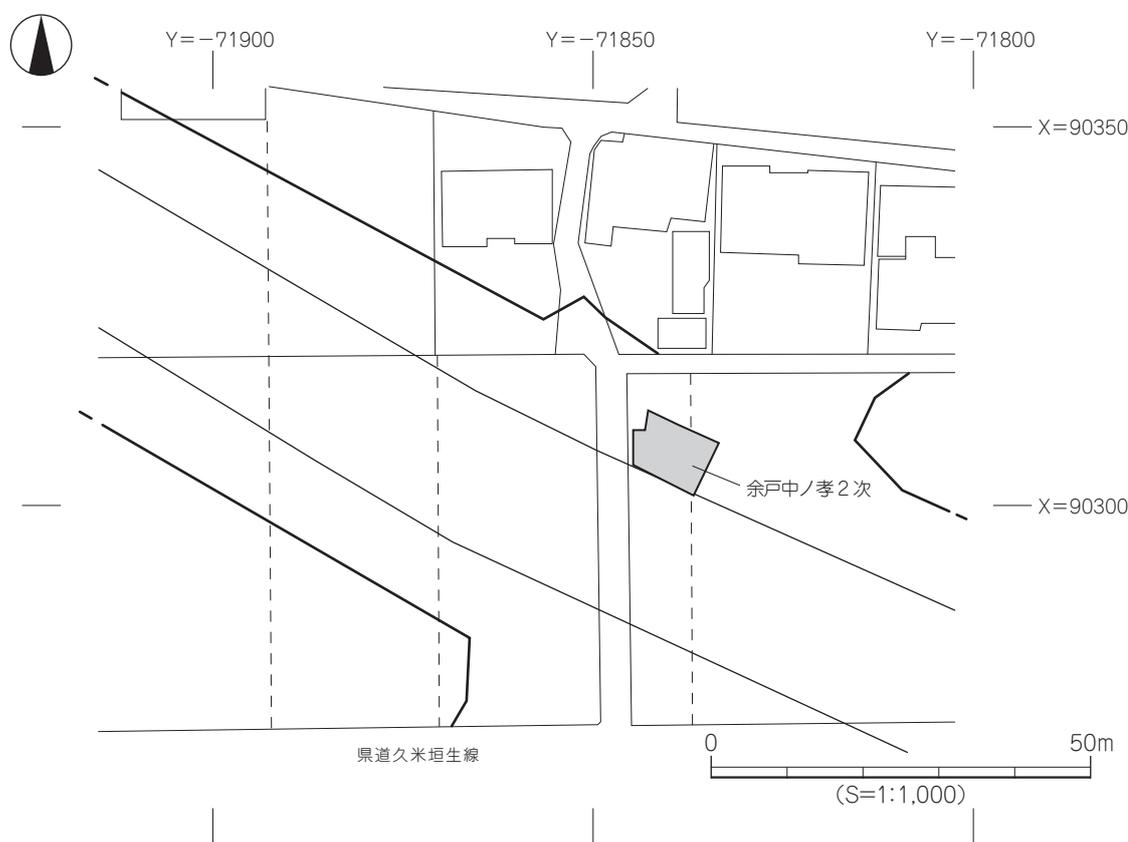
第1節 調査の経緯

余戸中ノ孝遺跡2次調査は、松山市余戸西一丁目1981番1、1982番3、1983番1、1983番6の各一部を調査対象地とし、調査面積は約110㎡である。調査期間は、平成27年3月16日から同年3月31日である。以下、調査工程を略記する。

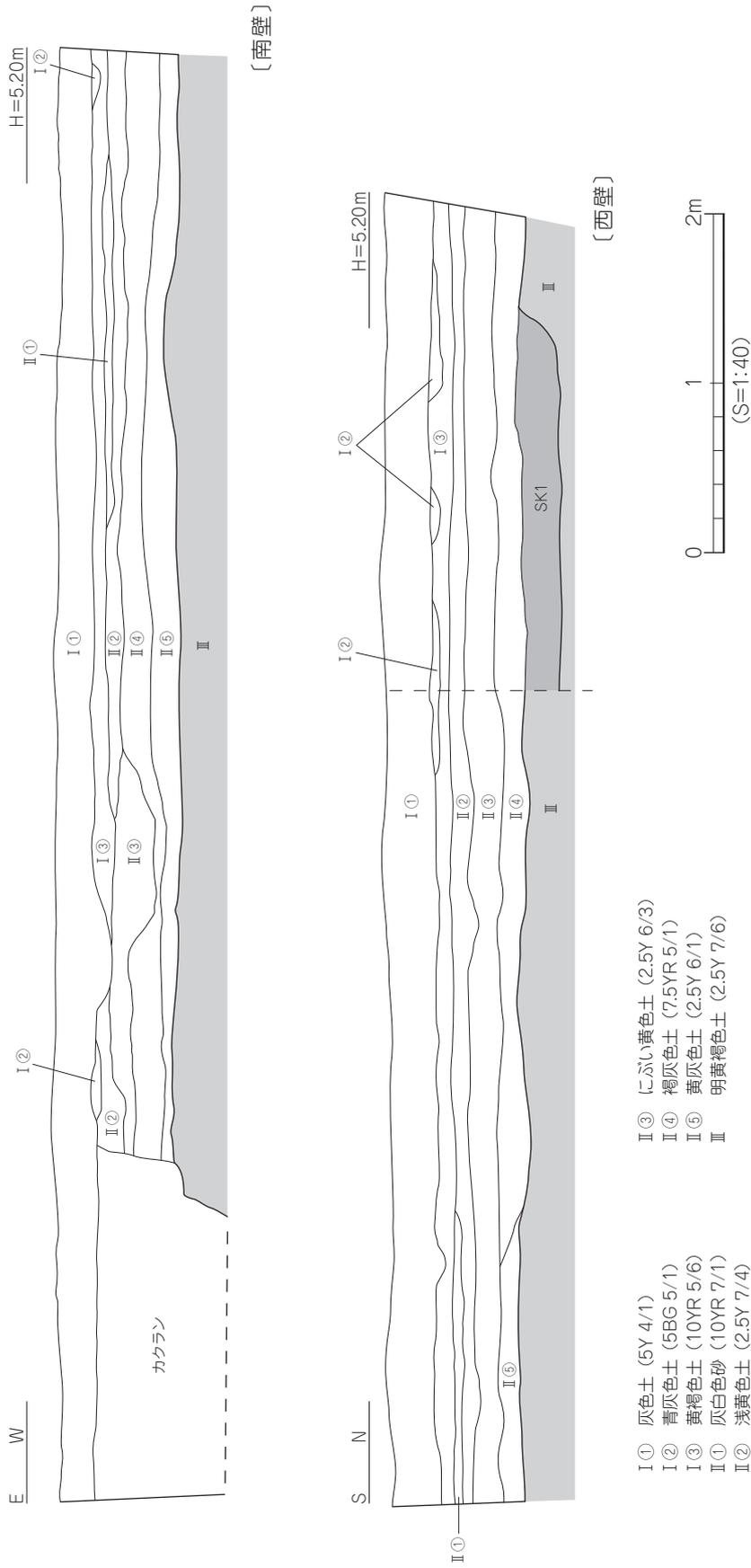
平成27年3月16日、調査地は調査以前には水田と自動車工場用地として利用されており、発掘調査時は自動車工場の建物基礎が遺存していた。そこで、重機を使用して建物基礎の撤去作業を行い、2日間を費やした。3月18日、重機の使用により表土の掘削作業を行い、その後、作業員による遺構検出作業を行った。検出した遺構は、土坑と柱穴である。3月19日より遺構の掘り下げや測量作業を開始する。3月27日、遺構の掘り下げを終了し、遺構平面図や土層図等を作成する。3月30日、すべての測量作業が終了し、完掘状況写真を撮影する。3月31日、重機を使用して埋め戻し作業を行い、本日で発掘調査を終了する。

第2節 層位 (第20図、図版6)

調査で確認した土層は、以下の9層である。なお、第2章で説明した基本層位のうち、本調査では第I層と第II層のみを検出した。



第19図 調査地位置図



第20図 南・西壁土層図

層 位

第Ⅰ層：近現代の造成土及び水田耕作に伴う客土で、土色・土質の違いにより3種類に分層される。

第Ⅰ①層－現耕作土〔灰色土（5Y 4/1）〕で、地表下15～20cmまで開発が行われている。

第Ⅰ②層－旧耕作土〔青灰色土（5BG 5/1）〕で調査区西半部にみられ、層厚は2～5cmである。

第Ⅰ③層－旧床土〔黄褐色土（10YR 5/6）〕で調査区西半部にみられ、層厚は3～14cmである。

第Ⅱ層：中世段階の堆積層で、土色・土質の違いにより5種類に分類される。

第Ⅱ①層－灰白色砂（10YR 7/1）で部分的にみられ、層厚は1～3cmである。

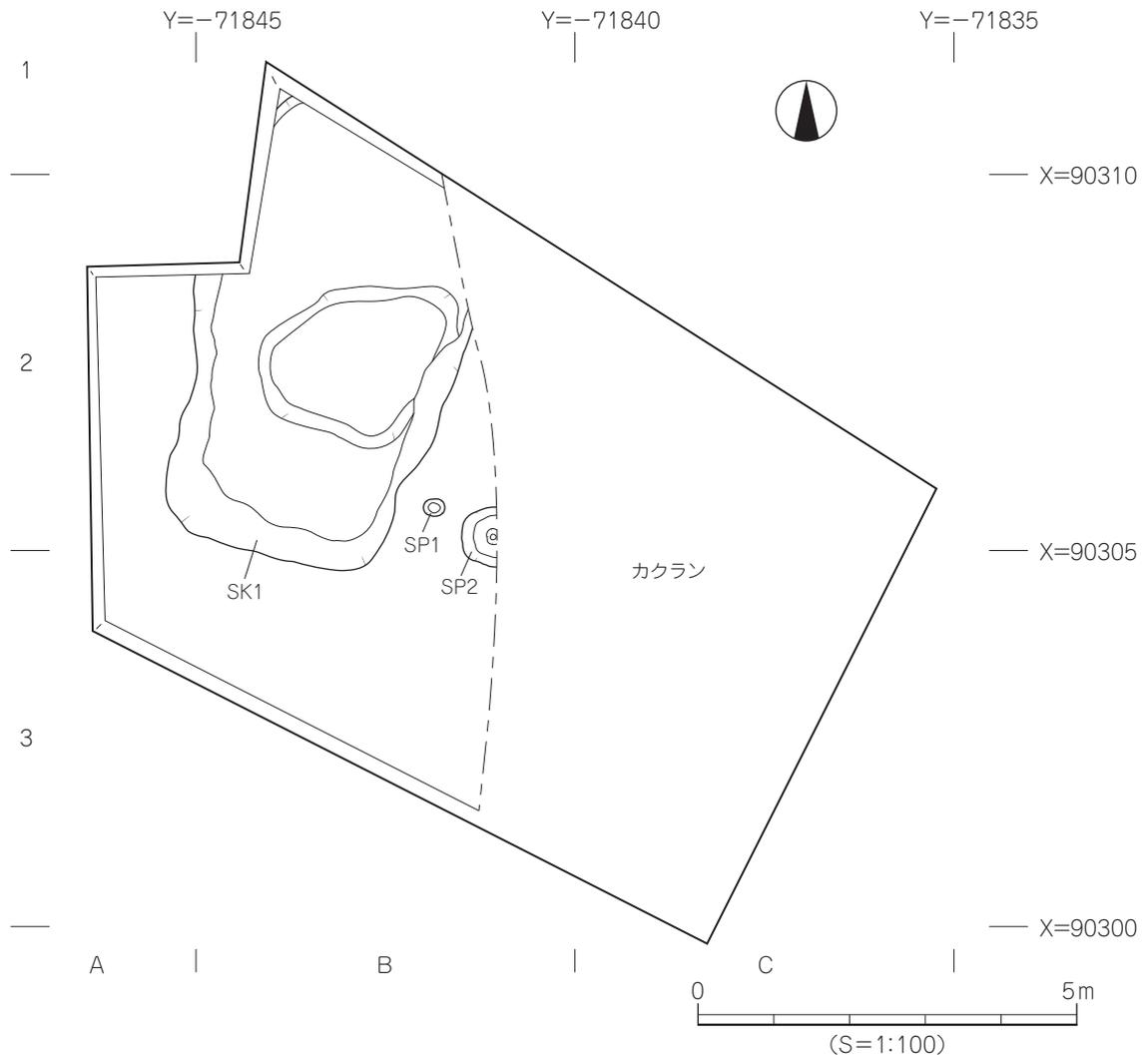
第Ⅱ②層－浅黄色土（2.5Y 7/4）で調査区北西部にみられ、層厚は6～10cmである。

第Ⅱ③層－にぶい黄色土（2.5Y 6/3）で調査区南東部にみられ、層厚は5～20cmである。

第Ⅱ④層－褐灰色土（7.5YR 5/1）で調査区全域にみられ、層厚は5～15cmである。本層中からは、中世の土師器や須恵器、瓦質土器の破片が比較的多く出土した。

第Ⅱ⑤層－黄灰色土（2.5Y 6/1）で調査区北西部にみられ、層厚は6～20cmである。本層中からは第Ⅱ④層と同様、中世の遺物が出土した。

第Ⅲ層：明黄褐色土（2.5Y 7/6）で、やや砂質を帯びる土壤である。本層上面は、調査における最終遺構検出面である。検出した遺構は、土坑と柱穴である。



第21図 遺構配置図

なお、調査にあたり調査区内を5m四方のグリッドに分けた。グリッドは西から東へA・B・C、北から南へ1・2・3とし、A1・A2・…・C3区といったグリッド名を付した。グリッドは、遺構の位置表示や遺物の取り上げ等に利用した。本調査の座標値は、X=90299～90312、Y=-71835～-71846である。

第3節 遺構と遺物

余戸中ノ孝遺跡2次調査では、土坑1基と柱穴2基を検出した。遺物は遺構内や第Ⅱ④・⑤層中より、鎌倉時代から室町時代の土師器や須恵器、瓦質土器、陶磁器等が出土した。なお、遺物の出土量は収納箱(44×60×14cm)約2箱分である。ここでは、検出した遺構ごとに説明する。

1. 土 坑

SK1 (第22図)

調査区中央部A2～B3区で検出した土坑で、土坑東側は近現代の攪乱により消失し、北側は調査区外に続く。平面形態は楕円形をなすものと思われ、規模は南北検出長6.00m、東西長3.70m、深さは最深部で36cmである。断面形態は逆台形状をなすが、壁体は緩やかに立ち上がる。埋土は黄灰色土(2.5Y 6/1)単層である。土坑基底面中央部にて、長径2.80m、短径2.20m、深さ8cm程度の楕円形状の凹みを検出したが、埋土は土坑と同様である。遺物は埋土中より、土師器や須恵器の小破片が数点出土した。

出土遺物 (図版7)

1は土師器坏。体部は内湾し、口縁端部は丸く仕上げる。底部の切り離しは、回転糸切り技法による。2は土師質の土釜。口縁部は内傾し、口縁端部は丸く、丸味のある断面三角形の鑿が付く。

時期：出土遺物の特徴より、鎌倉時代後期、13世紀前半とする。

2. 柱 穴

調査では、2基の柱穴を検出した。

SP1 (第23図)

調査区中央部B2区で検出した柱穴で、平面形態は円形をなし、規模は径26cm、深さ8cmである。柱穴掘り方埋土は、黄灰色土(2.5Y 6/1)単層である。柱穴内からは、土師器の小片が数点出土したが、図化しうるものはない。

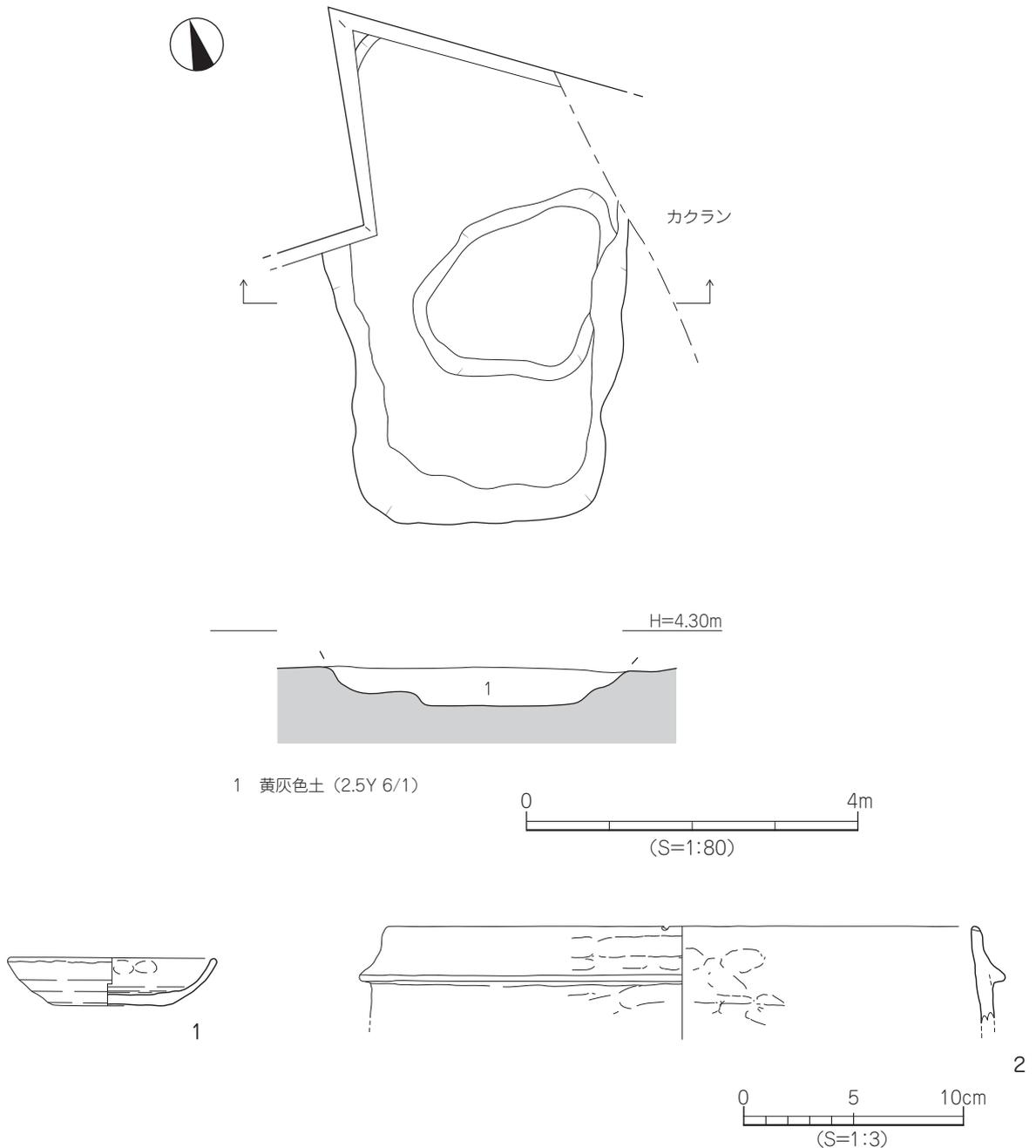
SP2 (第23図)

調査区中央部B2・3区で検出した柱穴で、東半部は攪乱により削平されている。平面形態は円形をなすものと思われ、規模は東西検出長0.47m、南北長0.76m、深さは12cmである。柱穴掘り方埋土は、黄灰色土(2.5Y 6/1)単層である。柱痕は柱穴中央部で検出され、規模は径20cm、深さ20cmである。柱痕埋土は、褐灰色土(7.5YR 5/1)である。遺物は柱穴内より土師器の細片が数点出土したが、図化しうるものはない。

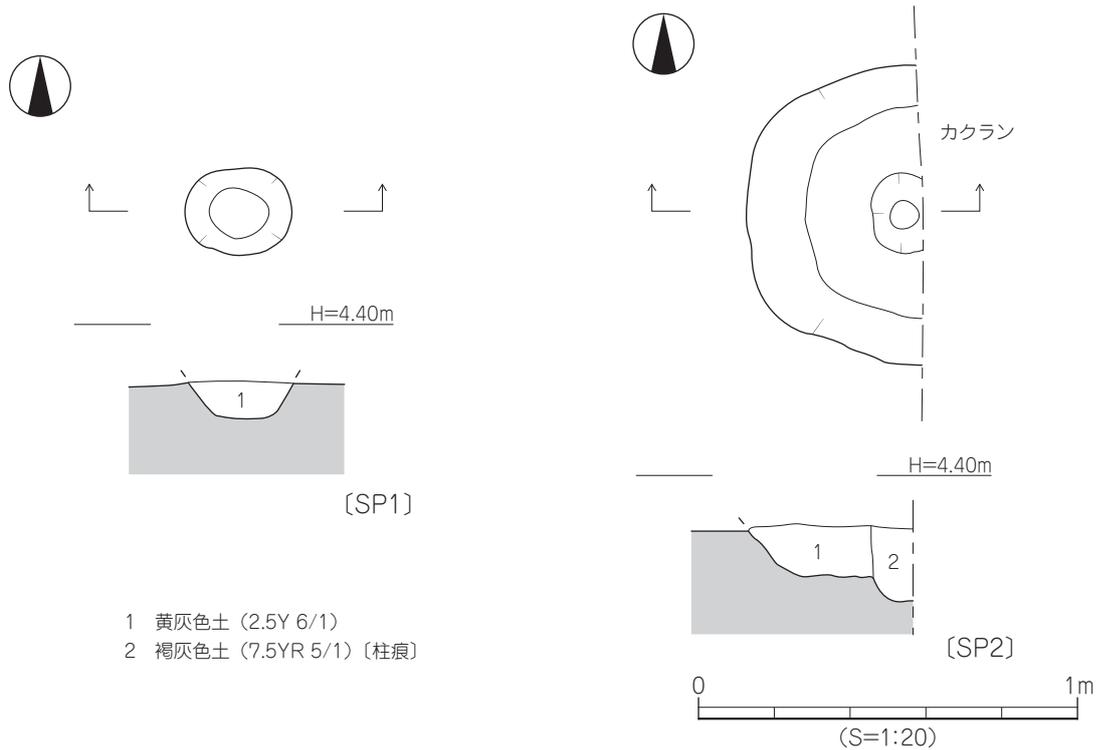
3. 包含層出土遺物

第Ⅱ④層出土遺物（第24図、図版7）

3は土師器坏。体部は直線的に立ち上がり、口縁部は内湾する。底部の切り離しは摩滅の為、不明である。4は土師器皿。半割片を接合した復元完形品で、口径7.5cm、底径2.7cm、器高1.6cmである。体部は内湾し、底部の切り離しは回転糸切り技法による。5は瓦器椀。体部上位に稜をもち、口縁部は外反する。外面にはナデ調整と指頭圧痕がみられる。6～8は土釜。6・8は土師質、7は瓦質土器である。6の体部は内湾し、口縁部は内傾する。断面方形の鑊が付き、口縁端面は平坦面をなす。7の口縁部は内傾し、口縁端部は内傾する面をもつ。8は口唇部付近に断面三角形の鑊が付き、口



第22図 SK1 測量図・出土遺物実測図



第23図 SP1・2 測量図

縁端部は内傾する。9は亀山焼の甕。頸部は外反し、口縁端部は上方に僅かに肥厚する。外面には格子目叩きを施す。色調は外面が暗灰色、内面は灰色である。10～12は須恵器。10は東播系須恵器のこね鉢で、口縁部は上方に肥厚する。11は体部、12は底部片である。13・14は龍泉窯系青磁碗。13は外面に蓮弁文を施し、胎土は灰色で、薄緑色の釉葉が掛けられている。14は底部片。削り出し高台で、胎土は青灰色をなし、釉調は濃緑色である。なお、底部外面及び高台畳付は無釉である。

第4節 小 結

本調査では、中世の遺構や遺物を確認した。SK1は長径6mの楕円形土坑で、土坑内からは鎌倉時代後期、13世紀前半頃に使用された土師器土釜や坏などの破片が出土している。また、検出した2基の柱穴については時期特定が難しいが、余戸中ノ孝遺跡1次調査で検出した掘立柱建物柱穴と、柱穴掘り方埋土が酷似しており、同時期の遺構と考えられる。

狭小範囲の調査ではあるが、検出した土坑や柱穴は鎌倉時代の遺構であり、余戸中ノ孝遺跡1次調査で見つかった中世集落が東方地域へ広がっていることを示す資料といえよう。

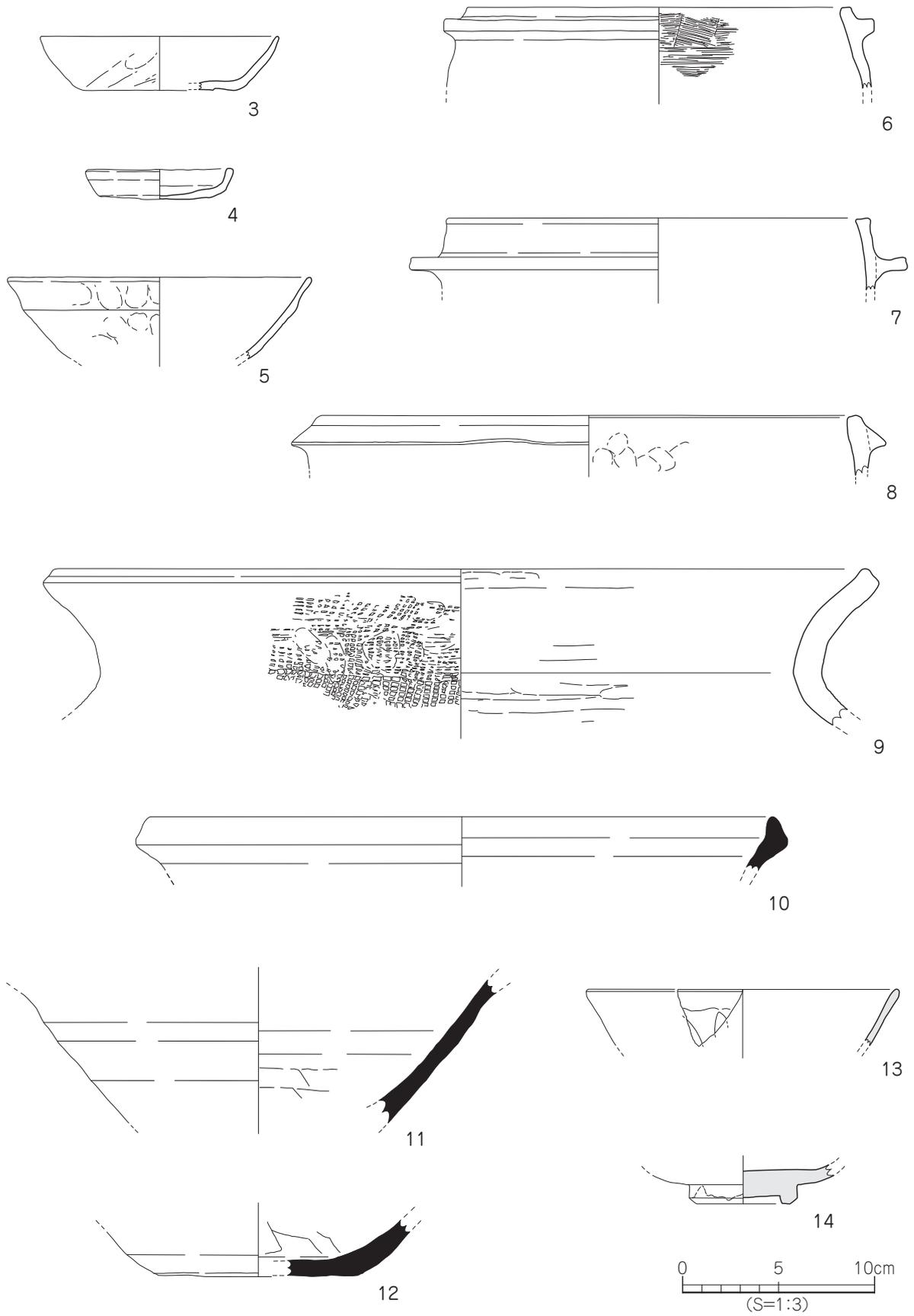
遺構一覧・遺物観察表 - 凡例 -

以下の表は、本調査地検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。

(1) 遺構一覧表

- 地 区 欄 グリッド名を記載。
- 規 模 欄 () は現存値を示す。
- 出土遺物欄 遺物名称を略記した。
例) 土→土師器、須→須恵器

小 結



第 24 図 包含層出土遺物実測図

(2) 遺物観察表

法 量 欄 (): 復元推定値

胎 土 欄 胎土欄は混和剤を略記した。

例) 石→石英、長→長石、金→金ウンモ、赤→赤色酸化土粒

() 中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例) 石・長 (1~2) → 「1~2mm大の石英・長石を含む」である。

焼 成 欄 焼成欄の略記について

◎→ 良好

表 18 土坑一覽

土坑 (SK)	地 区	平面形	断面形	規 模 長径×短径×深さ (m)	埋 土	出土遺物	時 期	備 考
1	A2~B3	楕円形	逆台形状	(6.00) × 3.70 × 0.36	灰黄色土	土・須	鎌倉時代	

表 19 柱穴一覽

柱穴 (SP)	地 区	平面形	断面形	規 模 長径×短径×深さ (m)	埋 土	出土遺物	時 期	備 考
1	B2	円形	逆台形状	0.26 × 0.26 × 0.08	灰黄色土	土	鎌倉時代	
2	B2・3	円形	逆台形状	0.76 × (0.47) × 0.12	灰黄色土	土	鎌倉時代	

表 20 SK1 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形 態・施文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎 土 焼 成	備 考	図版
				外 面	内 面				
1	坏	口径 (9.2) 底径 4.9 器高 2.2	体部は内湾し、底部の切り離しは回転糸切り技法による。1/3の残存。	マメツ	ナデ	橙色 橙色	石・長 (1~2) ◎		
2	土釜	口径 (26.4) 残高 4.4	口縁部は内傾し、断面三角形の丸味のある鋳が付く。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	褐色 褐色	石・長 (1~3) 石赤 ◎	煤付着	7

表 21 包含層出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形 態・施文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎 土 焼 成	備 考	図版
				外 面	内 面				
3	坏	口径 (12.2) 底径 (7.8) 器高 2.8	体部は直立気味に立ち上がり、口縁部は内湾する。1/4の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰白色 灰白色	密 ◎		
4	皿	口径 7.5 底径 2.7 器高 1.6	完形品。体部は内湾し、底部の切り離しは回転糸切り技法による。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰白色 灰白色	密 ◎		7
5	椀	口径 (15.4) 残高 4.2	瓦器椀。体部上位に稜をもち、口縁部は外反する。小片。	ナデ (指頭痕)	ナデ	灰黄色 灰白色	密 ◎		7
6	土釜	口径 (20.0) 残高 4.2	体部は内湾し、口縁部は内傾する。口縁端部は面をもつ。小片。	ヨコナデ	ハケ (10~12本/cm)	茶褐色 茶褐色	石・長 (1~2) ◎	煤付着	7
7	土釜	口径 (22.0) 残高 3.7	瓦質土器。口縁部は内傾し、口縁端部はナデ凹む。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	暗灰色 灰色	石・長 (1) ◎		7
8	土釜	口径 (27.2) 残高 3.1	口縁端部は面をもつ。小片。	ヨコナデ	ナデ	灰黄色 灰黄色	石・長 (1~2) ◎		7
9	甕	口径 (41.6) 残高 8.1	亀山焼。頸部は外反し、口縁端部は上方に肥厚する。小片。	格子目叩き	回転ナデ	暗灰色 灰色	石・長 (1~3) 金 ◎		7
10	こね鉢	口径 (32.2) 残高 2.8	東播系須恵器。口縁部は上方に肥厚する。小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		7
11	鉢	残高 7.5	体部片。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
12	鉢	底径 (10.2) 残高 2.9	底部片。1/4の残存。	回転ナデ	ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
13	碗	口径 (15.8) 残高 3.0	龍泉窯系青磁碗。外面に蓮弁文あり。小片。	施釉	施釉	薄緑色 薄緑色	密 (灰色) ◎		7
14	碗	底径 (4.8) 残高 2.0	龍泉窯系青磁碗。削り出し高台で、底部、高台畳付は無釉。1/2の残存。	施釉	施釉	濃緑色 濃緑色	密 (青灰色) ◎		7

第5章 余戸中ノ孝遺跡4次調査

第1節 調査の経緯

余戸中ノ孝遺跡4次調査は、松山市余戸西三丁目2484番6・7、2485番4、2486番4、2493番4の各一部を調査対象地とし、調査面積は約803㎡である。余戸中ノ孝遺跡1次調査の北西約140mに位置し、試掘調査の結果、溝や柱穴を検出し、中世集落確認のため発掘調査を実施した。調査期間は平成28年1月25日から同年2月29日である。調査は、排土置場の都合上、4地区（1区～4区）を2回に分け実施した。平成28年1月29日から同年2月11日まで1～3区を調査し、平成28年2月15日から4区の調査を行った（第26図）。表土層を重機を使用して掘削し、地表面下55～80cmの地点で掘立柱建物跡や溝、土坑、柱穴、井戸などの遺構を検出した。各遺構の掘削や測量及び写真撮影を行い、平成28年2月29日に屋外調査を終了した。



第25図 調査地位置図

第2節 層位 (第27・28図)

調査地は、松山平野西側に位置し、現在の重信川河口から約3km上流の右岸に立地する。旧重信川の氾濫原上と考えられ、標高4.6～5.2mを測る。調査以前は、宅地と水田として利用されていた。調査では、9層を検出した。

第Ⅰ層：近現代の造成土及び水田耕作に伴う耕作土で、3種類に分層される。

第Ⅰ①層－造成土で真砂土が1区全域にみられ、層厚70～90cmを測る。

第Ⅰ②層－近現代の農耕に伴う耕作土〔灰色土(7.5Y 5/1)〕が全調査区にみられ、層厚10～23cmを測る。

第Ⅰ③層－近現代の農耕に伴う床土〔黄橙色土(10YR 7/8)〕が全調査区にみられ、層厚5～9cmを測る。

第Ⅱ層：中世段階の土壌で、土色・土質の違いにより4種類に分層される。

第Ⅱ①層－にぶい黄色土(2.5Y 6/3)が1～3区にみられ、層厚4～15cmを測る。

第Ⅱ②層－灰白色土(5Y 7/2)が全調査区にみられ、層厚3～32cmを測る。

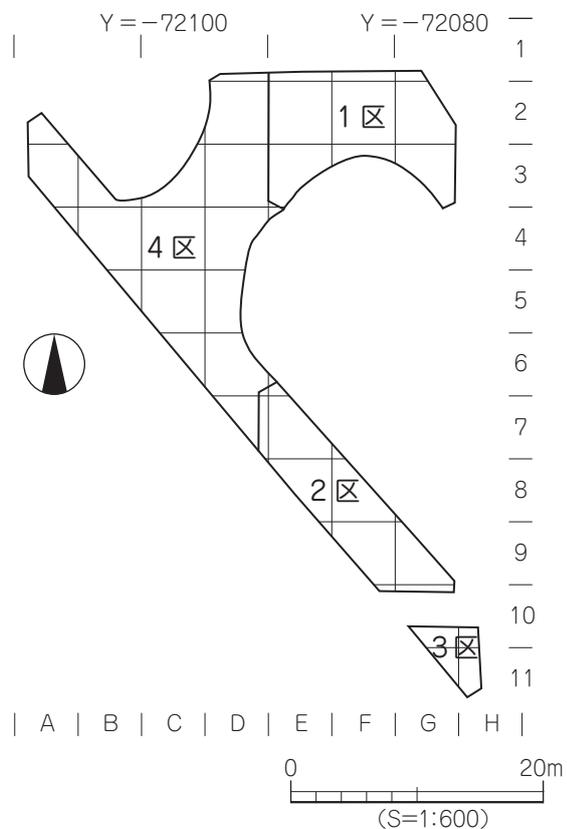
第Ⅱ③層－Ⅱ②層にマンガンを多含する。3区にみられ、層厚24～36cmを測る。

第Ⅱ④層－褐灰色土(10YR 6/1)が1区、2区、3区にみられ、層厚3～28cmを測る。本層からは鎌倉時代の土師器や須恵器のほか瓦器の破片が出土した。

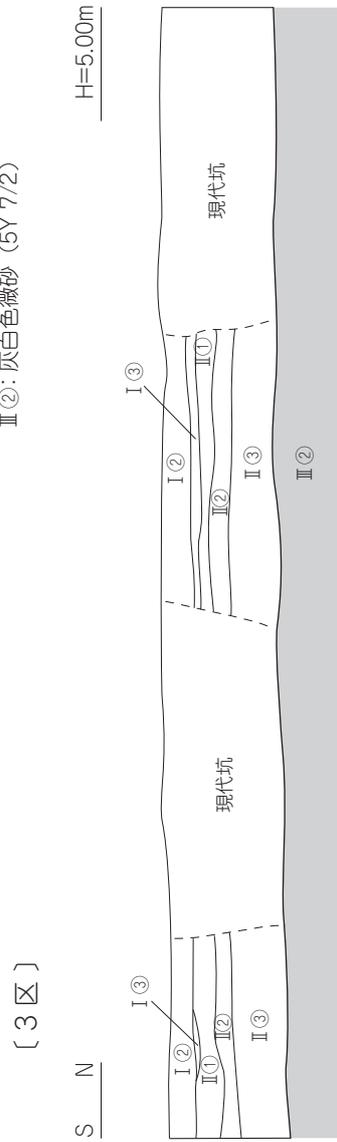
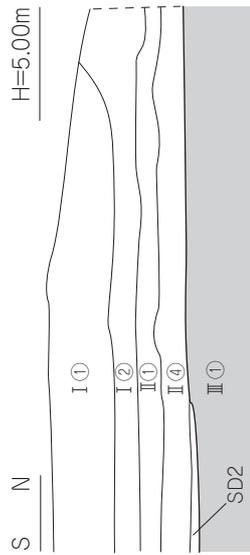
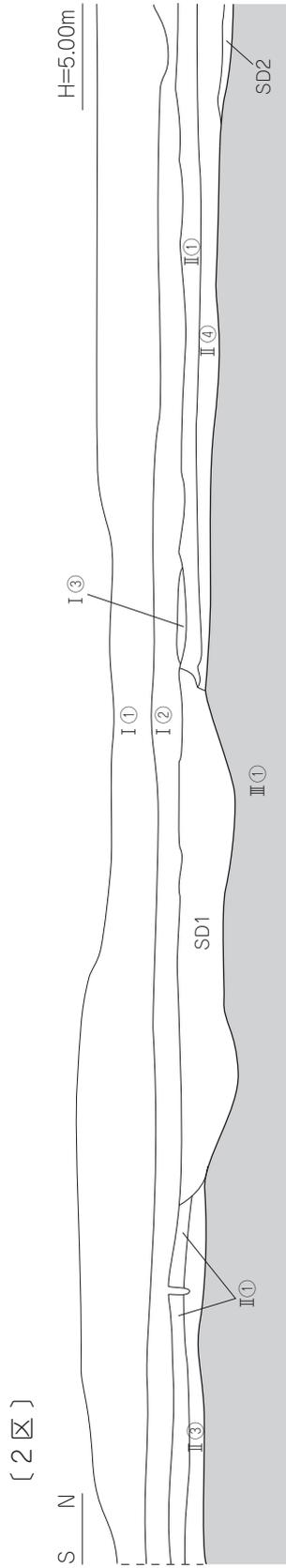
第Ⅲ①層：淡黄色土(7.5Y 8/3)が1区、2区、4区にみられ、本層上面が最終の遺構検出面となる。

第Ⅲ②層：灰白色微砂(5Y7/2)が3区に堆積するが、遺構は未検出である。

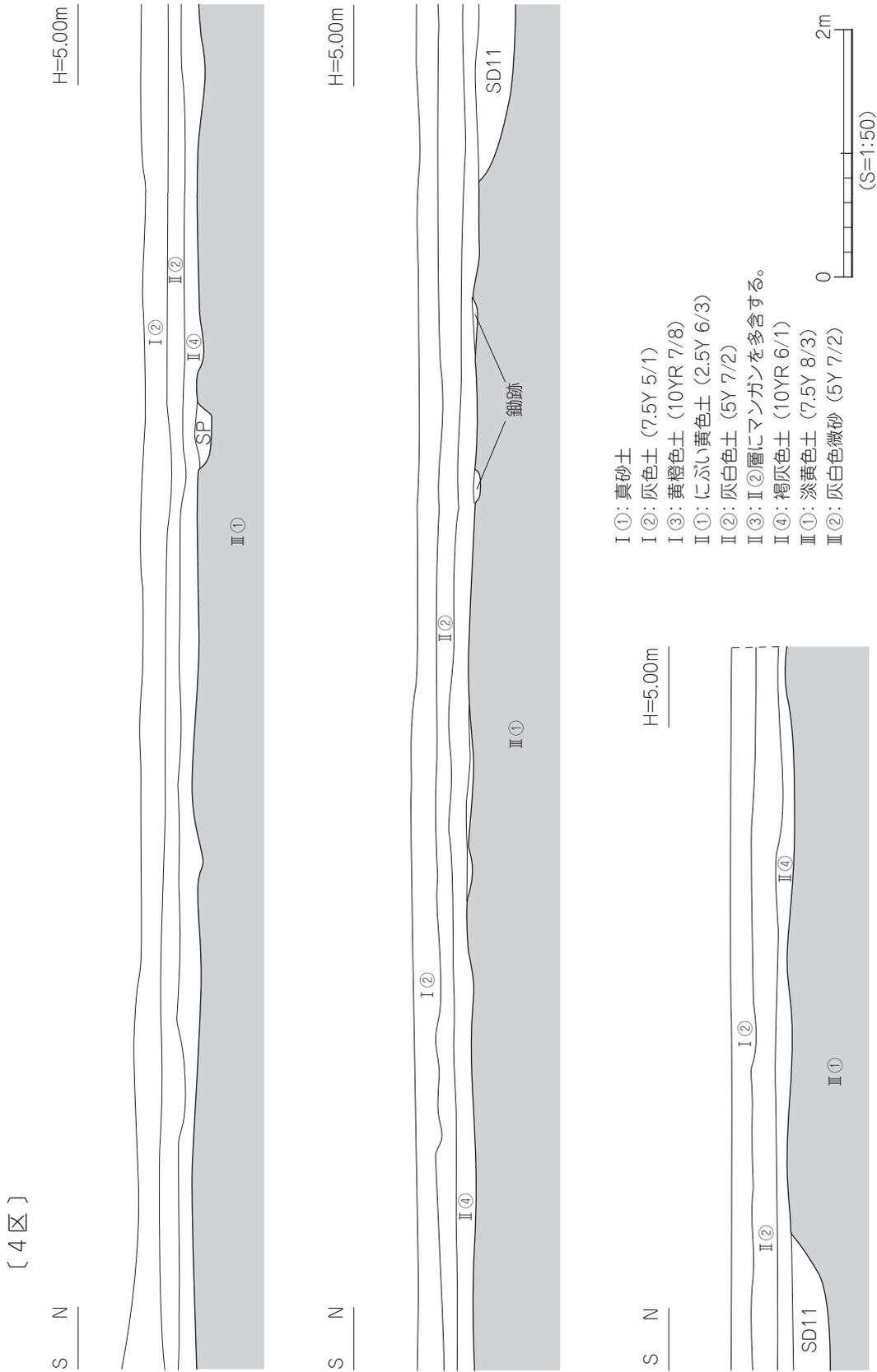
なお、調査にあたり調査地内を5m四方のグリットに分けた。グリットは、西から東に向けてA・B・C・・・、北から南へ向けて1・2・3・・・とし、A1・A2・・・H11といったグリッド名を付した(第26図)。



第26図 区割図

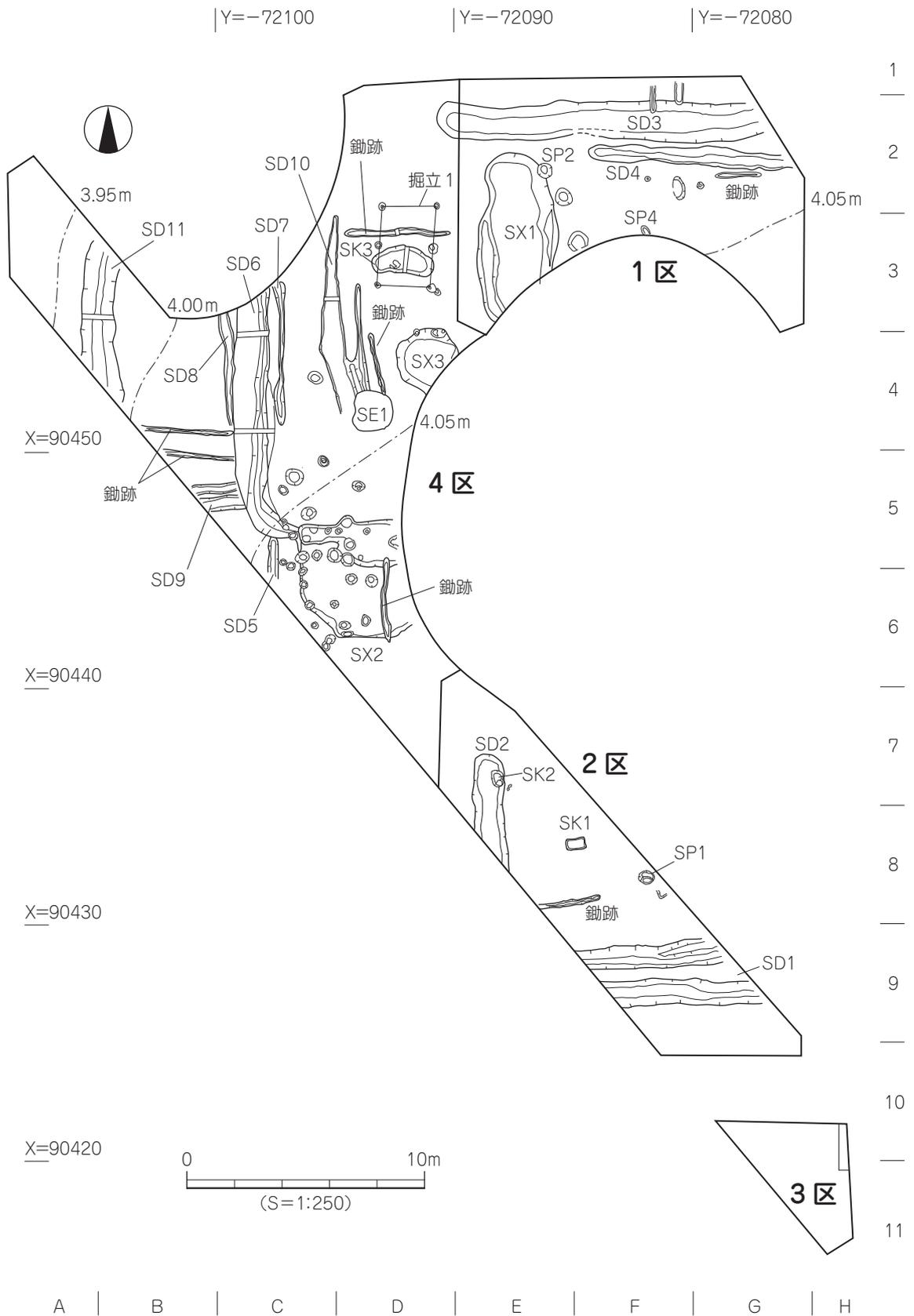


第 27 図 2・3 区西壁土層図



第 28 図 4 区西壁土層図

層位



第 29 図 遺構配置図

第3節 遺構と遺物

調査では、中世から近世にかけての遺構や遺物を確認した。遺構は第Ⅲ①層上面にて検出し、掘立柱建物1棟、溝11条、土坑3基、井戸1基、性格不明遺構3基、柱穴31基である。遺物は、土師器、須恵器、瓦器、陶磁器が出土し、遺物収納用箱（14×44×60cm）5箱分の出土量である。

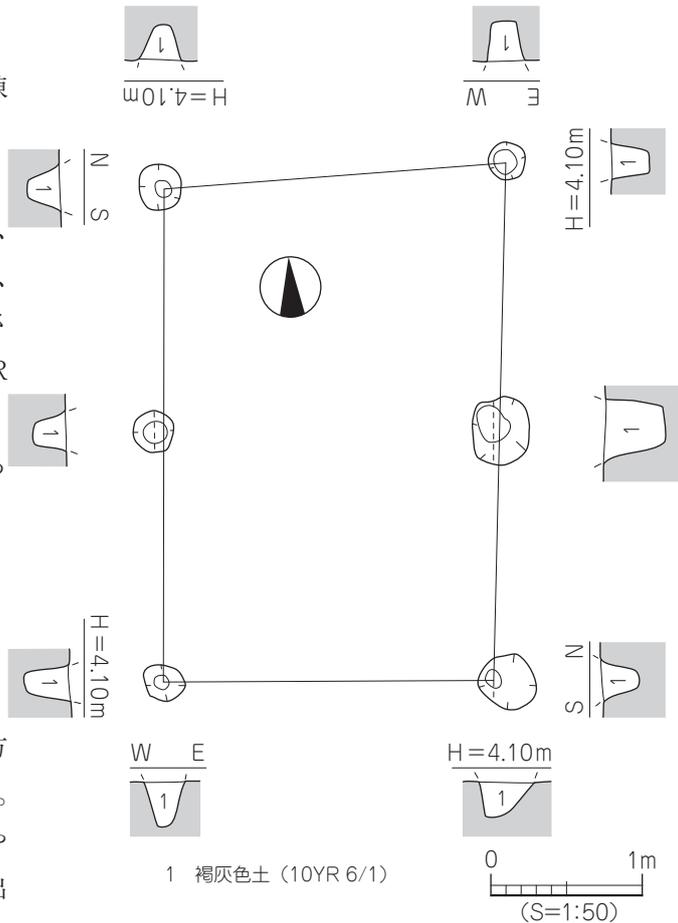
1. 掘立柱建物

第Ⅲ①層上面において、掘立柱建物1棟を検出した。

掘立1（第30図・図版10）

4区北側D3区に位置する。東西1間、南北2間の南北棟で、規模は桁行3.41m、梁行2.25m、柱穴径は20～47cm、深さ21～37cmを測る。埋土は褐灰色土（10YR 6/1）の単一層である。遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく、埋土が酷似する他の遺構から察して、13世紀代とする。



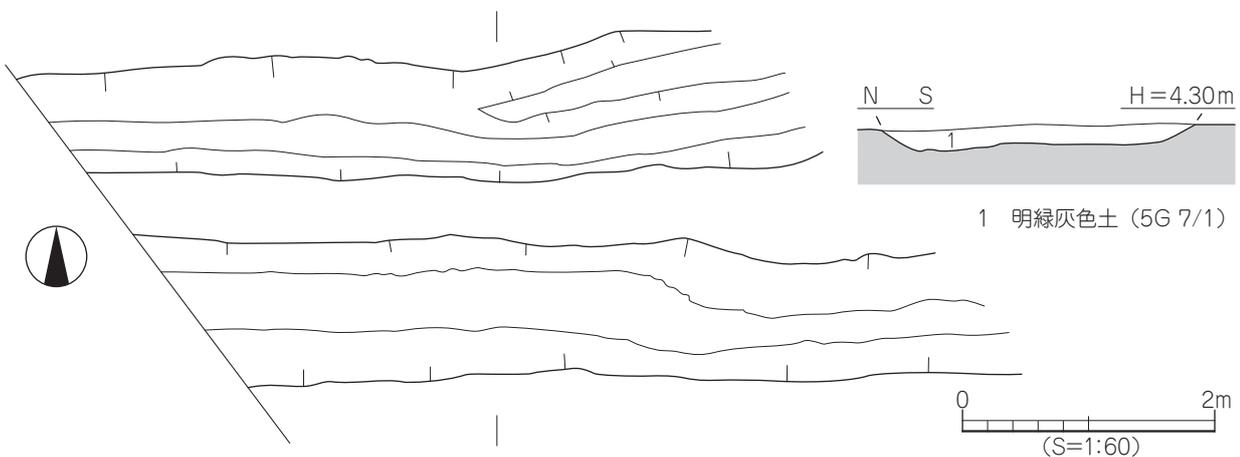
第30図 掘立1 測量図

2. 溝

第Ⅲ①層上面にて、溝11条を検出した。

SD1（第31図・図版9）

2区東部F9～G9区に位置し、東西方向を指向し、東西端は調査区外に延びる。断面形状は皿状を呈しており、中央部がやや隆起した状態で延びている。規模は検出長6.32m、最大幅2.74m、深さ21cmを測り、溝床の比高差は殆どない。埋土は明緑灰色土（5G 7/1）の単一層である。遺物は土師



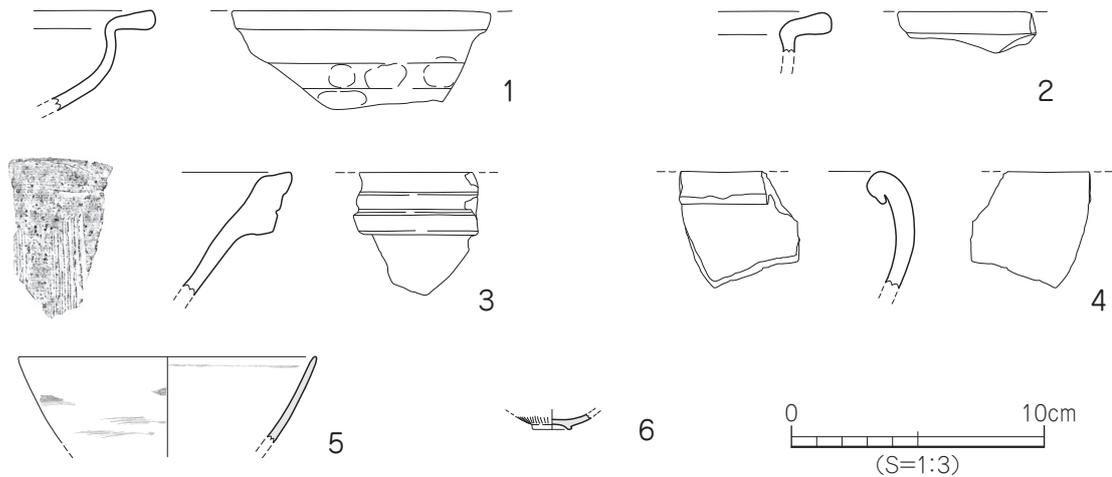
第31図 SD1 測量図

器、瓦器、陶磁器片が少量出土した。

出土遺物（第32図・図版11）

1は焙烙の口縁部で、水平方向に延び端部はやや肥厚される。2は瓦質の焙烙で、口縁部は水平方向に延び、端部はやや肥厚される。3は陶器の摺鉢の口縁部で、口縁部外面は肥厚され、内面の播目は条痕8条1単位として施される。4は陶器の鉢で、胴部は内湾し、口縁端部は内側に折り曲げられる。5は、磁器碗で、内面口縁部に圈線、外面に染付山水文が施される（砥部焼）。6は、磁器の紅皿で、底部に高台をもち、外面下胴部には放射線状の櫛描文が施される。

時期：出土した磁器の特徴から、19世紀後半とする。



第32図 SD1 出土遺物実測図

SD2（第33図）

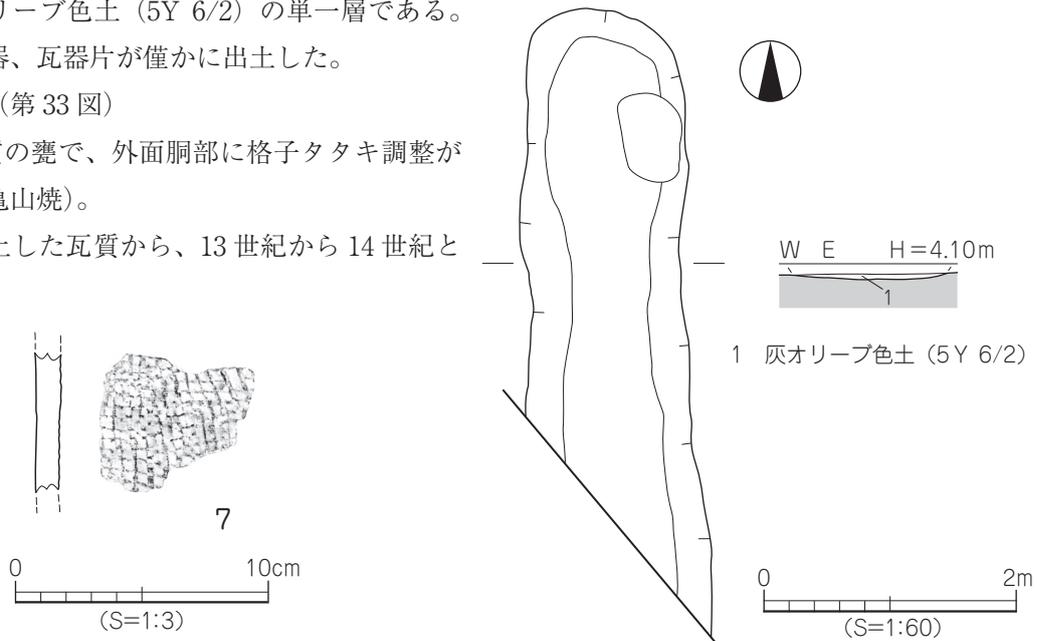
2区西端E7～E8区に位置し、南北方向を指向し、南端は調査区外に延びる。断面形状はレンズ状を呈しており、規模は検出長4.75m、最大幅1.27m、深さ7cmを測り、溝床の比高差は殆どない。埋土は灰オリーブ色土（5Y 6/2）の単一層である。

遺物は土師器、瓦器片が僅かに出土した。

出土遺物（第33図）

7は、瓦質の甕で、外面胴部に格子タタキ調整が施される（亀山焼）。

時期：出土した瓦質から、13世紀から14世紀とする。



第33図 SD2 測量図・出土遺物実測図

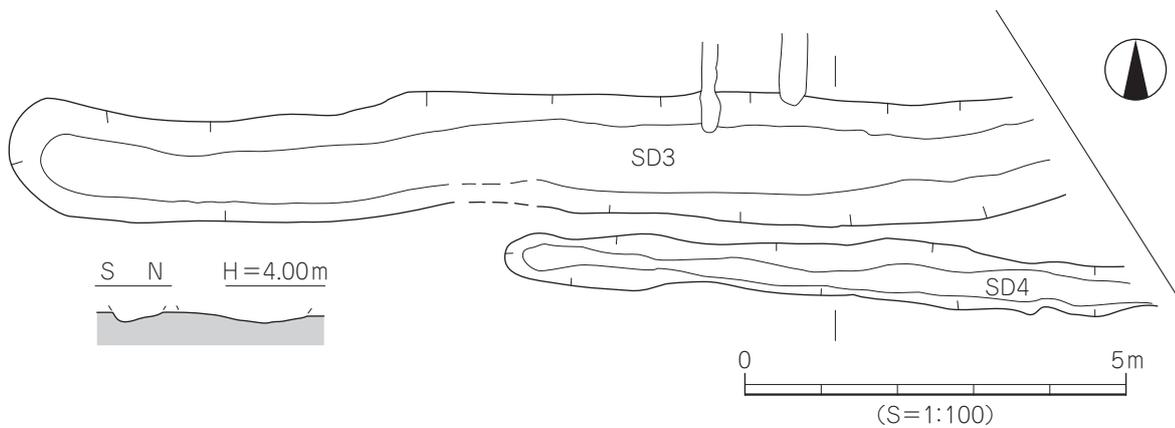
SD3 (第34図)

1区北端 F2～G2 区に位置し、東西方向を指向し、東端は調査区外に延びる。断面形状はレンズ状を呈しており、規模は検出長 12.8 m、最大幅 1.72 m、深さ 12cm を測り、溝床は東から西へ約 6cm の比高差をもつ。埋土は褐灰色土 (10YR 6/1) の単一層である。遺物は土師器、須恵器、陶磁器片が出土した。

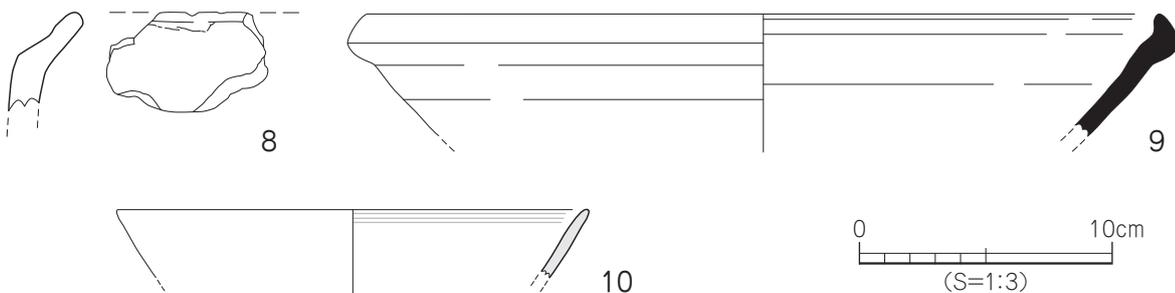
出土遺物 (第35図)

8 は土鍋の口縁部で、「く」字状の口縁部はやや内傾し、内外面はナデ調整が施され、外面に煤が付着する。9 は須恵器のこね鉢で、断面三角形状の口縁端部が上方に延びる。10 は磁器碗で、内外面は施釉され、口縁内面に二重の圈線が巡る。

時期：出土した須恵器の特徴から、12 世紀末から 13 世紀初頭とする。



第34図 SD3・4 測量図



第35図 SD3 出土遺物実測図

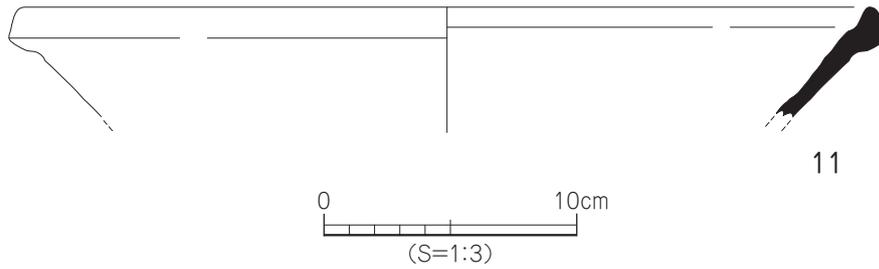
SD4 (第34図)

1区北側 F2～G2 区に位置し、東西方向を指向し、東端は調査区外に延びる。断面形状は皿状を呈しており、規模は検出長 8.52 m、最大幅 0.82 m、深さ 12cm を測り、溝床は東から西へ約 4cm の比高差をもつ。埋土は褐灰色土 (10YR 6/1) の単一層である。遺物は須恵器が出土した。

出土遺物 (第36図)

11 は須恵器のこね鉢で、断面三角形状の口縁端部が上方に延び、内外面にナデ調整が施される。

時期：出土した須恵器の特徴から、12 世紀末から 13 世紀初頭とする。



第 36 図 SD4 出土遺物実測図

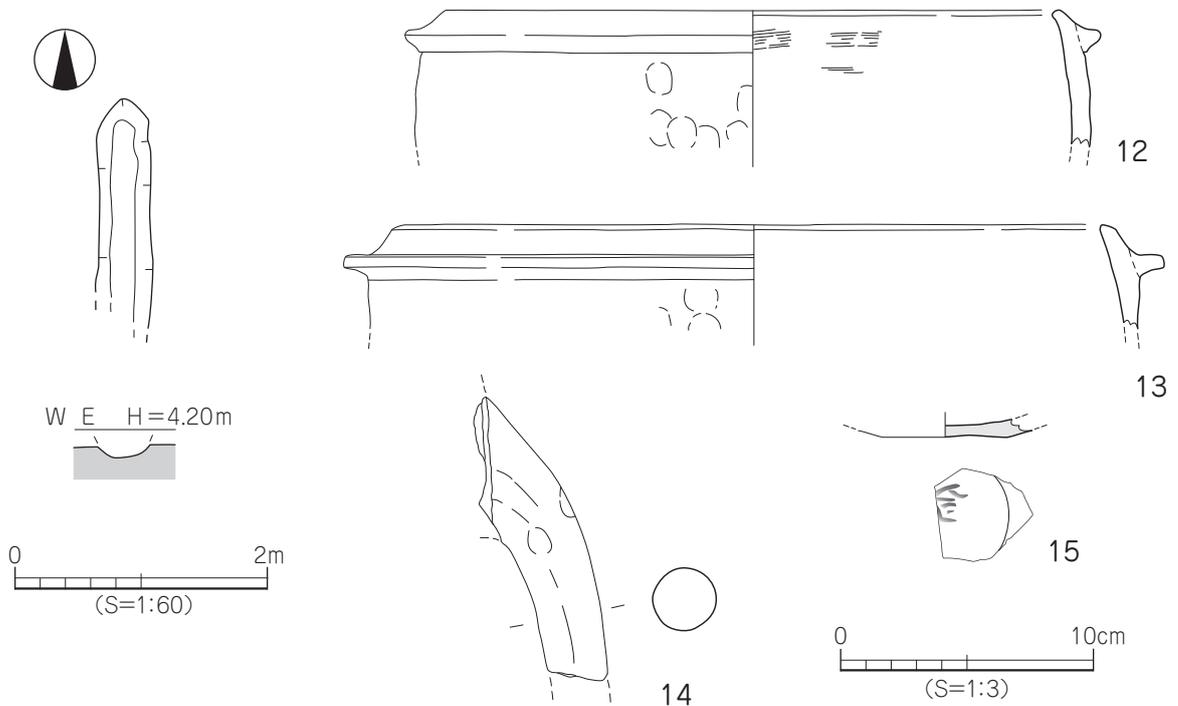
SD5 (第 37 図)

4区南東部 C5～C6 区に位置し、南北方向を指向し、南端は調査区外に延びる。断面形状は逆台形状を呈しており、規模は検出長 1.73 m、最大幅 0.42 m、深さ 9cm を測り、溝床の比高差は殆どない。埋土は褐灰色土 (10YR 6/1) の単一層である。遺物は土師器、陶器が出土した。

出土遺物 (第 37 図・図版 11)

12・13 は土釜の口縁部で、12 は口縁端部に断面三角形の貼り付け凸帯が巡り、外面はナデ調整、内面はハケ目調整が施される。13 は口縁端部やや下方に断面台形状に延びる貼り付け凸帯をもち、内外面共にナデ調整が施される。14 は土釜の脚部で、断面円形状の脚は下方に延びる。15 は陶器皿で、底部内面は施釉され、回転糸切り痕が残る外面底部には墨書文字「金」?がある。

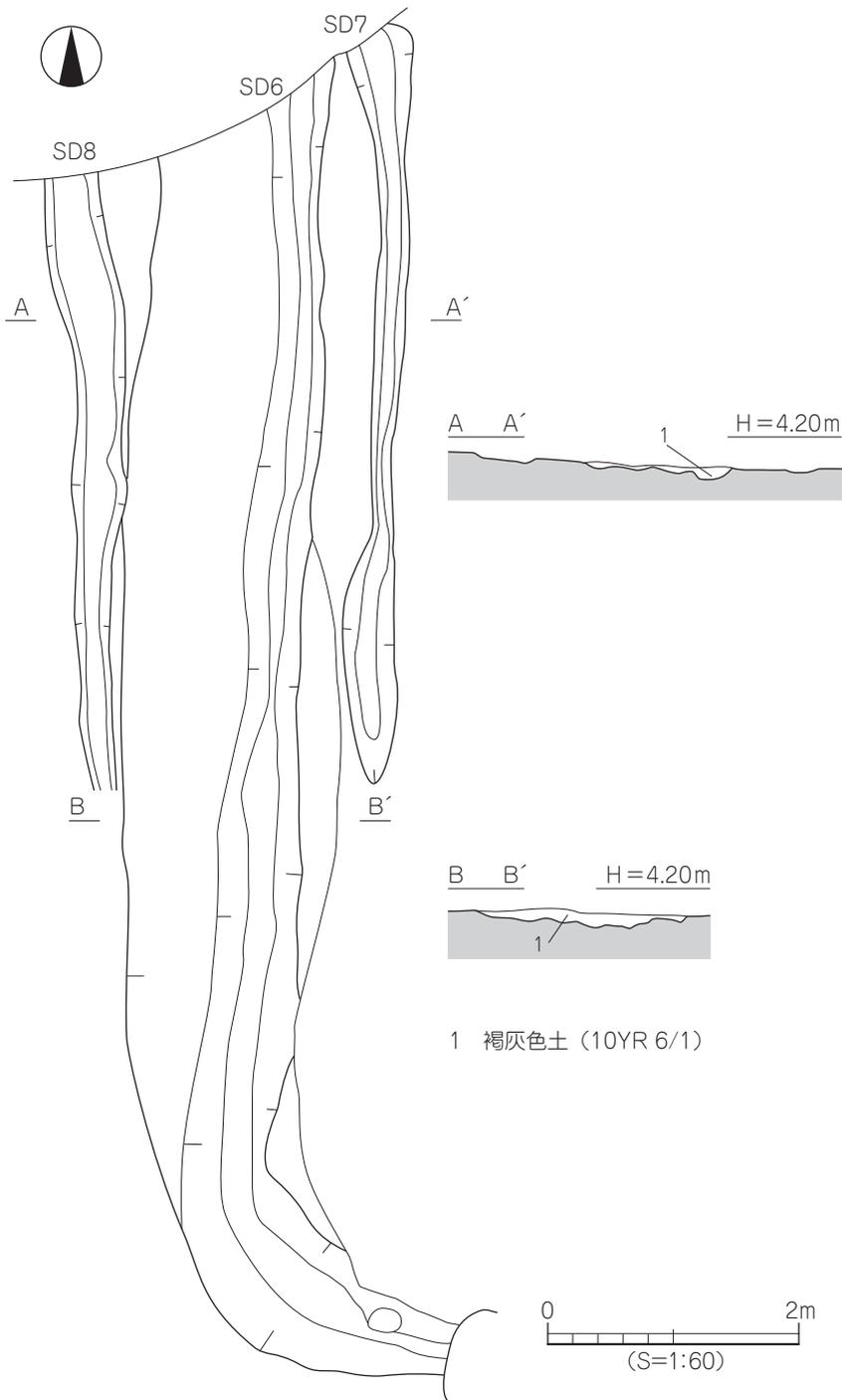
時期：出土した土師器の特徴から、13 世紀後半とする。



第 37 図 SD5 測量図・出土遺物実測図

SD 6 (第 38 図)

4区中央部 C3～C5区に位置し、南北方向を指向し、南端部分は東へ屈曲しSX2に切れ、北端は調査区外に延びる。断面形状は皿状で東端はレンズ状を呈する。規模は検出長 9.88 m、最大幅 1.62 m、深さ 20cm を測り、溝床は南から北へ約 7cm の比高差をもつ。埋土は褐灰色土 (10YR 6/1) の単一層である。遺物は土師器、須恵器片が僅かに出土した。

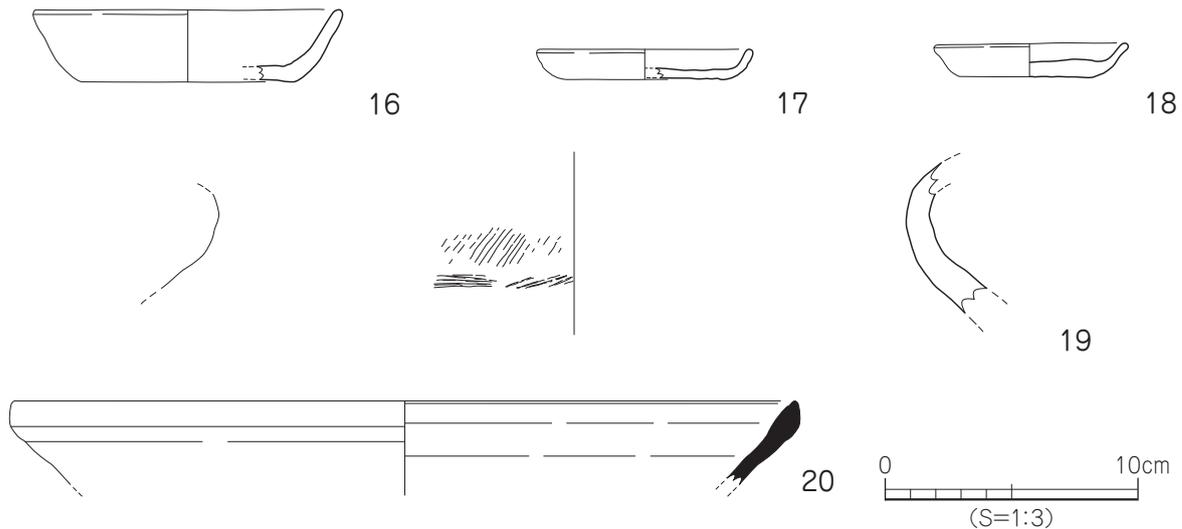


第 38 図 SD6・7・8 測量図

出土遺物（第 39 図・図版 11）

16 は土師器坏で、平底の底部より内傾して立ち上がり、内外面には回転ナデ調整、底部に回転糸切り痕が残る。17・18 は土師器皿で、内傾して立ち上がり底部付近に稜をもつ。17 は回転糸切り痕、18 は回転糸切り痕とすのこ痕が残る。19 は瓦質の甕の頸部で、外面にナデ調整とタタキ調整が施される。20 は須恵器のこね鉢で、口縁端部が断面三角形形状を呈し、内外面に回転ナデ調整が施される。

時期：出土した須恵器の特徴から、13 世紀代とする。



第 39 図 SD6 出土遺物実測図

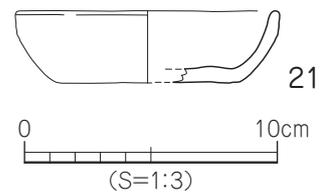
SD 7（第 38 図）

4 区中央部北寄り C3～C4 区に位置し、南北方向を指向し、北端は調査区外に延びる。断面形状は皿状を呈し、規模は検出長 5.92 m、最大幅 0.48 m、深さ 3cm を測り、溝床は南から北へ約 3cm の比高差をもつ。埋土は褐灰色土（10YR 6/1）の単一層である。遺物は土師器が出土した。

出土遺物（第 40 図）

21 は、土師器坏で、内傾して立ち上がり、底部に回転糸切り痕が残る。

時期：出土した土師器の特徴から、13 世紀代とする。



第 40 図 SD7 出土遺物実測図

SD 8（第 38 図）

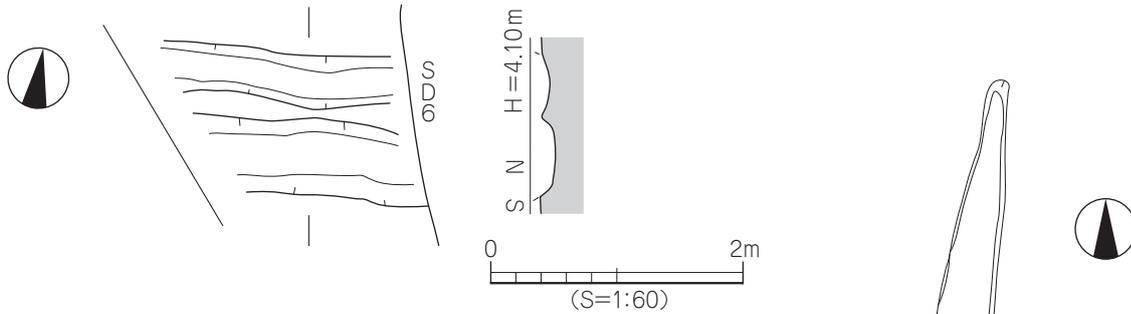
4 区中央部西寄り C3～C4 区に位置し、南北方向を指向し、東側は SD6 に切られ、北端は調査区外に延びる。断面形状は逆台形状を呈し、規模は検出長 4.88 m、最大幅 0.52 m、深さ 5cm を測り、溝床の比高差は殆どない。埋土は褐灰色土（10YR 6/1）の単一層である。遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく、埋土が酷似する他の遺構から察して、13 世紀代とする。

SD 9 (第 41 図)

4 区中央部西寄り B5 ~ C5 区に位置し、東西方向を指向し、東端は SD6 に切られ、西端は調査区外に延びる。断面形状はレンズ状を呈し、規模は検出長 1.78 m、最大幅 1.18 m、深さ 7cm を測り、溝床は東から西へ約 2cm の比高差をもつ。埋土は黄灰色土 (2.5Y 6/1) の単一層である。遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく、SD6 に切られることから 13 世紀代以前とする。



第 41 図 SD9 測量図

SD 10 (第 42 図)

4 区中央部北寄り D3 ~ D4 区に位置し、南北方向を指向し、南端は SE1 に切られる。断面形状は逆台形状を呈し、規模は検出長 8.38 m、最大幅 1.08 m、深さ 7cm を測り、溝床は南から北へ約 10cm の比高差をもつ。埋土は褐灰色土 (10YR 6/1) の単一層である。遺物は土師器片が僅かに出土した。

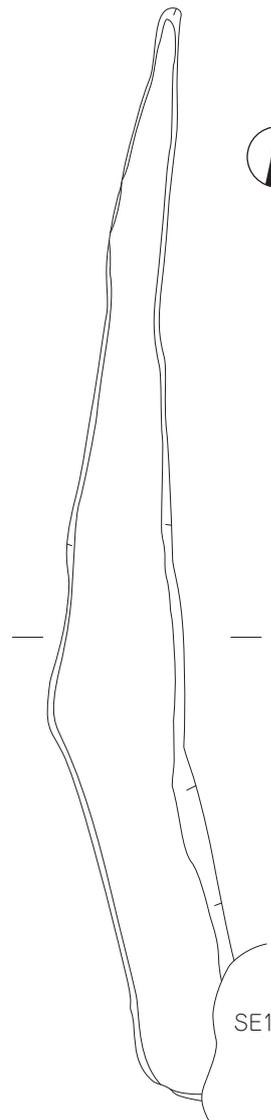
出土遺物 (第 42 図・図版 11)

22 は土釜の口縁で、口縁端部は内傾した面をなし口縁部に断面三角形の鏝が貼り付く。

時期：出土した土師器の特徴から、13 世紀代とする。

SD 11 (第 43 図・図版 10)

4 区西側 A3 ~ A4・B3 ~ B4 区に位置し、南北方向を指向し、南北端は調査区外に延びる。断面形状はレンズ状を呈し、規模は検出長 5.64 m、最大幅 1.48 m、深さ 36cm を測り、溝床は南から北へ約 8cm の比高差をもつ。埋土は上層が褐灰色土 (10YR 6/1) で、下層は淡黄色粘質土 (2.5Y 8/4) である。遺物は溝床付近から土師器の坏や皿が出土した。

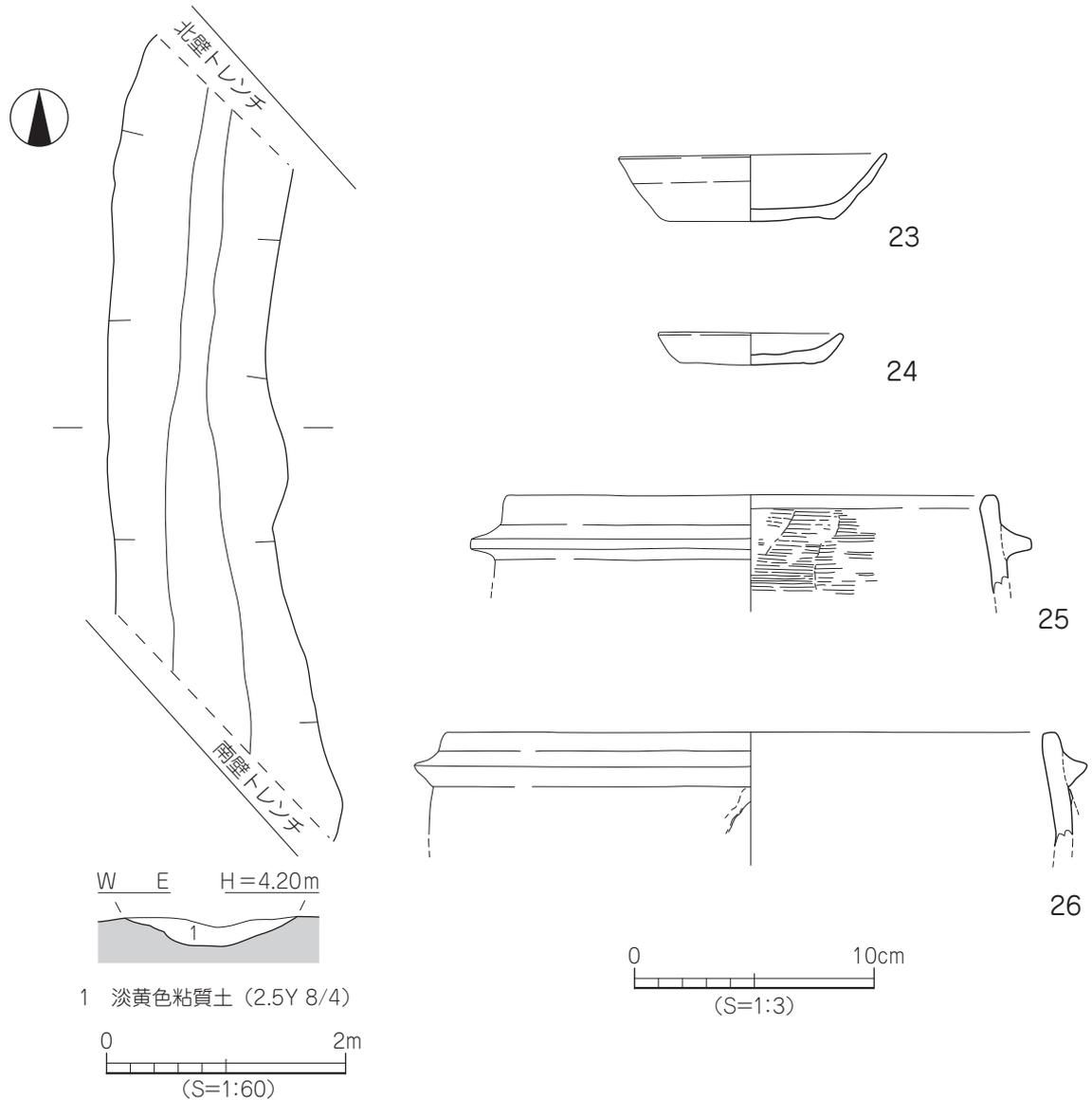


第 42 図 SD10 測量図・出土遺物実測図

出土遺物（第 43 図・図版 11）

23 は土師器坏で、平底の底部から内傾気味に立ち上がる内外面は煤け、底部は回転糸切り痕とすこの痕が残る。24 は土師器皿で、全体に歪みがあり、底部は回転糸切り痕が残る。25・26 は土釜で、25 は、口縁部に断面台形状の貼り付け凸帯の鏝をもち、内面にハケ調整、外面に横ナデ調整が施される。26 は、口縁部に断面三角形の貼り付け凸帯の鏝をもち、内外面に横ナデ調整が施される。

時期：出土した土師器の特徴から、13 世紀代とする。



第 43 図 SD11 測量図・出土遺物実測図

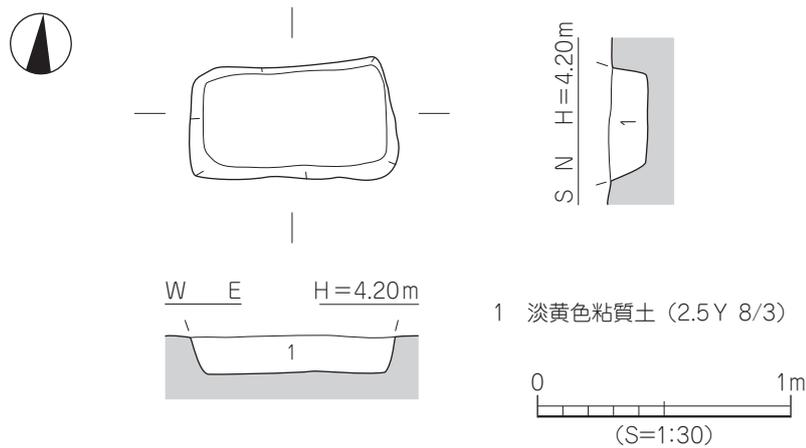
3. 土 坑

第Ⅲ①層上面において、土坑 3 基を検出した。

SK 1（第 44 図）

2 区中央部 F8 区に位置する。平面形態は長方形、断面形態は逆台形状を呈する。規模は長軸 0.82m、短軸 0.46m、深さ 14cm を測る。埋土は淡黄色粘質土 (2.5Y 8/3) の単一層である。遺物は土師器の小片が僅かに出土する。

時期：時期決定しうる遺物が乏しく、埋土の色調から近世以降と考える。

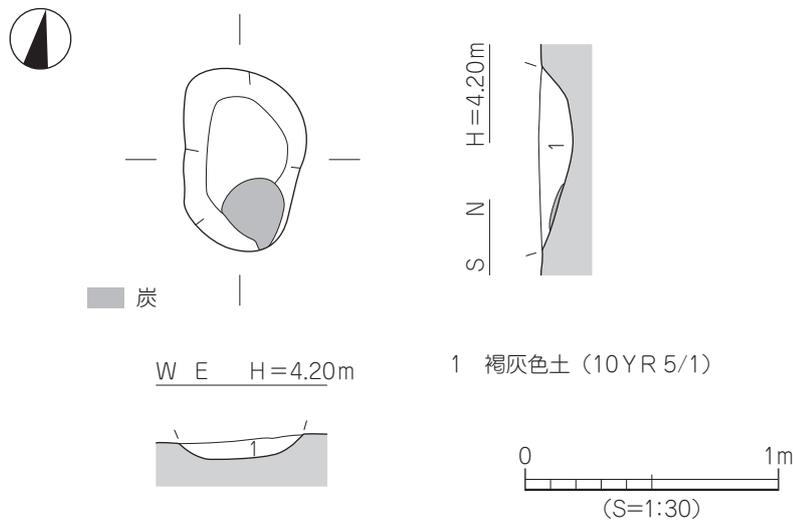


第44図 SK1 測量図

SK2 (第45図)

2区西側E7区に位置し、SD2に切られる。平面形態は楕円形、断面形態は皿状を呈する。規模は長軸0.71m、短軸0.47m、深さ12cmを測る。埋土は褐灰色土(10YR 5/1)の単一層である。遺物の出土はない。

時期：時期決定しうる遺物が乏しく、埋土がSD3に酷似することから、12世紀末から13世紀初頭とする。



第45図 SK2 測量図

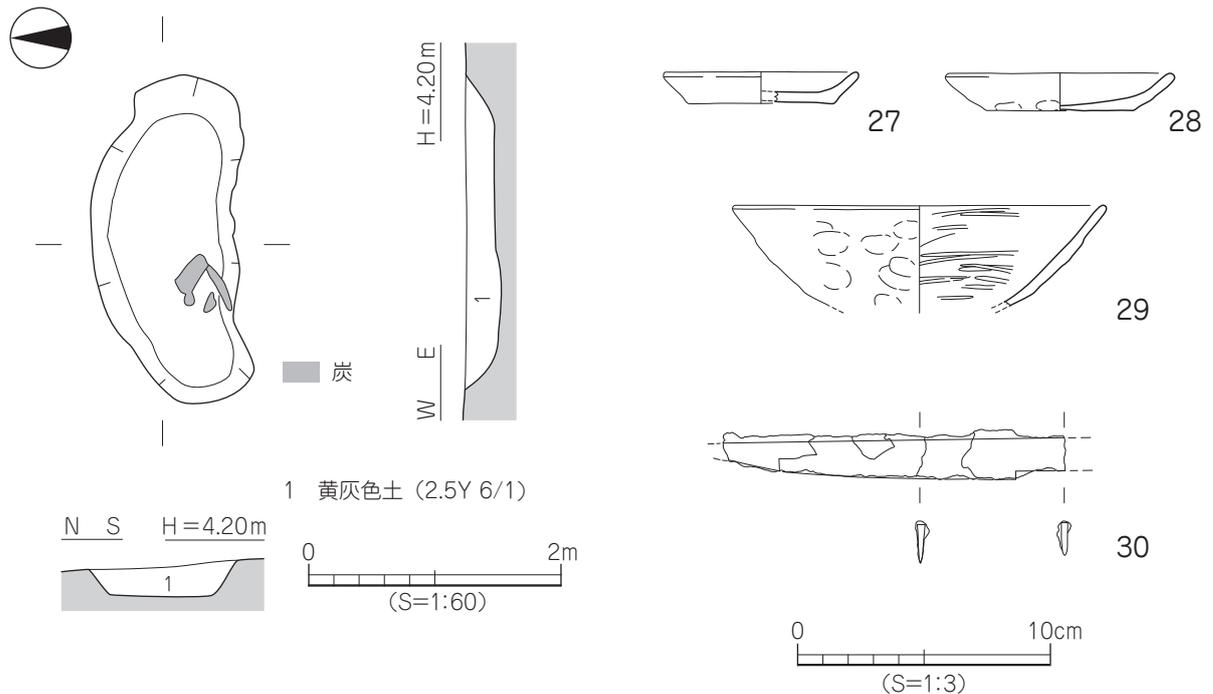
SK3 (第46図)

4区北側D3区に位置する。平面形態は楕円形、断面形態は逆台形状を呈する。規模は長軸2.58m、短軸1.14m、深さ24cmを測る。埋土は黄灰色土(2.5Y 6/1)の単一層である。基底面の西側の一部に炭化層が薄く貼り付く。遺物は土師器の小片が僅かに出土した。

出土遺物（第46図・図版11）

27・28は土師器皿である。27は平底の底部より外傾して立ち上がり、28は内傾して立ち上がる。共に底部に回転糸切り痕がある。29は瓦器椀で、内傾して立ち上がる胴部内面には螺旋状の暗文が施される。30は刀子で、刀身端と茎端部が欠失する。残存全長13.5cm、刀身部長11.6cm、最大幅1.9cm、厚さ0.5cmを測る（鉄製）。

時期：出土した土師器の特徴から、13世紀代前半とする。



第46図 SK3 測量図・出土遺物実測図

4. 井戸址

第Ⅲ①層上面において、井戸址1基を検出した。

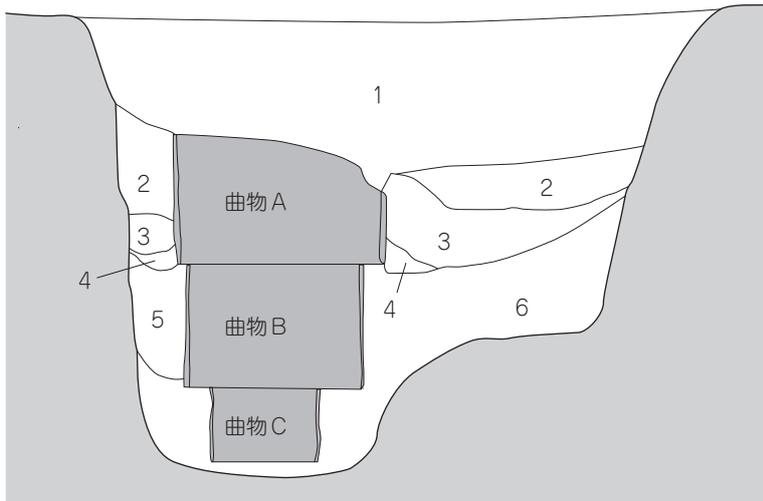
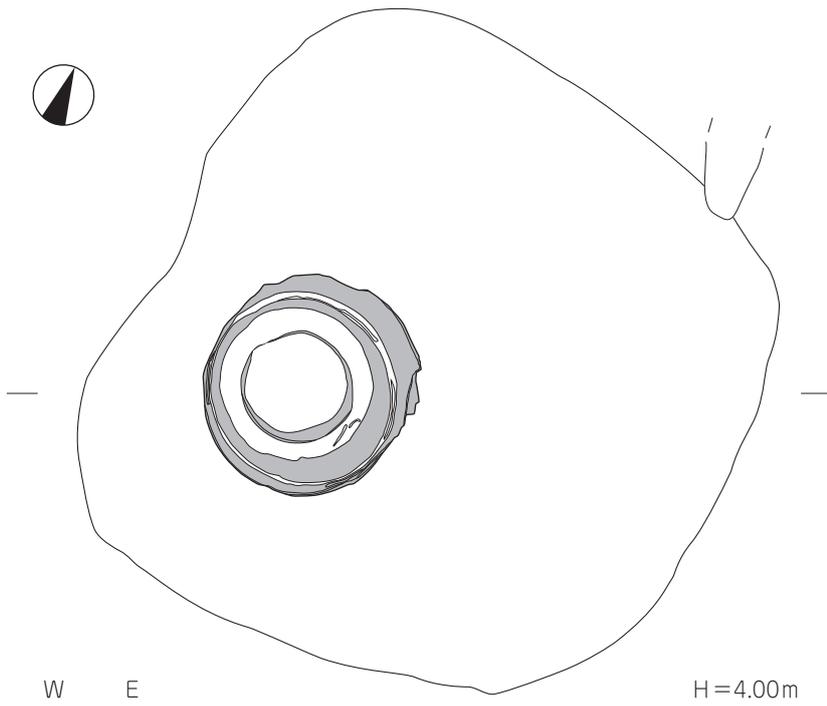
SE1（第47図・図版10）

4区中央部D4区に位置し、SD10を切る。平面形態は隅丸形状、断面形状は逆台形状を呈し、曲げ物の井戸枠を掘方の南東寄りに検出した。規模は、東西長1.63m、南北長1.71m、深さ1.2mを測る。埋土は上位が褐灰色土（10YR 6/1）、中位は緑灰色粘質土（5G 6/1）、下位は主に暗緑灰色砂質土（5G 4/1）と暗灰色粘質土（N 3/0）の混合層となる。曲げ物の板材は検出面下約50cmから基底面にかけて3段に積まれた状態で確認できた。板材の外径は上段が54cm、中段が48cm、下段が41cmを測る。遺物は掘方内から土師器の皿や須恵器、瓦質の甕などが出土した。

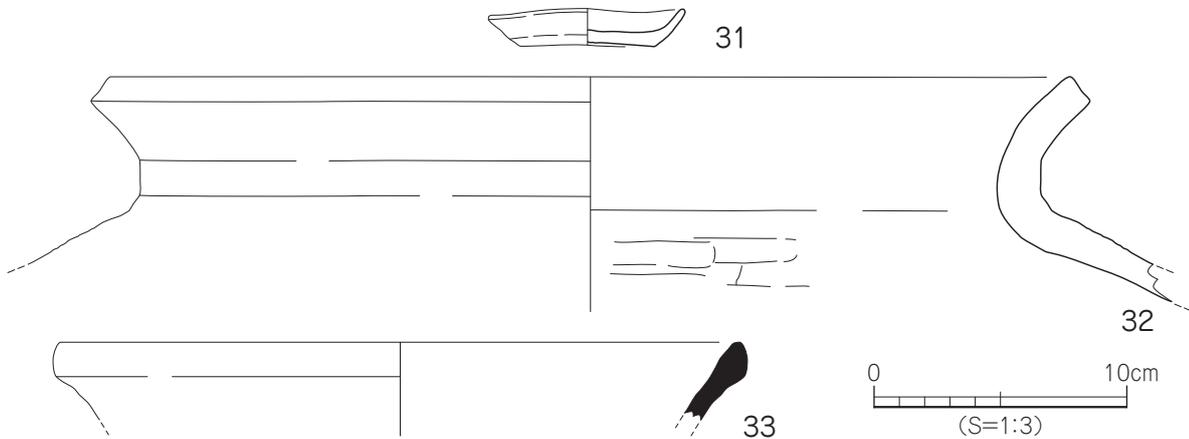
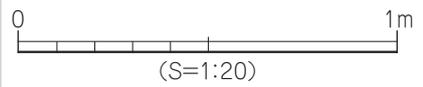
出土遺物（第47図・図版12）

31は土師器皿で、全体に大きく歪み、内外面に煤けがあり、底部は回転糸切り痕とすのこ痕がある。32は瓦質の甕で、外反する口縁部に端部は平らな面をなし、外面に格子タタキ調整が施される。33は須恵器のこね鉢で、断面三角形の口縁部をもち、内外面にナデ調整が施される。

時期：出土した須恵器の特徴から、13世紀代とする。



- 1 褐灰色土 (10YR 6/1)
- 2 黄灰色砂質土 (2.5Y 6/1)
- 3 緑灰色粘質土 (5G 6/1) と
暗灰色粘質土 (N 3/0) の混合層
- 4 明黄褐色粗砂 (2.5Y 7/6)
- 5 暗灰色粘質土 (N 3/0) に
暗緑灰色砂質土 (5G 4/1) が少量混
- 6 暗緑灰色砂質土 (5G 4/1) と
暗灰色粘質土 (N 3/0) の混合層



第 47 図 SE1 測量図・出土遺物実測図

5. 性格不明遺構

第Ⅲ①層上面において、性格不明遺構 3 基を検出した。

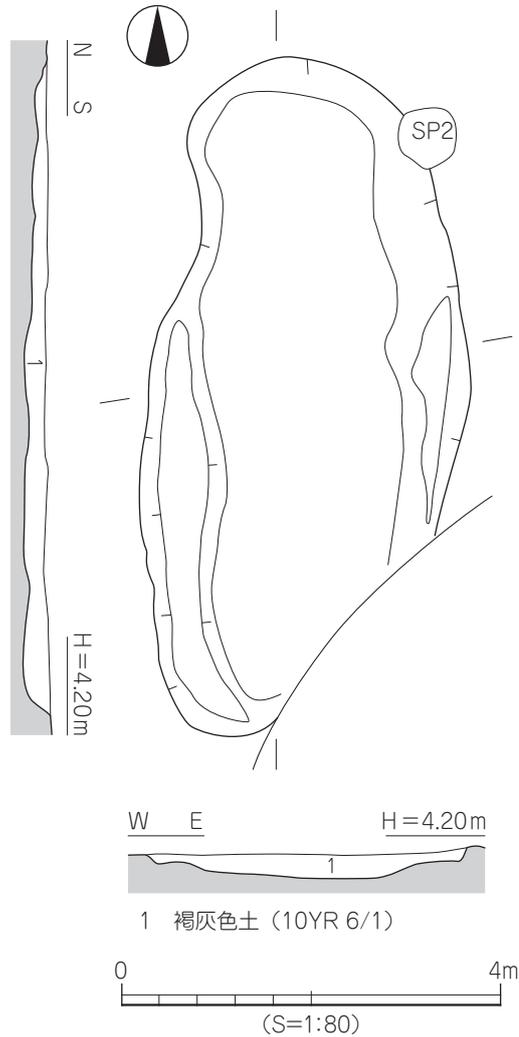
SX1 (第48図)

1区西南部E2～E3区に位置し、南端は調査区外に延びる。平面形態は不整楕円形、断面形態は逆台形状を呈し、西端に段をもつ。規模は長軸7.4m、短軸3.5m、深さ25cmを測る。埋土は褐灰色土(10YR 6/1)の単一層である。遺物は上位から基底面にかけて土師器、須恵器、瓦器片が比較的多く出土した。

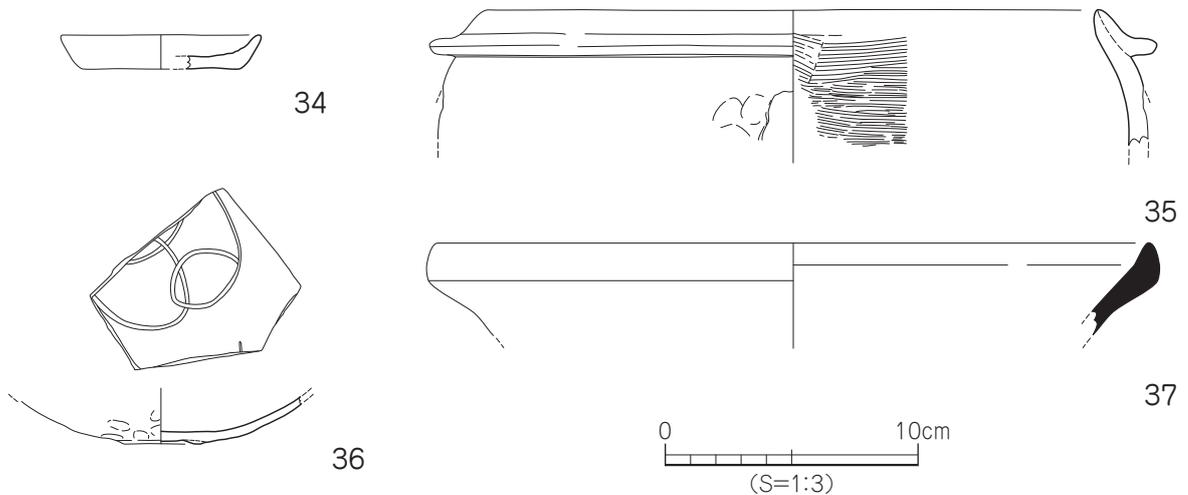
出土遺物 (第49図)

34は土師器皿で、平底の底部より直線的に立ち上がり、底部に回転糸切り痕がある。35は土釜で、口縁端部よりやや下方に下膨れの貼り付け凸帯の鐔をもち、内面にハケ目調整が施される。36は瓦器椀で、底部に形骸化した貼り付け高台をもち、内面に螺旋状の暗文をもつ。37は須恵器のこね鉢で、口縁端部は断面三角形状を呈する。

時期：出土した瓦器の特徴から、13世紀代中頃とする。



第48図 SX1 測量図



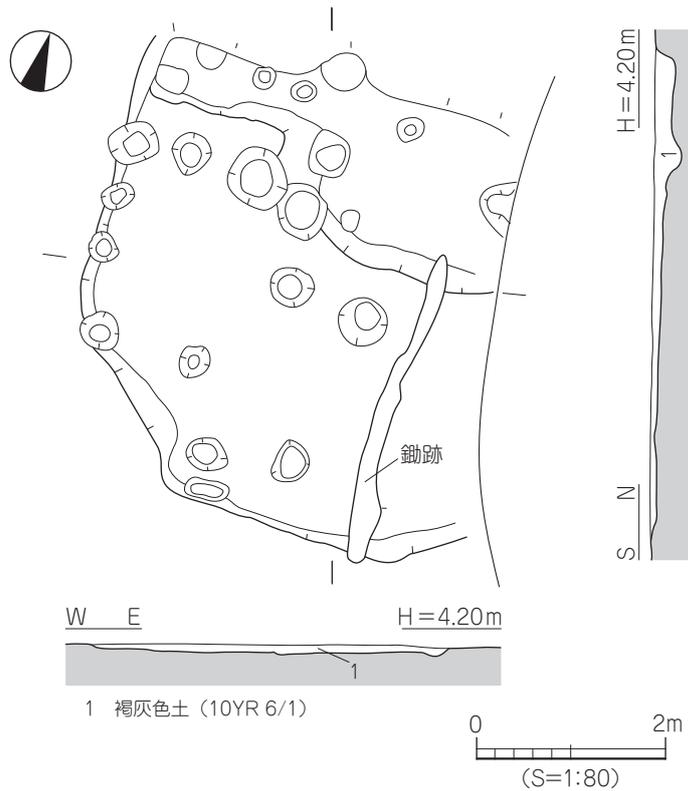
第49図 SX1 出土遺物実測図

SX2 (第50図)

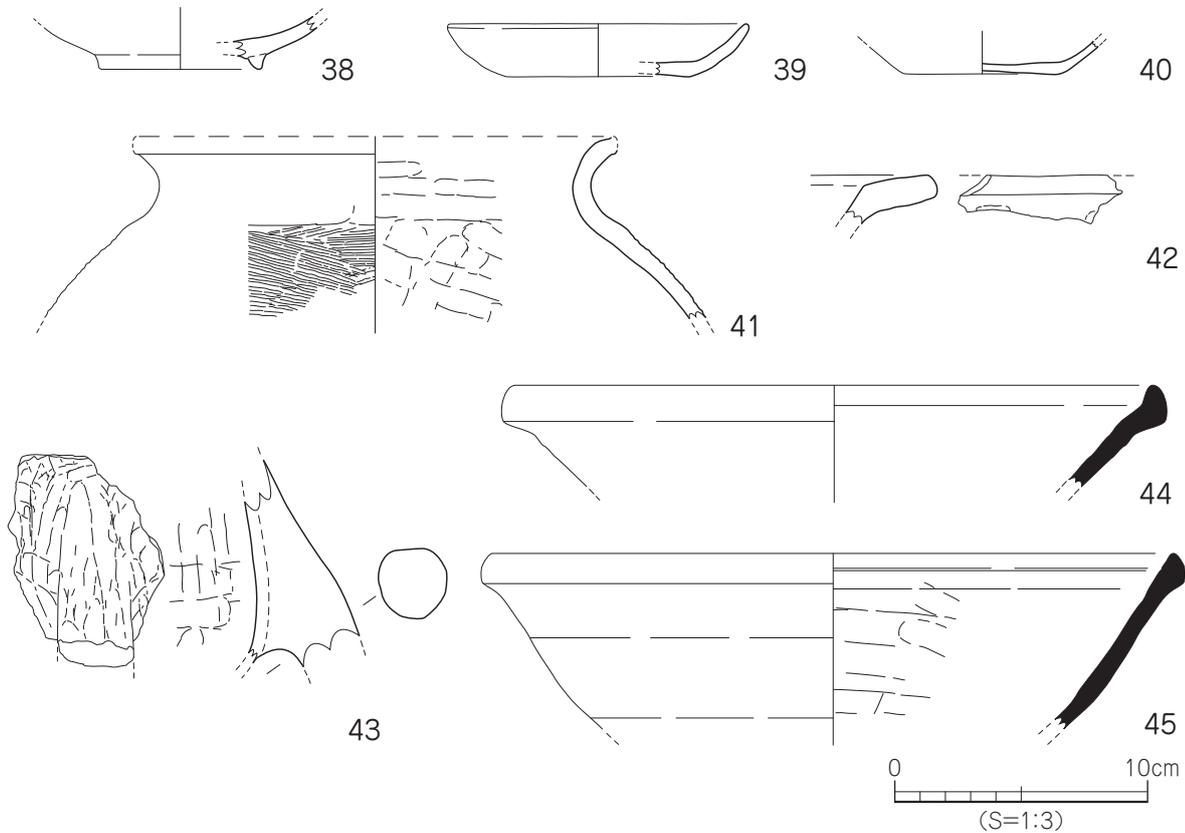
4区南東部C5～D6区に位置し、鋤跡に切られ東端は調査区外に延びる。平面形態は不整形形状、断面形態は皿状を呈し、北側は凹みをもつ。規模は東西4.3m、南北4.8m、深さ12cmを測る。埋土は褐灰色土(10YR 6/1)の単一層である。遺物は土師器、須恵器、瓦器片が少量出土した。

出土遺物 (第51図・図版12)

38は土師器椀で、底部に断面三角形の貼り付け高台をもつ。39・40は土師器皿で、平底の底部より、内傾して立ち上がり、39は底部内面が煤ける。39・40共に底部に回転糸切り痕がある。41は瓦質の甕で、内湾する上胴部外



第50図 SX2 測量図



第51図 SX2 出土遺物実測図

面には、平行タタキ調整が顕著に施される。42は土鍋で、「く」字状の口縁部に端部は平らな面をなす。43は土釜の脚部で、断面円形を呈する。44・45は須恵器のこね鉢である。44は口縁端部が断面三角形形状で上方に延び、45は口縁端部は、断面三角形形状を呈する。

時期：出土した須恵器の特徴から、13世紀代とする。

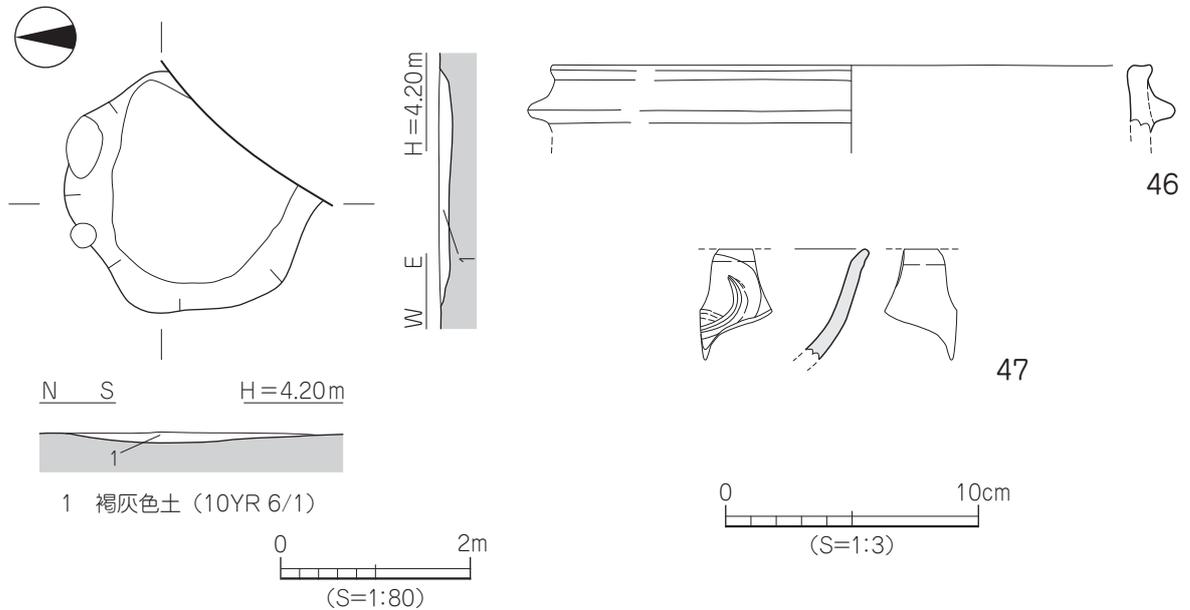
SX3（第52図）

4区東北部D4区に位置し、東端は調査区外に延びる。平面形態は楕円形状、断面形態は皿状を呈し、北側は凹みをもつ。規模は東西2.56m、南北2.65m以上、深さ12cmを測る。埋土は褐灰色土（10YR 6/1）の単一層である。遺物は土師器、磁器片が僅かに出土した。

出土遺物（第53図）

46は土師器の土釜で、口縁端部が平らな面をなし外方に肥厚され、下方に断面三角形の鑿がつき、内外面は横ナデ調整が施される。47は磁器碗で、内外面は施釉され、内面に草文様が施される。

時期：出土した土師器の特徴から、13世紀代とする。



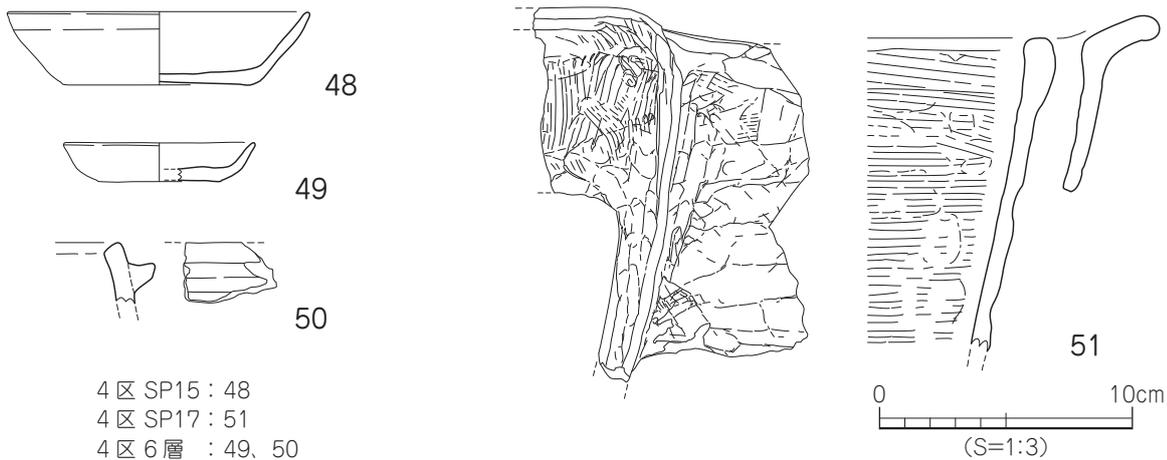
第52図 SX3測量図・出土遺物実測図

6. 柱 穴

31基の柱穴を検出した。平面形態は円形～楕円形を呈しており、規模は直径20～90cm、深さ2～31cmを測る。埋土は褐灰色土（10YR 5/1・10YR 6/1）で、柱穴内からは土師器、須恵器、瓦器の小片が出土した。

出土遺物（第53図・図版12）

48は土師器坏で平底の底部から内傾気味に立ち上がり、底部内面に黒斑、外面には回転糸切り痕がある。49は土師器皿で平底の底部から内傾気味に立ち上がり、底部外面に回転糸切り痕がある。50は土釜で、口縁端部よりやや下方に断面台形状の鑿がつく。51は置き竈で、前庇は頂部から折り曲げて側面へ延びる。内面と焚口は煤が付着し、内面はハケ目調整、外面は横ナデ調整が施される。



第 53 図 4 区柱穴・6 層出土遺物実測図

第 4 節 小 結

調査地周辺は旧重信川による氾濫原上にあり、遺構検出面である第Ⅲ①層は 1～3 区の東端から 4 区西端にかけて標高 4.2m から標高 3.9m と緩傾斜面上に遺跡は立地している。遺構検出面上層の中世の遺物を包含する第Ⅱ④層は 3 区を除いて安定して堆積しており、第Ⅲ①層と同様に調査地周辺にも中世集落の広がりが想定できるものである。

調査では掘立柱建物、溝、土坑、井戸、柱穴などを検出した。掘立柱建物は 2 間×1 間で柱穴も小径であることから小屋や倉庫などが考えられる。井戸は素掘りで 2 段掘り状を呈し、下部に曲物が伴う構造をもち、掘方は粘土層下の微砂層に最下段の曲物を据えて地下水を取水する構造である。東西や南北方向を指向する溝や鋤跡が多いことから、耕作地として機能していたと考えられ、溝 SD11 は規模や形状から基幹水路として、調査地近辺には耕作地が広がるのが想定される。

出土遺物は、第Ⅱ④層中や遺構内からは集落内で使用されていた土師器の坏や皿、土鍋、土釜、瓦器椀、須恵器のこね鉢、陶器の鉢などの遺物が出土した。土師器などの在地で生産されたものに加え、瓦器や須恵器、陶器など畿内や山陽地方で生産されたものが含まれており、調査地周辺の集落では流通品も使っていたことが分かった。

今回の調査により中世集落を検出したことは、余戸中ノ孝遺跡 1 次～3 次調査から約 270 m 西北部にも集落が広がることを示すものであり、沖積低地における集落構造を解明する上で貴重な資料である。

遺構一覧

遺構一覧・遺物観察表 - 凡例 -

以下の表は、本調査地検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。

(1) 遺構一覧表

- 地区欄 グリッド名を記載。
 規模欄 () : 現存検出長を示す。
 出土遺物欄 出土遺物の略記について
 土→土師器、須→須恵器、瓦→瓦器、陶→陶器、磁→磁器

(2) 遺物観察表

- 法量欄 () : 復元推定値
 調整欄 土器の各部位名称を略記した。 例) ㊦→底部
 胎土欄 胎土欄は混和剤を略記した。 例) 石→石英、長→長石、金→金ウンモ
 () 中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。
 例) 石・長 (1~4) → 「1~4mm大の石英・長石を含む」である。
 焼成欄 焼成欄の略記について ◎→良好、○→良

表 22 掘立柱建物一覧

掘立	規模 (間)	方向	桁行		梁行		床面積 (㎡)	時期	備考
			実長 (m)	柱間寸法 (m)	実長 (m)	柱間寸法 (m)			
1	2 × 1	南北	3.41	1.61~1.84	2.25	2.23~2.49	7.67	13世紀代	

表 23 溝一覧

溝 (SD)	区	地区	断面形	規模 長さ×幅×深さ (m)	埋土	出土遺物	時期
1	2	F9~G9	皿状	6.32 × 2.46 ~ 2.74 × 0.15 ~ 0.21	明緑灰色土 (5G7/1)	土・瓦 陶・磁	江戸時代後期
2	2	E7~E8	レンズ状	4.75 × 1.18 ~ 1.27 × 0.04 ~ 0.07	灰オリーブ色土 (5Y6/2)	土・瓦	13世紀代
3	1	E2~G2	レンズ状	12.8 × 1.48 ~ 1.72 × 0.08 ~ 0.12	褐灰色土 (10YR6/1)	土・須 陶・磁	13世紀代
4	1	F2~G2	皿状	8.52 × 0.48 ~ 0.82 × 0.08 ~ 0.12	褐灰色土 (10YR6/1)	須	13世紀代
5	4	C5~C6	逆台形状	1.73 × 0.39 ~ 0.42 × 0.06 ~ 0.09	褐灰色土 (10YR6/1)	土・陶	13世紀代
6	4	C3~C5	レンズ状	9.88 × 1.32 ~ 1.62 × 0.16 ~ 0.20	褐灰色土 (10YR6/1)	土・須	13世紀代
7	4	C3~C4	皿状	5.92 × 0.16 ~ 0.48 × 0.01 ~ 0.03	褐灰色土 (10YR6/1)	土	13世紀代
8	4	C3~C4	逆台形状	4.88 × 0.18 ~ 0.52 × 0.01 ~ 0.05	褐灰色土 (10YR6/1)	なし	13世紀代
9	4	B5~C5	レンズ状	1.78 × 1.10 ~ 1.18 × 0.03 ~ 0.07	黄灰色土 (2.5Y6/1)	なし	13世紀代以前
10	4	D3~D4	逆台形状	8.38 × 0.42 ~ 1.08 × 0.03 ~ 0.07	褐灰色土 (10YR6/1)	土	13世紀代
11	4	A3~A4 B3~B4	レンズ状	5.64 × 1.34 ~ 1.48 × 0.25 ~ 0.36	褐灰色土 (10YR6/1)	土	13世紀代

表 24 土坑一覧

土坑 (SK)	区	地区	平面形	断面形	規模 長径×短径×深さ (m)	埋土	出土遺物	時期
1	2	F8	長方形	逆台形状	0.82 × 0.46 × 0.14	淡黄色粘質土 (2.5Y8/3)	土	近世以降
2	2	E7	楕円形	皿状	0.71 × 0.47 × 0.12	褐灰色土 (10YR5/1)	なし	13世紀代
3	4	D3	楕円形	逆台形状	2.58 × 1.14 × 0.24	黄灰色土 (2.5Y6/1)	土	13世紀代以前

表 25 井戸址一覧

井戸 (SE)	区	地区	平面形	断面形	規模 長径×短径×深さ (m)	埋土	出土遺物	時期
1	4	D4	隅丸方	逆台形状	1.71 × 1.63 × 1.20	褐灰色土 (10YR 6/1) 明黄褐色粗砂 (25Y 7/6)	土・須・瓦	13世紀代

表 26 性格不明遺構一覧

性格不明遺構 (SX)	区	地区	平面形	断面形	規模 長径×短径×深さ (m)	埋土	出土遺物	時期
1	1	E2~E3	不整楕円形	逆台形状	7.40 × 3.50 × 0.25	褐灰色土 (10YR 6/1)	土・須・瓦	13世紀代
2	4	C5~D6	不整方形	皿状	4.80 × 4.30 × 0.12	褐灰色土 (10YR 6/1)	土・須・瓦	13世紀代
3	4	D4	楕円形	皿状	2.65 × 2.56 × 0.12	褐灰色土 (10YR 6/1)	土・磁	13世紀代

余戸中ノ孝遺跡4次調査

表 27 SD1 出土遺物観察表 (土製品)

番号	器種	量法 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
1	焙烙	残高 3.9	口縁部は水平方向に延び端部はやや肥厚される。	ナデ (指頭痕)	ヨコナデ	灰黄色 灰白色	微砂粒 ◎		
2	焙烙	残高 1.6	口縁部は水平方向に延びる。端部は、やや肥厚される。(瓦質)	ヨコナデ	ヨコナデ	黒色 黒色	微砂粒 ◎		
3	播鉢	残高 4.9	内面の播目は、条痕8条1単位として施される。(陶器)	ナデ	播目	灰白・橙色 灰白・橙色	石・長 (1~2) ◎		11
4	鉢	残高 4.7	上胴部は内湾し、口縁端部は内側に折り曲げられる。(陶器)	回転ナデ	回転ナデ (釉なし)	青灰色 にぶい褐色	密 ◎	施釉	
5	碗	口径 (11.8) 残高 3.5	内面口縁部に圈線、外面に染付山水文が施される。砥部焼(磁器)	回転ナデ	回転ナデ	呉須 釉薬	密 ◎	施釉	
6	紅皿	底径 (1.4) 残高 0.6	底部に高台をもち、胴部外面には放射線状の櫛描文が施される。(磁器)	回転ナデ	回転ナデ	白色 白色	密 ◎		

表 28 SD2 出土遺物観察表 (土製品)

番号	器種	量法 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
7	甕	残高 5.3	外面胴部に格子タタキ調整が施される。亀山焼 (瓦質)	タタキ	ナデ	灰色 灰色	石・長 (1~2) ◎		

表 29 SD3 出土遺物観察表 (土製品)

番号	器種	量法 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
8	鍋	残高 3.9	「く」字状の口縁部はやや内傾する。	ナデ	ナデ	黒色 浅黄橙色	石・長 (1~2) 金 ◎	煤附着	
9	こね鉢	口径 (31.2) 残高 4.9	断面三角形の口縁端部が上方に延びる。(須恵器)	回転ナデ	回転ナデ	灰・灰白色 浅黄色	密 ◎		
10	碗	口径 (18.6) 残高 2.7	内外面は施釉され、口縁内面に二重の圈線が巡る。(磁器)	回転ナデ	回転ナデ	灰オリーブ色 灰オリーブ色	密 ◎	施釉	

表 30 SD4 出土遺物観察表 (土製品)

番号	器種	量法 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
11	こね鉢	口径 (33.4) 残高 4.4	断面三角形の口縁端部がやや上方に延びる。(須恵器)	回転ナデ	回転ナデ	黒・灰色 灰色	砂粒 ◎		

表 31 SD5 出土遺物観察表 (土製品)

番号	器種	量法 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
12	土釜	口径 (24.2) 残高 5.5	口縁端部に断面三角形の貼り付け凸帯をもつ。	ナデ (指頭痕)	ハケ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	砂粒 赤色酸化土粒 ◎	煤附着	11
13	土釜	口径 (27.4) 残高 4.1	口縁端部より下方に断面台形状に延びる貼り付け凸帯をもつ。	ナデ	ナデ	にぶい褐色 にぶい褐色	石・長 (1~2) ◎	煤附着	
14	土釜	残高 11.3	断面円形状の脚部。	ナデ	—	にぶい褐色 黒褐色	石・長 (1~4) ◎		
15	皿	底径 (5.0) 残高 0.7	底部内面は施釉。外面は底部回転糸切り痕で、墨書文字「金」?あり。(陶器)	ナデ ◎回転糸切り	ナデ	灰白色 浅黄色	密 ◎	施釉	

表 32 SD6 出土遺物観察表 (土製品)

番号	器種	量法 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
16	坏	口径 (12.0) 底径 (8.6) 器高 2.9	平底の底部より内傾して立ち上る。	回転ナデ ◎回転糸切り	回転ナデ	灰白色 灰白色	長 (1) ◎		
17	皿	口径 (8.4) 底径 (6.4) 器高 1.2	内傾して立ち上り、底部付近に稜をもつ。	回転ナデ ◎回転糸切り	回転ナデ	明赤灰色 明赤灰色	砂粒 ◎		

(1)

遺物観察表

SD6 出土遺物観察表 (土製品)

(2)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面 内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
18	皿	口径 7.6 器高 1.4 底径 5.3	内傾して立ち上がり、底部付近に稜をもつ。	ヨコナデ ㊟回転糸切り →すのこ痕	ヨコナデ→ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎		11
19	甕	残高 6.0	内湾する胴部に外反する口縁部をもつ。(瓦質)	タタキ→ ヨコナデ	ナデ	黒色 黒色	石・長 (1~2) 赤色酸化土粒 ◎		
20	こね鉢	口径 (30.8) 残高 3.3	断面三角形状を呈する口縁端部をもつ。(須恵器)	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		

表 33 SD7 出土遺物観察表 (土製品)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面 内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
21	坏	口径 (10.2) 底径 (7.2) 器高 2.9	内傾して立ち上がる。	回転ナデ ㊟回転糸切り	回転ナデ	灰白色 灰白色	砂粒 ◎		

表 34 SD10 出土遺物観察表 (土製品)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面 内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
22	土釜	口径 (26.4) 残高 3.7	口縁端部は内傾した面をなし口縁部に断面三角形状の鐙が貼り付く。	ナデ→ハケ	ハケ (8本/cm)	黒褐色 にぶい黄褐色	密 ◎	煤付着	11

表 35 SD11 出土遺物観察表 (土製品)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面 内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
23	坏	口径 11.0 底径 7.0 器高 2.8	平底の底部から内傾気味に立ち上がる内外面は煤ける。	ヨコナデ ㊟回転糸切り →すのこ痕	ヨコナデ→ナデ	黄灰色 にぶい黄褐色	密 ◎	煤付着	11
24	皿	口径 7.6 底径 5.6 器高 1.4	全体に歪みがある。	回転ナデ ㊟回転糸切り	回転ナデ	灰白色 灰白・灰色	砂粒 ◎		11
25	土釜	口径 (20.2) 残高 4.1	口縁部に断面台形状の貼り付け凸帯の鐙をもつ。	ヨコナデ	ハケ (10本/cm)	橙色 にぶい橙色	石・長 (1~2) ◎		
26	土釜	口径 (25.4) 器高 4.8	口縁部に断面三角形状の貼り付け凸帯の鐙をもつ。	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ	赤黒・明赤褐色 黒色	石・長 (1~3) ◎		11

表 36 SK3 出土遺物観察表 (土製品)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面 内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
27	皿	口径 (7.6) 底径 (5.8) 器高 1.3	平底の底部より外傾して立ち上がる。	回転ナデ ㊟回転糸切り	マメツ	にぶい橙色 にぶい橙色	長 (1~3) ◎		
28	皿	口径 (8.8) 底径 (5.8) 器高 1.5	平底の底部より内傾して立ち上がる。	マメツ (指頭痕) ㊟回転糸切り	マメツ (指頭痕)	淡黄色 灰白色	砂粒 ◎		
29	椀	口径 (14.6) 器高 4.0	内傾して立ち上る胴部内面には螺旋状の暗文が施される。(瓦器)	ヨコナデ (指頭痕)	ミガキ (暗文)	灰白・灰色 灰白・灰色	密 ◎		

表 37 SK3 出土遺物観察表 (鉄製品)

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				残存長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
30	刀子	鋒・茎端欠損	鉄	13.5	1.9	0.5	25.53		11

表 38 SE1 出土遺物観察表 (土製品)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面 内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
31	皿	口径 (7.8) 底径 (5.4) 器高 1.5	全体に大きく歪み、内外面に煤けがある。	ヨコナデ ㊟回転糸切り →すのこ痕	ヨコナデ	浅黄褐色 灰白色	密 ◎	煤付着	
32	甕	口径 (37.8) 残高 9.0	外反する口縁部に端部は平らな面をなす。(瓦質)	格子タタキ →ナデ	ヨコナデ ナデ	灰白・黒色 黒色	密 ◎		12
33	こね鉢	口径 (26.8) 残高 3.1	断面三角形状の口縁部をもつ。(須恵器)	ナデ	ナデ	灰色 灰色	砂粒 ◎		

余戸中ノ孝遺跡4次調査

表 39 SX1 出土遺物観察表 (土製品)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図 版
				外面	内面				
34	皿	口径 (7.8) 底径 (6.2) 器高 1.3	平底の底部より直線的に立ち上がる。	回転ナデ ㊟回転糸切り	回転ナデ	明褐色 明褐色	砂粒 ◎		
35	土釜	口径 (24.2) 残高 5.4	口縁端部よりやや下方に下膨れの貼り付け凸帯の鏝をもつ。	ヨコナデ ナデ (指頭痕)	ハケ (7本/cm)	灰黄褐色 にぶい褐色	石・長 (1~2) ◎		
36	椀	底径 (3.0) 残高 1.9	底部に形骸化した貼り付け高台をもつ。(瓦器)	ナデ (指頭痕)	ナデ ミガキ (暗文)	灰白色 暗灰色	長 (1) ◎		
37	こね鉢	口径 (28.2) 器高 3.7	口縁端部は断面三角形。(須恵器)	ナデ	ナデ	灰色 灰色	砂粒 ◎		

表 40 SX2 出土遺物観察表 (土製品)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図 版
				外面	内面				
38	椀	底径 (6.2) 残高 2.1	底部に断面三角形の貼り付け高台をもつ。	ヨコナデ	マメツ	灰白色 淡黄色	密 ◎		
39	皿	口径 (11.6) 底径 (7.2) 器高 2.1	平底の底部より、内傾して立ち上がる。底部内面は煤ける。	マメツ ㊟回転糸切り	マメツ	灰白色 灰白色	石・長 (1~3) ◎	煤附着	
40	皿	底径 (6.0) 残高 1.3	底部内面は煤ける。	回転ナデ ㊟回転糸切り	回転ナデ	浅黄褐色 灰白・暗褐色	砂粒 ◎	煤附着	
41	甕	口径 (18.8) 残高 7.1	内湾する上胴部外面には、平行タタキ調整が顕著に施される。(瓦質)	ヨコナデ タタキ	ヨコナデ ナデ	オリーブ黒色 黒褐色	石・長 (1~2) ◎		12
42	土鍋	残高 1.8	「く」字状の口縁部に端部は平らな面をなす。	ナデ (指頭痕)	ヨコナデ	灰黄褐色 にぶい黄褐色	砂粒 ◎	煤附着	
43	土釜	残高 8.2	断面円形状の脚部。	ナデ	ナデ	黒色・黒褐色 黒色	石・長 (1~3) ◎		12
44	こね鉢	口径 (25.2) 残高 4.0	口縁端部は断面三角形で上方に延びる。(須恵器)	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	長 (1~3) ◎		
45	こね鉢	口径 (26.9) 残高 7.1	口縁端部は、断面三角形。(須恵器)	回転ナデ・ナデ	ヨコナデ 工具ナデ	灰色 灰色	密 ◎		12

表 41 SX3 出土遺物観察表 (土製品)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図 版
				外面	内面				
46	土釜	口径 (23.6) 残高 2.7	口縁端部が平らな面をなし外方に肥厚され、下方に断面三角形の鏝がつく。	ヨコナデ	ヨコナデ	黒色 黒色	石・長 (1~4) ◎		
47	碗	残高 4.4	内外面は施釉され、内面に草文様が施される。(青磁器)	ナデ	ナデ	オリーブ灰色 オリーブ灰色	密 ◎	施釉	

表 42 4区柱穴・6層出土遺物観察表 (土製品)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図 版
				外面	内面				
48	坏	口径 (11.8) 底径 7.3 器高 2.9	平底の底部から内傾気味に立ち上がり、底部内面に黒斑がある。	ヨコナデ・ナデ ㊟回転糸切り →ナデ	ヨコナデ・ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎	SP15 黒斑	12
49	皿	口径 (7.4) 底径 (5.0) 器高 1.6	平底の底部から内傾気味に立ち上がる。	回転ナデ ㊟回転糸切り	回転ナデ	浅黄褐色 浅黄褐色	砂粒 ◎	6層	
50	土釜	残高 2.4	口縁端部よりやや下方に断面台形状の鏝がつく。	ヨコナデ	ハケ	にぶい褐色 にぶい褐色	石・長 (1~5) ◎	6層 煤附着	
51	置き甕	長さ 14.9 最大幅 10.4	前底は頂部から折り曲げて側面へ延びる。内面と焚口は煤附着。	指ナデ・ハケ	ナデ→ ハケ (3本/cm)	にぶい褐色 褐色	石・長 (1~3) 金 ◎	SP17 煤附着	12

第6章 余戸中ノ孝遺跡5次調査

第1節 調査の経緯

余戸中ノ孝遺跡5次調査は、松山市余戸西一丁目1981番1、1982番2、1983番1、1983番6の各一部、余戸西二丁目2331番5・6を調査対象地とし、調査面積は約250㎡である。本調査は平成26年度に実施した余戸中ノ孝遺跡1・2次調査において検出した、鎌倉時代や室町時代の遺構面下に存在する遺跡を対象とした発掘調査である。なお、調査対象地は三箇所に分かれていることから、南西側を1区、北西側を2区、東側を3区として調査を実施した。以下、調査工程を略記する。調査期間は平成28年1月5日から同年2月29日である。

平成28年1月5日、3区の調査に着手する。重機を使用して、地表下2mの地点まで掘削を行う。1月6日、標高3.3mの地点にて遺構を検出する。その後、作業員による遺構検出作業を行い、竪穴建物と柱穴を確認する。1月12日、遺構の掘り下げと測量作業を開始する。1月26日、3区の調査を終了し、重機の使用により埋め戻し作業を行う。2月1日より、1区の調査に着手する。3区と同様、地表下2mの地点まで重機を使用して掘削を行う。2月4日、2区の調査を開始し、1区と同様、地表下2mの地点にて遺構を検出する。なお、1・2区は湧水が著しく、加えて調査壁の崩落などがあり、明確な遺構検出や写真撮影は困難を極めた。1・2区からは溝や柱穴を検出した。2月26日、測量作業を終了し完掘状況写真を撮影する。2月27日より、重機の使用による埋め戻し作業を行う。2月29日、発掘調査を終了する。

第2節 層位 (第55・56図、図版14)

調査地は、調査以前は雑種地であった。調査で確認した土層は、以下の16層である。なお、第2章で説明した基本層位のうち、本調査では第Ⅰ層から第Ⅵ層までを検出した。

第Ⅰ層：余戸中ノ孝遺跡1・2次調査を実施した際の埋め戻しに係る造成土や耕作土で、3種類に分層される。

第Ⅰ①層－埋め戻しに係る造成土で1・2区にみられ、層厚は15～80cmである。

第Ⅰ②層－バラスで、3区にみられ、層厚は35～50cmである。

第Ⅰ③層－耕作土〔オリーブ灰色土(5GY 5/1)〕で3区にみられ、層厚は18～80cmである。

第Ⅱ層：黄灰色土(2.5Y 6/1)で全調査区にみられ、層厚は8～50cmである。

第Ⅲ層：古代の堆積層、及び河川または自然流路に伴う堆積物で、土色・土質の違いにより7種類に分層される。

第Ⅲ①層－明黄褐色土(2.5 Y 7/6)で全調査区にみられ、層厚は12～40cmである。

第Ⅲ②層－オリーブ灰色砂質土(2.5GY 6/1)で1・2区にみられ、層厚は6～20cmである。

第Ⅲ③層－緑灰色粘質土(10GY 6/1)で1・2区にみられ、層厚は6～40cmである。

第Ⅲ④層－褐灰色土(10YR 6/1)で3区にみられ、層厚は8～12cmである。

第Ⅲ⑤層－灰黄褐色土(10YR 6/2)で3区にみられ、層厚は3～15cmである。

第Ⅲ⑥層－浅黄色土 (2.5Y 7/4) で3区にみられ、層厚は5～30cmである。

第Ⅲ⑦層－明青灰色粘質微砂 (5B 7/1) で3区にみられ、層厚15～20cmである。

第Ⅲ⑧層－明緑灰色粘質微砂 (10GY 7/1) で3区にみられ、層厚は18～32cmである。

第Ⅲ⑨層－灰褐色土(5YR 5/2)で全調査区にみられ、層厚は5～18cmである。本層中からは古代、平安時代に時期比定される土器片が少量出土した。

第Ⅳ層：暗灰色土 (N3/) で全調査区にみられ、層厚は10～40cmである。本層中からは、弥生土器片や古墳時代の土師器片、須恵器片が少量出土した。

第Ⅴ層：本層は便宜上、2層に分層した。

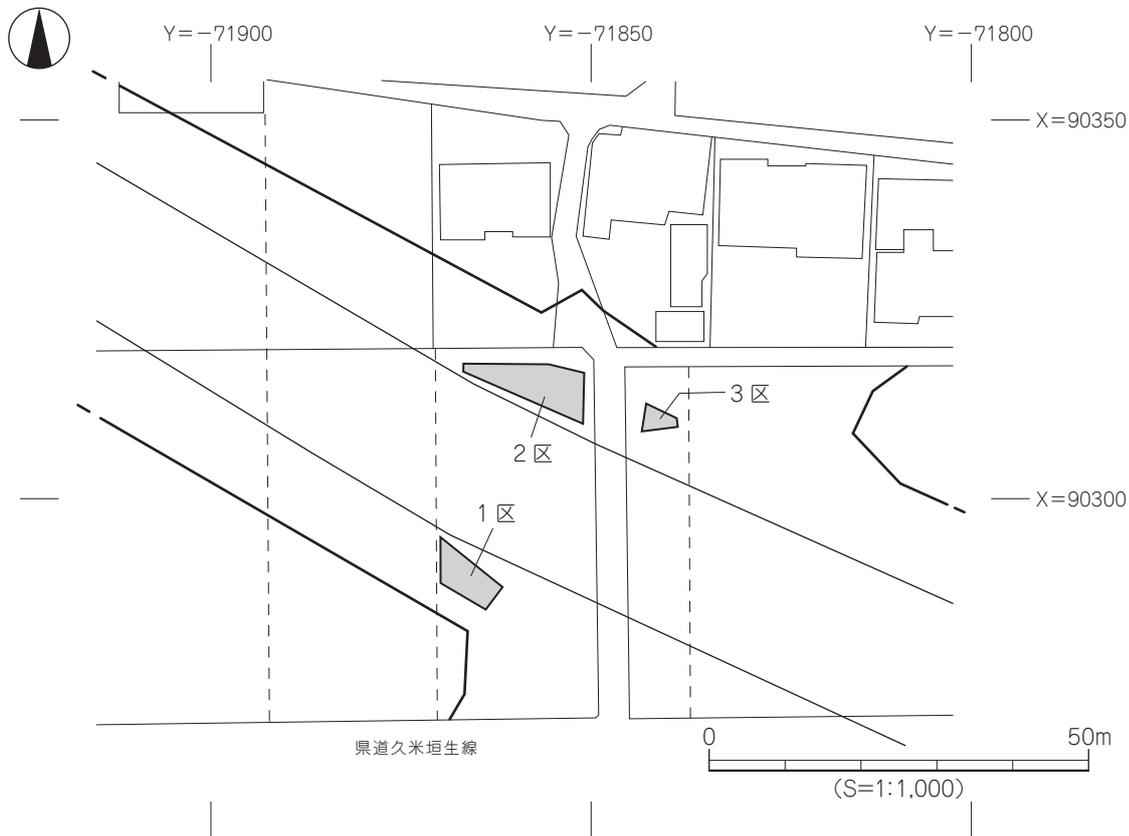
第Ⅴ①層－明黄褐色粘質土(2.5Y 6/8)で全調査区にみられ、層厚は8～10cmである。本層上面が、調査における最終遺構検出面である。なお、本層検出時には湧水が著しく、遺構の掘り下げや測量に長時間を費やした。

第Ⅴ②層－灰色の砂礫層 (5Y 6/1) で1区東半部にみられ、層厚は10cm以上である。本層中には、径3～5cm大の円礫を多く含んでいる。

なお、調査にあたり調査区内を5m四方のグリッドに分けた。グリッドは西から東へA・B・C……G、北から南へ1・2・3……7とし、A1・A2……G7区といったグリッド名を付した。

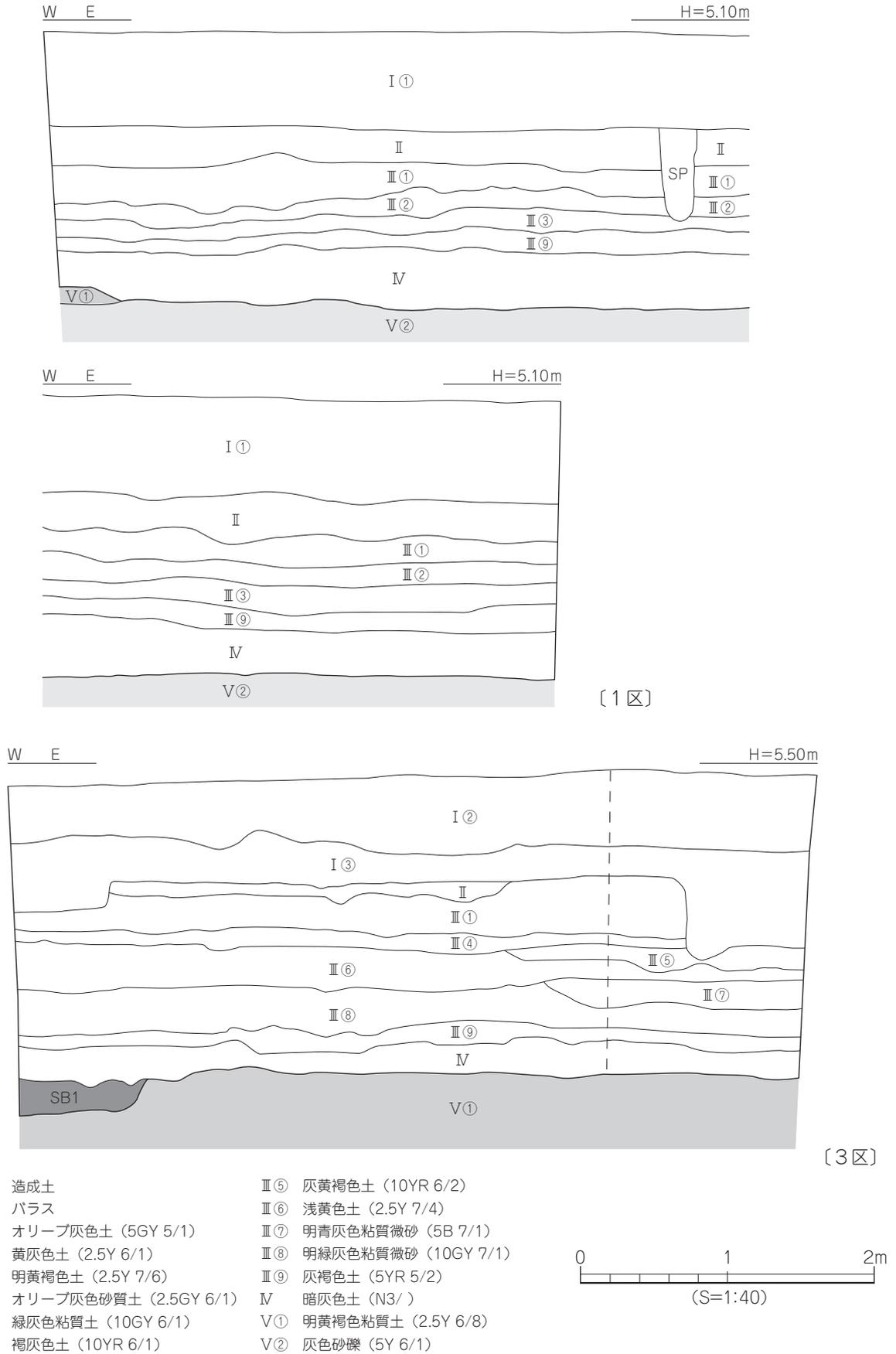
第3節 遺構と遺物 (第57・58図)

余戸中ノ孝遺跡5次調査では、竪穴建物1棟と溝1条、柱穴12基を検出した。遺物は土師器や須恵器のほか、石器が出土した。なお、遺物の出土量は収納箱(44×60×14cm)約4箱分である。ここでは、検出した遺構ごとに説明する。

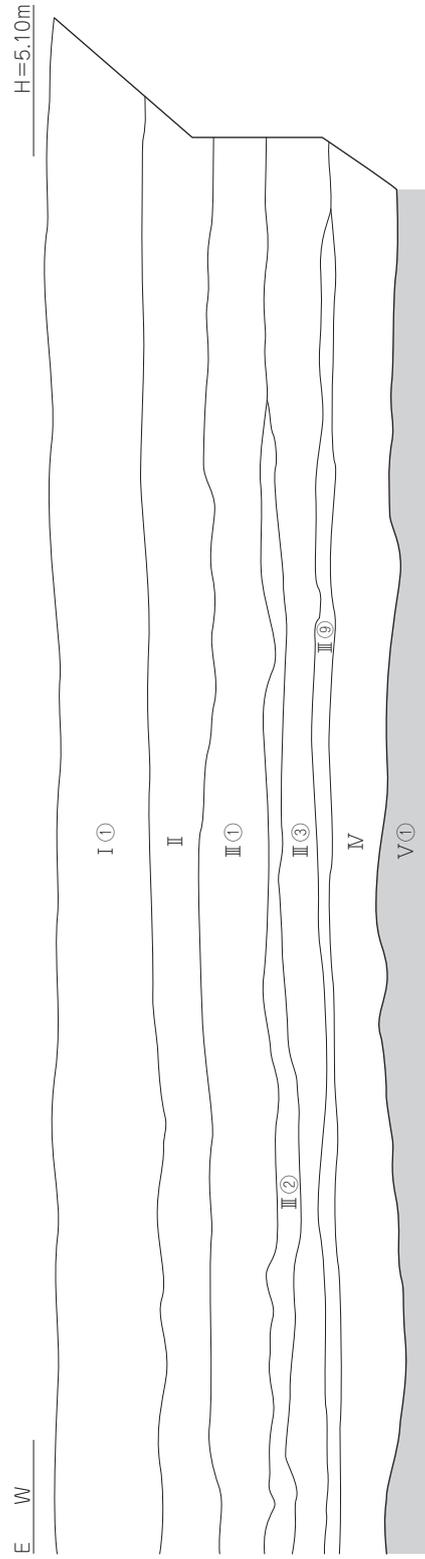
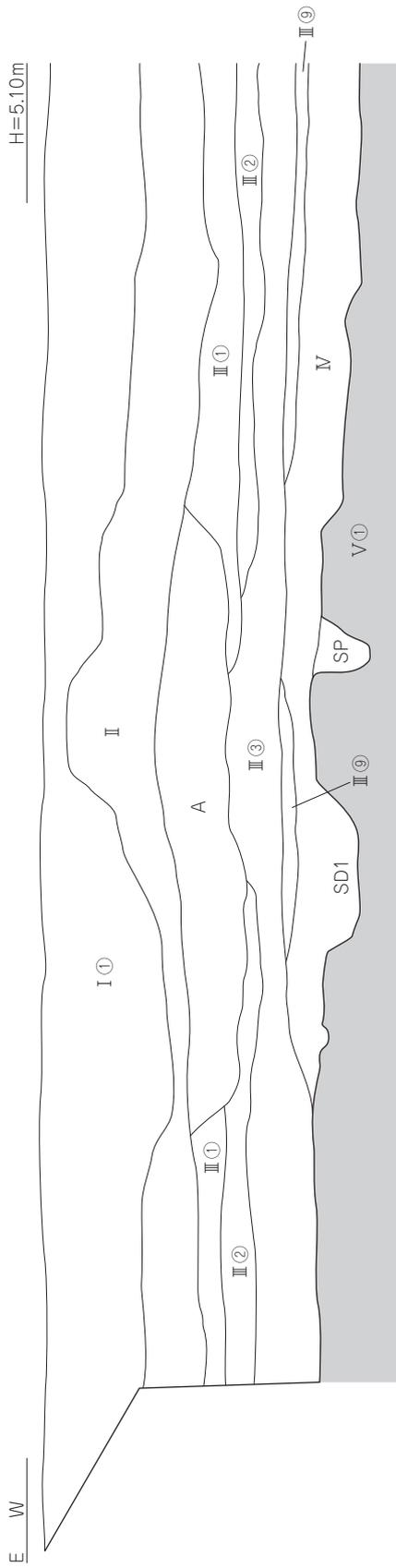


第54図 調査地位置図

遺構と遺物



第 55 図 1 区・3 区北壁土層図



- | | |
|-----------------------------|------------------------|
| I ① 造成土 | III ④ 灰褐色土 (5YR 5/2) |
| II 黄灰色土 (2.5Y 6/1) | IV 暗灰色土 (N3/1) |
| III ① 明黄褐色土 (2.5Y 7/6) | V ① 明黄褐色粘質土 (2.5Y 6/8) |
| III ② オリーブ灰色砂質土 (2.5GY 6/1) | A オリーブ黄色微砂 (5Y 6/4) に |
| III ③ 緑灰色粘質土 (10GY 6/1) | 暗褐色砂 (10YR 3/3) が混入 |



第56図 2区南壁土層図

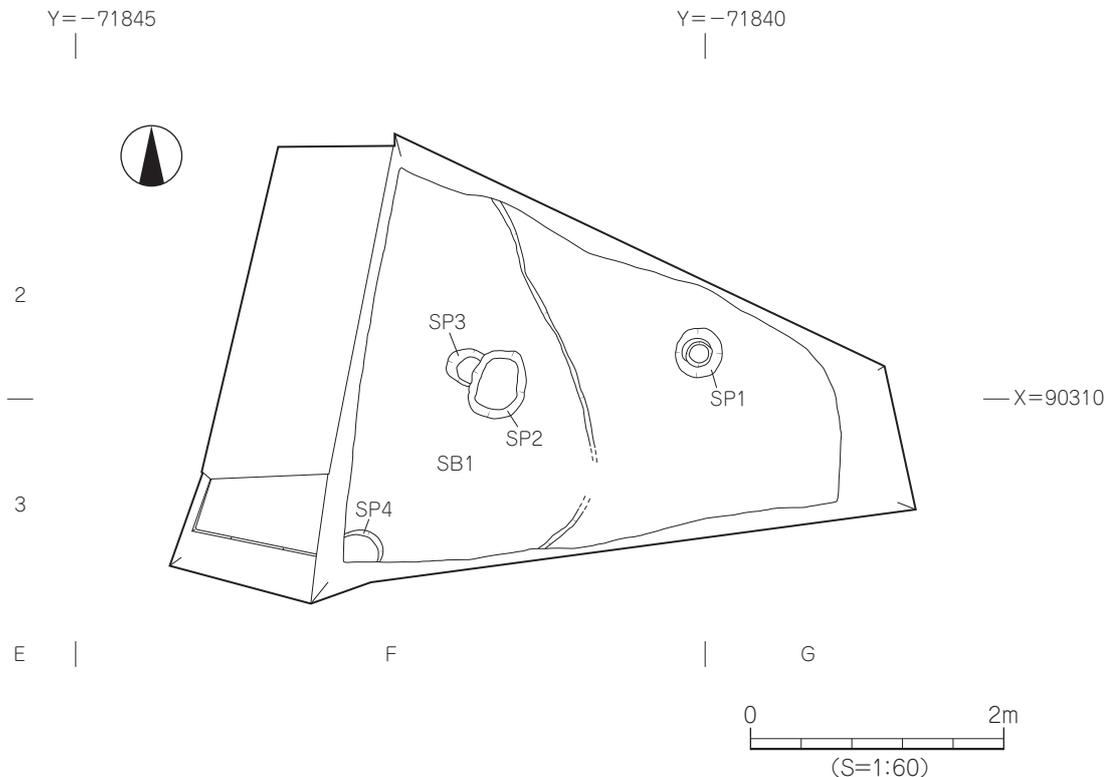
1. 竪穴建物

SB1 (第59図、図版14)

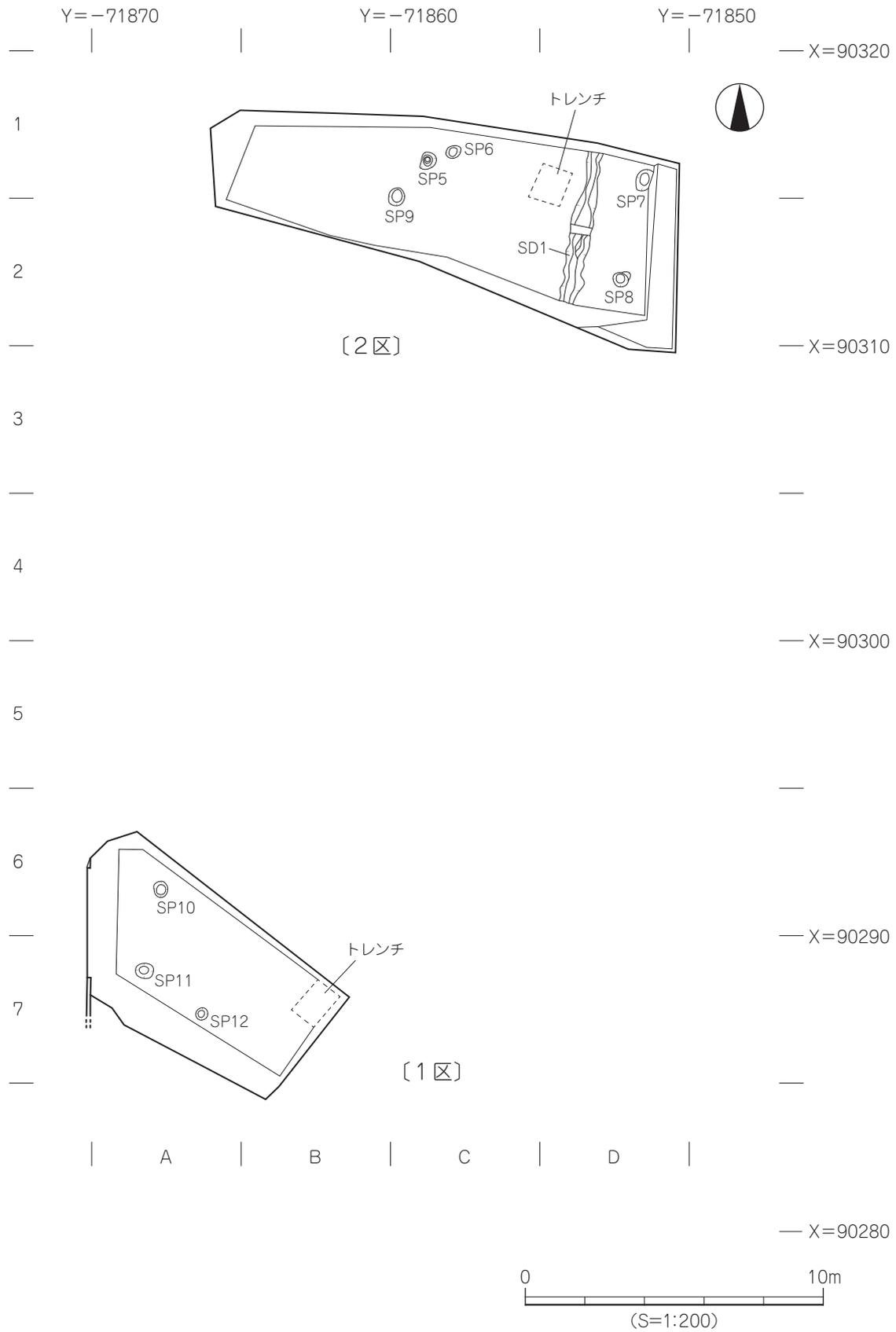
3区のF2・3区に位置する竪穴建物で、建物西半部は調査区外に続く。第V①層上面での検出であり、第IV層が覆う。平面形態は方形をなすものと思われ、規模は南北検出長3.18m、東西検出長1.92m、壁高は26cmである。建物の埋土は第IV層と同様の黒褐色土(5YR 2/1)単層である。建物床面に3基の柱穴(SP2～4)を検出した。柱穴掘り方埋土は、全て暗褐色土(7.5YR 3/3)に明黄褐色土(2.5Y 6/8)がブロック状に混入するものである。柱穴からは遺物の出土はなく、SB1に伴う遺構であるかは判断できなかった。遺物は埋土中より土師器高坏(坏部と脚部が離れた位置から出土したが、接合)や甕のほか須恵器片が比較的多く出土した。なお、出土した須恵器には伊予市市場南組窯址で制作されたと思われる壺や高坏などが含まれている。

出土遺物(第60・61図、図版15・16)

1～5は土師器。1・2は甕で、口縁部は外反し、1の口縁端部は内方へ肥厚する。1・2共に胴部外面はハケメ調整がみられ、内面には指頭痕が顕著に残る。3～5は高坏。3は坏部の完形品で、口縁部は外反し、口縁部内面には線刻が数条みられる。坏脚部の接合は、組み合わせ技法による。4は脚部の完形品で、脚裾部は内湾気味に開き、脚端部は「コ」字状に仕上げる。柱裾部境界の内面には、明瞭な稜をもち、柱部内面はヘラケズリが施されている。坏脚部の接合は、充填技法による。5はラッパ状に開く脚部片で、脚端部は上外方に短くのびる。内面には、板状工具によるナデを施す。6～18は須恵器。6～9は高坏。6・7は無蓋高坏の坏部片。口縁部は直立し、口縁端部は尖り気味に仕上げる。8・9は脚部片。8は柱部下位と脚端部に凸線が巡り、9の裾部は下外方へ屈曲し、端面はナデ凹



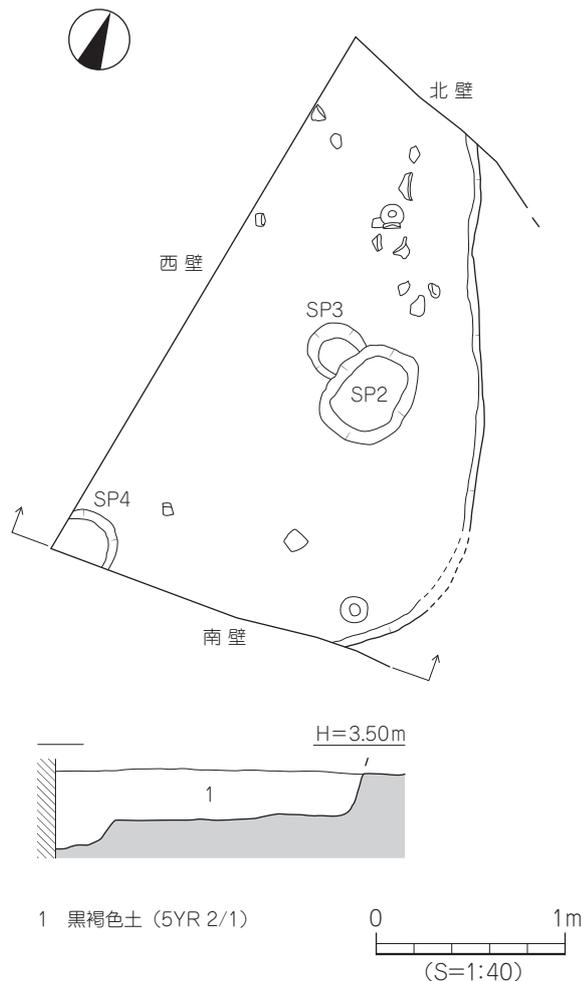
第57図 3区遺構配置図



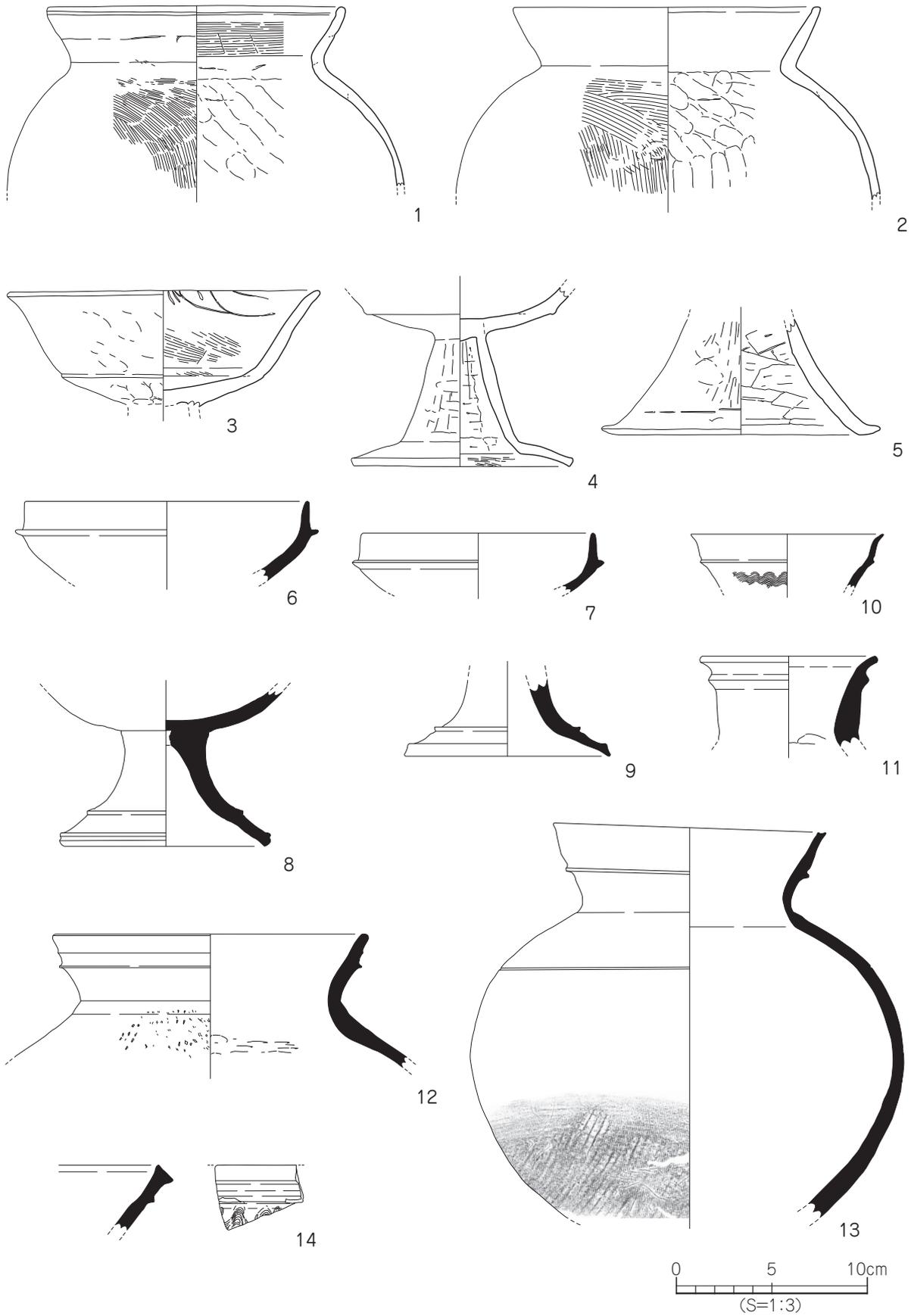
第58図 1区・2区遺構配置図

む。10～13は壺。10・11は直口壺で、10の頸部外面には波状文を施す。11の頸部には丸味のある断面三角形状の凸帯が巡り、口縁端部は丸く仕上げる。12・13は広口壺で、頸部中位に凸線が巡り、13の口縁端部はナデ凹む。12・13共に頸部と肩部の境界付近には僅かに段をもち、13の肩部には沈線1条が巡る。13の胴部下半部外面には格子目叩き後、ナデ調整を加える。14は高坏形器台の口縁部片で、頸部に断面三角形状の凸帯と波状文を施す。15・16は甑。15の口縁部は短く外反し、口縁端面には沈線1条が巡る。胴部外面には、格子目叩き後にハケメ調整がみられる。16は胴底部片で、底部には穿孔を2箇所に見守る。胴部外面には格子目叩き後にハケメ調整、内面は叩きがナデ消されている。17・18は甕。口縁部は外反し、17の頸部には丸味のある断面三角形状の凸帯を施す。口縁端部は、丸く仕上げる。18は大型品で、胴部外面には格子目叩きを施す。なお、6・8～11・14には自然釉が部分的に付着し、8・9・11には胎土中に黒色酸化土粒が多く含まれている。

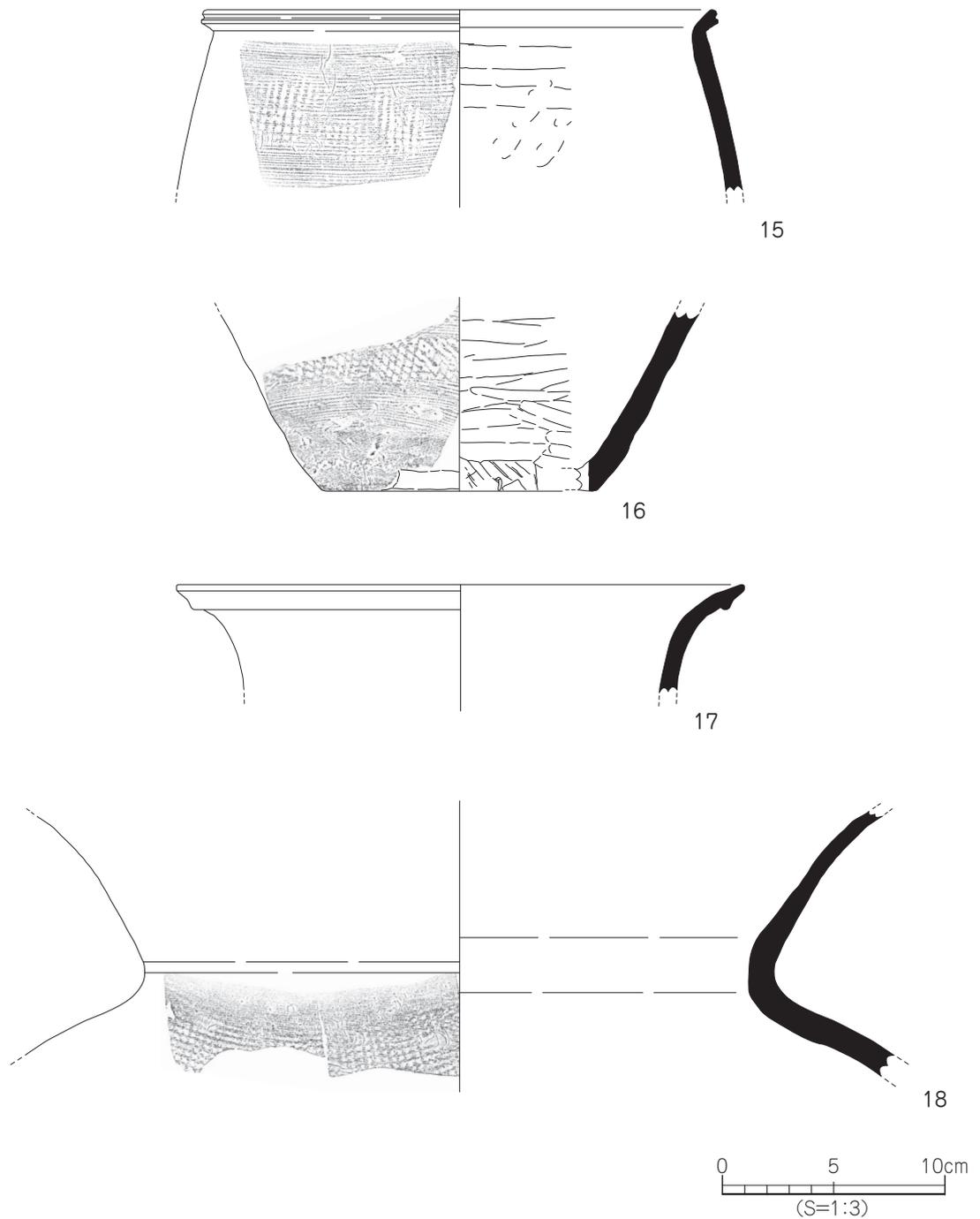
時期：出土遺物は陶邑編年 TK73 形式に相当することから、SB1 の廃棄・埋没時期は古墳時代中期前半、5世紀前半とする。



第 59 図 SB1 測量図



第60図 SB1 出土遺物実測図(1)



第 61 図 SB1 出土遺物実測図 (2)

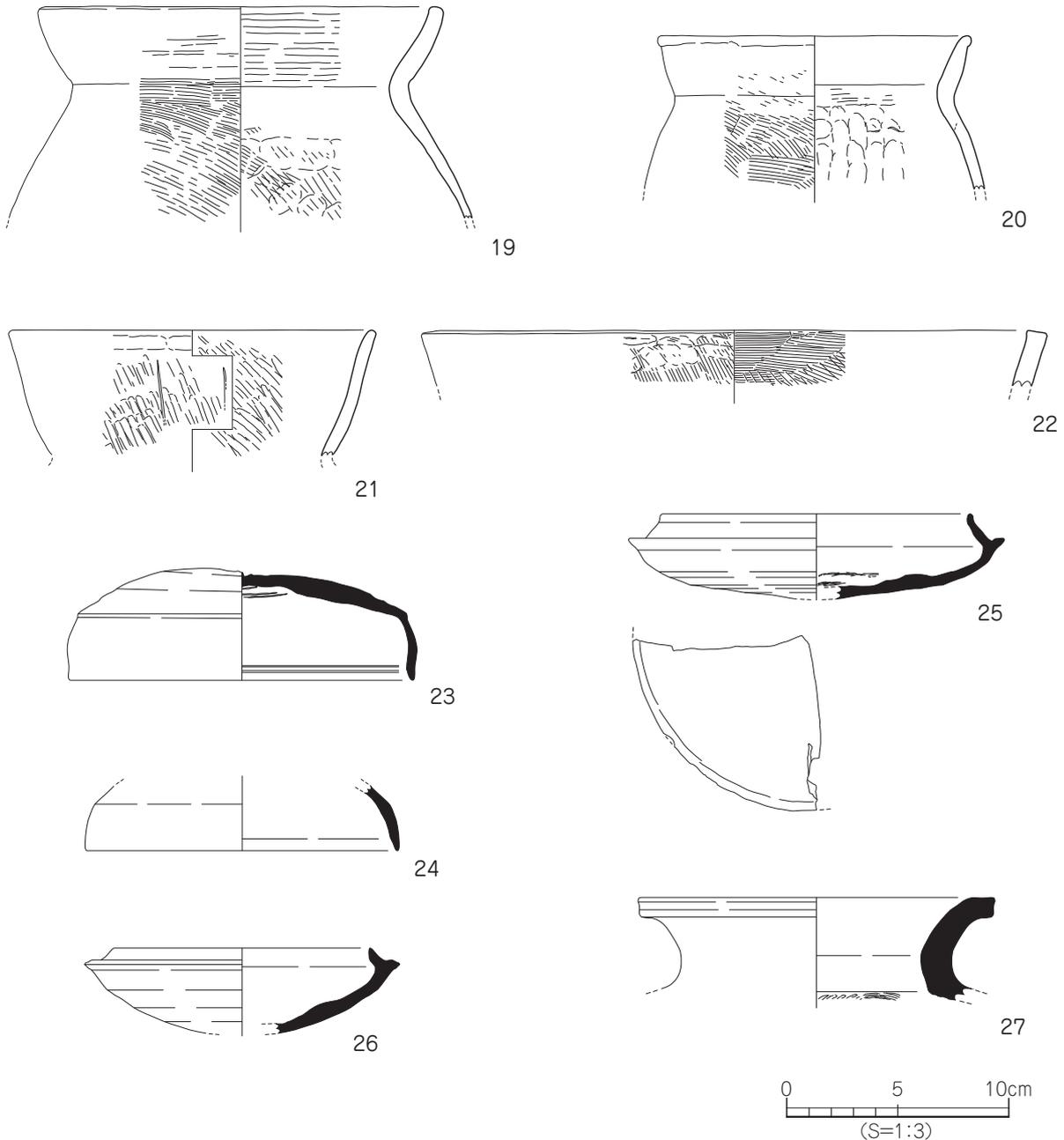
2. 溝

SD1

2区東側 D1・2区で検出した南北方向の溝で、溝上面は第IV層が覆う。規模は検出長 5.30m、幅 0.60～0.80m、深さは最深部で 22cmである。断面形態はレンズ状をなし、埋土は黒褐色土 (7.5YR 3/2) に明黄褐色土 (2.5Y 6/8) がブロック状に混入するものである。溝基底面は凹凸が著しく、北側から南側に向けて傾斜をなす (比高差 6cm)。溝からは、土師器や須恵器の破片が比較的多く出土した。

出土遺物 (第 62 図、図版 16)

19～22は土師器。19・20は甕で、口縁部は内湾し、口縁端部は丸く仕上げる。内外面共に、粗いハケメ調整がみられる。21は壺で、口縁部は僅かに内湾し、外面にはタテ方向の線刻が2条施されており、内外面共に丁寧なヘラミガキを施す。22は円筒埴輪の口縁部小片で、口縁端部は面取りされる。23～27は須恵器。23・24は坏蓋。23は断面三角形の丸味のある稜をもち、口縁端部は内傾する。24は小片で、口縁端部は尖り気味に仕上げる。25・26は坏身。25のたちあがりは低く内傾し、たちあがり端部は丸く仕上げる。底部外面には線刻があり、底部内面中央部は円弧叩きがみられ



第 62 図 SD1 出土遺物実測図

る。26のたちあがりは短く内傾し、たちあがり端部は尖る。27は広口壺で、口縁端面はナデ凹む。

時期：出土遺物には多少の時期幅が認められるが、24・26の特徴より古墳時代後期、6世紀後半とする。

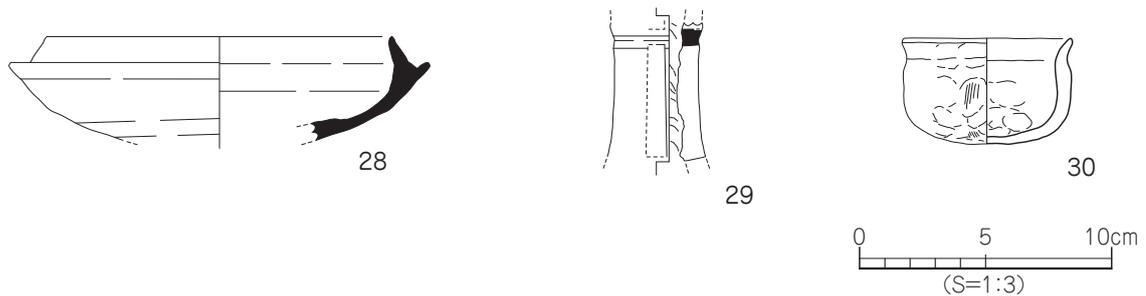
3. その他の遺構と遺物

(1) 柱 穴

調査では、12基の柱穴を検出した。内訳は1区では3基、2区は5基、3区は4基である。このうち、1区と2区で検出した8基の柱穴（SP5～12）は、掘り方埋土が全て黒褐色土（7.5YR 3/2）に明黄褐色土（2.5Y 6/8）がブロック状に混入するものである。なお、その他の柱穴（SP1～4）は暗褐色土（7.5YR 3/3）に明黄褐色土（2.5Y 6/8）がブロック状に混入するものである。SP5～12からは、土師器や須恵器の小片が数点出土した。

SP5 出土遺物（第63図、図版16）

28は須恵器坏身。たちあがりは低く内傾し、たちあがり端部は尖り気味に仕上げる。29は高坏の脚部小片。凹線1条と凹線の上下に台形状の透かしを看守する（3方向）。30はミニチュア土器。口縁部は短く外反し、底部は平底風である。体部内外面には、指頭痕が多くみられる。

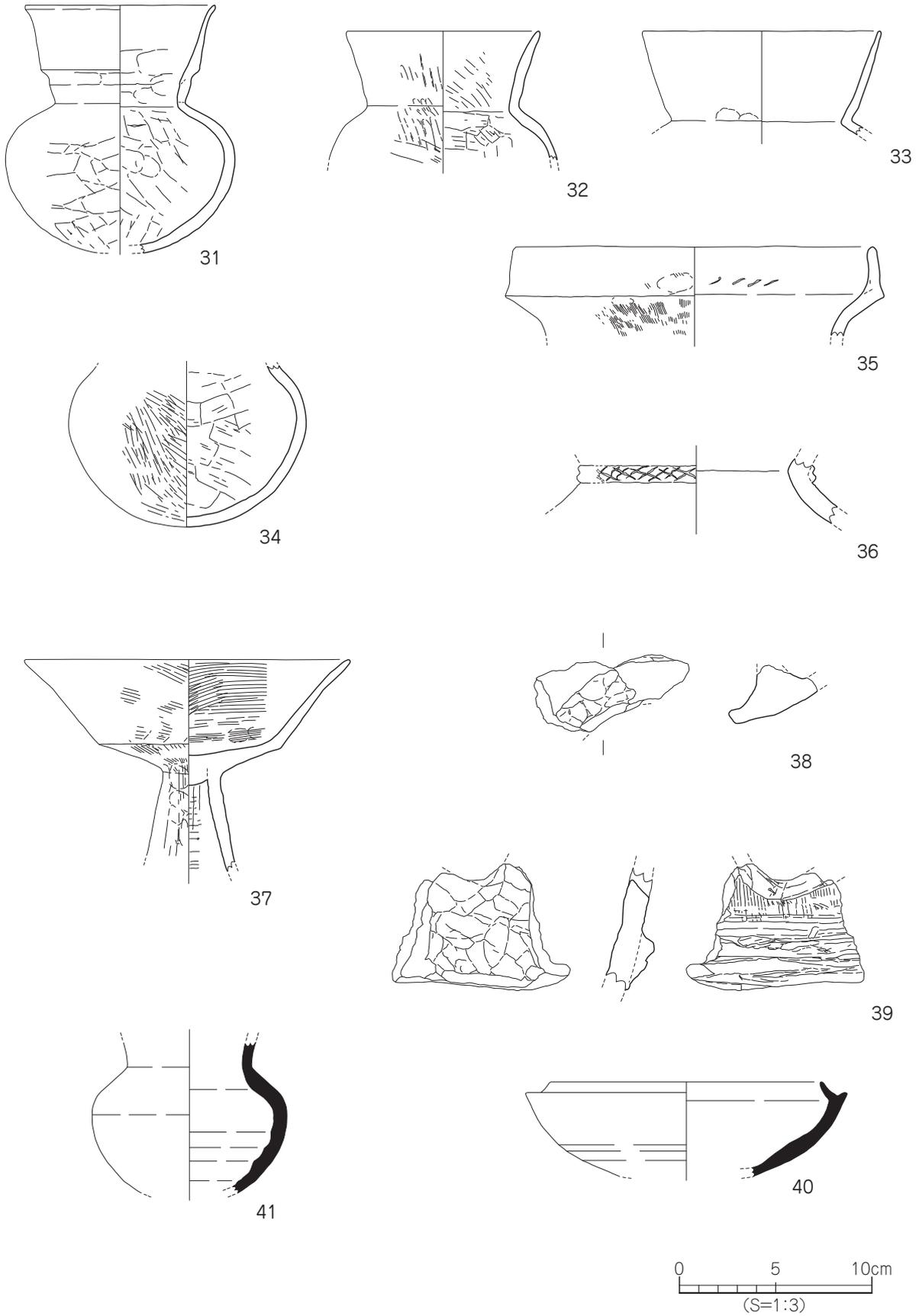


第63図 SP5 出土遺物実測図

(2) 包含層出土遺物

第IV層出土遺物（第64図、図版17）

31～34は土師器の壺。31は口縁部が短く外反し、頸部に段をもつ。胴部は扁球形をなし、外面には手持ちのヘラケズリを施す。32の口縁部は外反し、外面にはタテ方向のミガキ調整がみられる。33の頸部は内湾気味に立ち上がり、口縁端部は先細りする。34は胴底部片で、外面はハケメ、内面にはケズリ調整がみられる。35・36は弥生土器。35は後期の複合口縁壺で、口縁部内面には爪痕が残る。36は頸肩部片で、凸帯を貼り付け、凸帯上にはハケ状工具による斜格子目文を施す。37は土師器の高坏。口縁部は僅かに外反し、脚柱部は細く、中空となる。内外面にはハケメ調整がみられ、柱部内面はヘラケズリを施す。なお、31・32・34・37の胎土中には少量の角閃石が含まれている。38は移動式カマドの破片で、指頭痕が顕著に残る。39は土師質の円筒埴輪片で、断面「M」字状の凸帯を貼り付け、凸帯の上方に円孔を看守する。40・41は須恵器。40のたちあがりは低く内傾し、たちあがり端部は尖り気味に仕上げる。41は壺で、胴部は扁球形をなす。



第64図 包含層出土遺物実測図

第4節 小 結

余戸中ノ孝遺跡5次調査では、主に古墳時代の遺構や遺物を確認した。3区検出のSB1は古墳時代中期、5世紀前半の方形竪穴建物で、建物内からは完形品を含む比較的多くの土器が出土した。とりわけ、出土した須恵器には松山平野南部、伊予市市場南組窯址で制作された、いわゆる「市場系須恵器」が数多く出土している。この須恵器は松山市内の遺跡からは出土例が少なく、流通過程や土器編年を解明するうえで、貴重な資料といえよう。一方、2区からは古墳時代後期、6世紀後半の溝が検出されている。溝内には砂や礫などの堆積がみられず、水利に伴うものではなく、集落を区画する地割りの溝として機能していたものと推測される。調査地の南方にある余戸中ノ孝遺跡3次調査からは古墳時代の竪穴建物や溝などが多数検出されており、調査地を含む周辺一帯には古墳時代集落の存在が明らかになった。

遺構一覧・遺物観察表 - 凡例 -

以下の表は、本調査地検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。

(1) 遺構一覧表

- 地区欄 グリッド名を記載。
 規模欄 () は現存値を示す。
 出土遺物欄 遺物名称を略記した。
 例) 土→土師器、須→須恵器

(2) 遺物観察表

- 法量欄 () : 復元推定値
 調整欄 土器の各部位名称を略記した。
 例) 天→天井部、口→口縁部、た→たちあがり、坏→坏部、頸→頸部、体→体部、
 胴→胴部、柱→柱部、脚→脚部、裾→裾部、底→底部
 胎土欄 胎土欄は混和剤を略記した。
 例) 石→石英、長→長石、金→金ウンモ、赤→赤色酸化土粒、黒→黒色酸化土粒
 () の中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。
 例) 石・長 (1~2) → 「1~2mm大の石英・長石を含む」である。
 焼成欄 焼成欄の略記について
 ◎→良好

表 43 竪穴建物一覧

竪穴 (SB)	地区	平面形	規模 長径×短径×壁高 (m)	内部施設	埋土	出土遺物	時期	備考
1	F2・3	(方形)	(3.18) × (1.92) × 0.26	—	黒褐色土	土・須	5世紀前半	

表 44 溝一覧

溝 (SD)	地区	方向	断面形	規模 長さ×幅×深さ (m)	埋土	出土遺物	時期	備考
1	D1・2	南北	レンズ状	(5.30) × 0.80 × 0.22	黒褐色土 (明黄褐色土混)	土・須	6世紀後半	

表 45 SB1 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
1	甕	口径 15.2 残高 9.7	内湾口縁。口縁端部は内方へ肥厚。 口頸部内面に稜あり。	㊦ヨコナデ ㊧ハケ(6本/cm)	㊦ハケ →ヨコナデ ㊧ナデ(指頭痕)	灰褐色 灰褐色	石・長 (1) 金 ◎	黒斑	15
2	甕	口径 15.9 残高 10.1	内湾口縁。口縁端部は内方へ肥厚。 器壁は薄い。	㊦ヨコナデ ㊧ハケ(4本/cm)	㊦ヨコナデ ㊧ナデ(指頭痕)	暗褐色 暗褐色	石・長 (1~2) 金 ◎		15
3	高坏	口径 16.2 残高 6.1	坏部完形品。口縁部は外反し、内面に 線刻あり。組合技法。	ヨコナデ	ハケ(6本/cm) →ヨコナデ	灰黄色 灰黄色	石・長 (1) ◎	黒斑	15
4	高坏	底径 11.2 残高 9.4	脚部完形品。柱裾部内面には明瞭な 稜あり。脚端部は「コ」字状をなす。 充填技法。	ヨコナデ	㊧ヘラケズリ ㊦ハケ(6本/cm) →ナデ	灰黄色 灰黄色	石・長 (1) 赤 ◎		15
5	高坏	底径 (13.8) 残高 6.1	ラッパ状に開く脚部。脚端部は上外 方に短くのびる。1/3の残存。	ミガキ→ナデ	板状工具による ナデ	橙色 灰黄色	石・長 (1~3) 金 ◎		
6	高坏	口径 (14.6) 残高 4.2	無蓋高坏。口縁部は直立し、受部は 短く水平に伸びる。小片。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 灰色	密 ◎	自然釉	
7	高坏	口径 (11.8) 残高 3.1	無蓋高坏。口縁部は直立し、受部は 短く水平にのびる。小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
8	高坏	底径 10.4 残高 8.1	柱部下位と脚端部に凸線が巡る。 1/2の残存。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密黒 ◎	自然釉	15
9	高坏	底径 10.6 残高 4.0	柱部下位に凸線1条が巡り、脚端面 はナデ凹む。1/4の残存。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密黒 ◎	自然釉	
10	壺	口径 (10.0) 残高 2.8	口頸部境に凸線が巡り、頸部に波状 文あり。小片。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 灰色	密 ◎	自然釉	
11	壺	口径 (9.0) 残高 4.7	頸部に断面三角形の凸帯が巡り、 口縁端部は丸く仕上げる。1/2の残 存。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密黒 ◎	自然釉	15
12	壺	口径 (16.4) 残高 7.0	広口壺。頸部に凸線が巡り、口縁端 部は丸く仕上げる。1/4の残存。	㊦回転ナデ ㊧叩き →回転ナデ	㊦回転ナデ ㊧叩き →回転ナデ	青灰色 青灰色	石 (1) ◎		15
13	壺	口径 14.1 残高 20.7	広口壺。頸部に凸線、肩部には沈線 1条が巡り、頸肩部の境界には僅か に段をもつ。	㊦回転ナデ ㊧格子目叩き →ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		15
14	器台	残高 3.4	高坏形器台。凸線1条と波状文あり。 小片。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 暗灰色	密 ◎	自然釉	15
15	甌	口径 (22.8) 残高 8.1	口縁部は短く外反し、口縁端面に沈 線1条が巡る。1/6の残存。	㊦回転ナデ ㊧格子目叩き →ハケメ	㊦回転ナデ ㊧叩き→ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎		16
16	甌	底径 (12.4) 残高 8.1	底部に穿孔2箇所を看取。小片。	格子目叩き →ハケメ	ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎		16
17	甕	口径 (25.3) 残高 4.8	外反口縁。口縁端部は丸く仕上げ、 頸部に丸味のある凸線1条が巡る。 小片。	㊦回転ナデ ㊧叩き →回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎		16
18	甕	残高 11.8	大型品。1/8の残存。	㊦回転ナデ ㊧格子目叩き	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		

遺物観察表

表 46 SD1 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
19	甕	口径 (18.0) 残高 9.5	内湾口縁。口縁端部は丸く仕上げる。口頸部外面は強いヨコナデにより僅かに凹む。1/5の残存。	㊦ヨコナデ ㊧ハケ(6~7本/cm) →ナデ	㊦ハケ(5本/cm) →ヨコナデ ㊧ハケ(6~7本/cm)	橙色 橙色	石・長 (1~2) 赤 ◎		16
20	甕	口径 (13.8) 残高 6.9	内湾口縁。口縁端部は丸く仕上げる。1/5の残存。	ハケ (6~7本/cm) →ヨコナデ	㊦ナデ ㊧ハケ→ナデ	橙色 橙色	石・長 (1~2) ◎		
21	壺	口径 (16.0) 残高 5.7	内湾口縁。口縁端部は丸く仕上げる。外面に2条の線刻あり。小片。	ミガキ	ミガキ	褐色 褐色	石・長 (1) 金 ◎		16
22	埴輪	口径 (28.0) 残高 2.5	土師質の円筒埴輪。口縁端部は面取りされる。小片。	ハケ (5本/cm)	ハケ (7~8本/cm)	橙色 橙色	石 (1) ◎		
23	坏蓋	口径 (15.3) 器高 5.0	断面三角形の丸味をもつ稜あり。口縁端部は内傾する。3/4の残存。	㊦回転ヘラケズリ ㊦回転ナデ	㊦叩き・ナデ ㊦回転ナデ	青灰色 青灰色	密 黒 ◎		16
24	坏蓋	口径 (13.8) 残高 2.9	口縁端部は尖り気味に仕上げる。小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
25	坏身	口径 (13.7) 残高 3.8	たちあがりは低く内傾し、端部は丸い。底部外面に線刻あり。1/4の残存。	㊦回転ナデ ㊦回転ヘラケズリ	㊦回転ナデ ㊦円弧叩き →回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		16
26	坏身	口径 (11.5) 残高 3.9	たちあがりは短く内傾し、端部は尖り気味に仕上げる。1/5の残存。	㊦回転ナデ ㊦回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
27	壺	口径 (15.9) 残高 4.6	広口壺。口縁端面はナデ凹む。1/4の残存。	回転ナデ	㊦回転ナデ ㊧円弧叩き	灰色 灰色	密 ◎		16

表 47 SP5 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
28	坏身	口径 (13.6) 残高 4.2	たちあがりは低く内傾し、端部は尖り気味に仕上げる。1/3の残存。	㊦回転ナデ ㊦回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		16
29	高坏	残高 5.5	柱部に凹線1条が巡り、台形状の透かしを2箇所に見取(3方向)。小片。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		
30	ミニチュア	口径 (6.3) 底径 1.8 器高 4.2	口縁部は短く外反し、底部は平底風に仕上げる。4/5の残存。	㊦ヨコナデ ㊦ハケ(6~7本/cm) →ナデ(指頭痕)	ナデ (指頭痕)	橙色 橙色	石・長 (1) ◎		16

表 48 包含層出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
31	壺	口径 (9.7) 残高 12.9	口縁部は外反し、頸部に段をもつ。胴部は扁球形をなす。1/2の残存。	㊦ヨコナデ ㊧ナデ(ケズリ)	㊦ヨコナデ ㊧板状工具によるナデ	赤橙色 赤橙色	石・長 (1) 金・角閃石 ◎	黒斑	17
32	壺	口径 (9.8) 残高 6.7	口縁部は外反し、端部は尖り気味に丸く仕上げる。1/4の残存。	ミガキ→ナデ	㊦ハケ→ナデ ㊧ケズリ→ナデ	赤橙色 赤橙色	石・長 (1) 角閃石 ◎	黒斑	
33	壺	口径 (13.0) 残高 5.1	内湾口縁。口縁端部は先細りする。1/5の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	橙色 橙色	石 (1) ◎		
34	壺	残高 8.4	丸底。扁球形の胴部。2/3の残存。	ハケ→ナデ	ケズリ	赤橙色 赤橙色	石・長 (1~2) 角閃石 ◎	黒斑	17
35	壺	口径 (18.8) 残高 4.3	複合口縁壺。口縁端部は丸く仕上げる。口縁部内面に爪跡あり。小片。	㊦ヨコナデ ㊧ハケ(8本/cm) →ナデ	ヨコナデ	灰褐色 灰褐色	石・長 (1~3) ◎		17

余戸中ノ孝遺跡5次調査

包含層出土遺物観察表 土製品

(2)

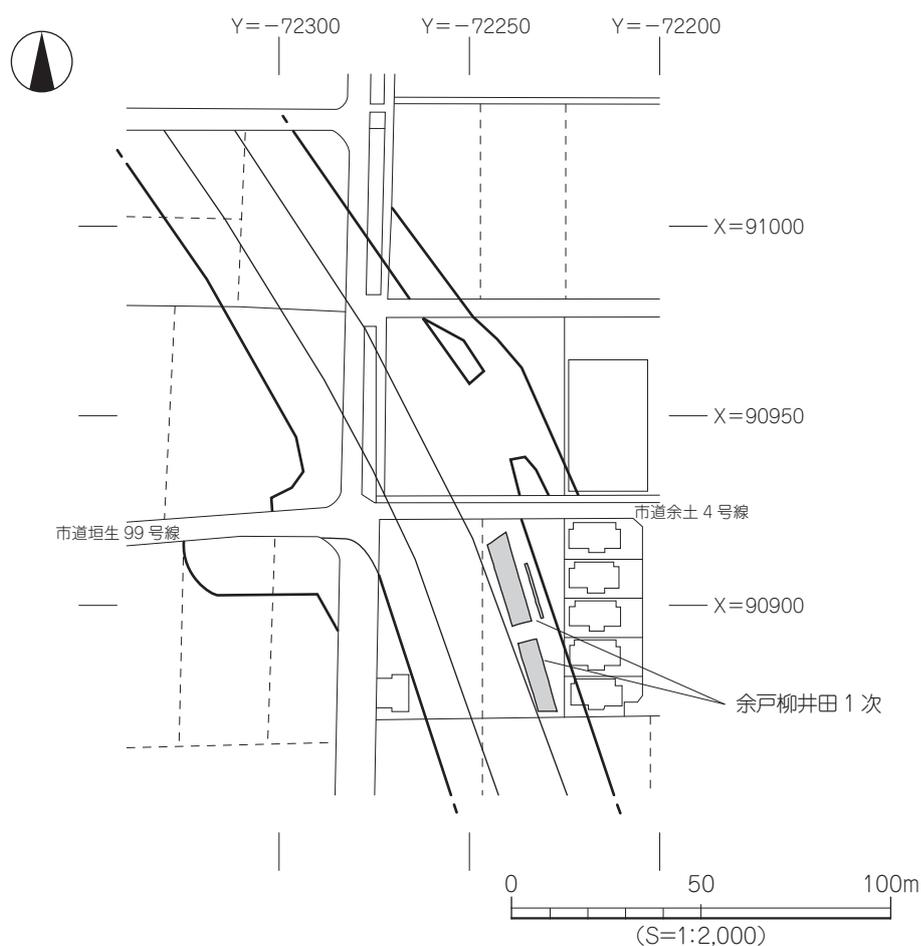
番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
36	壺	残高 3.1	貼付凸帯上にハケ状工具による斜格子目文あり。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰褐色 灰褐色	石・長 (1~3) ◎		17
37	高坏	口径 (16.7) 残高 11.0	口縁部は外反し、端部は尖り気味に丸く仕上げる。赤色塗彩土器。充填技法。1/2の残存。	⑤ハケ(5本/cm) →ナデ ⑧ハケ→ナデ	⑤ハケ(6本/cm) ⑧ケズリ	灰褐色 灰褐色	石・長 (1) 角閃石 ◎	黒斑	17
38	カマド	残高 3.9	移動式カマド。小片。	ナデ (指頭痕)	ナデ (指頭痕)	赤橙色 赤褐色	石・長 (1~3) ◎		17
39	埴輪	残高 6.5	土師質の円筒埴輪。断面「M」字状の凸帯を貼付け、円孔を看取する。小片。	ハケ・ヨコナデ	ナデ・指オサエ	にぶい橙色 淡黄色	密 ◎		17
40	坏身	たしが口径 (14.0) 残高 4.1	たちあがりは短く内傾し、端部は尖り気味に仕上げる。1/5の残存。	⑤回転ナデ ⑧回転ヘラケズリ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密黒 ◎		
41	壺	残高 7.8	扁球形の胴部。1/5の残存。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		

第7章 余戸柳井田遺跡1次調査

第1節 調査の経緯

余戸柳井田遺跡1次調査は、松山市余戸西四丁目2405番1の一部を調査対象地とし、調査面積は約400㎡である。なお、調査対象地は三箇所に分かれていることから、3つの地区(1・2・3区)に分けて調査を実施した。以下、調査工程を略記する。また、調査は第3章で説明した余戸中ノ孝遺跡1次調査と併行して行っており、調査期間は平成27年1月13日から同年3月31日である。

平成27年1月23日より重機を使用して、1区から順に表土の掘削作業を開始する。2月3日、掘削作業が進む途中、地下水による湧水が激しく、排水用のトレンチを調査区東側へ設定する。地表下約30cmの地点で水田耕作に伴う足跡を検出したことから、全面精査を実施する。2月16日、遺構検出状況写真撮影後、足跡の掘削を開始する。検出時には300個を超える足跡が見つかり、足跡は洪水等の影響により砂で埋没している。2月19日より、足跡の測量を開始する。3月2日、すべての測量が終了し、重機により埋戻し作業を行う。3月4日、発掘調査を終了する。



第65図 調査地位置図

第 2 節 層 位 (第 66・67 図、図版 19)

調査地は、調査以前は水田として利用されていた。調査で確認した土層は、以下のとおりである。第 2 章で説明した基本層位のうち、本調査では第 I 層と第 II 層のみを検出した。なお、第 II 層は 7 種類に分層されるが、第 II ③層が水田土壌である。本調査では第 II ③層以下の土層はトレンチにより確認したものであり、平面調査は実施していない。そのため、明確な堆積時期は判断しがたいため、ここでは第 II ③層以下の土層については中世段階の堆積層とする。

第 I 層：近現代の水田耕作に伴う耕土で、土色・土質の違いにより 3 種類に分層される。

第 I ①層－現耕作土〔暗オリーブ灰色土 (2.5GY 4/1)〕で、層厚は 5～20cm である。

第 I ②層－旧耕作土〔暗青灰色土 (5BG 4/1)〕で、層厚は 3～16cm である。

第 I ③層－床土〔明黄褐色土 (2.5Y 7/6)〕で、層厚は 3～16cm である。

第 II 層：中世段階の土壌で、土色・土質の違いにより 7 種類に分層される。

第 II ①層－にぶい黄色土 (2.5Y 6/4) で 1・2 区の東半部にみられ、層厚は 5～20cm である。なお、土壌中にはマンガン粒が少量含まれている。

第 II ②層－灰黄色土 (2.5Y 6/2) で、やや粘性を帯びる。全調査区にみられ、層厚は 5～20cm である。本層中からは室町時代の土師器片や瓦質土器片のほか、備前焼の播鉢片などが少量出土している。

第 II ③層－灰色土 (5Y 6/1) で、粘性が強い土壌である。全調査区にみられ、層厚は 6～40cm である。1 区と 2 区では本層上面にて多数の足跡を検出したが、3 区では検出されなかった。検出状況より、本層は水田土壌と判断される。本層上面の標高を測量すると、1 区北側が最も高く、暫時、南側へ向けて緩傾斜をなす。なお、足跡は灰黄色 (2.5Y 7/2) の微砂で埋没している。本層中からは、遺物の出土はみられなかった。

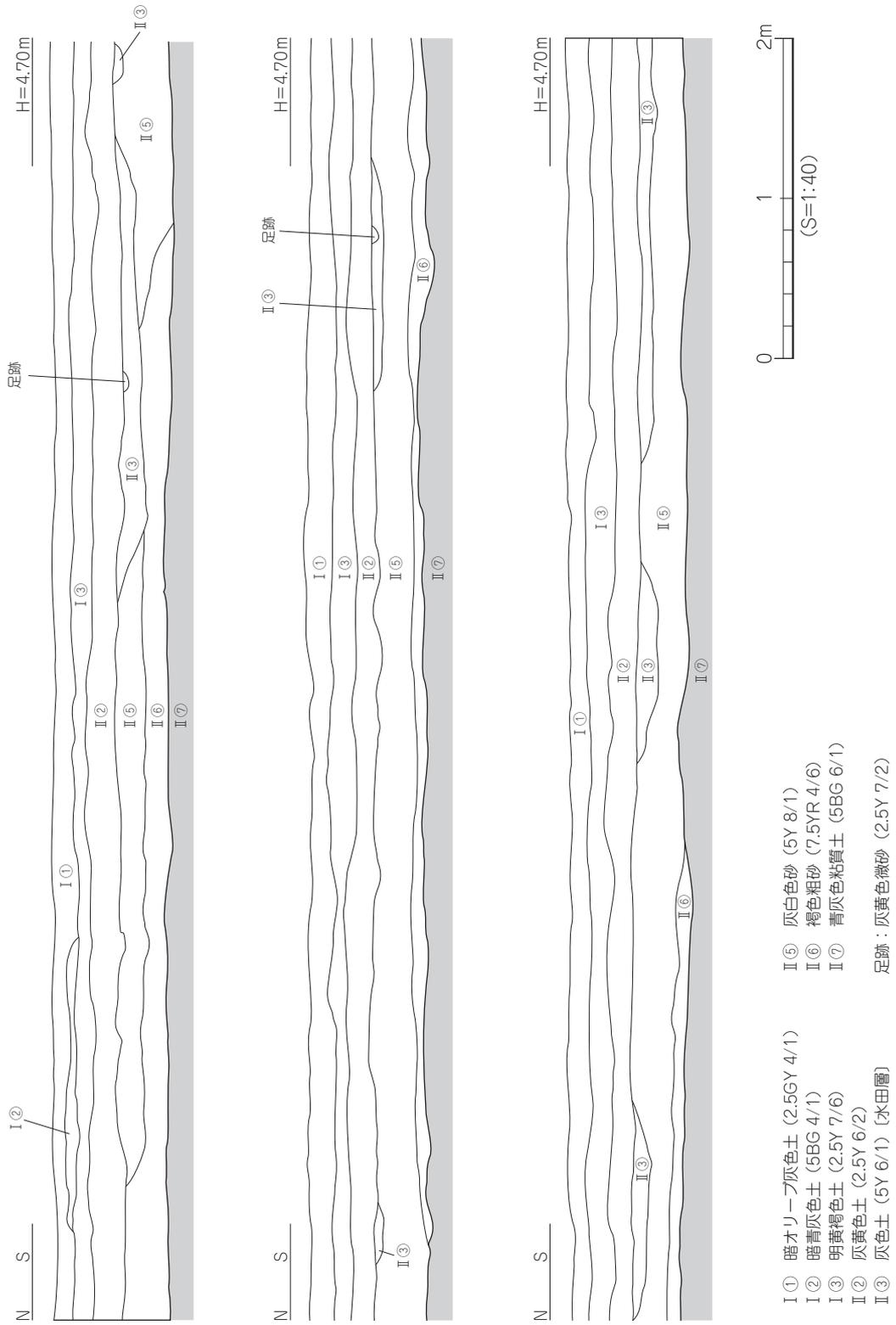
第 II ④層－灰色土 (10Y 6/1) で、僅かに砂質を帯びる。全調査区にみられ、層厚は 8～20cm である。本層中からは、遺物の出土はない。

第 II ⑤層－灰白色砂 (5Y 8/1) で 1・2 区の全域にみられ、層厚は 5～35cm である。本層中からは遺物の出土はない。

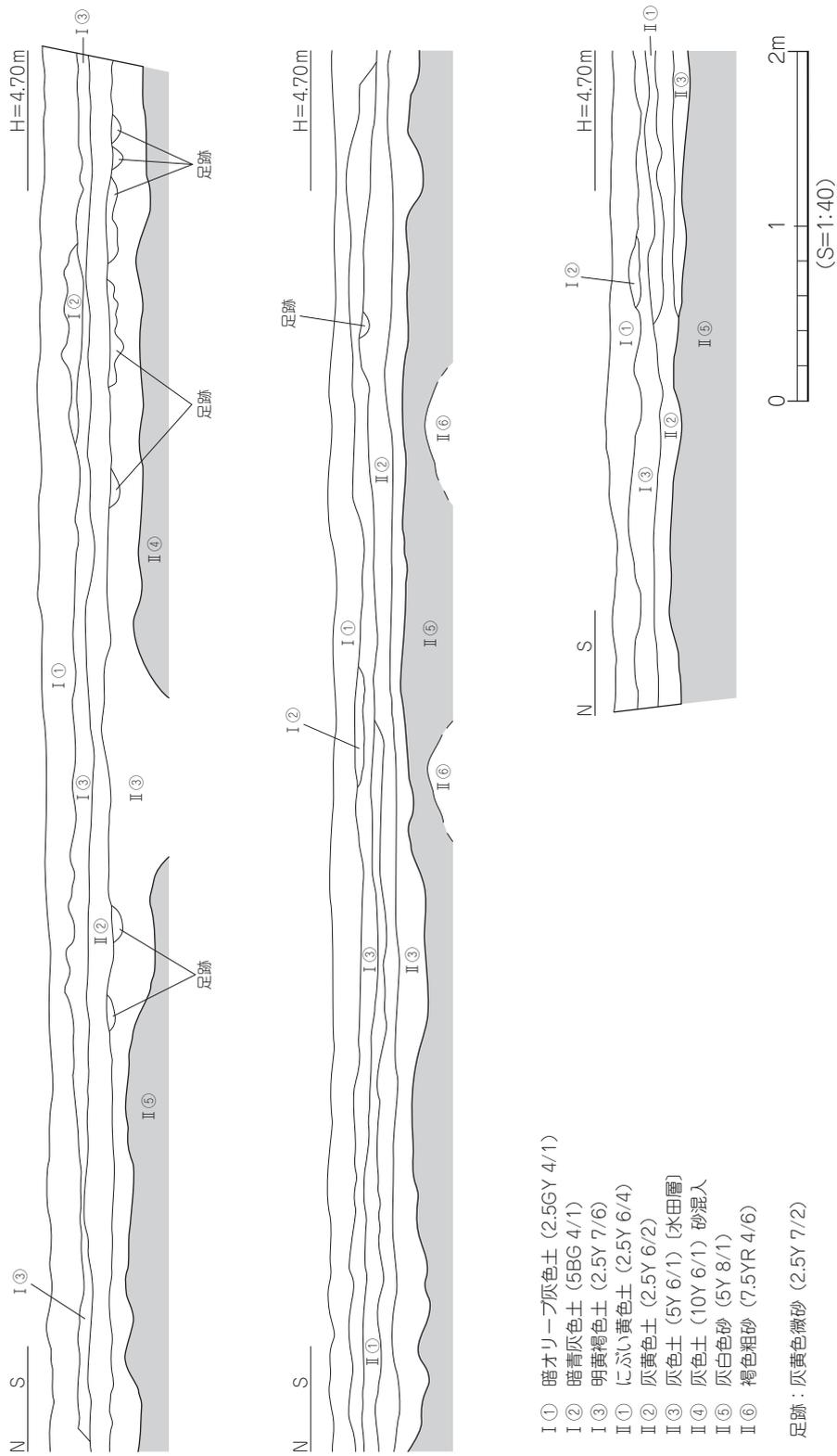
第 II ⑥層－褐色粗砂 (7.5YR 4/6) で、1・2 区の全域にみられ、層厚は 3～10cm である。本層中からは、遺物の出土はない。

第 II ⑦層－青灰色 (5BG 6/1) の粘土層で、1・2 区で部分的に検出され、層厚は 15cm 以上である。本層中からは、平安時代から鎌倉時代の土師器や須恵器の破片が数点出土した。なお、本層掘り下げ時に湧水が激しく、本層下面の状況は確認できなかった。

なお、調査にあたり調査区内を 5 m 四方のグリッドに分けた。グリッドは西から東へ A・B・C・D・E、北から南へ 1・2・3・……・10 とし、A1・A2・……・E10 区といったグリッド名を付した。グリッドは遺構の位置表示や遺物の取り上げ等に利用した。本調査の座標値は、X=90870～90920、Y=-72225～-72245 である。

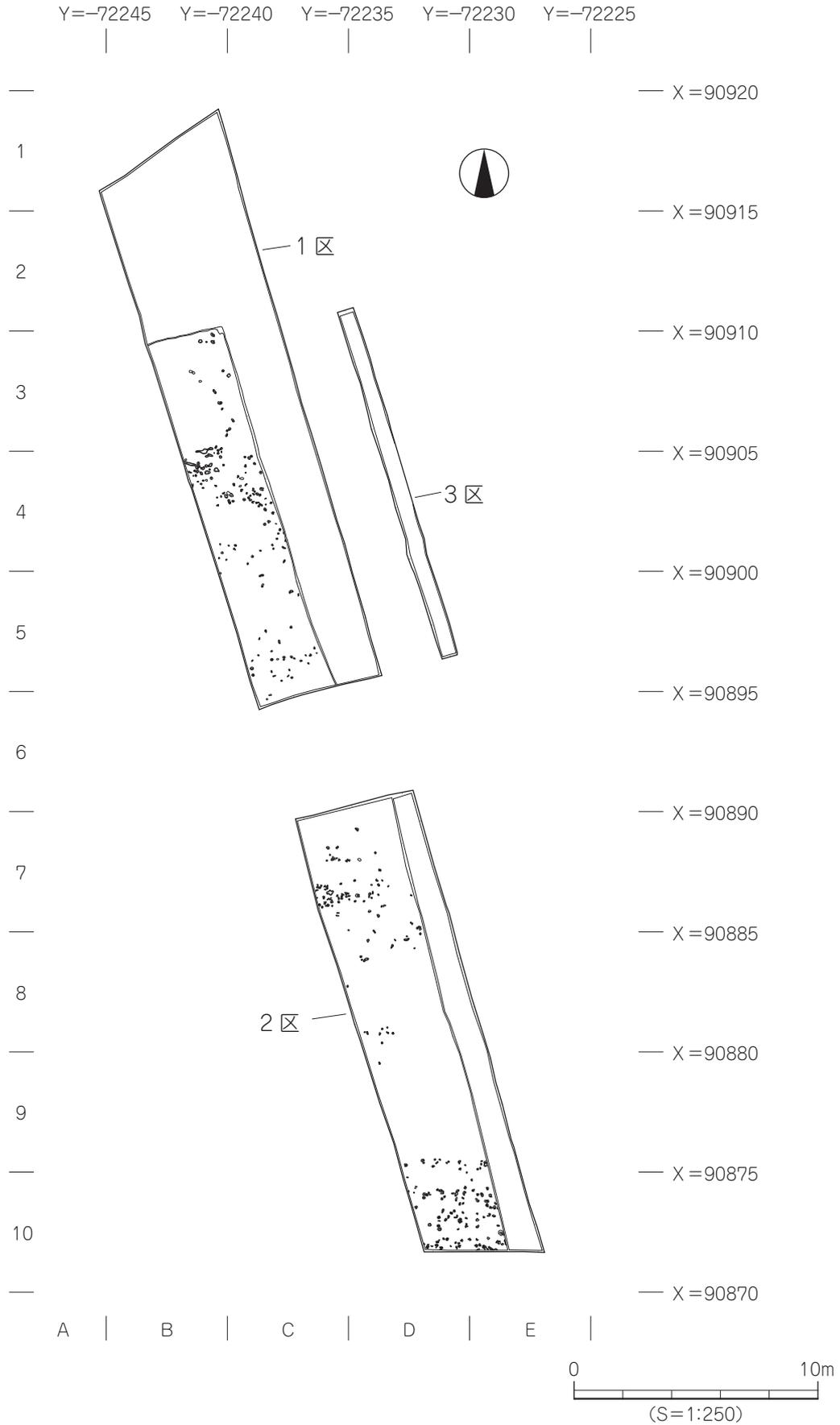


第 66 図 1 区東壁土層図



第67図 2区東壁土層図

層位



第 68 図 遺構配置図

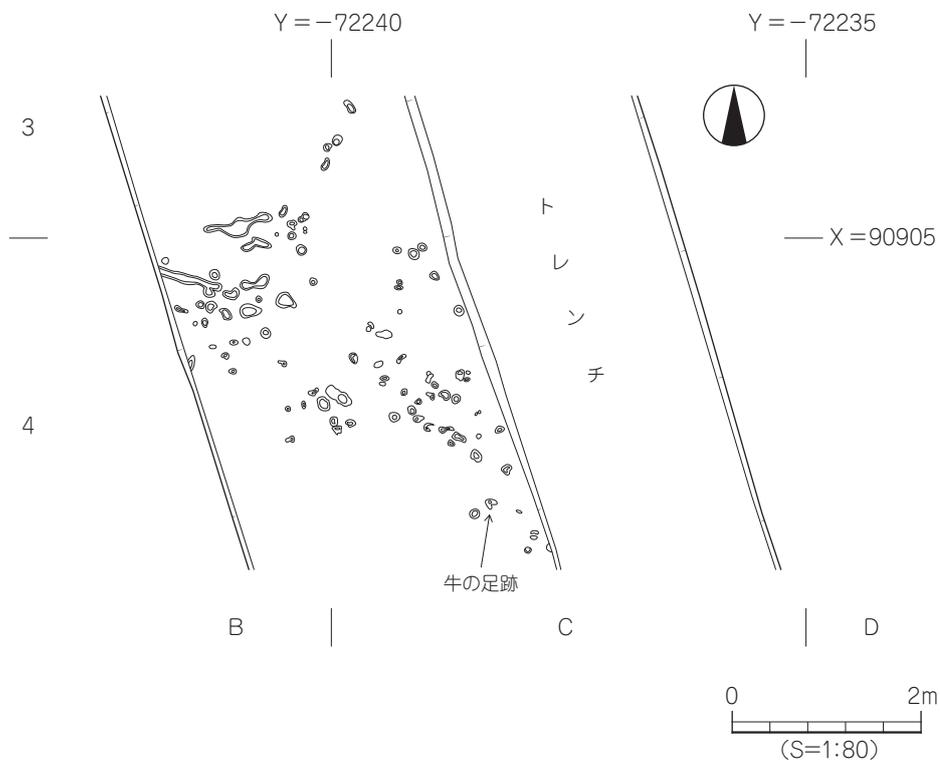
第 2 節 遺構と遺物

余戸柳井田遺跡 1 次調査では、水田耕作に伴う足跡を検出した。足跡の総数は、367 個である。このうち、牛と思われる足跡は 47 個である。足跡は第Ⅱ③層上面で検出したもので、第Ⅱ②層が足跡上面を覆う。なお、畦畔や水路等の施設は、確認できなかった。遺物は第Ⅱ②層中より室町時代、第Ⅱ④層及び第Ⅱ⑦層中からは鎌倉時代の土師器や須恵器、瓦質土器、陶磁器が出土した。なお、遺物の出土量は収納箱（44 × 60 × 14cm）約 2 箱分である。ここでは、調査区別に内容を説明する。

1. 1 区の調査

水田址（第 69 図、図版 19）

1 区では第Ⅱ③層上面にて、149 個の足跡を検出した。このうち、牛の足跡は 33 個である。足跡は 1 区中央部付近 B3 ～ C4 区と南側 C5・6 区に比較的集中しており、足跡は全て灰黄色微砂（2.5Y 7/2）で埋没している。足跡の形状であるが、牛は「ハ」の字状またはハート形をなし、規模は径 6 ～ 15cm、深さ 1 ～ 5cm である。牛以外の足跡には円形または楕円形があり、最小規模の足跡は径 2 ～ 5cm、深さ 1 ～ 2cm、最大規模の足跡は径 20cm、深さ 6.5cm である。足跡は北西 - 南東方向や、北東 - 南西方向に向かって続いており、その方向は現在の磁北方向に平行及び直行している。足跡からは遺物の出土はないが、足跡を覆う第Ⅱ②層中からは主に室町時代の土師器や須恵器、備前焼の破片などが出土している。また、水田層下面の第Ⅱ④層や第Ⅱ⑦層中からは鎌倉時代に時期比定される土器片が少量出土している。



第 69 図 1 区足跡検出状況図

出土遺物（第70図、図版19）

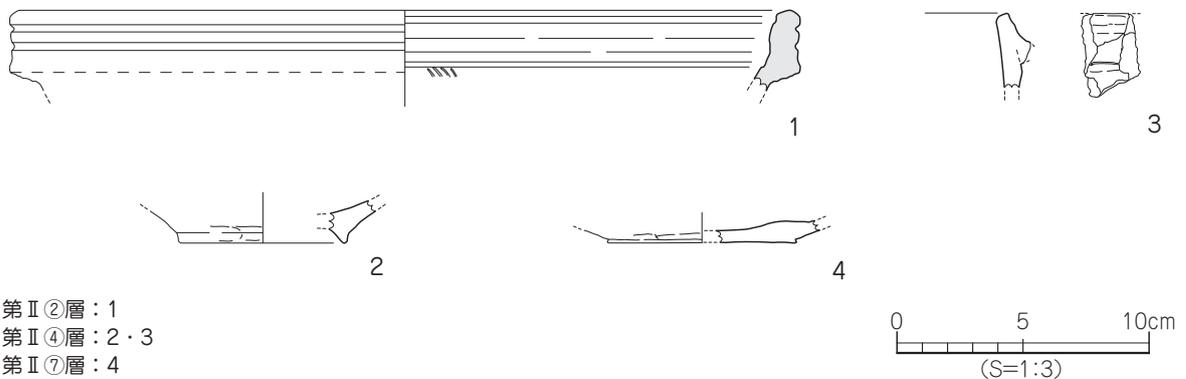
1は第Ⅱ②層出土品。備前焼の播鉢で、口縁部外面には凹線2条が巡る。2・3は第Ⅱ④層出土品。2は土師器の椀。推定底径6.4cmを測る底部片で、断面三角形状の高台を貼り付ける。3は土師器土釜。丸味のある断面三角形状の凸帯を貼り付け、口縁端部は内傾する。4は第Ⅱ⑦層出土品。土師器坏で、推定底径7.3cmを測り、底部外面に回転ヘラ切り痕が残る。

時期：検出層位や出土遺物等から、概ね室町時代の水田址と考えられる。

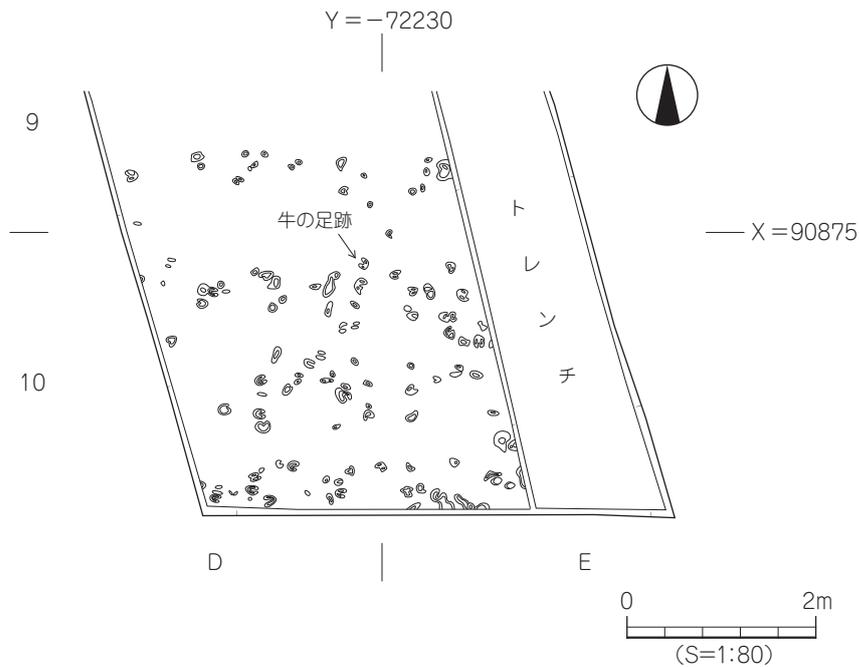
2. 2区の調査

水田址（第71図）

2区では、1区と同様に第Ⅱ③層上面にて218個の足跡を検出した。このうち、牛の足跡は14個で



第70図 出土遺物実測図(1)



第71図 2区足跡検出状況図

ある。足跡は2区北側C・D7区と南側D・E10区に比較的集中しており、1区同様、灰黄色微砂(2.5Y 7/2)で埋没している。足跡の形状であるが、牛は「ハ」の字状またはハート形をなし、最大規模の足跡は径15cm、深さ3～5cmである。牛以外の足跡は円形または楕円形をなし、最大規模の足跡は径16～20cm、深さ1～3cm、最小規模の足跡は径4～5cm、深さ1～2cmである。1区と同様、足跡は磁北方向に平行または直行する方向に続くものがある。足跡内からは遺物の出土はない。

時期：検出層位等が1区と同様であることから、概ね室町時代の水田址と考えられる。

3. 3区の調査

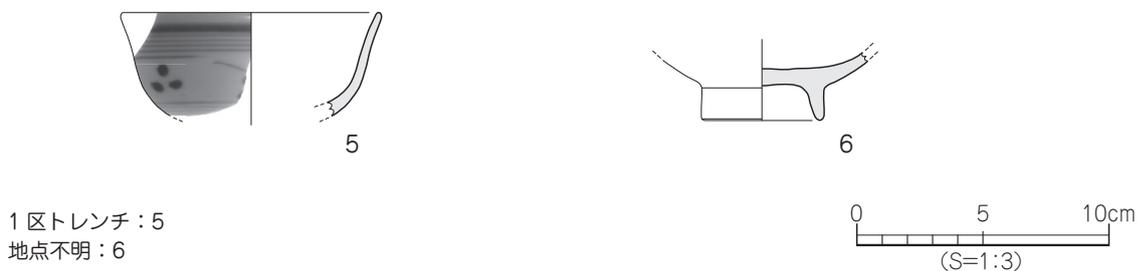
3区からは、明確な遺構は検出されなかった。ただし、第Ⅱ②層中からは室町時代の土器片が数点出土した。

4. その他の遺構と遺物

調査では先行トレンチ掘削時や出土地点は不明であるが、土器片や陶磁器片が数点出土した。ここでは、図化するものを2点掲載した。

トレンチ・地点不明出土遺物(第72図、図版19)

5は1区トレンチ出土品、6は出土地点不明品。5は砥部焼の碗。口縁部や体部の内外面に圏線と文様が描かれている。胎土は白色で、透明釉が掛けられている。6は肥前系の碗。底部片で、胎土は灰黄色をなす。内外面には透明釉が掛けられているが、高台置付部分は無釉である。



1区トレンチ：5
地点不明：6

第72図 出土遺物実測図(2)

第4節 小 結

本調査では、室町時代の水田址を検出した。水田は洪水等で埋没したものと判断されるが、調査地内には洪水を示す堆積層は検出されなかった。水田址からは多数の足跡を検出したが、畦畔や水路等の施設は確認できなかった。足跡は総数367個を検出し、このうち牛と思われる足跡は47個ある。牛の足跡が進む方向から判断すると、当時は現在の磁北方向に対して平行、直行する形状の区画をもつ水田と推測される。なお、狭小範囲の調査であったため、方向性は判断できたが規模等は不明である。なお、発掘調査時、水田層下は湧水が激しく、十分な調査を実施することが困難な状況にあった。周辺の調査の結果をふまえ、当地や周辺地域における水田構築以前の様相解明が急務となる。

遺物観察表

遺物観察表 - 凡例 -

以下の表は、本調査地出土遺物の観察一覧である。

法量欄 (): 復元推定値

胎土欄 胎土欄は混和剤を略記した。

例) 石→石英、長→長石、金→金ウンモ

() の中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例) 石・長 (1~2) → 「1~2mm大の石英・長石を含む」である。

焼成欄 焼成欄の略記について

◎→良好

表 49 出土遺物観察表 土製品

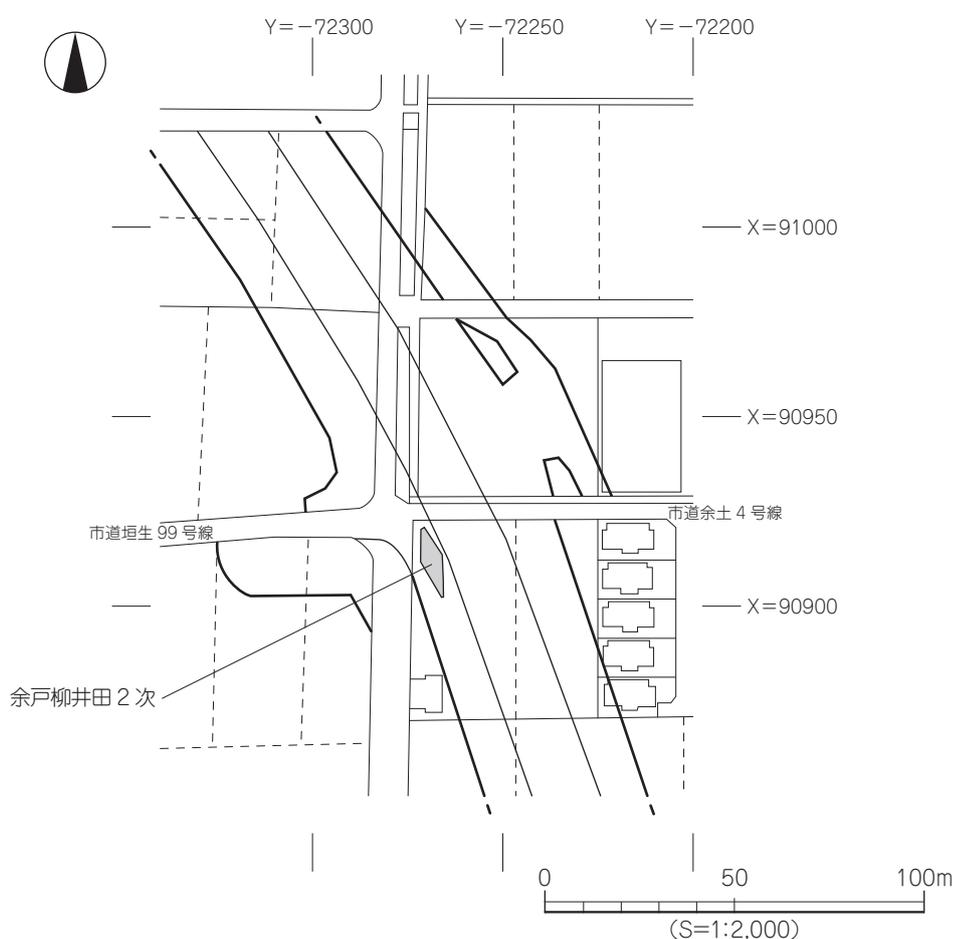
番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
1	播鉢	口径 (30.4) 残高 3.2	備前焼。口縁部に凹線文2条あり。 小片。	回転ナデ	回転ナデ	赤褐色 赤褐色	密 ◎	第II②層	19
2	椀	底径 (6.4) 残高 1.7	断面三角形の高台を貼付ける。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	黄橙色 黄橙色	密 ◎	第II④層	19
3	土釜	残高 3.0	口唇部より下がった位置に断面三 角形状の凸帯を貼付ける。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	褐色 褐色	長 (1~2) ◎	第II④層	19
4	坏	底径 (7.3) 残高 0.9	底部片。底部外面に回転ヘラ切り痕 あり。	マメツ	マメツ	黒色 黒色	石・長 (1) 金 ◎	第II⑦層	19
5	碗	口径 (10.1) 残高 4.1	砥部焼。内外面に圏線あり。1/5の 残存。	施釉	施釉	白色 白色	密 (白色) ◎	トレンチ	19
6	碗	底径 4.6 残高 2.7	肥前系陶器。高台畳付は無釉。	施釉	施釉	灰黄色 灰黄色	密 (灰黄色) ◎	地点不明	

第8章 余戸柳井田遺跡2次調査

第1節 調査の経緯

余戸柳井田遺跡2次調査は、松山市余戸西四丁目2407番5を調査対象地とし、調査面積は約190㎡である。調査地は、余戸柳井田遺跡1次調査の西方に隣接している。事前に行った試掘調査の結果、遺構面が2面存在していることが明らかになっており、発掘調査も1面と2面で遺構検出や掘削、測量作業を実施した。なお、調査期間は平成27年9月24日から平成27年10月31日までである。以下、調査工程を略記する。

平成27年9月24日、重機を使用して表土層の掘削作業を開始する。地表下約1.2mの地点で遺構を検出したことから、以後、作業員による遺構検出作業や掘削作業を進めた。遺構面からは、無数の足跡が検出された。10月1日より、足跡の掘り下げを開始する。10月4日より、網掛測量により足跡の平面図を作成する。10月7日、1面の調査が終了し、完掘状況写真を撮影する。10月8日より、重機を使用して水田層の掘削を開始する。地表下30cm程度掘り下げた地点にて溝や柱穴を検出し、以後、作業員による遺構検出作業を行う。10月26日、遺構の掘削と測量作業を終了し、完掘状況写真を撮影した。10月29日より、重機を使用して調査地の埋戻し作業を行う。10月31日、本日にて発掘調査を終了した。



第73図 調査地位置図

第2節 層位 (第76・77図、図版20)

調査地は、調査以前は水田として利用されていた。調査で確認した土層は、以下のとおりである。なお、第2章で説明した基本層位のうち、本調査では第Ⅰ層、第Ⅱ層及び第Ⅲ層を検出した。

第Ⅰ層：近現代の造成及び農耕に伴う客土で、土色・土質の違いにより3種類に分層される。

第Ⅰ①層－造成土で、地表下60～80cmまで開発が行われている。

第Ⅰ②層－近現代の農耕に伴う耕作土〔青灰色土(10BG 5/1)〕で、層厚は15～20cmである。

第Ⅰ③層－旧耕作土〔灰色土(7.5Y 5/1)〕で、層厚は5～12cmである。

第Ⅱ層：中世段階の土壌で、土色・土質の違いにより14種類に分層される。

第Ⅱ①層－にぶい黄色土(2.5Y 6/4)で、層厚は6～15cmである。

第Ⅱ②層－灰オリーブ色土(7.5Y 6/2)で、層厚は8～20cmである。

第Ⅱ③層－灰オリーブ色土(5Y 6/2)で、層厚は4～20cmであり、本層中からは室町時代の土師器片や陶磁器片が少量出土した。

第Ⅱ④層－浅黄色土(5Y 7/3)で、層厚は5～12cmである。

第Ⅱ⑤層－灰白色粗砂(N8/)で、調査区北半部にみられ、層厚は5～25cmである。

第Ⅱ⑥層－灰オリーブ色土(7.5Y 5/2)で調査区中央部のみにみられ、層厚は3～8cmである。

第Ⅱ⑦層－明青灰色砂(10BG 7/1)で調査区南半部にみられ、層厚は15～22cmである。

第Ⅱ⑧層－青灰色粘質土(10BG 5/1)で粘性が強く、調査区中央部にみられる。本層が水田土壌である。本層上面にて、溝と多数の足跡を検出した。層厚は15～20cmである。

第Ⅱ⑨層－灰色粘質土(10Y 5/1)で調査区南側にみられ、層厚は15～20cmである。本層は水田土壌であり、本層上面にて、足跡を検出した。

第Ⅱ⑩層－灰色粘質土(7.5Y 4/1)で調査区北半部にみられ、層厚は15～28cmである。本層は水田土壌であり、本層上面にて足跡を検出した。

第Ⅱ⑪層－灰黄褐色土(10YR 5/2)で調査区北半部にみられ、層厚は5～24cmである。

第Ⅱ⑫層－暗灰色土(N3/)で、層厚は8～20cmである。本層中からは、鎌倉時代の土師器片や須恵器片、陶磁器片が比較的多く出土した。

第Ⅱ⑬層－灰色土(N4/)で調査区南半部にみられ、層厚は4～12cmである。

第Ⅱ⑭層－明褐色砂質土(7.5YR 5/6)で調査区中央部にみられ、層厚は6～15cmである。

第Ⅲ層：古代の堆積層で、土色・土質の違いにより2種類に分層される。

第Ⅲ①層－浅黄色土(2.5Y 7/4)で、層厚は10～18cmである。本層上面が、調査における最終遺構検出面である。検出した遺構は、溝と柱穴である。

第Ⅲ②層－灰白色砂(10Y 7/1)で、層厚は40cm以上である。深掘トレンチにより確認した土層で、本層中からは遺物の出土はみられなかった。

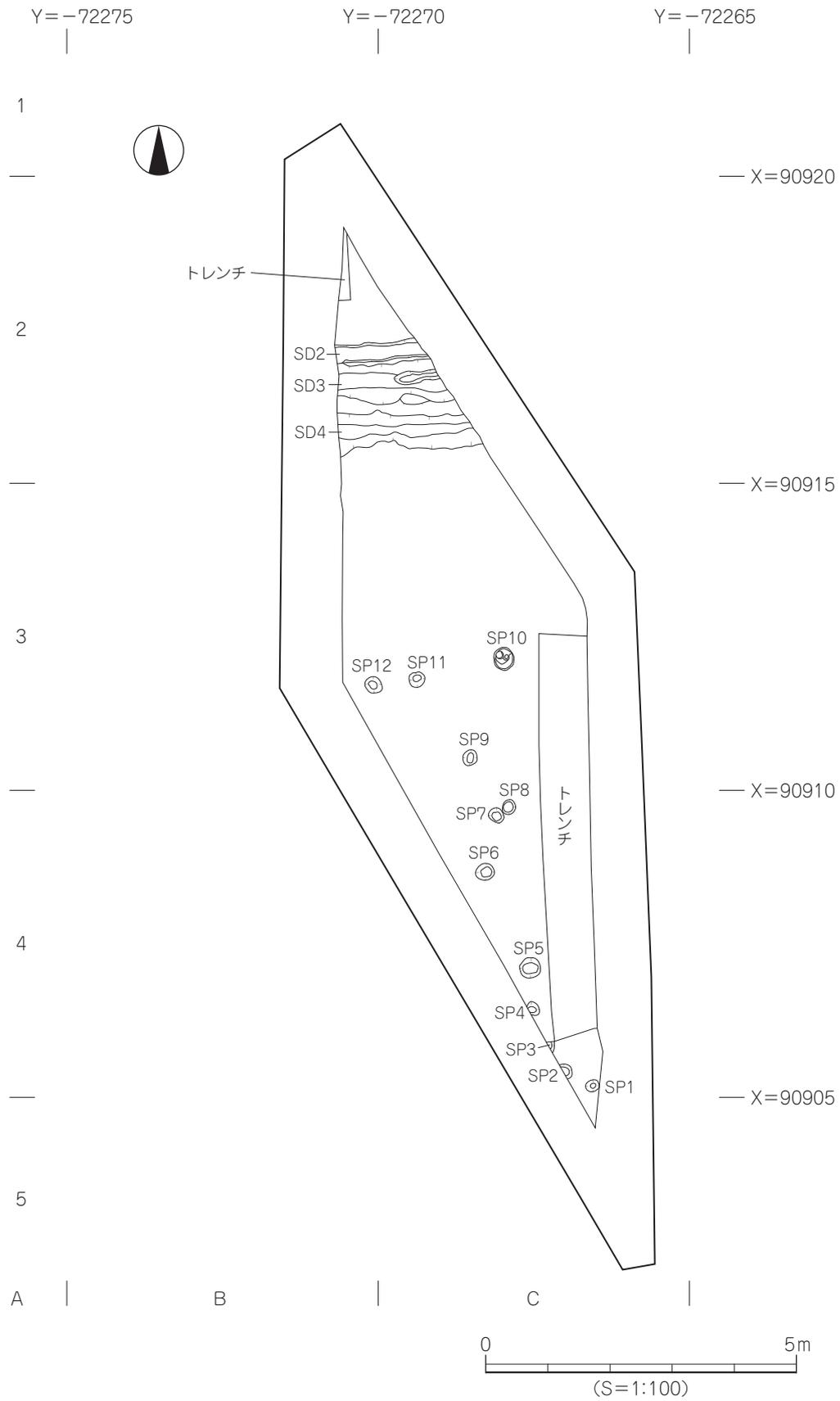
検出遺構や出土遺物より、第Ⅱ⑫層は鎌倉時代、第Ⅱ⑬層は室町時代までに堆積した土層と考えられる。なお、調査にあたり調査区内を5m四方のグリッドに分けた。グリッドは西から東へA・B・C、北から南へ1・2・3・5とし、A1・A2・……・C5区といったグリッド名を付した。グリッドは、遺構の位置表示や遺物の取り上げ等に利用した。本調査の座標値は、X = 90902～90921、Y = -72266～-72272である。

層位

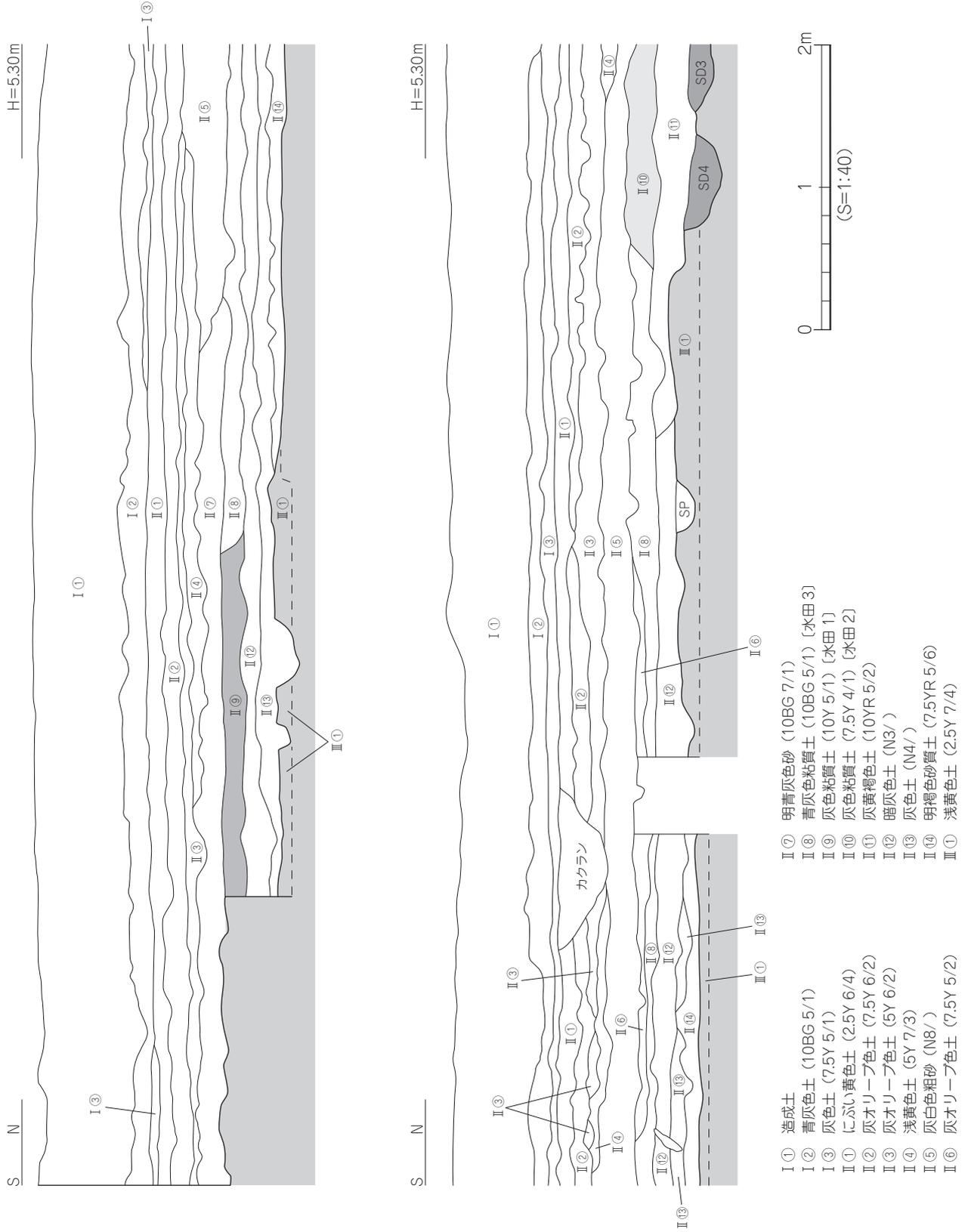


第74図 遺構配置図〔第1面〕

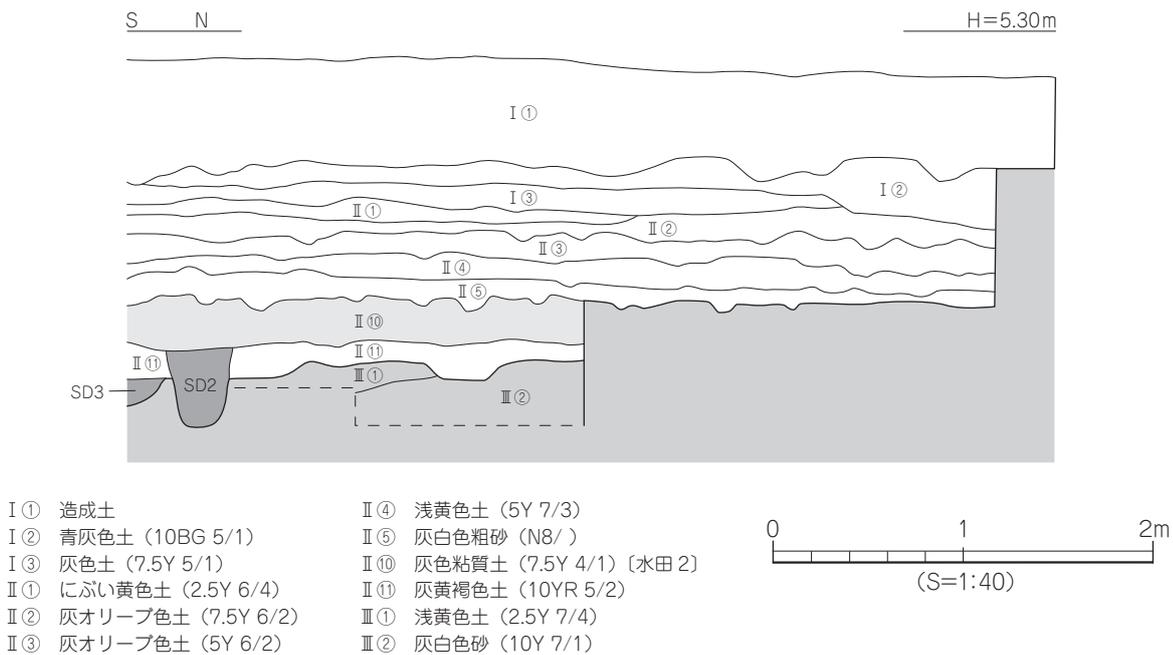
余戸柳井田遺跡 2次調査



第75図 遺構配置図〔第2面〕



第 76 図 西壁土層図 (1)



第 77 図 西壁土層図 (2)

第 3 節 遺構と遺物

余戸柳井田遺跡 2次調査では、第 II ⑧～⑩層及び第 III ①層上面にて遺構を検出した。第 II ⑧～⑩層上面では溝 1 条と水田耕作に伴う足跡を検出し、第 III ①層上面からは溝 3 条と柱穴 12 基を検出した。遺物は平安時代から室町時代の土師器や須恵器、瓦質土器、陶磁器等が出土した。なお、遺物の出土量は収納箱 (44 × 60 × 14cm) 約 2 箱分である。

1. 水田址 (図版 21)

調査では第 II ⑧層、第 II ⑨上層、及び第 II ⑩層上面にて、水田耕作に伴う足跡を検出した。発掘調査時は、地表下 1.4 m の地点にて足跡を検出したことから水田址が存在しているものと判断し、重機での掘削を中止し、手作業による遺構検出作業を行った。その結果、足跡には人間や牛があり、牛と思われる足跡は 48 個あり、足跡総数は 262 個である。足跡の規模は径 5 ～ 18cm、深さ 1 ～ 5cm である。

発掘調査が進むにつれ、水田層を掘り下げ、最終の遺構検出面である第 III ①層を検出した際に、調査壁の土層観察を行ったところ、時期の異なる水田址が存在していることが判明した。ここでは、各々の水田址について説明を行う。

まず、最も時期の古い水田址は第 II ⑨層と第 II ⑩層であり、第 II ⑨層を水田 1、第 II ⑩層を水田 2 と呼称する。水田 1 は第 II ⑨層である灰色粘質土 (10Y 5/1) を水田土壌とし、調査区南半部に存在しており、本層上面で検出した足跡は第 II ⑦層である明青灰色砂 (10BG 7/1) で埋没している。一方、水田 2 は第 II ⑩層である灰色粘質土 (7.5Y 4/1) を水田土壌とし、調査区北半部に存在する。本層上面で検出した足跡は、灰色砂 (10Y 5/1) で埋没している。水田 1 と水田 2 は土色や土質が異なっ

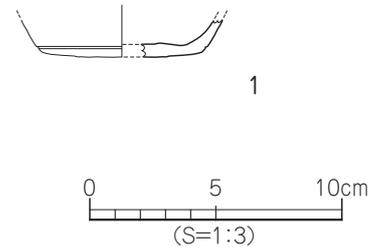
おり、別々の水田址と考えられるが、同時期に併存していた可能性はある。水田1と水田2の構築以降に、第Ⅱ⑧層を水田土壌とする水田址（水田3と呼称）が存在する。調査区中央部で検出され、本層上面で検出した足跡は、第Ⅱ⑤層である灰白色砂（N8/）で埋没している。

検出した足跡の分布をみると、水田1が最も密集しており、水田2と水田3は比較的散在しているものの、進行方向は磁北方向に直行あるいは平行に進んでいる。このことから、磁北を指向した水田区画が存在したものと考えられる。しかしながら、畦畔や水路等の施設は確認できなかったため、正確な水田の形状や規模等は不明である。足跡からは土師器の小片が少量出土した。

出土遺物（第78図）

1は足跡埋土である第Ⅱ⑦層出土品。推定底径6.0cmを測る土師器皿の底部片で、底部外面には回転糸切り痕が残る。

時期：出土遺物が僅少で時期特定は困難であるが、後述する水田層下面に堆積する第Ⅱ⑫層からは鎌倉時代に時期比定される遺物が出土していることや、調査地東方に隣接する余戸柳井田遺跡1次調査検出の水田址と検出層位や水田土壌が類似していることから、本調査検出の水田址も概ね室町時代と考えられる。



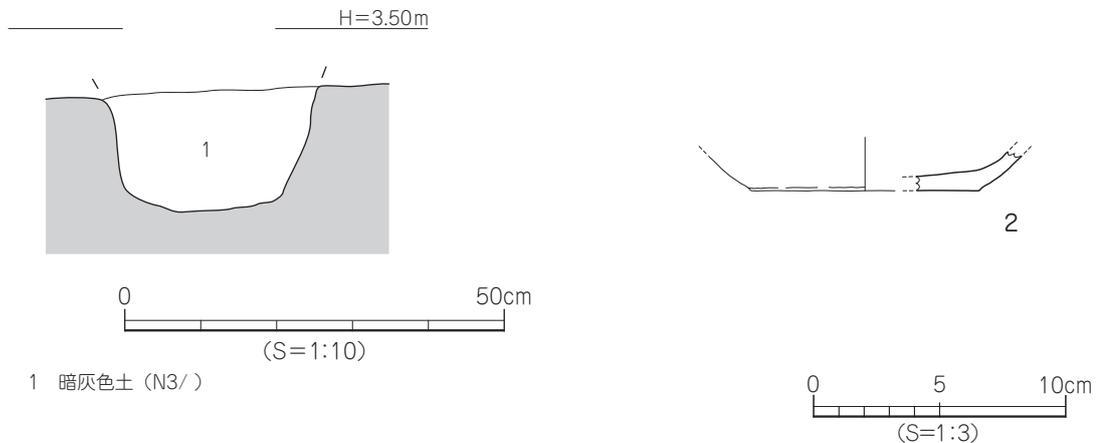
第78図 水田址出土遺物実測図

2. 溝

調査では、4条の溝を検出した。

SD1

調査区南部、B・C2区で検出した東西方向の溝で、第Ⅱ⑧層上面での検出であり第Ⅱ⑥層が覆う。規模は検出長3.00m、幅0.30～0.45m、深さは14cmである。断面形態はレンズ状をなし、埋土は灰オリーブ色砂（5Y 6/2）単層である。溝基底面には凹凸がなく、僅かに北側から南側へ向けて傾斜



第79図 SD2断面図・出土遺物実測図

をなす（比高差 3cm）。溝からは、土師器や須恵器の破片が数点出土したが、図化しうるものはない。なお、SD1 は水田耕作に伴う水路として機能した可能性が高い。

時期：時期特定は難しいが、水田址と同時期と考えられることから、概ね室町時代とする。

SD2（第 79 図、図版 21）

調査区中央部北寄り B・C2 区で検出した東西方向の溝で、第Ⅲ①層上面での検出であるが、調査壁の土層観察により、第Ⅱ①層上面から掘削された遺構である。規模は検出長 1.50m、幅 0.22～0.25 m、深さ 15cm である。断面形態は「U」字状をなし、埋土は暗灰色土（N3/）であるが、溝基底面には少量の砂が部分的に堆積している。溝基底面には凹凸はなく、僅かに西側から東側へ向けて傾斜をなす（比高差 2cm）。溝からは土師器坏（1/2 の残存）が、基底面付近から出土した。

出土遺物（図版 22）

2 は推定口径 8.8cm を測る土師器坏の底部片で、底部外面には回転糸切り痕が残る。

時期：出土遺物が僅少で時期特定は難しいが、概ね鎌倉時代、13 世紀後半の溝と考えられる。

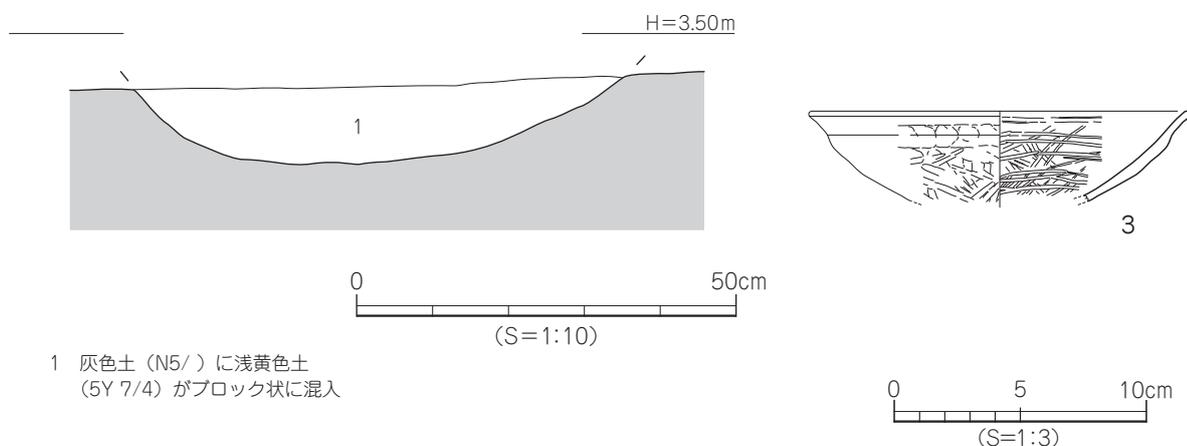
SD3（第 80 図、図版 21）

調査区北側 B・C2 区で検出した東西方向の溝で、第Ⅲ①層上面での検出であり、溝上面は第Ⅱ①層が覆う。規模は検出長 1.80m、幅 0.45～0.60m、深さは 10～16cm である。断面形態はレンズ状をなし、埋土は灰色土（N5/）に浅黄色土（5Y 7/4）がブロック状に混入する。溝基底面には凹凸はないが、僅かに西側から東側へ向けて傾斜をなす（比高差 2.5cm）。溝からは土師器片や瓦器の破片が数点出土した。

出土遺物（図版 22）

3 は瓦器碗。推定口径 15.0cm を測り、体部上位外面には僅かに稜をもつ。体部内外面にはヘラミガキを施し、体部内面には平行線状の暗文がみられる。

時期：時期特定は難しいが、SD2 に先行することから、概ね 13 世紀後半以前の溝と考えられる。



第 80 図 SD3 断面図・出土遺物実測図

SD4 (第 81 図、図版 21)

調査区北側 B・C2 区で検出した東西方向の溝で、第Ⅲ①層上面での検出であり、溝上面は第Ⅱ⑩層が覆う。規模は検出長 2.30m、幅 0.40～0.80m、深さは 10～17cm である。断面形態は「V」字状をなし、埋土は上位が灰色土 (5Y 5/1)、下位が灰色土 (N4/) である。溝基底面は平坦で、遺物は埋土中より土師器や須恵器の小片が数点出土した。

出土遺物 (図版 22)

4 は土師器環。推定口径 12.0cm、器高 3.6cm を測り、体部は内湾する。底部外面には、回転糸切り痕が残る

時期：出土遺物の特徴と SD2 に先行することから鎌倉時代、13 世紀後半以前の溝と考えられる。

3. その他の遺構と遺物

調査では、第Ⅲ①層上面にて 12 基の柱穴を検出した。このほか、第Ⅱ⑫層及び第Ⅱ⑭層中からは平安時代から室町時代までの遺物が少量出土した。

(1) 柱 穴

調査では、12 基の柱穴を検出した。柱穴掘り方埋土は、以下の 2 種類である。

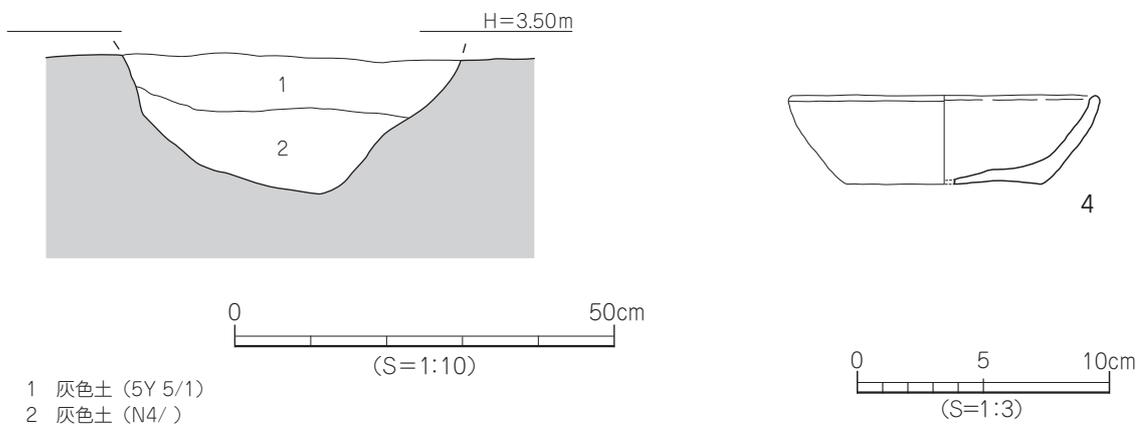
①類：灰色土 (N4/) に浅黄色土 (2.5Y 7/4) がブロック状に混入・・・10 基 [SP1～5・7・8・10～12]

②類：暗灰色土 (N3/) に浅黄色土 (2.5Y 7/4) がブロック状に混入・・・2 基 [SP6・9]

各柱穴からは、鎌倉時代の土師器や瓦質土器の破片が少量出土した。なお、SP7 と SP11 には炭化物が少量含まれていた。

(2) 包含層出土遺物 (第 82 図、図版 22)

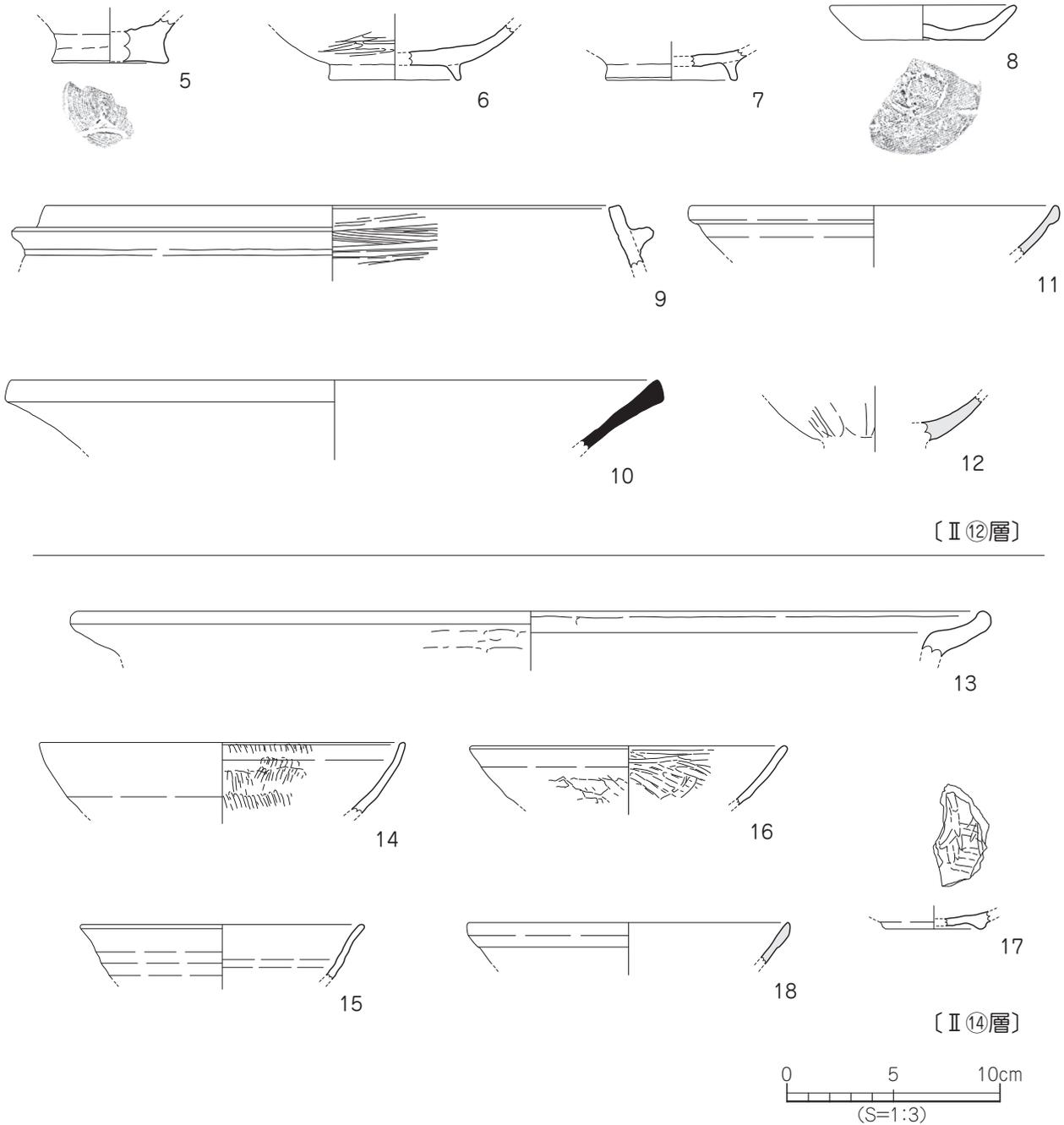
5～12 は第Ⅱ⑫層出土品。5 は土師器環。円盤高台状の底部で、底部外面には回転糸切り痕が残る。6・7 は土師器椀。底部片で、6 の体部外面下位にはヘラミガキを施す。8 は土師器皿。推定口径 8.5cm、器高 1.6cm を測り、底部外面には回転ヘラ切り痕が残る。9 は土師器土釜。断面三角形状の凸帯を貼



第 81 図 SD4 断面図・出土遺物実測図

り付け、口縁端部は内傾する。口縁部内面には、ハケメ調整がみられる。11は白磁碗。玉縁状口縁で、胎土は灰白色をなし、薄緑白色の釉が掛けられている。12は龍泉窯系青磁碗で、体部外面には鎬蓮弁文が描かれている。胎土は灰色をなし、濃緑青色に釉が掛けられている。

13～18は第Ⅱ⑭層出土品。13は土師器土鍋。口縁部は内湾し、口縁端部は上方に肥厚する。14・15は土師器碗。14の体部は内湾し、体部内面にはヘラミガキを施す。16・17は瓦器碗で、体部内面にはヘラミガキを施す。18は白磁碗。小さな玉縁状口縁で、胎土は灰白色をなし、透明釉が掛けられている



第82図 包含層出土遺物実測図

第4節 小 結

余戸柳井田遺跡2次調査では、平安時代から室町時代の遺構・遺物を確認した。平安時代の遺構は未検出であるが、包含層中より12世紀代の遺物が出土している。鎌倉時代の遺構は、標高3.5m前後の地点にて溝や柱穴を検出した。第Ⅲ①層上面で検出した3条の溝は全て東西方向に延びており、出土遺物よりSD2は鎌倉時代後半、13世紀後半頃と考えられ、SD3・4はSD2より先行する時期の溝と考えられる。溝の用途は断定できないが、埋土中に砂を含まないことから、地割りや区画のための遺構と推測される。また、第Ⅲ①層上面からは柱穴12基を検出したが、建物を構成するには至らなかった。しかしながら、調査地近隣には建物が存在する可能性が高いものと判断される。なお、柱穴からは時期特定しうる遺物の出土はないが、検出層位より鎌倉時代の遺構と考えられる。一方、室町時代では水田址を検出した。第Ⅱ⑧層、第Ⅱ⑨層及び第Ⅱ⑩層が水田土壌であり、数多くの足跡を確認した。検出状況からは少なくとも2時期の水田址が存在することが判明している。調査地に隣接する余戸柳井田遺跡1次調査においても無数の足跡を発見した水田層が検出されており、室町時代において調査地一帯には広範囲に水田が営まれていたものと考えられる。

遺構一覧・遺物観察表 - 凡例 -

以下の表は、本調査地検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。

(1) 遺構一覧表

- 地区欄 グリッド名を記載。
 規模欄 () は現存値を示す。
 埋土欄 複数の土層がある場合は、以下のように記載している。
 例) 「暗灰色土 他」
 出土遺物欄 遺物名称を略記した。
 例) 土→土師器、須→須恵器

(2) 遺物観察表

- 法量欄 () : 復元推定値
 調整欄 土器の各部位名称を略記した。
 例) 口→口縁部、体→体部、底→底部
 胎土欄 胎土欄は混和剤を略記した。
 例) 石→石英、長→長石
 () の中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。
 例) 石・長 (1~2) → 「1~2mm大の石英・長石を含む」である。
 焼成欄 焼成欄の略記について
 ◎→良好

表50 溝一覧

溝(SD)	地区	方向	断面形	規模 長さ×幅×深さ(m)	埋土	出土遺物	時期	備考
1	B・C2	東西	レンズ状	(3.00) × 0.45 × 0.14	オリーブ色砂	土・須	室町時代	
2	B・C2	東西	U字状	(1.50) × 0.25 × 0.15	暗灰色土	土	13世紀後半	
3	B・C2	東西	レンズ状	(1.80) × 0.60 × 0.16	灰色土 (浅黄色土混入)	土・瓦器	13世紀後半以前	
4	B・C2	東西	V字状	(2.30) × 0.80 × 0.17	灰色土	土・須	13世紀後半以前	

余戸柳井田遺跡2次調査

表 51 足跡出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
1	皿	底径 (6.0) 残高 1.5	底部片。底部外面に回転糸切り痕あり。1/4の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰褐色 灰褐色	長 (1) ◎	第II⑦層	

表 52 溝出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
2	坏	底径 (8.8) 残高 1.5	底部片。底部外面に回転糸切り痕あり。	ヨコナデ	ヨコナデ	黄灰色 黄灰色	密 ◎	SD2	22
3	椀	口径 (15.0) 残高 3.6	瓦器椀。内面に平行線状の暗文あり。1/5の残存。	㊦ヨコナデ ㊧ヘラミガキ	ヘラミガキ	暗灰色 暗灰色	密 ◎	SD3	22
4	坏	口径 (12.0) 底径 (7.6) 器高 3.6	体部は内湾し、口縁端部は丸い。底部外面に回転糸切り痕あり。1/3の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	黄灰色 黄灰色	長 (1) ◎	SD4	22

表 53 包含層出土遺物観察表 土製品

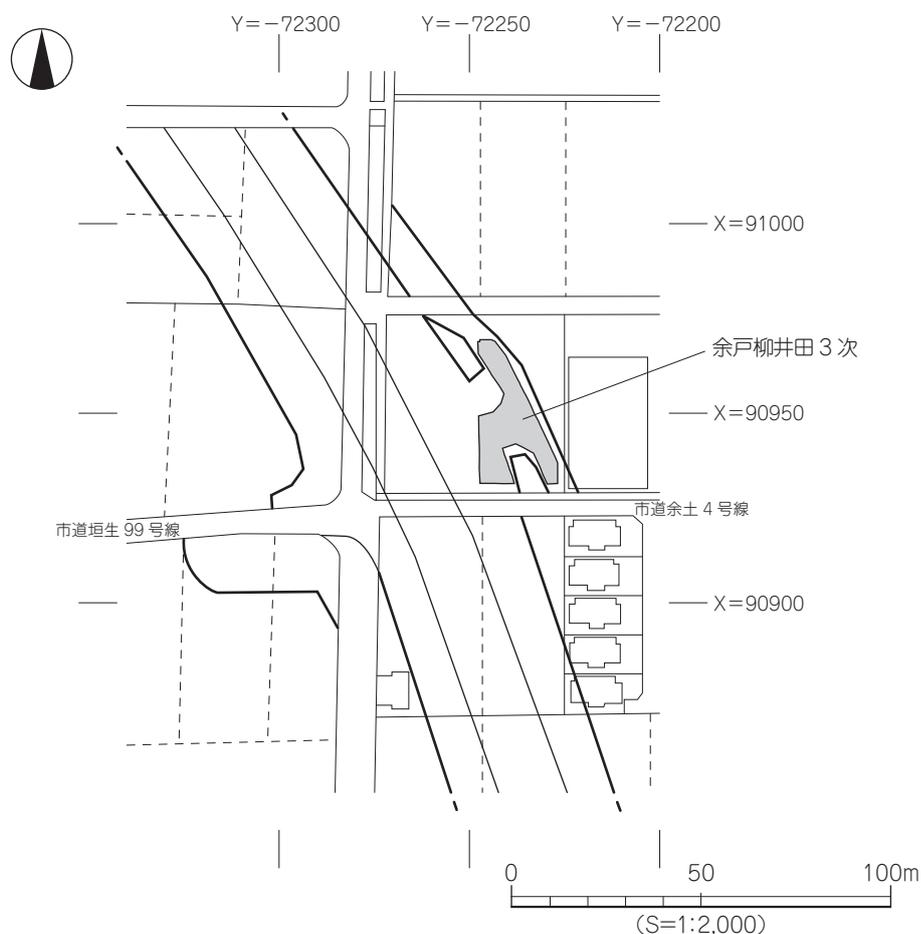
番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
5	坏	底径 (5.3) 残高 2.1	円盤高台状の底部。底部外面に回転糸切り痕あり。3/4の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	橙色 橙色	石・長 (1~2) ◎	第II⑫層	22
6	椀	底径 (6.0) 残高 2.6	断面三角形の高台を貼付ける。1/3の残存。	㊧ヘラミガキ ㊨ヨコナデ	ヨコナデ	灰黄色 灰黄色	密 ◎	第II⑫層	22
7	椀	底径 (6.0) 残高 1.4	断面三角形の高台を貼付ける。1/3の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ・ナデ	灰黄色 灰黄色	密 ◎	第II⑫層	
8	皿	口径 (8.5) 底径 (5.1) 器高 1.6	底部外面に回転ヘラ切り痕あり。1/3の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰褐色 灰褐色	石 (1~2) ◎	第II⑫層 黒斑	22
9	土釜	口径 (27.0) 残高 2.9	断面三角形の凸帯を貼付け、口縁端部は内傾する。小片。	ヨコナデ	ハケ (7~9本/cm)	褐色 褐色	石・長 (1~3) ◎	第II⑫層	22
10	こね鉢	口径 (30.0) 残高 3.2	東播系須恵器。小片。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 灰色	密 ◎	第II⑫層	22
11	碗	口径 (17.0) 残高 2.3	白磁。玉縁状口縁。小片。	施釉	施釉	薄緑白色 薄緑白色	密 (灰白色) ◎	第II⑫層	22
12	碗	残高 2.0	青磁。外面に鎬蓮弁文あり。小片。	施釉	施釉	濃緑青色 濃緑青色	密 (灰色) ◎	第II⑫層	22
13	土鍋	口径 (42.4) 残高 2.1	内湾口縁。口縁端部は肥厚する。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	暗褐色 褐色	石・長 (1~3) ◎	第II⑬層 煤附着	22
14	椀	口径 (17.0) 残高 3.3	体部は内湾し、口縁端部は丸く仕上げる。小片。	ヨコナデ	㊦ヨコナデ ㊧ヘラミガキ	黄灰色 黄灰色	密 ◎	第II⑬層	
15	椀	口径 (13.2) 残高 2.6	外反口縁。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰黄色 灰黄色	密 ◎	第II⑬層	22
16	椀	口径 (14.6) 残高 2.8	瓦器。小片。	ヨコナデ・ナデ	ヘラミガキ	暗灰色 暗灰色	密 ◎	第II⑬層	
17	椀	底径 (4.5) 残高 0.8	瓦器。丸味のある断面三角形の高台を貼付ける。1/3の残存。	ヨコナデ	ヘラミガキ	暗灰色 灰色	密 ◎	第II⑬層	22
18	碗	口径 (15.0) 残高 1.9	白磁。玉縁状口縁。小片。	施釉	施釉	灰白色 灰白色	密 (灰白色) ◎	第II⑬層	22

第9章 余戸柳井田遺跡3次調査

第1節 調査の経緯

余戸柳井田遺跡3次調査は、松山市余戸西四丁目2187番3、2188番3を調査対象地とし、調査面積は約450㎡である。調査地は、余戸柳井田遺跡1次調査の北方に隣接している。事前に行った試掘調査の結果、遺構面が2面存在していることが明らかになっており、発掘調査も1面と2面で遺構検出や掘削、測量作業を実施した。なお、調査期間は平成27年11月1日から平成28年2月19日までである。以下、調査工程を略記する。

平成27年11月1日、重機を使用して表土層の掘削作業を開始する。地表下約60cmの地点で遺構を検出したことから、以後、作業員による遺構検出作業や掘削作業を進めた。遺構面からは、無数の足跡が検出された。11月9日より、足跡の掘り下げを開始する。足跡は総数3,000個以上あり、およそ3週間を費やし、足跡の掘り下げを終了する。12月2日より、網掛測量により足跡の平面図を作成する。12月19日、1面の調査が終了し、ドローンを使用して足跡の完掘状況写真を撮影する。12月22日より、重機を使用した水田層の掘削を開始する。地表下30cm程度掘り下げた地点にて柱穴や溝を検出し、以後、作業員による遺構検出作業を行う。2月10日、遺構の掘削と測量作業を終了し、



第83図 調査地位置図

完掘状況写真を撮影した。2月12日より、重機を使用して調査地の埋戻し作業を行う。2月19日、本日にて発掘調査を終了した。

第2節 層位 (第84～86図)

調査地は、調査以前は水田として利用されていた。現況の標高は、4.6 m前後である。調査で確認した土層は、以下の13層である。なお、第2章で説明した基本層位のうち、本調査では第Ⅰ層、第Ⅱ層及び第Ⅲ層を検出した。

第Ⅰ層：近現代の農耕に伴う客土で、土色・土質の違いにより4種類に分層される。

第Ⅰ①層－現耕作土〔青灰色土(10BG 5/1)〕で、層厚8～15cmである。

第Ⅰ②層－現床土〔にぶい黄色土(2.5Y 6/4)〕で、層厚は4～15cmである。

第Ⅰ③層－旧耕作土〔灰オリーブ色土(7.5Y 6/2)〕で、層厚は10～20cmである。

第Ⅰ④層－旧耕作土〔灰オリーブ色土(5Y 6/2)〕で、層厚は4～15cmである。

第Ⅱ層：中世段階の土壌で、土色・土質の違いにより7種類に分層される。

第Ⅱ①層－浅黄色土(5Y 7/3)で、層厚は8～20cmである。

第Ⅱ②層－暗灰黄色土(2.5Y 5/2)で、層厚は10～30cmである。

第Ⅱ③層－灰白色微砂(10Y 7/2)で、水田層を覆う洪水砂と考えられる。層厚は4～8cmであり、本層中からは室町時代の土師器片や陶磁器片が少量出土した。

第Ⅱ④層－灰色粘質土(10Y 5/1)で粘性が強く、本層が水田土壌である。本層上面にて、無数の足跡を検出した。層厚は、15～40cmである。

第Ⅱ⑤層－褐灰色土(10YR 5/1)で、調査区南半部にみられ、層厚は6～10cmである。本層中からは、鎌倉時代の土師器片や須恵器片、陶磁器片が比較的多く出土した。とりわけ、調査区南西部からは本層掘り下げ時に完形品を含む大量の土器がまとまって出土した。

第Ⅱ⑥層－灰黄色土(2.5Y 6/2)で、層厚は2～40cmである。本層中からは鎌倉時代の土師器片や須恵器片などが少量出土した。

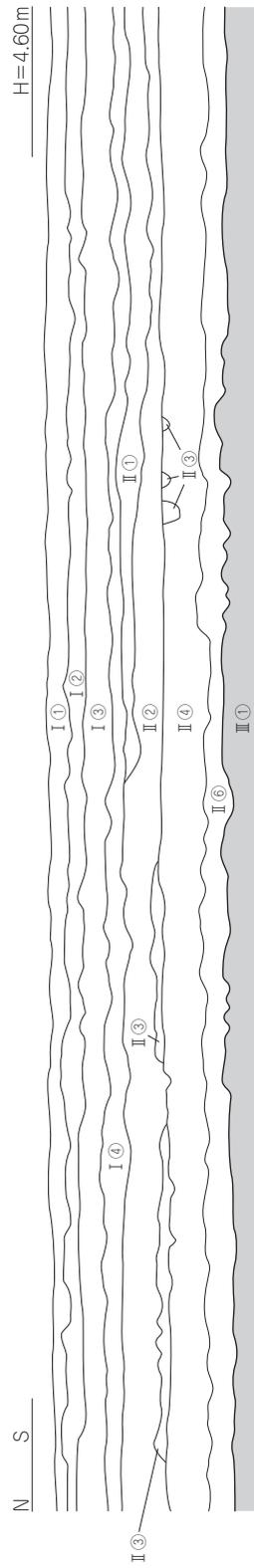
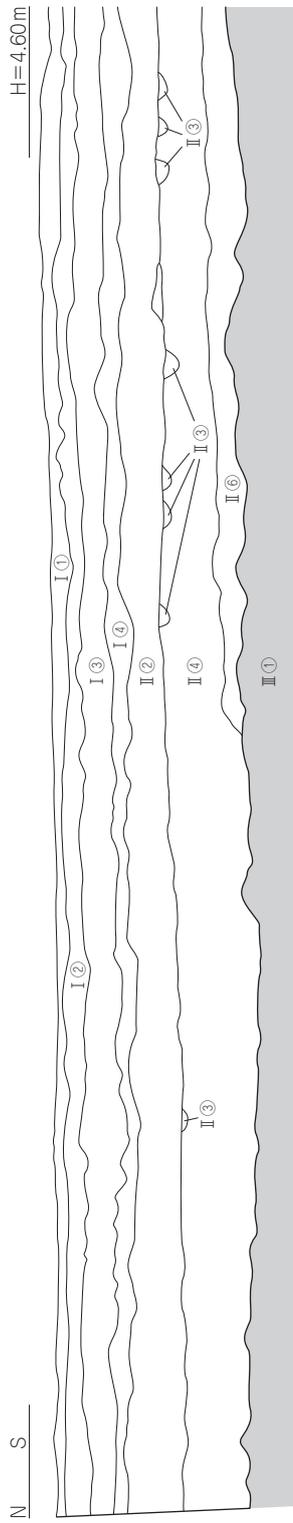
第Ⅱ⑦層－灰黄褐色土(10YR 5/2)で、層厚2～15cmである。本層中からは、遺物の出土はみられなかった。

第Ⅲ層：土色・土質の違いにより、2種類に分層される。

第Ⅲ①層－浅黄色土(2.5Y 7/4)で、本層上面が調査における最終遺構検出面である。層厚は10～16cmである。

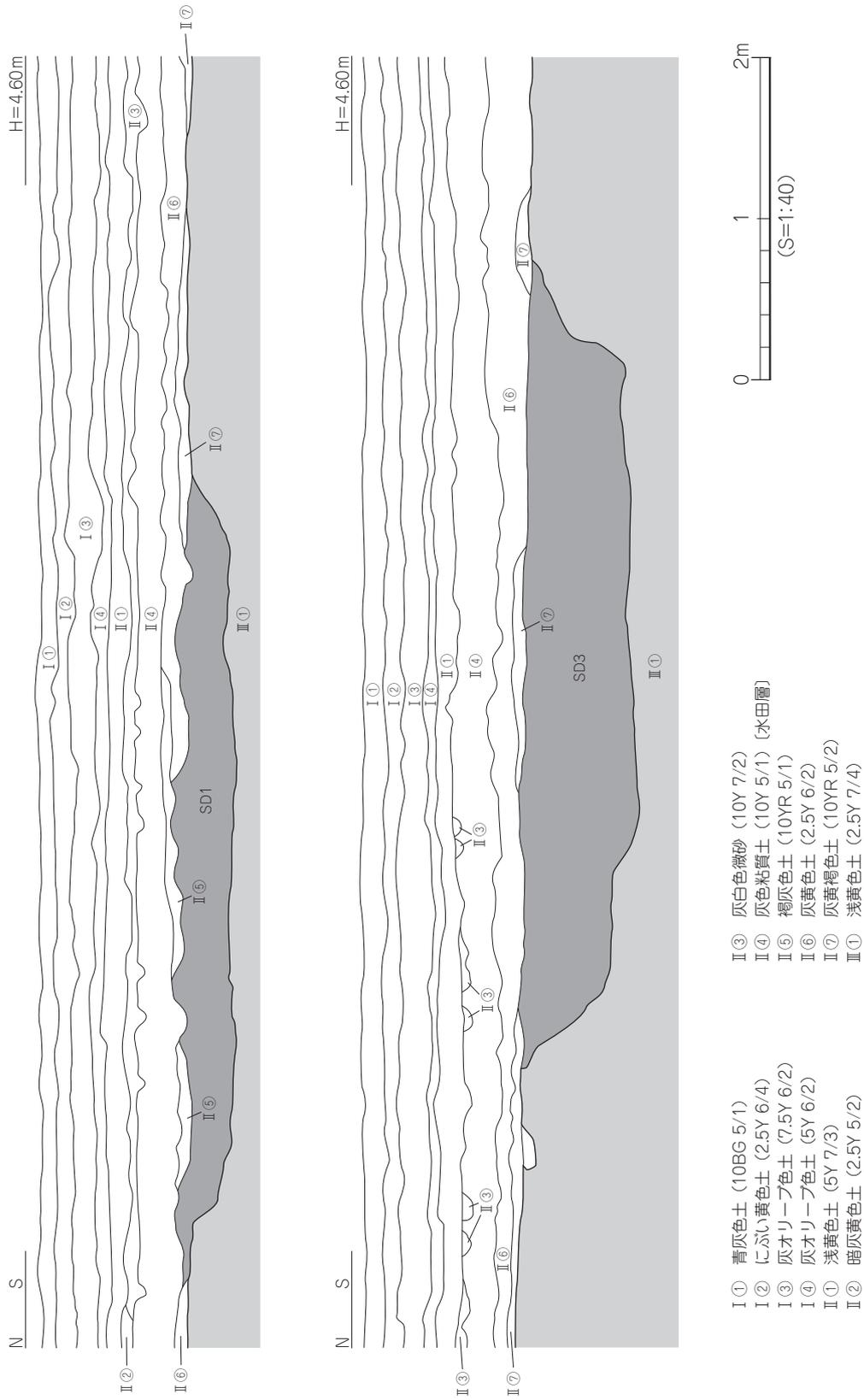
第Ⅲ②層－本層は、深掘トレンチによって確認した土層である。青灰色粘質微砂(5B 5/1)で、層厚は15cm以上である。

なお、調査にあたり調査区内を5m四方のグリッドに分けた。グリッドは西から東へA・B・C・D・E、北から南へ1・2・3・・・8とし、A1・A2・・・E8区といったグリッド名を付した。グリッドは、遺構の位置表示や遺物の取り上げ等に利用した。本調査の座標値は、X = 90931～90971、Y = -72227～-72248である。

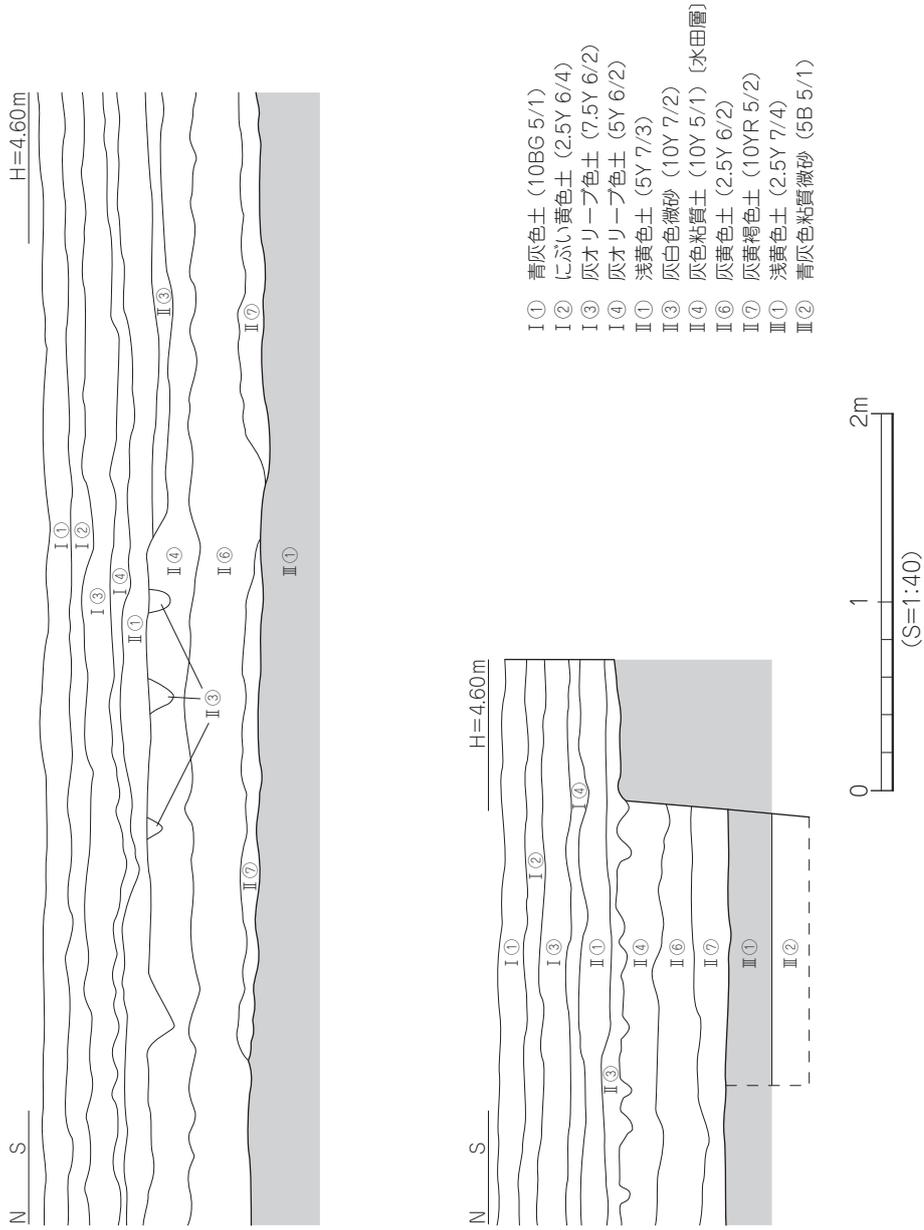


- | | | | |
|------|--------------------|------|-----------------------|
| I ① | 青灰色土 (10BG 5/1) | II ② | 暗灰黄色土 (2.5Y 5/2) |
| I ② | にぶい黄色土 (2.5Y 6/4) | II ③ | 灰白色微砂 (10Y 7/2) |
| I ③ | 灰オリーブ色土 (7.5Y 6/2) | II ④ | 灰色粘質土 (10Y 5/1) (水田層) |
| I ④ | 灰オリーブ色土 (5Y 6/2) | II ⑥ | 灰黄色土 (2.5Y 6/2) |
| II ① | 浅黄色土 (5Y 7/3) | II ① | 浅黄色土 (2.5Y 7/4) |

第84図 東壁土層図 (1)



第 85 図 東壁土層図 (2)

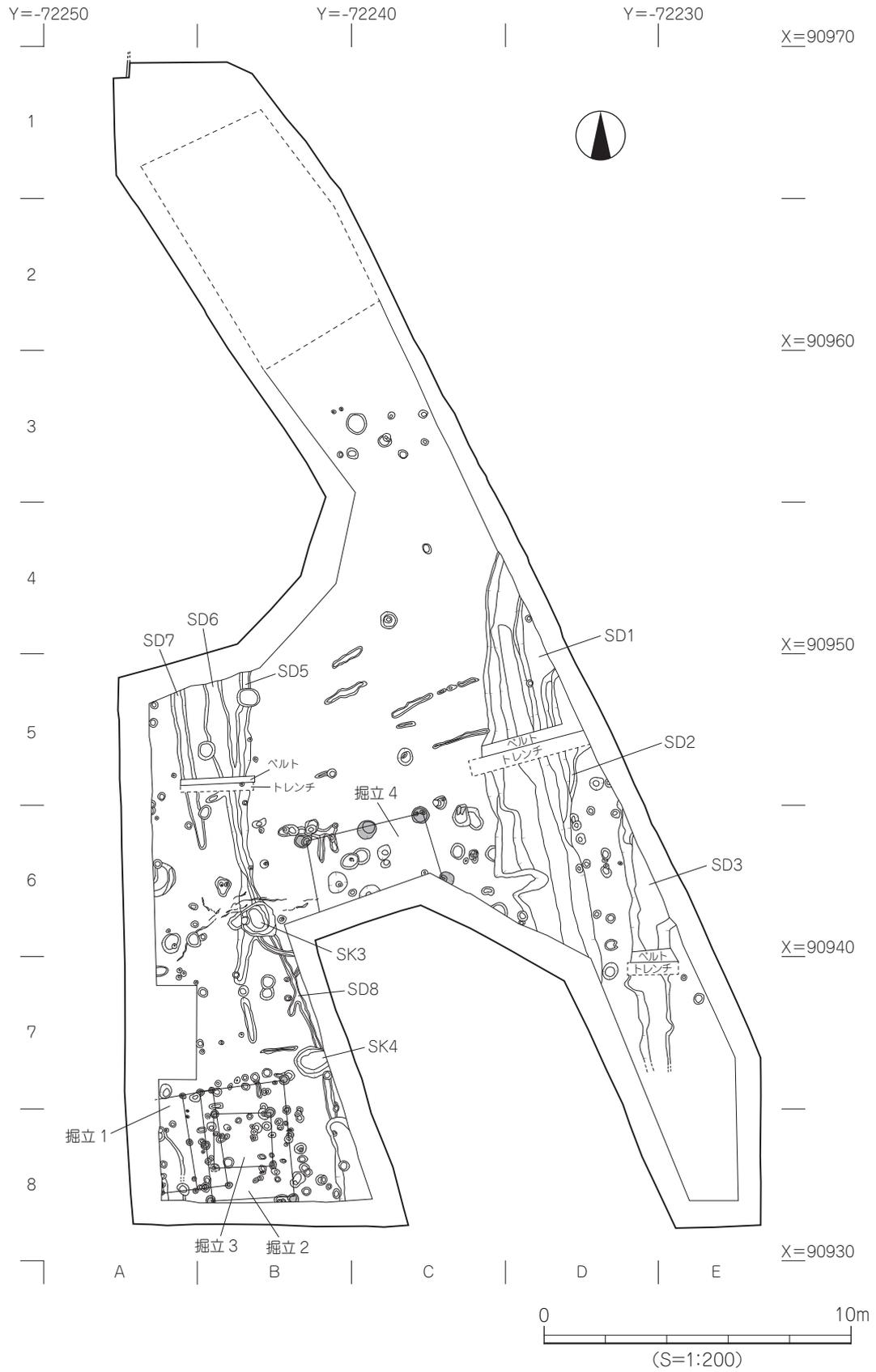


第 86 図 東壁土層図 (3)



第 87 図 足跡検出状況図〔第Ⅱ④層上面〕

層位



第 88 図 遺構配置図〔第Ⅱ⑦・Ⅲ①層上面〕

第3節 遺構と遺物

余戸柳井田遺跡3次調査では、第Ⅱ④層及び第Ⅱ⑦・Ⅲ①層上面にて遺構を検出した。第Ⅱ④層上面では水田耕作に伴う足跡、第Ⅱ⑦・Ⅲ①層上面からは掘立柱建物4棟、溝7条、土坑2基、土壙墓1基、柱穴235基を検出した。遺物は鎌倉時代から室町時代の土師器や須恵器、瓦質土器、陶磁器のほか、木製品や種子等が出土した。なお、遺物の出土量は収納箱（44×60×14cm）約12箱分である。

1. 水田址（第87図、図版23）

調査では第Ⅱ④層上面にて、水田耕作に伴う足跡を検出した。足跡には人間や牛があり、牛と思われる足跡が2,077個あり、足跡総数は3,776個である。足跡の密度は人間が2～8個/m²（平均4.3個）、牛は3～15個/m²（平均8.3個）である。足跡は径8～22cm、深さ1～5cmであり、第Ⅱ③層と同様の灰白色微砂（10Y 7/2）で埋没している。検出状況より、足跡は真北方向に対して平行あるいは直交方向に進んでおり、真北を指向した水田区画が存在したものと考えられる。しかしながら、畦畔や水路等の施設は確認できなかったため、正確な水田の形状や規模等は不明である。足跡からは土師器の小片が少量出土したが、時期特定しうるものはない。

時期：水田址を覆う第Ⅱ②層中からは室町時代に使用された遺物が出土しており、時期特定は難しいが、概ね室町時代の水田址と考えられる。

2. 掘立柱建物

調査では、4棟の掘立柱建物址を検出した。

掘立2（第89図、図版24）

調査区南西隅B7・8区に位置する建物址で、6基の柱穴（SP55・70・82・135・166・188）で構成される南北2間、東西1間の南北棟である。第Ⅱ⑦層上面での検出であり、第Ⅱ④層が覆う。建物規模は桁行長3.78m、梁行長2.66m、床面積10.05m²を測り、建物方位をN-13°-Wにとる。建物を構成する柱穴の平面形態は円形または楕円形をなし、規模は径16～32cm、深さ10～32cmである。柱穴掘り方埋土は、黄灰色土（2.5Y 4/1）に浅黄色土（2.5Y 7/3）がブロック状に混入するものである。遺物は柱穴掘り方埋土中より、土師器や瓦器の破片が数点出土した。なお、SP55からは柱材の一部が残存していた。柱径は11cm、残存長20cmである。

出土遺物

1はSP82出土の瓦器皿。推定口径9.0cm、器高1.3cmの小片で、内面にはらせん状の暗文を施す。体部外面には、指頭痕が顕著に残る。色調は、内外面共に黒色である。

時期：出土遺物と検出層位より、掘立2は鎌倉時代、13世紀前半の建物址とする。

掘立4（第90図）

調査区中央部南寄りB・C6区に位置する建物址で、建物南側は調査区外に続く。東西2間、南北1間以上の建物址である。第Ⅱ⑦層上面での検出であり、第Ⅱ④層が覆う。建物規模は東西長4.00m、南北検出長2.24mを測り、建物方位をN-11°-Wにとる。建物を構成する4基の柱穴（SP18・93・101・156）の平面形態は円形または楕円形をなし、規模は径45～60cm、深さ10～25cmである。柱

穴掘り方埋土は、灰色土（5Y 6/1）に浅黄色土（2.5Y 7/3）がブロック状に混入するものである。遺物は柱穴掘り方埋土中より、土師器や瓦器の小片が数点出土した。

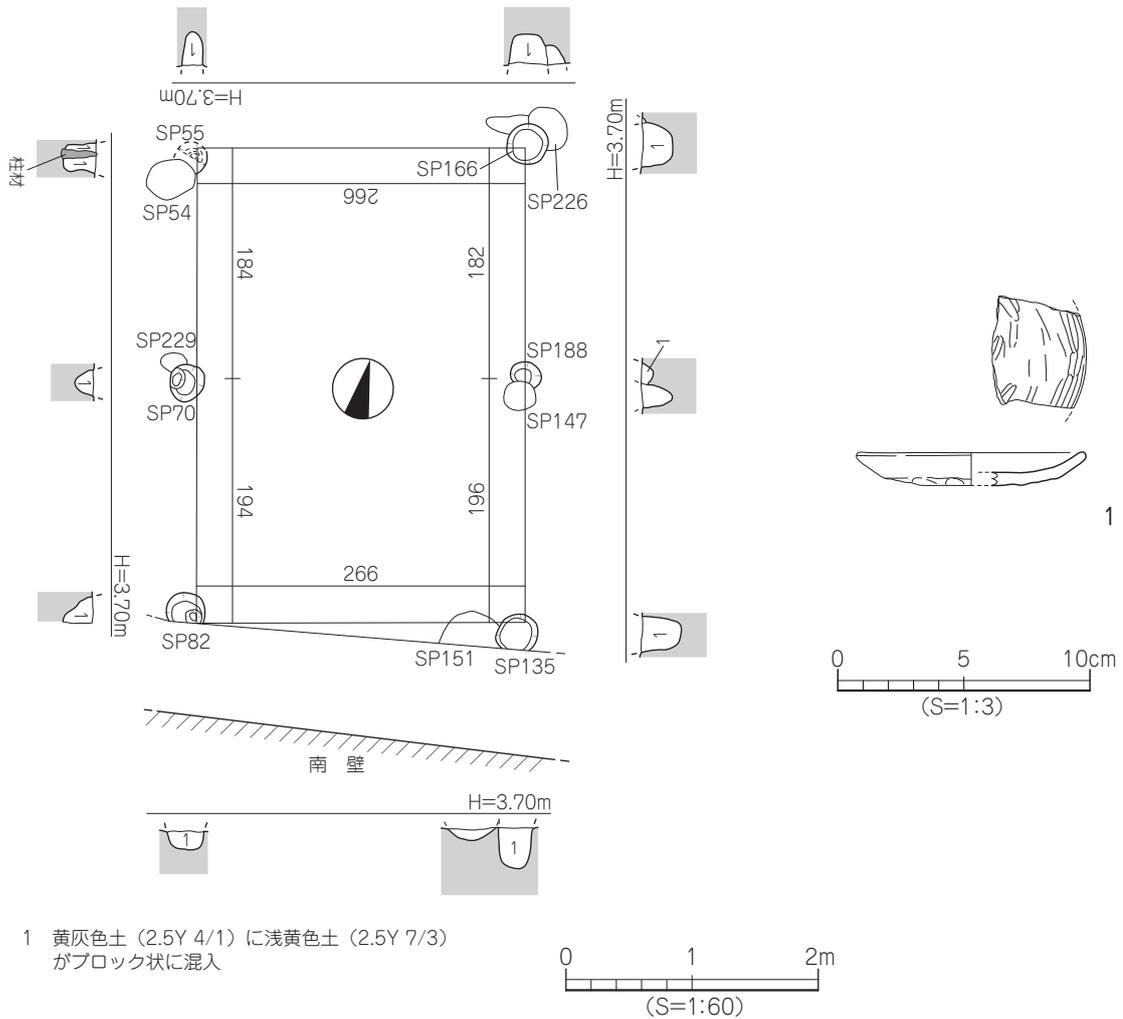
出土遺物

2はSP18出土の土師器椀。底部片で、断面三角形状の高台を貼り付ける。底部内面には、ヘラミガキを施す。色調は、内外面共に灰白色である。

時期：出土遺物の特徴より、鎌倉時代、13世紀前半の建物址とする。

掘立3（第91図、図版24）

調査区南西隅B8区に位置する建物址で、4基の柱穴（SP68・74・90・173）で構成される南北1間、東西1間の建物址である。第Ⅱ⑦層上面での検出であり、第Ⅱ④層が覆う。建物規模は桁行長1.87m、梁行長1.78mを測り、建物方位をN-7°-Wにとる。建物を構成する柱穴の平面形態は円形または楕円形をなし、規模は径25～38cm、深さ35～45cmである。柱穴掘り方埋土は、掘立2と同様、黄灰色土（2.5Y 4/1）に浅黄色土（2.5Y 7/3）がブロック状に混入するものである。遺物は柱穴掘り方埋土中より、土師器小片や瓦器片が数点出土した。なお、SP74からは柱材の一部が遺存していた。柱径は14cm、残存長30cmである。なお、SP74の基底は第Ⅲ②層の青灰色粘質微砂に及んでおり、発掘調査時には湧水が認められた。



第 89 図 掘立 2 測量図・出土遺物実測図

出土遺物 (図版 26)

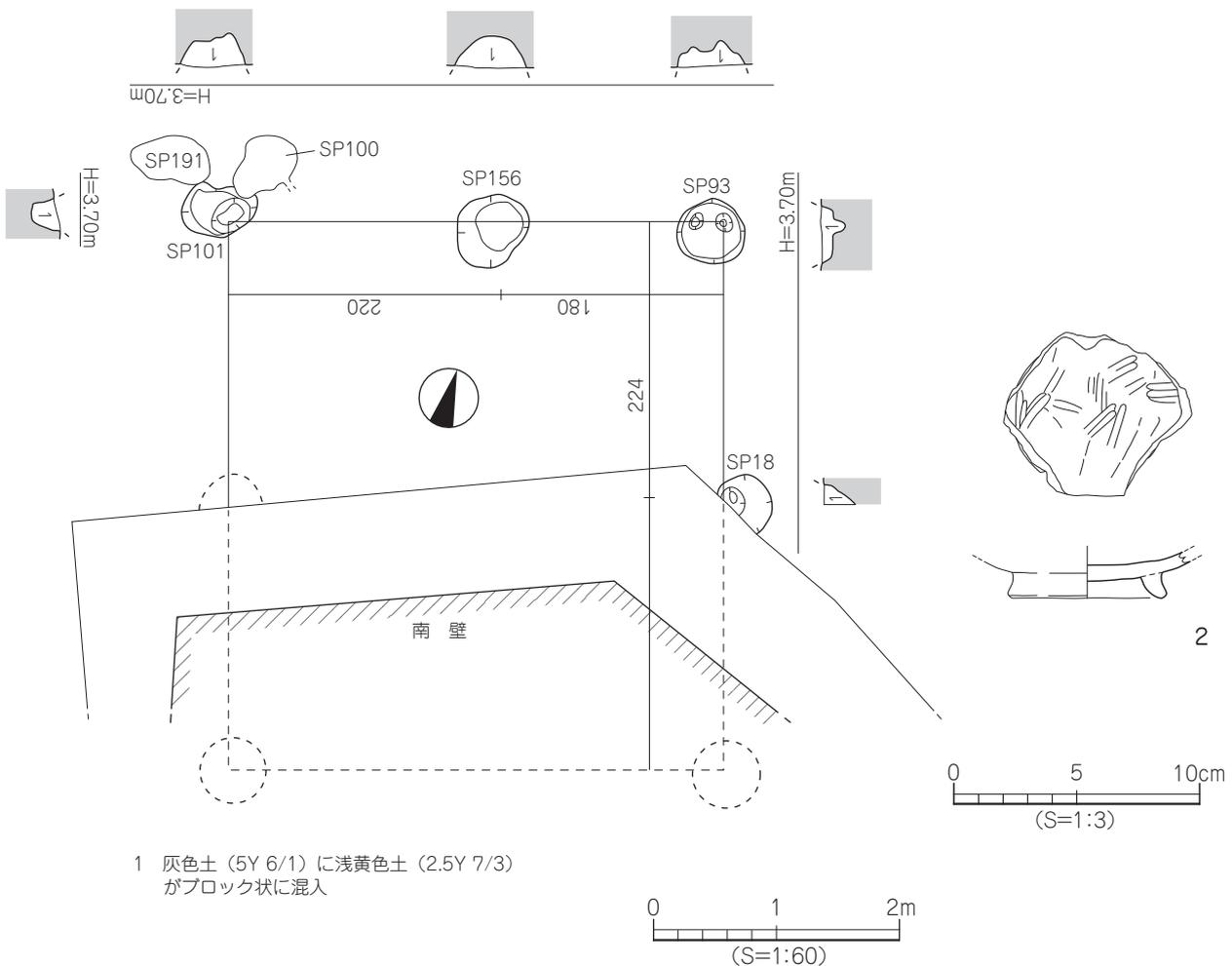
3はSP68出土の土師器坏。推定口径13.4cm、器高3.4cmで、体部は内湾気味に立ち上がり、底部の切り離しは回転糸切り技法による。4はSP74出土品。長さ50.9cm、幅10.1cmの柱材で、六角形状に面取りされ、最大厚は11.6cmである。

時期：出土遺物の特徴より、鎌倉時代、13世紀前半の建物址とする。

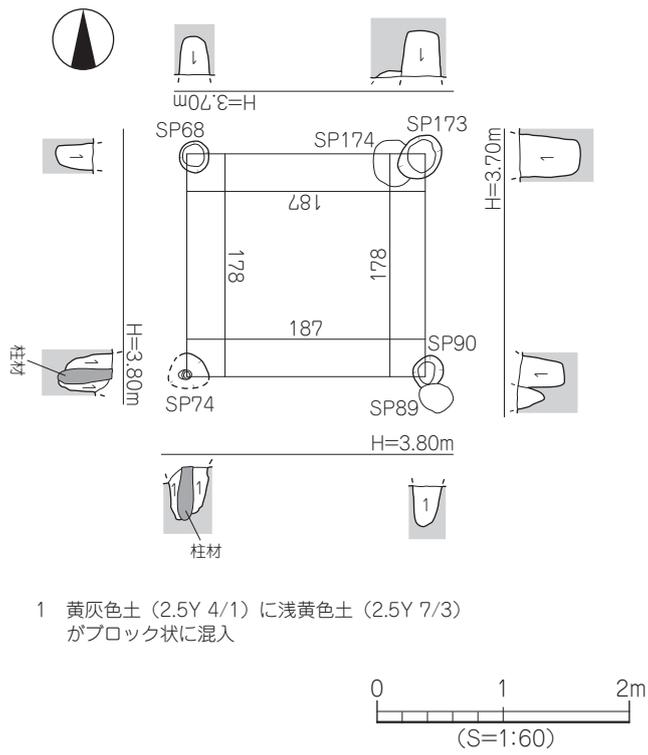
掘立1 (第92図、図版24)

調査区南西隅A7～B8区に位置する建物址で、南北2間、東西2間の南北棟である。第Ⅱ⑦層上面での検出であり、第Ⅱ④層が覆う。規模は桁行長3.15m、梁行長2.08m、床面積6.55㎡で、建物方位をN-7°-Wにとる。建物を構成する7基の柱穴 (SP53・56・69・78・83・155・159) の平面形態は円形または楕円形をなし、規模は径18～25cm、深さ5～30cmである。柱穴掘り方埋土は、掘立2・3と同様、黄灰色土 (2.5Y 4/1) に浅黄色土 (2.5Y 7/3) がブロック状に混入するものである。遺物は柱穴掘り方埋土中より、土師器片が数点出土したが図化しうるものはない。

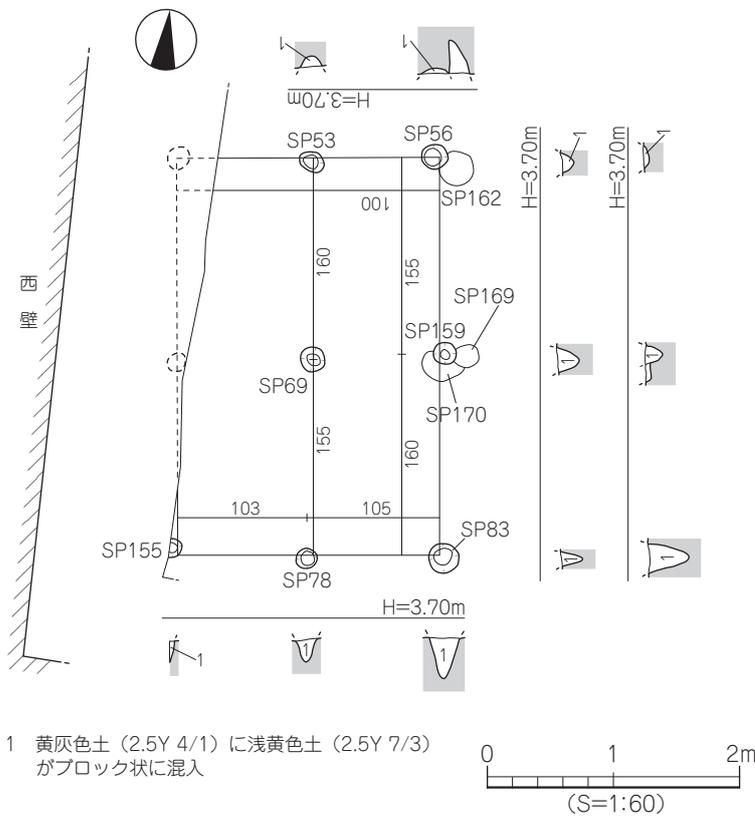
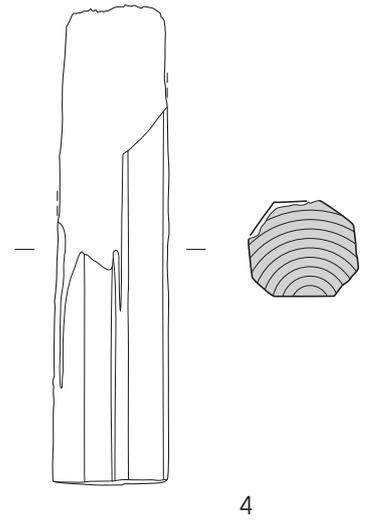
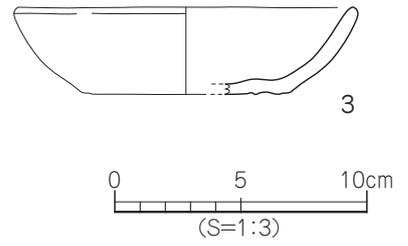
時期：出土遺物や柱穴掘り方埋土が掘立2・3と酷似することから、掘立1は概ね鎌倉時代、13世紀前半頃の建物址と考えられる。



第90図 掘立4測量図・出土遺物実測図



第 91 図 掘立 3 測量図・出土遺物実測図



第 92 図 掘立 1 測量図

3. 溝

調査では、溝7条を確認した。溝は、第Ⅱ⑦層及び第Ⅲ①層上面での検出である。

SD1 (第93図、図版25)

調査区中央部東寄りC4～D7区で検出した南北方向の溝で、溝上面は第Ⅱ⑥層が覆う。溝中央部は溝SD2と重複し、SD1が後出する。規模は検出長14.80m、幅1.60～2.90m、深さは最深部で30cmを測る。断面形態はレンズ状をなし、埋土は灰色粘質土(5Y 5/1)や灰オリーブ色粘質土(5Y 6/2)であるが、溝基底面には灰オリーブ砂(5Y 6/2)が堆積する。溝基底面には凹凸が少なく、北側から南側へ向けて傾斜をなす(比高差8cm)。遺物は埋土中より土師器や須恵器、瓦器のほか陶磁器の破片が比較的多く出土した。

出土遺物 (第94図、図版26)

5は土師器坏。底部片で、外面には回転糸切り痕が残る。6は土師器の内黒椀。断面三角形状の高台を貼り付け、内面にヘラミガキを施す。色調は外面が灰白色、内面は黒色である。7・8は土師器皿。7は完存品で、口径6.4cm、底径5.0cm、器高1.2cmである。7・8共に、底部の切り離しは回転糸切り技法による。9は土師器甕。口縁部は外反し、口頸部内面には稜をもつ。10は瓦器椀。底部片で、断面三角形状の高台を貼り付け、内面にはジグザク状の暗文を施す。色調は、内外面共に灰色である。11は白磁皿。口縁部は短く外反し、灰オリーブ色の釉薬が全面に掛けられている。12は東播系須恵器の鉢。口縁部は、わずかに肥厚する。13は須恵器短頸壺、14は須恵器の甕である。

時期：出土遺物の特徴よりSD1は鎌倉時代後期、13世紀前半の溝とする。

SD2 (第93図、図版25)

調査区中央部東寄り、D5区で検出した南北方向の溝で、溝南側はSD1と重複し、北側は調査区外に続く。規模は検出長4.00m、幅0.60～0.80m、深さは20～36cmである。断面形態はレンズ状をなし、埋土は灰白色砂(7.5Y 7/2)を基調とし、灰色粘質土(5Y 5/1)がブロック状に少量混入するものである。なお、溝基底面には青灰色粘質土が部分的に堆積する。溝基底面には凹凸がなく、僅かに北側から南側へ向けて傾斜をなす(比高差3cm)。溝からは、土師器や須恵器の破片が少量出土した。

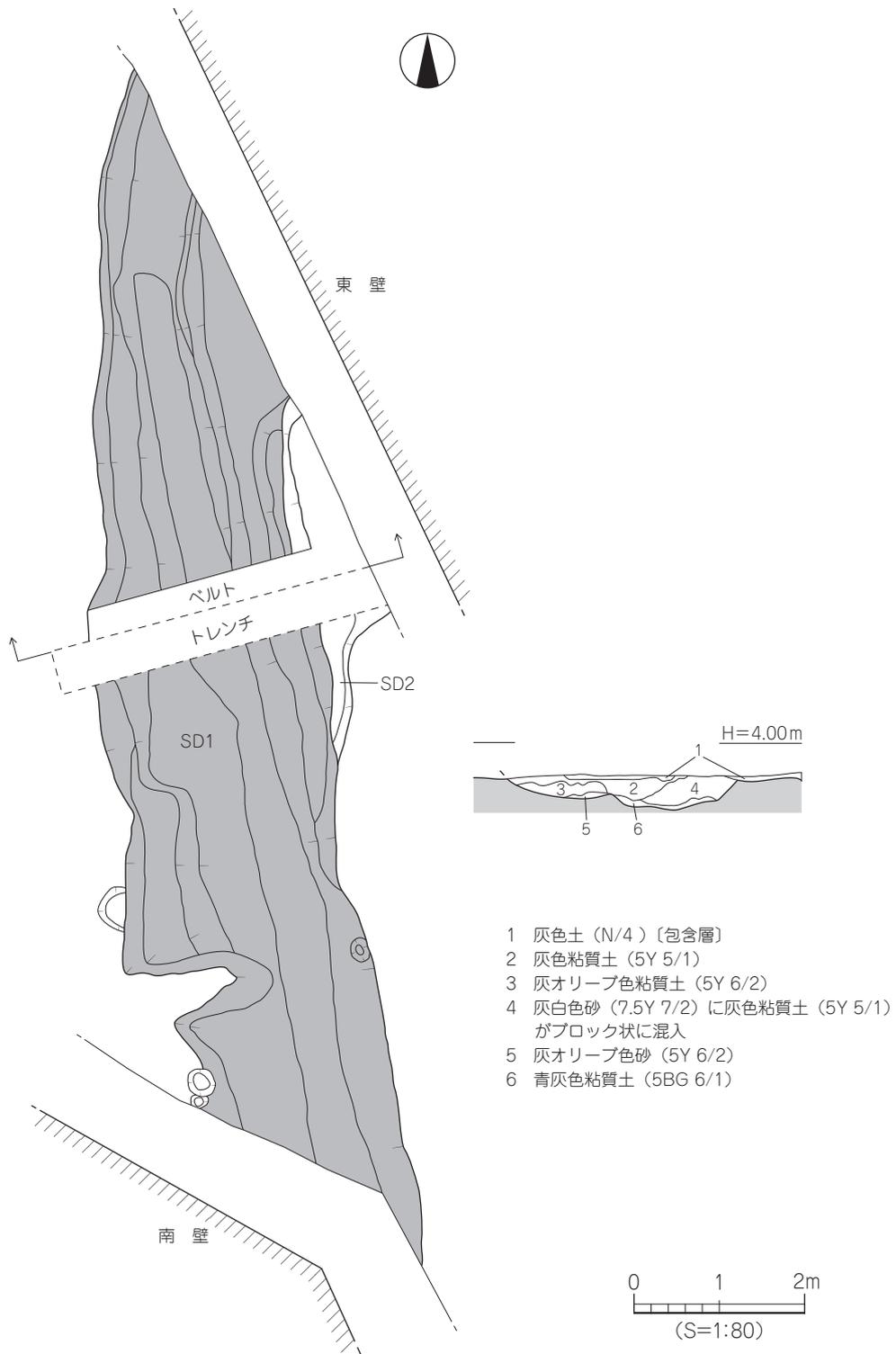
出土遺物 (第94図)

15は土師器坏。底部片で、外面に回転ヘラ切り痕が残る。色調は、内外面共ににぶい黄橙色である。

時期：出土遺物の特徴より、SD2は平安時代後期、12世紀後半頃の溝と考えられる。

SD3 (第95図、図版25)

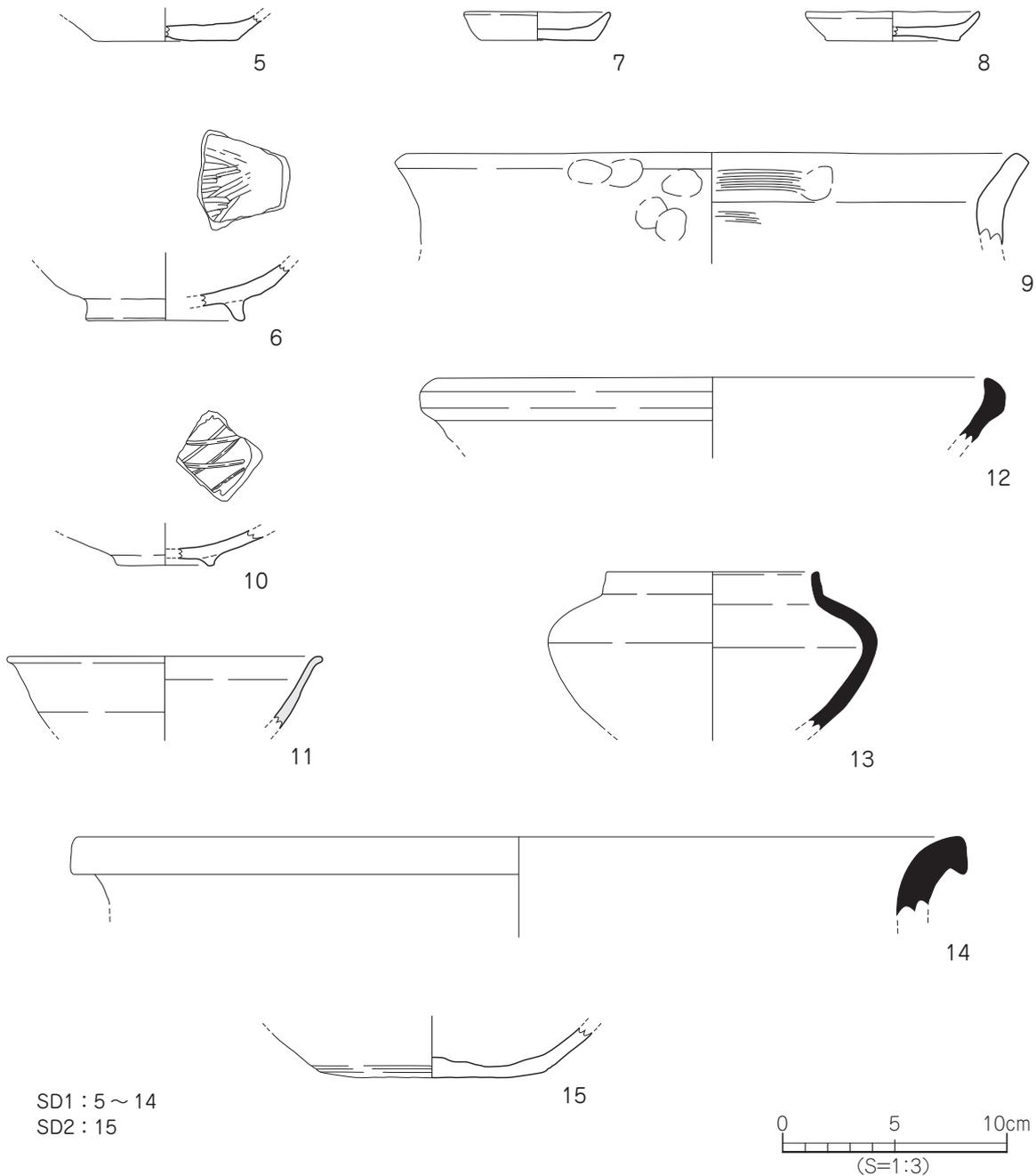
調査区南東部、D5～E7区で検出した南北方向の溝で、溝南端は消失している。第Ⅱ⑦層上面での検出であり、第Ⅱ⑥層が覆う。規模は検出長8.80m、幅0.80～1.50m、深さは26～30cmである。断面形態はレンズ状をなすが、両壁体の一部にはテラス状の平坦面が存在する。埋土は褐灰色土(10YR 5/1)や暗青灰色粘質土(10BG 4/1)である。溝基底面には凹凸がなく、僅かに北側から南側へ向けて傾斜をなす(比高差3cm)。溝からは、土師器や須恵器、瓦器の破片が少量出土したほか、溝中央部の基底面付近からは板状の木製品や木枝などが出土した。



第93図 SD1・2 測量図

出土遺物（第96図、図版26）

16・17は土師器坏。16は体部が内湾し、底部外面には回転糸切り痕が残る。17は円盤高台状の小さな底部片である。18～20は土師器椀。18の口縁部は短く外反し、体部内面にはヘラミガキを施す。20は内黒椀で、丸味のある断面三角形状の高台を貼り付ける。底部外面には、回転糸切り痕が残る。21・22は土師器皿。21は完形品で、口径8.6cm、底径5.8cm、器高1.4cmである。21・22の底部切り離しは、回転糸切り技法による。23は瓦器椀の底部片で、形骸化した高台を貼り付ける。内面には



第94図 SD1・2出土遺物実測図

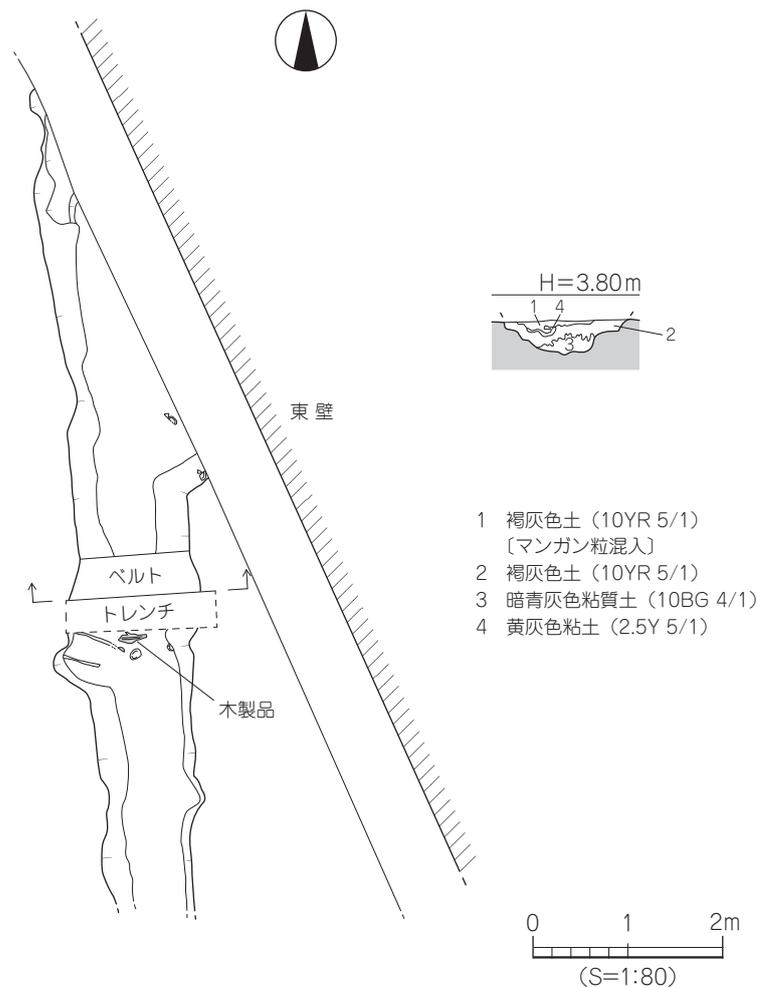
弧状の暗文を施す。色調は、内外面共に暗灰色である。24は東播系須恵器の鉢。小片で、口縁部は僅かに肥厚する。25は板状の木製品。長さ30.6cm、最大幅7.7cm、最大厚は0.6cmである。表面には葉脈あるいは花卉を形どった線刻が施されている。

時期：出土遺物の特徴より平安時代後期から鎌倉時代、12世紀後半から13世紀前半とする。

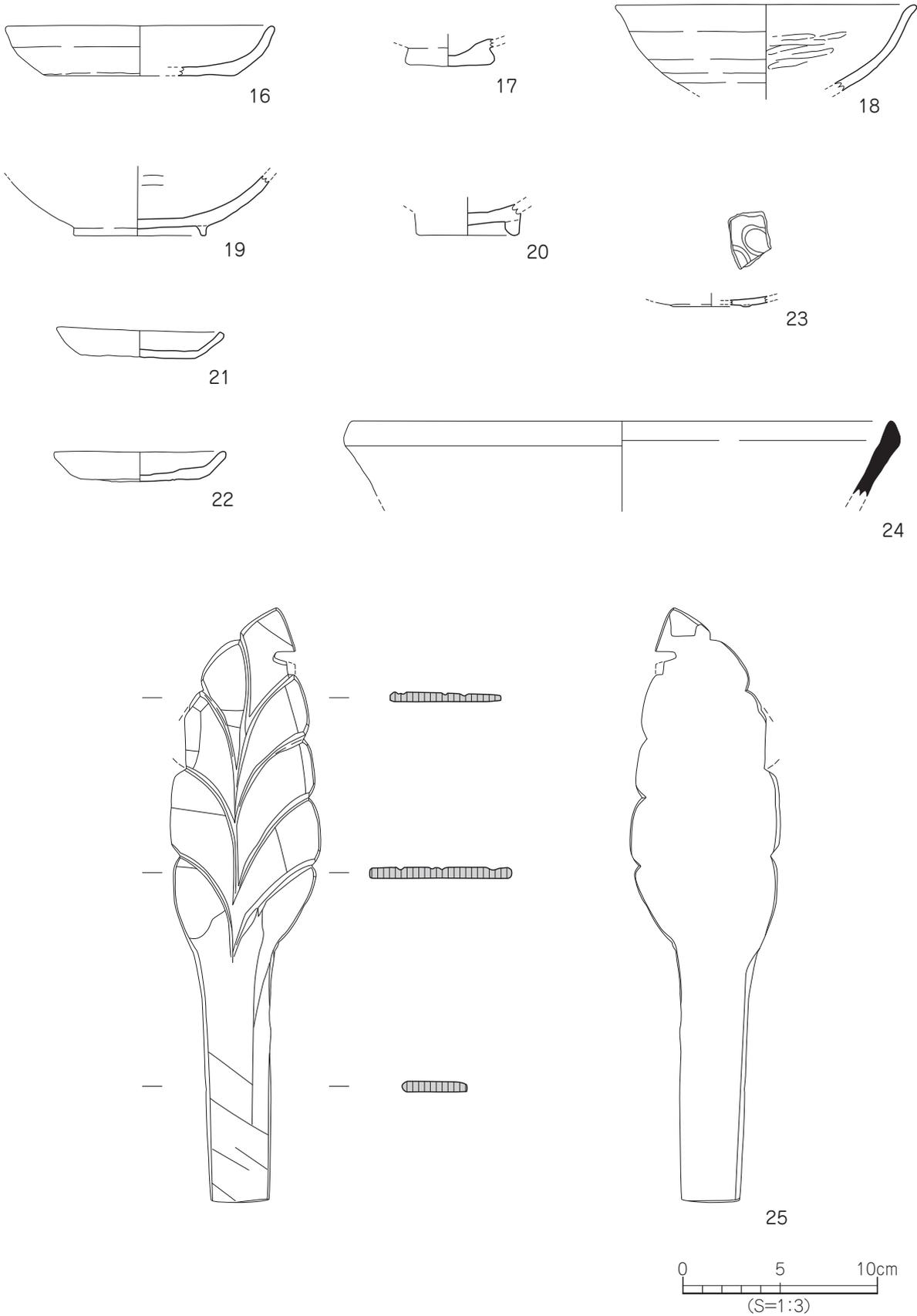
SD5 (第97図)

調査区西部B5～7区で検出した南北方向の溝で、溝中央部はSD6と重複し、北側は調査区外に続く。規模は検出長10.00m、幅0.26～0.34m、深さは3～4cmである。断面形態はレンズ状をなし、埋土は灰黄色土(2.5Y 6/2)単層である。溝基底面は北側から南側に向けて緩傾斜をなす(比高差2cm)。溝からは土師器片が数点出土したが、図化しうるものはない。

時期：検出層位とSD6と重複することから、概ね13世紀前半以前の溝とする。

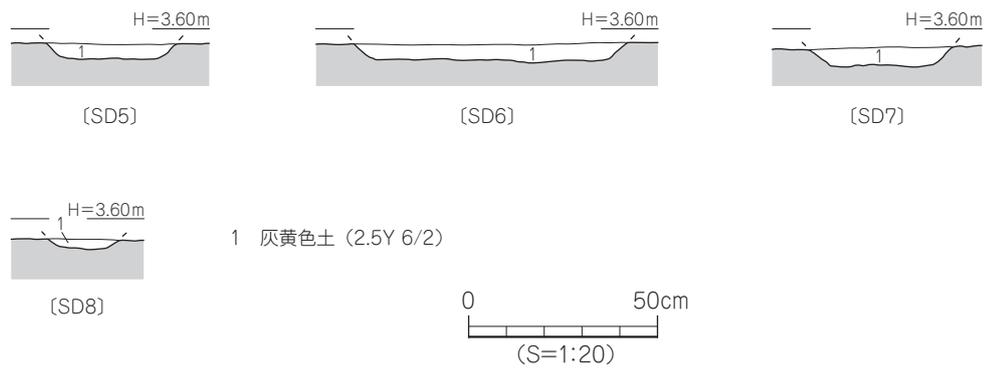


第95図 SD3 測量図



第96図 SD3 出土遺物実測図

遺構と遺物



第 97 図 SD5～8 断面図

SD6 (第 97 図)

調査区西部 B5・6 区で検出した南北方向の溝で、溝中央部は土坑 SK3 と重複し、SD6 が先行する。規模は検出長 7.41 m、幅 0.60～0.72 m、深さは 4～5cm である。断面形態はレンズ状をなし、埋土は灰黄色土 (2.5Y 6/2) 単層である。溝基底面には凹凸はみられず、僅かに北側から南側に向けて緩やかな傾斜をなす。溝からは土師器片が数点出土したが、凶化しうるものはない。

時期：SK3 に先行することから、概ね 13 世紀前半以前とする。

SD7 (第 97 図)

調査区西部 A5～B6 区で検出した南北方向の溝で、溝南側は消失し、北側は調査区外へ続く。規模は検出長 5.27 m、幅 0.28～0.38 m、深さは 4～5cm である。断面形態はレンズ状をなし、埋土は灰黄色土 (2.5Y 6/2) 単層である。溝基底面は平坦である。溝からは、遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、検出層位や埋土より、概ね 13 世紀前半以前の溝とする。

SD8 (第 97 図)

調査区中央部南西寄り B6・7 区で検出した溝で、溝西側は SK3 と重複し、東側は調査区外に続く。規模は検出長 4.00 m、幅 0.18 m、深さは 2～3cm である。断面形態はレンズ状をなし、埋土は灰黄色土 (2.5Y 6/2) 単層である。溝からは、遺物の出土はない。

時期：SK3 に先行することから、13 世紀前半以前とする。

4. 土 坑

調査では、2 基の土坑を検出した。すべて、第Ⅱ⑦層上面での検出である。

SK3 (第 98 図)

調査区中央部南西寄り B6 区で検出した土坑で、溝 SD5・SD6 と重複し、SK3 が後出する。平面形態は円形をなし、規模は径 1.10～1.16m、深さは 21cm である。断面形態は逆台形状をなし、埋土は褐灰色土 (10YR 5/1) 単層である。土坑基底面は平坦で、遺物は埋土中より土師器や瓦器の破片が少量出土した。

出土遺物 (図版 27)

26 は和泉型瓦器椀。推定口径 15.0cm、器高 4.6cm で、断面三角形状の高台を貼り付け、内面には平行線状の暗文を施す。色調は、内外面共に黒色である。

時期：出土遺物の特徴より、鎌倉時代、13 世紀前半とする。

SK4 (第 99 図、図版 25)

調査区南西部 B7 区で検出した土坑で、土坑東半部は調査区外へ続く。平面形態は円形をなすものと思われ、規模は南北長 1.06 m、東西検出長 1.01 m、深さは 36cm である。断面形態は逆台形状をなし、埋土は 3 種類あり、上位から灰色粘質土 (10Y 5/1)、暗灰色土 (N3/) に浅黄色土 (2.5Y 7/4) がブロック状に少量混入、暗青灰色粘質土 (10BG 4/1) である。土坑基底面は平坦で、遺物は埋土中位付近より、須恵器壺 (底部) が出土した。

出土遺物 (図版 27)

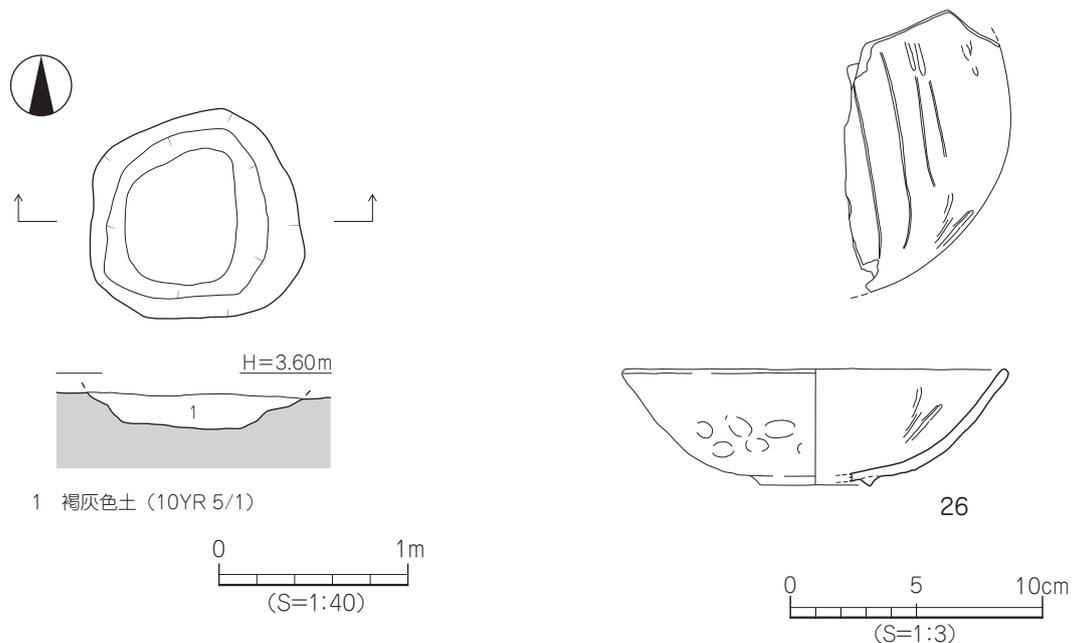
27 は須恵器壺。底部の完形品で、外面には回転ヘラケズリ調整がみられる。色調は灰色をなし、外面には自然釉が付着する。

時期：出土遺物の特徴より、平安時代後期、12 世紀代とする。

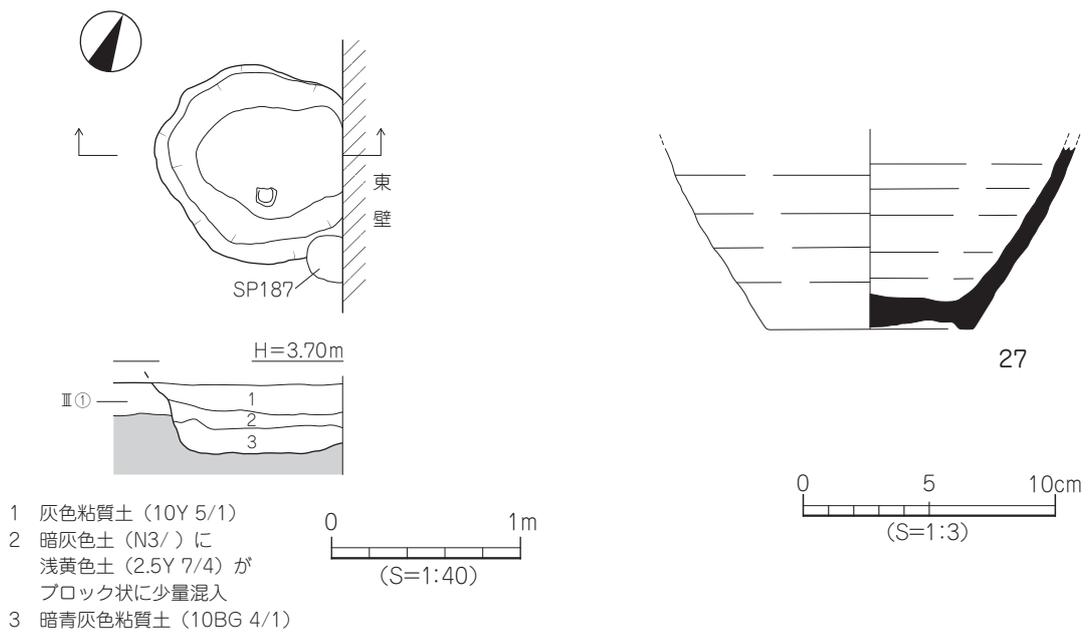
5. 土墳墓

土墳墓 1 (第 101 図、図版 25)

調査区西壁中央部南寄り A7 区で検出した土墳墓で、遺構西側は調査区外に続く。水田層である第 II ③層掘り下げ時に検出した遺構であるが、調査壁の土層観察により、本来は第 II ⑦層堆積時には存在しており、室町時代の水田が造られた際には、一部を残して水田層が土墳墓の上面を覆い、その後は河原石を上面に敷きつめて墓の存在を示している。なお、第 II ③層掘り下げ時には五輪塔の一部と思われる円形石の破片が検出されている。



第 98 図 SK3 測量図・出土遺物実測図



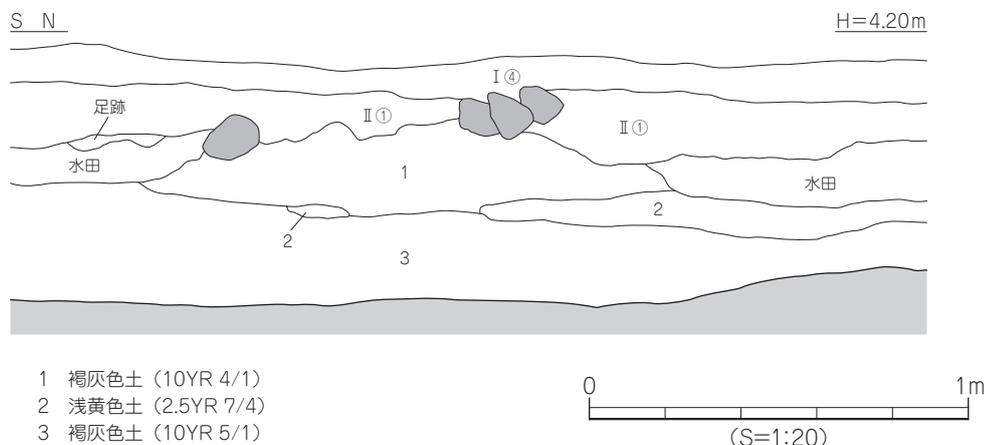
第 99 図 SK4 測量図・出土遺物実測図

発掘調査時は土壙墓の掘り方を検出することが困難で、土壙墓周辺を全体的に掘り下げ、第Ⅱ⑦層上面にて棺と人骨を検出した。そのため、掘り方の規模や形状は不明である。棺は底板と側板の一部が遺存しており、底板の上には人骨が置かれていた。人骨は頭部を北に向け、脚は屈葬の状態で埋葬されている。なお、頭部の側には完形の土師器坏と皿が副葬されている。

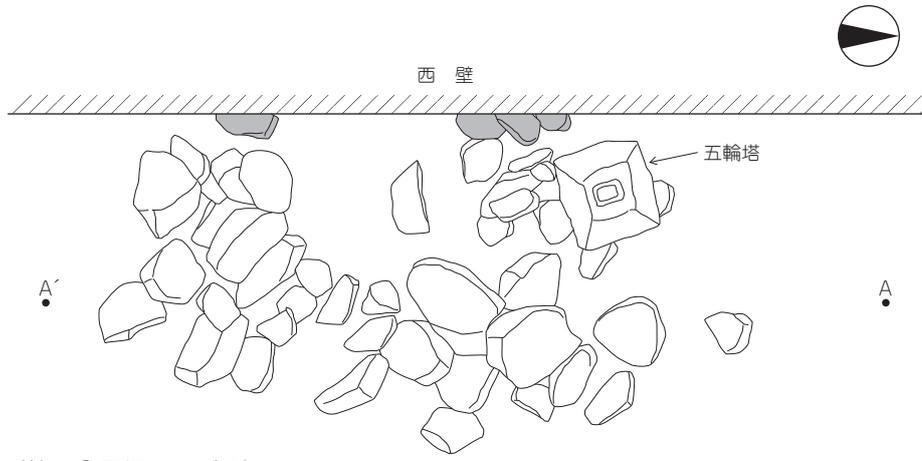
出土遺物 (図版 27)

28 は土師器坏。完存品で、口径 12.0cm、底径 7.2cm、器高 4.0cm である。底部は凹み、底部の切り離しは回転糸切り技法による。29 は土師器皿。口径 7.1cm、底径 4.8cm、器高 1.2cm で、底部外面には回転糸切り痕が残る。30 は青磁碗。体部片で、内面に線刻を施す。胎土は灰色で、オリーブ灰色の釉薬が掛けられている。

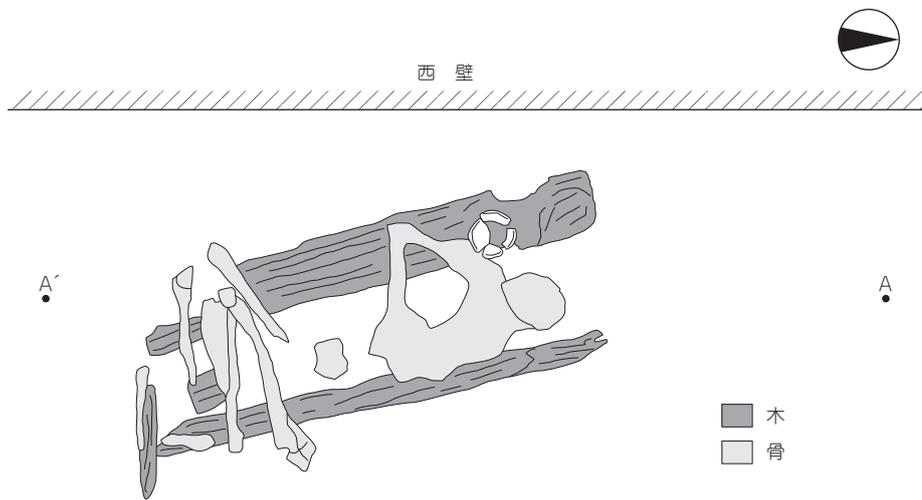
時期：出土遺物の特徴より、土壙墓 1 は鎌倉時代後期、13 世紀後半と考えられる。



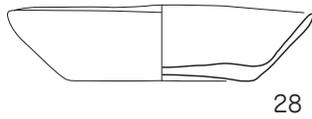
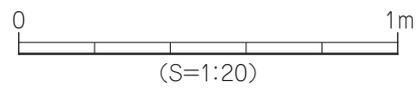
第 100 図 西壁土層図



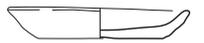
〔第II③層掘り下げ時〕



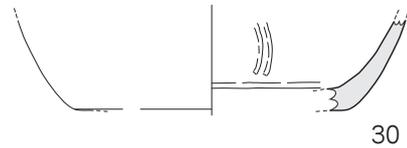
〔第II⑦層上面〕



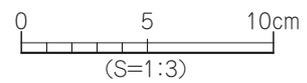
28



29



30



第101図 土壙墓1 測量図・出土遺物実測図

6. 柱 穴

調査では、235基の柱穴を検出した。これらは、全て第Ⅱ⑦層及び第Ⅲ①層上面での検出である。柱穴掘り方埋土は、以下の6種類である。

- ①類：黄灰色土 (2.5Y 4/1) …………… 10 基
- ②類：黄灰色土 (2.5Y 4/1) に浅黄色土 (2.5Y 7/4) がブロック状に混入 …… 22 基
- ③類：灰色土 (5Y 6/1) …………… 17 基
- ④類：灰色土 (5Y 6/1) に浅黄色土 (2.5Y 7/4) がブロック状に混入 …… 64 基
- ⑤類：灰黄色土 (2.5Y 6/2) に浅黄色土 (2.5Y 7/4) がブロック状に混入 …… 12 基
- ⑥類：褐灰色土 (10YR 4/1) に灰色土 (5Y 6/1) が混入 …………… 110 基

各柱穴からは鎌倉時代の土師器や須恵器、瓦器などの破片が少量出土した。なお、②類の柱穴のうち、9基の柱穴には柱材の一部が残存していた。また、SP39 (②類) からは土人形3点が出土し、SP113 (②類) からは平瓦の破片が出土した。

出土遺物 (第102図、図版27)

31・35・36はSP92、33はSP122、32・34はSP212、37・38はSP143、39はSP5、40はSP157、41はSP96、42はSP113、43～45はSP39出土品。

31～34は土師器坏。31は粘土紐巻き上げ痕が顕著に残り、底部外面には回転ヘラ切り痕が残る。32～34の底部には、回転糸切り痕を残す。35は土師器椀。断面三角形の高台を貼り付け、体部内外面にはヘラミガキ調整がみられる。36～38は土師器皿。36の底部外面には、回転ヘラ切り痕がみられ、37・38は回転糸切り痕が残る。39・40は和泉型瓦器椀。口縁部は僅かに外反し、体部内面にはらせん文と平行線状の暗文を施す。体部外面には、指頭痕が顕著にみられる。色調は39が暗灰色、40は黒色である。41は須恵器甕。口縁部は短く外反し、肩部外面には平行叩きを施す。42は平瓦。土師質で凸面に細縄叩き、凹面には布目痕がみられる。色調は、灰白色である。43～45は土師質の土製品である。43・44は仏様の顔、45は脚部と思われる部分が彫りこまれている。

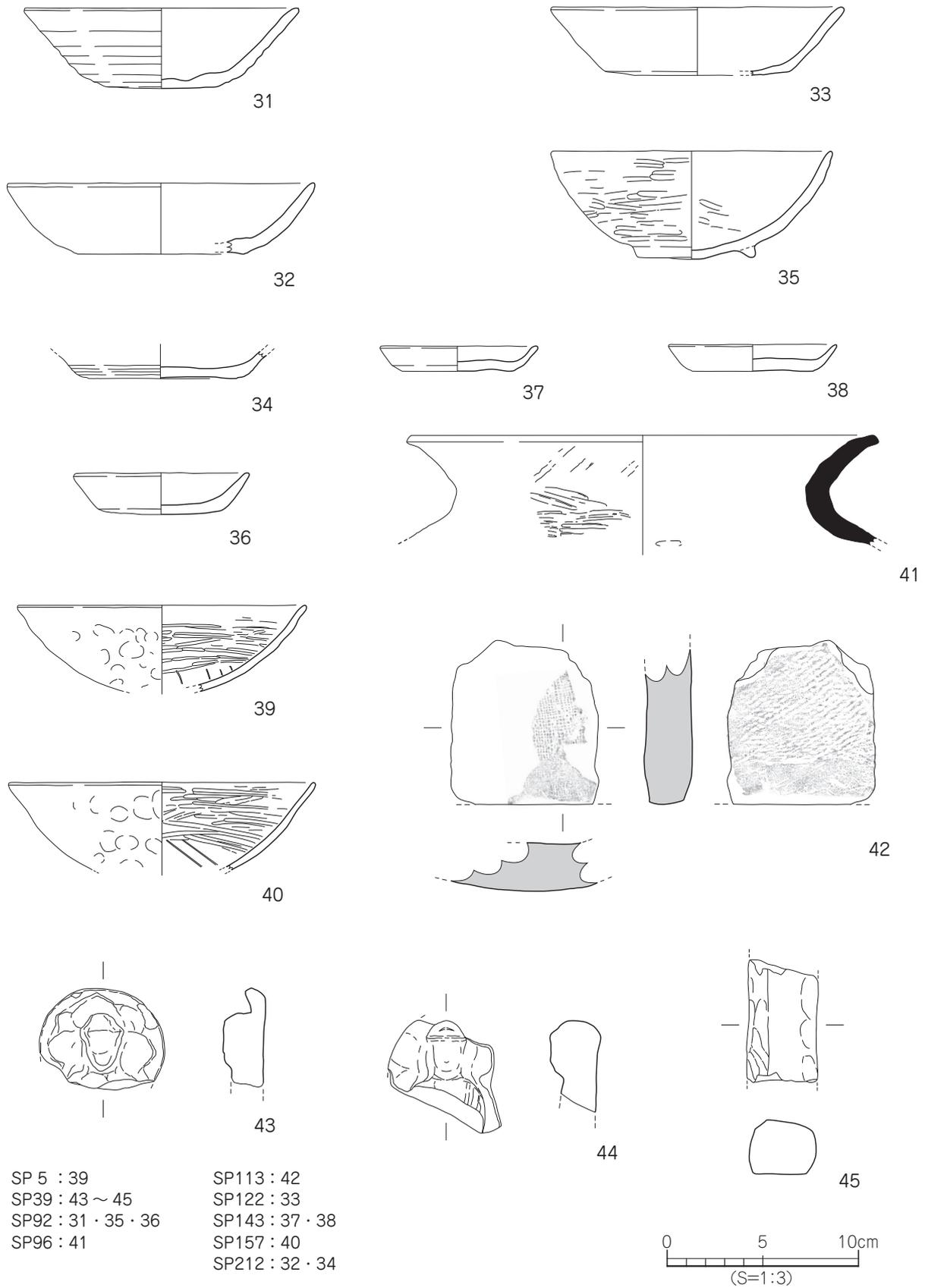
7. 土器溜まり

SX1

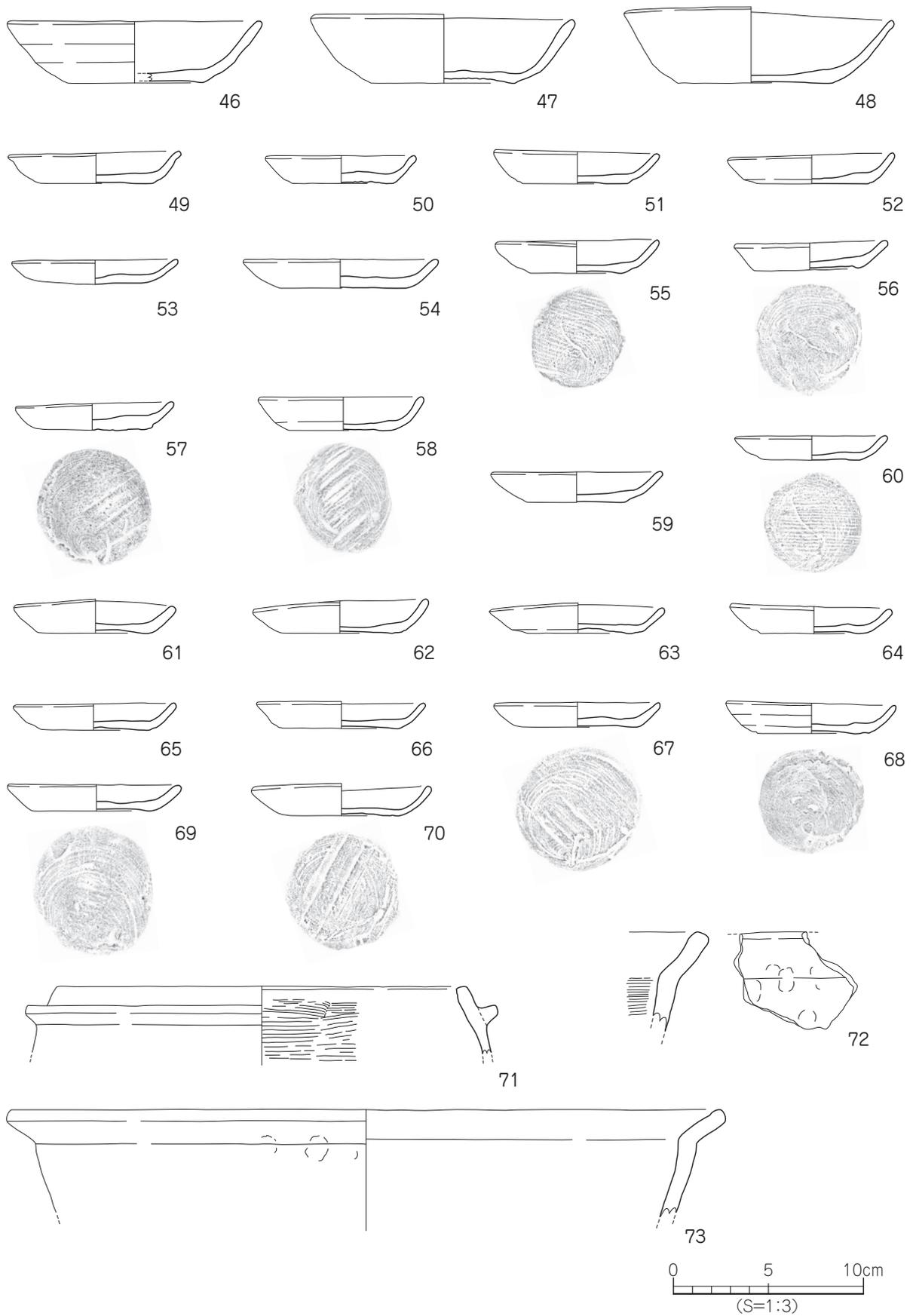
調査区南西部A7～B8区で検出した土器溜まりで、第Ⅱ⑤層掘り下げ時に遺物が集中する箇所があり、土器溜まり(SX1)として取り上げを行った。完存品、完形品を含む多量の土師器や瓦器が重なり合うようにして出土した。土師器の皿には、底部に割れ目のあるものが数点含まれていた。なお、SX1掘り下げ時には土器と共に炭化物や焼土が混入しており、取り上げた土器は何らかの施設の廃棄に伴う祭祀儀礼に使用されたものか、あるいはゴミとして廃棄されたものと推測される。

出土遺物 (第103・104図、図版28)

46～48は土師器坏。体部は内湾気味に立ち上がり、底部は僅かに凹む。底部の切り離しは、回転糸切り技法による。49～70は土師器皿。このうち、完存品は13点である(49・52・53・55・59～63・65～67・70)。また、底部に割れ目の認められたものが4点ある(50・55・62・68)。なお、底部の切り離しは全て回転糸切り技法による。分量は口径7.7～9.9cm、器高1.3～1.8cmである。色調は橙色もしくは、にぶい橙色が4点(54・57・66・70)、黄橙色が1点(65)、その他は灰白色である。胎土は精良で、焼成は良好である。71は土師器羽釜。口縁部片で、断面方形状の鐙が付く。72・73

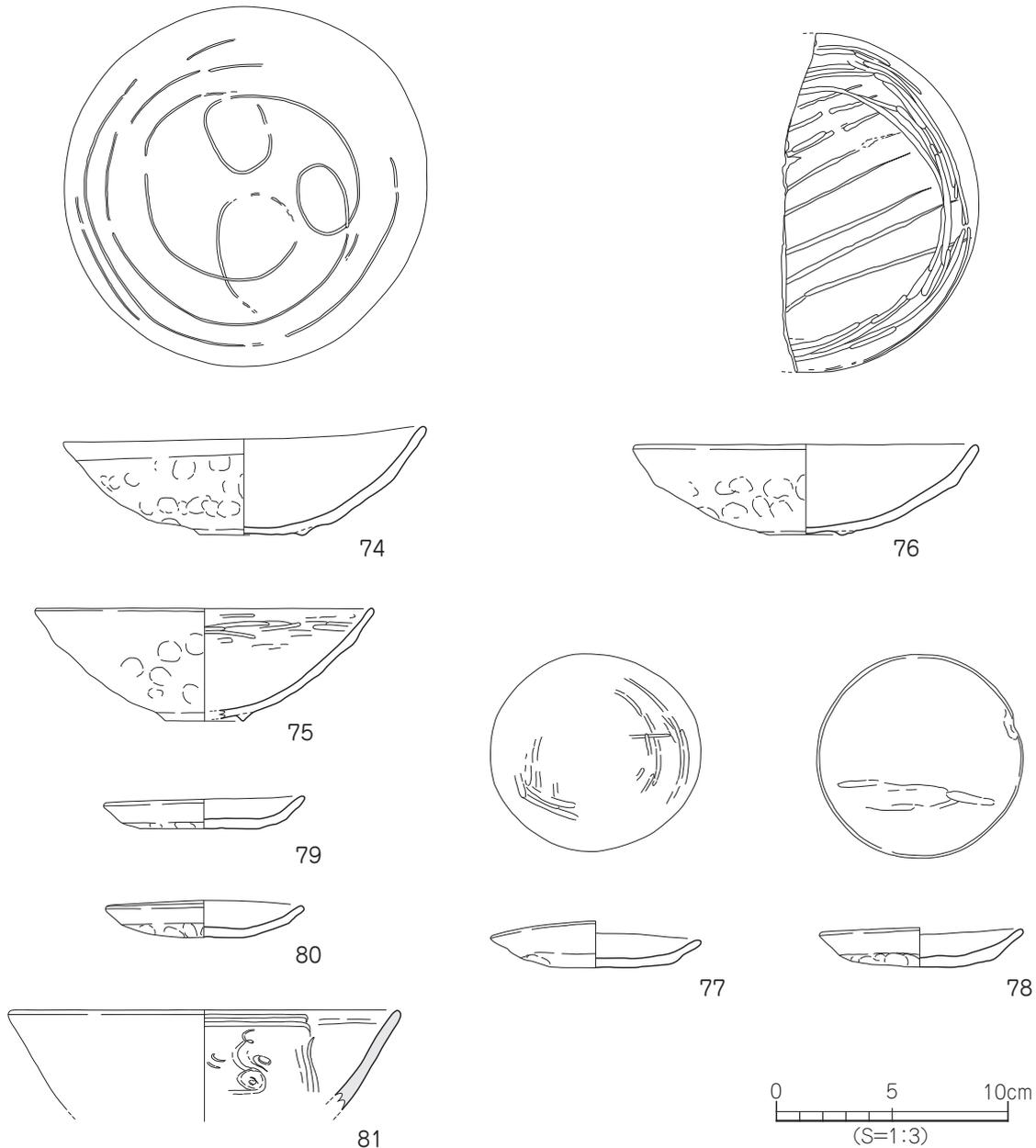


第 102 図 柱穴出土遺物実測図



第103図 SX1 出土遺物実測図(1)

は土師器鍋。72の口縁部は僅かに内湾し、口縁端部は「コ」字状をなす。74～76は和泉型瓦器碗。74は完存品で、口径15.4cm、底径4.4cm、器高4.7cmである。断面三角形状の丸味を帯びた高台を貼り付け、内面にはらせん文と連弧状の暗文を施す。色調は、内外面共に暗灰色である。75は断面三角形状の高台を貼り付け、内面にはらせん状の暗文を施す。76は体部中位に稜をもち、形骸化した高台を貼り付ける。内面にはらせん文と平行線状の暗文を施す。色調は内外面共に黒色である。77～80は瓦器皿。77・78は完存品。77は口径9.0cm、底径4.0cm、器高2.0cmで、内面にらせん状の暗文を施す。78は口径8.6cm、底径3.7cm、器高1.6cmで、平行線状の暗文を施す。底部外面には指頭痕が顕著に残る。79・80は1/2の残存で、色調は79が黒色、80は灰色である。81は龍泉窯系の青磁碗。体部内面には、渦巻状の文様がみられる。胎土は灰色で、灰オリーブ色の釉薬が全面に掛けられている。



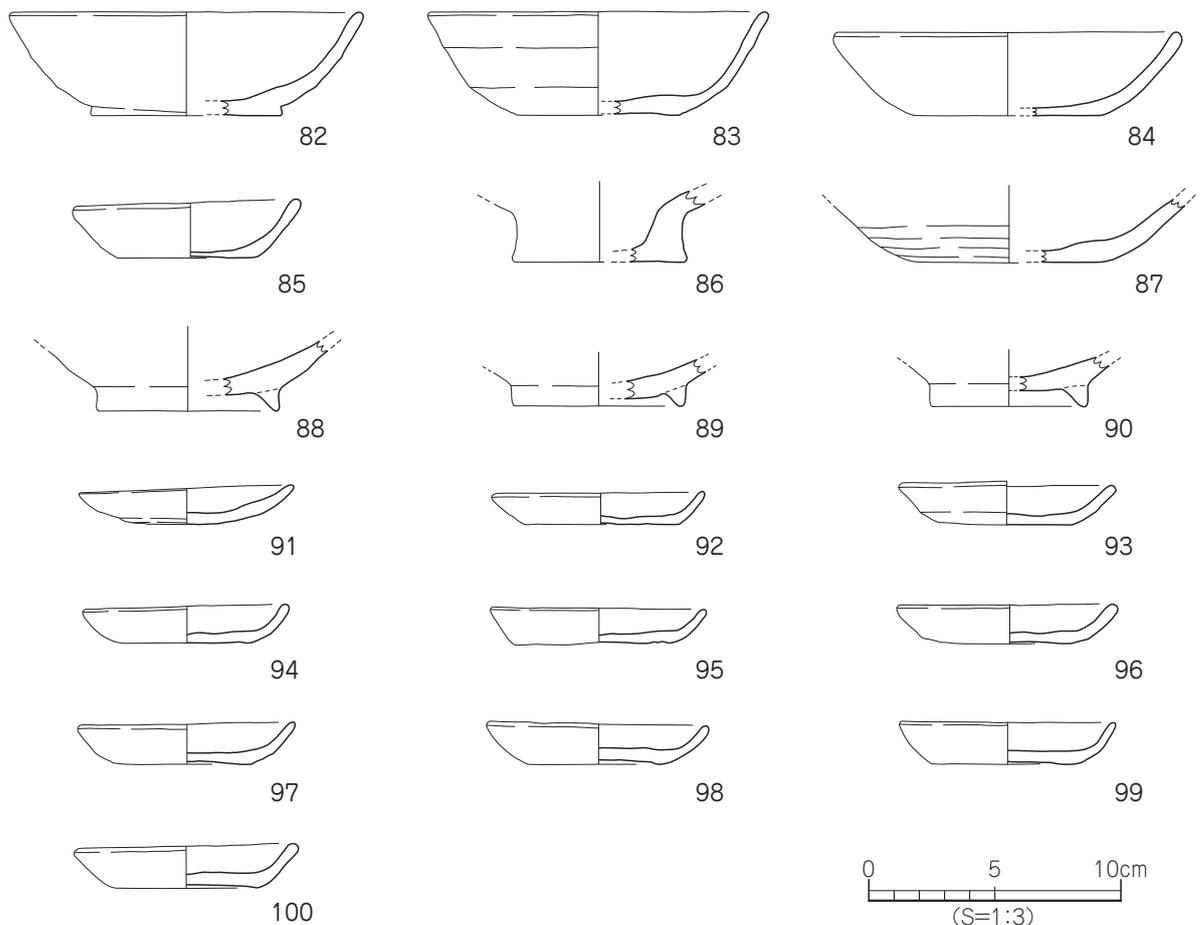
第104図 SX1出土遺物実測図(2)

8. 包含層出土遺物

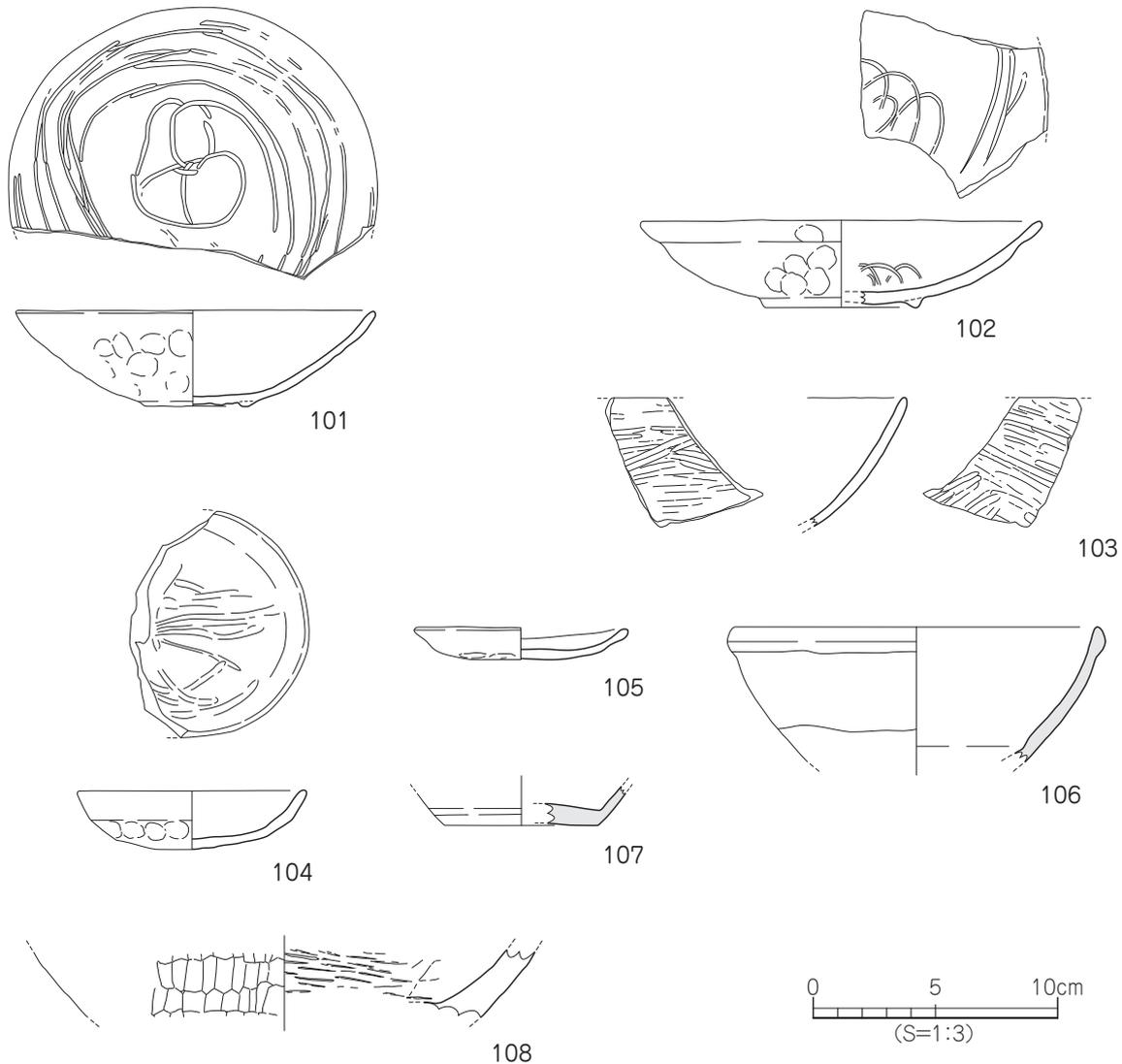
調査では、第Ⅱ⑤層及び第Ⅱ⑥層中より、比較的多くの遺物が出土した。

(1) 第Ⅱ⑤層出土遺物 (第105・106図、図版29)

82～87は土師器坏。82～85の体部は内湾気味に立ち上がり、82は円盤高台状の底部をもつ。85は小型品で、推定口径8.6cm、器高2.1cmである。86は高さのある円盤高台状の底部、87は平底の底部である。底部の切り離しは87が回転ヘラ切り、その他は全て回転糸切り技法による。88～90は土師器椀。断面三角形状の高台を貼り付ける。91～100は土師器皿。91の体部は丸味をもち、底部の切り離しは回転ヘラ切り技法による。92・93は完形品。92～100の体部は内湾気味に立ち上がり、底部外面には回転糸切り痕が残る。色調は、にぶい橙色または橙色が3点(91・96・99)、その他は全て灰白色である。101～103は和泉型瓦器椀。101・102は断面三角形状の丸味を帯びた高台を貼り付け、内面にはらせん文と連弧状の暗文を施す。体部外面には、指頭痕が顕著に残る。色調は灰色である。103は口縁部片で、内外面にはヘラミガキを施す。104・105は瓦器皿。104は体部中位に稜をもち、内面には平行線状の暗文を施す。105は完存品で、口径8.6cm、器高1.3cmである。106・107は白磁。106は碗で、口縁部は玉縁状をなす。胎土は灰白色で、白色の釉薬が掛けられている。107は皿で、胎土は灰色をなし、全面に灰白色の釉薬が施される。108は石鍋で、使用する石材は滑石である。



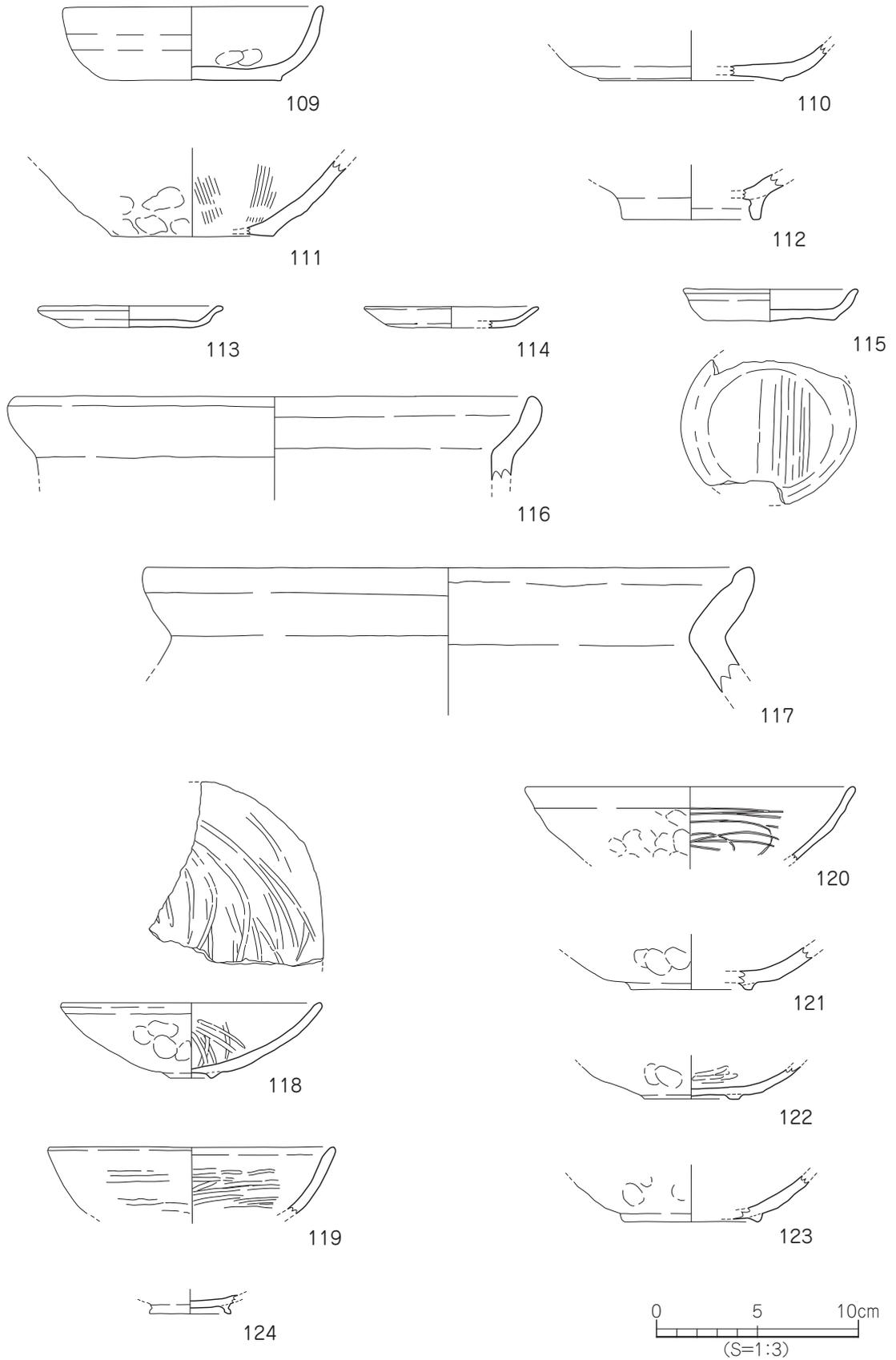
第105図 第Ⅱ⑤層出土遺物実測図(1)



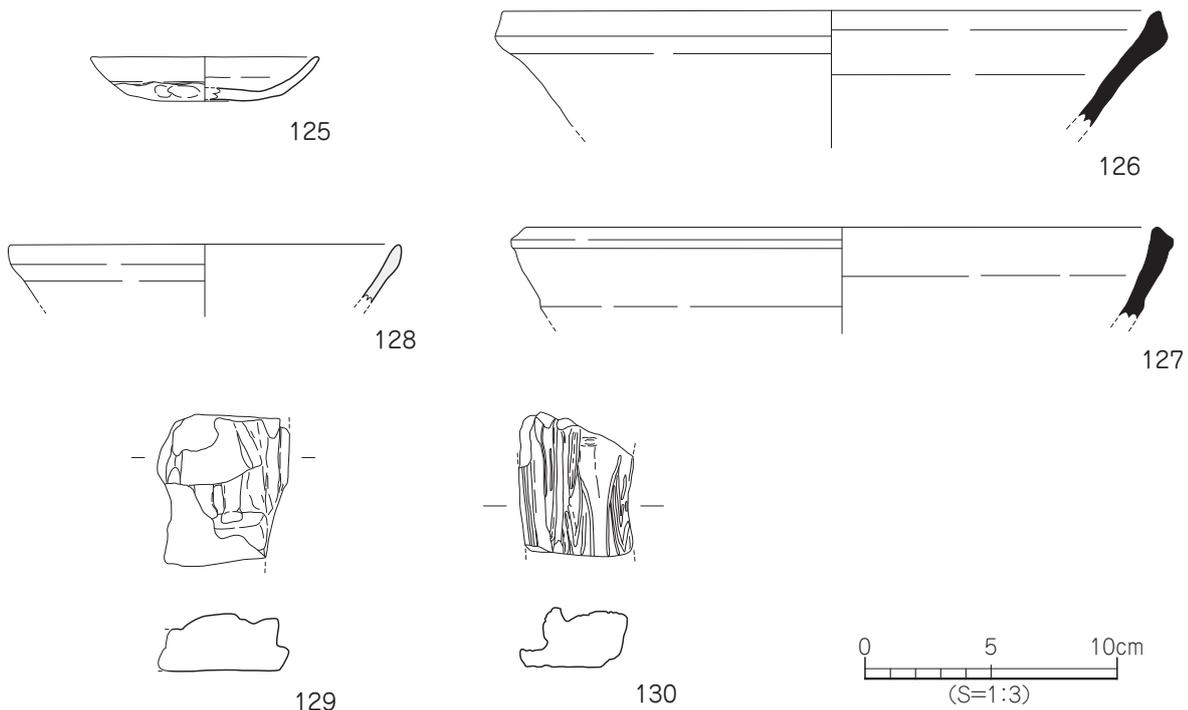
第 106 図 第Ⅱ⑤層出土遺物実測図 (2)

(2) 第Ⅱ⑥層出土遺物 (第 107・108 図、図版 29)

109～111は土師器坏。体部は内湾し、底部の切り離しは全て回転糸切り技法による。112は土師器碗。断面三角形状の高台を貼り付ける。113～115は土師器皿。口縁部は僅かに外反し、113の底部外面には回転糸切り痕が残る。116・117は土師器甕。口縁部は内湾し、口縁端部は丸く仕上げる。118～124は瓦器碗。118は断面三角形状の高台を貼り付け、内面には平行線状の暗文を施す。119・120は口縁部片で、119の内外面にはヘラミガキがみられる。120は内面にらせん状の暗文を施す。121～124は底部片で、断面三角形状の高台を貼り付ける。125は瓦器皿。体部下半外面には、指頭痕が顕著に残る。126・127は東播系須恵器の鉢。口縁部は僅かに肥厚し、色調は灰色である。128は白磁碗。玉縁状の口縁部で、胎土は灰白色をなし、透明釉が掛けられている。129・130は土師質の土製品で、人物の脚部または胴部が彫りこまれている。



第 107 図 第Ⅱ⑥層出土遺物実測図 (1)



第 108 図 第Ⅱ⑥層出土遺物実測図 (2)

第4節 小 結

余戸柳井田遺跡3次調査では、鎌倉時代から室町時代の遺構・遺物を確認した。第Ⅱ⑦層及び第Ⅲ①層上面、標高 3.2m 前後の地点からは鎌倉時代の建物址や溝、土坑、土壙墓、柱穴を検出した。

掘立柱建物は1間×1間、もしくは1間×2間、2間×2間の小規模な建物であり、倉庫的な用途で使用されたと推測される。4棟の建物址は出土遺物や検出層位より、概ね鎌倉時代の遺構と考えられる。このほか、調査区東側で検出した3条の溝は真北方向に掘削された規模の大きな溝であり、堆積状況より人為的に埋め戻された溝と考えられる。溝の性格は断定できないが、調査地南方にある余戸柳井田遺跡4次調査では東西方向の溝が検出され、さらには調査地西方の東垣生八反地遺跡からは南北方向の溝が検出されている。本調査検出の溝との関連性があるとするれば、これらは同一の溝の可能性が高く、溝の形状より、何らかの施設を取り巻く区画溝の可能性はある。このほか、調査では土壙墓を検出した。掘り方の平面形態や規模は不明であるが、屈葬状態の人骨と棺の一部を検出した。平成26年度に実施した余戸中ノ孝遺跡1次調査では、同様の土壙墓が検出されており、本調査検出の土壙墓も同時期である鎌倉時代後期、13世紀後半の築造と考えられる。

一方、標高 4m 前後の地点、第Ⅱ④層上面からは無数の足跡を検出した。第Ⅱ④層は水田土壌であるが、畦畔や水路等の施設は確認されず、水田区画の形状や規模等は不明である。ただし、足跡の進行方向から判断すると、磁北を指向した水田区画と考えられる。調査地周辺では余戸柳井田遺跡1・2・4次調査や東垣生八反地遺跡1・2・3次調査などで同様の水田址が検出されており、調査地一帯が室町時代には広範囲にわたり耕作地として利用されていたものと考えられる。

遺構一覧・遺物観察表 - 凡例 -

以下の表は、本調査地検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。

(1) 遺構一覧表

地区欄 グリッド名を記載。

規模欄 () は現存値を示す。

埋土欄 複数の土層がある場合は、以下のように記載している。
例) 「灰色粘質土 他」

出土遺物欄 遺物名称を略記した。

例) 土→土師器、須→須恵器、陶→陶磁器、木→木製品

(2) 遺物観察表

法量欄 () : 復元推定値

調整欄 土器の各部位名称を略記した。

例) 口→口縁部、胴→胴部

胎土欄 胎土欄は混和剤を略記した。

例) 石→石英、長→長石、金→金ウンモ、赤→赤色酸化土粒

() の中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例) 石・長 (1~4) → 「1~4mm大の石英・長石を含む」である。

焼成欄 焼成欄の略記について

◎→良好

表 54 掘立柱建物一覧

掘立	地区	規模	桁行長 (m)	梁行長 (m)	床面積 (㎡)	出土遺物	時期
1	A7~B8	2間×2間	3.15	2.08	6.55	土	鎌倉時代
2	B7・8	1間×2間	3.78	2.66	10.05	土・瓦器・柱材	鎌倉時代
3	B8	1間×1間	1.87	1.78	3.33	土・瓦器・柱材	鎌倉時代
4	B・C6	2間×1間	4.00	(2.24)	(17.92)	土・瓦器	鎌倉時代

表 55 溝一覧

溝 (SD)	地区	断面形	規模 長さ×幅×深さ (m)	埋土	出土遺物	時期
1	C4~D7	レンズ状	(14.80) × 2.90 × 0.30	灰色粘質土 他	土・須・瓦器・陶	13世紀前半
2	D5	レンズ状	(4.00) × 0.80 × 0.36	灰白色砂 他	土・須	12世紀後半
3	D5~E7	レンズ状	(8.80) × 1.50 × 0.30	灰白色砂 (灰色粘質土混入)	土・須・瓦器・木	12世紀後半 ~13世紀前半
4	欠番					
5	B5~7	レンズ状	(10.00) × 0.34 × 0.04	灰黄色土	土	13世紀前半以前
6	B5・6	レンズ状	(7.41) × 0.72 × 0.05	灰黄色土	土	13世紀前半以前
7	A5~B6	レンズ状	(5.27) × 0.38 × 0.05	灰黄色土		13世紀前半以前
8	B6・7	レンズ状	(4.00) × 0.18 × 0.03	灰黄色土		13世紀前半以前

表 56 土坑一覽

土坑 (SK)	地区	平面形	断面形	規模 長径×短径×深さ (m)	埋 土	出土遺物	時 期
1				欠 番			
2				欠 番			
3	B6	円形	逆台形状	1.16 × 1.10 × 0.21	褐灰色土	土・瓦器	13世紀前半
4	B7	円形	逆台形状	1.06 × (1.01) × 0.36	灰色粘質土 他	須	12世紀

表 57 掘立出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
1	皿	口径 (9.0) 底径 (4.0) 器高 1.3	瓦器。底部は丸味をもち、内面にらせん状の暗文あり。小片。	ナデ (指頭痕)	ナデ	黒色 黒色	石・長 (1) ◎	掘立 2 SP82	
2	椀	底径 6.0 残高 1.9	底部片。断面三角形の高台を貼付ける。	ナデ	ヘラミガキ	灰白色 灰白色	密 ◎	掘立 4 SP18	
3	坏	口径 (13.4) 底径 (8.2) 器高 3.4	体部は内湾し、底部外面に回転糸切り痕あり。1/3の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	橙色 橙色	密赤 ◎	掘立 3 SP68	

表 58 掘立出土遺物観察表 木製品

番号	器種	遺存状態	樹種	法 量				備考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	その他		
4	柱材	—	—	50.9	10.1	11.6		掘立 3 SP74	26

表 59 SD1 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
5	坏	底径 (6.6) 残高 1.2	底部片。底部外面に回転糸切り痕あり。	ナデ	ナデ	灰白色 灰白色	石 (1~2) ◎		
6	椀	底径 (6.6) 残高 2.5	内黒椀。断面三角形の高台を貼付ける。	ヨコナデ	ヘラミガキ	灰白色 黒色	密 ◎		
7	皿	口径 6.4 底径 5.0 器高 1.2	ほぼ完形品。底部外面に回転糸切り痕あり。	ヨコナデ	ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎		26
8	皿	口径 (7.8) 底径 (6.0) 器高 1.3	底部は凹み、外面に回転糸切り痕あり。1/3の残存。	ナデ	ナデ	黄橙色 淡黄色	石・長 (1~3) ◎		
9	甕	口径 (27.6) 残高 5.5	外反口縁。口縁端部は「コ」字状。小片。	ヨコナデ	ハケ (7本/cm)	にぶい褐色 にぶい褐色	石・長 (1) 金 ◎		
10	椀	底径 (4.4) 残高 1.6	瓦器椀。断面三角形の高台を貼付け、内面にジグザグ文あり。1/4の残存。	ナデ	ナデ	灰色 灰色	長 (1~4) ◎		26
11	皿	口径 (13.9) 残高 3.8	白磁。口縁部は短く外反する。小片。	施釉	施釉	灰オリーブ色 灰白色	密 (灰白色) ◎		26
12	鉢	口径 (24.3) 残高 3.4	口縁部は肥厚する。小片。	回転ナデ	ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
13	壺	口径 (9.3) 残高 7.0	短頸壺。口縁部は内傾し、口縁端部は内傾する面をもつ。1/4の残存。	回転ナデ	ナデ	灰色 赤灰色	密 ◎		
14	甕	口径 (39.2) 残高 3.5	口縁部は外反し、口縁端部は下方に垂下する。小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎		

遺物観察表

表 60 SD2 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
15	坏	底径 (9.8) 残高 2.2	底部片。底部外面に回転ヘラ切り痕あり。1/2の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	密 ◎		

表 61 SD3 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
16	坏	口径 (13.7) 底径 (9.5) 器高 2.6	体部は内湾し、底部は僅かに凹む。底部外面に回転糸切り痕あり。1/4の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰白色 灰黄色	密 ◎		
17	坏	底径 (4.6) 残高 1.4	円盤高台状の小さな底部。	マメツ	マメツ	灰白色 灰白色	密 ◎		
18	椀	口径 (15.2) 残高 4.9	内黒椀。口縁部は短く外反し、体部内面にヘラミガキを施す。1/4の残存。	ヨコナデ	ヘラミガキ	灰黄色 黒色	密 ◎		
19	椀	底径 6.8 残高 3.1	断面三角形の高台を貼付。底部外面に回転糸切り痕あり。底部完形。	ナデ	ナデ	灰白色 灰白色	石 (1) ◎		26
20	椀	底径 (5.2) 残高 1.6	内黒椀。丸味のある断面三角形の高台を貼付。1/2の残存。	ナデ	ナデ	灰白色 黒色	長 (1) ◎		
21	皿	口径 8.6 底径 5.8 器高 1.4	ほぼ完形品。底部の切り離しは回転糸切り技法による。	ナデ	ナデ	褐灰色 灰褐色	密 ◎		26
22	皿	口径 (8.4) 底径 (6.0) 器高 1.5	底部外面に回転糸切り痕あり。1/2の残存。	ナデ	ナデ	褐灰色 褐灰色	長 (1) ◎		
23	椀	底径 (4.0) 残高 0.5	瓦器椀。形骸化した高台を貼付。内面に弧状の暗文あり。	ナデ	ナデ	暗灰色 暗灰色	密 ◎		
24	鉢	口径 (27.5) 残高 4.7	小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰色	密 ◎		

表 62 SD3 出土遺物観察表 木製品

番号	器種	遺存状態	樹種	法量				備考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	その他		
25	仏具	完存	—	30.6	7.7	0.6			26

表 63 SK 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
26	椀	口径 (15.0) 底径 (4.2) 器高 4.6	瓦器椀。断面三角形の高台を貼付。内面に平行線状の暗文あり。1/4の残存。	ヨコナデ	マメツ	黒色 黒色	密 ◎	SK3	27
27	壺	底径 8.0 残高 7.2	上げ底。底部完形。	回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎	SK4 自然釉	27

表 64 土墳墓 1 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
28	坏	口径 12.0 底径 7.2 器高 4.0	完存品。体部は直立気味に立ち上り、底部は凹む。底部外面に回転糸切り痕あり。	ヨコナデ	ナデ	灰白色 灰白色	石・長 (1~2) ◎		27
29	皿	口径 7.1 底径 4.8 器高 1.2	体部は内湾気味に立ち上る。底部外面に回転糸切り痕あり。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰白色 灰白色	石 (1~2) ◎		27
30	碗	底径 (10.8) 残高 3.6	青磁碗。体部小片。	施釉	施釉	オリーブ灰色 オリーブ灰色	密 (灰色) ◎		

表 65 柱穴出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
31	坏	口径 (14.2) 底径 (5.8) 器高 4.2	口縁部は僅かに外反し、底部外面に回転ヘラ切り痕あり。1/4の残存。	マメツ	マメツ	黄橙色 黄橙色	密 ◎	SP92	
32	坏	口径 (15.8) 底径 (8.6) 器高 3.7	体部は内湾気味に立ち上る。小片。底部外面に回転糸切り痕あり。	マメツ	マメツ	にぶい褐色 にぶい褐色	密 ◎	SP212	
33	坏	口径 (15.0) 底径 (9.6) 器高 3.6	口縁部はやや外反する。1/4の残存。	マメツ	マメツ	橙色 橙色	長赤 (1) ◎	SP122	
34	坏	底径 7.6 残高 1.4	底部完形。底部外面に回転糸切り痕あり。	ヨコナデ	ヨコナデ	橙色 褐灰色	密赤 ◎	SP212	
35	椀	口径 14.4 底径 (5.4) 器高 5.7	体部は内湾し、断面三角形の高台を貼付ける。	ヘラミガキ	ヘラミガキ	灰白色 灰白色	石・長 (1~8) ◎	SP92	27
36	皿	口径 9.0 底径 6.4 器高 2.2	体部は直線的に立ち上り、底部外面に回転ヘラ切り痕あり。	ヨコナデ	ナデ	にぶい橙色 にぶい褐色	石 (1) ◎	SP92	
37	皿	口径 (8.0) 底径 5.7 器高 1.3	口縁部は僅かに外反し、底部は凹む。底部外面に回転糸切り痕あり。2/3の残存。	マメツ	マメツ	赤橙色 赤橙色	密 ◎	SP143	
38	皿	口径 (8.7) 底径 (6.2) 器高 1.4	体部は内湾し、底部外面に回転糸切り痕あり。1/2の残存。	マメツ	マメツ	褐灰色 褐灰色	密 ◎	SP143	
39	椀	口径 (14.8) 残高 4.5	瓦器椀。口縁部は僅かに外反し、内面にらせん状の暗文あり。小片。	ヨコナデ (指頭痕)	ナデ	暗灰色 暗灰色	密 ◎	SP5	
40	椀	口径 (15.8) 残高 4.6	瓦器椀。内面にらせん文と平行線状の暗文あり。1/4の残存。	ナデ (指頭痕)	ナデ	黒色 黒色	密 ◎	SP157	
41	甕	口径 (24.0) 残高 5.7	外反口縁。小片。	㊦回転ナデ ㊧平行叩き	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎	SP96	
42	瓦	長さ 8.1 幅 7.7 厚さ 2.5	平瓦。土師質。	細縄叩き	ナデ 布目痕	灰白色 灰白色	密 ◎	SP113	27
43	土人形	残高 5.2	円盤状の土製品。仏像の顔が彫られている。	ナデ	—	黄橙色	密 ◎	SP39	27
44	土人形	残高 5.8	土製品。仏像の顔と肩部が彫られている。	ナデ	—	黄橙色	密 ◎	SP39	27
45	土人形	残高 6.4	円柱状の土製品。脚部と思われる部分が彫られている。	ナデ	—	黄橙色	密 ◎	SP39	27

表 66 SX1 出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
46	坏	口径 (13.0) 底径 (7.0) 器高 3.2	体部は内湾気味に立ち上がり、底部は凹む。底部外面に回転糸切り痕あり。1/2の残存。	ヨコナデ	マメツ	灰白色 灰白色	密 ◎		28
47	坏	口径 (13.4) 底径 (7.5) 器高 1.6	体部は内湾気味に立ち上り、底部は凹む。底部外面に回転糸切り痕あり。1/2の残存。	ヨコナデ	ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎		
48	坏	口径 13.8 底径 7.5 器高 4.0	体部は内湾気味に立ち上り、底部外面に回転糸切り痕あり。	ヨコナデ	ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎		
49	皿	口径 8.8 底径 6.0 器高 1.7	完存品。口縁部はやや外反し、底部外面に回転糸切り痕あり。	ヨコナデ	ナデ	灰白色 黄橙色	密 ◎		
50	皿	口径 7.7 底径 6.2 器高 1.5	口縁部は僅かに外反し、底部は凹む。底部外面に回転糸切り痕あり。底部中央に割れ目あり。	ヨコナデ	ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎		

遺物観察表

SX1 出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
51	皿	口径 (8.4) 底径 (5.4) 器高 1.6	円盤高台状の底部。底部は僅かに凹む。回転糸切り技法。	ヨコナデ	ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎		
52	皿	口径 8.4 底径 5.9 器高 1.6	完存品。平底。底部外面に回転糸切り痕あり。	ヨコナデ	ナデ	灰白色 にぶい黄橙色	密 ◎		
53	皿	口径 8.6 底径 6.0 器高 1.3	完存品。平底。底部外面に回転糸切り痕と板状圧痕あり。	ヨコナデ	ナデ	灰白色 にぶい黄橙色	密 ◎		
54	皿	口径 (9.9) 底径 (6.5) 器高 1.5	平底。底部外面に回転糸切り痕あり。1/2の残存。	ヨコナデ	ナデ	橙色 にぶい橙色	密 ◎		
55	皿	口径 8.4 底径 4.8 器高 1.5	完存品。底部は凹む。底部外面に回転糸切り痕あり。底部に割れ目あり。	ヨコナデ	ナデ	灰白色 浅黄橙色	密 ◎		28
56	皿	口径 (7.8) 底径 (5.6) 器高 1.4	底部は凹む。底部内外面に割れ目あり。回転糸切り技法。	ヨコナデ	ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎		
57	皿	口径 (8.0) 底径 (6.0) 器高 1.4	円盤高台状の底部。底部外面に回転糸切り痕と板状圧痕あり。	ヨコナデ	ナデ	橙色 橙色	密 ◎		
58	皿	口径 (8.4) 底径 (5.4) 器高 1.7	底部外面に回転糸切り痕あり。	ヨコナデ	ナデ	灰白色 黄橙色	密 ◎		
59	皿	口径 8.8 底径 5.0 器高 1.6	完存品。円盤高台状の底部。底部外面に回転糸切り痕あり。	ヨコナデ	ナデ	灰白色 黄橙色	密 ◎		
60	皿	口径 7.8 底径 5.0 器高 1.3	完存品。底部外面に回転糸切り痕と板状圧痕あり。	ヨコナデ	ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎		28
61	皿	口径 8.0 底径 5.8 器高 1.5	完存品。底部は凹む。底部外面に回転糸切り痕あり。	ヨコナデ	ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎		
62	皿	口径 9.0 底径 6.3 器高 1.8	完存品。底部は凹む。底部に割れ目あり。回転糸切り技法。	ヨコナデ	ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎		28
63	皿	口径 9.0 底径 5.4 器高 1.6	完存品。底部は凹む。底部外面に回転糸切り痕と板状圧痕あり。	ヨコナデ	ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎		
64	皿	口径 (8.2) 底径 (5.2) 器高 1.4	底部は凹む。底部外面に回転糸切り痕と板状圧痕あり。	ヨコナデ	ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎		
65	皿	口径 8.4 底径 5.6 器高 1.4	完存品。底部は凹む。底部外面に回転糸切り痕と板状圧痕あり。	ヨコナデ	ナデ	黄橙色 灰白色	密 ◎		
66	皿	口径 8.7 底径 6.0 器高 1.4	完存品。底部は凹む。底部外面に回転糸切り痕と板状圧痕あり。	ヨコナデ	ナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	密 ◎		
67	皿	口径 8.5 底径 6.0 器高 1.3	完存品。底部外面に回転糸切り痕と板状圧痕あり。	ヨコナデ	ナデ	灰白色 にぶい黄橙色	密 ◎		28
68	皿	口径 (8.7) 底径 (5.3) 器高 1.6	底部は凹む。底部に割れ目あり。回転糸切り技法。	ヨコナデ	ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎		
69	皿	口径 (8.8) 底径 (6.2) 器高 1.4	底部は凹む。底部外面に回転糸切り痕あり。	ヨコナデ	ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎		
70	皿	口径 9.1 底径 5.8 器高 1.7	完存品。底部は凹む。底部外面に回転糸切り痕と板状圧痕あり。	ヨコナデ	ナデ	にぶい橙色 灰白色	密 ◎		
71	羽釜	口径 (21.2) 残高 3.5	口縁部片。断面方形状の鏝を貼付け。小片。	ヨコナデ	ハケ (5本/cm)	にぶい褐色 にぶい褐色	石・長(1~2) ◎	煤附着	
72	鍋	残高 5.3	口縁部片。口縁部は僅かに内湾し、口縁端部は「コ」字状に丸く仕上げる。小片。	ヨコナデ	ハケ (7本/cm)	灰褐色 明黄褐色	石・長(1~4) 金 ◎		

SX1 出土遺物観察表 土製品

(3)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
73	銅	口径 (37.0) 残高 5.6	外反口縁。口縁端部は「コ」字状に仕上げる。小片。	ナデ	ヨコナデ	黒褐色 にぶい褐色	石・長(1~3) ◎	煤付着	
74	椀	口径 15.4 底径 4.4 器高 4.7	完存品。瓦器椀。断面三角形の丸味を帯びた高台を貼付。らせん文と連弧状の暗文あり。	ナデ (指頭痕)	ナデ	暗灰色 暗灰色	石・長(1~2) ◎		28
75	椀	口径 (14.6) 底径 (3.4) 器高 4.9	瓦器椀。断面三角形の鋭い高台を貼付。内面にらせん状の暗文あり。1/3の残存。	ナデ (指頭痕)	ナデ	暗灰色 暗灰色	密 ◎		
76	椀	口径 (14.8) 底径 (3.2) 器高 3.9	瓦器椀。体部中位に稜あり。形骸化した高台を貼付。内面にらせん文と平行線状の暗文あり。1/2の残存。	ナデ (指頭痕)	ナデ	黒色 黒色	密 ◎		
77	皿	口径 9.0 底径 4.0 器高 2.0	完存品。瓦器皿。内面にらせん状の暗文あり。	ナデ	ナデ	暗灰色 暗灰色	密 ◎		
78	皿	口径 8.6 底径 3.7 器高 1.6	完存品。瓦器皿。内面に平行線状の暗文あり。	ナデ (指頭痕)	ナデ	暗灰色 暗灰色	密 ◎		
79	皿	口径 8.4 底径 4.1 器高 1.4	瓦器皿。1/2の残存。	ナデ (指頭痕)	ナデ	黒色 黒色	密 ◎		28
80	皿	口径 8.4 底径 3.8 器高 1.6	瓦器皿。1/2の残存。	ナデ (指頭痕)	ナデ	灰色 灰色	石・長(1) ◎		
81	碗	口径 (16.6) 残高 4.3	青磁碗。内面に渦巻状の文様あり。	施釉	施釉	灰オリーブ色 灰オリーブ色	密(灰色) ◎		

表 67 第II⑤層出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
82	坏	口径 (13.6) 底径 (7.4) 器高 4.1	円盤高台状の底部。底部外面に回転糸切り痕あり。1/3の残存。	ヨコナデ	ナデ	灰白色 灰白色	石・長(1) ◎		
83	坏	口径 (13.2) 底径 6.4 器高 4.1	体部は内湾気味に立ち上り、底部外面には回転糸切り痕と板状圧痕あり。1/2の残存。	ヨコナデ	ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎		
84	坏	口径 (13.4) 底径 (7.3) 器高 3.3	体部は内湾気味に立ち上り、底部外面に回転糸切り痕あり。1/3の残存。	ヨコナデ	ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎		
85	坏	口径 (8.6) 底径 (5.3) 器高 2.1	小型品。底部外面に回転糸切り痕あり。口縁部1/4を欠損。	ヨコナデ	ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎		
86	坏	底径 (6.9) 残高 2.8	円盤高台状の底部。1/3の残存。	マメツ	マメツ	浅黄色 浅黄色	石(1) ◎	黒斑	
87	坏	底径 (7.2) 残高 3.1	底部片。底部外面に回転ヘラ切り痕あり。1/4の残存。	ヨコナデ	ナデ	にぶい黄橙色 浅黄橙色	密 ◎		
88	椀	底径 (7.2) 残高 3.4	断面三角形の高台を貼付。1/3の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰白色 灰白色	密 ◎		
89	椀	底径 (6.6) 残高 1.9	断面三角形の高台を貼付。1/3の残存。	マメツ	マメツ	灰白色 灰白色	密 ◎		
90	椀	底径 (6.0) 残高 1.9	断面三角形の高台を貼付。1/4の残存。	マメツ	マメツ	灰白色 灰白色	石(1) ◎		
91	皿	口径 8.5 底径 2.2 器高 1.5	底部の切り離しは回転ヘラ切り技法による。	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	密 ◎		
92	皿	口径 8.2 底径 6.0 器高 1.3	ほぼ完形品。底部の切り離しは回転糸切り技法による。	ヨコナデ	ナデ	浅黄橙色 灰白色	密 ◎		

遺物観察表

第Ⅱ⑤層出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
93	皿	口径 8.3 底径 5.2 器高 1.6	ほぼ完形品。底部外面に回転糸切り痕と板状圧痕あり。	ヨコナデ	ヨコナデ	褐灰色 灰白色	密 ◎		29
94	皿	口径 (7.4) 底径 (5.1) 器高 1.4	底部の切り離しは、回転糸切り技法による。口縁部 1/4 を欠損。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰白色 灰白色	密 ◎		
95	皿	口径 (8.3) 底径 (6.3) 器高 1.5	底部外面に回転糸切り痕と板状圧痕あり。口縁部 1/4 を欠損。	ヨコナデ	ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎		
96	皿	口径 (8.3) 底径 (5.2) 器高 1.5	底部の切り離しは回転糸切り技法による。口縁部を一部欠損。	ヨコナデ	ヨコナデ	橙色 橙色	密 ◎		
97	皿	口径 8.4 底径 5.0 器高 1.2	底部外面に回転糸切り痕と板状圧痕あり。口縁部を一部欠損。	ヨコナデ	ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎		
98	皿	口径 (8.5) 底径 (5.3) 器高 1.6	底部外面に回転糸切り痕と板状圧痕あり。口縁部を一部欠損。	ヨコナデ	ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎		
99	皿	口径 (8.3) 底径 (5.7) 器高 1.6	底部外面に回転糸切り痕と板状圧痕あり。口縁部を一部欠損。	ヨコナデ	ナデ	橙色 橙色	密 ◎		
100	皿	口径 (8.4) 底径 5.5 器高 1.6	底部は凹む。底部外面に回転糸切り痕と板状圧痕あり。	ヨコナデ	ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎		
101	椀	口径 14.5 底径 4.2 器高 3.9	瓦器椀。断面三角形の丸味を帯びた高台を貼付。内面にらせん文と連弧状の暗文あり。	ヨコナデ	ナデ	灰色 灰色	密 ◎		29
102	椀	口径 (16.3) 底径 (6.2) 器高 3.5	瓦器椀。断面三角形の高台を貼付。内面にらせん文と連弧状の暗文あり。	ナデ (指頭痕)	ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
103	椀	残高 5.3	瓦器椀。口縁部片。	ヘラミガキ	ヘラミガキ	黒褐色 褐灰色	密 ◎		
104	皿	口径 (9.4) 底径 (6.0) 器高 2.4	瓦器皿。体部中位に稜をもち、内面に暗文あり。2/3 の残存。	ナデ (指頭痕)	ナデ	灰色 灰色	石 (1) ◎		29
105	皿	口径 8.6 底径 3.8 器高 1.3	瓦器皿。完存品。体部中位に稜あり。	ナデ (指頭痕)	ナデ	暗灰色 暗灰色	密 ◎		
106	碗	口径 (14.7) 残高 6.2	白磁碗。玉縁状口縁。体部下半部は無釉。1/4 の残存。	施釉	施釉	白色 白色	密 (灰白色) ◎		29
107	皿	底径 (6.2) 残高 1.6	白磁皿。1/2 の残存。	施釉	施釉	灰白色 灰白色	密 (灰色) ◎		
108	石鍋	残高 3.6	底部片。滑石製。	ナデ	ケズリ	黒色 黒色			29

表 68 第Ⅱ⑥層出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
109	坏	口径 12.7 底径 8.5 器高 3.7	体部は内湾し、底部は平底。底部外面に回転糸切り痕あり。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰白色 灰白色	密 ◎		
110	坏	底径 (8.9) 残高 2.5	底部片。底部は凹む。底部外面に回転糸切り痕あり。1/3 の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰白色 灰白色	密 ◎		
111	坏	底径 (8.0) 残高 3.8	底部片。	ヨコナデ	ナデ	灰黄色 灰黄色	長 (1) ◎		
112	椀	底径 6.9 残高 3.0	断面三角形の高台を貼付。1/3 の残存。	ヨコナデ	ナデ	にぶい黄橙色 灰黄色	密 ◎		

余戸柳井田遺跡3次調査

第Ⅱ⑥層出土遺物観察表 土製品

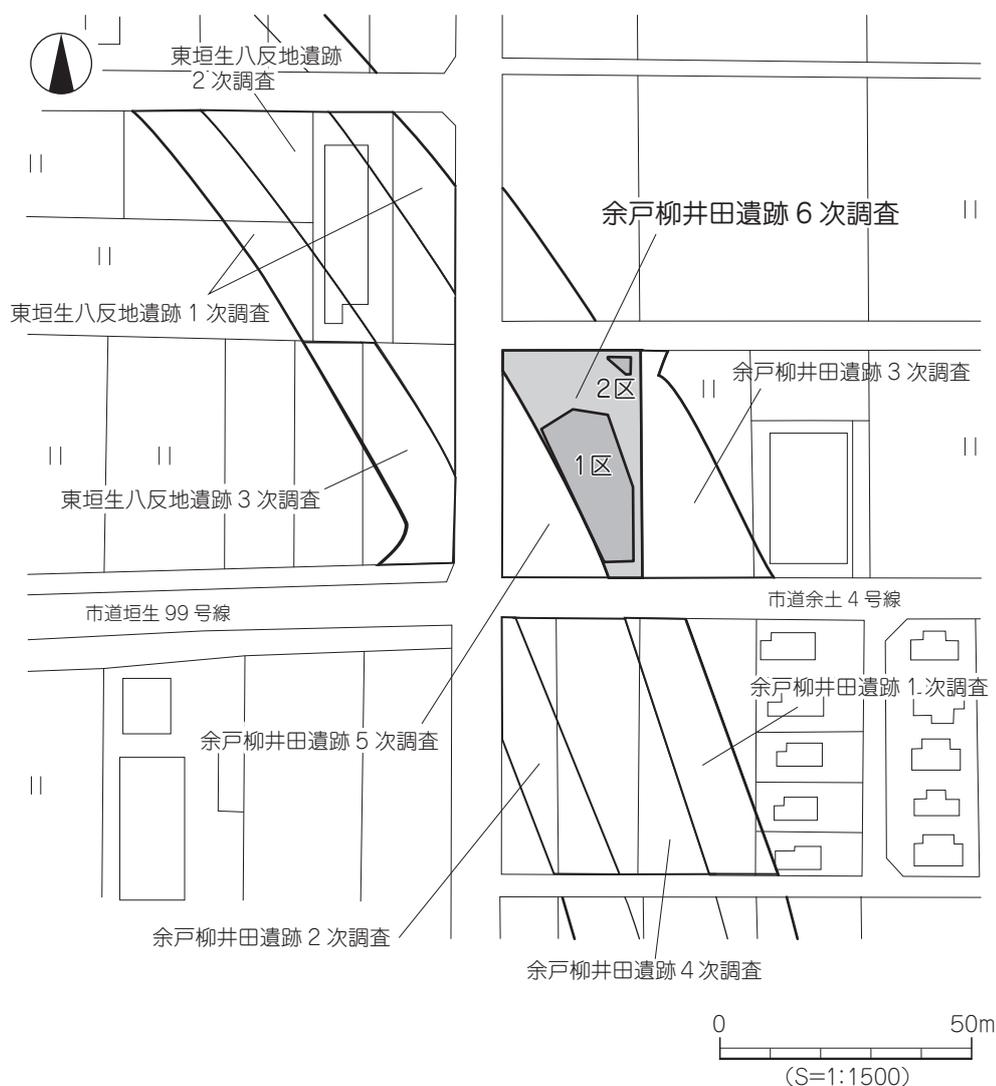
(2)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
113	皿	口径 8.9 底径 6.2 器高 1.1	口縁部は短く外反し、底部は平底。底部外面に回転糸切り痕あり。1/2の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	明赤褐色 橙色	密 ◎		
114	皿	口径 (8.6) 底径 (5.2) 器高 1.0	小片。	ナデ	ナデ	灰色 灰色	石・長 (1) ◎		
115	皿	口径 8.5 底径 6.5 器高 1.6	底部外面に回転糸切り痕あり。1/2の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰白色 灰白色	密 ◎		
116	甕	口径 (23.4) 残高 4.1	内湾口縁。小片。	ナデ	ナデ	灰褐色 橙色	石・長 (1~2) 金 ◎	煤付着	
117	甕	口径 (29.8) 残高 7.4	口縁部は内湾し、口縁端部は丸く仕上げ。小片。	ヨコナデ	ナデ	黒褐色 黒褐色	石・長 (1~2) 金 ◎	煤付着	
118	椀	口径 (12.7) 底径 (2.0) 器高 4.7	瓦器椀。断面三角形の高台を貼付。内面に平行線状の暗文あり。1/2の残存。	指頭痕	ナデ	灰色 灰色	石・長 (1~3) ◎		
119	椀	口径 (14.2) 残高 3.3	瓦器椀。小片。	ヘラミガキ	ヘラミガキ	灰色 灰色	密 ◎		
120	椀	口径 (16.0) 残高 3.6	瓦器椀。体部上位に稜をもち、内面にらせん状の暗文あり。小片。	ナデ (指頭痕)	ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
121	椀	底径 (5.9) 残高 2.8	瓦器椀。断面三角形の高台を貼付。	ナデ (指頭痕)	ナデ	暗灰色 暗灰色	密 ◎		
122	椀	底径 4.7 残高 2.2	瓦器椀。高台は低く、丸味を帯びる。1/4の残存。	ナデ	ヘラミガキ	灰色 灰色	石・長 (1~3) ◎		
123	椀	底径 (6.6) 残高 2.3	瓦器椀。断面三角形の高台を貼付。小片。	ナデ (指頭痕)	ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
124	椀	底径 (4.0) 残高 0.9	瓦器椀。断面三角形の高台を貼付。	ナデ	ナデ	灰色 灰白色	長 (1) ◎		
125	皿	口径 (8.8) 底径 (3.9) 器高 1.7	瓦器皿。1/3の残存。	ナデ (指頭痕)	ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
126	鉢	口径 (25.8) 残高 5.5	東播系須恵器。口縁部は上下に肥厚。小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
127	鉢	口径 (25.0) 残高 3.7	東播系須恵器。口縁部は僅かに拡張。小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
128	碗	口径 (15.3) 残高 2.8	白磁。玉縁状口縁。透明釉が掛けられている。小片。	施釉	施釉	灰白色 灰白色	密 (灰白色) ◎		29
129	土人形	残高 6.0	断面楕円形状の土製品。土師質。	ナデ	—	橙色	密 ◎		29
130	土人形	残高 5.7	土製品。土師質。	ナデ	—	橙色	密 ◎		29

第 10 章 余戸柳井田遺跡 6 次調査

第 1 節 調査の経緯

余戸柳井田遺跡 6 次調査は、松山市余戸西四丁目 2189 番 4 の一部を調査対象地とし、調査面積は約 715㎡である。東隣を余戸柳井田遺跡 3 次調査地、西隣を余戸柳井田遺跡 5 次調査地に挟まれている。試掘調査の結果、柱穴を検出し、中世集落確認のため発掘調査を実施した。調査期間は平成 28 年 6 月 23 日から同年 9 月 30 日である。平成 28 年 6 月 23 日、重機を使用して地表下約 60cm の地点まで表土を掘削し、水田耕作に伴う足跡（第 1 面）を検出し、7 月 25 日に終了する。7 月 26 日から重機を使用して地表面下約 80cm の地点まで掘削し、集落の調査（第 2 面）を行い、9 月 30 日に屋外調査を終了した。



第 109 図 調査地位置図

第 2 節 層 位 (第 111 図・図版 30)

調査地は、松山平野西側の現在の重信川河口から 2.8km 上流の右岸で、標高 4.5 m に位置する。調査以前は水田として利用されており、調査では第 I 層から第 III 層を検出した。

第 I 層：近現代の水田耕作に伴う耕作土で 2 種類に分層される。

第 I ①層 - 近現代の農耕に伴う耕作土で、暗緑灰色土 (7.5GY 4/1) が 1・2 区全域に堆積し、層厚 10 ~ 30cm を測る。

第 I ②層 - 近現代の農耕に伴う床土で、明黄褐色土 (10YR 7/6) が南北端を除く 1 区全域に堆積し、層厚 5 ~ 13cm を測る。

第 II 層：中世段階の土壤で、土色・土質の違いにより 8 種類に分層される。

第 II ①層 - 灰色土 (7.5Y 5/1) が 1 区全域に堆積し、層厚 10 ~ 30cm を測る。

第 II ②層 - 灰オリーブ色土 (7.5Y 5/2) が北端を除く 1 区全域に堆積し、層厚 5 ~ 30cm を測る。

第 II ③層 - 灰白色微砂 (N 8/0) で、水田を覆う洪水砂である。西北部を除く 1 区全域に堆積し、層厚 2 ~ 18cm を測る。

第 II ④層 - オリーブ灰色粘質土 (2.5GY 5/1) で、室町時代の水田層である。本層上面にて足跡を検出する。1 区・2 区全域に堆積し、層厚 6 ~ 22cm を測る。

第 II ⑤層 - 黄灰色粘質土 (2.5Y 5/1) で、1 区西北部に堆積し、層厚 8 ~ 32cm を測る。

第 II ⑥層 - 第 II ⑤層より粘性が強く調査区西端中央部付近にて堆積し、層厚 6 ~ 18cm を測る。

第 II ⑦層 - 褐灰色土 (10YR 4/1) で、鎌倉時代の土師器や須恵器、瓦器片が出土した。北端を除く 1 区全域に堆積し、層厚 10 ~ 24cm を測る。

第 II ⑧層 - 灰色粘質土 (N 5/0) で、1 区西北部に堆積し、層厚 10 ~ 24cm を測る。

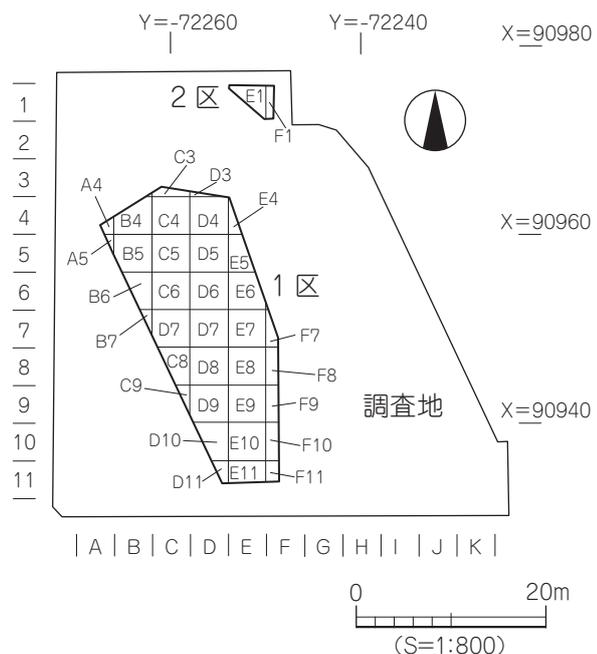
第 III 層：土色・土質の違いにより 2 種類に分

層される。

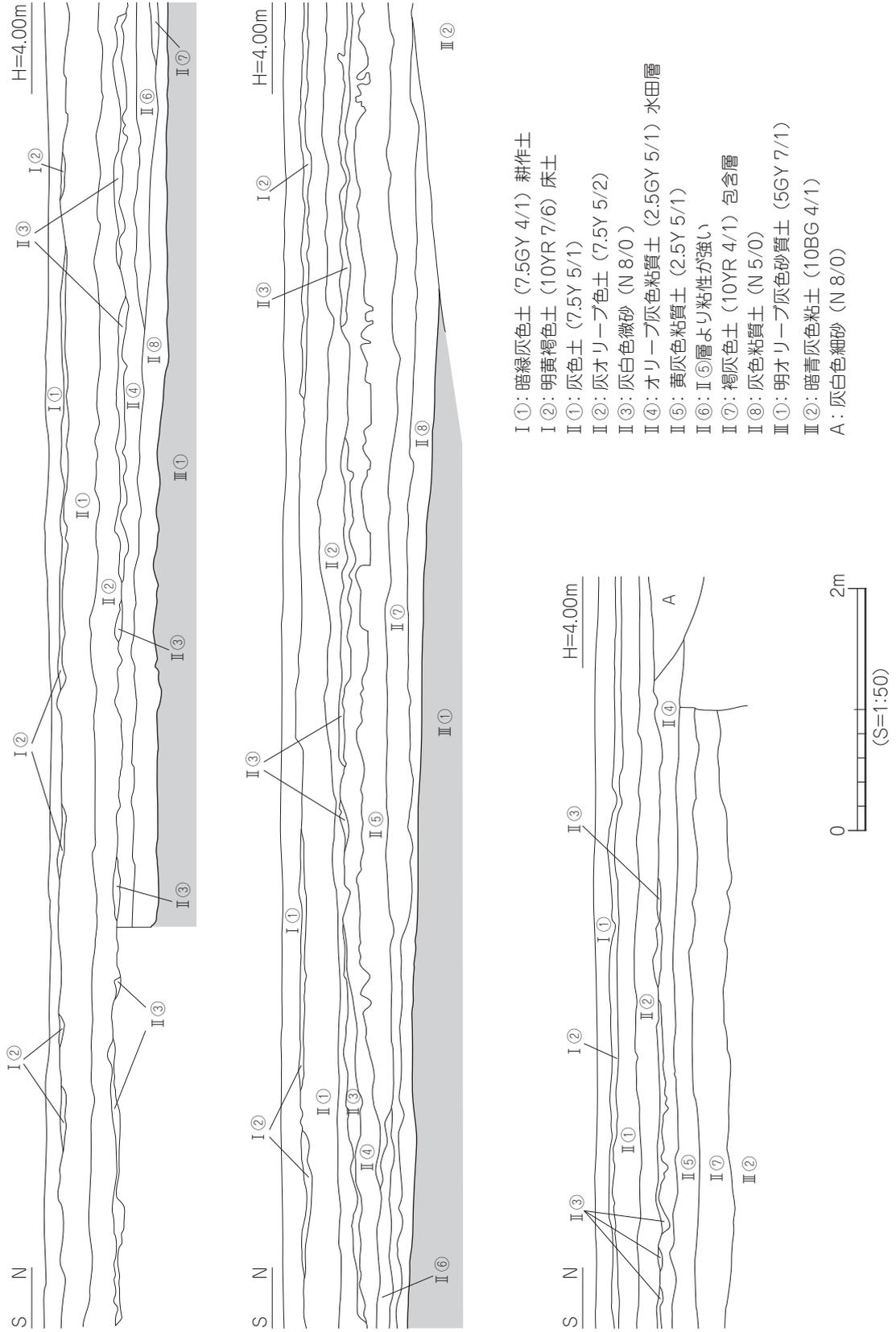
第 III ①層 - 明オリーブ灰色砂質土 (5GY 7/1) で、北端を除く 1 区全域に堆積し、本層上面が最終の遺構検出面となる。

第 III ②層 - 暗青灰色粘土 (10BG 4/1) で、1 区北端に堆積する。

なお、調査にあたり調査地内を 4 m 四方のグリッドに分けた。グリッドは、北から南に向けて 1・2・3・…・11、西から東へ向けて A・B・C・…・F とし、A1・A2・…・F11 区といったグリッド名を付した (第 110 図)。



第 110 図 区割図



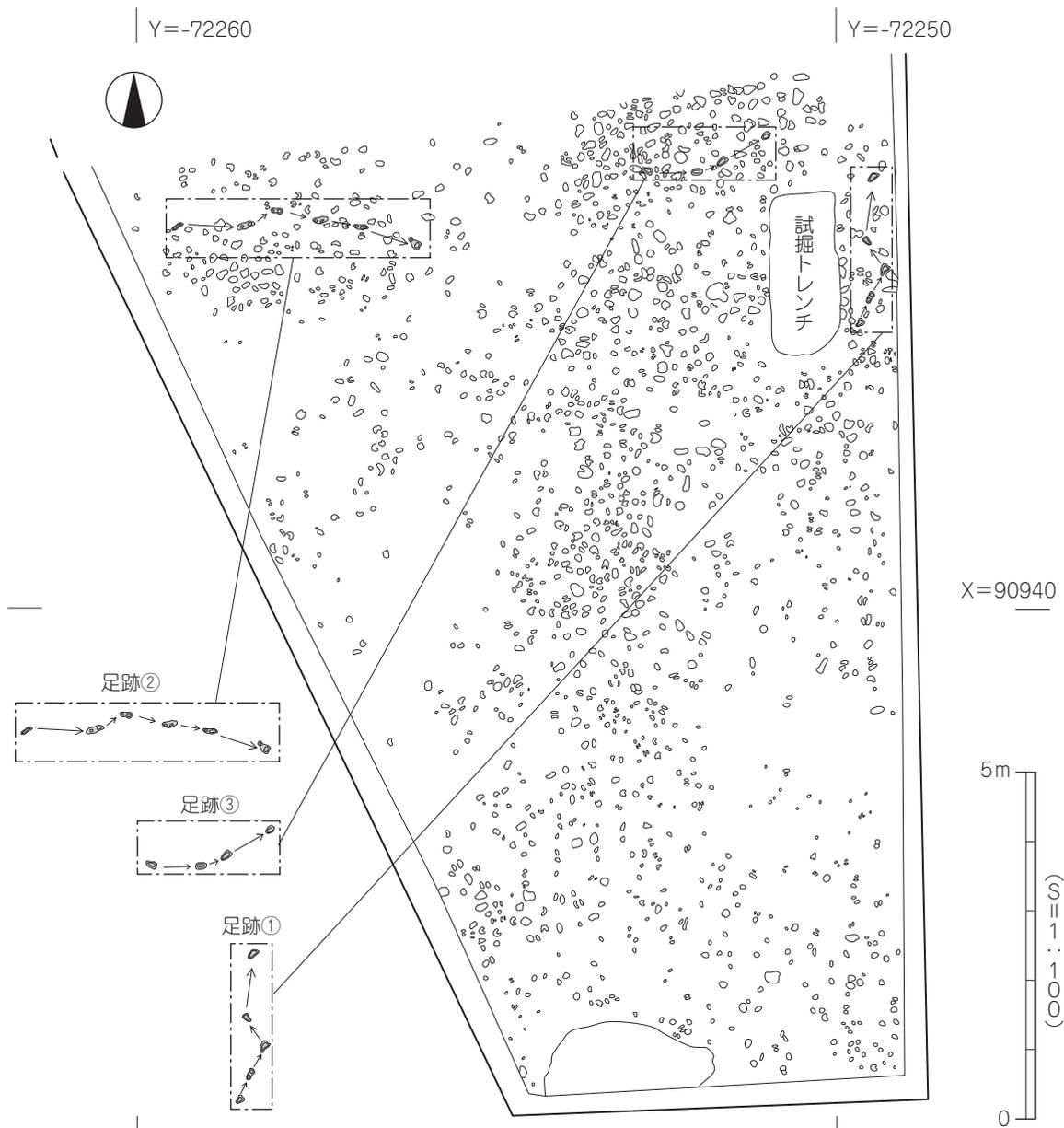
第111図 1区西壁土層図

第3節 遺構と遺物

調査では、1区第Ⅱ④層上面にて水田耕作に伴う人や牛の足跡や根株痕、1区第Ⅲ層上面では、溝1条、井戸1基、土坑3基、柱穴59基、鋤跡状遺構6条、性格不明遺構1基を検出した。なお、2区では遺構と遺物は未検出であった。

1. 水田址 (第112図・図版30)

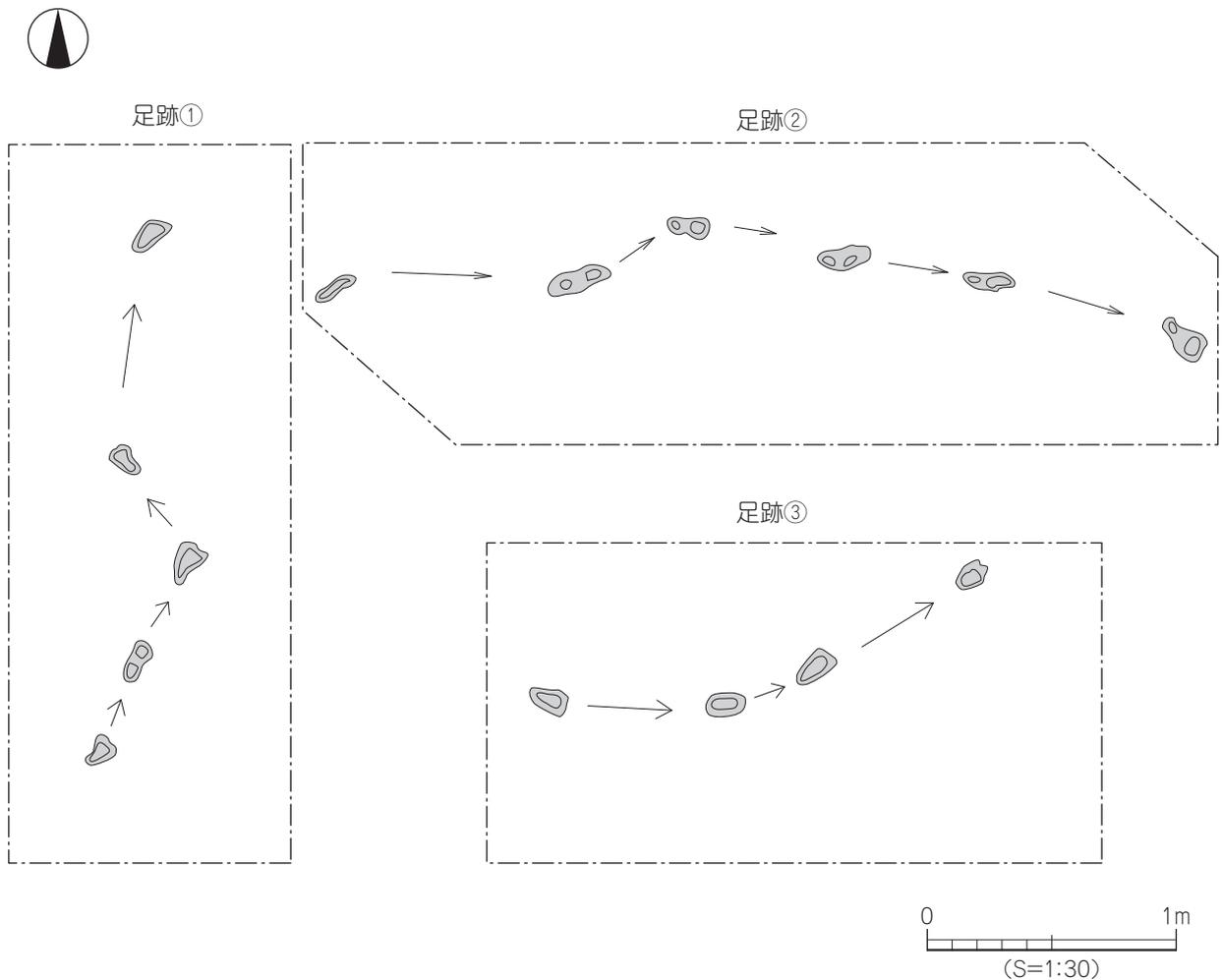
調査区全域の第Ⅱ④層上面から水田耕作に伴う足跡を検出した。人間や牛の足跡に混じり、根株痕と考えられる痕跡などを検出した。これらの痕跡は覆われた砂層を除去することで形状を確認し、足跡の数は人が129個で平均密度1.06個/m²、牛が358個で2.9個/m²、根株痕が1,034個で8.5個/m²



第112図 1区第1面水田足跡

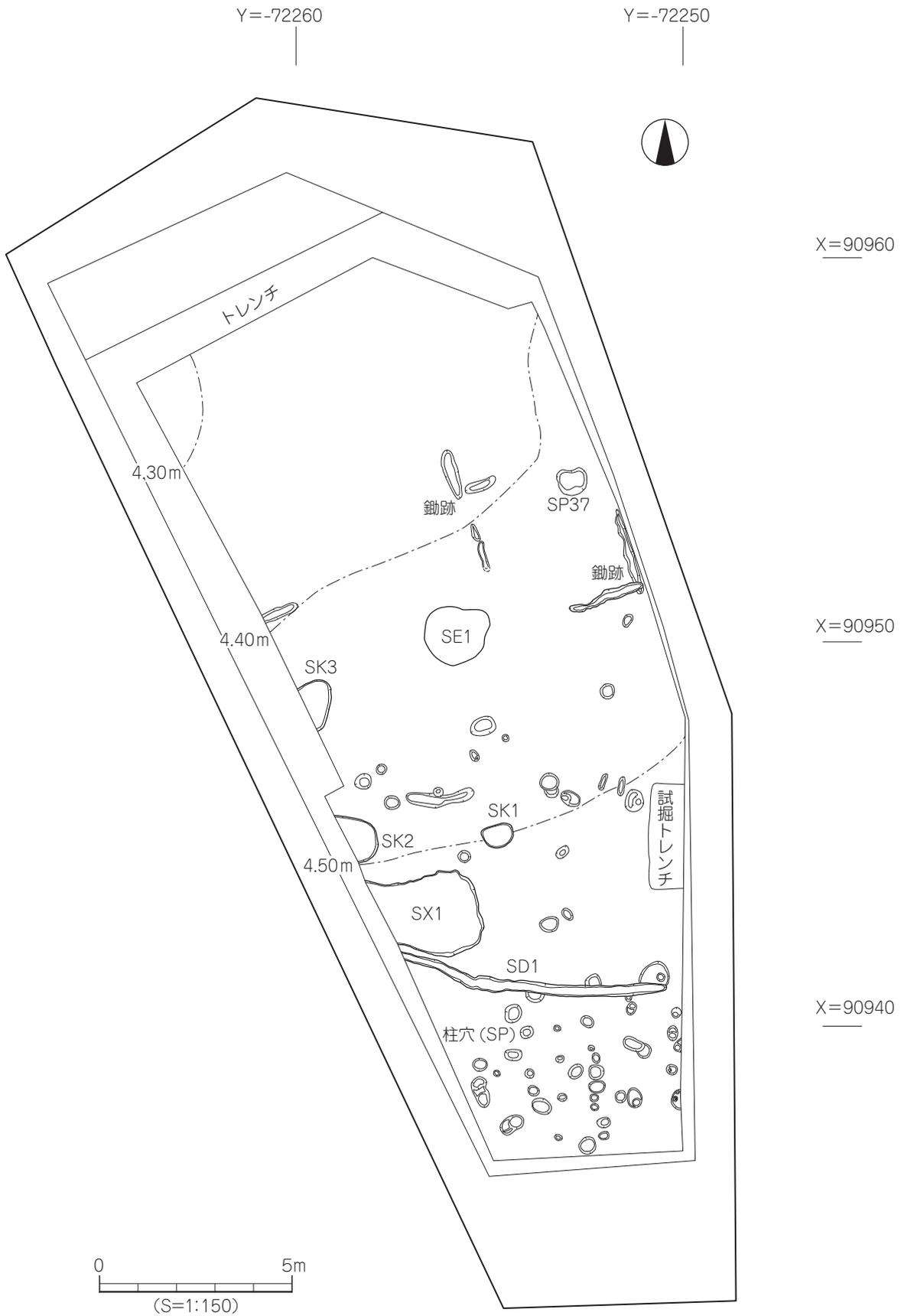
m²であった。牛の足跡は東西方向を指向しているものが多いが、規則的に歩行したものは未確認である。人の足跡は調査区中央部から北側付近の密度が濃いだが、規則性をもつものは北端部に見られ、足跡①は南から北へ4歩歩いており検出長2.2m、足跡の長さが13～19cm、歩幅25～80cmを測り、右足と左足は殆ど開いていない。足跡②は西から東方向へ5歩歩いており、検出長3.6m、足跡の長さ18～27cm、歩幅28～76cmを測り、右足と左足は殆ど開いていない。足跡③は西から東方向へ歩いており、検出長2.0m、足跡の長さ15～18cm、歩幅20～54cmを測り、右足と左足は殆ど開いていない。検出水田面には段や比高差はなく、水田面の範囲は南北14.5m以上、東西11m以上の広がりをもつことを確認したが、畦畔や水路などの施設は未確認である。遺物は、土師器の小片が僅かに出土した。

時期：検出層位から、室町時代に存在した水田と考えられる。



第113図 1区第1面水田足跡①②③

余戸柳井田遺跡 6次調査



第 114 図 1 区第 2 面遺構配置図

2. 溝

第Ⅲ層上面において、溝1条を検出した。

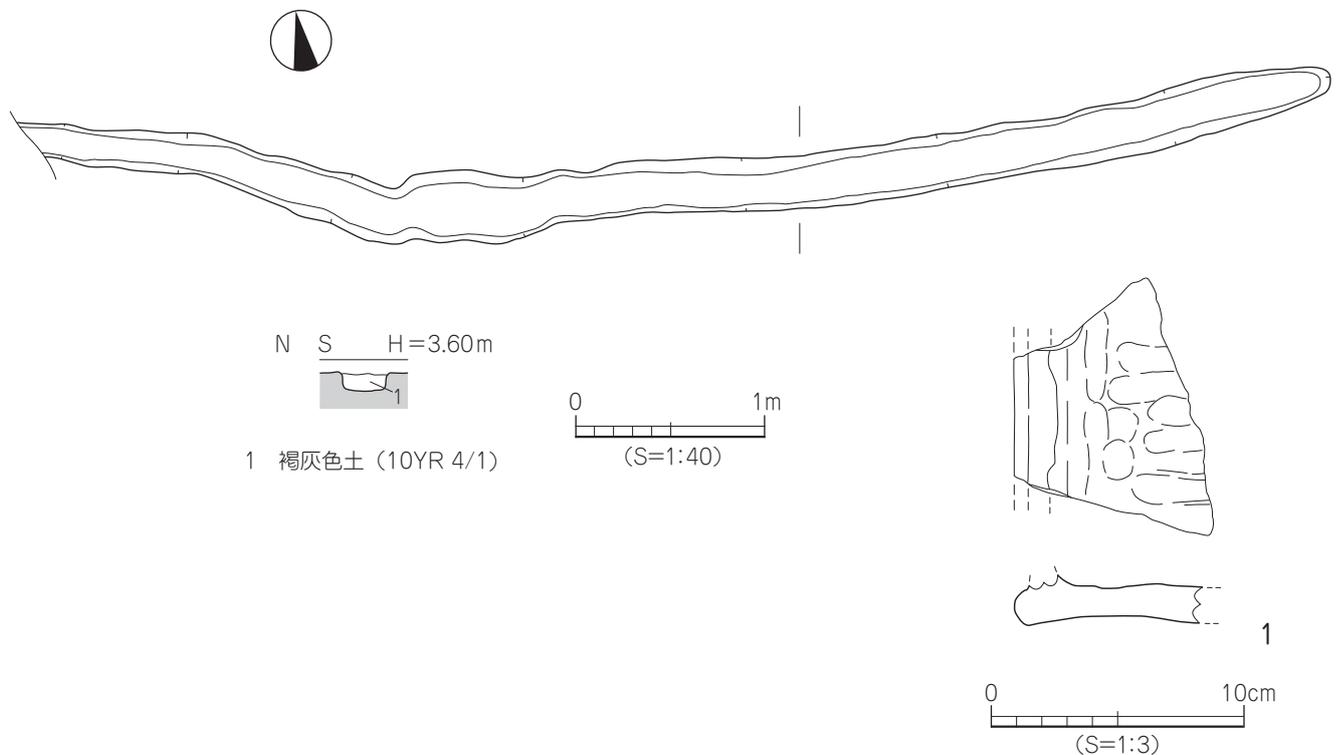
SD1 (第115図)

調査区南部D9～E9区に位置し、柱穴を切り、西端は調査区外に延びる。東西方向を指向しており、やや湾曲を呈する。断面形状は皿状を呈しており、規模は検出長6.90m、幅0.20～0.39m、深さ5～13cmを測り、溝床は、東から西へ2cmの比高差をもつ。埋土は、褐灰色土(10YR 4/1)の単一層である。遺物は埋土上位から溝床にかけて、土師器や須恵器、瓦器片が出土した。

出土遺物 (第115図)

1は置き竈の焚き口部で鏝がつき、内外面にナデ調整が施される。

時期：時期決定しうる遺物が乏しく、検出層位や埋土から12～13世紀代と考えられる。



第115図 SD1 測量図・出土遺物実測図

3. 井戸址

第Ⅲ層上面において、井戸址1基を検出した。

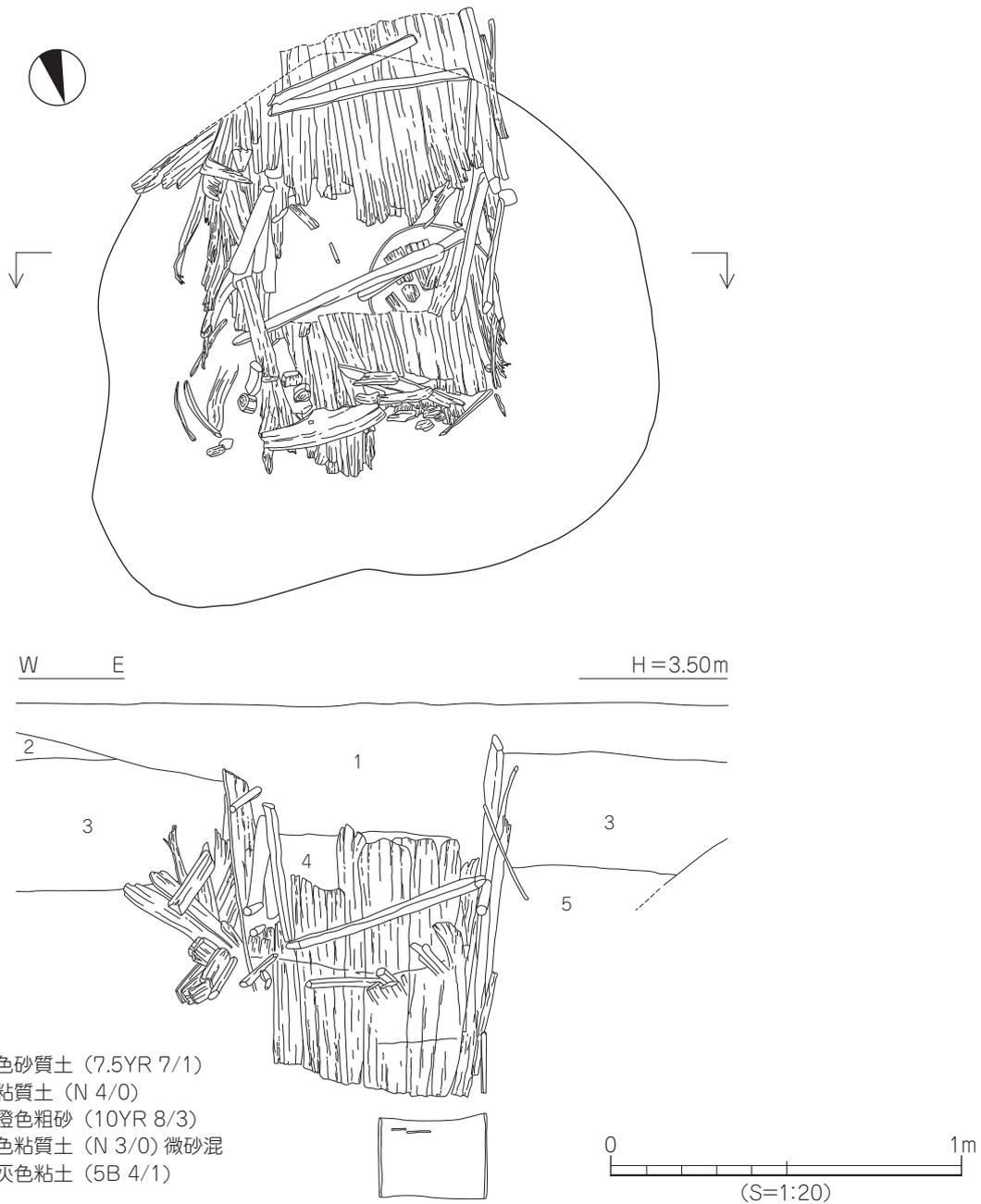
SE1 (第116図・図版31)

調査区中央部のD7区に位置する。平面形態は不整楕円形、断面形態は逆台形状を呈する。残存規模は東西長1.60m、南北長1.56m、深さ1.42mを測る。井戸枠は井戸上位から基底面にかけては加工した柱材を四角形状に組んで縦に板材(幅9～12cm)を貼り付けており、基底面には直径36cmの曲げ物の井戸枠が2段据えられていた。井戸は上層が粗砂層、下層が粘質砂層を掘り込んで造られて

おり、井戸枠の中からは土師器や瓦器片が少量出土した。

出土遺物 (第 117 図、図版 33)

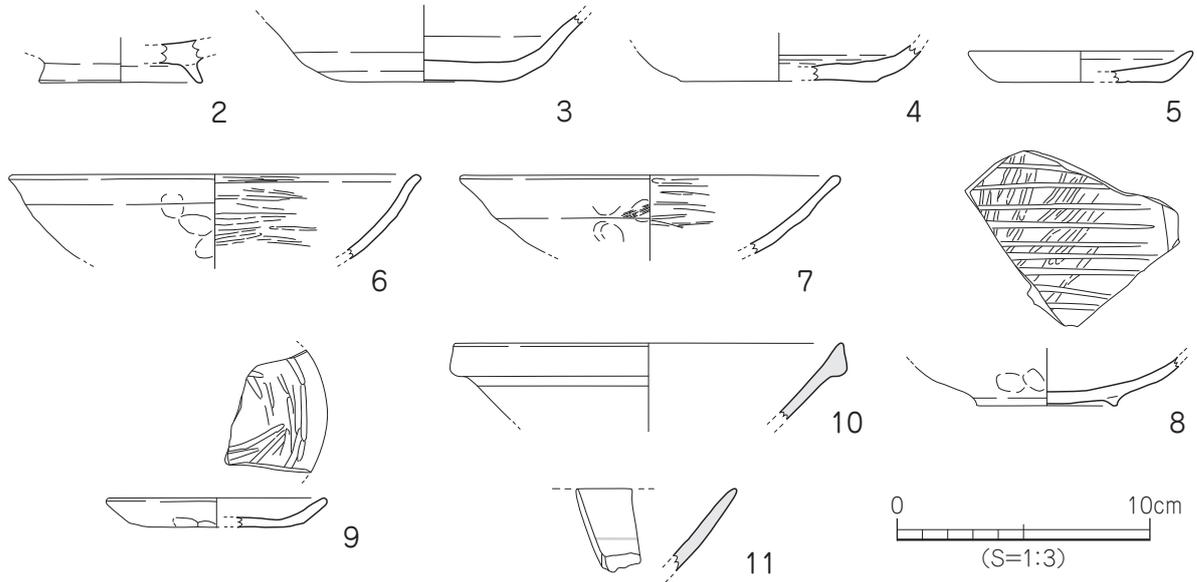
2 は土師器碗の底部で、底部に細長い貼り付け高台をもつ。3・4 は土師器坏で、平底の底部から内傾して立ち上がり、3 は口縁部付近は外傾する。3・4 共に底部は回転糸切り痕が残る。5 は土師器皿で、肉厚な底部に、立ち上がりは短く内傾する。6～8 は瓦器碗である。6・7 は、内傾する胴部内面に圏線状の暗文が施される。8 は、底部に断面三角形形状の貼り付け高台をもち、内面には斜格子状の暗文が施される。9 は瓦器皿で、やや外傾し立ち上がる。内面には、圏線状の暗文が施される。10・11 は



第 116 図 SE1 測量図

白磁碗で、10は口縁端部外面が下膨れの玉縁状に巡る。11はやや内傾して立ち上がり、胴部内面中に圈線が1条巡る。

時期：出土した瓦器の特徴から、13世紀前半と考えられる。



第 117 図 SE1 出土遺物実測図

3. 土 坑

第Ⅲ層上面において、土坑3基を検出した。

SK 1 (第 118 図)

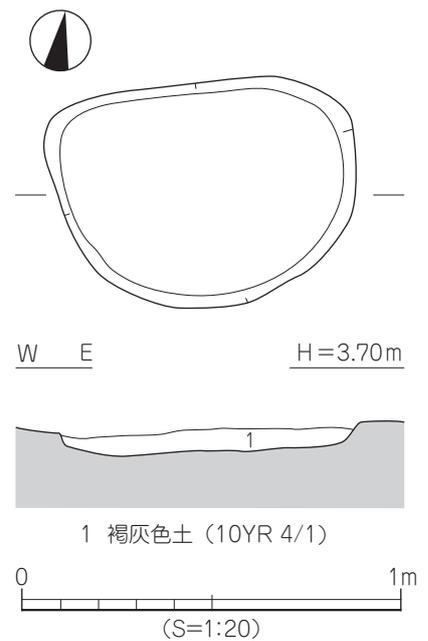
調査区中央部 D8 区に位置する。平面形態は楕円形、断面形態は皿状を呈する。規模は長軸 0.78m、短軸 0.60m、深さ 9cm を測る。埋土は、褐灰色土 (10YR 4/1) の単一層である。出土遺物はない。

時期：出土遺物がなく、検出層位や埋土から 12～13 世紀代と考えられる。

SK 2 (第 119 図)

調査区中央部西端 C8～D8 区に位置し、西端はトレンチに切られる。残存状況から平面形態は楕円形を呈するものと想定され、断面形態は皿状を呈する。規模は東西 1.14m 以上、南北 1.15m、深さ 4cm を測る。埋土は、褐灰色土 (5YR 6/1) の単一層である。出土遺物はない。

時期：出土遺物がなく埋土が SX1 と酷似することから、13 世紀中頃と考えられる。

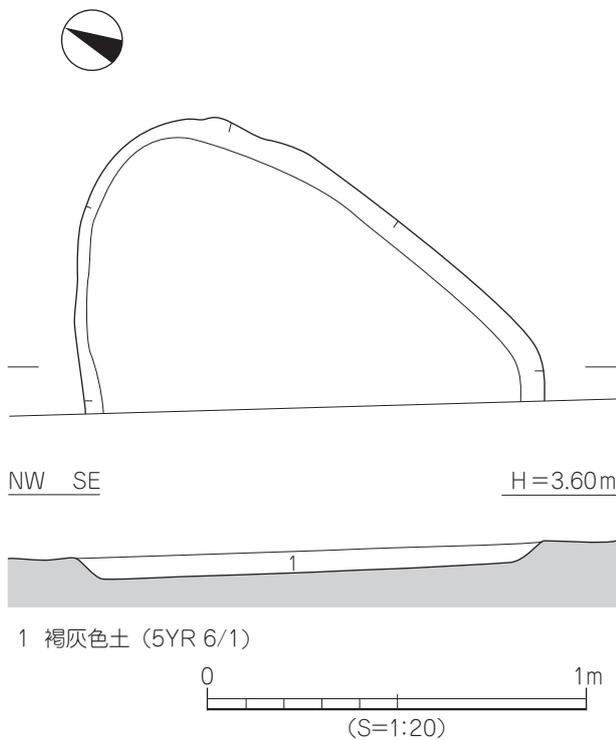


第 118 図 SK1 測量図

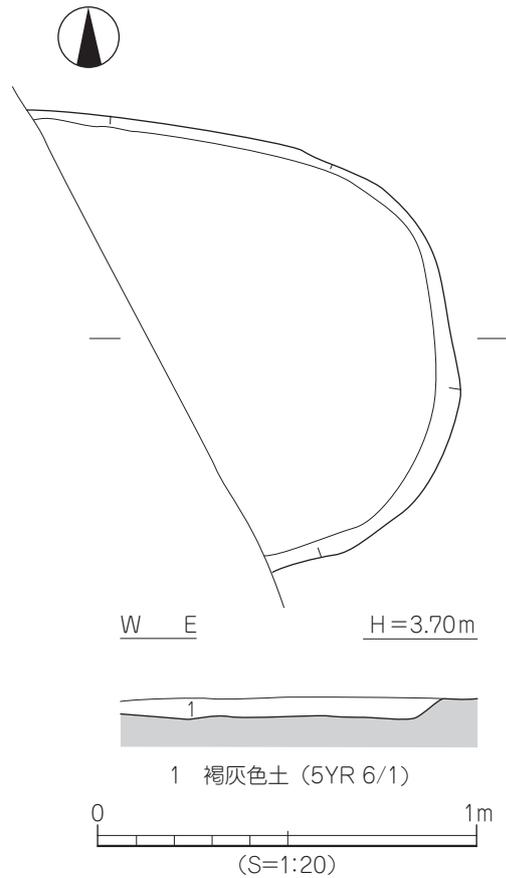
SK3 (第120図)

調査区中央部西端 C7 区に位置し、西側は調査区外に延びる。西端はトレンチに切られる。残存状況から平面形態は楕円形を呈するものと想定され、断面形態は皿状を呈する。規模は東西 0.64m 以上、南北 1.30m 以上、深さ 10cm を測る。埋土は、褐灰色土 (5YR 6/1) の単一層である。出土遺物はない。

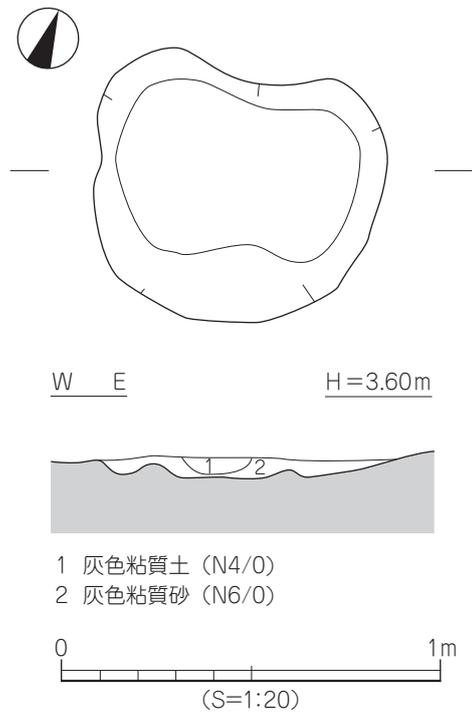
時期：出土遺物はなく、埋土が SX1 と酷似することから、13 世紀中頃と考えられる。



第120図 SK3 測量図



第119図 SK2 測量図



第121図 SP37 測量図

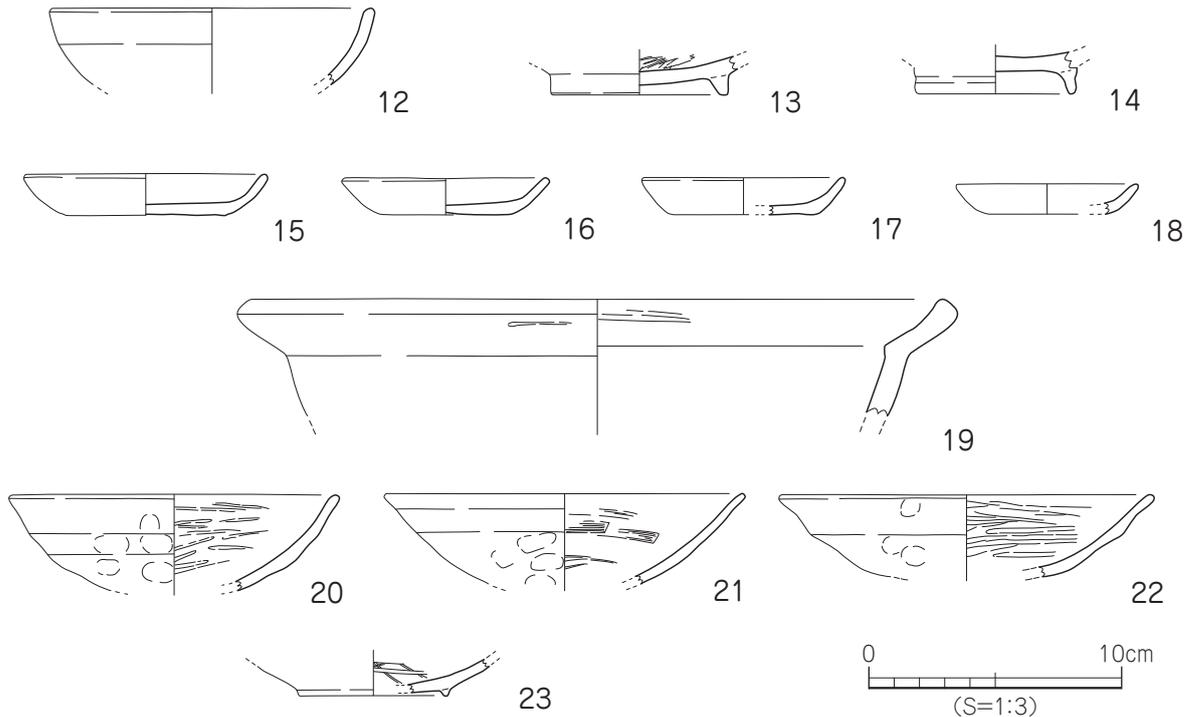
4. 柱 穴 (第121図・図版31)

第Ⅲ層上面において、59基の柱穴を検出した。平面形態は円形～楕円形を呈しており、規模は直径9～82cm、深さ2～29cmを測る。埋土は褐灰色土 (5YR6/1・10YR 4/1)・黒褐色土 (10YR3/1) で、一部の柱穴内からは土師器、須恵器、瓦器、陶磁器の小片が僅かに出土した。

出土遺物 (第122図)

12～14は土師器碗で、12は内傾する口縁部付近に稜をもち、内面にナデ調整、外面に横ナデ調整が施される。13・14は貼付け高台をもつ底部で、13は底部に逆台形状

の貼り付け高台をもち、外面にナデ調整、内面にミガキ調整が施される。14は下方に延びる貼り付け高台をもち、内外面にナデ調整が施される。15～18は土師器皿で、平底の底部から内傾気味に立ち上がり、15・16は底部に回転糸切り痕が残る。19は土鍋の口縁部で、「く」字状の口縁部に端部は平らな面をなし、やや内側に肥厚され、内面はナデ調整、外面にハケ目調整が施される。20～23は瓦器碗である。20～22は内傾する胴部内面に圏線状の暗文が施される。23は底部に逆台形状の貼り付け高台をもつ。内面には圏線状と平行する暗文が施される。



第122図 柱穴出土遺物実測図

5. 鋤跡

第Ⅲ層上面において、6条の鋤跡を検出した。鋤跡は南東から北西方向のものとそれに直交するものがあり、規模は検出長0.8～2.3m、幅0.15～0.3m、深さ3～9cmを測る。埋土は褐灰色土(5YR6/1・10YR 4/1)で、出土遺物はない。

6. 性格不明遺構

第Ⅲ層上面において、性格不明遺構1基を検出した。

S X 1 (第123図)

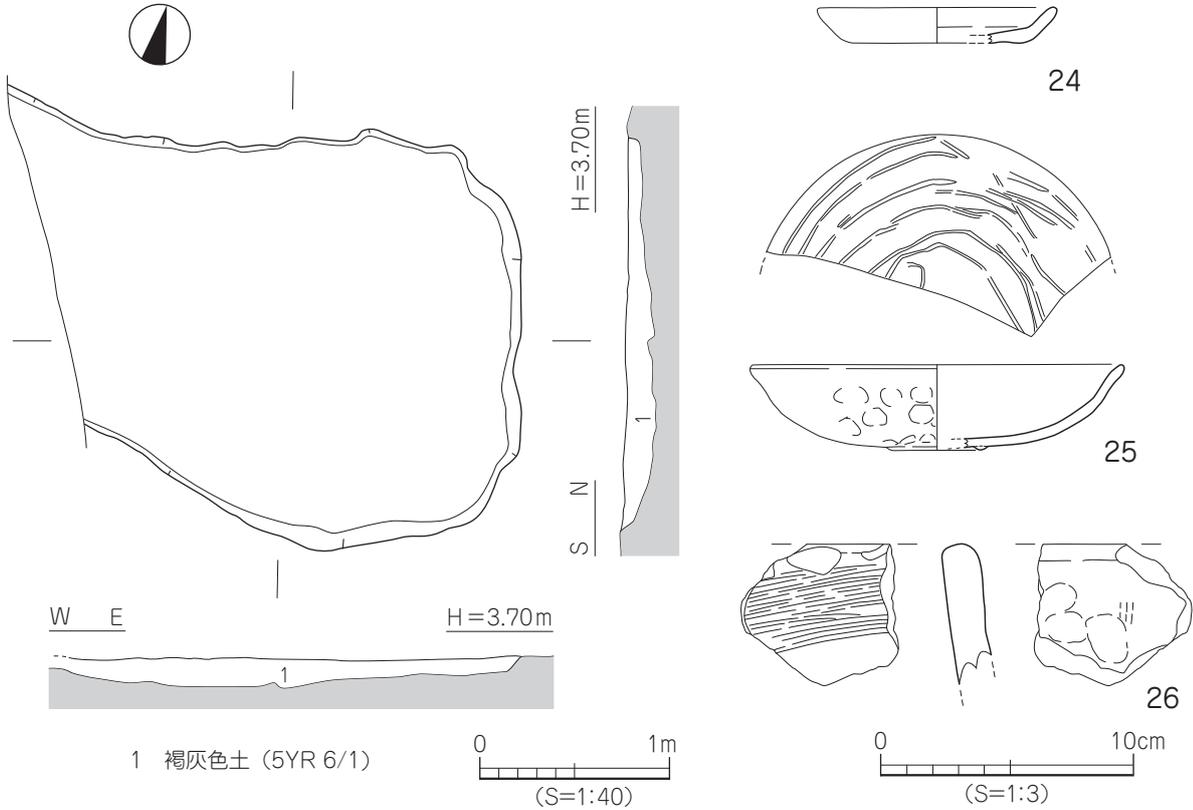
調査区西北部のD8～D9区に位置し、西側はトレンチに切られる。平面形態は不整形、断面形態は皿状を呈する。残存規模は東西長2.45m以上、南北2.0m、深さ16cmを測る。埋土は、褐灰色土(5YR 6/1)の単一層である。遺物は埋土中から、土師器や瓦器が少量出土した。

出土遺物 (第123図・図版33)

24は土師器皿で、平底の底部より直線的に立ち上がり、底部に回転糸切り痕が残る。25は瓦器碗で、底部に断面三角形状の浅い貼り付け高台をもち、内面には圏線状の暗文が施される。26は置き竈の

焚口部で、内面が煤ける。

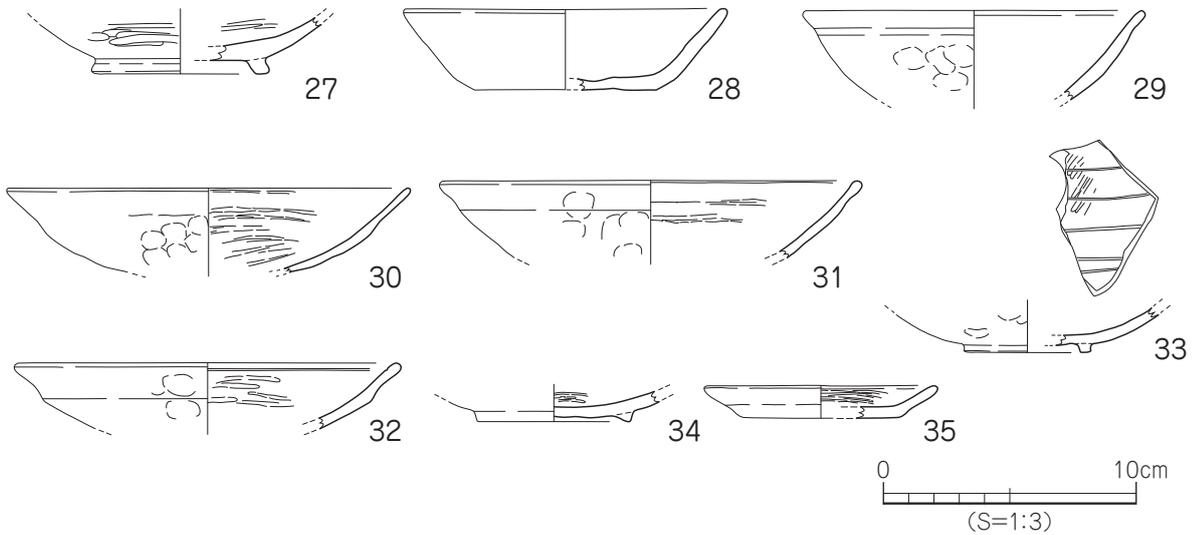
時期：出土した瓦器の特徴から、13世紀中頃と考えられる。



第123図 SX1 測量図・出土遺物実測図

7. 1区北側トレンチ・北端粘土中出土遺物 (第124図)

27は土師器椀で、外踏張りの台形状の貼り付け高台をもち、内面にヘラミガキ調整が施される。28は土師器坏で、平底の底部から外傾して直線的に立ち上がり、底部に回転糸切り痕が残る。29～

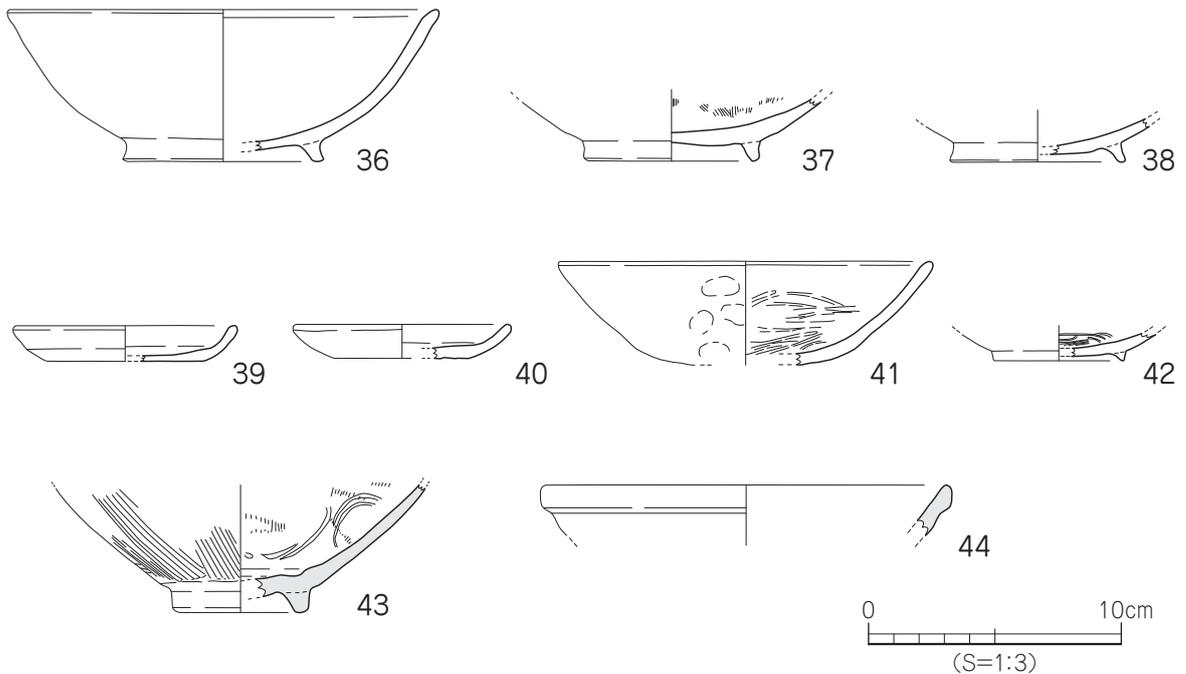


第124図 1区北側トレンチ・北端粘土中出土遺物実測図

34は瓦器碗である。29は、内湾する胴部に口縁部がやや外反し、外面の口縁部境に沈線状の凹みが1条巡る。内外面が煤ける。30～32は内面に圈線状の暗文が施される。33は、高台が断面四角形状で内面に平行した暗文が施される。34は断面三角形の貼り付け高台をもつ。35は瓦器皿で胴部内面に幅狭な圈線状の暗文が施される。

8. 1区包含層出土遺物（第125図・図版33）

36～38は土師器碗で、外踏張りの貼り付け高台をもつ。39・40は土師器皿で、39は口縁部がやや肥厚し、40は平底の底部から内傾気味に立ち上がり、内外面が煤ける。41・42は瓦器碗で、41は内面に圈線状の暗文が施される。42は断面三角形の貼り付け高台をもち、底部内面に螺旋状の暗文が施される。43・44は磁器碗である。43は青磁で底部に逆台形状の高台をもち、胴部内面に片切り彫りの文様と櫛先によるジグザグ状の文様があり、外面には櫛描文様が施される。44は白磁で口縁部が断面三角形を呈する。



第125図 包含層出土遺物実測図

3. 2区の調査

2区は、1区の東北角から北北東方向に約9mの地点に位置する。調査区内に堆積した砂層から大量の湧水があり、調査区壁面が崩落し危険な為、遺構・遺物の有無と土層観察と測量を行った後、掘削同日に埋戻しを行った。

土層堆積からは、河川堆積の砂層と粘土層の互層であり、遺構の検出や遺物の出土はない。この砂層の堆積から、B区全域は自然流路内にあることを確認した。

第 4 節 小 結

本調査は、調査地の大半を占める 1 区と北東部の 2 区の 2 カ所で行った。2 区は約 10m²の狭小な調査区で、第 1 面である室町時代の水田面に伴う足跡は堆積土層にて確認したが、第 2 面の遺構は未検出であった。第 1 面と第 2 面の間には、鎌倉時代から室町時代の間機能していた自然流路の堆積砂を確認することができた。以下、1 区の検出遺構を概説する。

1 区の調査では第 1 面にて生産遺構、第 2 面からは集落遺構を検出した。第 2 面の地形は南から北方向に緩傾斜しており、遺構の殆どは地形の高い南側で検出しており、なかでも最も高い部分には柱穴が集中する。この柱穴群は、調査区外に広がる掘立柱建物の可能性をもつ。井戸 SE1 は加工材を四角形に組んだ井戸枠で構成しており、基底面の取水部には曲げ物の板材が 2 段据えられていた。なお、木組みには板を縦に貼り付けており、中世井戸の構造を知る上で貴重な資料である。調査区北端の地形が低い部分では、第 2 面の遺構を検出する砂質土層から粘土層に変化しており、その上面には砂層の堆積を検出した。このエリアは、第 2 面の鎌倉時代から第 1 面の室町時代までの間において東西方向に西流する自然流路の南岸部分と思われ、東垣生八反地遺跡 3 次調査では北岸部分が検出されていることから当調査地から西流する自然流路の存在が確認でき、流路幅は約 25m 前後となる。両岸が緩やかに傾斜し、堆積砂の粒も揃っていることから、直線的に伸びた自然流路であったことが窺える。

第 1 面の水田址は室町時代のもので、水田面は洪水砂に覆われている。この水田址は調査地周辺の余戸柳井田遺跡 1～5 次調査や東垣生八反地遺跡 1・2 次調査で確認された水田と一連のものであり、周辺一帯が生産域として土地利用されたことを示す資料である。

以上のことから、調査地は平安時代後期から鎌倉時代にかけては集落域として土地利用されており、室町時代になると耕作地として生産活動が行われていたことが確認できた。これらの調査成果は調査地周辺における集落の広がりや構造を解明する上で貴重な資料であり、今後は周辺遺跡の調査成果との関連を検討することで、より詳細な集落構造を解明する必要がある。

遺構一覧

遺構一覧・遺物観察表 - 凡例 -

以下の表は、本調査地検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。

(1) 遺構一覧表

- 地区欄 グリッド名を記載。
- 規模欄 () : 現存検出長を示す。
- 出土遺物欄 出土遺物の略記について
土→土師器、須→須恵器、瓦→瓦器、磁→磁器

(2) 遺物観察表

- 法量欄 () : 復元推定値
- 調整欄 土器の各部位名称を略記した。
例) ◎→底部
- 胎土欄 胎土欄は混和剤を略記した。
例) 石→石英、長→長石、金→金ウンモ
() 中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。
例) 石・長 (1~4) → 「1~4mm大の石英・長石を含む」である。
- 焼成欄 焼成欄の略記について
◎ → 良好、○ → 良、△ → 不良

表 69 溝一覧

溝 (SD)	地区	断面形	規模 長さ×幅×深さ (m)	埋土	出土遺物	時期	備考
1	D9 ~ E9	皿状	(6.90) × 0.20 ~ 0.39 × 0.05 ~ 0.13	褐灰色土 (10YR 4/1)	土・須・瓦	鎌倉時代 13世紀	西端は調査区外に延びる。東西方向。

表 70 井戸址一覧

井戸 (SE)	地区	平面形	断面形	規模 長径×短径×深さ (m)	埋土	出土遺物	時期	備考
1	D7	不整楕円形	逆台形状	1.60 × 1.56 × 1.42	灰白色砂質土 (7.5YR 7/1) ~ 暗灰色粘質土 (N 3/0)	土・瓦・磁	鎌倉時代 13世紀	

表 71 土坑一覧

土坑 (SK)	地区	平面形	断面形	規模 長径×短径×深さ (m)	埋土	出土遺物	時期	備考
1	D8	楕円形	皿状	0.78 × 0.60 × 0.09	褐灰色土 (10YR 4/1)	なし	鎌倉時代 13世紀	
2	C8 ~ D8	楕円形	皿状	(1.14) × 1.15 × 0.04	褐灰色土 (5YR 6/1)	なし	平安時代後期 ~ 鎌倉時代	西端はトレンチに切られる。
3	C7	楕円形	皿状	(1.30) × (0.64) × 0.10	褐灰色土 (5YR 6/1)	なし	平安時代後期 ~ 鎌倉時代	西端はトレンチに切られる。

表 72 性格不明遺構一覧

性格不明遺構 (SX)	地区	平面形	断面形	規模 長径×短径×深さ (m)	埋土	出土遺物	時期	備考
1	D8 ~ D9	不整形	皿状	2.45 × 2.00 × 0.16	褐灰色土 (5YR 6/1)	土・瓦	鎌倉時代 13世紀	西側はトレンチに切られる。

表 73 SD1 出土遺物観察表 (土製品)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面 内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
1	置き竈	残高 10.2	焚き口部で鏝がつく。	ナデ	ナデ	灰黄褐色 灰黄褐色	石・長 (1~4) 金 ◎		

余戸柳井田遺跡 6 次調査

表 74 SE1 出土遺物観察表 (土製品)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
2	椀	底径 (6.4) 残高 1.7	底部に細長い貼り付け高台をもつ。	ナデ	ナデ	灰白色 灰白色	微砂粒 ◎		
3	坏	底径 (6.4) 残高 2.6	平底の底部から内傾して立ち上がり、口縁部付近は外傾する。	ナデ ◎回転糸切り	ナデ	灰白色 灰白色	微砂粒 ◎		
4	坏	底径 (7.7) 残高 1.4	平底の底部から内傾して立ち上がる。	ナデ ◎回転糸切り	回転ナデ	灰黄色 灰黄色	微砂粒 ◎		
5	皿	口径 (8.8) 底径 (6.5) 器高 1.2	肉厚な底部に、立ち上がりは短く内傾する。	ナデ	ナデ	淡黄色 淡黄色	微砂粒 ◎		
6	椀	口径 (16.0) 残高 3.3	内傾する胴部内面には、圏線状の暗文が施される。(瓦器)	ヨコナデ ナデ (指頭痕)	ミガキ (暗文)	暗灰色 暗灰色	微砂粒 ◎		
7	椀	口径 (14.8) 残高 3.1	内傾する胴部内面には、圏線状の暗文が施される。(瓦器)	ナデ (指頭痕)	ミガキ (暗文)	灰色 灰色	微砂粒 ◎		
8	椀	底径 (5.6) 残高 1.9	底部に断面三角形の貼り付け高台をもち、内面には斜格子状の暗文が施される。(瓦器)	ナデ (指頭痕) ヨコナデ	ミガキ (暗文)	暗灰色 暗灰色	密 ◎		33
9	皿	口径 (8.4) 底径 (5.2) 器高 1.2	やや外傾し立ち上がる。内面には、圏線状の暗文が施される。(瓦器)	回転ナデ (指頭痕)	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
10	碗	口径 (15.2) 残高 3.0	口縁端部外面は下膨れの玉縁状に巡る。(磁器)	回転ナデ	回転ナデ	明オリーフ灰色 明オリーフ灰色	密 ◎		33
11	碗	残高 3.3	やや内傾して立ち上がる。胴部内面に圏線が巡る。(磁器)	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎	施釉	

表 75 柱穴出土遺物観察表 (土製品)

(1)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
12	椀	口径 (12.6) 残高 3.0	内傾する口縁部付近に稜をもつ。	ヨコナデ	ナデ	灰白色 灰白色	微砂粒 ◎		
13	椀	底径 (6.8) 残高 1.5	底部に逆台形状の貼り付け高台をもつ。	ナデ	ミガキ	灰褐色 黒色	微砂粒・金 ◎		
14	椀	底径 (6.2) 残高 1.6	下方に延びる貼り付け高台をもつ。	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	微砂粒・金 ◎		
15	皿	口径 (9.4) 底径 (6.2) 器高 1.6	平底の底部より内傾気味に立ち上がる。	回転ナデ ◎回転糸切り →板圧痕	回転ナデ	浅黄橙色 浅黄橙色	密・赤 ◎		
16	皿	口径 (8.0) 器高 1.5	平底の底部より内傾気味に立ち上がる。	ナデ ◎回転糸切り	ナデ	灰白色 灰白色	微砂粒 ◎		
17	皿	口径 (7.8) 底径 (5.6) 器高 1.4	やや内傾して立ち上がる。	マメツ	マメツ	にぶい橙色 にぶい橙色	微砂粒 金少量含 ◎		
18	皿	口径 (7.2) 底径 (4.6) 器高 1.2	やや内傾して立ち上がる。	ナデ	ナデ	淡黄色 淡黄色	微砂粒 ◎		
19	鍋	口径 (27.2) 残高 4.6	「く」字状の口縁部に端部は平らな面をなし、やや内側に肥厚される。	ナデ	ハケ (5本/cm) ナデ	灰褐色 灰褐色	石・長 (1~4) 金 ◎		
20	椀	口径 (12.8) 残高 3.8	内傾する胴部内面に圏線状の暗文が施される。(瓦器)	ナデ (指頭痕)	ミガキ	灰白色 灰白色	微砂粒 △		

遺物観察表

柱穴出土遺物観察表 (土製品)

(2)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
21	椀	口径 (14.0) 残高 3.6	内傾する胴部内面に圏線状の暗文が施される。(瓦器)	ナデ (指頭痕)	ミガキ (暗文)	暗灰色 黒色	微砂粒 ◎		
22	椀	口径 (14.6) 残高 3.3	内傾する胴部内面に圏線状の暗文が施される。(瓦器)	ナデ (指頭痕)	ミガキ (暗文)	暗灰色 暗灰色	微砂粒 ◎		
23	椀	底径 (5.8) 残高 1.5	底部に逆台形状の貼り付け高台をもつ。内面には圏線状と平行する暗文が施される。(瓦器)	ナデ	ミガキ (暗文)	灰色 灰色	微砂粒 ◎		

表 76 SX1 出土遺物観察表 (土製品)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
24	皿	口径 (9.2) 底径 (6.8) 器高 1.4	平底の底部より直線的に立ち上がる。	ヨコナデ ◎回転糸切り	ナデ	淡黄色 灰白色	微砂粒 ◎	煤付着	
25	椀	口径 (14.6) 底径 (3.4) 器高 3.5	底部に断面三角形の浅い貼り付け高台をもち、内面には圏線状の暗文が施される。(瓦器)	ナデ (指頭痕)	ミガキ (暗文)	黒色 黒色	密 ◎		33
26	置き竈	残高 5.6	焚き口部で内面が煤ける。	ナデ (指頭痕)	ハケ (6~7本/cm) ナデ	黒褐色 橙色	石・長 (1~3) 金 ◎	煤付着	

表 77 1 区北側トレンチ・北端粘土中出土遺物観察表 (土製品)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
27	椀	底径 (6.8) 残高 2.3	外踏張りの台形状の貼り付け高台をもつ。	回転ナデ	ミガキ	灰白色 灰白色	石 (1~2) ◎		
28	坏	口径 (12.6) 底径 (7.2) 器高 3.3	平底の底部から外傾して直線的に立ち上がる。	マメツ ◎回転糸切り	マメツ	橙色 黒褐色	砂粒・赤 ◎		
29	椀	口径 (13.2) 残高 3.5	胴部は内傾し口縁部は、やや外反する。(瓦器)	ナデ (指頭痕)	ナデ	にぶい橙色 褐灰色	微砂粒 ◎	煤付着	
30	椀	口径 (15.8) 残高 3.3	内傾する胴部内面に圏線状の暗文が巡る。(瓦器)	ナデ (指頭痕)	ミガキ (暗文)	暗灰色 暗灰色	微砂粒 ◎		
31	椀	口径 (16.4) 残高 3.0	内面に圏線状の暗文が施される。(瓦器)	ナデ (指頭痕)	ミガキ (暗文)	灰色 灰色	微砂粒 ◎		
32	椀	口径 (14.9) 残高 2.6	内面に圏線状の暗文が施される。(瓦器)	ナデ (指頭痕)	ミガキ (暗文)	灰色 灰白色	微砂粒 ◎		
33	椀	底径 (5.0) 残高 1.8	高台は断面四角形状で、内面に平行した暗文が施される。(瓦器)	ナデ (指頭痕)	ミガキ (暗文)	黒色 黒色	密 ◎		
34	椀	底径 (6.0) 残高 1.2	断面三角形の貼り付け高台をもつ。(瓦器)	ナデ	ミガキ (暗文)	黒褐色 黒色	微砂粒 ◎		
35	皿	口径 (9.2) 底径 (6.2) 器高 1.3	胴部内面に幅狭な圏線状の暗文が施される。(瓦器)	ナデ	ミガキ (暗文)	青黒色 青黒色	密 ◎		

余戸柳井田遺跡 6 次調査

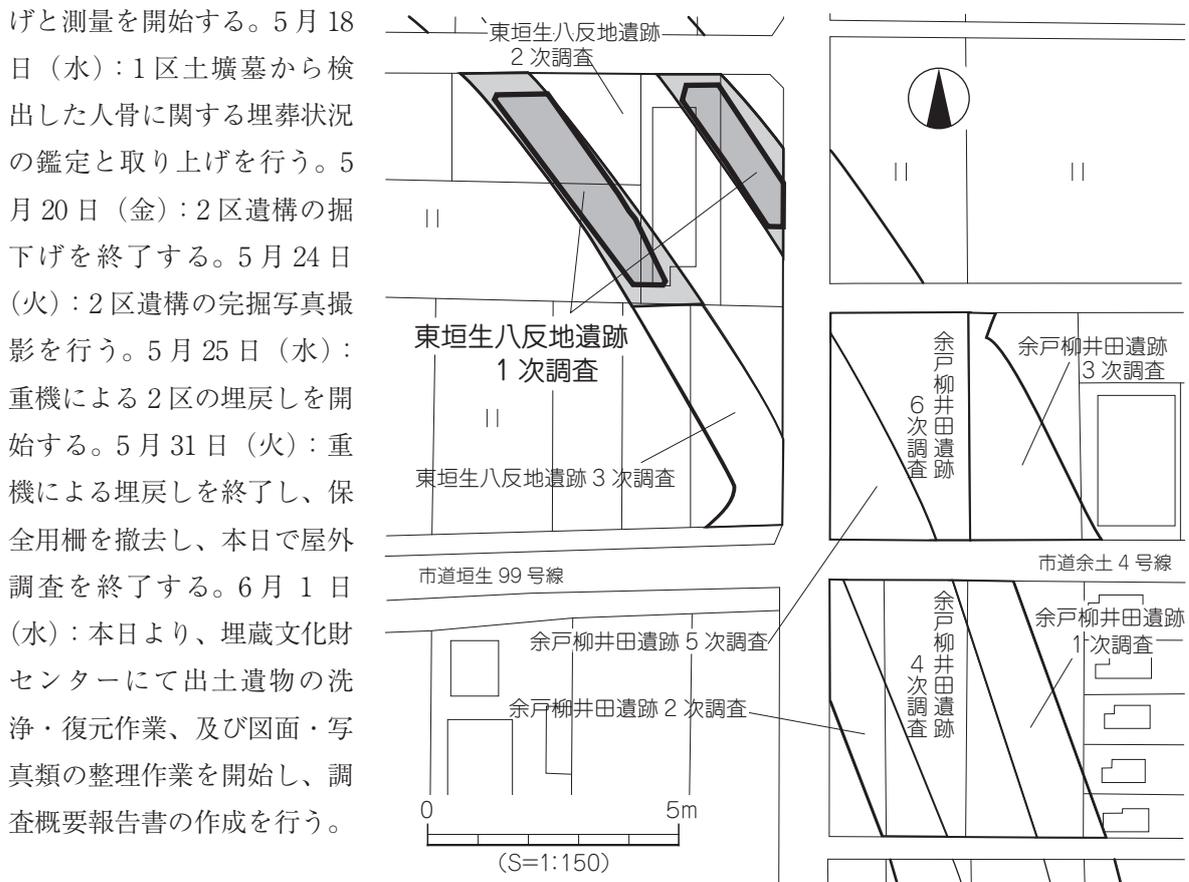
表 78 包含層出土遺物観察表 (土製品)

番号	器種	法量 (cm)	形 態・施 文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎 土 焼 成	備 考	図版
				外 面	内 面				
36	椀	口径 (16.8) 底径 (7.6) 器高 6.1	外踏張りの貼り付け高台をもつ。	マメツ	マメツ	灰色 浅黄橙色	砂粒・赤 ○		33
37	椀	底径 (6.6) 残高 2.5	やや外踏張りの貼り付け高台をもつ。	ナデ	ナデ	浅黄橙色 灰褐色	密 ◎		33
38	椀	底径 (6.8) 残高 1.8	外踏張りの貼り付け高台をもつ。	ナデ	ナデ	灰白色 灰色	微砂粒 ◎		
39	皿	口径 (8.8) 底径 (6.0) 器高 1.4	口縁部がやや肥厚する。	マメツ	マメツ	浅黄橙色 明黄褐色	微砂粒 金 ◎		
40	皿	口径 (8.6) 底径 (5.2) 器高 1.3	平底の底部から内傾気味に立ち上がり、内外面が煤ける。	ヨコナデ	ヨコナデ	褐灰色 灰白色・褐灰色	微砂粒 ◎	煤付着	
41	椀	口径 (14.6) 残高 4.1	内面に圏線状の暗文が施される。(瓦器)	ナデ (指頭痕)	ミガキ (暗文)	灰色 灰色	微砂粒 ◎		
42	椀	底径 (5.1) 残高 1.1	断面三角形の貼り付け高台をもち内面に螺旋状の暗文が施される。	ナデ	ミガキ (暗文)	灰色 灰色	密 ◎		
43	碗	底径 5.0 残高 5.0	底部に逆台形状の高台をもつ。(同安窯系) (磁器)	回転ナデ	回転ナデ	灰オリーブ色 灰オリーブ色	密 ◎	施釉	33
44	碗	口径 (15.8) 残高 2.0	口縁部が断面三角形を呈し、内外面が施釉される。(磁器)	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎	施釉	

第11章 東垣生八反地遺跡1次調査

第1節 調査の経緯

東垣生八反地遺跡1次調査の発掘調査は、平成28年3月1日より開始した。調査は排土置場の都合上、西側を1区、東側を2区とし、1区を調査し埋め戻した後、2区の調査を行うこととした（第127図）。以下、調査工程を略記する。3月1日（火）：本日より屋外調査を開始する。保全用柵を設置し、1区南側に現存する建物基礎の撤去作業を開始する。3月2日（水）：敷地を覆うシートの撤去と下草刈作業を行う。3月3日（木）：建物基礎の撤去作業に併行し、重機による1区の表土掘削を北端から開始すると同時に壁面や床面の精査も開始する。3月14日（月）：重機による表土掘削を終了する。3月15日（火）：1区の遺構検出写真撮影を行い、遺構の掘下げや測量を開始する。3月22日（火）：1区北端の水田面上で検出した足跡の掘下げを開始する。3月24日（木）：1区北端水田面の足跡完掘写真撮影を行う。3月30日（水）：1区北端水田面である第Ⅱ④層の掘下げを重機により行う。4月15日（金）：1区遺構完掘状況の写真撮影を行う。4月18日（月）：重機による1区の埋戻し作業を開始すると同時に、2区の建物基礎の撤去作業を開始する。4月20日（水）：重機による2区の表土掘削を開始すると同時に、壁面や床面の精査を開始する。4月26日（火）：重機による2区の表土掘削を終了する。4月28日（木）：2区の遺構検出写真撮影を行う。5月2日（月）：2区遺構の掘下げと測量を開始する。5月18日（水）：1区土壌墓から検出した人骨に関する埋葬状況の鑑定と取り上げを行う。5月20日（金）：2区遺構の掘下げを終了する。5月24日（火）：2区遺構の完掘写真撮影を行う。5月25日（水）：重機による2区の埋戻しを開始する。5月31日（火）：重機による埋戻しを終了し、保全用柵を撤去し、本日で屋外調査を終了する。6月1日（水）：本日より、埋蔵文化財センターにて出土遺物の洗浄・復元作業、及び図面・写真類の整理作業を開始し、調査概要報告書の作成を行う。



第126図 調査地周辺位置図

第 2 節 層 位 (第 128・129 図・図版 34)

調査地は、現在の重信川河口から 2.4km 上流の右岸の標高 4.3 ～ 4.7 m に立地し、調査以前は店舗や水田として土地利用されていた。本調査では第 I 層から第 III 層までを検出した。

第 I 層：近現代の造成や水田耕作に伴う耕土で、土色・土質の違いにより 3 種類に分層される。

第 I ①層 - 造成土で、土に混じった碎石が堆積し、層厚 36 ～ 52cm を測る。

第 I ②層 - 近現代の農耕に伴う耕作土で、灰色土 (10Y 4/1) が堆積し、層厚 6 ～ 28cm を測る。

第 I ③層 - 近現代の農耕に伴う床土で、黄橙色土 (10YR 7/8) が堆積し、層厚 1 ～ 9cm を測る。

第 II 層：中世段階の土壤中、土色・土質の違いにより 8 種類に分層される。

第 II ①層 - 褐灰色土 (10YR 6/1) で、層厚 1 ～ 15cm を測る。

第 II ②層 - 褐灰色土 (10YR 6/1) に砂質土が多く含まれ、層厚 1 ～ 15cm を測る。

第 II ③層 - 灰白色細砂 (10Y 8/1) で、水田①を覆う洪水砂であり、層厚 2 ～ 6cm を測る。

第 II ④層 - 黄灰色粘質土 (2.5Y 6/1) で、本層が水田面①となり、層厚 2 ～ 18cm を測る。

第 II ⑤層 - 黄灰色粘質土 (2.5Y 6/1) に砂粒と鉄分を多く含み、層厚 4 ～ 14cm を測る。

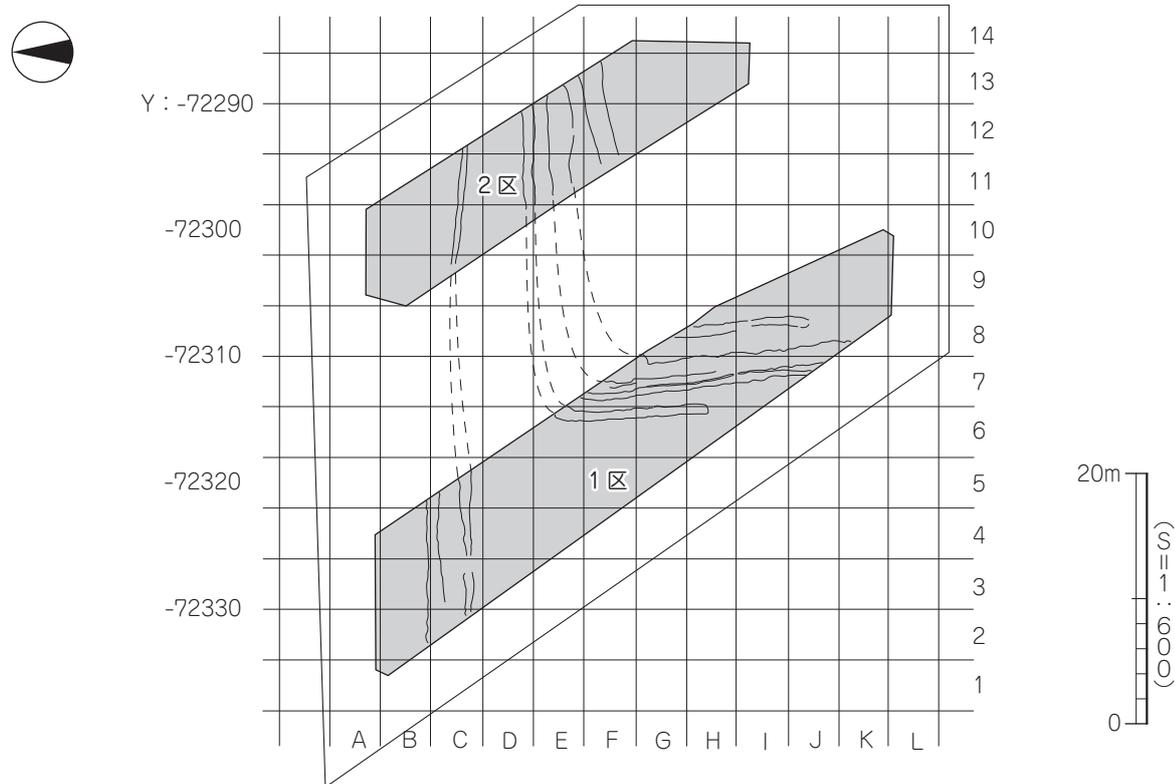
第 II ⑥層 - オリーブ灰色砂質土 (10Y 6/2) で、平安時代後期から鎌倉時代の土器片が出土し、層厚 14 ～ 18cm を測る。

第 II ⑦層 - 灰白色細砂 (N 8/0) で、水田面②を覆う洪水砂であり、層厚 12 ～ 25cm を測る。

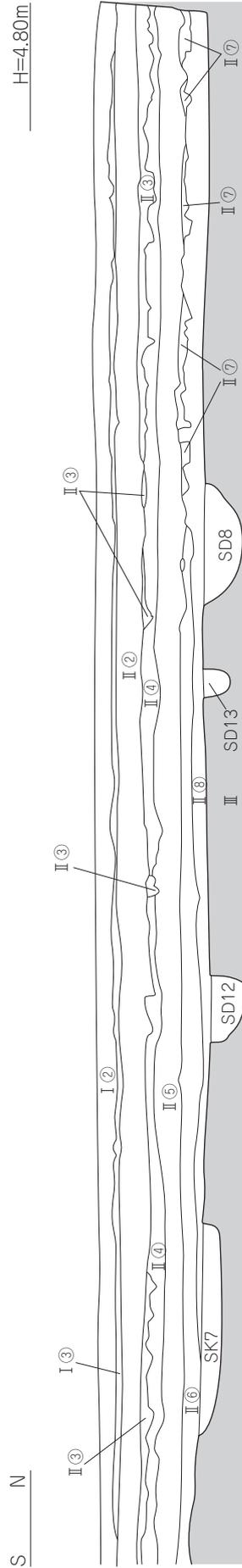
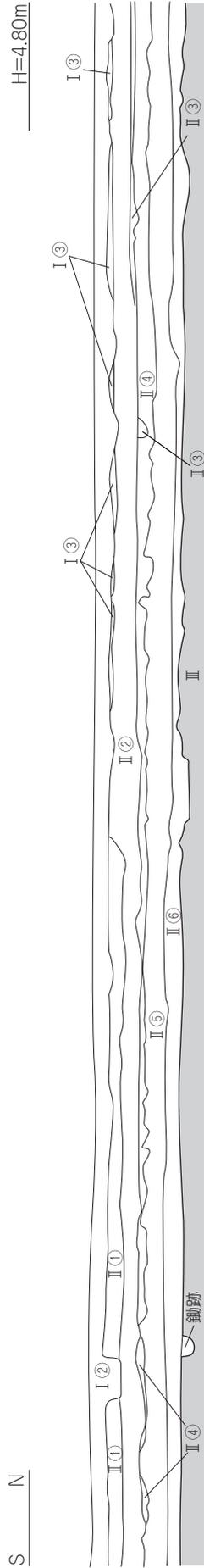
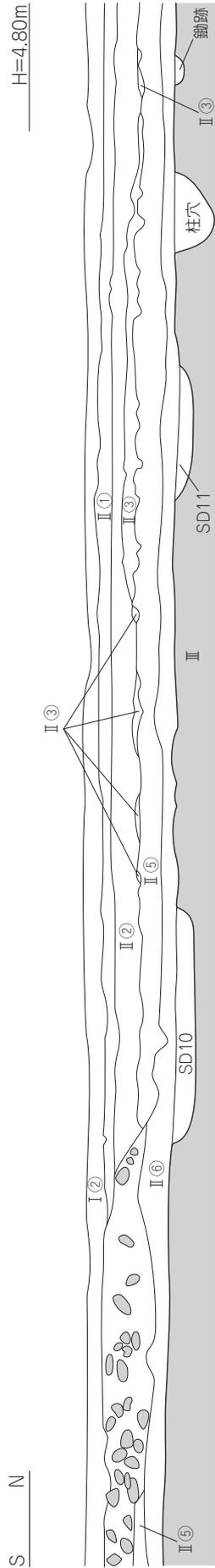
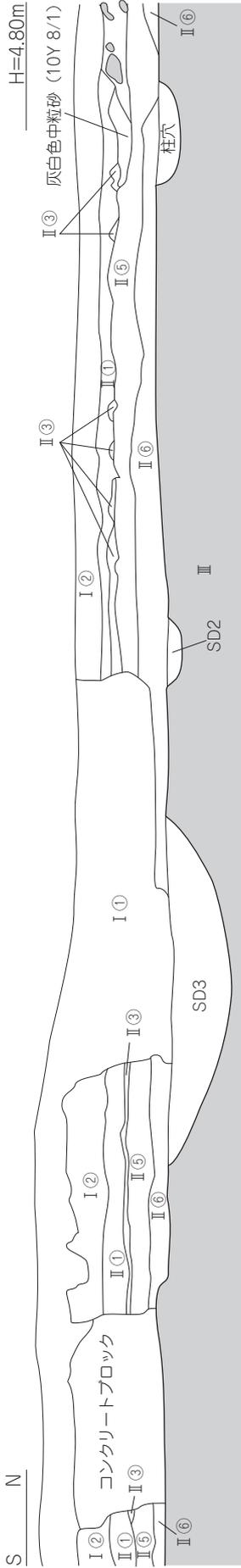
第 II ⑧層 - 緑灰色粘質土 (10GY 6/1) で、本層が水田面②となり、層厚 4 ～ 22cm を測る。

第 III 層：淡黄色砂質土 (2.5Y 8/3) で、本層上面が最終の遺構検出面となり、層厚は 20cm 以上となる。

なお、調査にあたり調査地内を 4 m 四方のグリッドに分けた。グリッドは、西から東に向けて 1・2・・・14、北から南へ向けて A・B・・・L とし、A1・A2・・・L14 区といったグリッド名を付した (第 127 図)。



第 127 図 区割図



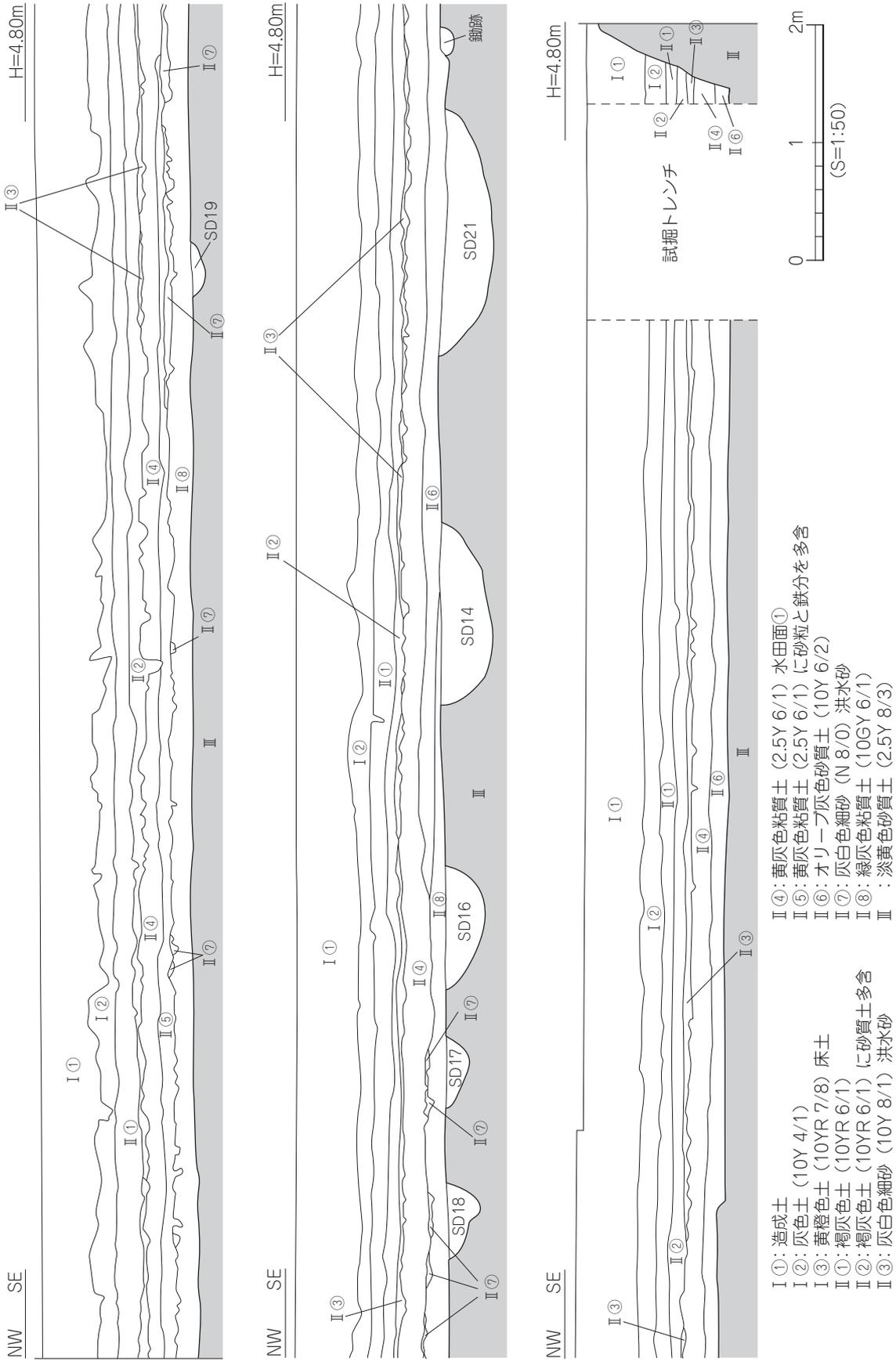
- I(1): 造成土
- I(2): 灰色土 (10Y 4/1)
- I(3): 黄橙色土 (10YR 7/8) 床土
- II(1): 褐灰色土 (10YR 6/1)
- II(2): 褐灰色土 (10YR 6/1) に砂質土多含
- II(3): 灰白色細砂 (10Y 8/1) 洪水砂

- II(4): 黄灰色粘質土 (2.5Y 6/1) 水田面①
- II(5): 黄灰色粘質土 (2.5Y 6/1) に砂粒と鉄分を多含
- II(6): オリブ灰色砂質土 (10Y 6/2)
- II(7): 灰白色細砂 (N 8/0) 洪水砂
- II(8): 緑灰色粘質土 (10GY 6/1)
- III: 淡黄色砂質土 (2.5Y 8/3)

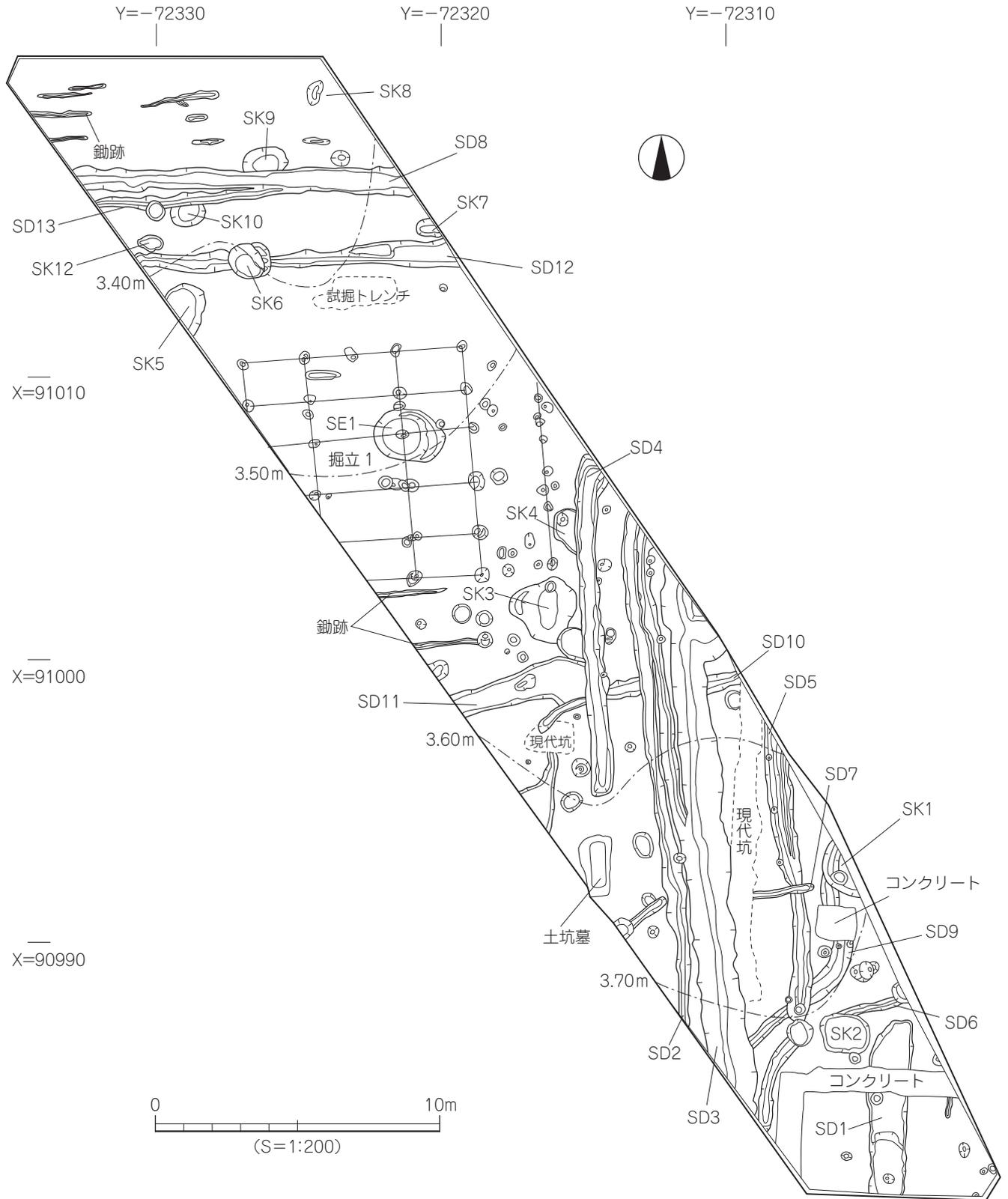
● 石



第 128 図 1 区西壁土層図

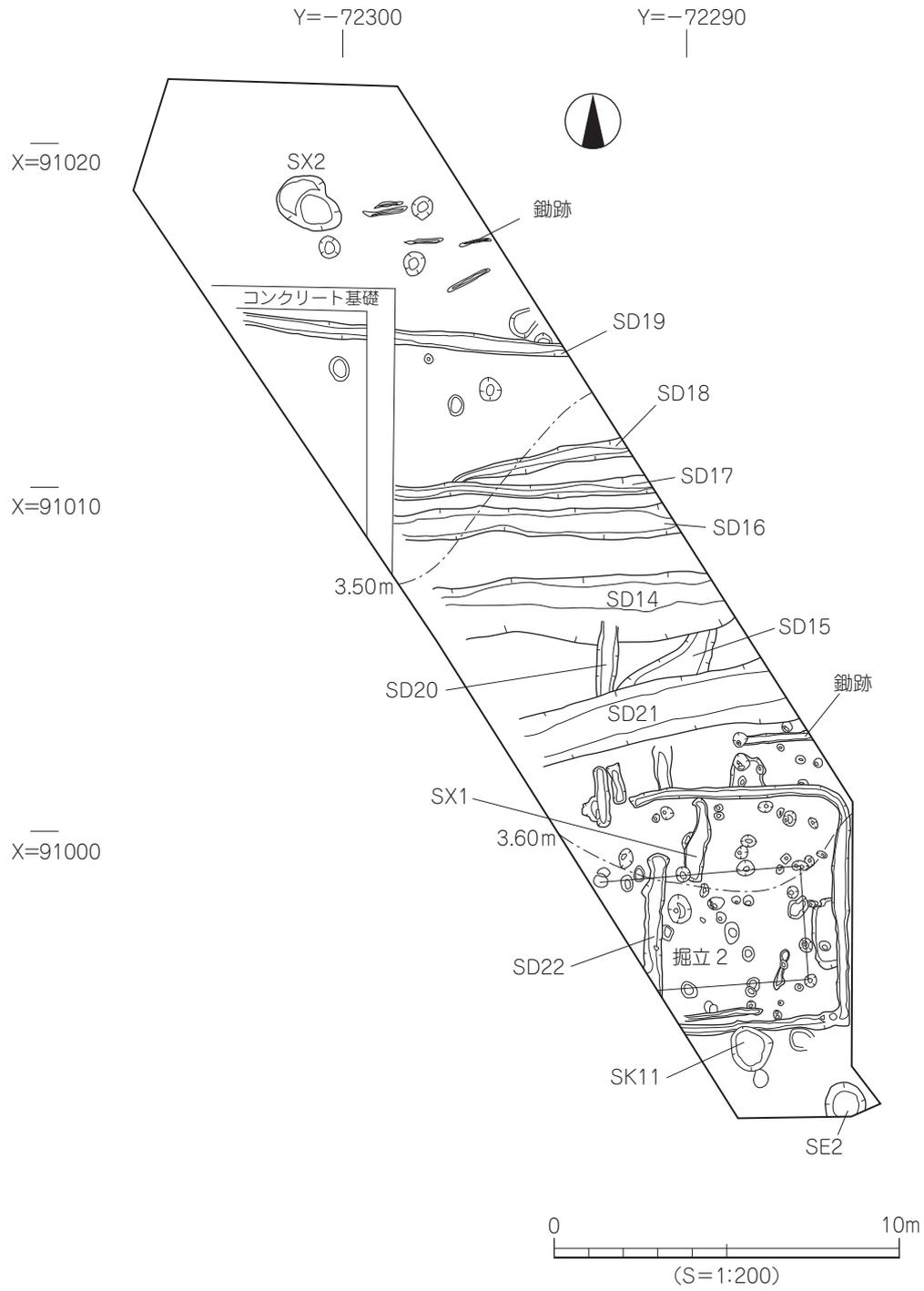


第 129 図 2 区東壁土層図



第130図 1区遺構配置図

東垣生八反地遺跡 1次調査



第 131 図 2 区遺構配置図

第3節 遺構と遺物

調査では、第Ⅱ④層及び第Ⅱ⑧層上面にて水田耕作に伴う足跡、第Ⅲ層上面では掘立柱建物2棟、溝22条、土坑12基、土壙墓1基、井戸2基、性格不明遺構2基、柱穴152基、鋤跡を検出した。遺物は、土師器、須恵器、瓦器、陶磁器、石製品、種子などが出土し、遺物収納用箱(14×44×60cm)約10箱分の出土量である。

1. 水田址

第Ⅱ④層上面に1枚と第Ⅱ⑧層上面に1枚を検出した。

水田1 (第132図・図版35)

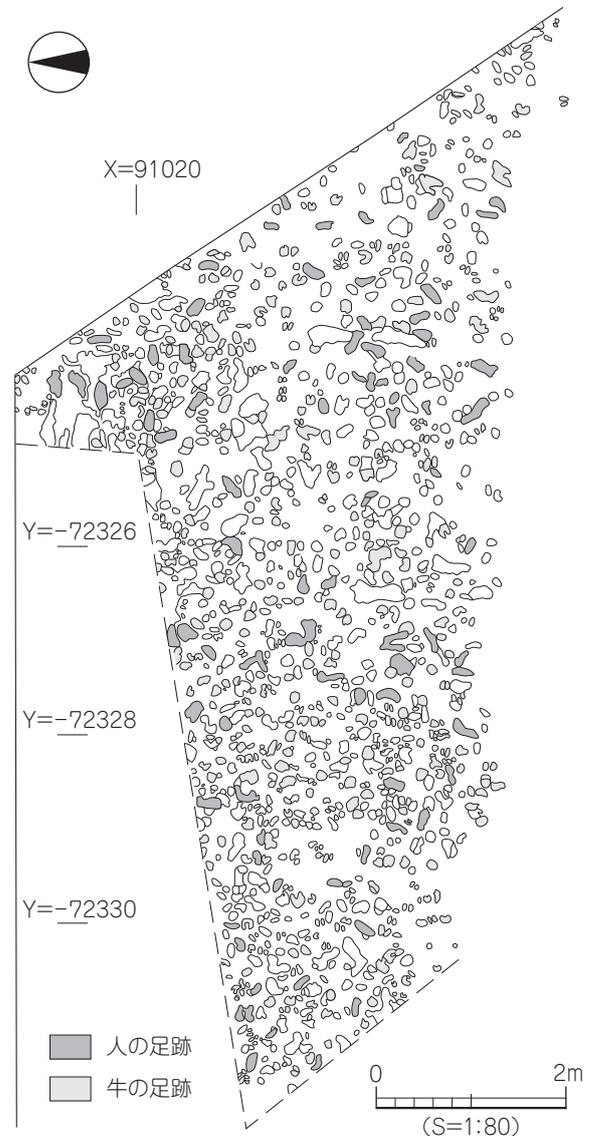
1区と2区の壁面の土層観察により、第Ⅱ④層上面にて水田耕作に伴う牛と思われる足跡や根株跡などの痕跡を確認した。この第Ⅱ④層は、1区と2区の全域において堆積しており、上層は薄い洪水砂に覆われており、その砂が足跡や根株跡に入り込んでいる。土層観察の結果、水田面は1区西壁の南端から10m地点に幅1.2m、高さ6cmの高まりをもち、すぐ北隣には幅75cm、深さ10cm、断面レンズ状の溝と想定される砂堆積層を観察したが、東壁面では水田面上部が後世の削平を受けており、不明瞭であるが、この溝から北側の水田面は南側の水田面より14cm程低位で、1区北端にかけて展開していたことが確認できた。

時期：周辺調査で同じ水田面を確認していることから、室町時代と考えられる。

水田2 (第132図・図版35)

1区と2区の北端において、第Ⅱ⑧層上面から水田耕作に伴う足跡を検出した。1区では平面精査により、その範囲や密度などを確認し、2区では壁面の土層観察により第Ⅱ⑧層の範囲を確認した。人間や牛の足跡に混じり、根株痕と考えられる痕跡などを検出した。これらの痕跡は覆われた砂層を除去することで形状を確認し、足跡の密度は人2～15個/m²(平均5.8個)、牛3～19個/m²(平均9.4個)である。1区と2区で検出した足跡面の比高差はなく、水田面の範囲は南北10m以上、東西40m以上の広がりをもつことが確認したが、畦畔や水路などの施設は未確認であった。

時期：出土遺物はないが、検出層位から鎌倉時代から室町時代の間が存在した水田と考えられる。



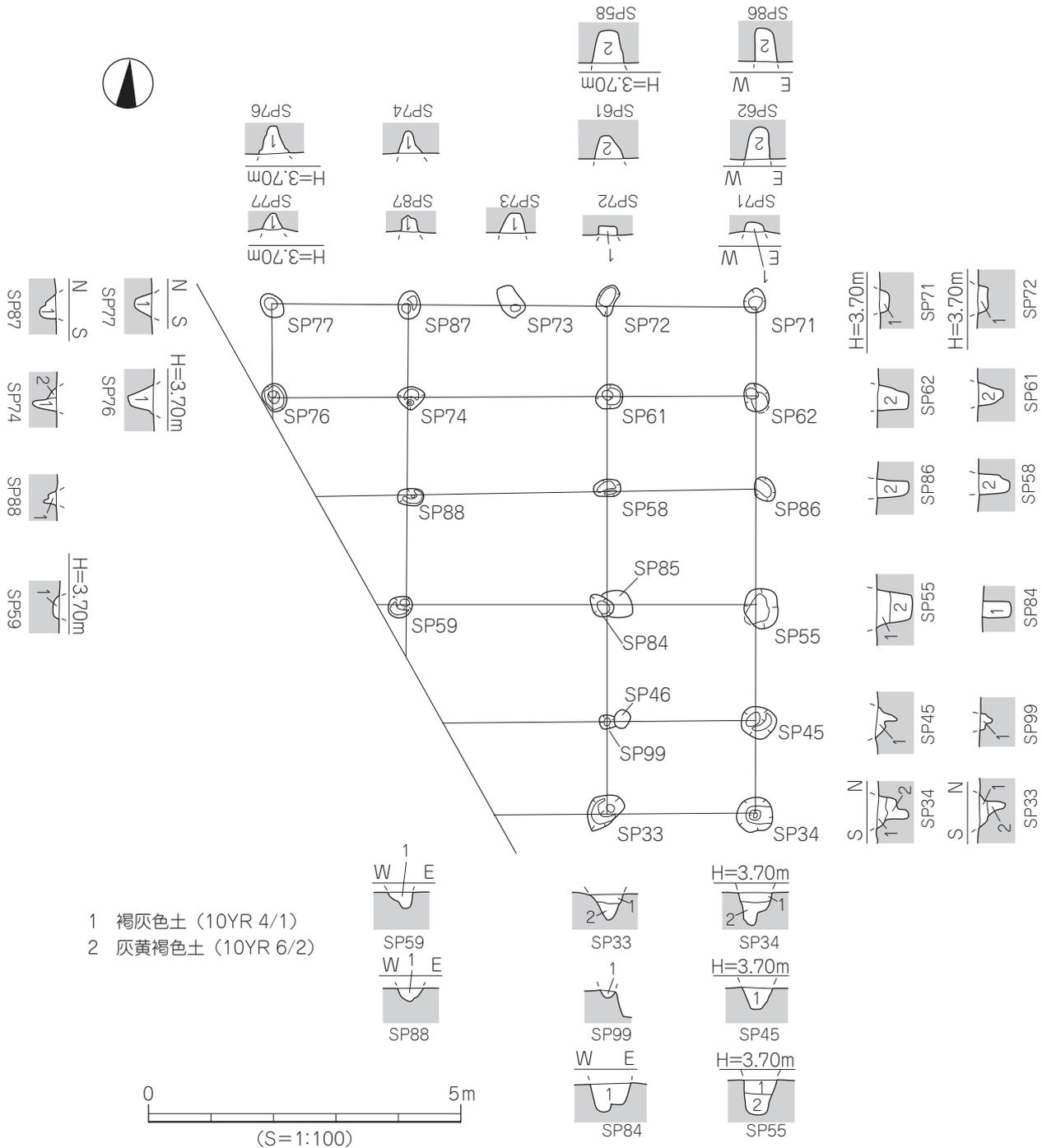
第132図 水田址測量図

2. 掘立柱建物址

第Ⅲ層上面において、2 棟を検出した。

掘立 1 (第 133 図・図版 37)

1 区中央部北寄りの D3～F5 区に位置し西南角部は調査区外に延びる。南北 5 間、東西 4 間分の総柱構造の建物であり、規模は桁行 8.30m (柱間 1.50～1.80m)、梁行 7.80m (柱間 1.40～2.40m)、床面積 64.74㎡を測る。建物を構成する柱穴の平面形態は円形または楕円形を呈し、規模は 23～



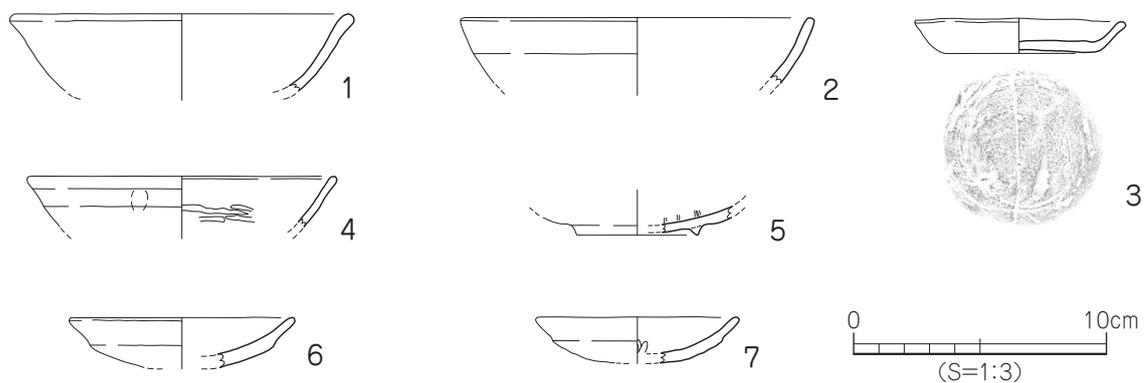
第 133 図 掘立 1 測量図

65cm、深さ9～52cmを測り、掘り方埋土は褐灰色土(10YR 4/1)を基調とし、下層に灰色土(N 5/0)を伴うものがある。遺物は、土師器、須恵器、瓦器、磁器片が出土した。

出土遺物(第134図・図版38)

1・2は土師器の坏で、やや内傾する胴部をもち、内外面にナデ調整が施される。3は土師器の皿で底部内面の縁部がやや凹み、外面に回転糸切り痕がある。4・5は瓦器碗で、4は内傾する口縁部付近内面に圏線状の暗文が施され、5は底部内面に並行する直線の暗文が施され、断面三角形状の貼り付け高台をもつ。6は瓦器皿で、胴部中位に稜をもつ。7は瓦器碗の口縁部付近で、胴部中位に稜をもつ。

時期：出土した瓦器の特徴から、13世紀代前半と考えられる。



第134図 掘立1出土遺物実測図

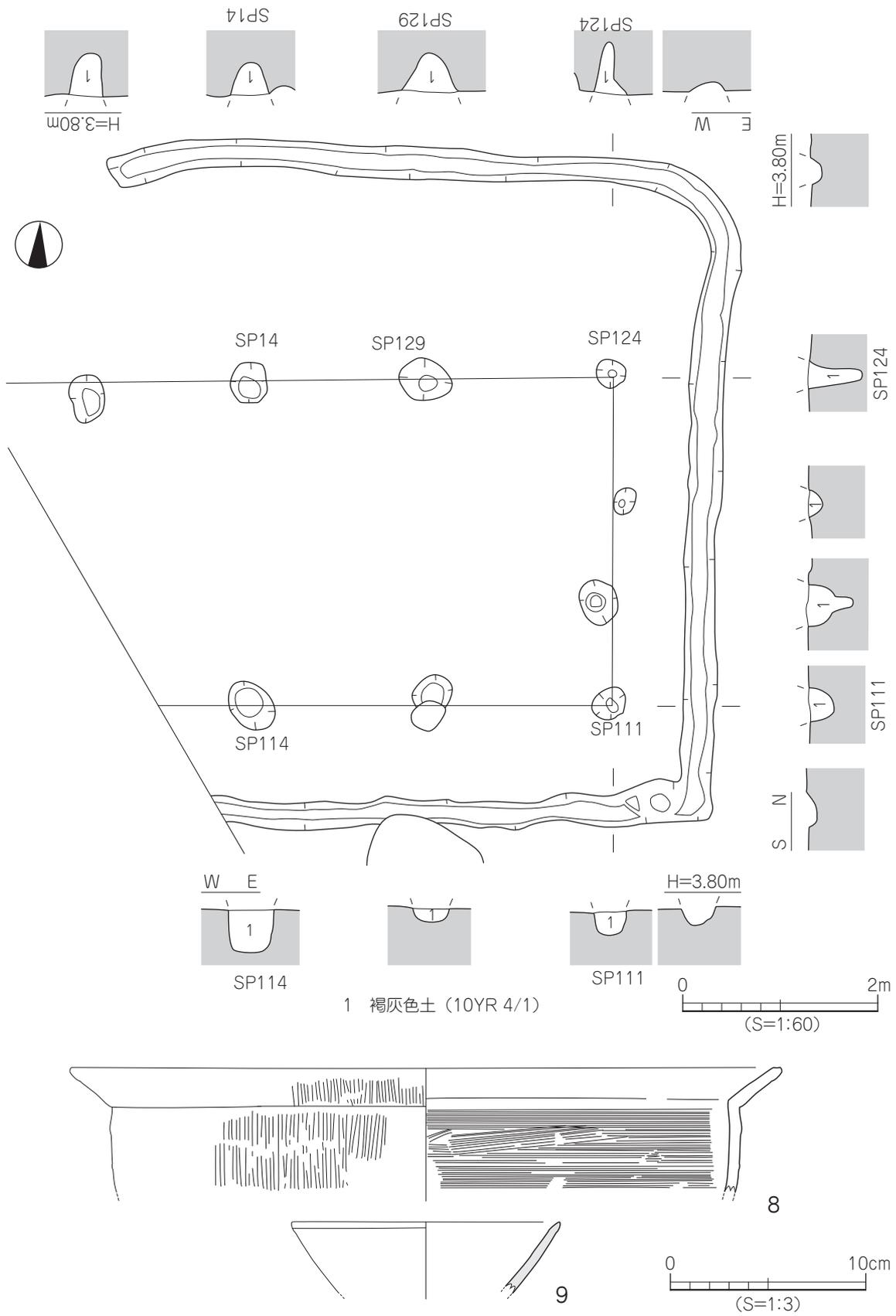
掘立2(第135図)

2区北端G12～H14区に位置する。東西4間以上、南北3間の東西棟であり、規模は桁行6.45m以上(柱間1.15～1.82m)、梁行3.35m以上(柱間1.09～1.15m)、床面積21.6㎡を測る。建物を構成する柱穴の平面形態は円形または楕円形を呈し、規模は20～53cm、深さ16～48cmを測り、掘り方埋土は黒色土(5Y 2/1)と褐灰色土(7.5Y 4/1)である。西南端は調査区外に延びる。周囲を「コ」字状に囲む小溝を伴っており、溝の断面形状はレンズ状を呈し、規模は検出長12.47m、最大幅0.36m、深さ13cmを測り、溝床の比高差は殆どない。埋土は、褐灰色土(10YR 4/1)の単一層である。遺物は土師器、瓦器、磁器片が僅かに出土した。

出土遺物(第135図)

8は土師器鍋である。「く」字状の口縁部に、端部は面をなし、やや凹む。内面に横方向のハケ目調整、外面に縦方向のハケ目調整が施される。9は磁器碗である。外反する口縁部付近には、内外面が施釉される。

時期：出土した土師器の特徴から、13世紀代と考えられる。



第 135 図 掘立 2 測量図・出土遺物実測図

3. 溝

第Ⅲ層上面において、溝 22 条を検出した。

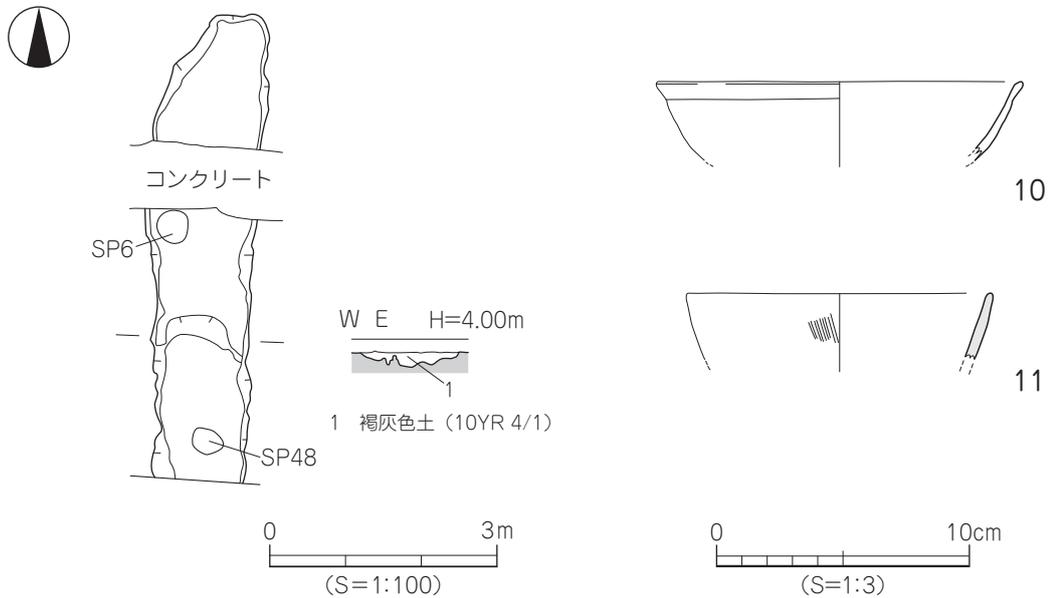
SD 1 (第 136 図)

1 区南端 J9 ~ K9 区に位置し、南北方向を指向し、南端は調査区外に延びる。断面形状は皿状を呈しており、中央部がやや隆起した状態で延びている。規模は検出長 6.11 m、最大幅 1.48 m、深さ 13 ~ 23cm を測り、溝床の比高差は北から南へ 8cm の比高差をもつ。埋土は、褐灰色土 (10YR 4/1) の単一層である。遺物は主に下層から、土師器や須恵器、瓦器片が出土した。

出土遺物 (第 136 図)

10 は瓦器碗で、内湾する胴部に口縁部はやや外反する。11 は磁器碗で、口縁部外面に櫛描文が施される。

時期：出土した瓦器の特徴から、13 世紀頃と考えられる。



第 136 図 SD1 測量図・出土遺物実測図

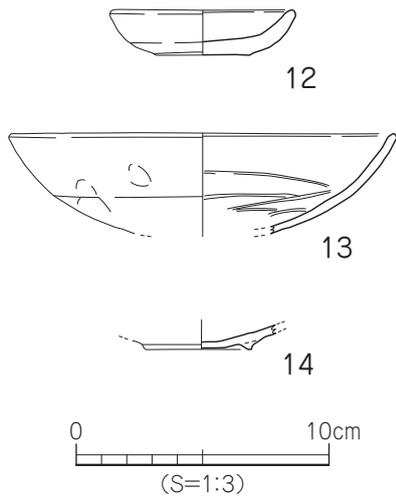
SD 2 (第 138 図)

1 区南側 F7 ~ J7 区に位置し、南北方向を指向し、南北端は調査区外に延びる。東隣に接する SD3 とは、並行な位置関係となる。断面形状はレンズ状を呈しており、規模は検出長 13.6 m、最大幅 0.8 m、深さ 5 ~ 17cm を測り、溝床の比高差は殆どない。埋土は上層がオリーブ灰色粘質土 (2.5GY 6/1)、下層は灰色粘質土 (N 5/0) である。遺物は土師器、須恵器、瓦器片が出土した。

出土遺物 (第 137 図)

12 は土師器の皿で、下胴部に内湾する稜をもち、底部外面に回転糸切り痕がある。13・14 は瓦器碗で、13 は内湾する胴部内面に螺旋状の暗文が施される。14 は底部に断面三角形の貼り付け高台をもち、内面に螺旋状の暗文が施される。

時期：出土した瓦器の特徴から、13 世紀前半と考えられる。



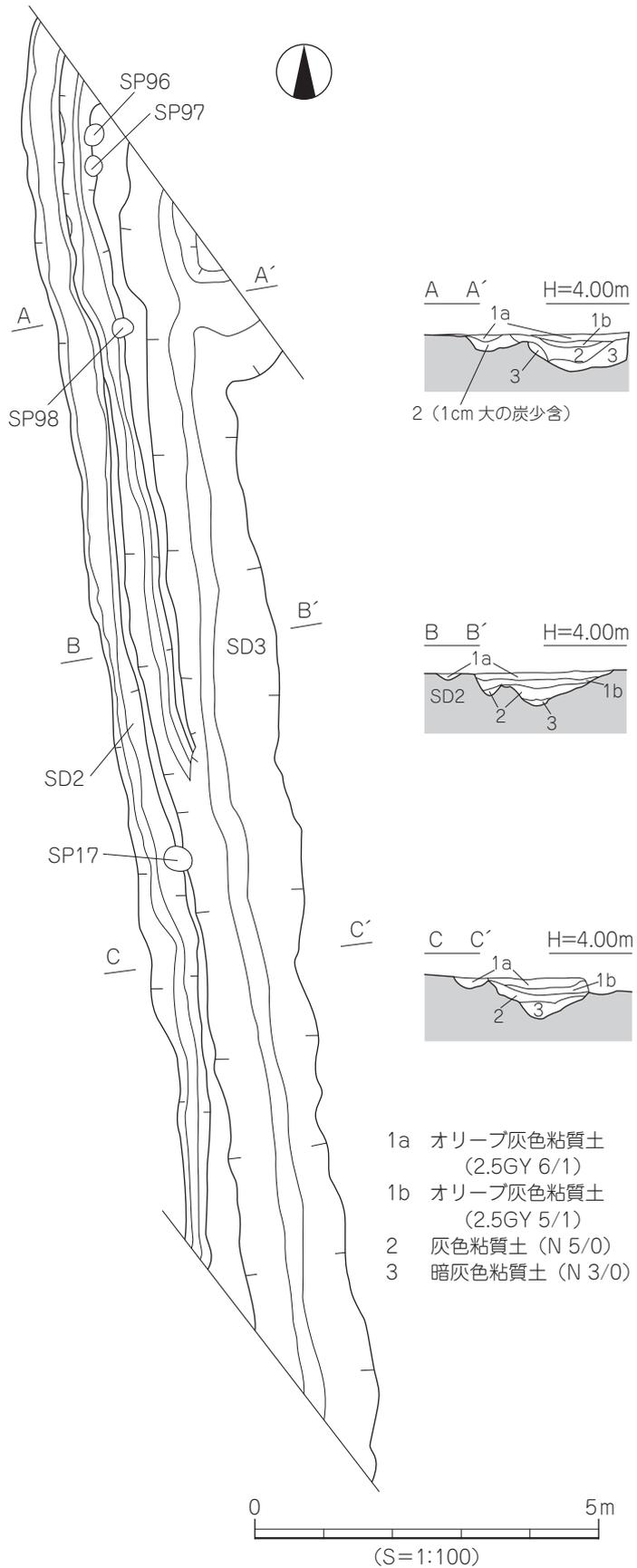
第 137 図 SD2 出土遺物実測図

SD 3 (第 138 図・図版 36)

1 区南側 F7 ~ K8 区に位置し、南北方向を指向し、SD10 を切り、南北端は調査区外に延びる。断面形状は V 字状を呈しており、規模は検出長 135 m、最大幅 1.7 m、深さ 58cm を測り、溝床の比高差は殆どない。埋土は上層がオリーブ灰色粘質土 (2.5GY 5/1・6/1)、中層が灰色粘質土 (N 5/0)、下層は暗灰色粘質土 (N 3/0) に分層される。遺物は主に下層から土師器、須恵器、瓦器、磁器片や石製品などが出土した。とりわけ、溝の南側では完形の土師器杯 9 点や土師器皿 1 点などがまとまって出土した。

出土遺物 (第 139・140 図・図版 38・39)

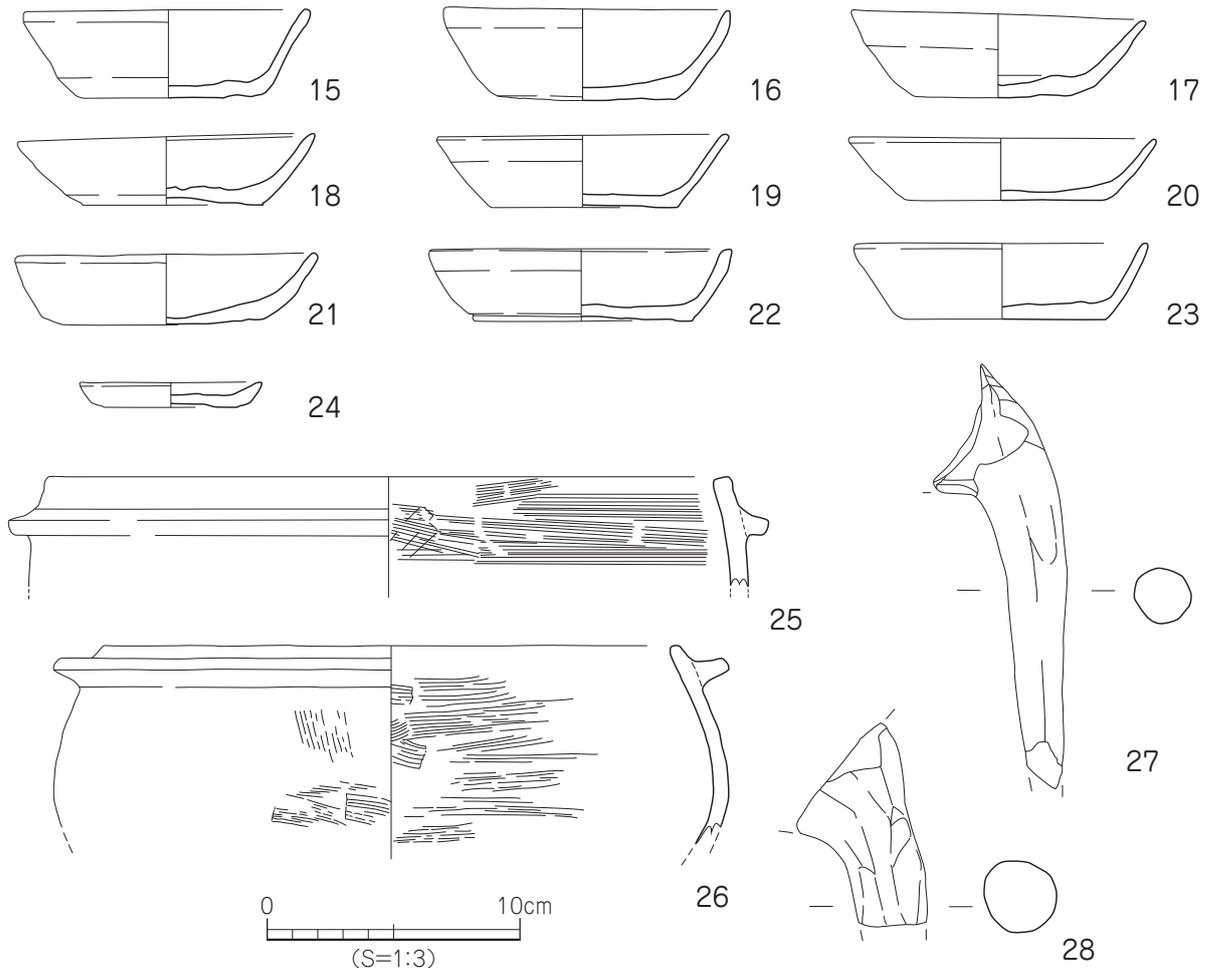
15 ~ 23 は土師器の杯で、15 は平底の底部より外傾して立ち上がり、口縁部付近が内傾し、底部の回転糸切り後の板圧痕がある。16 は平底の底部より外反して立ち上がり、口縁部付近が内傾して稜をもち、底部には回転糸切り痕がある。17 は平底の底部より内傾気味に立ち上がり胴部中位に稜をもち、底部に回転糸切り後の板圧痕がある。18 は平底の底



第 138 図 SD2・3 測量図

- 1a オリーブ灰色粘質土 (2.5GY 6/1)
- 1b オリーブ灰色粘質土 (2.5GY 5/1)
- 2 灰色粘質土 (N 5/0)
- 3 暗灰色粘質土 (N 3/0)

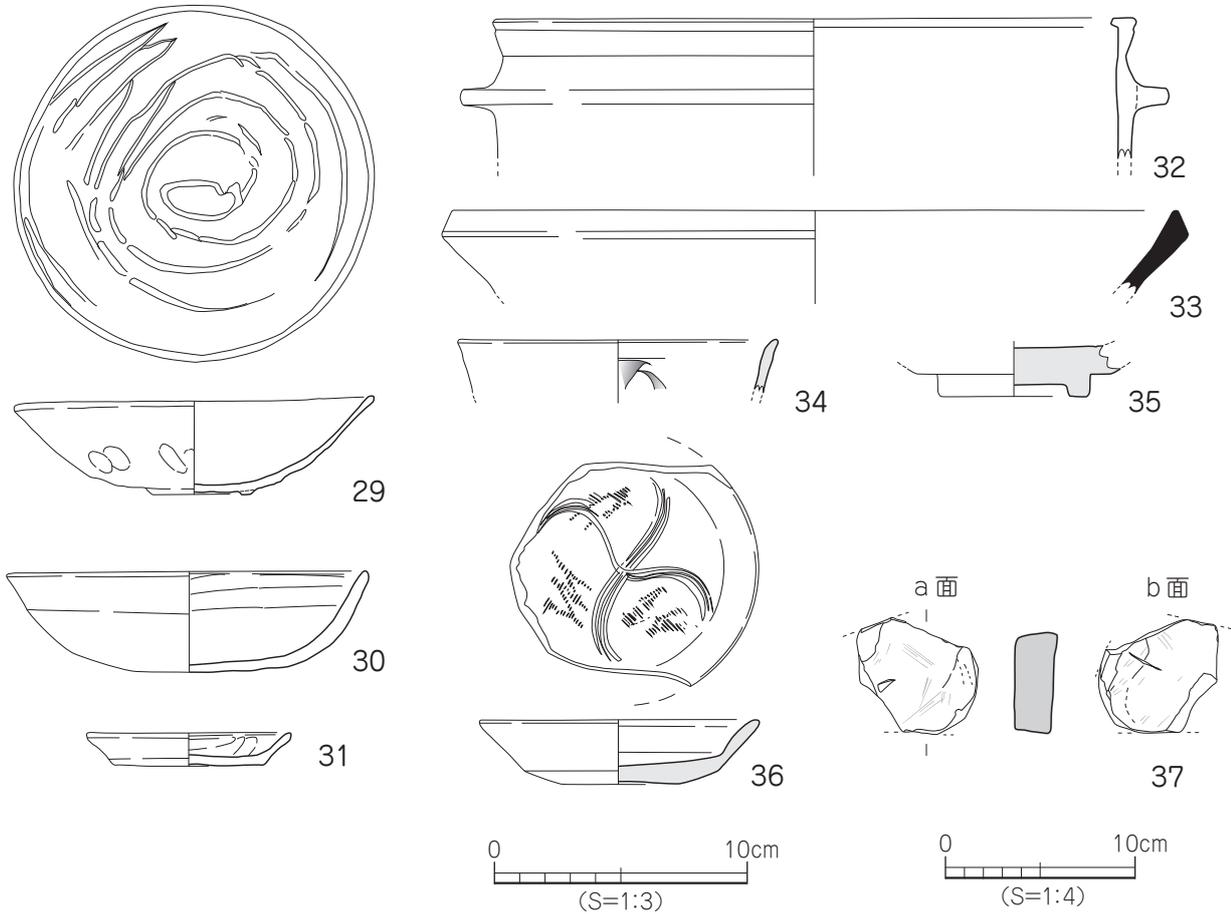
部より外傾して立ち上がり、口縁部付近が内湾して稜を持ち、内外面が煤け底部に回転糸切り痕がある。19は平底の底部より外反して立ち上がり、底部に回転糸切り後の板圧痕がある。20は平底の底部より直線的に立ち上がり、内外面は煤け、底部に回転糸切り後の板圧痕がある。21は平底の底部より内傾気味に立ち上がり、底部は回転糸切り後の板圧痕がある。22は平底の底部より内傾気味に立ち上がり胴部中位に凹みをもち、底部に回転糸切り後の板圧痕がある。23は平底の底部より直線的に立ち上がり底部に回転糸切り痕がある。24は土師器の皿で、平底の底部より外傾して立ち上がり、器高が低い。底部は回転糸切り後の板圧痕がある。25・26は土釜で、25は内湾気味の口縁部外面にやや下方に延びる。鏝をもち、口縁端部は平らな面をなし、内面はハケ目調整、外面にナデ調整が施される。26は内湾する胴部に、口縁部に外方に延びる鏝をもち、内外面にハケ目調整が施される。27・28は土釜の脚部で脚部は下方に延びる。27は脚部断面形状が円形、28は楕円形状を呈する。29は瓦器の椀で、僅かに残存する高台をもち、内面には螺旋状の暗文が施される。30は瓦器の坏で、やや丸みをもつ底部から内湾して立ち上がり、胴部中位に稜をもつ。内外面はナデ調整が施されており、上胴部内面の一部に圏線状の暗文が施されている。31は瓦器の皿で、底部付近の外面に稜をもち直線的に立ち上がり、内外面にナデ調整が施される。32は瓦器の羽釜の口縁部で、縁部外面に外方向に延びる鏝をもち、口縁端部は平らな面をなし、内方へ肥厚される。33は須恵器のこね鉢で、口縁端部は断面三角形形状を呈する。34は龍泉窯系青磁碗で、外反した口縁部内面には鎬蓮弁文が施



第 139 図 SD3 出土遺物実測図 (1)

される。35は白磁碗の底部で、断面四角形状の削り出し高台をもつ。36は同安窯系青磁皿で、底部外面は露胎し回転糸切り痕があり、見込み部に花文とジグザグ状の点描文が施される。37は石英粗面岩製の砥石で、砥面はa面とb面をもち、b面に比べa面の磨滅は著しい。

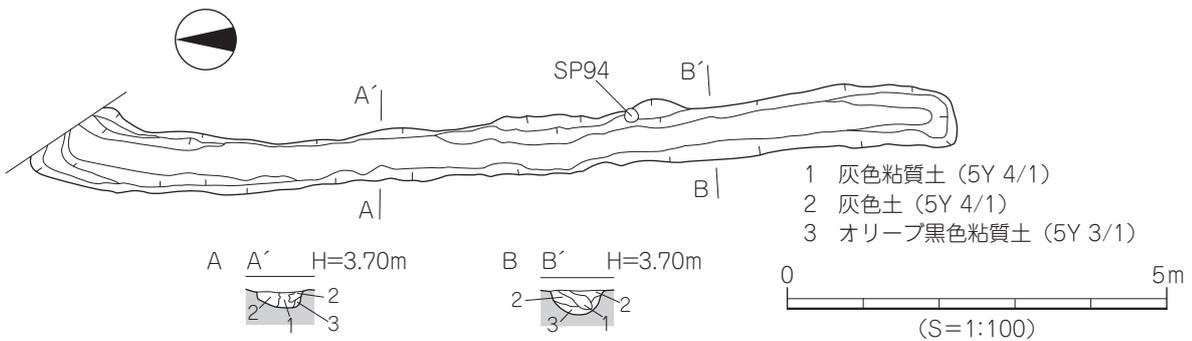
時期：出土した瓦器の特徴から、13世紀前半と考えられる。



第 140 図 SD3 出土遺物実測図 (2)

SD 4 (第 141 図)

1区中央部 E6～H6区に位置し、南北方向を指向し、SD10・11を切り、北端は調査区外に延びる。断面形状は逆台形状を呈しており、規模は検出長 8.52 m、最大幅 0.82 m、深さ 12cm を測り、溝床の比高差は殆どない。埋土は、灰色土～灰色粘質土 (5Y 4/1) にオリーブ黒色粘質土 (5Y 3/1) が



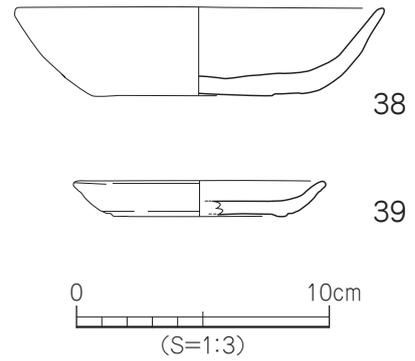
第 141 図 SD4 測量図

混じる。遺物は土師器、須恵器、瓦器片や砥石が出土した。

出土遺物 (第 142 図・図版 39)

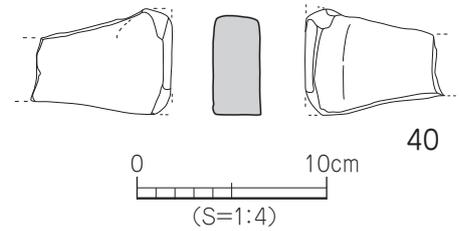
38 は土師器坏で、平底の底部より内傾して立ち上がり、外面に煤けが残る。39 は土師器皿で、平底の底部より内傾して立ち上がり、底部には回転糸切り後の板圧痕がある。40 は石英粗面岩製の砥石で、4 面は使用に伴う磨滅が大きく、先端面の僅かな段部には刃部による条線が数条ある。

時期: 出土した土師器の特徴から、13 世紀頃と考えられる。

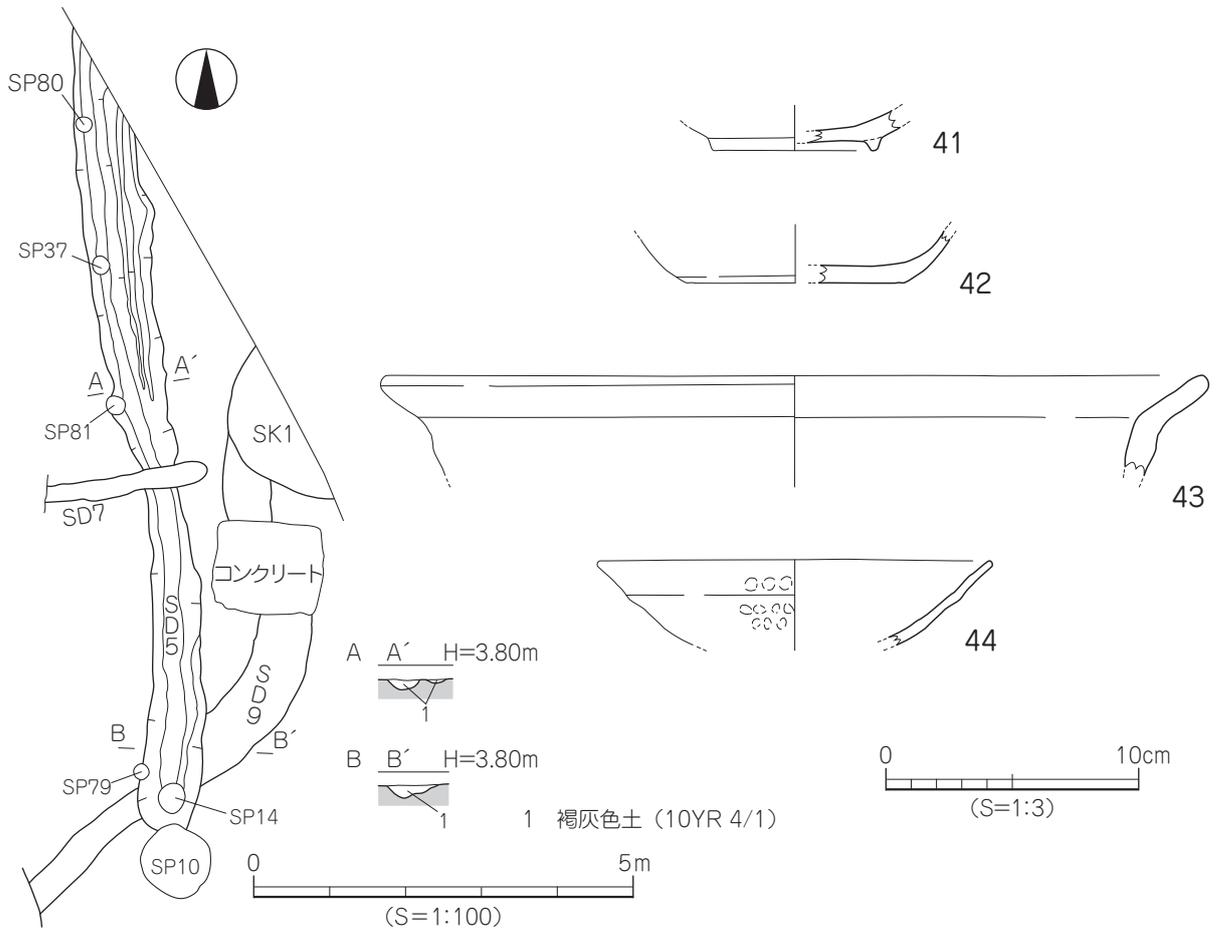


SD 5 (第 143 図)

1 区南端 J8 ~ G8 区に位置し、南北方向を湾曲しながら指向し、南北端は調査区外に延び、北側は 2 条に分岐する。断面形状はレンズ状~逆台形状を呈し、規模は検出長 15.12 m、最大幅 0.78 m、深さ 23cm を測り、溝床の比高差は殆どない。埋土は、褐灰色土(10YR 4/1)の単一層である。遺物は土師器、須恵器、瓦器片が僅かに出土した。



第 142 図 SD4 出土遺物実測図



第 143 図 SD5 測量図・出土遺物実測図

出土遺物 (第 143 図)

41 は土師器椀で、断面逆台形状の貼り付け高台をもつ。42 は土師器坏で、底部に回転糸切り痕がある。43 は土鍋で、「く」字状の口縁部に、端部は丸く納まり、外面は煤ける。44 は瓦器椀で、内湾する胴部をもつ。

時期：出土した瓦器の特徴から、13 世紀頃と考えられる。

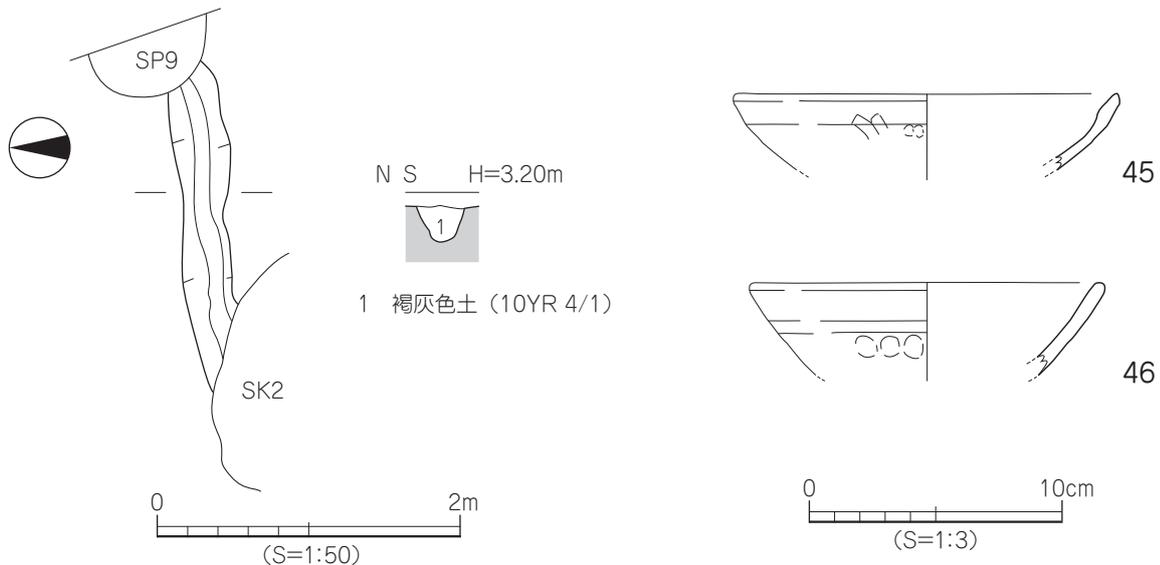
SD 6 (第 144 図)

1 区南端 J9 区に位置し、東西方向を指向し、SK2 と柱穴に切られる。断面形状は舟底状を呈しており、規模は検出長 1.68 m、最大幅 0.34 m、深さ 24cm を測り、溝床の比高差は殆どない。埋土は、褐灰色土 (10YR 4/1) の単一層である。遺物は土師器が出土した。

出土遺物 (第 144 図)

45・46 は土師器坏で、45 は内傾した口縁部内側がやや肥厚される。46 は直線的に外傾し、内外面は煤ける。

時期：出土した土師器の特徴から、13 世紀頃と考えられる。

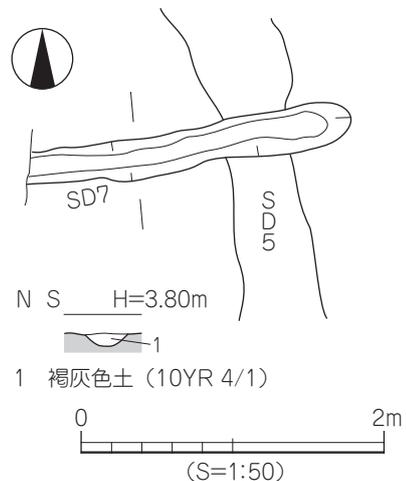


第 144 図 SD6 測量図・出土遺物実測図

SD 7 (第 145 図)

1 区南側 I7～8 区に位置し、緩やかに湾曲しながら東西方向を指向し、SD5 を切り、SD3 に切られ、西端は柱穴に切られる。断面形状はレンズ状を呈し、規模は検出長 6.5 m、最大幅 0.4 m、深さ 27cm を測り、溝床の比高差は西から東へ 11cm の比高差をもつ。埋土は、褐灰色土 (10YR 4/1) の単一層である。遺物の出土はない。

時期：出土遺物はないが、埋土が SD1 と酷似することから、13 世紀頃と考えられる。



第 145 図 SD7 測量図

SD 8 (第 146 図)

1 区北端 B2 ~ C5 区に位置し、東西方向を指向する。SK9 を切り、東西端は調査区外に延びる。断面形状は逆台形状を呈し、規模は検出長 11.38 m、最大幅 0.98 m、深さ 25cm を測り、溝床は東から西へ 4cm の比高差をもつ。埋土は、灰色粘質土 (N 4/0) の単一層である。遺物は土師器、須恵器、瓦器、陶器片が少量出土した。

出土遺物 (第 146 図)

47 は瓦器椀の底部で、底部に逆三角形の貼り付け高台をもつ。

時期: 時期決定しうる遺物が乏しいが、埋土が SK7 と酷似することから 13 世紀頃と考えられる。

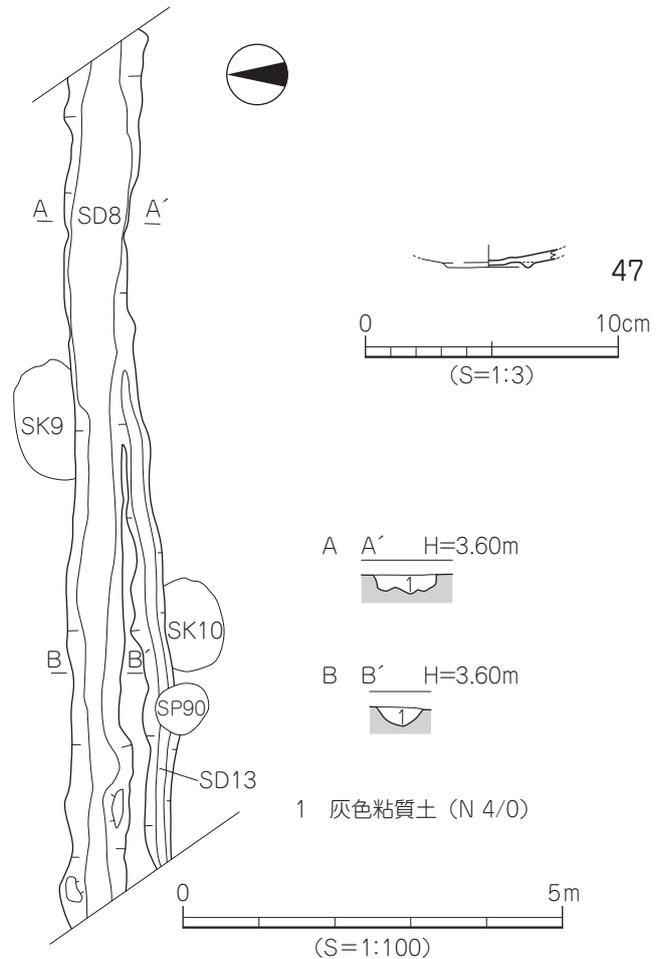
SD 9 (第 147 図)

1 区南端 I8 ~ J9 区に位置し、蛇行しながら南北方向を指向し、SD3・5、SK1 に切られる。断面形状はレンズ状を呈し、規模は検出長 7.18 m、最大幅 0.78 m、深さ 16cm を測り、溝床は北から南へ約 3cm の比高差をもつ。埋土は、褐灰色土 (10YR 4/1) の単一層である。遺物は土師器、須恵器、瓦器、磁器片が僅かに出土した。

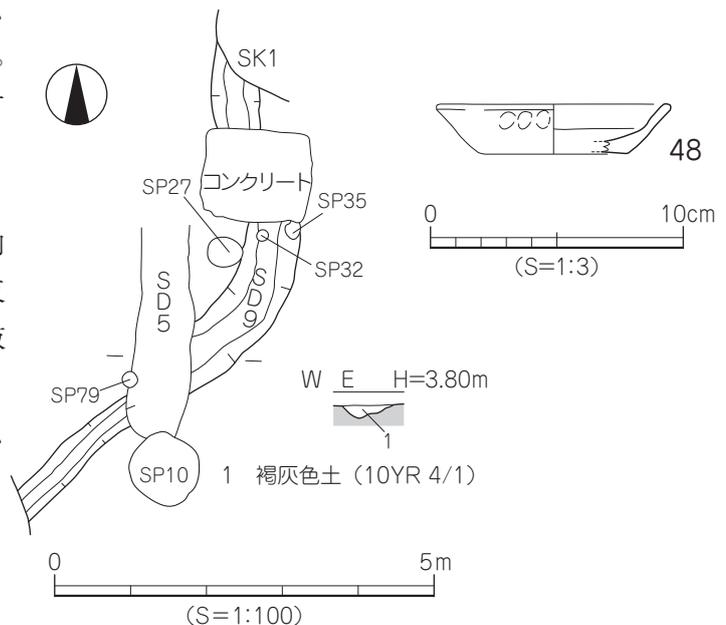
出土遺物 (第 147 図)

48 は土師器皿で、平底の底部より内傾して立ち上がり、口縁部がやや外反する。内外面は煤けており、底部に板圧痕がある。

時期: 出土した土師器の特徴から、13 世紀前半と考えられる。



第 146 図 SD8 測量図・出土遺物実測図



第 147 図 SD 9 測量図・出土遺物実測図

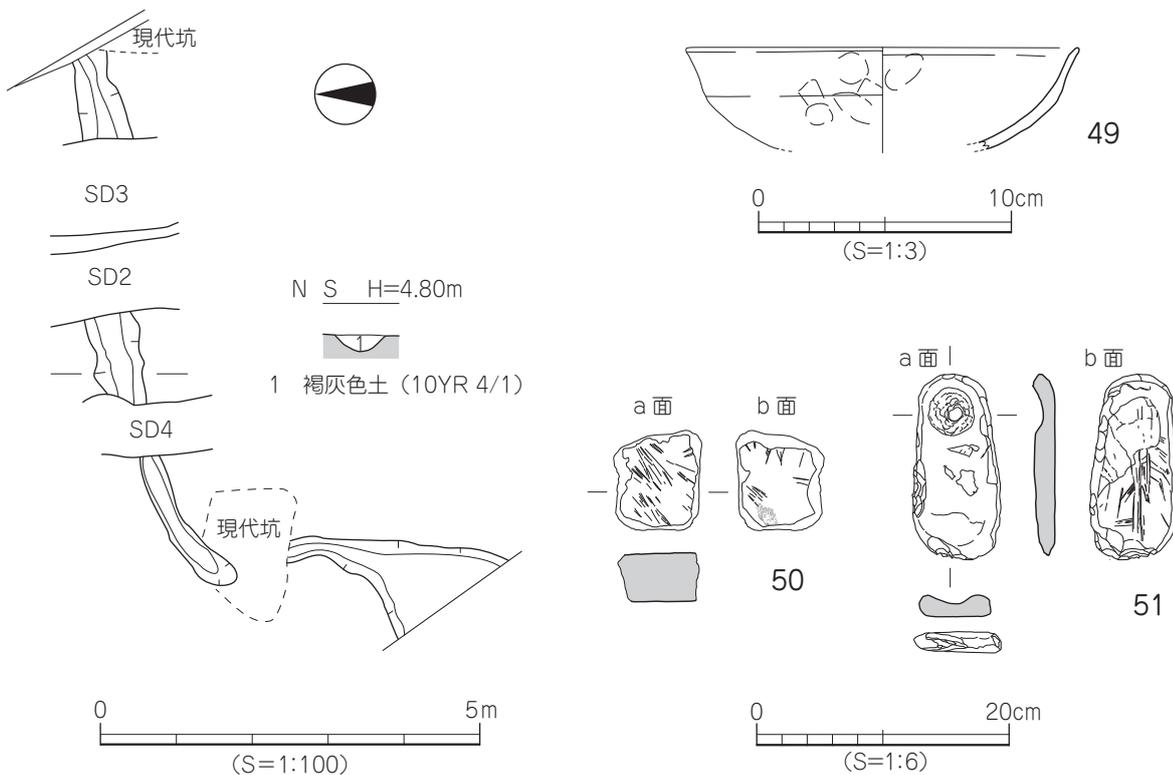
SD 10 (第 148 図)

1 区中央部 G6～8 区に位置し、東西方向を指向し、東端は調査区外に延びる。断面形状は逆台形状を呈し、規模は検出長 10.58 m、最大幅 0.7 m、深さ 18cm を測り、溝床の比高差は殆どない。埋土は、褐灰色土 (10YR 4/1) の単一層である。遺物は土師器、須恵器、瓦器片が僅かに出土したほか、砥石が出土した。

出土遺物 (第 148 図・図版 39)

49 は土師器碗で内湾する胴部中位に稜をもち、口縁端部が外反し、内面が煤ける。50 は石英粗面岩製の砥石で、a 面と b 面の 2 面に使用に伴う磨滅があり、a 面には斜め方向の線条痕がある。51 は用途不明の石製品である。緑泥片岩の隅丸長方形を呈した板状石材の周縁部に丸味をもち片手で握り易い形状である。a 面の先端部には円形の断面逆台形状の凹みをもつ。この凹みの形状を観察すると回転により磨滅したものと推測する。長さ 14.8cm、幅 6.9cm、厚み 1.65cm、凹みの直径 3.7cm、凹みの深さ 0.7cm、重さ 344.2g を測る。

時期：出土した土師器の特徴から、13 世紀頃と考えられる。



第 148 図 SD10 測量図・出土遺物実測図

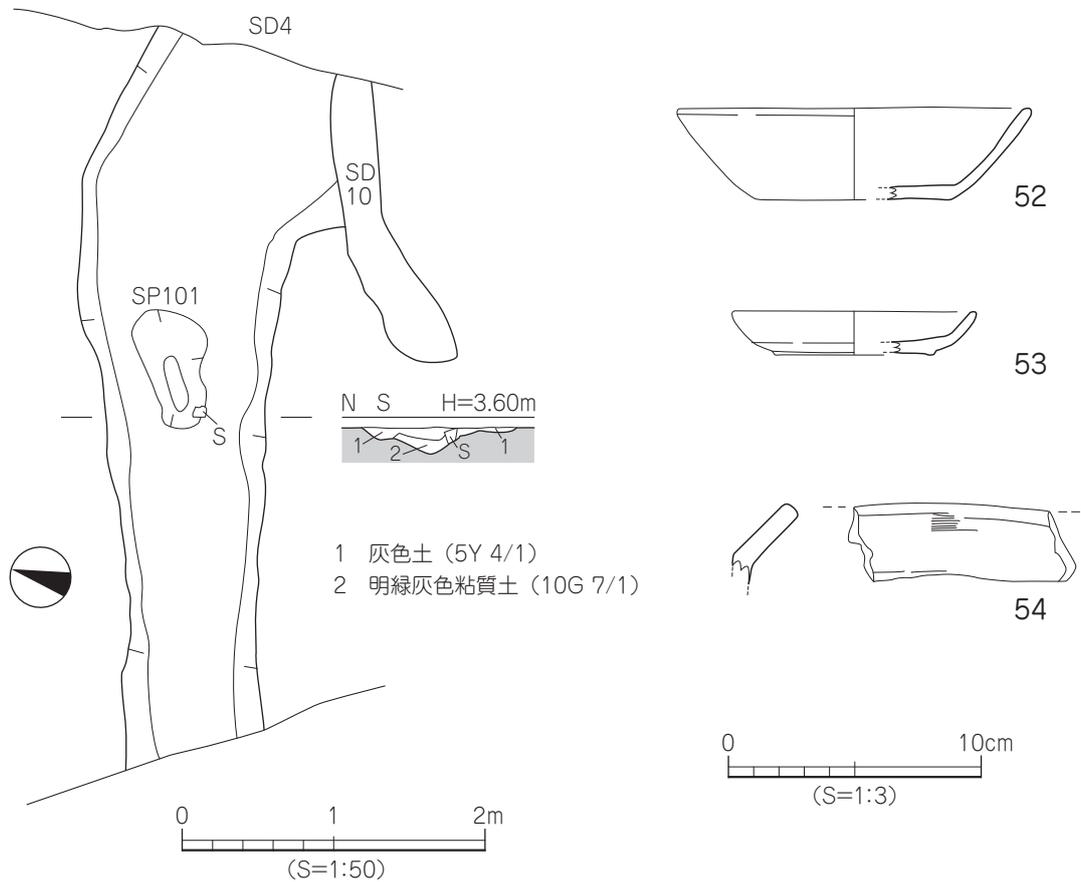
SD 11 (第 149 図)

1 区中央部西寄り G5～6 区に位置し、東西方向を指向する。SD4・10 に切られ、西端は調査区外に延びる。断面形状は皿状を呈し、規模は検出長 4.75 m、最大幅 1.54 m、深さ 13cm を測り、溝床の比高差は殆どない。埋土は上層が灰色土 (5Y 4/1)、下層は明緑灰色粘質土 (10G 7/1) である。遺物は土師器、須恵器、瓦器片が少量出土した。

出土遺物 (第 149 図)

52 は土師器坏で、平底の底部より内傾して立ち上がり、底部に板圧痕がある。53 は土師器皿で、底部付近に稜をもち、板圧痕がある。54 は土鍋で、「く」字状の口縁部に、端部は平らな面をなす。

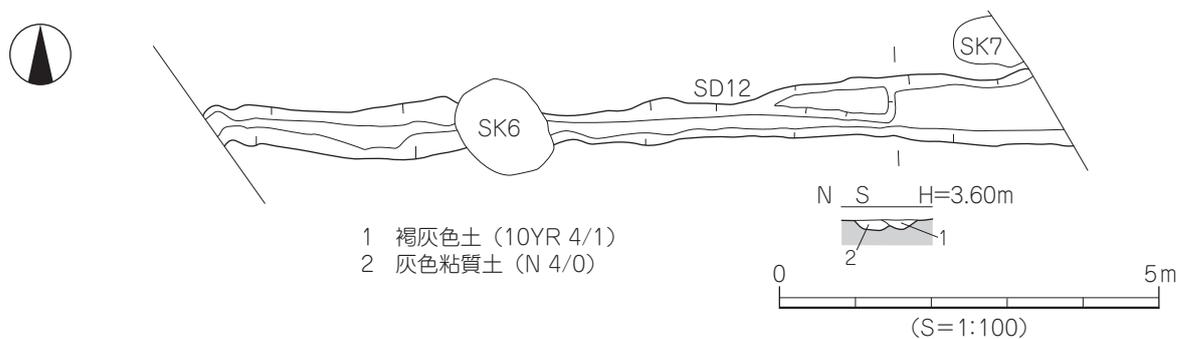
時期：出土した土師器の特徴から、13 世紀頃と考えられる。



第 149 図 SD11 測量図・出土遺物実測図

SD 12 (第 150 図・図版 39)

1 区北端 C2～5 区に位置し、東西方向を指向する。SK6 に切られ、東西端は調査区外に延びる。断面形状は逆台形状を呈し、規模は検出長 17.41 m、最大幅 0.88 m、深さ 22cm を測り、溝床は東から西へ 9cm の比高差をもつ。埋土は上層が褐灰色土 (10YR 4/1) で、下層は灰色粘質土 (N 4/0) である。遺物は土師器、瓦器片が少量出土した。

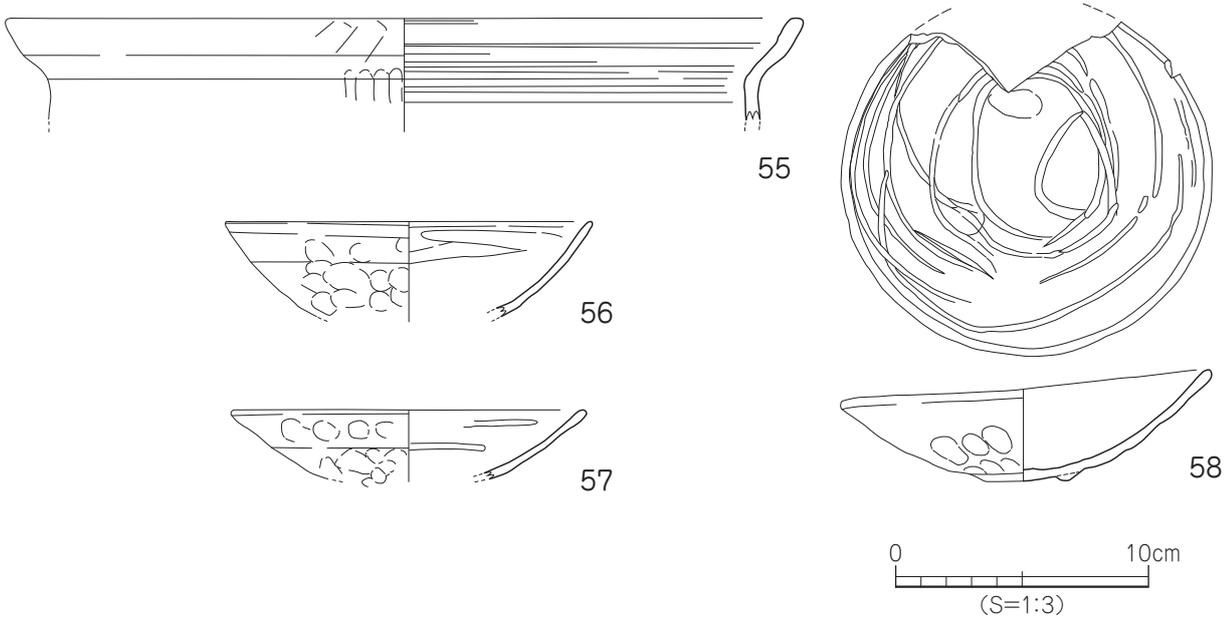


第 150 図 SD12 測量図

出土遺物 (第 151 図)

55 は土鍋で、「く」字状の口縁部は屈曲し、稜をもち内面にハケ目調整が施される。内外面が煤ける。
56～58 は瓦器椀で、56・57 は内傾する胴部内面に、圏線状の暗文が施される。58 は内面に圏線状の暗文が施され、底部に低い逆台形状の貼り付け高台をもつ。

時期：出土した瓦器の特徴から、13 世紀前半と考えられる。

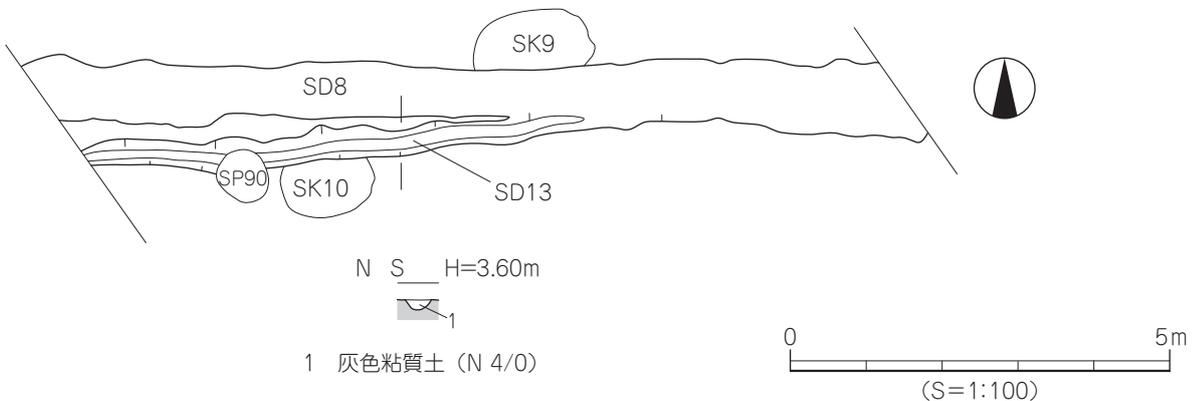


第 151 図 SD12 出土遺物実測図

SD 13 (第 152 図)

1 区北端 C2～4 区に位置し、東西方向を指向する。SK10 を切り、東端は SD8 に繋がり、西端は調査区外に延びる。断面形状は逆台形状を呈し、規模は検出長 6.58 m、最大幅 0.46 m、深さ 13cm を測り、溝床の比高差は殆どない。埋土は、灰色粘質土 (N 4/0) の単一層である。遺物は、土師器片が僅かに出土した。

時期：時期決定しうる遺物は乏しいが、埋土が SD1 と酷似することから 13 世紀頃と考えられる。



第 152 図 SD13 測量図

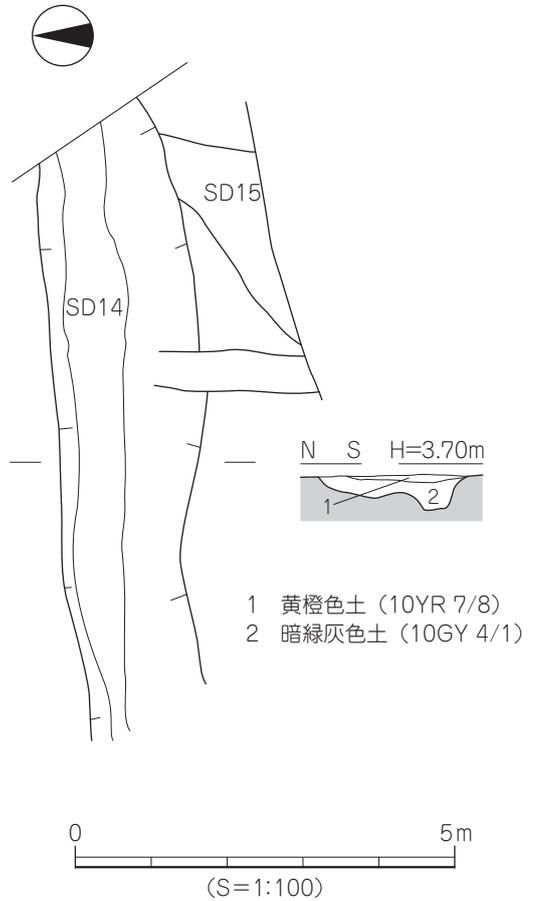
SD 14 (第 153 図)

2区中央部E11～13区に位置し、東西方向を指向する。SD15を切り、東西端は調査区外に延びる。断面形状は逆台形状を呈し、規模は検出長8.6m、最大幅2.05m、深さ45cmを測り、溝床の比高差は殆どない。埋土は上層が黄橙色土(10YR 7/8)、中～下層は暗緑灰色土(10GY 4/1)である。遺物は上層から下層にかけて土師器、須恵器、瓦器片が多く出土した。

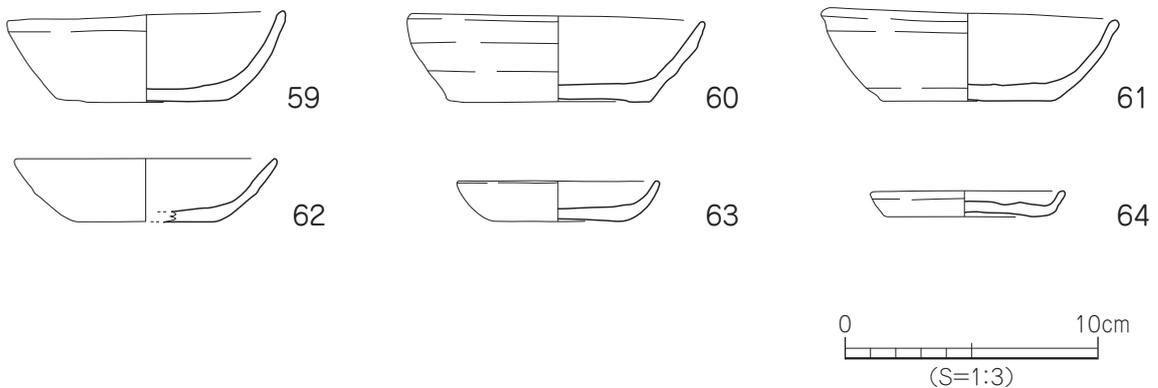
出土遺物 (第 154 図・図版 40)

59～62は土師器の坏である。59は平底の底部からやや内傾気味に立ち上がり、底部に回転糸切り痕と板圧痕がある。60は内傾する胴部外面の2ヶ所に稜をもち、内面の1/3が煤け、底部には回転糸切り痕がある。61は内傾する胴部に口縁端部が僅かに玉縁状となり、底部に回転糸切り痕と板圧痕がある。62は平底の底部からやや内傾して立ち上がり、底部に板圧痕がある。63・64は土師器の皿である。63は平底の底部からやや内傾して立ち上がり、底部には回転糸切り痕があり、内外面が煤ける。64は平底の底部からの立ち上がりは低く、全体に歪み、底部に回転糸切り痕がある。

時期：出土した土師器の特徴から、13世紀頃と考えられる。



第 153 図 SD14 測量図



第 154 図 SD14 出土遺物実測図

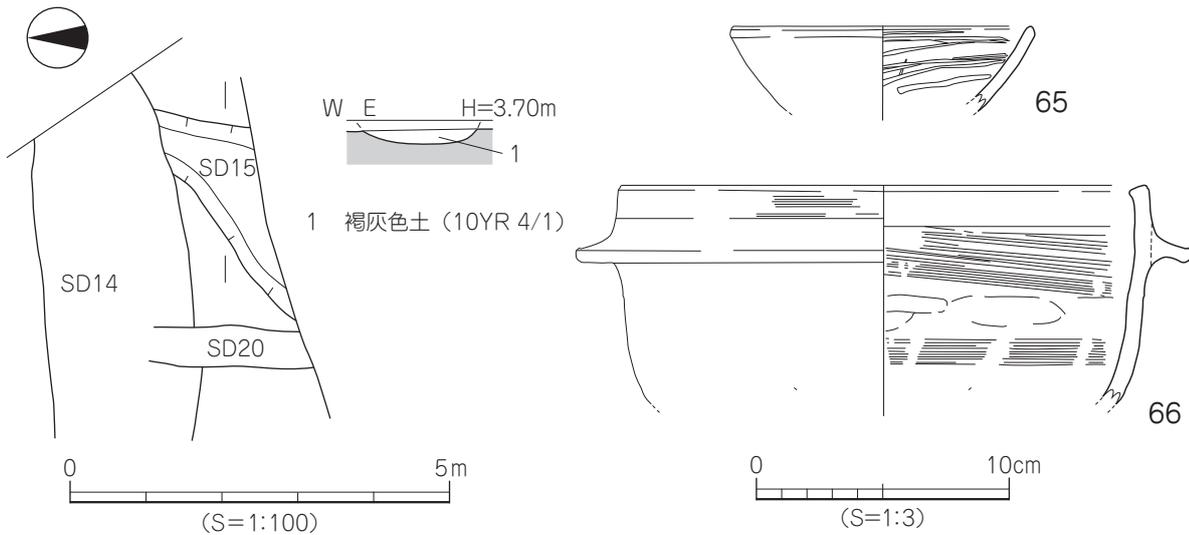
SD 15 (第 155 図)

2 区南側 E12 ~ F13 区に位置し、南北方向を指向し、SD21・14 に切られる。断面形状は皿状を呈し、規模は検出長 1.27 m、最大幅 1.94 m、深さ 17cm を測り、溝床の比高差は殆どない。埋土は、褐灰色土 (10YR 4/1) の単一層である。遺物は土師器、瓦器片が少量出土した。

出土遺物 (第 155 図)

65 は瓦器椀で内面に圈線状の暗文が施される。66 は瓦質の羽釜で、平らな面をなす口縁端部より下がったところに貼り付けて鏝をもち、内面にハケ目調整が施され、外面が煤ける。

時期：出土した瓦器の特徴から、13 世紀頃と考えられる。



第 155 図 SD15 測量図・出土遺物実測図

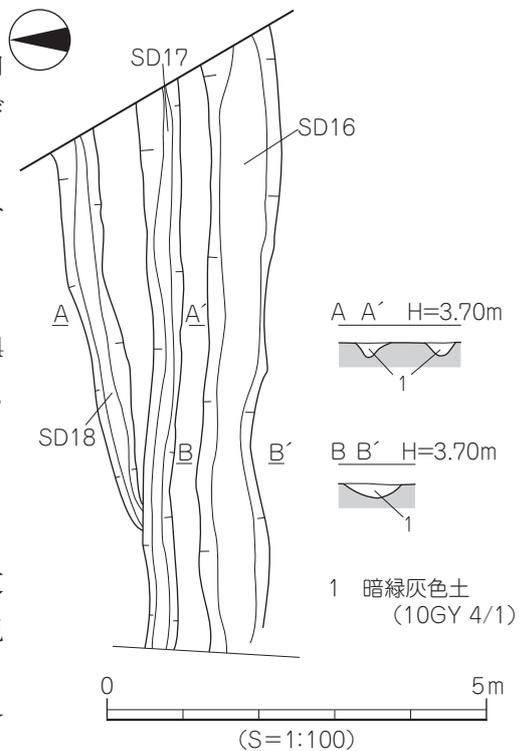
SD 16 (第 156 図)

2 区中央部 D11 ~ E12 区に位置し、東西方向を指向する。西端は現代坑に切れ、東端は調査区外に延びる。断面形状はレンズ状を呈し、規模は検出長 7.81 m、最大幅 0.93 m、深さ 43cm を測り、溝床は東から西へ 8cm の比高差をもつ。埋土は、暗緑灰色土 (10GY 4/1) 単層である。遺物は、土師器、瓦器が少量出土した。

時期：時期決定しうる遺物は乏しいが、埋土が SD14 の中～下層と酷似することから 13 世紀頃と考えられる。

SD 17 (第 156 図)

2 区中央部 D11 ~ 12 区に位置し、東西方向を指向し、南隣は SD16 が並行する。西端は現代坑に切れ、東端は調査区外に延びる。断面形状は U 字状を呈し、規模は検出長 7.34 m、最大幅 0.56 m、深さ 21cm を測り、溝床の比高差は殆どない。埋土は、暗緑灰色土 (10GY 4/1) の単一層である。遺物は、土師器片が僅かに出土



第 156 図 SD16・17・18 測量図

した。

時期：時期決定しうる遺物は乏しいが、埋土がSD14の中～下層と酷似することから13世紀頃と考えられる。

SD 18 (第 156 図)

2区中央部D11～12区に位置し、東西方向を指向する。西端はSD17に繋がり、東端は調査区外に延びる。断面形状はU字状を呈し、規模は検出長5.23m、最大幅0.55m、深さ29cmを測り、溝床の比高差は殆どない。埋土は、暗緑灰色土(10GY 4/1)の単層である。遺物は土師器、瓦器、磁器片が少量出土した。

時期：時期決定しうる遺物は乏しいが、SD16・17と同様、13世紀頃と考えられる。

SD 19 (第 157 図)

2区北側C9～12区に位置し、東西方向を指向し、両端は調査区外に延びる。断面形状は皿状を呈し、規模は検出長10.02m、最大幅0.56m、深さ12cmを測り、溝床の比高差は殆どない。埋土は、褐灰色土(10YR 4/1)の単一層である。遺物は土師器、須恵器、瓦器片が少量出土した。

出土遺物 (第 157 図)

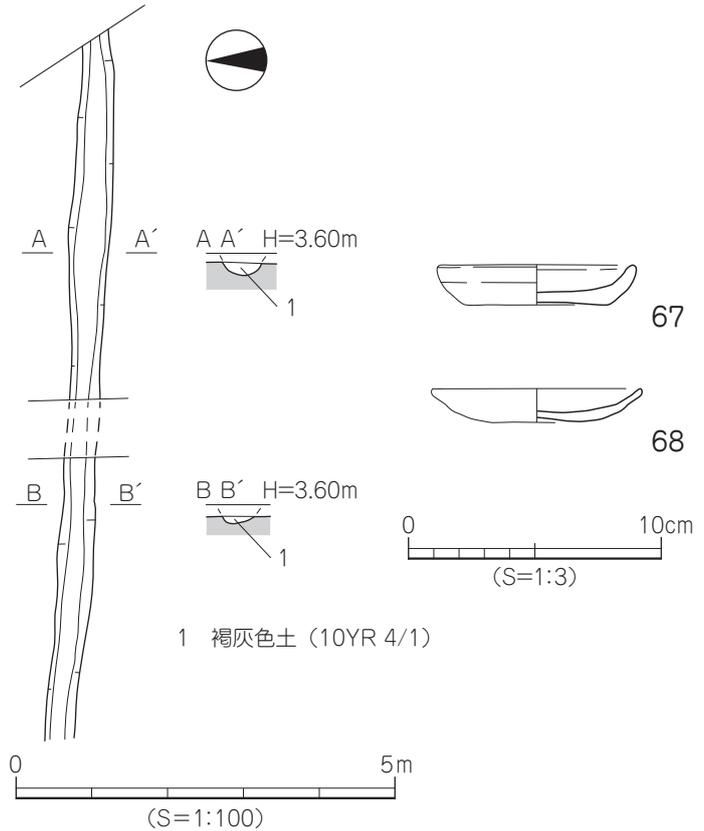
67は土師器皿で、内傾して立ち上がり、底部に回転糸切り痕があり、内外面が煤ける。68は瓦器皿で、やや内傾する底部から外傾する立ち上がりは短い。

時期：時期決定しうる遺物は乏しいが、埋土がSD1と酷似することから13世紀頃と考えられる。

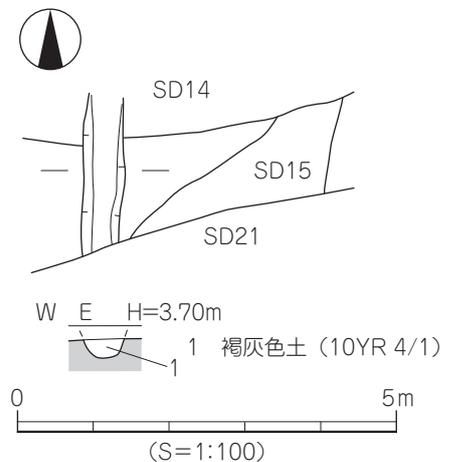
SD 20 (第 158 図)

2区中央部E・F12区に位置し、南北方向を指向する。SD14・21に切られる。断面形状はU字状を呈し、規模は検出長2.08m、最大幅0.56m、深さ23cmを測る。埋土は褐灰色土(10YR 4/1)の単一層である。遺物の出土はない。

時期：時期決定しうる遺物は乏しいが、埋土がSD1と酷似することから13世紀頃と考えられる。



第 157 図 SD19 測量図・出土遺物実測図



第 158 図 SD20 測量図

SD 21 (第 159 図)

2 区中央部 F11 ~ 13 区に位置し、東西方向を指向する。SD15 を切り、東西端は調査区外に延びる。断面形状は逆台形状を呈し、規模は検出長 8.60 m、最大幅 1.96 m、深さ 39cm を測り、溝床は東から西へ 10cm の比高差をもつ。埋土は上層が黒褐色土 (10YR 3/1)、下層はオリーブ灰色土 (10Y 6/2) で、最下層には微砂を多含する。遺物は上層から下層にかけて土師器、瓦器、陶器片が出土した。

時期：時期決定しうる遺物が乏しく、SD15 を切ることから、13 世紀以降としか分からない。

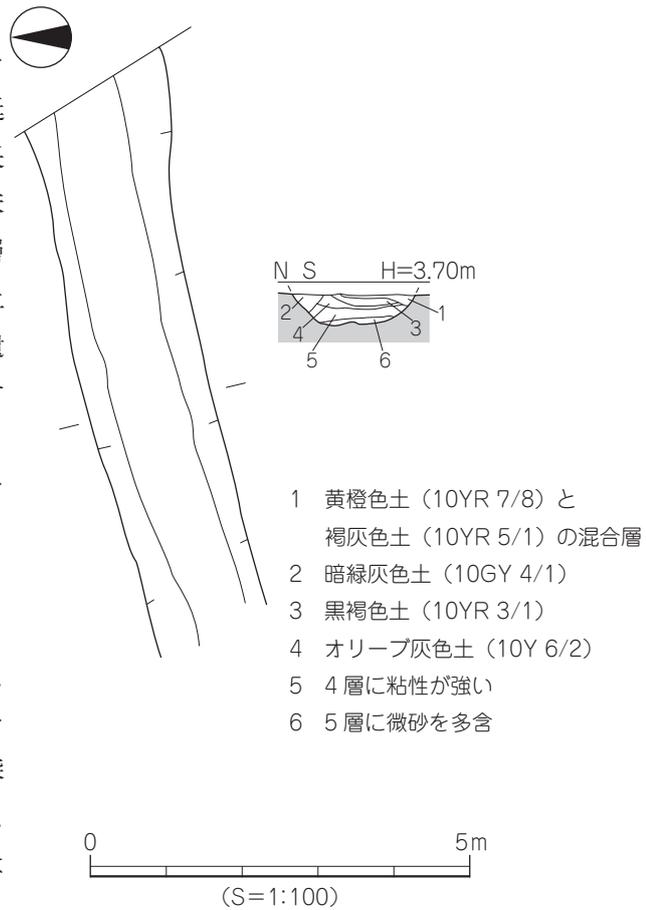
SD 22 (第 160 図)

2 区北側 G・H12 区に位置し、南北方向を指向し、南端は調査区外に延びる。断面形状はレンズ状を呈し、規模は検出長 4.08 m、最大幅 0.48 m、深さ 5cm を測り、溝床の比高差は殆どない。埋土は、褐灰色土 (10YR 4/1) の単一層である。遺物は土師器、須恵器、瓦器片が少量出土した。

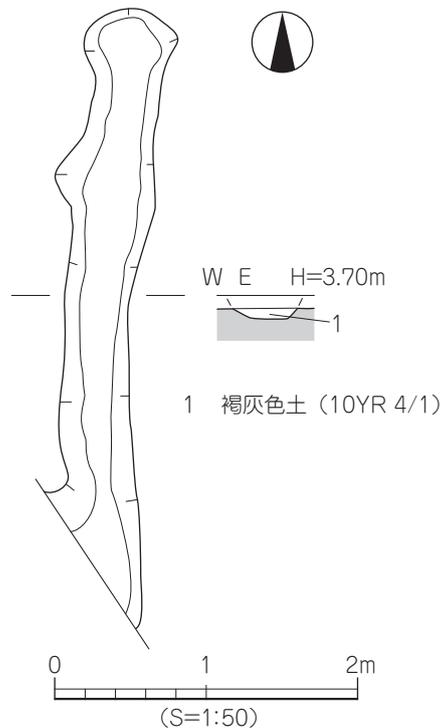
出土遺物 (第 161 図・図版 40)

69 は土師器坏で、胴部に内傾する稜をもち、底部に回転糸切り痕がある。内外面の一部には煤けがある。70・71 は土師器皿で、70 は内傾気味に立ち上がり内外面の一部は煤け、底部に回転糸切り後の板圧痕がある。71 は平底の底部にやや内傾する立ち上がりは短かく、底部に回転糸切り後の板圧痕がある。72 は瓦器碗で、断面逆台形状の高台をもち、口縁部内面に圈線状と見込部に平行に暗文が施される。73 は瓦器皿で、丸みをもつ底部に口縁部はやや外傾し、内面に螺旋状の暗文が施される。74 は須恵器のこね鉢で、口縁端部が「く」字状にやや上方に肥厚される。75 は白磁碗の口縁部で、胴部は内傾し、口縁端部が玉縁状に肥厚され、外面下胴部には施釉が施されていない。

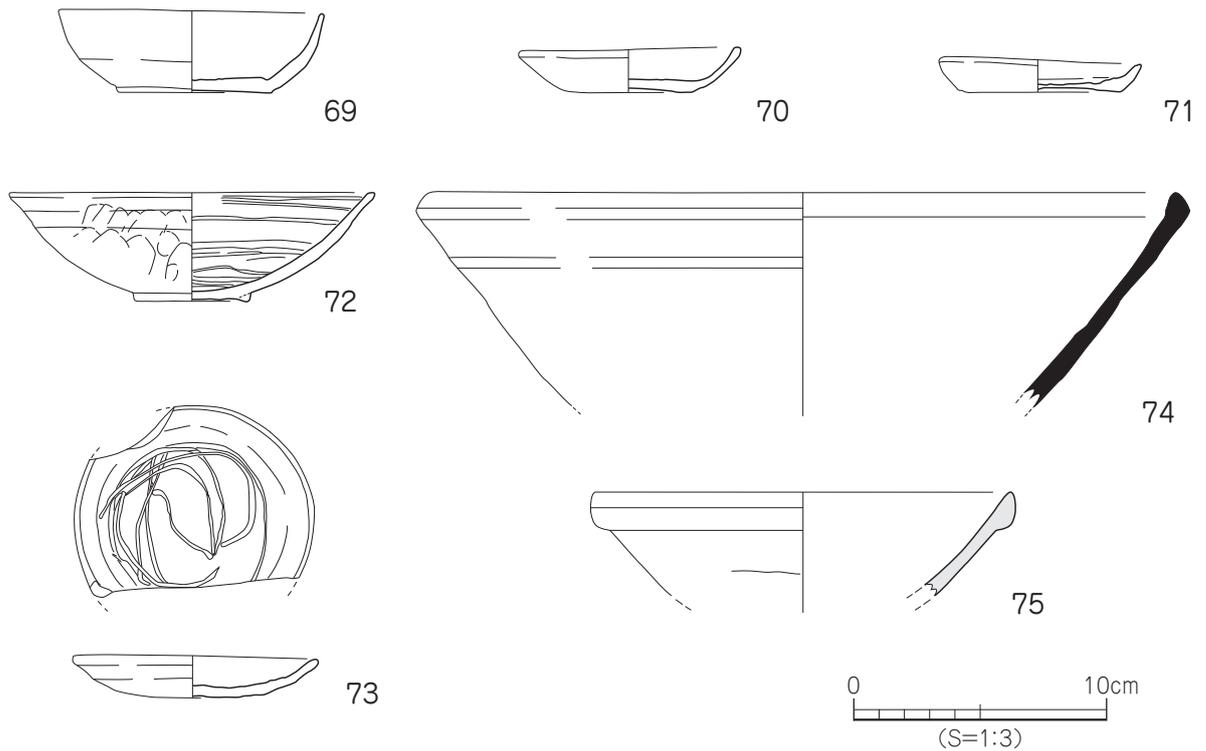
時期：時期決定しうる遺物は乏しいが、埋土が SD1 と酷似することから 13 世紀頃と考えられる。



第 159 図 SD21 測量図



第 160 図 SD22 測量図



第 161 図 SD22 出土遺物実測図

4. 土坑

第Ⅲ層上面において、土坑 12 基を検出した。

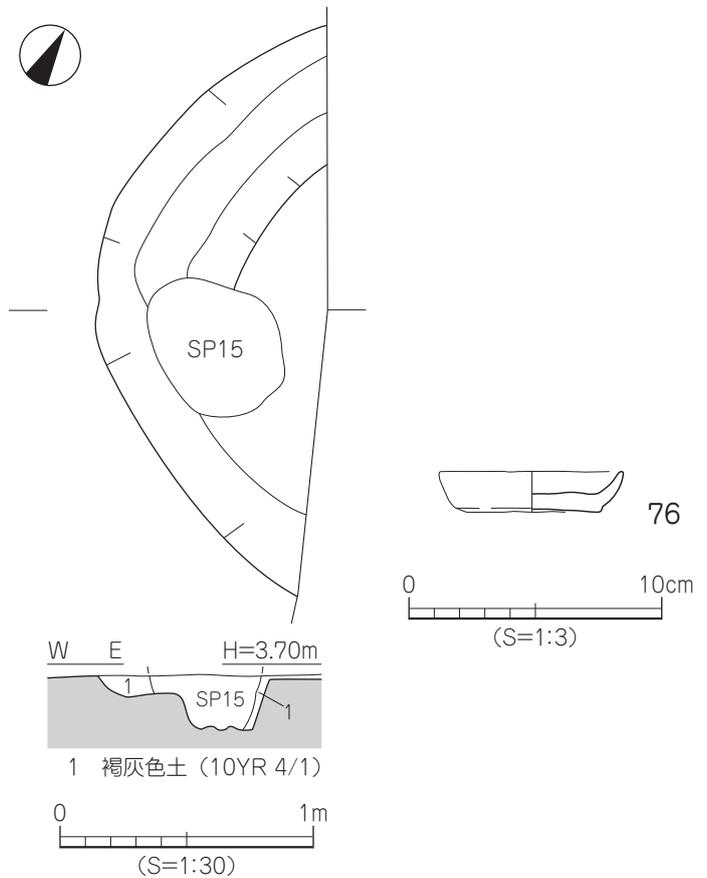
SK 1 (第 162 図)

1 区南側 H・I 9 区に位置し、東側は調査区外に延びる。残存状況から平面形態は円形を想定し、断面形態は皿状を呈する。規模は長軸 2.26m、短軸 0.91m 以上、深さ 8cm を測る。埋土は、褐灰色土 (10YR 4/1) の単一層である。遺物は、土師器片が僅かに出土する。

出土遺物 (第 162 図)

76 は土師器皿で、平底の底部に内傾した胴部をもち、底部に回転糸切り後の板圧痕がある。

時期：時期決定しうる遺物は乏しいが、埋土が SD1 と酷似することから 13 世紀頃と考えられる。



第 162 図 SK1 測量図

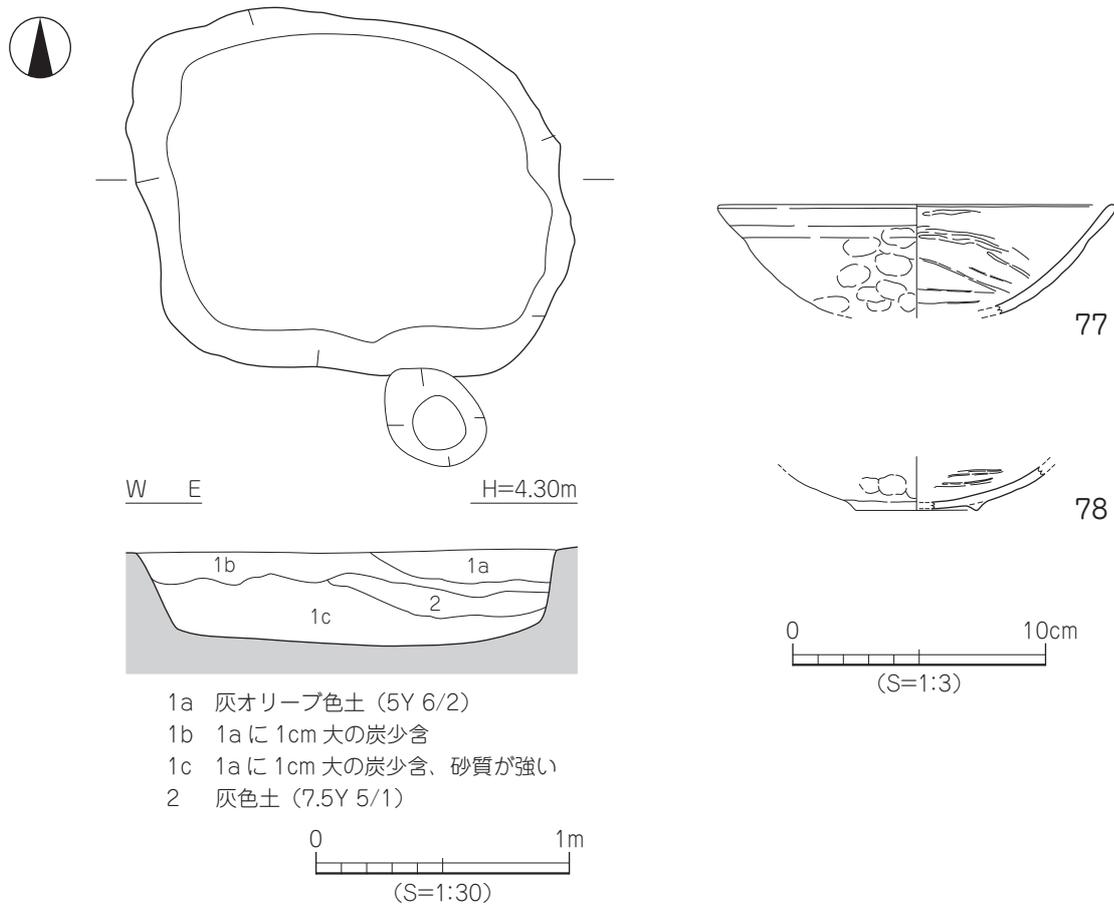
S K 2 (第 163 図)

1 区南端 J8～9 区に位置し、SD6 を切る。平面形態は隅丸方形、断面形態は逆台形状を呈する。規模は長軸 1.69m、短軸 1.49m、深さ 37cm を測る。埋土は灰オリーブ色土 (5Y 6/2) を基調とし、下位には 1cm 大の炭が含まれる。遺物は東播系須恵器こね鉢や土師器、瓦器片が出土した。

出土遺物 (第 163 図)

77・78 は瓦器碗で、77 は内傾する胴部内面に暗文がある。78 は底部に断面三角形形状の貼り付け高台をもち、内面に暗文がある。

時期：出土した瓦器の特徴から、13 世紀前半と考えられる。



第 163 図 SK2 測量図・出土遺物実測図

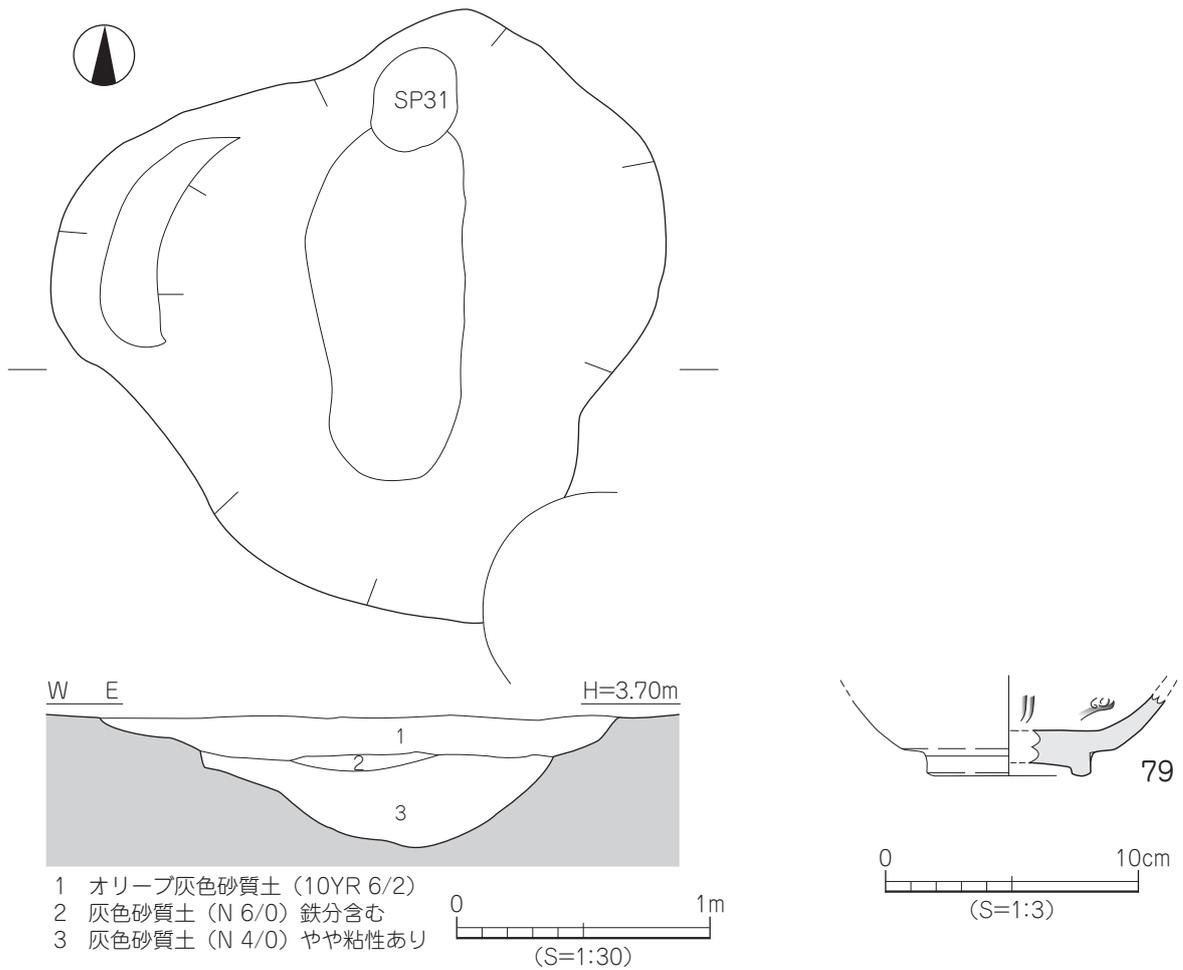
S K 3 (第 164 図)

1 区中央部 F6 区に位置し、平面形態は不整楕円形、断面形態は舟底状を呈する。規模は長軸 2.41m、短軸 2.36m、深さ 60cm を測る。埋土は、灰色砂質土 (N 4/0～N6/0) である。平面形態や断面形態から素掘りの井戸の可能性をもつ。遺物は土師器、瓦器、磁器の破片が僅かに出土した。

出土遺物 (第 164 図)

79 は青磁碗の底部で、断面四角形状の高台をもち、下胴部内面に草花文様が施される。

時期：時期決定しうる遺物が乏しいが、埋土が SK7 に類似することから 13 世紀頃と考えられる。

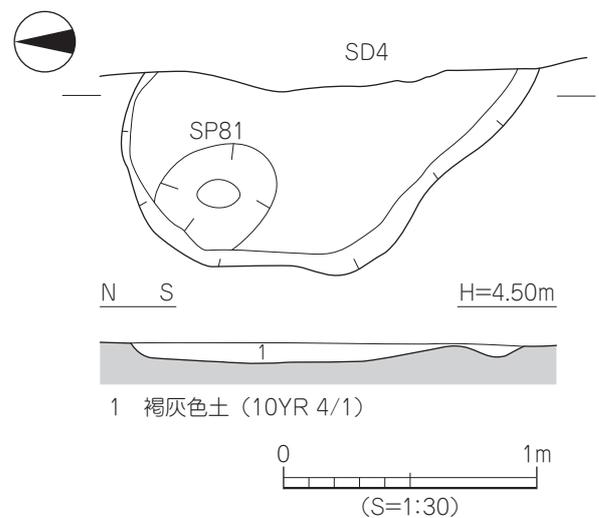


第 164 図 SK3 測量図・出土遺物実測図

SK4 (第 165 図)

1 区中央部 F6 区に位置し、SD4 に切られる。残存状況より平面形態は楕円形を想定し、断面形態は皿状を呈する。規模は長軸 1.14m 以上、短軸 1.29m、深さ 6cm を測る。埋土は、褐灰色土 (10YR 4/1) の単一層である。遺物は、土師器片が僅かに出土した。

時期：時期決定しうる遺物が乏しいが、埋土が SD1 と類似することから 13 世紀頃と考えられる。



第 165 図 SK4 測量図

S K 5 (第 166 図)

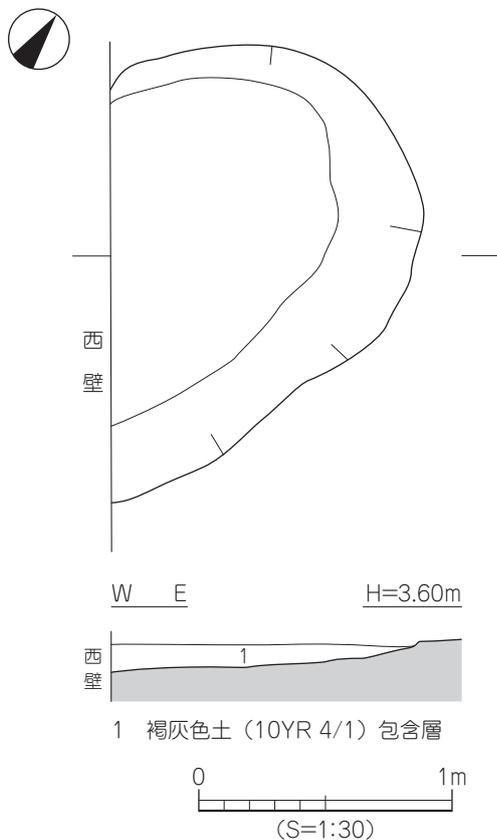
1 区北側 D3 区に位置し、西側は調査区外に延びる。平面形態は残存状況より楕円形を想定し、断面形態は皿状を呈する。規模は長軸 1.21m 以上、短軸 1.68m、深さ 12cm を測る。埋土は、褐灰色土 (10YR 4/1) の単一層である。遺物は土師器、瓦器片が出土した。

時期：時期決定しうる遺物が乏しく、埋土が SD1 に酷似することから 13 世紀頃と考えられる。

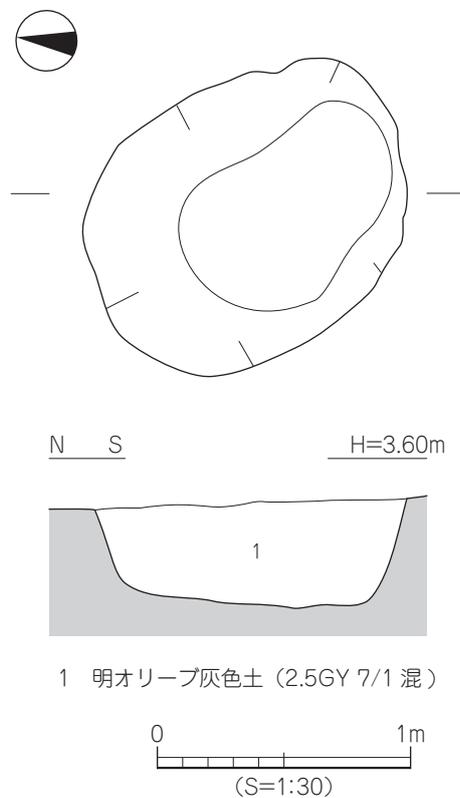
S K 6 (第 167 図)

1 区北側 C3 区に位置し、SD12 を切る。平面形態は円形、断面形態は逆台形状を呈する。規模は長軸 1.5m、短軸 1.07m、深さ 50cm を測る。埋土は、明オリーブ灰色土 (2.5GY 7/1) の単層である。遺物は土師器、瓦器、磁器片が少量出土した。

時期：時期決定しうる遺物が乏しく、遺物から中世としか分からない。



第 166 図 SK5 測量図



第 167 図 SK6 測量図

S K 7 (第 168 図・図版 40)

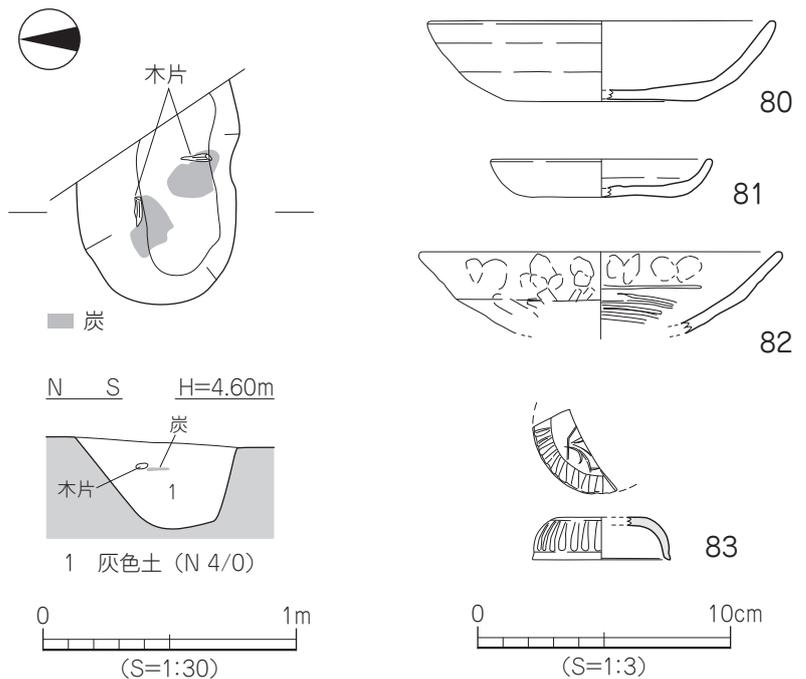
1 区北側 C5 区に位置し東端は調査区外に延びる。平面形態は残存状況より楕円形、断面形態は舟底状を呈する。規模は長軸 0.74m 以上、短軸 0.73m、深さ 38cm を測る。埋土は、灰色土 (N 4/0) 単層である。遺物は土師器、瓦器片が出土したほか、土坑下位からは炭化材や木片が出土した。

出土遺物 (第 168 図)

80 は土師器坏で、平底の底部より内傾する胴部をもつ。底部に回転糸切り痕がある。81 は土師器皿で、平底の底部より内傾して立ち上がり、底部に回転糸切り痕がある。82 は瓦器碗で、内傾する

胴部に、口縁端部は外傾する。内面に圈線状の暗文、外面に指頭痕が施される。83は白磁の合子の蓋で、外面口縁部に櫛描状文様が施される。

時期：出土した土師器の特徴から、13世紀頃と考えられる。



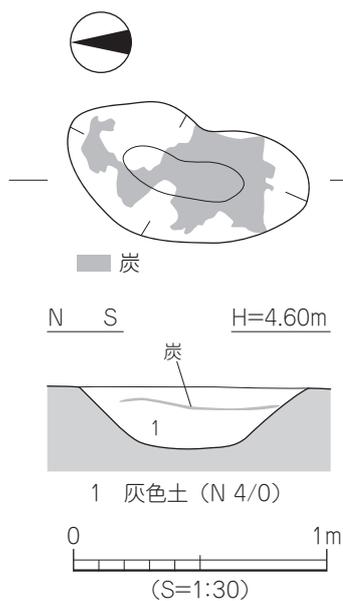
第 168 図 SK7 測量図・出土遺物実測図

SK8 (第 169 図)
1 区北端 B4 区に位置する。平面形態は楕円形、断面形態は逆台形状を呈する。規模は長軸 0.98m、短軸 0.55m、深さ 26cm を測る。埋土は、灰色土 (N 4/0) 単層である。基底面付近からは、炭化材が密集した状態で検出した。遺物は、土師器片が僅かに出土した。

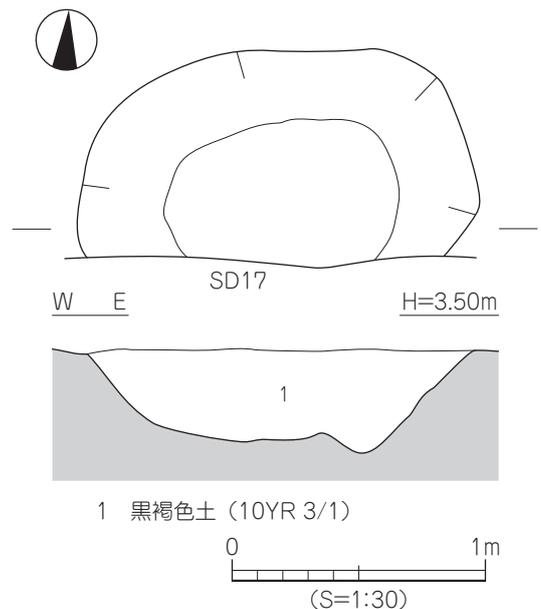
時期：時期決定しうる遺物が乏しいが、埋土が SK7 と類似することから 13 世紀頃と考えられる。

SK9 (第 170 図)
1 区北端 B3～4 区に位置し、SD8 に切られる。残存状況より平面形態は楕円形を想定し、断面形態は逆台形状を呈する。規模は長軸 1.58m、短軸 0.86m 以上、深さ 35cm を測る。埋土は、黒褐色土 (10YR 3/1) 単層である。遺物は土師器、瓦器片が僅かに出土した。

時期：時期決定しうる遺物が乏しく、埋土が SD21 と酷似することから、13 世紀以降としか分からない。



第 169 図 SK8 測量図

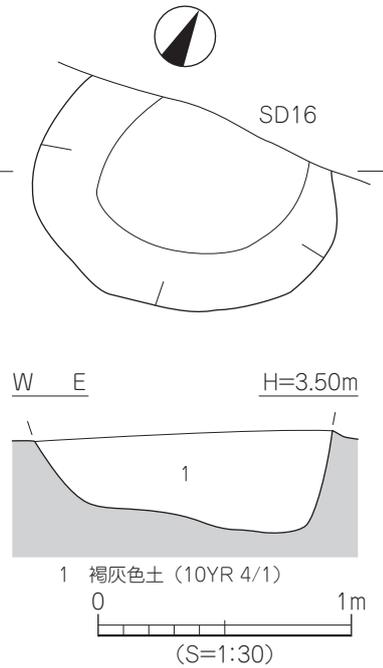


第 170 図 SK9 測量図

SK 10 (第 171 図)

1 区北端 C3 区に位置し、SD13 に切られる。平面形態は残存状況より楕円形、断面形態は逆台形状を呈する。規模は長軸 1.2m、短軸 0.82m、深さ 38cm を測る。埋土は褐灰色土 (10YR 4/1) の単一層である。遺物は土師器、瓦器、磁器片が少量出土した。

時期：時期決定しうる遺物が乏しく、埋土が SD1 と同一なことから 13 世紀頃と考えられる。

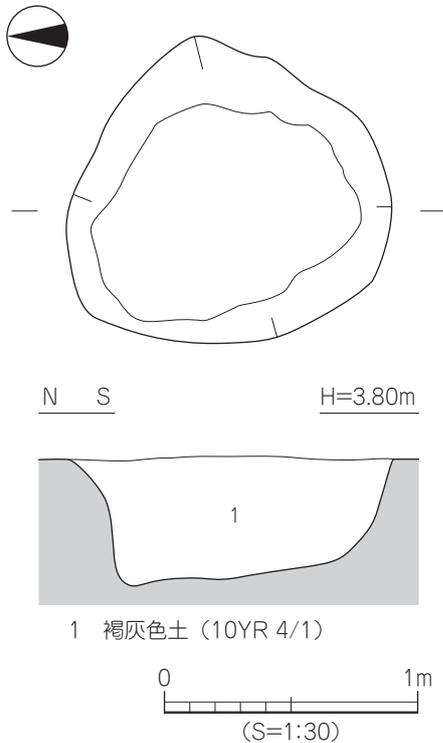


第 171 図 SK10 測量図

SK 11 (第 172 図)

2 区南端 H13 区に位置し、平面形態は楕円形、断面形態は逆台形状を呈する。規模は長軸 1.27m、短軸 1.23m、深さ 46cm を測る。埋土は、褐灰色土 (10YR 4/1) 単層である。遺物は土師器、瓦器片が少量出土した。

時期：時期決定しうる遺物が乏しく、埋土が SD1 と酷似することから 13 世紀頃と考えられる。

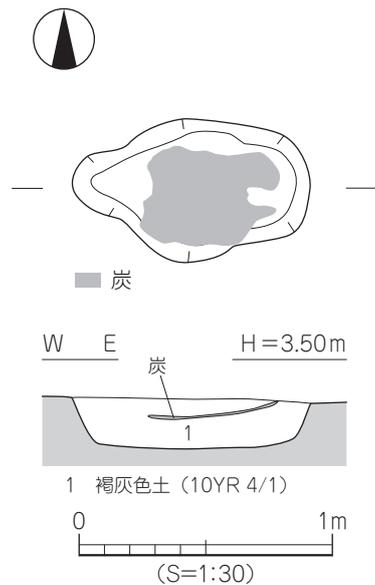


第 172 図 SK11 測量図

SK 12 (第 173 図)

1 区北端 C2 区に位置する。平面形態は不整楕円形、断面形態は逆台形状を呈する。規模は長軸 0.95m、短軸 0.57m、深さ 20cm を測る。埋土は、褐灰色土 (10YR 4/1) である。

時期：時期決定しうる遺物が乏しく、埋土が SD1 と酷似することから 13 世紀頃と考えられる。



第 173 図 SK12 測量図

5. 土壙墓

第Ⅲ層上面において、土壙墓1基を検出した。

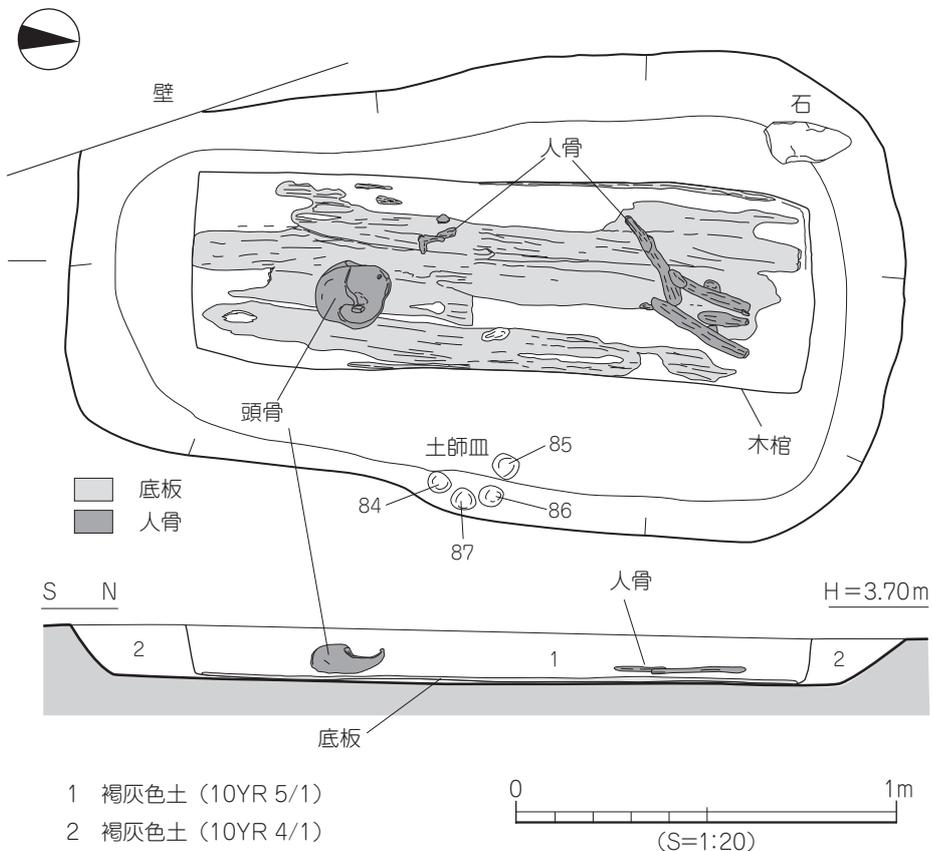
土壙墓1 (第174図・図版35)

1区南側I6区に位置する土壙墓で、墓壙の平面形態は隅丸長方形、断面形態は逆台形状を呈し、規模は長軸2.19m、短軸1.08m、深さ14cmを測る。木棺は側板と底板が残存しており、平面形態は長方形で規模は長軸1.63m、短軸0.52m、深さ12cm、板材の厚みを測る。埋土は、墓壙が褐灰色土(10YR 4/1)で、木棺内は褐灰色土(10YR 5/1)である。木棺内には人骨の頭蓋骨・肩甲骨・上腕骨・大腿骨の一部が残存しており、それらの骨の残存状況から南枕の仰臥屈葬で、棺内には頭骨から南へ35cm程の空間があることを確認した。墓壙の東端中央部には副葬品の土師器皿4枚が並べられており、その内の1点には底部に焼成後の穿孔がある。

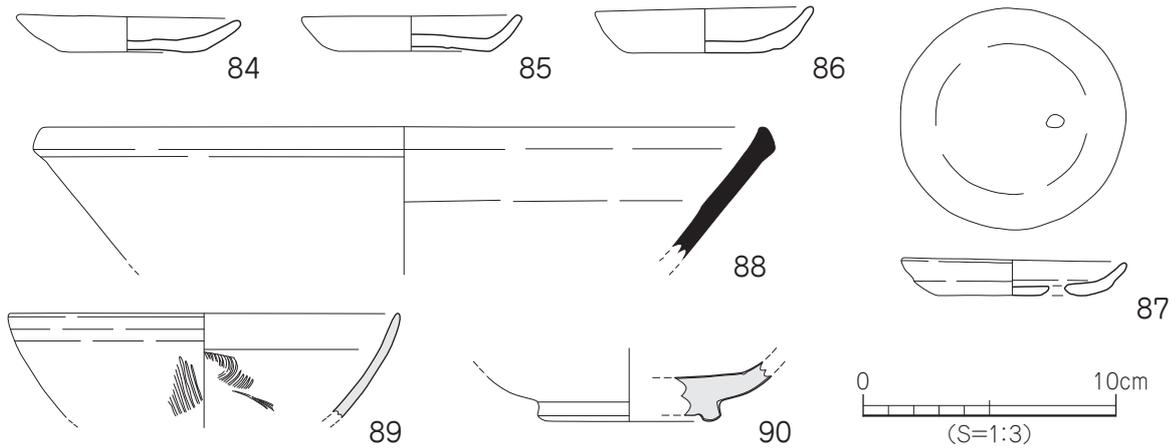
出土遺物 (第175図・図版35・40)

84～87は土師器皿で、この4点の法量はほぼ同一である。84は直線的に外上方に延び、底部に回転糸切り痕がある。85・86はやや内傾気味に立ち上がり、85は底部に回転糸切り痕、86は回転糸切り後の板圧痕がある。87は回転糸切り後の板圧痕があり、底面を外側から打ち欠いた6～8mm大の焼成後の穿孔がある。88は須恵器のこね鉢で、断面三角形状の口縁端部である。89は同安窯系青磁碗で上胴部内面に沈線とその下に櫛目文、外面に縦の櫛目文が施される。90は、青磁碗の底部で、断面四角形状の高台をもつ。

時期：出土した土師器の特徴から、13世紀頃と考えられる。



第174図 土壙墓1測量図



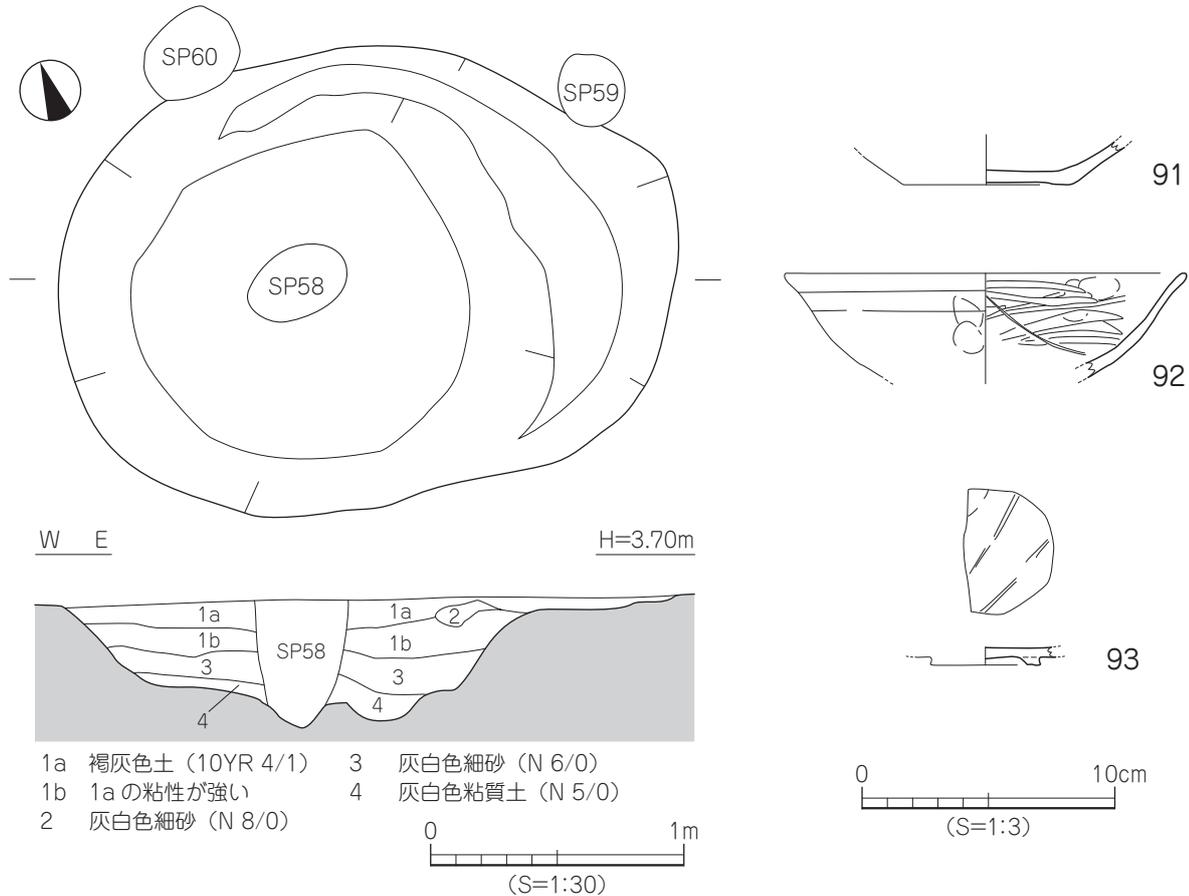
第 175 図 土墳墓 1 出土遺物実測図

6. 井戸址

第Ⅲ層上面において、井戸 2 基を検出した。

SE1 (第 176 図・図版 37)

1区北側E5区に位置する素掘りの井戸で、掘立1・SP58・SP59・SP60に切られる。平面形態は楕円形、断面形態は逆台形状を呈する。規模は長軸 2.47m、短軸 1.82m、深さ 41cm を測る。埋土は上層～中層が褐灰色土 (10YR 4/1)、中層～下層は灰色細砂 (N 6/0)、最下層は灰色粘質土 (N 5/0) である。遺物は土師器、須恵器、瓦器片が多く出土した。



第 176 図 SE1 測量図・出土遺物実測図

出土遺物 (第 176 図)

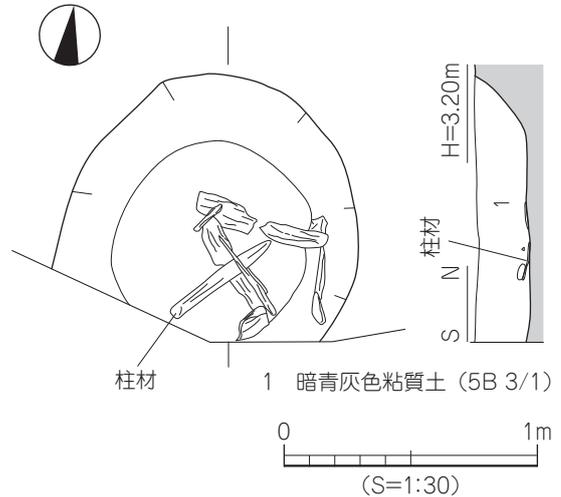
91 は土師器坏で、平底の底部より内傾して立ち上がり、底部に回転糸切り痕があり、内外面が煤ける。92・93 は瓦器椀である。92 は内面に圈線状の暗文が施される。93 は、底部に台形状の高台をもつ。

時期：出土した瓦器の特徴から、13 世紀頃と考えられる。

SE2 (第 177 図)

2 区南端 I 14 区に位置する井戸で、掘り方の平面形態は円形、断面形態は逆台形状を呈する。規模は長軸 2.44m、短軸 2.13m 以上、深さ 42cm を測る。井戸上位から基底面にかけては、湾曲した板材や木片が散乱した状態で検出しており、この状態から曲げ物の井戸であることが分かった。埋土は、暗青灰色粘質土 (5B 3/1) 単層である。井戸からは、土器類の出土はない。

時期：出土遺物がなく、中世頃としか分からない。



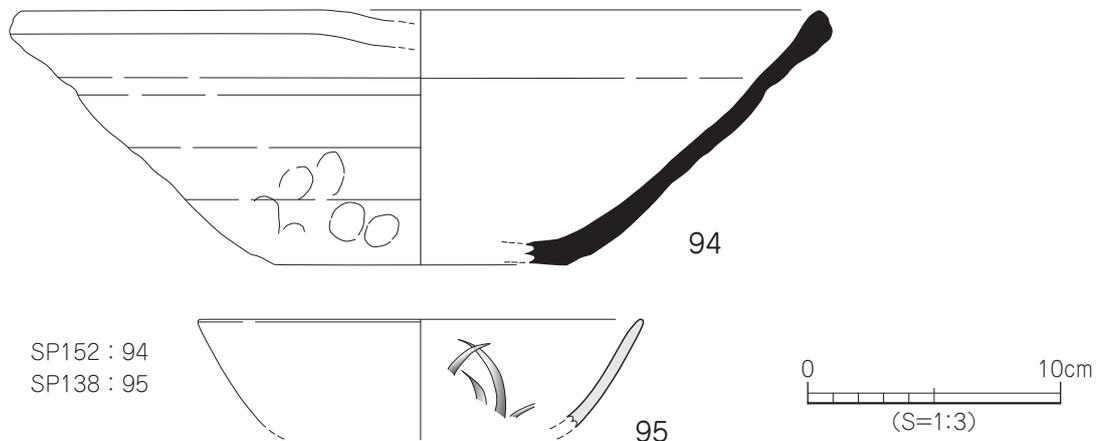
第 177 図 SE2 測量図

7. 柱穴状遺構

調査では、152 基の柱穴を検出した。平面形態は円形～楕円形を呈しており、規模は直径 15～55cm、深さ 4～24cm を測る。埋土は褐灰色土 (10YR 4/1・10YR 5/1・10YR 6/1)、暗灰色土 (N 3/0) で、一部の柱穴内からは土師器、須恵器、瓦器、陶磁器の小片が出土した。

出土遺物 (第 178 図・図版 40)

94 は須恵器のこね鉢で、底部より直線的に立ち上がり、口縁端部が断面三角形形状を呈する。成形時の粘土紐の巻き上げ痕が顕著に残る。95 は青磁碗の口縁部で、内面に草花文が施される。



第 178 図 柱穴出土遺物実測図

8. 性格不明遺構

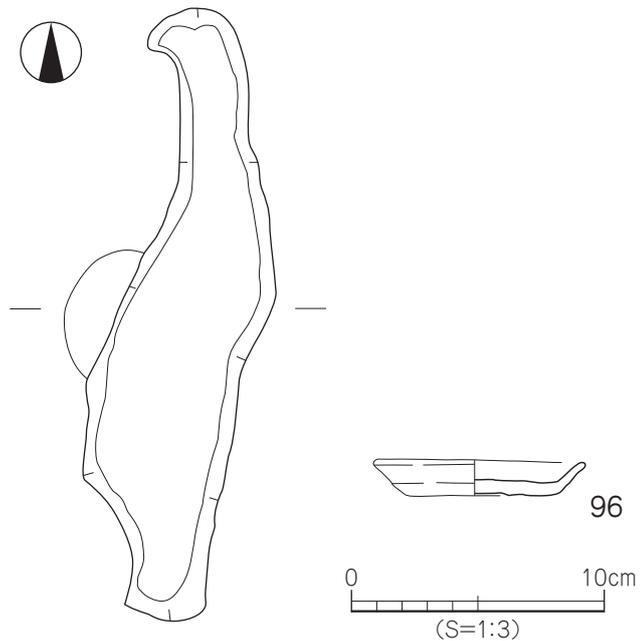
SX 1 (第 179 図)

2 区南側 G13 区に位置し、掘立 2 を切る。平面形態は不整楕円形、断面形態は皿状を呈する。規模は長軸 2.43m、短軸 5.56m、深さ 7.2cm を測る。埋土は、褐灰色土 (10YR 4/1) 単層である。遺物は土師器、瓦器片が僅かに出土した。

出土遺物 (第 179 図)

96 は土師器皿で、不安定な底部から外傾して立ち上がり、底部に回転糸切り痕がある。

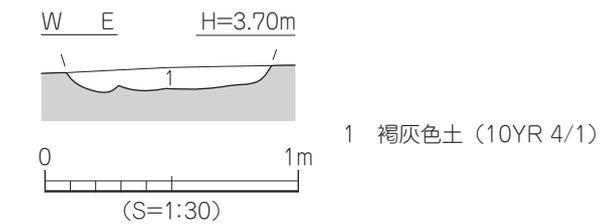
時期：出土した土師器の特徴から、13 世紀頃と考えられる。



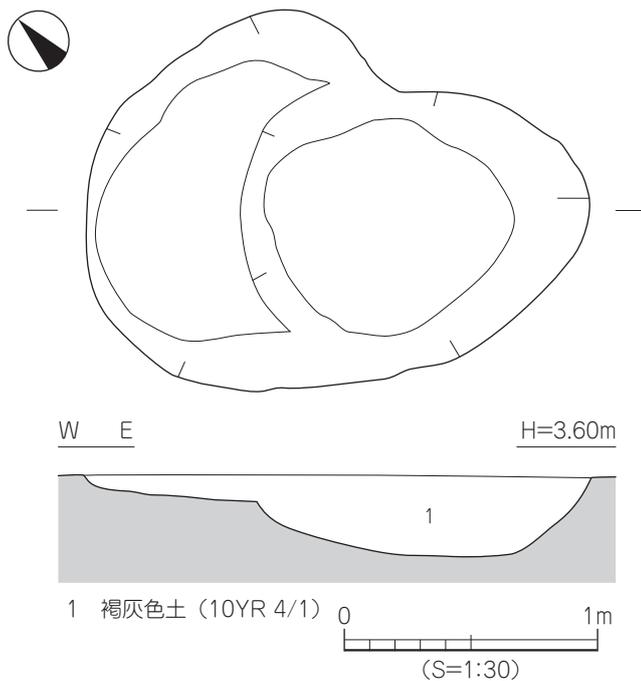
SX 2 (第 180 図)

2 区北端 B10 区に位置する。平面形態は不整楕円形、断面形態は逆台形状を呈する。規模は長軸 1.98m、短軸 1.49m、深さ 29cm を測る。埋土は、褐灰色土 (10YR 4/1) 単層である。遺物は土師器、瓦器、磁器片が僅かに出土した。

時期：時期決定しうる遺物が乏しく、埋土が SX1 と酷似することから 13 世紀頃と考えられる。



第 179 図 SX1 測量図・出土遺物実測図



第 180 図 SX2 測量図

第4節 小 結

本調査では、平安時代から室町時代にかけての遺構や遺物を確認した。

調査では生産遺構（水田址）と掘立柱建物、溝、土坑、柱穴などの集落遺構を検出した。水田址は鎌倉時代から室町時代にかけての2時期に亘るもので、第Ⅱ④層上面と第Ⅱ⑧層上面において検出した。いずれの水田面も洪水砂に覆われており、洪水により水田を放棄したものと考えられる。第Ⅱ④層の水田址は調査地から南東方向の余戸柳井田遺跡（1～3次調査）においても検出されていることから、室町時代には周辺一帯が生産域として土地利用されたことが窺える。また、第Ⅱ⑧層の水田址は調査区北端の地形が、北へ向けて緩傾斜する低地部分にあり、調査地から北へ広がる水田が想定できる。溝 SD3 は南北方向に延びる区画溝で、掘立1を中心とした集落遺構を区画し、その北限はSD8に繋がる可能性が高い。また、掘立2を「コ」字状に囲む小溝は位置関係や形状などから、掘立2に伴う雨落ち溝と考える。また、掘立2のすぐ南隣には井戸 SE2 などがあり、居住域としての機能が備わっている。掘立1はSD3の外側に隣接する総柱構造の建物である。建物の南には土壙墓1があり、掘立1に伴う屋敷墓と考える。木棺外には副葬品の土師器皿4枚が並べられていたが、内容物は未検出であった。また、木棺内の頭部付近にも副葬品を納めたと考えられる空間を確認した。土壙墓上の第Ⅱ④層水田面上には約15cm～人頭大の円礫を南北長約4.3mに散乱した状態で検出しており、土壙墓に伴う礫を積んだ墓標施設として近現代以前まで存在していたことが想定される。井戸は2種類の構造をもち、素掘りの井戸 SE1 と曲げ物の井戸 SE2 がある。素掘りの井戸は曲げ物を伴う井戸と比べ、直径が大きい特徴をもつことが分かった。

以上のことから、調査地は鎌倉時代には集落として土地利用されており、区画溝を伴う居住域が展開していたことが分かった。また、調査地はそれら居住域の北限付近と想定され、周辺は耕作地として生産活動が行われていたことも想定され、重信川下流域の沖積低地における集落構造を解明する上で貴重な資料となるものである。

東垣生八反地遺跡 1 次調査

遺構一覧・遺物観察表 - 凡例 -

以下の表は、本調査地検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。

(1) 遺構一覧表

- 地区欄 グリッド名を記載。
- 規模欄 () : 現存検出長を示す。
- 出土遺物欄 出土遺物の略記について
土→土師器、須→須恵器、瓦→瓦器、磁→磁器、陶→陶器、石→石製品

(2) 遺物観察表

- 法量欄 () : 復元推定値
- 調整欄 土器の各部位名称を略記した。
例) 底→底部
- 胎土欄 胎土欄は混和剤を略記した。
例) 石→石英、長→長石、金→金ウンモ
() 中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。
例) 石・長 (1~4) → 「1~4mm大の石英・長石を含む」である。
- 焼成欄 焼成欄の略記について
◎ → 良好、○ → 良

表 79 掘立柱建物一覧

掘立	区	地区	規模 (間)	方 向	桁 行		梁 行		床面積 (㎡)	時 期
					実長 (m)	柱間寸法 (m)	実長 (m)	柱間寸法 (m)		
1	1 区	D3~F5	5 × 4	南北	8.30	1.50 ~ 1.80	7.80	1.40 ~ 2.40	64.74	13 世紀前半
2	2 区	G12~H14	(4) × 3	東西	6.45	1.15 ~ 1.82	3.35	1.09 ~ 1.15	21.6 以上	13 世紀代

表 80 溝一覧

(1)

溝 (SD)	区	地区	断面形	規 模 (m)	埋 土	出土遺物	時 期
				長さ × 幅 × 深さ			
1	1 区	J9~K9	皿状	6.11 × 1.48 × 0.13 ~ 0.23	褐灰色土 (10YR 4/1)	土・須・瓦	13 世紀頃
2	1 区	F7~J7	レンズ状	13.6 × 0.30 ~ 0.80 × 0.05 ~ 0.17	オリーブ灰色粘質土 (2.5GY 6/1) 灰色粘質土 (N 5/0)	土・須・瓦	13 世紀前半
3	1 区	F7~K8	V 字状	13.50 × 1.14 ~ 1.70 × 0.24 ~ 0.58	オリーブ灰色粘質土 (2.5GY 5/1~6/1) 灰色粘質土 (N 5/0) 暗灰色粘質土 (N 3/0)	土・須・瓦 磁・石	13 世紀前半
4	1 区	E6~H6	逆台形状	8.52 × 0.56 ~ 0.82 × 0.12	灰色土~灰色粘質土 (5Y 4/1) オリーブ黒色粘質土 (5Y 3/1)	土・須 瓦・石	13 世紀頃
5	1 区	J8~G8	レンズ状~ 逆台形状	15.12 × 0.24 ~ 0.78 × 0.05 ~ 0.23	褐灰色土 (10YR 4/1)	土・須・瓦	13 世紀頃
6	1 区	J9	舟底状	1.68 × 0.26 ~ 0.34 × 0.14 ~ 0.24	褐灰色土 (10YR 4/1)	土	13 世紀頃
7	1 区	I7~8	レンズ状	6.50 × 0.24 ~ 0.40 × 0.11 ~ 0.27	褐灰色土 (10YR 4/1)	—	13 世紀頃
8	1 区	B2~C5	逆台形状	11.38 × 0.62 ~ 0.98 × 0.20 ~ 0.25	灰色粘質土 (N 4/0)	土・須 瓦・陶	13 世紀頃
9	1 区	I8~J9	レンズ状	7.18 × 0.42 ~ 0.78 × 0.12 ~ 0.16	褐灰色土 (10YR 4/1)	土・須 瓦・磁	13 世紀前半
10	1 区	G6~8	逆台形状	10.58 × 0.30 ~ 0.70 × 0.06 ~ 0.18	褐灰色土 (10YR 4/1)	土・須 瓦・石	13 世紀頃
11	1 区	G5~6	皿状	4.75 × 0.92 ~ 1.54 × 0.08 ~ 0.13	灰色土 (5Y 4/1) 明緑灰色粘質土 (10G 7/1)	土・須・瓦	13 世紀頃
12	1 区	C2~5	逆台形状	17.41 × 0.42 ~ 0.88 × 0.08 ~ 0.22	褐灰色土 (10YR 4/1) 灰色粘質土 (N 4/0)	土・瓦	13 世紀前半

遺構一覽

溝一覽

(2)

溝 (SD)	区	地区	断面形	規模 (m)		埋 土	出土遺物	時 期
				長さ	幅 × 深さ			
13	1区	C2~4	逆台形状	6.58 × 0.26	~ 0.46 × 0.11 ~ 0.13	灰色粘質土 (N 4/0)	土	13世紀頃
14	2区	E11~13	逆台形状	8.60 × 1.50	~ 2.05 × 0.45	黄橙色土 (10YR 7/8) 暗緑灰色土 (10GY 4/1)	土・須・瓦	13世紀頃
15	2区	E12~F13	皿状	1.27 × 0.72	~ 1.94 × 0.14 ~ 0.17	褐灰色土 (10YR 4/1)	土・瓦	13世紀頃
16	2区	D11~E12	レンズ状	7.81 × 0.93	× 0.43	暗緑灰色土 (10GY 4/1)	土・瓦	13世紀頃
17	2区	D11~12	U字状	7.34 × 0.56	× 0.21	暗緑灰色土 (10GY 4/1)	土	13世紀頃
18	2区	D11~12	U字状	5.23 × 0.55	× 0.29	暗緑灰色土 (10GY 4/1)	土・瓦・磁	13世紀頃
19	2区	C9~12	皿状	10.02 × 0.56	× 0.12	褐灰色土 (10YR 4/1)	土・須・瓦	13世紀頃
20	2区	E・F12	U字状	2.08 × 0.56	× 0.23	褐灰色土 (10YR 4/1)	——	13世紀頃
21	2区	F11~13	逆台形状	8.60 × 1.96	× 0.39	黒褐色土 (10YR 3/1) オリーブ灰色土 (10Y 6/2)	土・瓦・陶	13世紀以降
22	2区	G・H12	レンズ状	4.08 × 0.48	× 0.05	褐灰色土 (10YR 4/1)	土・須・瓦	13世紀頃

表 81 土坑一覽

土坑 (SK)	区	地区	平面形	断面形	規模 (m)		埋 土	出土遺物	時 期
					長径	短径 × 深さ			
1	1区	H・I 9	円形	皿状	2.26 × (0.91)	× 0.08	褐灰色土 (10YR 4/1)	土	13世紀頃
2	1区	J 8~9	隅丸方形	逆台形状	1.69 × 1.49	× 0.37	灰オリーブ色土 (5Y 6/2)	土・須 瓦	13世紀前半
3	1区	F 6	不整楕円形	舟底状	2.41 × 2.36	× 0.60	灰色砂質土 (N 4/0 ~ N 6/0)	土・瓦 磁	13世紀頃
4	1区	F 6	楕円形	皿状	(1.14) × 1.29	× 0.06	褐灰色土 (10YR 4/1)	土	13世紀頃
5	1区	D 3	楕円形	皿状	(1.21) × 1.68	× 0.12	褐灰色土 (10YR 4/1)	土・瓦	13世紀頃
6	1区	C 3	円形	逆台形状	1.50 × 1.07	× 0.50	明オリーブ灰色土 (2.5GY 7/1)	土・瓦 磁	中世
7	1区	C 5	楕円形	舟底状	(0.74) × 0.73	× 0.38	灰色土 (N 4/0)	土・瓦 炭・木	13世紀頃
8	1区	B 4	楕円形	逆台形状	0.98 × 0.55	× 0.26	灰色土 (N 4/0)	土・炭	13世紀頃
9	1区	B 3~4	楕円形	逆台形状	1.58 × (0.86)	× 0.35	黒褐色土 (10YR 3/1)	土・瓦	13世紀以降
10	1区	C 3	楕円形	逆台形状	1.20 × 0.82	× 0.38	褐灰色土 (10YR 4/1)	土・瓦 磁	13世紀頃
11	2区	H 13	楕円形	逆台形状	1.27 × 1.23	× 0.46	褐灰色土 (10YR 4/1)	土・瓦	13世紀頃
12	1区	C 2	不整楕円形	逆台形状	0.95 × 0.57	× 0.20	褐灰色土 (10YR 4/1)	——	13世紀頃

表 82 土壇墓一覽

土壇 墓	区	地区	平面形	断面形	規模 (m)		埋 土	出土遺物	時 期
					長径	短径 × 深さ			
1	1区	I 6	隅丸長方形	逆台形状	2.19 × 1.08	× 0.14	褐灰色土 (10YR 4/1)	土	13世紀頃

東垣生八反地遺跡 1 次調査

表 83 井戸址一覧

井戸 (SE)	区	地区	平面形	断面形	規模 (m)		埋土	出土遺物	時期
					長径	短径 × 深さ			
1	1区	E5	楕円形	逆台形状	2.47 × 1.82 × 0.41		褐灰色土 (10YR 4/1) 灰色細砂 (N 6/0) 灰色粘質土 (N 5/0)	土・須 瓦	13世紀頃
2	2区	I14	円形	逆台形状	2.44 × (2.13) × 0.42		暗青灰色粘質土 (5B 3/1)	木	中世頃

表 84 性格不明遺構一覧

性格不明遺構 (SX)	区	地区	平面形	断面形	規模 (m)		埋土	出土遺物	時期
					長径	短径 × 深さ			
1	2区	G13	不整楕円形	皿状	2.43 × 5.56 × 0.072		褐灰色土 (10YR 4/1)	土・瓦	13世紀頃
2	2区	B10	不整楕円形	逆台形状	1.98 × 1.49 × 0.29		褐灰色土 (10YR 4/1)	土・瓦 磁	13世紀頃

表 85 掘立 1 出土遺物観察表 (土製品)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
1	坏	口径 (13.2) 残高 3.0	内傾する胴部に口縁端部はやや肥厚され丸く納まる。	ナデ	ナデ	灰白色 灰白色	石・長 (1~2) 金 ◎		
2	坏	口径 (13.5) 残高 3.1	内傾する胴部。	ナデ	ナデ	灰白色 灰白色	長 (1~3) ◎		
3	皿	口径 8.1 底径 5.7 器高 1.4	平底の底部から外反気味に立ち上がる。	ナデ ◎回転糸切り	ナデ	灰白色 浅黄橙色	石・長 (1) ◎		38
4	椀	口径 (12.0) 残高 2.0	内傾する口縁部内面に圏線状の暗文が施される。(瓦器)	ナデ	ミガキ (暗文)	灰色 灰色	密 ◎		
5	椀	底径 (4.9) 残高 1.2	底部内面に平行する直線の暗文が施され、断面三角形の貼り付け高台をもつ。(瓦器)	ナデ	ミガキ (暗文)	灰色 灰色	密 ◎		
6	皿	口径 (8.8) 残高 2.0	胴部中位に稜をもつ。(瓦器)	ナデ	ナデ	灰白色 灰白色	石・長 (1) ◎		
7	椀	口径 (7.9) 残高 1.8	胴部中位に稜をもつ。(瓦器)	ナデ	ミガキ (暗文)	青灰色 灰色	密 ◎		

表 86 掘立 2 出土遺物観察表 (土製品)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
8	鍋	口径 (35.3) 残高 6.3	「く」字状の口縁部に、端部は面をなし、やや凹む。外面に煤けあり。	ヨコナデ ハケ (6本/cm)	ハケ (10本/cm)	黒褐色 灰白色	石・長 (1~2) ◎	煤付着	
9	碗	口径 (13.5) 残高 3.6	外反する口縁部付近には、内外面に施釉が施される。(磁器)	回転ナデ	回転ナデ	明オリブ灰 明オリブ灰	密 ◎	施釉	

表 87 SD1 出土遺物観察表 (土製品)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
10	椀	口径 (14.3) 残高 3.1	内湾する胴部に、口縁部はやや外反する。(瓦器)	ナデ	ナデ	オリブ黒色 灰色	石・長 (1~2) ◎		
11	碗	口径 (11.8) 残高 2.7	外傾気味の口縁部の外面に櫛描文が施される。(貿易陶磁器)	回転ナデ	回転ナデ	オリブ黄色 オリブ黄色	密 ◎	施釉	

遺物観察表

表 88 SD2 出土遺物観察表 (土製品)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面/内面)	胎土焼成	備考	図版
				外面	内面				
12	皿	口径 (7.1) 器高 1.8	下胴部に内湾する稜をもつ。	ヨコナデ ㊟回転糸切り	ナデ (指頭痕)	灰白色 灰白色	石・長 (1~2) ○		
13	椀	口径 (15.2) 残高 3.9	内湾する胴部内面に螺旋状の暗文が施される。(瓦器)	ナデ (指頭痕)	ミガキ (暗文)	灰白色 灰白色	石・長 (1~2) ○		
14	椀	底径 (4.1) 残高 1.9	底部に断面三角形の貼り付け高台をもつ。内面に螺旋状の暗文が施される。(瓦器)	ヨコナデ	ミガキ (暗文)	灰白色 灰色	石・長 (1) 金 ◎		

表 89 SD3 出土遺物観察表 (土製品)

(1)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面/内面)	胎土焼成	備考	図版
				外面	内面				
15	坏	口径 11.0 底径 7.2 器高 3.5	平底の底部より外傾して立ち上がり、口縁部付近が内傾する。	ヨコナデ ㊟回転糸切り →板圧痕	ナデ	灰白色 灰白色	長 (1~2) ◎		
16	坏	口径 11.3 底径 7.3 器高 3.7	平底の底部より外反して立ち上がり口縁部付近が内傾して稜をもつ。	ナデ ㊟回転糸切り	ナデ	灰白色 灰白色	石 (1) 密 ◎		
17	坏	口径 11.6 底径 6.3 器高 3.5	平底の底部より内傾気味に立ち上がり胴部中に稜をもつ。	ナデ ㊟回転糸切り →板圧痕	ナデ	灰白色 灰白色	石 (1) 密 ◎		
18	坏	口径 11.6 底径 7.1 器高 2.8	平底の底部より外傾して立ち上がり、口縁部付近が内湾して稜を持つ。内外面が煤ける。	ナデ ㊟回転糸切り	ナデ	灰白色 灰白色	石・長 (1~2) ◎		38
19	坏	口径 11.2 底径 7.3 器高 2.9	平底の底部より外反して立ち上がる。	ヨコナデ ㊟回転糸切り →板圧痕	ナデ	灰白色 橙色	石・長 (1~2) ◎		
20	坏	口径 11.7 底径 7.8 器高 4.0	平底の底部より直線的に立ち上がり、内外面は煤ける。	ヨコナデ ㊟回転糸切り →板圧痕	ナデ・マメツ	浅黄橙色 灰黄褐色	石・長 (1~2) ◎		38
21	坏	口径 11.9 底径 8.1 器高 2.8	平底の底部より内傾気味に立ち上がる。	ナデ ㊟回転糸切り →板圧痕	ナデ (指頭痕)	灰白色 灰白色	石 (1~2) ◎		
22	坏	口径 11.7 底径 8.6 器高 2.9	平底の底部より内傾気味に立ち上がる。雑な作りである。	ナデ ㊟回転糸切り →板圧痕	ナデ	灰白色 浅黄褐色	石・長 (1~2) ◎		38
23	坏	口径 11.2 底径 7.9 器高 3.0	平底の底部より直線的に立ち上がる。	ヨコナデ ㊟回転糸切り	ヨコナデ	灰白色 灰白色	石・長 (1~2) ◎	墨書	38
24	皿	口径 (6.8) 底径 (5.4) 器高 1.0	平底の底部より外傾して立ち上がる。器高が低い。	ナデ ㊟回転糸切り →板圧痕	ナデ	浅黄褐色 灰白色	石・長 (1) ◎		
25	土釜	口径 (26.3) 残高 4.4	内湾気味の口縁部外面にやや下方に延びる。鏝をもち、口縁端部は平らな面をなす。	ヨコナデ	ハケ (10本/cm)	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	石・長 (1~2) ◎	煤付着	
26	土釜	口径 (22.6) 残高 7.9	内湾する胴部に、口縁部に外方に延びる鏝をもつ。	ナデ ハケ (8本/cm)	ナデ ハケ (8本/cm)	にぶい黄褐色 暗褐色	石・長 (1~2) 金 ◎	煤付着	38
27	土釜	残高 17.1	下方に延びる断面円形状の脚部。	ナデ	ナデ	灰黄褐色 浅黄褐色	石・長 (1~2) ◎		38
28	土釜	残高 8.1	下方に延びる断面楕円形の脚部。	ナデ	ナデ	橙色 黄灰色	石・長 (1~3) 金 ◎		
29	椀	口径 14.2 底径 3.9 器高 3.9	僅かに残存する高台をもち、内面には螺旋状の暗文が施される。(瓦器)	ナデ (指頭痕)	ミガキ (暗文)	暗青灰色 暗青灰色	石 (1~6) 長 (1~3) 金 ◎		38
30	坏	口径 (13.8) 底径 4.2 器高 4.0	やや湾曲する底部から内湾して立ち上がる。(瓦器)	ナデ	ナデ	暗灰色 灰色	石・長 (1~3) ○		39
31	皿	口径 (7.8) 底径 (5.8) 器高 1.4	やや湾曲する底部から直線的に立ち上がる。(瓦器)	ナデ	ナデ	灰色 灰色	石・長 (1~2) ◎		

東垣生八反地遺跡 1 次調査

SD3 出土遺物観察表 (土製品)

(2)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
32	羽釜	口径 (24.5) 残高 5.1	口縁部外面に外方向に延びる銜をもち、口縁端部は平らな面をなし、内方へ肥厚される。(瓦器)	ヨコナデ	ヨコナデ	灰色 灰色	石・長 (1~2) ◎	煤付着	
33	こね鉢	口径 (28.6) 残高 3.8	外傾する口縁端部は断面三角形状となる。(東播系須恵器)	ナデ	ナデ	灰白色 灰白色	石・長 (1) ◎		
34	碗	口径 (12.3) 残高 2.1	外反した口縁部内面には鎬蓮弁文が施される。(龍泉系青磁碗)	回転ナデ	回転ナデ	オリーブ灰色 オリーブ灰色	密 ◎	施釉	
35	碗	底径 (5.7) 残高 2.0	断面四角形状の削り出し高台をもつ。(白磁)	回転ナデ	回転ナデ	灰オリーブ色 灰オリーブ色	密 ◎	施釉	
36	皿	口径 (11.0) 底径 4.6 器高 2.5	見込み部に花文とジグザグ状の点描文が施される。(同安窯系青磁)	◎回転糸切り	回転ナデ	浅黄色 浅黄色	密 ◎	施釉	39

表 90 SD3 出土遺物観察表 (石製品)

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
37	砥石	一部	石英粗面岩	6.3	6.0	2.1	106.6		

表 91 SD4 出土遺物観察表 (土製品)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
38	坏	口径 14.5 底径 8.6 器高 3.5	平底の底部より内傾して立ち上がり、外面に煤けが残る。	ヨコナデ ◎回転糸切り →板圧痕	ナデ	灰白色 浅黄橙色	石・長 (1~3) 金 ◎	煤付着	39
39	皿	口径 (9.8) 底径 (6.7) 器高 1.4	平底の底部より内傾して立ち上がる。	ヨコナデ ◎回転糸切り →板圧痕	ナデ	浅黄橙色 灰色	石・長 (1~2) ◎		

表 92 SD4 出土遺物観察表 (石製品)

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
40	砥石	一部	石英粗面岩	7.2	5.4	2.5	145.7		39

表 93 SD5 出土遺物観察表 (土製品)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
41	椀	底径 (6.2) 残高 1.7	断面逆台形状の貼り付け高台をもつ。	ナデ	ナデ	灰白色 浅黄橙色	石・長 (1~2) ◎		
42	坏	底径 (8.6) 残高 2.1	平底の底部より内湾気味に立ち上がる。	ナデ ◎回転糸切り	ナデ	灰白色 浅黄橙色	石・長 (1) 金 ◎		
43	土鍋	口径 (32.2) 残高 4.1	「く」字状の口縁部に、端部は丸く納まる。外面は煤ける。	ヨコナデ	ヨコナデ	黒色 黄橙色	石・長 (1~3) ◎	煤付着	
44	椀	口径 (15.3) 残高 4.0	内湾する胴部をもつ。(瓦器)	ナデ (指頭痕)	ナデ	灰色 灰色	石・長 (1~2) ◎		

表 94 SD6 出土遺物観察表 (土製品)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
45	坏	口径 (15.0) 残高 3.0	内傾して立ち上がり、口縁端部は丸く納まる。	ナデ (指頭痕)	ナデ	灰白色 灰白色	石・長 (1~3) 金 ◎		
46	坏	口径 (13.6) 残高 3.7	直線的に外傾し、内外面は煤ける。	ナデ (指頭痕)	ナデ	灰白色 灰白色	石・長 (1~2) ◎	煤付着	

遺物観察表

表 95 SD8 出土遺物観察表 (土製品)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
47	椀	底径 (3.2) 残高 0.7	底部に逆三角形の貼り付け高台をもつ。(瓦器)	ナデ	ナデ	灰色 灰白色	石・長 (1) ◎		

表 96 SD9 出土遺物観察表 (土製品)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
48	皿	口径 (8.8) 器高 2.0	平底の底部より内傾して立ち上がり、口縁部が外傾する。	ナデ (指頭痕) ◎板圧痕	ナデ	灰白色 灰白色	石・長 (1~2) ◎	煤付着	

表 97 SD10 出土遺物観察表 (土製品)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
49	椀	口径 (15.2) 残高 4.0	内傾する胴部中に稜をもち、口縁端部が外傾する。内面が煤ける。	ナデ (指頭痕)	ナデ (指頭痕)	橙色 黒褐色	石・長 (1) ◎	煤付着	

表 98 SD10 出土遺物観察表 (石製品)

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
50	砥石	一部	石英粗面岩	7.9	6.8	3.9	333.74		39
51	石製品	完存品	緑泥片岩	14.8	6.9	1.65	344.20		39

表 99 SD11 出土遺物観察表 (土製品)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
52	坏	口径 (13.8) 底径 (7.6) 器高 3.6	平底の底部より内傾して立ち上がる。	ヨコナデ ◎板圧痕	ヨコナデ	灰白色 灰白色	石・長 (1~3) ◎		
53	皿	口径 (9.5) 底径 (6.3) 器高 1.7	平底の底部から直線的に立ち上がる。	ナデ ◎板圧痕	ナデ	浅黄橙色 浅黄橙色	石・長 (1~2) ◎		
54	土鍋	残高 3.1	「く」字状の口縁部に、端部は平らな面をなす。	ナデ	ナデ	黒褐色 にぶい褐色	石・長 (1~2) ◎		

表 100 SD12 出土遺物観察表 (土製品)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
55	土鍋	口径 (30.3) 残高 3.5	口縁部は屈曲し、内外面が煤ける。	ナデ	ナデ ハケ (6本/cm)	褐灰色 黒褐色	石・長 (1~2) ◎	煤付着	
56	椀	口径 (14.4) 残高 3.7	内傾する胴部内面に、圏線状の暗文 (ヘラミガキ) が施される。(瓦器)	ナデ (指頭痕)	ミガキ (暗文)	灰色 灰色	石・長 (1) ◎		
57	椀	口径 (13.8) 残高 2.7	内傾する胴部内面に、圏線状の暗文 (ヘラミガキ) が施される。(瓦器)	ナデ (指頭痕)	ミガキ (暗文)	灰色 灰色	石・長 (1~2) ◎		
58	椀	口径 (14.7) 底径 3.4 器高 14.4	内傾する上胴部内面に、稜をもち、内面に圏線状のヘラミガキが施される。(瓦器)	ナデ (指頭痕)	ミガキ (暗文)	暗灰色 暗灰色	石・長 (1~2) ◎		39

東垣生八反地遺跡 1 次調査

表 101 SD14 出土遺物観察表 (土製品)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
59	坏	口径 10.8 底径 6.7 器高 3.6	平底の底部からやや内傾気味に立ち上がる。	ヨコナデ ㊟回転糸切り →板圧痕	ヨコナデ	灰白色 にぶい黄橙色	石・長 (1~2) ◎		
60	坏	口径 11.5 底径 7.9 器高 3.5	内傾する胴部外面には 2ヶ所に稜をもち内面の 1/3 が煤ける。	ナデ ㊟回転糸切り	ナデ	明赤灰色 淡赤色	石・長 (1~2) ○	煤付着	
61	坏	口径 (11.4) 底径 6.9 器高 3.7	内傾する胴部に口縁端部が玉縁状となる。	ナデ ㊟回転糸切り →板圧痕	ナデ	灰白色 灰白色	石・長 (1~2) 金 ◎		
62	坏	口径 (10.2) 底径 (5.6) 器高 2.5	平底の底部からやや内傾して立ち上がる。	ナデ ㊟板圧痕	ナデ	灰白色 灰白色	石・長 (1~2) ◎		
63	皿	口径 8.0 底径 5.2 器高 1.6	平底の底部からやや内傾して立ち上がり、内外面が煤ける。	ナデ ㊟回転糸切り	ナデ	浅黄褐色 灰白色	微砂粒 ◎	煤付着	40
64	皿	口径 7.5 底径 6.2 器高 2.0	平底の底部からの立ち上がりは低く、全体に歪む。	ナデ ㊟回転糸切り	ナデ	灰白色 灰白色	石・長 (1~2) 金 ◎		40

表 102 SD15 出土遺物観察表 (土製品)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
65	椀	口径 (11.8) 残高 3.3	内傾する胴部内面には圏線状のミガキ (暗文) が密に施される。(瓦器)	ナデ	ミガキ (暗文)	暗灰色 暗灰色	石・長 (1~2) ◎		
66	羽釜	口径 (20.6) 残高 9.1	平らな面をなす口縁端部より下がったところに貼り付けて鏝をもつ。外面が煤ける。(瓦質)	ヨコナデ	ヨコナデ ハケ (10 本/cm)	暗灰色 灰色	石・長 (1~2) ◎	煤付着	

表 103 SD19 出土遺物観察表 (土製品)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
67	皿	口径 (7.6) 底径 (5.6) 器高 1.6	内傾して立ち上がり、内外面が煤ける。	ナデ ㊟回転糸切り	ナデ	黄灰色 黄灰色	石・長 (1~2) ○		
68	皿	口径 (8.2) 底径 (4.2) 器高 1.3	やや内傾する底部から外傾する立ち上がりは短い。(瓦器)	ナデ	ナデ	灰色 灰色	石・長 (1~2) ○		

表 104 SD22 出土遺物観察表 (土製品)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
69	坏	口径 10.3 底径 6.0 器高 3.3	平底の底部に内傾する胴部に稜をもつ。内外面の一部に煤けあり。	ヨコナデ ㊟回転糸切り	ヨコナデ	浅黄橙色 浅黄橙色	石・長 (1~2) ○	煤付着	
70	皿	口径 (8.4) 底径 (5.0) 器高 1.8	内傾気味に立ち上がり内外面の一部は煤ける。	ナデ ㊟回転糸切り 板圧痕	ナデ	灰白色 灰白色	石・長 (1~2) ○		
71	皿	口径 (7.8) 底径 (6.0) 器高 1.4	平底の底部にやや内傾する立ち上がりは短い。	ナデ ㊟回転糸切り 板圧痕	ナデ	灰白色 灰白色	石・長 (1~2) ◎		
72	椀	口径 (14.2) 底径 (4.4) 器高 4.3	断面逆台形状の高台をもち、口縁部内面に圏線状と見込部に平行に暗文が施される。(瓦器)	ナデ	ミガキ (暗文)	暗灰色 灰色	石・長 (1~2) ◎		40
73	皿	口径 (9.4) 底径 (4.0) 残高 1.7	丸みをもつ底部に口縁部はやや外傾し、内面に螺旋状の暗文が施される。(瓦器)	ナデ	ミガキ (暗文)	暗灰色 灰色	石・長 (1~2) ◎		
74	こね鉢	口径 (29.4) 残高 8.5	口縁端部が「く」字状にやや上方に肥厚される。(須恵器)	ヨコナデ	ヨコナデ	灰色 灰色	石・長 (1~2) ◎		
75	碗	口径 (16.4) 残高 4.1	胴部は内傾し、口縁端部が玉縁状に肥厚される。外面下胴部には施釉がみられない。(白磁)	ナデ	ナデ	灰オリーブ色 灰オリーブ色	密 ◎	施釉	

遺物観察表

表 105 SK1 出土遺物観察表 (土製品)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
76	皿	口径 (7.2) 底径 5.4 器高 1.6	平底の底部に内傾した胴部をもつ。	ナデ ⊗回転糸切り →板圧痕	ナデ	浅黄橙色 浅黄橙色	微砂粒 ◎		

表 106 SK2 出土遺物観察表 (土製品)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
77	椀	口径 (15.6) 残高 4.3	内傾する胴部内面に暗文が施される。(瓦器)	ナデ (指頭痕)	ミガキ (暗文)	灰色 灰色	密 ○		
78	椀	底径 (4.8) 残高 1.7	底部に断面三角形の貼り付け高台をもち、見込みに平行した暗文がある。(瓦器)	ナデ (指頭痕)	ミガキ (暗文)	灰白色 灰白色	密 ○		

表 107 SK3 出土遺物観察表 (土製品)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
79	碗	底径 6.1 残高 3.2	断面四角形状の高台をもち、下胴部内面に草花文様が施される。(青磁)	回転ナデ	回転ナデ	オリーブ黄色 オリーブ黄色	密 ◎	施釉	

表 108 SK7 出土遺物観察表 (土製品)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
80	坏	口径 (13.6) 底径 (7.1) 残高 3.2	平底の底部より内傾する胴部をもつ。	ヨコナデ ⊗回転糸切り	ナデ	灰白色 灰白色	微砂粒 ◎		
81	皿	口径 (8.6) 底径 (5.8) 器高 1.5	平底の底部より内傾して立ち上がる。	ナデ ⊗回転糸切り	ナデ	淡黄色 淡黄色	微砂粒 金 ◎		
82	椀	口径 (14.2) 残高 3.3	内傾する胴部に、口縁端部は外傾する。内面に圏線状の暗文、外面に指頭痕が施される。(瓦器)	ナデ	ミガキ (暗文)	灰色 暗灰色	石・長 (1~2) ◎		
83	合子の蓋	口径 (5.4) 器高 1.7	外面口縁部に櫛描文様。(白磁)	ナデ	ナデ	明緑色 灰白色	微砂粒 ◎	施釉	40

表 109 土墳墓 1 出土遺物観察表 (土製品)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
84	皿	口径 8.8 底径 5.3 器高 1.5	直線的に外方に延び、立ち上がる。	ナデ ⊗回転糸切り	ナデ	灰白色 灰白色	微砂粒 金 ◎		40
85	皿	口径 8.5 底径 6.1 器高 1.4	やや内傾気味に立ち上がる。	ナデ ⊗回転糸切り	ナデ	灰白色 灰白色	微砂粒 ◎		40
86	皿	口径 8.6 底径 6.0 器高 1.8	やや内傾気味に立ち上がる。	ヨコナデ ⊗回転糸切り →板圧痕	ナデ	灰白色 灰白色	微砂粒 ◎		40
87	皿	口径 8.9 底径 5.8 器高 1.5	底面に打ち欠きによる 6~8mm 大の焼成後の穿孔がある。	ナデ ⊗回転糸切り →板圧痕	ナデ	灰白色 灰白色	微砂粒 ◎	打ちかき	40
88	こね鉢	口径 (28.1) 残高 5.3	断面三角形の口縁端部である。(須恵器)	ヨコナデ	ヨコナデ	灰色 灰色	長 (1~4) ◎		
89	碗	口径 (15.4) 残高 4.1	内傾する胴部内外面に櫛描文様が施される。(同安窯系青磁)	回転ナデ	回転ナデ	オリーブ黄色 オリーブ黄色	密 ◎	施釉	
90	碗	底径 (6.6) 残高 2.3	断面四角形状の高台をもつ。(青磁)	回転ナデ	回転ナデ	灰オリーブ色 灰オリーブ色	密 ◎	施釉	

東垣生八反地遺跡 1 次調査

表 110 井戸 (SE1) 出土遺物観察表 (土製品)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
91	坏	底径 6.7 残高 1.7	平底の底部より内傾して立ち上がり、内外面に煤けあり。	ナデ ㊦回転糸切り	ナデ	浅黄橙色 灰黄褐色	石・長 (1~2) ◎	煤付着	
92	椀	口径 (15.4) 残高 4.2	内傾する胴部に口縁端部は外傾する。内面に、内外面圏線状の暗文が施される。(瓦器)	ナデ (指頭痕)	ミガキ (暗文)	灰色 灰色	密 ◎		
93	椀	底径 (4.3) 残高 0.7	底部に台形状の貼り付け高台をもつ。(瓦器)	ナデ	ナデ	灰白色 黒色	石・長 (1~2) ◎		

表 111 柱穴出土遺物観察表 (土製品)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
94	こね鉢	口径 (31.4) 底径 (11.6) 器高 10.1	底部より直線的に立ち上がり、口縁端部が断面三角形を呈する。粘土紐の巻き上げ痕が顕著に残る。(須恵器)	ナデ (指頭痕)	ナデ	灰色 灰色	長 (1~2) 金 ○	SP152	40
95	碗	口径 (17.5) 残高 4.3	内面に草花文様が施される。(磁器)	ナデ	ナデ	オリーブ灰色 オリーブ灰色	密 ◎	SP138	40

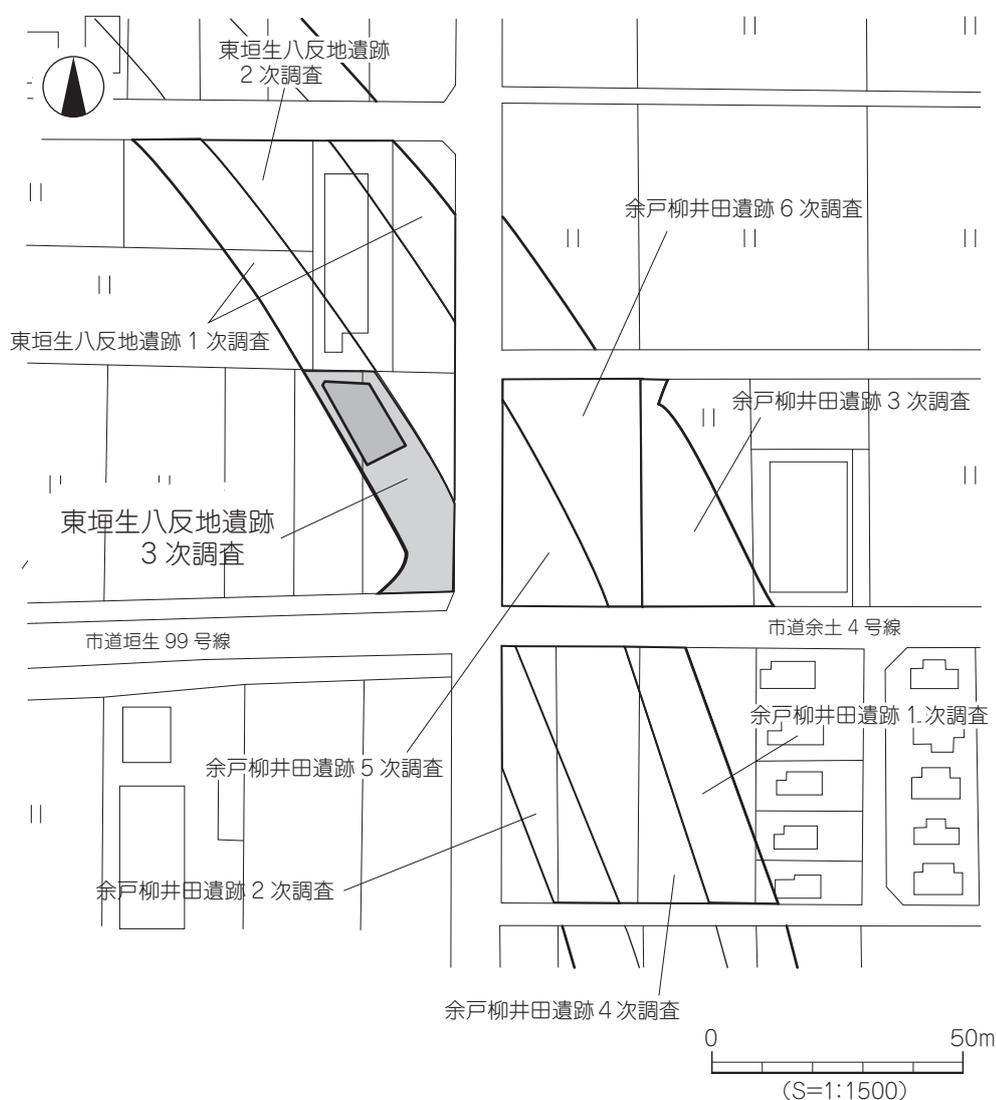
表 112 SX1 出土遺物観察表 (土製品)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
96	皿	口径 8.3 底径 5.8 器高 1.4	不安定な底部から外傾して立ち上がる。	ナデ ㊦回転糸切り	ナデ	灰白色 灰白色	石・長 (1~2) ○		

第12章 東垣生八反地遺跡3次調査

第1節 調査の経緯

東垣生八反地遺跡3次調査は、松山市東垣生町905番6、817番8の一部を調査対象地とし、調査面積は約236㎡である。調査地は東垣生八反地遺跡1次調査地の南隣、同2次調査1区の西隣に位置する。発掘調査は、平成28年6月1日から同年7月25日開始した。重機を使用して地表下約50cmの地点まで表土を掘削し、水田耕作に伴う足跡（第1面）を検出し、第1面の調査を6月8日に終了する。6月10日から重機を使用して地表面下約80cmの地点まで掘削し、集落跡の調査（第2面）を行い、7月25日に屋外調査を終了した。



第181図 調査地位置図

第 2 節 層 位 (第 183 図)

調査地は松山平野西側に位置し、現在の重信川河口から 2.7km 上流の右岸に立地する。調査地周辺は旧重信川の氾濫原と考えられ、標高 4.3 m を測る。調査地の大半は水田で、西北部の一部は造成地として利用されていた。調査で確認した土層は、以下の 11 種類 (I ~ III 層) である。

第 I 層：近現代の造成や水田耕作に伴う耕土で、土色・土質の違いにより 3 種類に分層される。

第 I ①層 - 造成土で、西北部の一部に堆積し、層厚 20 ~ 42cm を測る。

第 I ②層 - 近現代の農耕に伴う耕作土で、灰色土 (10Y 4/1) が堆積し、層厚 10 ~ 22cm を測る。

第 I ③層 - 近現代の農耕に伴う床土で、黄橙色土 (10YR 7/8) が堆積し、層厚 4 ~ 10cm を測る。

第 II 層：中世段階の土壌で、土色・土質の違いにより 7 種類に分層される。

第 II ①層 - 褐灰色土 (10YR 6/1) で、調査区北側に層厚 8 ~ 18cm を測る。

第 II ②層 - II ①層に明オリーブ灰色 (2.5GY 7/1) を帯び、調査区全域に層厚 5 ~ 21cm を測る。

第 II ③層 - 灰白色中粒砂 (N8/0) で、調査区西南部に層厚 6 ~ 15cm の堆積を測る。

第 II ④層 - 明オリーブ灰色砂質土 (5GY 7/1) で、調査区南側に層厚 7 ~ 16cm の堆積を測る。

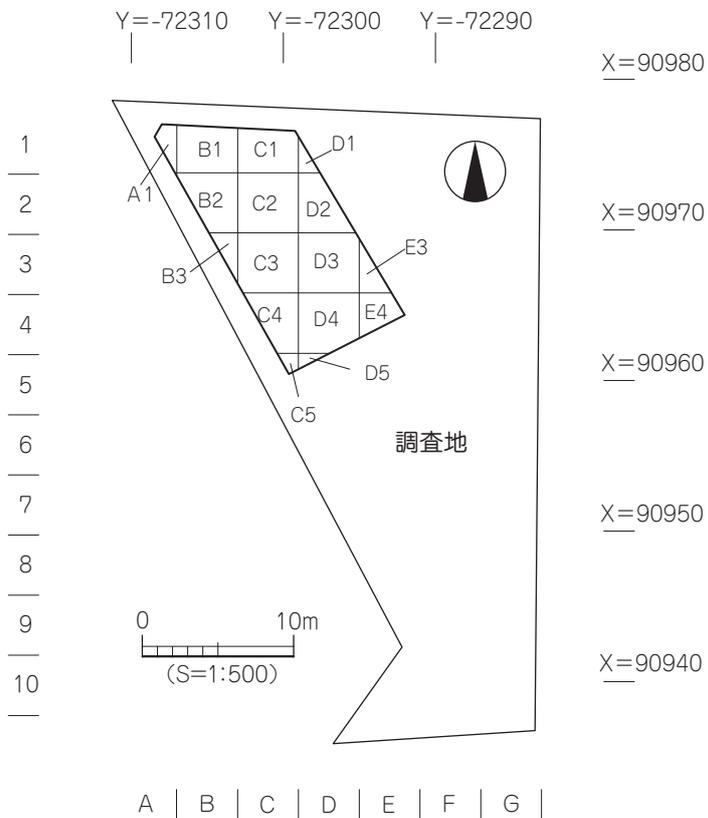
第 II ⑤層 - 灰白色細砂 (10Y 8/1) で、水田を覆う洪水砂であり、部分的に層厚 2 ~ 12cm を測る。

第 II ⑥層 - 黄灰色粘質土 (2.5Y 6/1) で、本層上面が水田層となり、調査区全域に堆積し、層厚 10 ~ 22cm を測る。

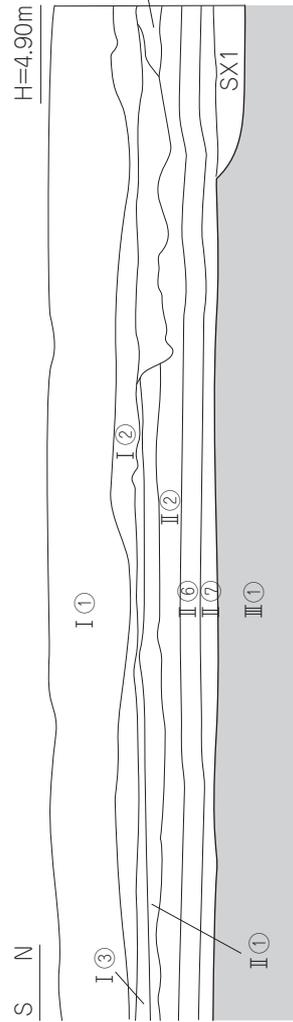
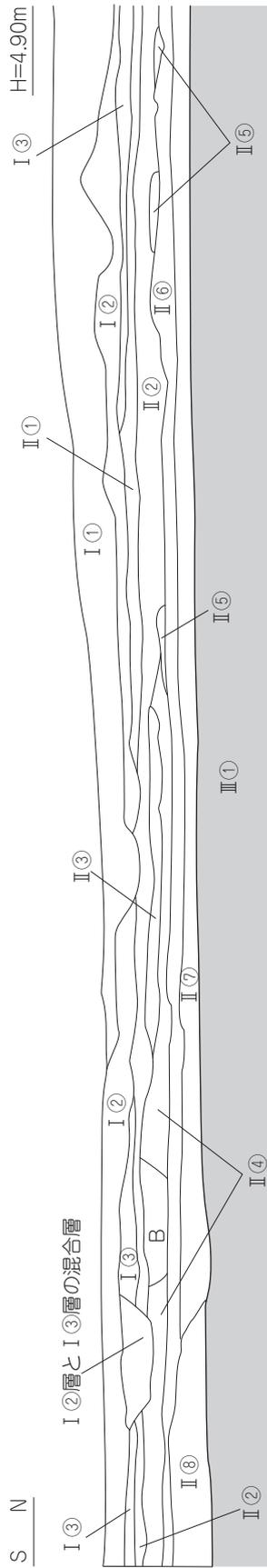
第 II ⑦層 - 褐灰色土 (10YR 5/1) で、鎌倉時代の土師器、須恵器、瓦器片が出土し、層厚 10 ~ 18 cm を測る。

第 III ①層：オリーブ灰色砂質土 (10Y 6/2) で、本層上面が最終の遺構検出面となる。

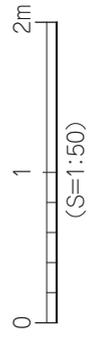
なお、調査にあたり調査地内を 4 m 四方のグリッドに分けた。グリッドは、北から南に向けて 1・2・3・4・5、西から東へ向けて A・B・C・D・E とし、A1・A2・…・E4 区といったグリッド名を付した (第 182 図)。



第 182 図 区割図

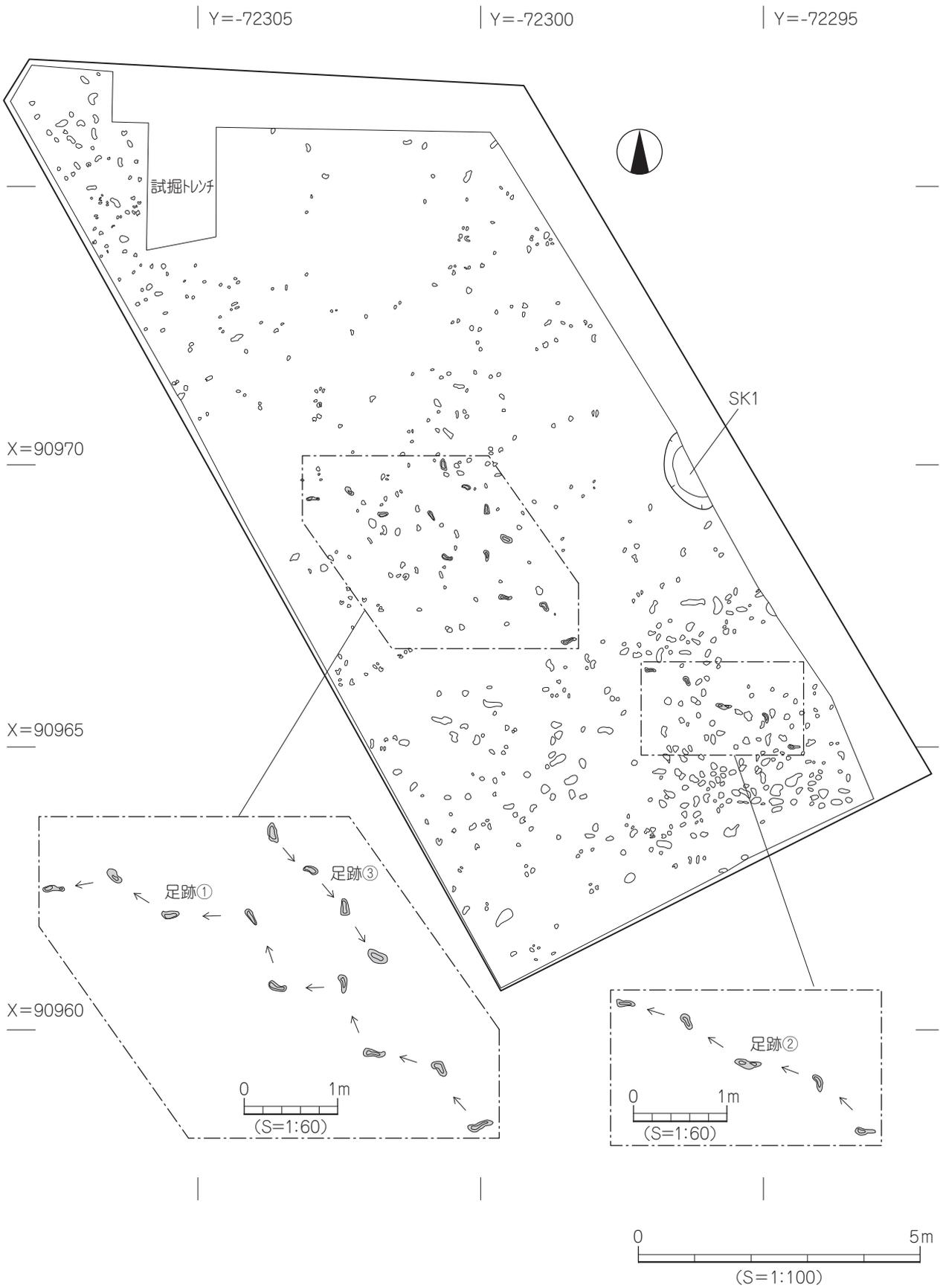


- 層位
- I ① : 造成土
 - I ② : 灰色土 (10Y 4/1)
 - I ③ : 黄橙色土 (10YR 7/8)
 - II ① : 褐灰色土 (10YR 6/1)
 - II ② : I ①層に明オリーブ灰色 (2.5GY 7/1) を帯びる
 - II ③ : 灰白色中粒砂 (N8/0)
 - II ④ : 明オリーブ灰色砂質土 (5GY 7/1)
 - II ⑤ : 灰白色細砂 (10Y 8/1)
 - II ⑥ : 黄灰色粘質土 (2.5Y 6/1)
 - II ⑦ : 褐灰色土 (10YR 5/1)
 - III ① : オリーブ灰色砂質土 (10Y 6/2)
 - A : 灰白色土 (N7/0)
 - B : にぶい褐色土 (7.5YR 5/3)



第 183 図 西壁土層図

東垣生八反地遺跡 3次調査



第 184 図 第 1 面水田址測量図

第3節 遺構と遺物

調査では、第Ⅱ⑥層上面（第1面）にて水田耕作に伴う人や牛の足跡や根株痕、土坑1基を検出し、第Ⅲ層上面（第2面）では、溝1条、柱穴22基、性格不明遺構1基を検出した。遺物は、土師器、須恵器、瓦器、陶磁器などが出土し、遺物収納用箱（14×44×60cm）約1箱分の出土量である。

1. 水田址（第184図・図版41）

調査区全域に堆積する第Ⅱ⑥層上面からは、水田耕作に伴う足跡を検出した。人間や牛の足跡に混じり、根株痕と考えられる痕跡などを検出した。これらの痕跡は覆われた第Ⅱ⑤層の砂層を除去することで形状を確認し、足跡の数は人が45個で平均密度0.39個/m²、牛が53個で0.46個/m²で、根株痕は355個で3.08個/m²であった。なかでも人の足跡は規則性をもつものが見られ、南東から北西方向に歩く足跡①②と北西から南東方向に歩く足跡③が見られ、足跡①は検出長4.2m、足跡の検出長は24～27cm、歩幅49～70cm、右足と左足の開き具合は南から北へ広がり10～35cmを測り、N-54°-Wを指向する。足跡②は検出長3.1m、足跡の検出長は18～27cm、歩幅51～55cmを測り、右足と左足の開きが殆どなく、N-38°-Wを指向する。足跡③は検出長3m、足跡のサイズが推定16～24cm、歩幅38～43cmを測り、右足と左足の開きが殆どなく、N-62°-Wを指向する。水田面の範囲は南北15m以上、東西15m以上の広がりをもつことを確認したが、畦畔や水路などの施設は未確認であった。遺物は、土師器の小片が僅かに出土した。

時期：検出層位や出土遺物から、室町時代の水田址と考えられる。

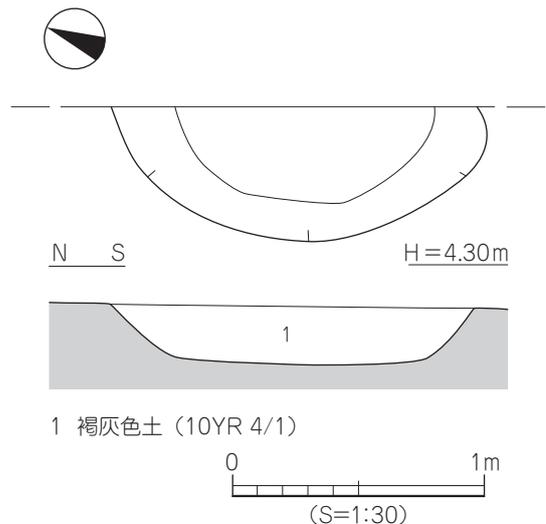
2. 土坑

第Ⅱ⑥層上面において、土坑1基を検出した。

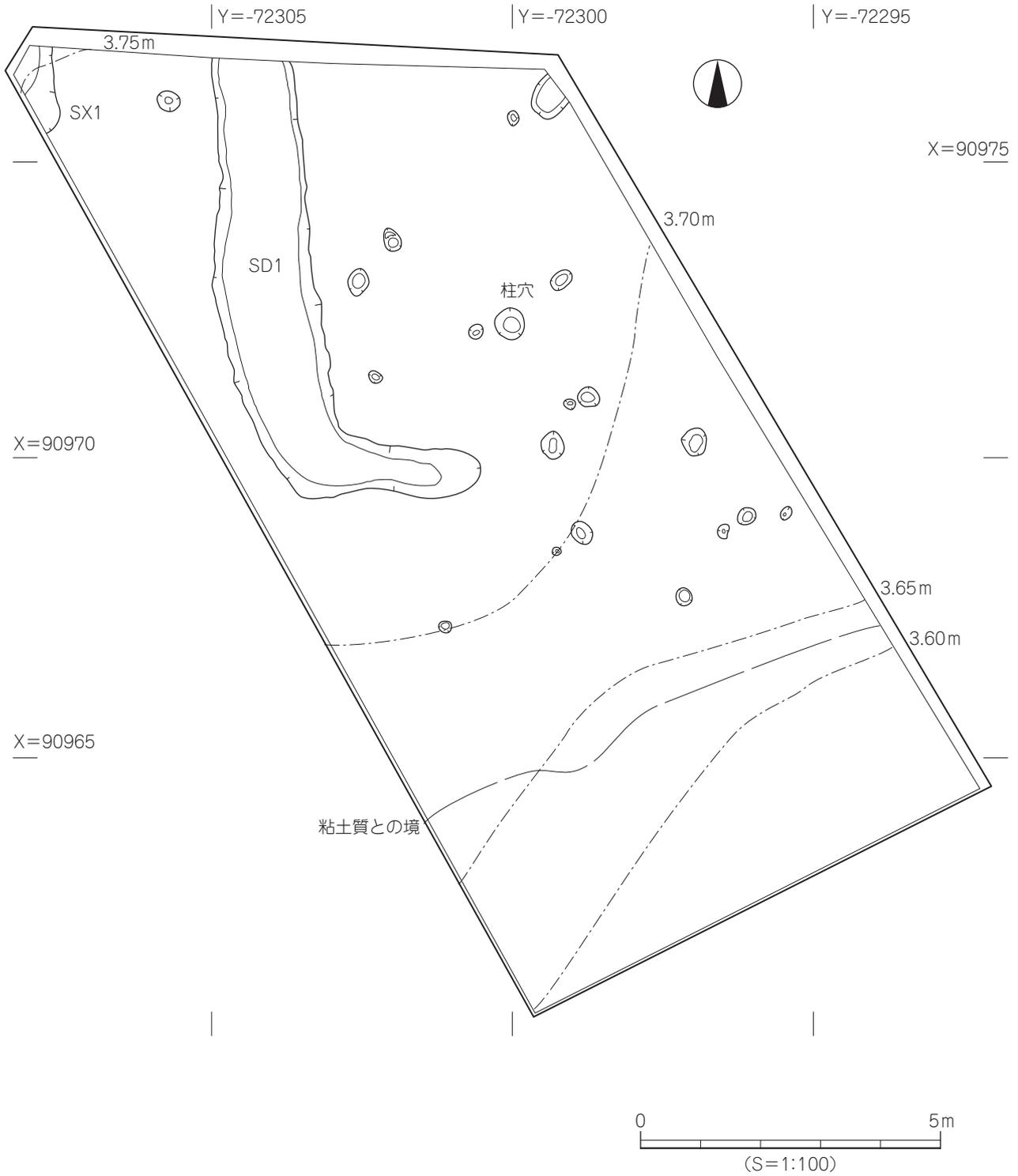
SK1（第185図）

調査区中央部東端D2～3区に位置する。第Ⅲ層上面にて検出し、東側は調査区外に延びる。残存状況から平面形態は楕円形を想定し、断面形態は逆台形状を呈する。規模は南北1.45m、東西0.52m以上、深さ23cmを測る。埋土は、褐灰色土（10YR 4/1）の単一層である。出土遺物はない。

時期：出土遺物はないが、水田址を切ることから室町時代以降と考えられる。



第185図 SK1 測量図



第 186 図 第 2 面遺構配置図

3. 溝

第Ⅲ層上面において、溝1条を検出した。

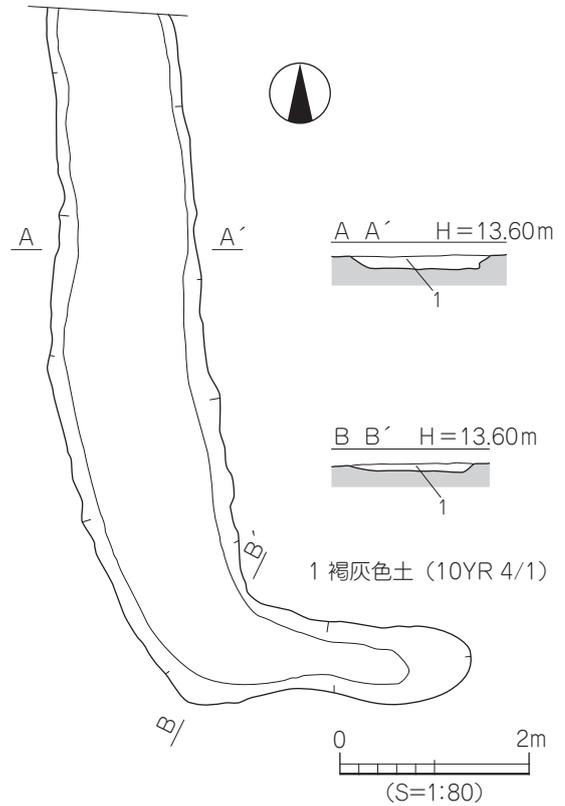
SD1 (第187図)

調査区北部B1～C3区に位置する。南北方向の溝でN-7°-Wを指向し、北端は調査区外に延び、南端は東方向に屈曲する。断面形状は皿状を呈しており、規模は検出長9.49m、最大幅0.75～1.70m、深さ15cmを測り、溝床は南から北へ3cmの比高差をもつ。埋土は、褐灰色土(10YR 4/1)の単一層である。遺物は上位から溝床にかけて、土師器や須恵器、瓦器、陶器、磁器片が出土した。

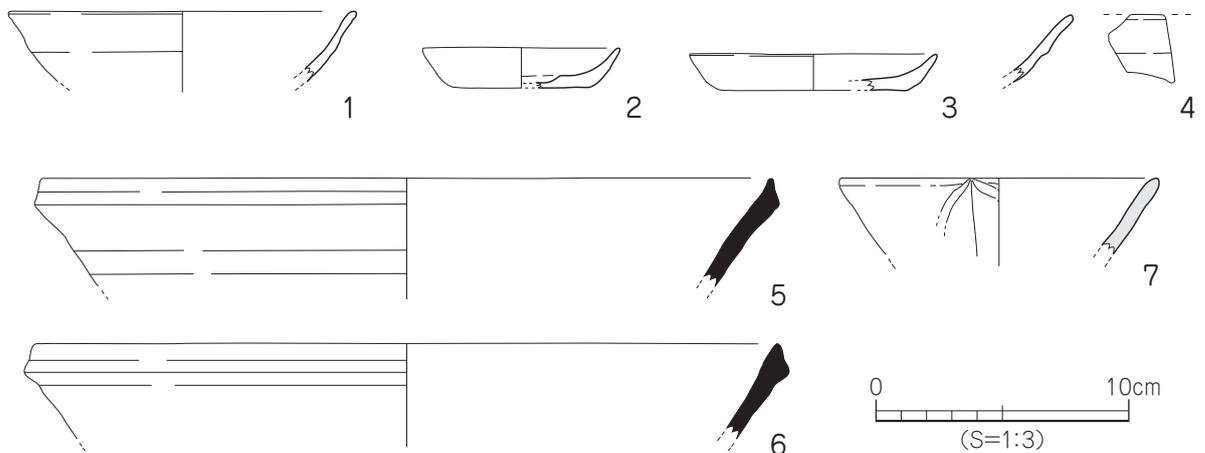
出土遺物 (第188図・図版42)

1は土師器椀で、内傾する胴部に口縁端部は僅かに外反し、内外面にナデ調整が施される。2・3は土師器皿で、平底の底部からやや内傾して立ち上がる。底部には回転糸切り痕が残る。4は瓦器椀で、内湾気味に立ち上がり、内外面にはナデ調整が施される。5・6は須恵器のこね鉢で、口縁端部が断面三角形状を呈する。7は青磁碗で、外面に鑄ぎによる蓮弁文が施される。

時期：出土した土師器の特徴から、13世紀代と考えられる。



第187図 SD1 測量図



第188図 SD1 出土遺物実測図

4. 性格不明遺構

第Ⅲ層上面において、性格不明遺構 1 基を検出した。

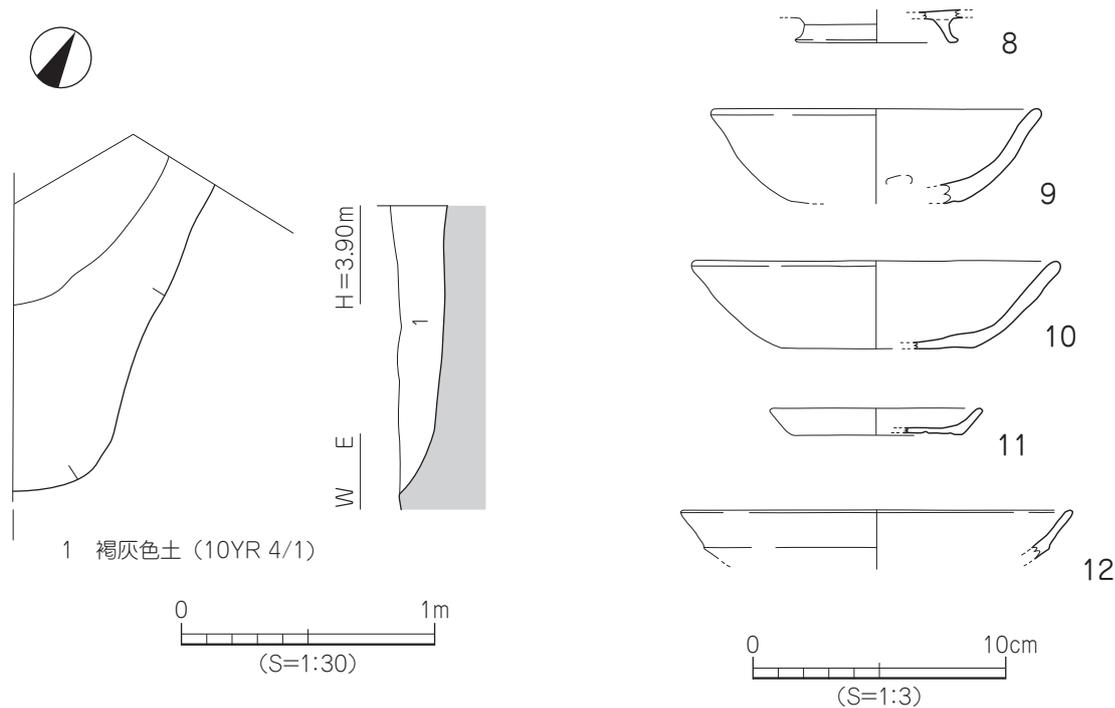
SX1 (第 189 図)

調査区西北角部の A1 区に位置し、西側は調査区外に延びる。平面形状の全容は不明であるが、東肩は南北方向に直線的に延びており、南側には隅丸部をもち断面形態は逆台形状を呈する。残存規模は南北長 1.46m 以上、東西長 0.7m 以上、深さ 21cm を測る。埋土は、褐灰色土 (10YR 4/1) の単一層である。遺物は、土師器片や瓦器が少量出土した。

出土遺物 (第 189 図・図版 42)

8 は土師器碗の底部である。外踏張りの貼り付け高台を持つ。9・10 は土師器坏である。9 は内湾する胴部に口縁端部はやや外反する。10 は平底の底部から内傾気味に立ち上がり、内外面は煤ける。底部に回転糸切り痕が残る。11 は土師器皿で、平底の底部から外傾して立ち上がり、内外面はナデ調整が施され、底部に回転糸切り痕が残る。12 は瓦器碗で内傾気味の口縁部に内外面はナデ調整が施される。

時期：出土した土師器の特徴から、13 世紀頃と考えられる。



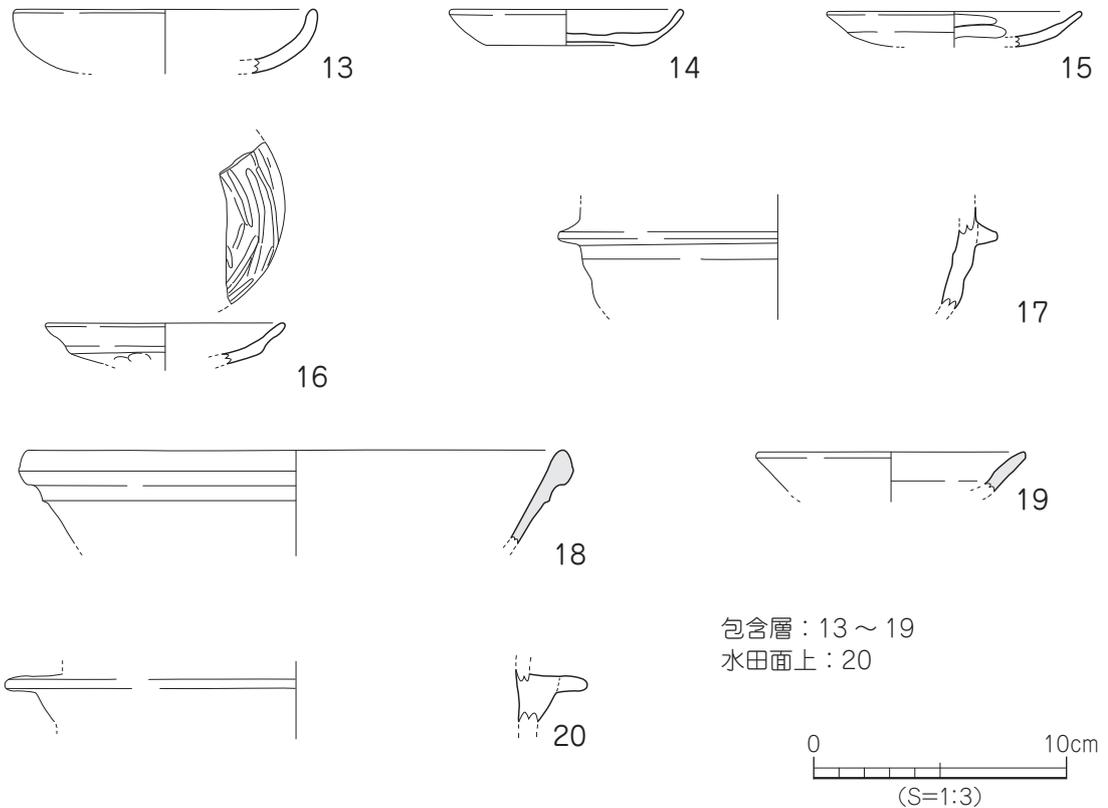
第 189 図 SX1 測量図・出土遺物実測図

(3) 柱穴状遺構

調査では、22 基の柱穴を検出した。平面形態は円形～楕円形を呈しており、規模は直径 14～57cm、深さ 4～24cm を測る。埋土は全て褐灰色土 (10YR 4/1) で、一部の柱穴内からは土師器、須恵器、瓦器、陶磁器の小片が僅かに出土した。

5. その他の出土遺物（第190図・図版42）

13～19は包含層から出土した。13は椀で内湾した胴部をもつ。14は土師器皿で、平底の底部から内湾気味に立ち上がり、底部は回転糸切り痕が残る。15・16は瓦器皿で、内面に圈線状のヘラミガキが施される。17は瓦質の釜で、口縁端部より下方に断面台形状の鏝をもち内面にナデ調整、外面に横ナデ調整が施される。18は磁器の鉢で、口縁端部が玉縁状を呈する。19は磁器の皿で、内外面に施釉が施され、内面に稜をもつ。20は、水田面上から出土した羽釜である。口縁部付近の鏝を境に、胴部は厚く、内外面にナデ調整が施される。



第190図 包含層・水田面上出土遺物実測図

第4節 小 結

本調査では、鎌倉時代から室町時代にかけての遺構や遺物を確認した。調査では第1面にて水田址や土坑、第2面からは溝、柱穴、性格不明遺構などの集落遺構を検出した。

第1面の水田址は室町時代のもので、水田面は洪水砂に薄く覆われており、洪水により水田を放棄したものと考えられる。この水田址は本調査地近隣の南東から北西方向に位置する余戸柳井田遺跡1～5次調査や東垣生八反地遺跡1・2次調査においてもほぼ同レベルで検出されていることから、室町時代には周辺一帯が生産域として土地利用されたことが窺える。また、水田面には根株痕や牛の足跡に混じり、人の足跡を検出した。足跡は規則性をもつものが3パターンあり、南東方向から北西方向に歩く足跡①は、足跡のサイズや歩幅などから成人男性、足跡②や足跡③は女性か子供が推測される。第2面の地形は北西から南東方向に緩傾斜しており、この面で鎌倉時代の集落遺構を検出した。溝SD1は南北方向から南端は東方向へ直角に屈曲しており、北に隣接する東垣生八反地遺跡1次調査検出の溝SD1につながる。溝の規模や形状などから、集落内で建物を区画する溝と考えられる。また、柱穴の殆どはSD1の東南部に集中しており、調査区外に存在する掘立柱建物を構成する柱穴の可能性をもつ。性格不明遺構SX1は一部だけの検出で全容は不明であるが、その形状から溝の一部と推測され、北隣の同1次調査SD3が延びる可能性をもつ。

調査区南端の地形が低い部分では、第2面の遺構を検出する砂質土層から粘土層に変化しており、その上面には砂層の堆積を検出した。このエリアは、第2面の鎌倉時代から第1面の室町時代の間において北東方向から南西方向を西流する自然流路の北岸部分と推定され、その南岸は余戸柳井田遺跡6次調査において検出しており、流路幅は約25mと推測する。両岸は緩傾斜していることから緩やかな流れをもつ自然流路である。

以上のことから、調査地は鎌倉時代に集落跡として土地利用されており、室町時代になると耕作地として生産活動が行われていたことが分かり、重信川下流域の沖積低地における集落構造を解明する上で貴重な資料となるものである。

遺構一覧・遺物観察表 - 凡例 -

以下の表は、本調査地検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。

(1) 遺構一覧表

地区欄	グリッド名を記載。
規模欄	()：現存検出長を示す。
出土遺物欄	出土遺物の略記について 土→土師器、須→須恵器、瓦→瓦器、陶→陶器、磁→磁器

(2) 遺物観察表

法量欄	()：復元推定値
調整欄	土器の各部位名称を略記した。 例) ㊦→底部
胎土欄	胎土欄は混和剤を略記した。 例) 石→石英、長→長石、金→金ウンモ ()の中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。 例) 石・長(1～4) → 「1～4mm大の石英・長石を含む」である。
焼成欄	焼成欄の略記について ◎→良好、○→良

遺物観察表

表 113 土坑一覧

土坑 (SK)	地区	平面形	断面形	規模 長径×短径×深さ (m)	埋土	出土遺物	時期	備考
1	D2～3	楕円形	逆台形状	1.45 × (0.52) × 0.23	褐灰色土 (10YR4/1)	なし	室町時代以降	東側は調査区外に延びる。

表 114 溝一覧

溝 (SD)	地区	断面形	規模 長さ×幅×深さ (m)	埋土	出土遺物	時期	備考
1	B1～C3	皿状	9.49 × 0.75～1.70 × 0.15	褐灰色土 (10YR4/1)	土・須・瓦陶・磁	13世紀代	北端は調査区外に延びる。

表 115 性格不明遺構一覧

性格不明遺構 (SX)	地区	平面形	断面形	規模 長径×短径×深さ (m)	埋土	出土遺物	時期	備考
1	A1	不明	逆台形状	(1.46) × (0.7) × 0.21	褐灰色土 (10YR4/1)	土・瓦	13世紀頃	西側は調査区外に延びる。

表 116 SD1 出土遺物観察表 (土製品)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面/内面)	胎土焼成	備考	図版
				外面	内面				
1	椀	口径 (13.5) 残高 2.8	内傾する胴部に口縁端部は僅かに外反する。	ナデ	ナデ	浅黄橙色 灰白色	石・長 (1) ◎		
2	皿	口径 (7.8) 残高 1.6	平底の底部からやや内傾して立ち上がる。	マメツ ◎回転糸切り	マメツ	浅黄橙色 浅黄橙色	砂粒 ◎		
3	皿	口径 (9.6) 残高 1.5	平底の底部からやや内傾して立ち上がる。	マメツ ◎回転糸切り	マメツ	灰白色 灰白色	砂粒 ◎		
4	椀	残高 2.7	内傾気味に立ち上がる。(瓦器)	ナデ	ナデ	灰色 灰色	長 (1～2) ◎		
5	こね鉢	口径 (28.6) 残高 4.3	口縁端部が断面三角形状を呈する。(須恵器)	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	石 (3) 少含 ◎		42
6	こね鉢	口径 (29.2) 残高 3.8	口縁端部が断面三角形状を呈する。(須恵器)	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	砂粒 ◎		42
7	碗	口径 (12.4) 残高 3.0	外面に錆ぎによる蓮弁文が施される。(青磁)	回転ナデ	回転ナデ	緑灰色 緑灰色	密 ◎	施釉	42

表 117 SX1 出土遺物観察表 (土製品)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面/内面)	胎土焼成	備考	図版
				外面	内面				
8	椀	底径 (6.2) 残高 1.3	外踏ん張りの貼り付け高台。	ヨコナデ	ナデ	灰白色 灰白色	長 (1～2) ◎		
9	坏	口径 (12.8) 残高 3.7	内湾する胴部に口縁端部はやや外反する。	マメツ	マメツ (指頭痕)	灰白色 灰白色	砂粒 ◎		42
10	坏	口径 (14.2) 残高 3.5	平底の底部から内傾気味に立ち上がる。内外面は煤ける。	ヨコナデ ◎回転糸切り	ヨコナデ	灰白・暗灰黄色 暗灰黄色	砂粒 ◎	煤附着	42
11	皿	口径 (8.1) 底径 (6.7) 器高 1.1	平底の底部から外傾して立ち上がる。	ナデ ◎回転糸切り	ナデ	浅黄橙色 橙色	石・長 (1～2) ◎		
12	椀	口径 (15.2) 残高 1.9	内傾気味の口縁部。(瓦器)	ナデ	ナデ	灰白色 灰色	密 ◎		

東垣生八反地遺跡 3次調査

表 118 包含層・水田面上出土遺物観察表 (土製品)

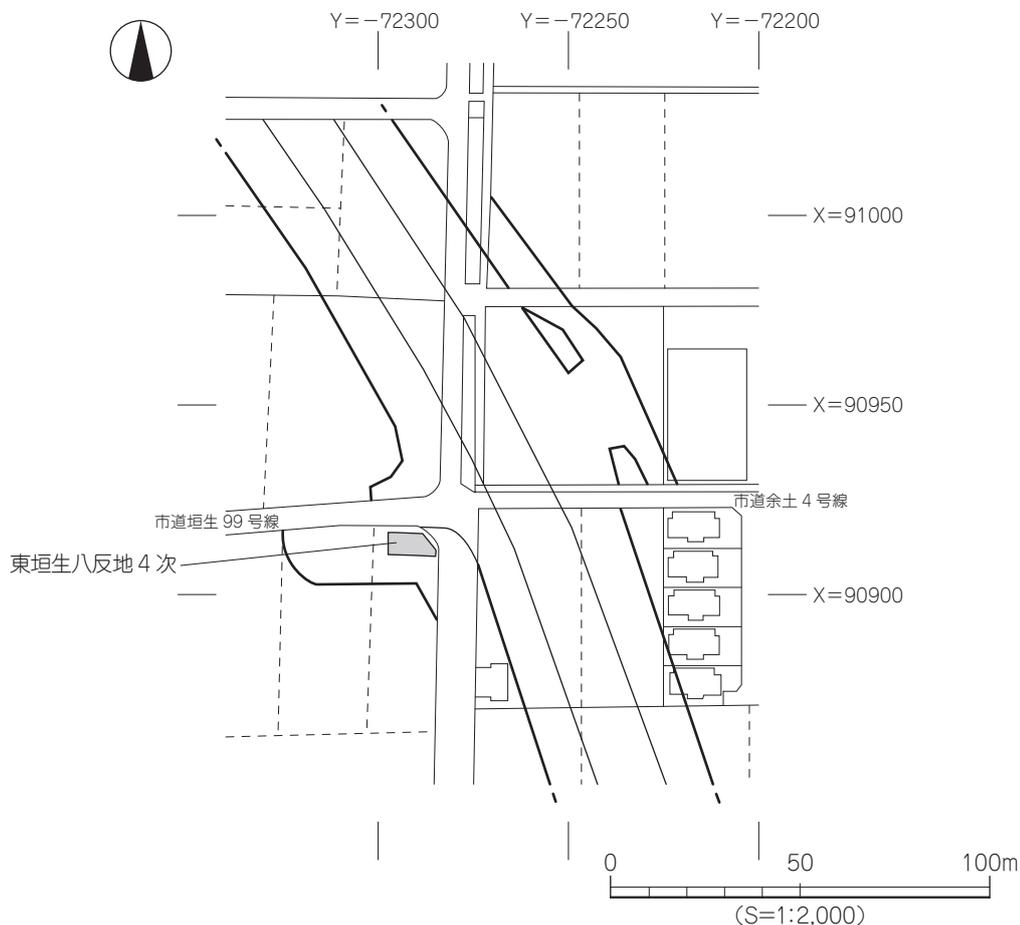
番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
13	椀	口径 (11.8) 残高 2.6	内湾する胴部。	マメツ	マメツ	灰白色 淡黄色	長 (1) 少含 ○		
14	皿	口径 (8.9) 底径 (6.4) 器高 1.4	平底の底部から内傾気味に立ち上がる。	ナデ ⊗回転糸切り	ナデ	灰白色 灰白色	石・長 (1~2) ◎		42
15	皿	口径 (9.9) 残高 1.4	内面に圈線状の暗文が施される。(瓦器)	ナデ	ミガキ (暗文)	灰色 灰色	密 ◎		
16	皿	口径 (9.4) 残高 1.6	内面に圈線状の暗文が施される。(瓦器)	ヨコナデ (指頭痕)	ミガキ (暗文)	灰色 灰色	密 ◎		
17	釜	残高 4.1	口縁端部よりやや下方に断面台形状の鐙をもつ。(瓦質)	ヨコナデ	ナデ	灰色・灰白色 灰白色	石・長 (1~2) ◎		42
18	鉢	口径 (21.0) 残高 3.7	口縁端部が玉縁状。内外面に施釉が施される。(磁器)	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎	施釉	42
19	皿	口径 (10.4) 残高 1.6	内外面に施釉が施され、内面に稜をもつ。(磁器)	回転ナデ	回転ナデ	オリーブ黄色 オリーブ黄色	密 ◎	施釉	42
20	羽釜	残高 2.1	鐙を境に口縁部に比べ胴部は厚い。	ナデ	ナデ	橙色 橙色	石・長 (1~3) ◎		42

第13章 東垣生八反地遺跡4次調査

第1節 調査の経緯

東垣生八反地遺跡4次調査は、松山市東垣生町816番4を調査対象地とし、調査面積は約177㎡である。調査地は、東垣生八反地遺跡の南方に位置する。事前に実施した試掘調査の結果、遺構面が2面存在することが明らかになっている。調査期間は平成28年10月24日から同年11月29日である。以下、調査工程を略記する。

平成28年10月24日、調査事務所の建て上げと発掘機材等の搬入、及び調査地内の安全対策用にフェンスや杭等を設置する。10月25日より重機を使用して、表土の掘削作業を開始する。地表下50cmの地点にて遺構を発見したことから、以後、作業員による遺構検出作業を進める。検出した遺構は、水田耕作に伴う足跡である。11月2日より、足跡の掘り下げや測量作業を行う。11月4日、足跡の調査が終了し、11月10日には再度、重機を使用して水田層の掘削を行う。11月11日、標高3.6mの地点にて遺構を検出する。検出した遺構は、溝や土坑、柱穴である。11月15日より、遺構の掘り下げ及び測量作業を開始する。11月24日、高所作業車を使用して、遺構完掘状況写真を撮影する。11月26日、午前中に一般市民を対象とする現地説明会を開催し、156名の参加者を得た。午後からは検出した井戸址の調査を進める。11月28日、井戸址の調査が終了し、午後から重機を使用して埋め戻し作業を行う。11月29日、調査事務所の撤去と発掘機材の搬出を行い、発掘調査を終了する。



第191図 調査地位置図

第2節 層位 (第192図)

調査地は、調査以前は水田として利用されていた。現況の標高は、4.4 m前後である。調査で確認した土層は、以下の10層である。なお、第2章で説明した基本層位のうち、本調査では第Ⅰ層、第Ⅱ層及び第Ⅲ層を検出した。

第Ⅰ層：近現代の水田耕作に伴う耕土で、土色・土質の違いにより4種類に分層される。

第Ⅰ①層－耕作土〔灰色土 (N4/)〕で、層厚は8～20cmである。

第Ⅰ②層－旧耕作土〔明緑灰色土 (10GY 7/1)〕で、層厚は2～15cmである。

第Ⅰ③層－床土〔橙色土 (7.5YR 6/8)〕で、層厚は3～8cmである。

第Ⅰ④層－にぶい黄色土 (2.5Y 6/4) で、層厚は10～15cmである。

第Ⅱ層：中世段階の土壌で、土色・土質の違いにより4種類に分層される。

第Ⅱ①層－灰色砂 (5Y 6/1) で、層厚は10～20cmである。本層が、調査で検出した足跡を覆う土壌であり、足跡埋土である。本層中からは、土師器細片が数点出土した。

第Ⅱ②層－灰色粘質土 (5Y 5/1) で調査区全域にみられ、層厚は12～20cmである。本層が、調査で検出した水田層である。本層上面にて、足跡を多数検出した。

第Ⅱ③層－黒褐色土 (10YR 3/1) で調査区全域にみられ、層厚は3～20cmである。本層中からは、中世の土師器や須恵器、瓦器等の破片が出土した。

第Ⅱ④層－黄灰色土 (2.5Y 4/1) で調査区北東部にみられ、層厚は5～10cmである。本層中からは、古代から中世の土師器や須恵器、瓦器等の破片が少量出土した。

第Ⅲ層：土色・土質の違いにより、2種類に分層される。

第Ⅲ①層－灰オリーブ色土 (7.5Y 6/2) で調査区全域にみられ、層厚は10cm以上である。本層上面が、調査における最終遺構検出面である。

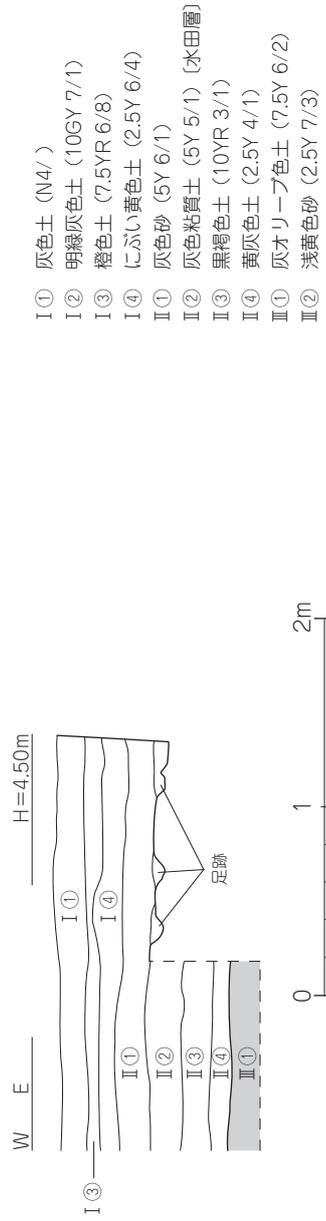
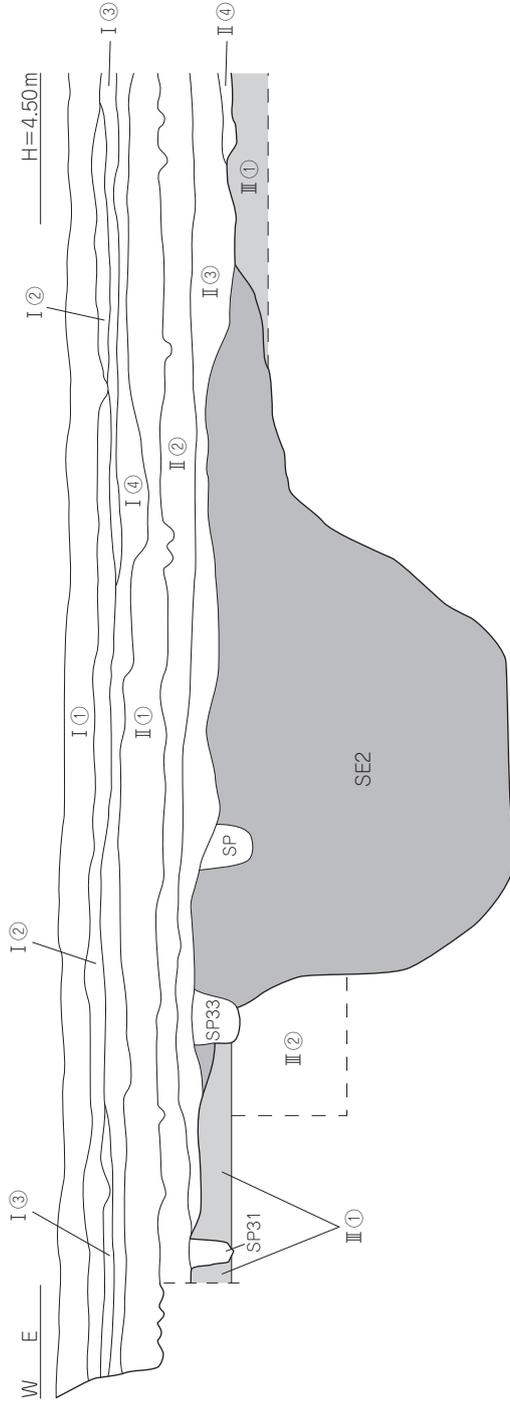
第Ⅲ②層－浅黄色砂 (2.5Y 7/3) で、井戸址の壁面にて検出した。ただし、本層下にも本層とは異なった土層が認められたが、井戸址掘り下げ時は湧水が激しく、井戸枠である曲物を取り上げ後は壁面の崩落があり、本層以下の土層図を作成するには至らなかった。

調査にあたり、調査区内を3m四方のグリッドに分けた。グリッドは北から南へA・B・C・D、東から西へ1・2・3・4・5とし、A1・A2・……・D5区といったグリッド名を付した。グリッドは、遺構の位置表示や遺物の取り上げ等に利用した。本調査の座標値は、X=90910～90916、Y=-72285～-72298である。

第3節 遺構と遺物

東垣生八反地遺跡4次調査では、溝5条、土坑2基、井戸址2基、柱穴57基のほか、水田耕作に伴う多数の足跡を検出した。足跡は第Ⅱ②層上面、その他の遺構は全て第Ⅲ①層上面での検出である。

遺物は遺構内や第Ⅱ③層及び第Ⅱ④層中より、土師器や須恵器、瓦質土器、陶磁器のほかに木器、種子等が出土した。なお、遺物の出土量は収納箱 (44×60×14cm) 約3箱分である。ここでは、検出した遺構ごとに説明する。



- I ① 灰色土 (N4/)
- I ② 明緑灰色土 (10GY 7/1)
- I ③ 橙色土 (7.5YR 6/8)
- I ④ こぶい黄色土 (2.5Y 6/4)
- II ① 灰色砂 (5Y 6/1)
- II ② 灰色粘質土 (5Y 5/1) [水田層]
- II ③ 黒褐色土 (10YR 3/1)
- II ④ 黄灰色土 (2.5Y 4/1)
- III ① 灰オリーブ色土 (7.5Y 6/2)
- III ② 浅黄色砂 (2.5Y 7/3)

第 192 図 北壁土層図

1. 水田址 (第 193 図)

第Ⅱ②層上面からは、水田耕作に伴う足跡を検出した。足跡総数は 70 個であり、このうち牛の足跡は 48 個を確認した。なお、畦畔や水路等の施設は検出されなかった。足跡規模は径 5～8cm、深さ 1～4cm であり、足跡は第Ⅱ①層と同様の灰色砂 (5Y 6/1) で埋没しているが、明赤褐色砂 (5YR 5/6) が少量混入する土壌で埋没している足跡もみられた。足跡の進行方向からは、真北を指向する水田区画が想定される。なお、水田層である第Ⅱ②層は、足跡の検出状況や層位などから、調査地周辺に所在する東垣生八反地遺跡 1～3 次調査や余戸柳井田遺跡で検出した水田層と同一の土壌と考えられる。足跡及び足跡を覆う第Ⅱ①層中からは、室町時代の遺物が数点出土したが、図化しうるものはない。

時期：時期特定は難しいが、概ね室町時代の水田址と考えられる。

2. 溝

溝は 5 条を確認したが、すべて第Ⅲ①層上面での検出である。

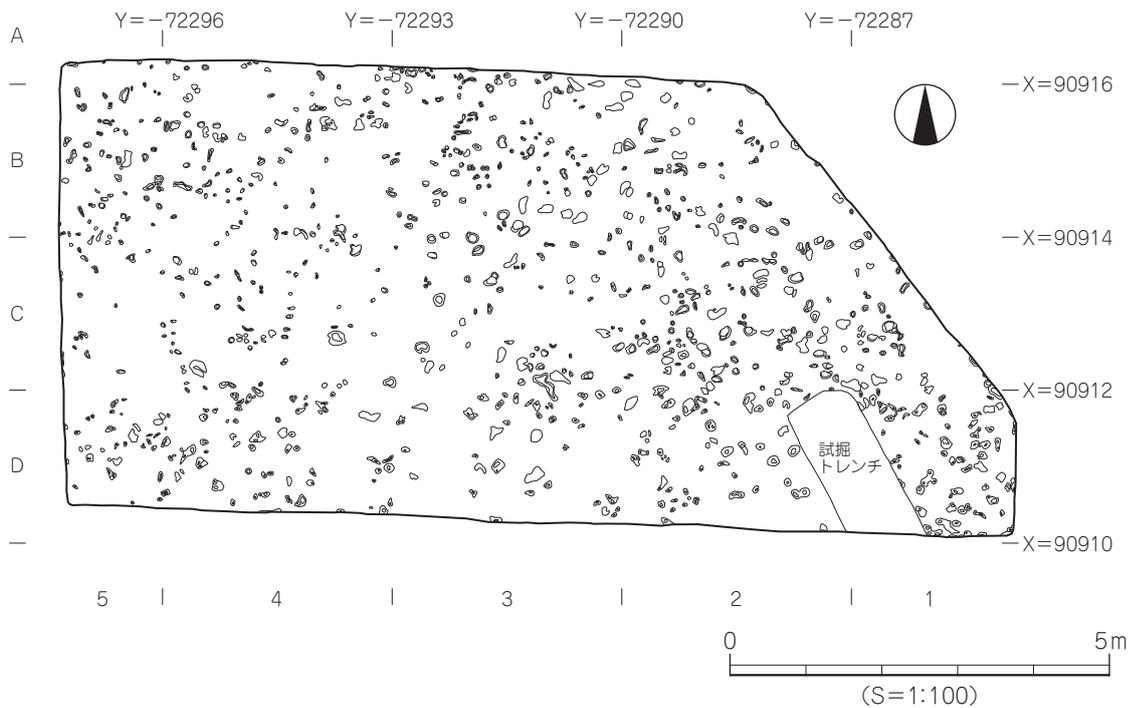
SD1 (第 195 図)

調査区中央部東寄り C3 区で検出した溝で、溝北側は井戸 SE1 に削平され、南側は消失している。規模は検出長 1.50m、幅 0.10～0.42m、深さは 4～8cm である。断面形態はレンズ状をなし、埋土は灰色土 (5Y 5/1) 単層である。溝基底面には凹凸がなく、平坦である。溝内からは、瓦器碗の破片が数点出土した。

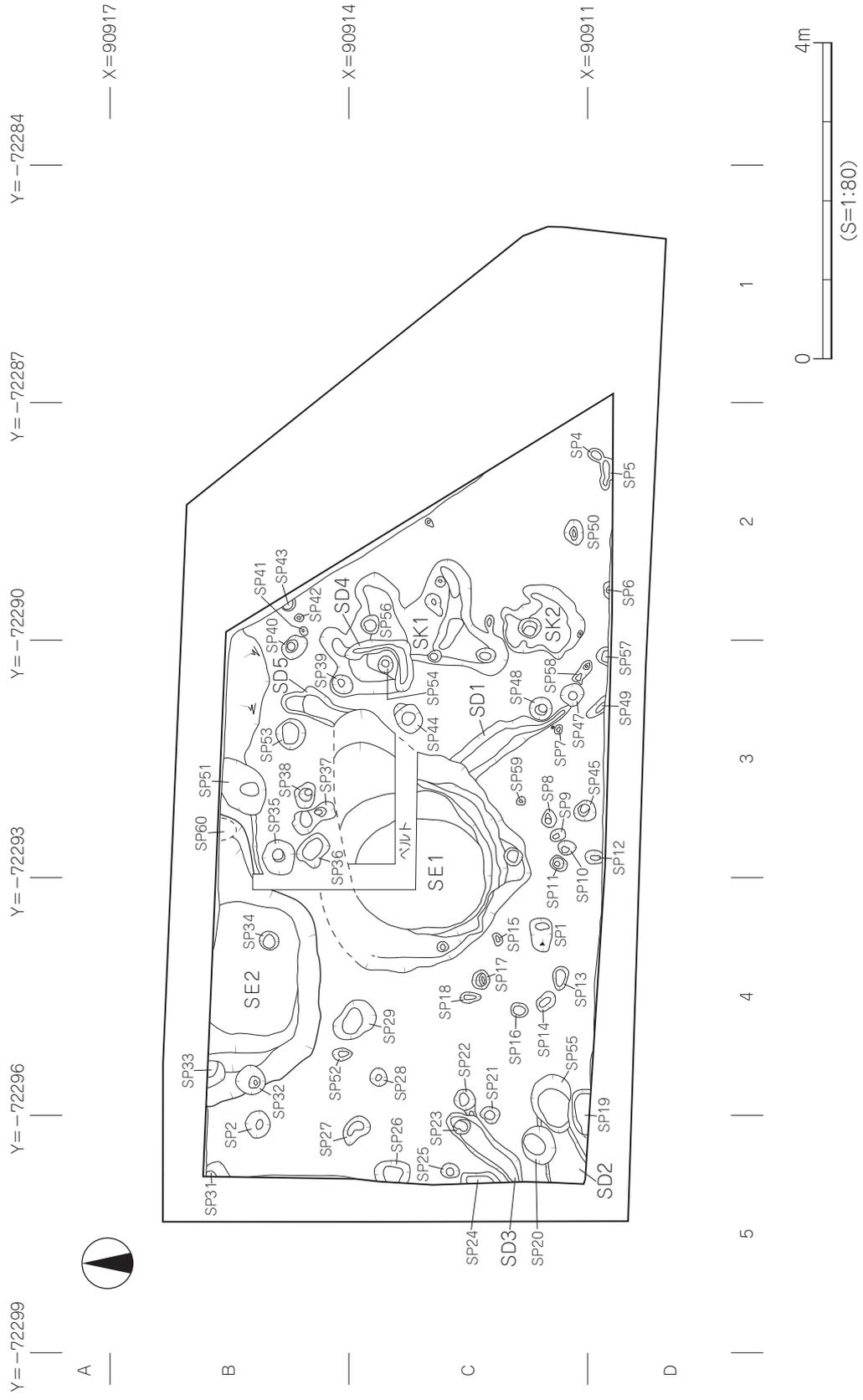
出土遺物 (第 196 図)

1 は瓦器碗の底部片。断面三角形の高台を貼り付け、内面には平行線状の暗文を施す。

時期：出土遺物の特徴と SE1 に先行することから鎌倉時代、13 世紀前半の溝と考えられる。



第 193 図 足跡検出状況図〔第Ⅱ②層上面〕



第194図 遺構配置図〔第Ⅲ①層上面〕

SD2 (第 195 図)

調査区南西隅 C5 区で検出した短い溝で、2 基の柱穴 (SP20・55) により一部削平されている。規模は検出長 0.65m、幅 0.30 ~ 0.53m、深さは 4cm である。断面形態は皿状をなし、埋土は暗灰色土 (N3/) 単層である。溝基底面には凹凸がなく、平坦である。溝内からは、瓦器椀の破片が数点出土した。

出土遺物 (第 196 図)

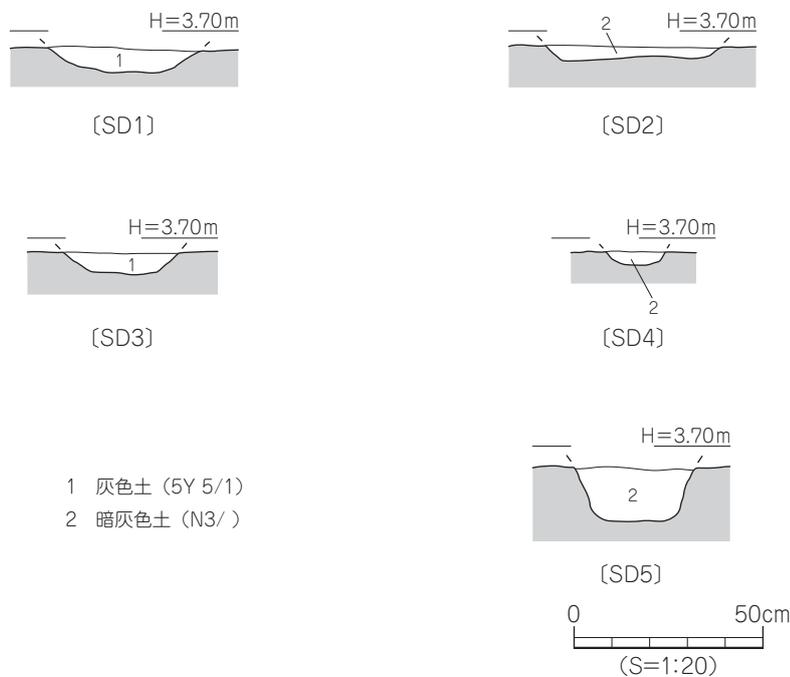
2 は和泉型瓦器椀。口縁部は僅かに外反し、断面三角形状の高台を貼り付ける。体底部内面には、平行線状の暗文を施す。

時期：出土遺物の特徴と SP20 から 13 世紀前半に時期比定される遺物が出土しており、概ね鎌倉時代、13 世紀前半以前の溝と考えられる。

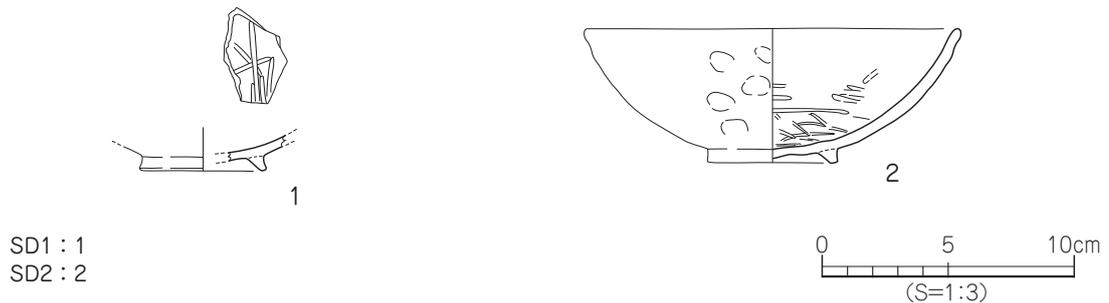
SD3 (第 195 図)

調査区南西部 C4・5 区で検出した北東 - 南西方向の溝で、溝北端は柱穴 SP23 に削平され、南側は調査区外に続く。規模は検出長 1.15m、幅 0.30 ~ 0.35m、深さは 6cm である。断面形態は基底面中央部が凹む舟底状をなし、埋土は SD1 と同様の灰色土 (5Y 5/1) 単層である。溝基底面には凹凸はないが、北側から南側へ向けて緩傾斜をなす (比高差 3cm)。溝内からは、遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は難しいが、埋土が SD1 と酷似することや検出層位から、概ね鎌倉時代の溝と考えられる。



第 195 図 SD1 ~ 5 断面図



第 196 図 SD1・2 出土遺物実測図

SD4 (第 195 図)

調査区中央部 B・C3 区で検出した「L」字状に折れ曲がる溝で、土坑 SK1 より後出する。規模は検出長 1.39m、幅 0.15～0.22m、深さは 4cm である。断面形態は皿状をなし、埋土は暗灰色土 (N3/) 単層である。溝基底面には凹凸はなく、平坦である。溝からは、遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は難しいが、SK1 (鎌倉時代) より後出することから、概ね鎌倉時代以降の溝とする。

SD5 (第 195 図)

調査区中央部北東寄り B・C3 区で検出した短い溝で、溝南側は井戸 SE1 に削平され、北側は消失している。規模は検出長 0.75m、幅 0.25～0.35m、深さは 11～15cm である。断面形態はレンズ状をなし、埋土は暗灰色土 (N3/) 単層である。溝基底面には凹凸はなく、平坦である。溝からは、遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は難しいが、SE1 (鎌倉時代) に先行することから、概ね鎌倉時代以前の溝とする。

3. 土 坑

土坑は 2 基を検出した。両者ともに、第Ⅲ①層上面での検出である。

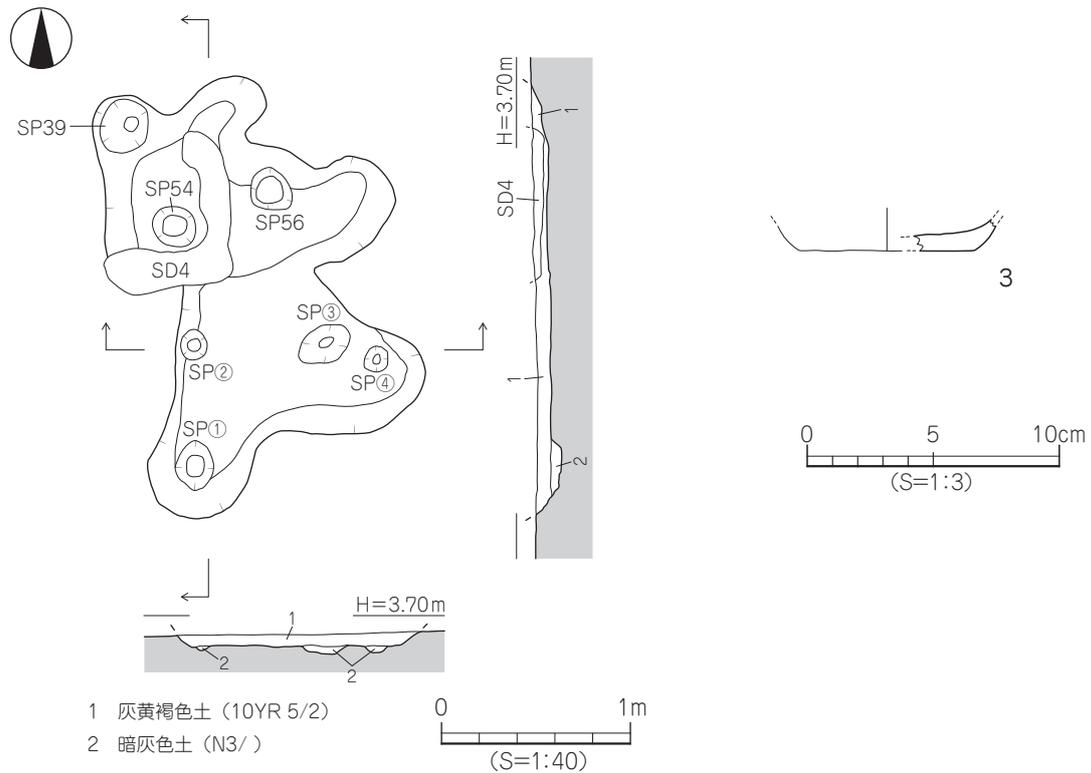
SK1 (第 197 図)

調査区中央部東寄り B2～C3 区で検出した土坑で、溝 SD4 に一部削平されている。平面形態は不整形で、規模は南北長 2.35m、東西長 1.52m、深さは 6cm である。断面形態は浅い逆台形状をなし、埋土は灰黄褐色土 (10YR 5/2) 単層であるが、少量の炭化物や焼土が含まれている。土坑基底面には凹凸がみられ、基底面にて 4 基の柱穴を検出した。柱穴掘り方埋土は、暗灰色土 (N3/) である。遺物は、土坑埋土中より土師器片が数点出土した。

出土遺物

3 は土師器坏。小片で、底部外面には回転糸切り痕が残る。色調は橙色で、胎土中には赤色酸化土粒が少量含まれている。

時期：出土遺物の特徴より、概ね鎌倉時代の土坑とする。

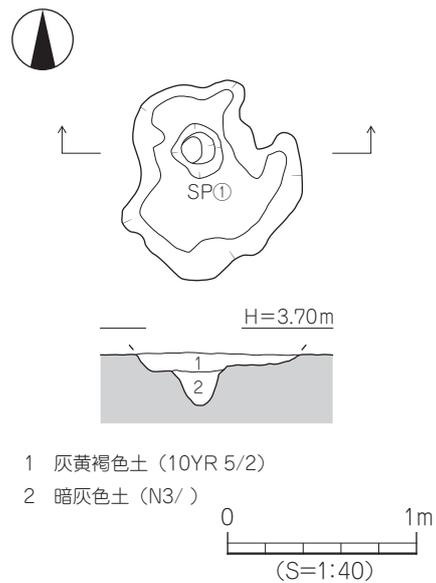


第 197 図 SK1 測量図・出土遺物実測図

SK2 (第 198 図)

調査区南東部 C2～D3 区で検出した土坑で、平面形態は不整の楕円形をなし、規模は長径 1.03m、短径 0.83m、深さは 6cm である。断面形態は浅い逆台形状をなし、埋土は灰黄褐色土 (10YR 5/2) 単層であるが、少量の炭化物が含まれている。土坑基底面は平坦で、基底面にて柱穴 1 基を検出した。柱穴掘り方埋土は、暗灰色土 (N3/) である。遺物は土坑埋土中より土師器片が数点出土したが、図化しうるものはない。

時期：時期特定しうる遺物はないが、埋土が SK1 と酷似することから、概ね鎌倉時代の土坑とする。



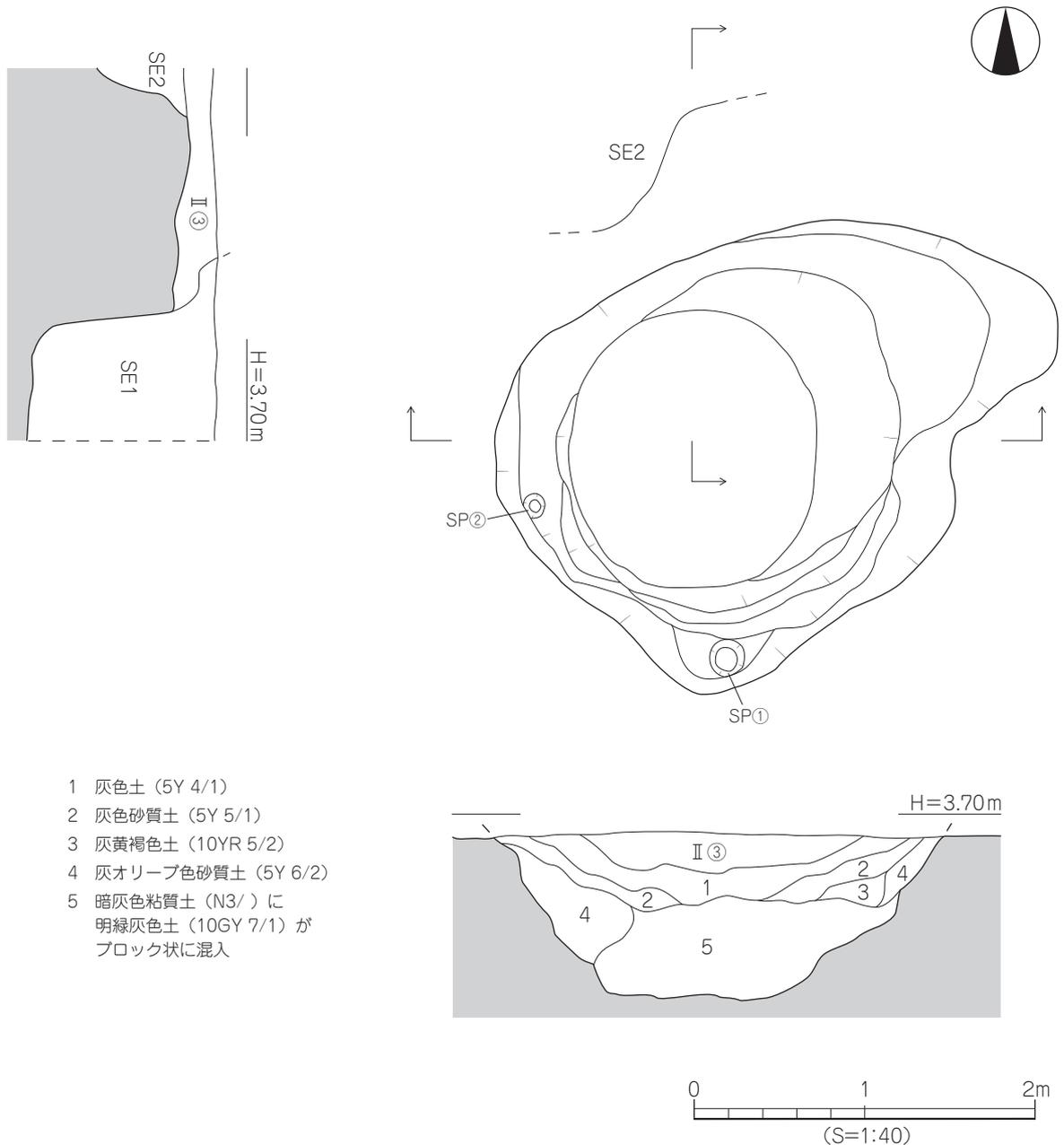
第 198 図 SK2 測量図

4. 井戸址

調査では、井戸址 2 基を確認した。

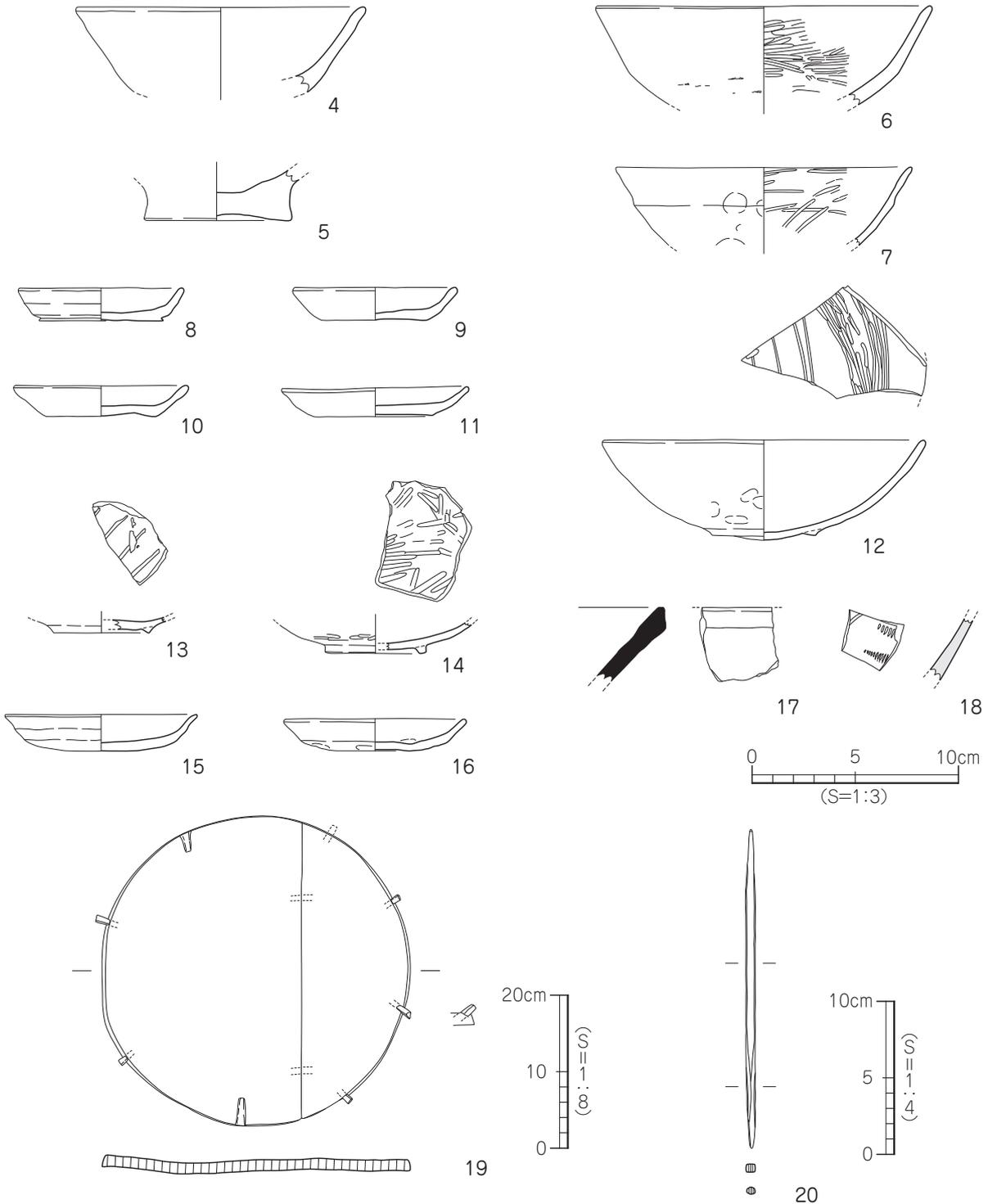
SE1 (第 199 図、図版 44)

調査区中央部 B3 ~ C4 区に位置する井戸址で、第 II ③層黒褐色土上面での検出であり、井戸上面は第 II ②層の水田層が覆う。井戸掘り方の平面形態は不整の楕円形をなし、規模は長径 3.42m、短径 2.36m、深さは最深部で 1.00m である。断面形態は漏斗状をなすが、北東部はやや段掘り構造となっている。埋土は上位が灰色土 (5Y 4/1) や灰色砂質土 (5Y 5/1)、灰黄褐色土 (10YR 5/2)、灰オリーブ色砂質土 (5Y 6/2)、下位は暗灰色粘質土 (N3/) に明緑灰色土 (10GY 7/1) がブロック状に混入するものである。井戸南半部にはテラス状の平坦面があり、西側と南側にて 2 基の小ピットを検出し



第 199 図 SE1 測量図

た。ピット埋土は、両者ともに灰色土単層であるが、井戸に伴うものかは判断できなかった。なお、発掘調査時は井戸中位付近からの湧水が激しく、最終的には重機を使用して掘り下げを行い、井戸基底面の確認作業を行った。調査の結果、井戸中央部付近からは板材と思われる木片が数点出土しており、木製の井戸枠が使用されていたものと推測される。遺物は掘り方埋土中より土師器の坏や皿、須恵器の鉢、瓦器碗や瓦器皿などの破片が散在して出土した。



第200図 SE1 出土遺物実測図

出土遺物（第 200 図、図版 47）

4・5 は土師器坏。4 は口縁～体部片で、口縁部は僅かに外反する。5 は円盤高台状の底部で、底部の切り離しは回転ヘラ切り技法による。6・7 は土師器椀。6 は内黒椀で、体部内面にヘラミガキを施す。7 は体部中位に稜をもち、外面には指頭痕が残る。8～11 は土師器皿。8・9 は平底、10・11 は僅かに底部が凹み、底部外面には回転糸切り痕が残る。12～14 は和泉型瓦器椀。12 の口縁部は僅かに外反し、12・13 は断面三角形状、14 は方形の高台を貼り付ける。体底部内面には平行線状の暗文を施す。なお、14 の内面は一部、銀化している。15・16 は瓦器皿。口縁部は短く外反し、15 の底部は丸味をもつ。17 は東播系須恵器の鉢。口縁部は僅かに肥厚し、口縁端面はナデにより凹む。18 は同安窯系の青磁碗で、内面に櫛描文を施す。胎土は灰色で、オリブ黄色の釉薬が全面に掛けられている。19 は井戸枠に使用された曲物の底板で、直径 40cm、厚さ 1.4cm である。20 は木製の箸で、長さ 20.6cm を測る。断面形態は、中央部が方形をなす。

時期：出土遺物の特徴より鎌倉時代、13 世紀後半とする。

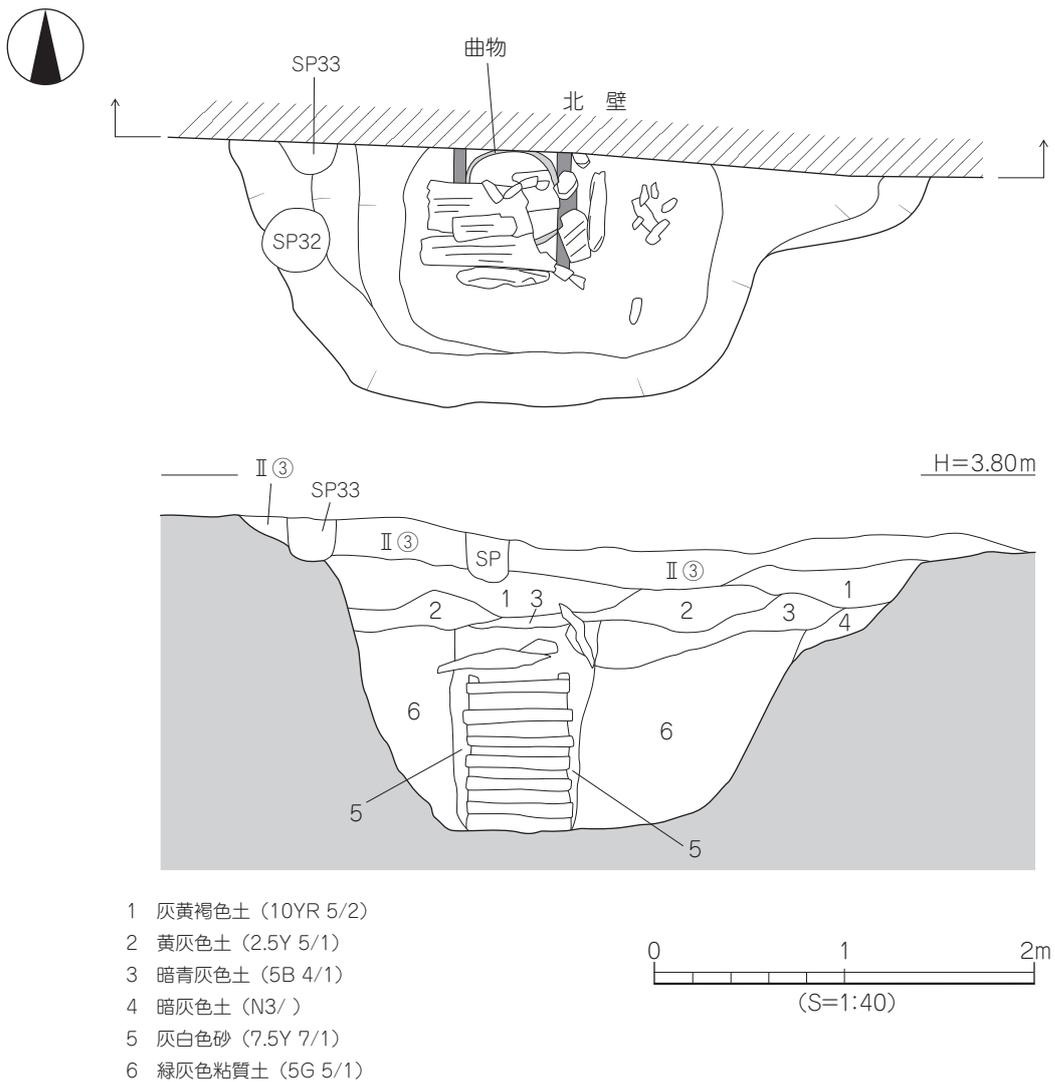
SE2（第 201 図、図版 44・45）

調査区北壁中央部付近 B3・4 区に位置する井戸址で、北半部は調査区外に続く。第Ⅲ①層灰オリブ色土上面での検出であり、第Ⅱ③層黒褐色土が井戸上面を覆う。検出層位より、SE2 が SE1 に先行する。井戸掘り方の平面形態は不整の円形または楕円形をなすものと思われ、規模は東西検出長 3.30m、南北検出長 1.42m、深さは最深部で 1.66m である。断面形態は漏斗状をなすが、井戸西側は逆台形状となる。埋土は上位が灰黄褐色（10YR 5/2）や黄灰色土（2.5Y 5/1）、暗青灰色土（5B 4/1）、暗灰色土（N3/）、下位は緑灰色粘質土（5G 5/1）である。井戸中央部西寄りには長さ 1m 前後の杭が方形に 4 本打ち込まれており、杭を囲むように長方形の板材が張られ、井戸枠としていた。さらに、井戸枠の中からは木製の曲物が 3 段に積まれていた。なお、発掘調査時は SE1 と同様に湧水が激しく、重機を使用して掘り方埋土の掘削を行い、曲物の取り上げを行った。遺物は掘り方埋土中より土師器坏や皿の完形品をはじめ、瓦器椀や瓦器皿などのほか、モモの種子が出土した。

出土遺物（第 202・203 図、図版 47・48）

21～23 は土師器坏。体部は内湾し、21・22 の底部切り離しは回転糸切り技法による。24・25 は土師器椀。輪高台を貼り付け、底部外面には回転糸切り痕が残る。なお、25 は内黒椀である。26～28 は土師器皿、29 は製塩土器。30～35 は瓦器椀。30 は完存品で、口径 14.6cm、底径 4.5cm、器高 4.6cm である。口縁部は僅かに外反し、断面三角形状の高台を貼り付ける。体底部内面には平行線状の暗文を施す。底部中央には、径 0.5cm 大の円孔を穿つ（焼成後）。31 は断面三角形状の高台を貼り付け、体部中位から底部内面にかけて平行線状の暗文を施す。内面は、一部銀化している。32・33 は口縁～体部片で、内面に平行線状の暗文を施す。34・35 は底部片。34 は形骸化した高台を貼り付ける。35 は方形の高台を貼り付け、内面には格子状の暗文を施す。36 は瓦器皿。体部中位に稜をもち、内面にらせん状の暗文がみられる。37・38 は東播系須恵器の鉢。口縁部は三角形状をなし、口縁端面はナデにより凹む。39 は白磁碗。玉縁状口縁で、胎土は灰色をなし、浅黄色の釉薬が掛けられている。

時期：出土遺物の特徴より鎌倉時代、13 世紀後半とする。



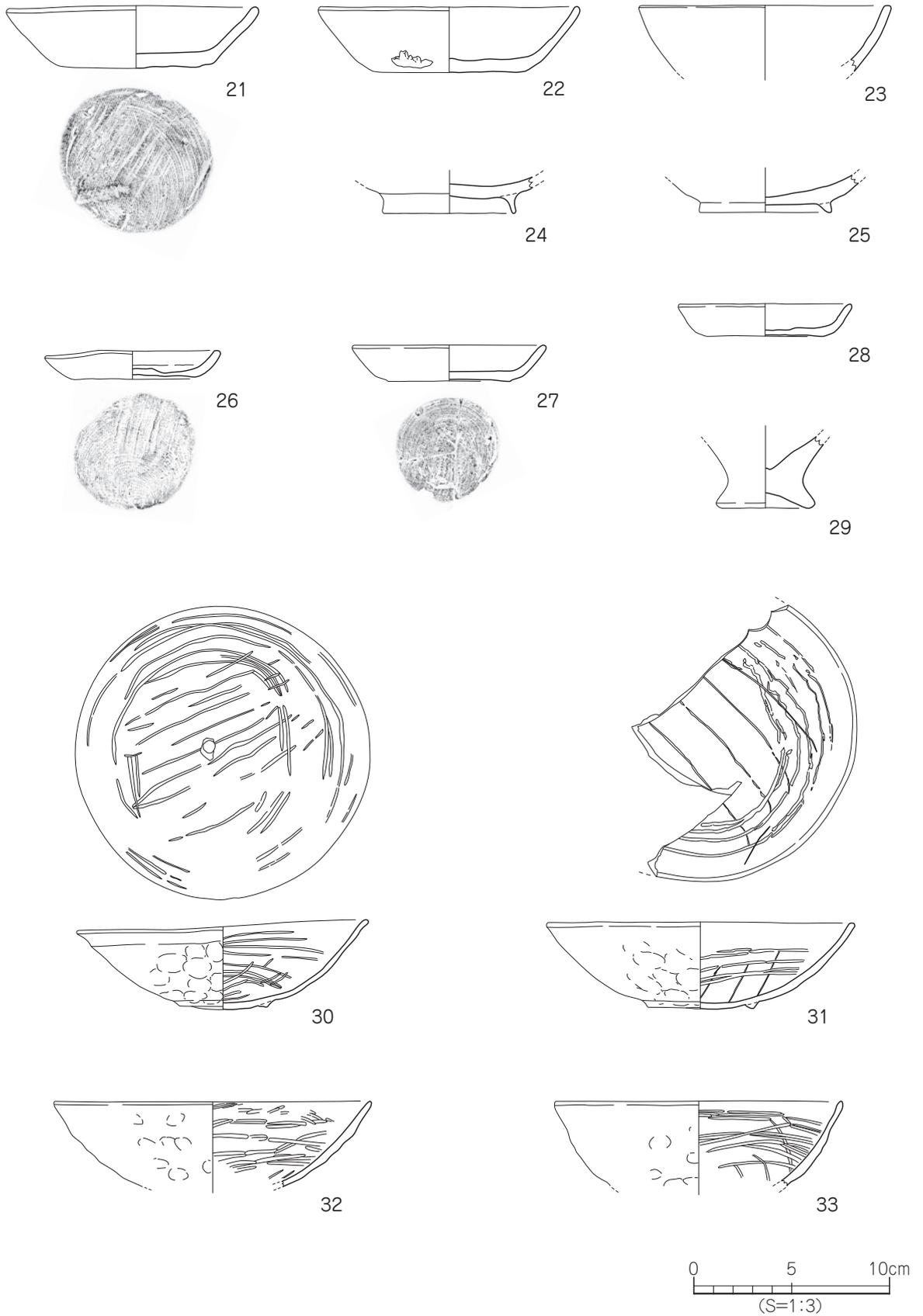
第 201 図 SE2 測量図

5. 柱 穴 (図版 46)

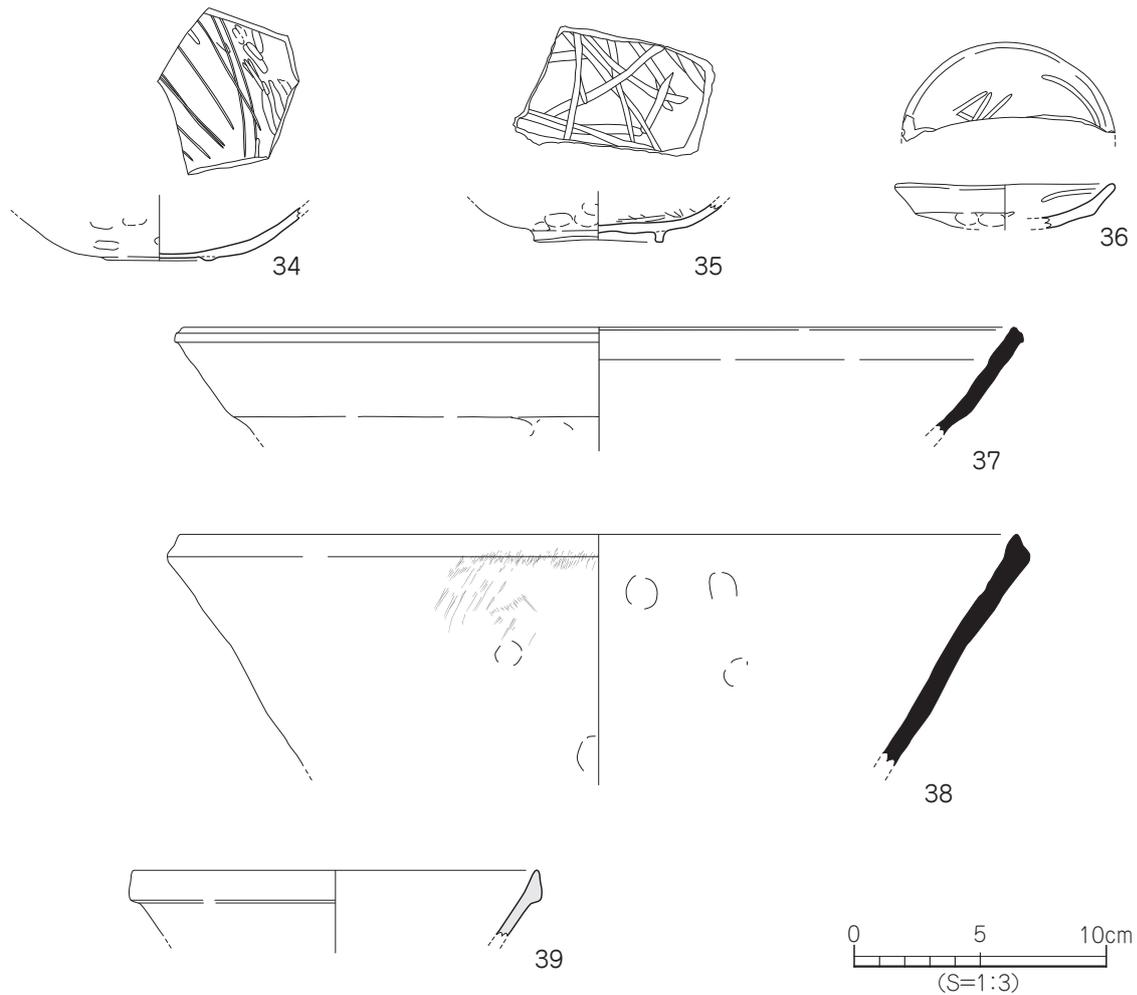
調査では、57 基の柱穴を検出した。柱穴掘り方埋土は、以下の 5 種類に分類される。

- ①類 - 灰黄褐色土 (10YR 5/2) …… 1 基 (SP1)
- ②類 - 黄灰色土 (2.5Y 6/1) …… 1 基 (SP2)
- ③類 - 暗灰色土 (N 3/) …… 36 基 (SP4~6・8・13・15・16・18・19・21・22・24 ~ 26・31・33・34・36 ~ 45・50 ~ 56・59・60)
- ④類 - 灰色土 (10Y 6/1) …… 17 基 (SP7・9~12・14・17・20・23・27~29・32・35・47・48・58)
- ⑤類 - 黒褐色土 (10YR 3/1) …… 2 基 (SP49・57)

これら柱穴のうち、柱痕の認められた柱穴は 16 基 (SP1・2・11・17・20・25・28・35・36・38 ~ 40・45・48・51・54) あり、SP2 と SP45 には柱材の一部が遺存していた。また、2 基の柱穴 (SP36・40) からは礎板と思われる板材を検出した。なお、SP20 からは瓦器椀 (1/2 の残存) が 2 個体出土している。



第 202 図 SE2 出土遺物実測図 (1)



第203図 SE2出土遺物実測図(2)

出土遺物 (第204図、図版48)

40はSP47、41・44・45はSP20、42はSP26、43はSP19出土品。40・41は土師器坏。40は復元完形品で、口径11.3cm、器高3.6cmである。体部はやや内湾し、底部の切り離しは回転糸切り技法による。色調は、橙色である。42は土師器皿。完形品で、口径8.4cm、底径5.6cm、器高1.4cmである。底部は凹み、底部外面には回転糸切り痕が残る。43～45は瓦器椀。43は断面三角形の高台を貼り付け、体底部内面にはらせん状の暗文を施す。44・45は形骸化した高台を貼り付け、44はらせん文、45はらせん文と連結輪文の暗文がみられる。

6. 包含層出土遺物

調査では、第Ⅱ③層や第Ⅱ④層中より遺物が出土した。

(1) 第Ⅱ③層出土遺物 (第205図、図版48)

46・47は土師器坏。体部は内湾気味に立ち上がり、底部外面には回転糸切り痕が残る。48・49は土師器羽釜。口縁部片で、断面三角形の鑊が付く。外面には煤が付着している。

(2) 第Ⅱ④層出土遺物 (第 205 図)

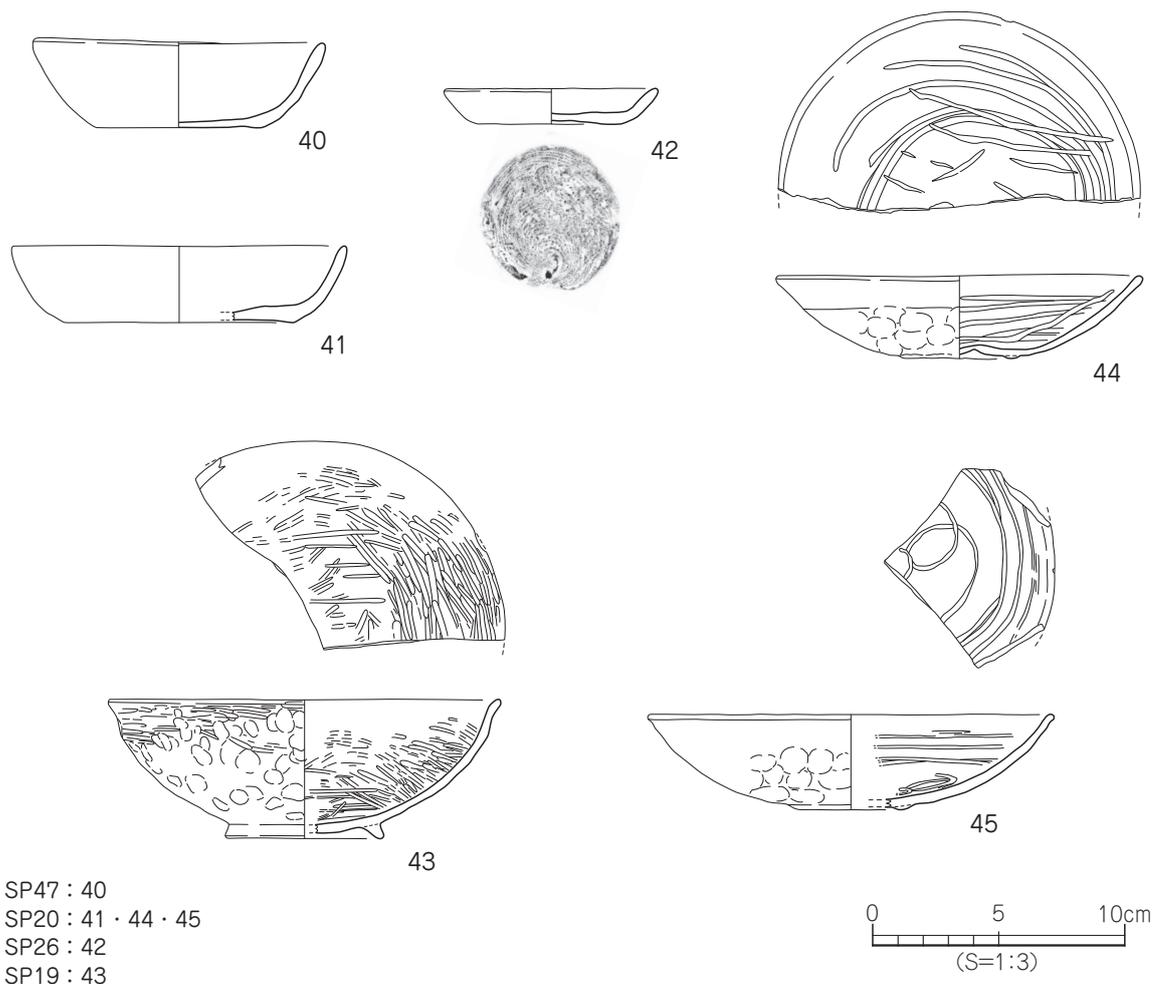
50・51 は土師器坏。51 は円盤高台状の底部で、50・51 共に底部の切り離しは回転糸切り技法による。52 は土師器椀。断面三角形の高台を貼り付け、底部外面には回転糸切り痕が残る。53 は土師器皿。底部は僅かに凹み、外面に回転糸切り痕と板状圧痕が残る。54 は白磁碗。玉縁状口縁で、胎土は灰色をなし、灰白色の釉薬が掛けられている。

第 4 節 小 結

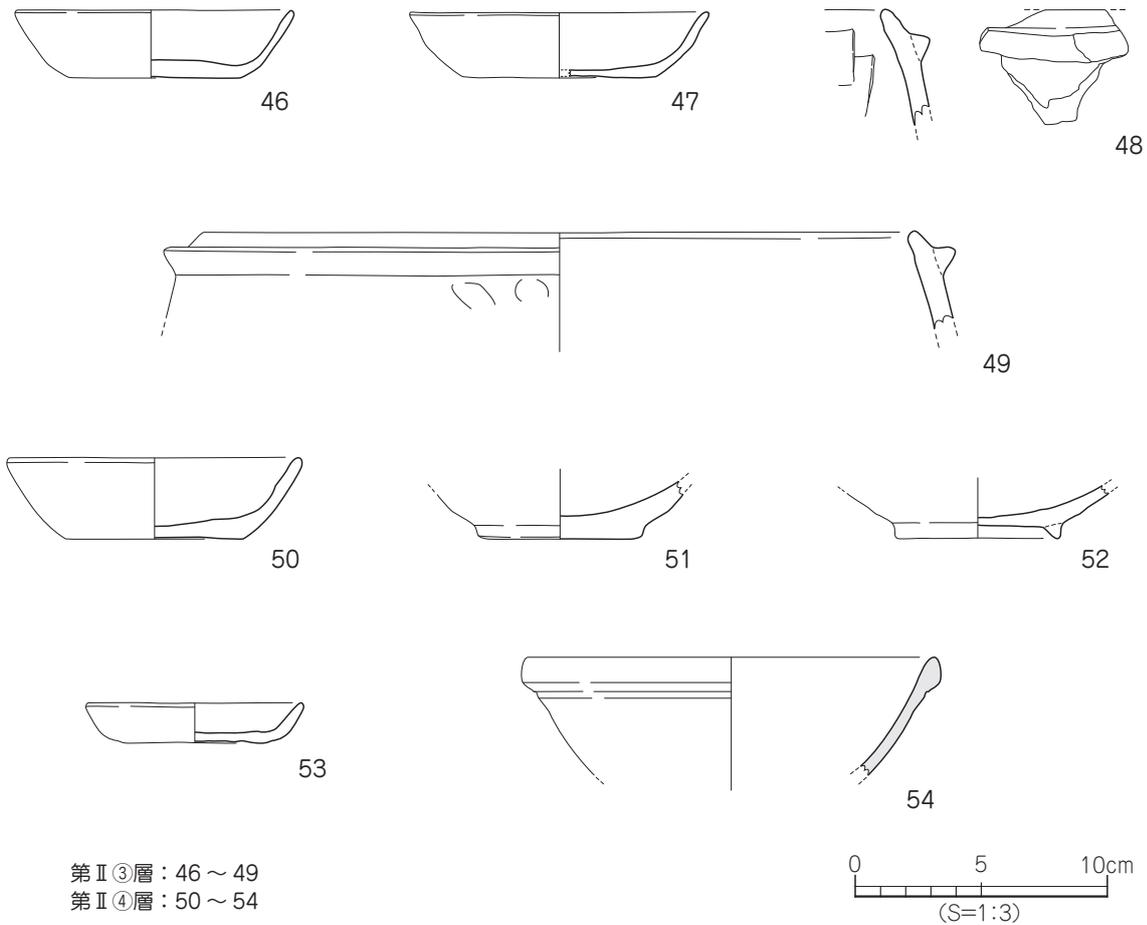
調査では、鎌倉時代から室町時代までの遺構・遺物を確認した。ここでは、時代別にまとめを行う。

(1) 鎌倉時代

鎌倉時代の遺構は、第Ⅲ①層上面にて溝 5 条、土坑 2 基、井戸址 2 基、柱穴 57 基を検出した。このうち、2 基の井戸は出土遺物より鎌倉時代、13 世紀代に存在したものと考えられ、おそらくは SE2 廃絶後に SE1 が構築されたものと思われる。両者共に木製の井戸枠を伴った構造で、特に SE2 から



第 204 図 柱穴出土遺物実測図



第205図 第Ⅱ③・Ⅱ④層出土遺物実測図

は杭や側板、曲物などを確認した。同様の構造をもつ井戸は、余戸中ノ孝遺跡4次調査や東垣生八反地遺跡1次調査でも確認されている。SE2からは完形品の土師器坏・皿のほか瓦器碗や瓦器皿などが数多く出土した。井戸址の検出は当時の井戸がどのように構築されていたか、また、廃絶時の様子を知る手がかりが得られるなど、中世の井戸研究にとって貴重な資料となるものである。このほか、溝や土坑、柱穴を検出したが、概ね鎌倉時代の遺構と考えられる。建物址は検出されなかったが、柱材と思われる木片が残る柱穴もあり、これらの柱穴で構成される建物が近隣地域に存在するものと思われる。

(2) 室町時代

室町時代の遺構は、水田址を検出した。第Ⅱ②層灰色粘質土が水田層であり、数多くの足跡を検出した。足跡は、第Ⅱ①層である灰色砂で埋没している。出土遺物や検出層位より、室町時代に存在した水田址と考えられる。周辺の調査結果などから、当地一帯には室町時代の水田が広く存在していることが明らかになった。

遺構一覧・遺物観察表 - 凡例 -

以下の表は、本調査地検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。

(1) 遺構一覧表

- 地区欄 グリッド名を記載。
 規模欄 () は現存値を示す。
 埋土欄 複数の土層がある場合は、以下のように記載している。
 例) 「灰色土 他」
 出土遺物欄 遺物名称を略記した。
 例) 土→土師器、須→須恵器、木→木製品

(2) 遺物観察表

- 法量欄 () : 復元推定値
 調整欄 土器の各部位名称を略記した。
 例) 口→口縁部、体→体部
 胎土欄 胎土欄は混和剤を略記した。
 例) 石→石英、長→長石、金→金ウンモ、赤→赤色酸化土粒
 () の中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。
 例) 石・長 (1～2) → 「1～2mm大の石英・長石を含む」である。
 焼成欄 焼成欄の略記について
 ◎→良好

表 119 溝一覧

溝 (SD)	地区	方向	断面形	規模 長さ×幅×深さ (m)	埋土	出土遺物	時期
1	C3	北西-南東	レンズ状	(1.50) × 0.42 × 0.08	灰色土	瓦器	13世紀前半
2	C5	東西	皿状	(0.65) × 0.53 × 0.04	暗灰色土	瓦器	13世紀前半以前
3	C4・5	北東-南西	舟底状	(1.15) × 0.35 × 0.06	灰色土		13世紀前半
4	B・C3	南北-東西	皿状	1.39 × 0.22 × 0.04	暗灰色土		13世紀以降
5	B・C3	南北	レンズ状	(0.75) × 0.35 × 0.15	暗灰色土		13世紀前半以前

表 120 土坑一覧

土坑 (SK)	地区	平面形	断面形	規模 長径×短径×深さ (m)	埋土	出土遺物	時期
1	B2～C3	不整形	逆台形状	2.35 × 1.52 × 0.06	灰黄褐色土	土・炭・焼土	13世紀
2	C2～D3	不整楕円形	逆台形状	1.03 × 0.83 × 0.06	灰黄褐色土	土・須・炭	13世紀

表 121 井戸址一覧

井戸 (SE)	地区	平面形	断面形	規模 長径×短径×深さ (m)	埋土	出土遺物	時期
1	B3～C4	不整楕円形	漏斗状	3.42 × 2.36 × 1.00	灰色土 他	土・須・瓦器・木	13世紀後半
2	B3・4	不整形	逆台形状	(3.30) × (1.42) × 1.66	暗灰色土 他	土・瓦器・木・種子	13世紀後半

表 122 SD1 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
1	椀	底径 (4.6) 残高 1.4	瓦器椀の底部片。断面三角形の高台を貼付け、内面に平行線状の暗文あり。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰白色 暗灰色	密 ◎		

表 123 SD2 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
2	椀	口径 (14.6) 底径 (5.0) 器高 5.4	瓦器椀。断面三角形の高台を貼付け、内面に平行線状の暗文あり。	ヨコナデ (指頭痕)	ヨコナデ	暗灰色 灰色	密 ◎		

表 124 SK1 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
3	坏	底径 (7.0) 残高 1.3	底部小片。底部外面に回転糸切り痕あり。	マメツ	マメツ	橙色 橙色	密 赤◎		

表 125 SE1 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
4	坏	口径 (13.8) 残高 4.1	口縁～体部片。	ヨコナデ	ヨコナデ	橙色 にぶい橙色	密 ◎		
5	坏	底径 (6.8) 残高 2.4	円盤高台状の底部。上げ底。底部外面に回転ヘラ切り痕あり。	ヨコナデ	ヨコナデ	褐灰色 灰黄色	石・長 (1) ◎		47
6	椀	口径 (16.0) 残高 4.8	内黒椀。体部内面に平行線状の暗文あり。1/4の残存。	㊦ヨコナデ ㊧ヘラケズリ	ヘラミガキ	浅黄色 黒色	長 (1) ◎		
7	椀	口径 (14.2) 残高 3.8	体部中位に稜をもち、内面に平行線状の暗文あり。	ヨコナデ (指頭痕)	ヨコナデ	橙色 橙色	密 ◎		
8	皿	口径 (7.8) 底径 (6.0) 器高 1.6	体部は内湾し、底部外面に回転糸切り痕とスノコ痕あり。1/3の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	淡黄色 淡黄色	密 ◎		
9	皿	口径 (7.8) 底径 (5.0) 器高 1.6	底部外面に回転糸切り痕あり。1/2の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	浅黄橙色 浅黄橙色	密 ◎		
10	皿	口径 (8.2) 底径 (5.2) 器高 1.5	底部はやや凹み、底部外面に回転糸切り痕あり。1/3の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい黄橙色 灰白色	密 ◎		
11	皿	口径 8.9 底径 5.6 器高 1.4	底部はやや凹み、底部外面に回転糸切り痕とスノコ痕あり。2/3の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	浅黄橙色 浅黄橙色	密 ◎	黒斑	47
12	椀	口径 (15.4) 底径 (6.0) 器高 4.9	瓦器椀。断面三角形の高台を貼付け、内面に平行線状の暗文あり。1/5の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	黒色 黒色	密 ◎		47
13	椀	底径 (4.5) 残高 0.8	瓦器椀。断面三角形の高台を貼付け、内面に平行線状の暗文あり。1/2の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	黒色 黒色	密 ◎		47
14	椀	底径 (4.6) 残高 1.5	瓦器椀。断面方形の高台を貼付け、内面に平行線状の暗文あり。1/2の残存。	ヘラミガキ ヨコナデ	ヘラミガキ	暗灰色 暗灰色	密 ◎		47
15	皿	口径 (9.2) 底径 (5.8) 器高 1.8	瓦器皿。口縁部は短く外反し、底部は丸味を持つ。2/3の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	暗灰色 暗灰色	密 ◎		
16	皿	口径 (8.6) 底径 (4.4) 器高 1.6	瓦器皿。底部は、やや凹む。1/4の残存。	ヨコナデ (指頭痕)	ヨコナデ	黒色 暗灰色	密 ◎		
17	鉢	残高 3.6	須恵器。口縁端面は、ナデ凹む。小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰白色	密 ◎		
18	碗	残高 3.0	同安窯系青磁椀。内面に櫛描文あり。小片。	施釉	施釉	オリーブ黄色 オリーブ黄色	密 (灰色) ◎		

遺物観察表

表 126 SE1 出土遺物観察表 木製品

番号	器種	遺存状態	樹種	法 量			備考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)		
19	曲物 底板	完存	—	40.0	40.0	1.4		47
20	箸	完存	—	20.6	0.6	0.5		47

表 127 SE2 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
21	坏	口径 12.7 底径 7.5 器高 3.2	体部は僅かに内湾し、底部外面に回転糸切り痕とスノコ痕あり。2/3の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	橙色 橙色	石・長 (1~2) ◎		47
22	坏	口径 (12.9) 底径 (7.6) 器高 3.4	体部は僅かに内湾し、底部外面に回転糸切り痕とスノコ痕あり。1/3の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	黄褐色 黄褐色	石・長 (1~3) 金◎	黒斑	
23	坏	口径 (12.8) 残高 3.4	体部は内湾し、口縁端部は「コ」字状に仕上げる。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	橙色 にぶい橙色	石・長 (1) ◎		
24	椀	底径 (6.7) 残高 2.2	輪高台の貼付け。底部完形。	ヨコナデ →ナデ	ナデ	灰白色 灰白色	石・長 (1~2) ◎		
25	椀	底径 (6.6) 残高 1.9	内黒椀。断面三角形の高台を貼付け。1/2の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	褐灰色 黒褐色	石・長 (1) ◎		
26	皿	口径 8.9 底径 6.2 器高 1.5	完存品。器壁は厚く、底部外面に回転糸切り痕とスノコ痕あり。	ヨコナデ →ナデ	ナデ	橙色 橙色	石・長 (1) 金◎	黒斑	47
27	皿	口径 (9.6) 底径 (6.2) 器高 1.8	底部外面に回転糸切り痕あり。2/3の残存。	ヨコナデ	ナデ	灰白色 灰白色	石・長 (1) 金◎		
28	皿	口径 (8.6) 底径 (6.0) 器高 1.6	口縁部はやや外反し、底部は凹む。底部外面に回転糸切り痕あり。1/3の残存。	ヨコナデ	ナデ	浅黄橙色 浅黄橙色	石・長 (1) 金◎		
29	製塩土器	底径 (4.6) 残高 3.7	上げ底。底部完形。	マメツ	ナデ	にぶい橙色 黒色	石・長 (1~2) ◎		47
30	椀	口径 14.6 底径 4.5 器高 4.6	瓦器椀。完形品。口縁部は波状をなし、断面三角形の丸味のある高台を貼付。内面に平行線状の暗文あり。穿孔あり。	ナデ	ナデ	暗灰色 黒色	密◎		48
31	椀	口径 (15.6) 底径 5.4 器高 4.4	瓦器椀。断面三角形の高台を貼付け、内面に平行線状の暗文あり。1/2の残存。	ナデ	ナデ	黒色 暗灰色	密◎		48
32	椀	口径 (16.0) 残高 4.4	瓦器椀。内面に平行線状の暗文あり。1/4の残存。	ナデ (指頭痕)	ナデ	灰色 灰色	石・長 (1~5) ◎		
33	椀	口径 (14.4) 残高 4.4	瓦器椀。内面に平行線状の暗文あり。1/4の残存。	ナデ	ナデ	黒色 黒色	密◎		
34	椀	底径 (4.2) 残高 2.1	瓦器椀。形骸化した高台を貼付。内面に平行線状の暗文あり。1/3の残存。	ナデ	ナデ	暗灰色 暗灰色	密◎		
35	椀	底径 5.1 残高 1.5	瓦器椀。断面方形の高台を貼付け、内面に格子状の暗文あり。1/2の残存。	ナデ	ナデ	暗灰色 暗灰色	密◎		48
36	皿	口径 (8.6) 残高 1.7	瓦器皿。体部中位に稜をもつ。内面に暗文あり。1/3の残存。	ナデ (指頭痕)	ナデ	暗灰色 暗灰色	密◎		
37	鉢	口径 (32.7) 残高 4.2	須恵器鉢。口縁端面はナデ凹む。小片。	ナデ	ヨコナデ	灰色 灰色	密◎		
38	鉢	口径 (33.0) 残高 9.2	須恵器鉢。口縁端面はナデ凹む。小片。	ナデ	ヨコナデ	灰色 灰色	密◎		
39	碗	口径 (16.0) 残高 2.6	白磁。玉縁状口縁。黄色味がかった釉が掛けられている。小片。	施釉	施釉	浅黄色 浅黄色	密 (灰色) ◎		48

表 128 柱穴出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
40	坏	口径 11.3 底径 6.4 器高 3.6	復元完形品。体部は内湾し、底部外面に回転糸切り痕あり。	ヨコナデ	ヨコナデ	橙色 橙色	密 ◎	SP47	48
41	坏	口径 (14.0) 底径 (9.0) 器高 3.0	体部は内湾し、底部外面に回転糸切り痕あり。1/4 の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰白色 灰白色	密 ◎	SP20	
42	皿	口径 8.4 底径 5.6 器高 1.4	完存品。底部外面に回転糸切り痕あり。	ヨコナデ	ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎	SP26	
43	椀	口径 (15.3) 底径 (6.2) 器高 5.5	瓦器椀。口縁部は外反し、断面三角形の高台を貼付。内面に暗文あり。1/2 の残存。	①ヘラミガキ ④ナデ (指頭痕)	ナデ	黒色 黒色	密 ◎	SP19	48
44	椀	口径 (14.2) 底径 (4.5) 器高 3.3	瓦器椀。形骸化した高台を貼付け、内面に暗文あり。1/2 の残存。	ナデ (指頭痕)	ナデ	灰色 灰色	密 ◎	SP20	48
45	椀	口径 (15.6) 底径 (3.9) 器高 3.8	瓦器椀。形骸化した高台を貼付け、内面にらせん状の暗文と連結輪文あり。1/4 の残存。	ナデ (指頭痕)	ナデ	暗灰色 黒色	密 ◎	SP20	

表 129 第Ⅱ③層出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
46	坏	口径 (10.8) 底径 (7.0) 器高 2.7	体部は内湾気味に立ち上がり、底部外面に回転糸切り痕あり。2/3 の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰白色 灰白色	密 ◎		
47	坏	口径 (11.8) 底径 (7.4) 器高 2.6	体部は内湾気味に立ち上がり、底部外面に回転糸切り痕あり。1/3 の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい黄橙色 褐灰色	密 ◎		
48	羽釜	残高 4.6	口縁部小片。口縁端部は丸く仕上げる。	ヨコナデ	ナデ	褐灰色 褐灰色	石・長 (1~2) ◎	煤付着	
49	羽釜	口径 (28.0) 残高 3.9	口縁部小片。口縁端部は丸く仕上げる。	ヨコナデ	ナデ	黒褐色 黒褐色	密 ◎	煤付着	48

表 130 第Ⅱ④層出土遺物観察表 土製品

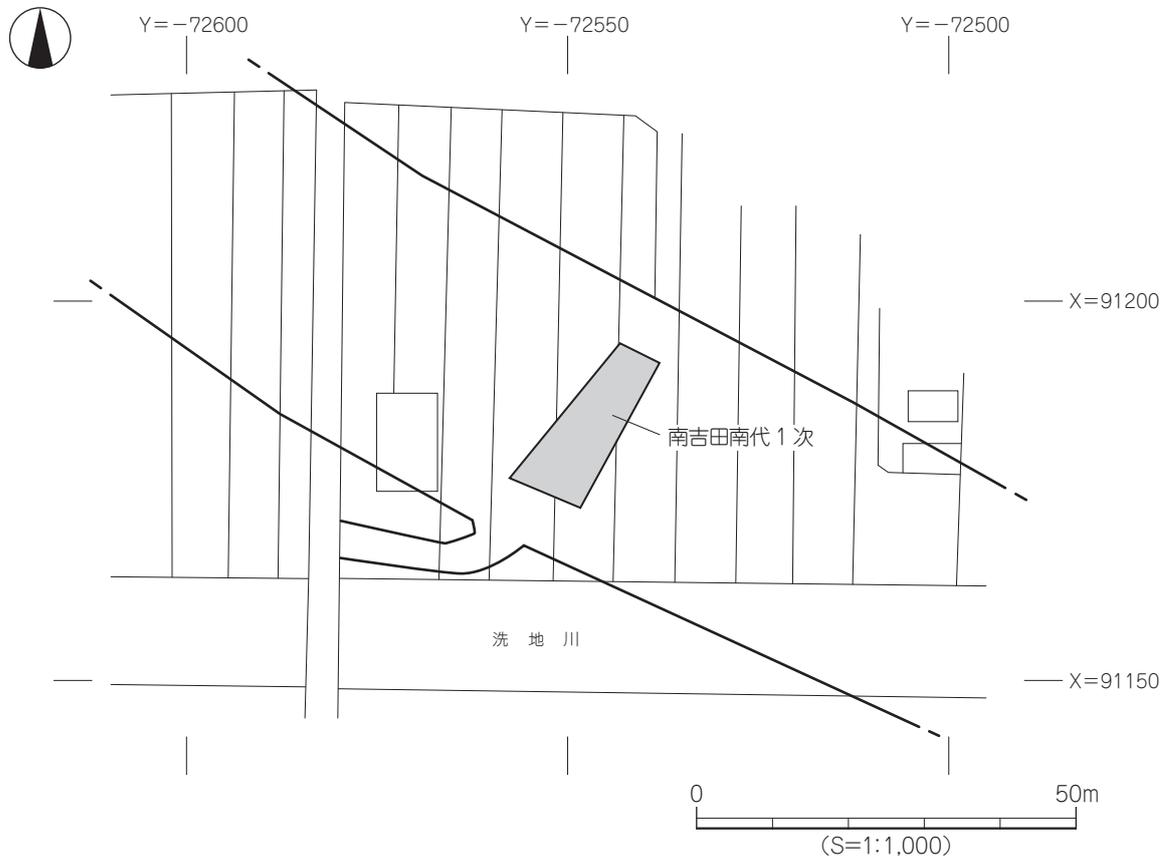
番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
50	坏	口径 (11.4) 底径 7.0 器高 3.2	体部は内湾し、底部外面に回転糸切り痕あり。4/5 の残存。	ヨコナデ	ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎		
51	坏	底径 (6.4) 残高 2.3	円盤高台状の底部。底部外面に回転糸切り痕あり。1/4 の残存。	ヨコナデ	ナデ	灰白色 灰褐色	密 ◎		
52	椀	底径 (6.4) 残高 2.1	断面三角形の高台を貼付け、底部外面に回転糸切り痕あり。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰白色 灰褐色	密 ◎		
53	皿	口径 (8.4) 底径 (5.8) 器高 1.6	底部は僅かに凹み、底部外面に回転糸切り痕あり。4/5 の残存。	ヨコナデ	ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎		
54	碗	口径 (16.0) 残高 4.7	白磁。玉縁状口縁。小片。	施釉	施釉	灰白色 灰白色	密 (白色) ◎		

第 14 章 南吉田南代遺跡 1 次調査

第 1 節 調査の経緯

南吉田南代遺跡 1 次調査は、松山市南吉田町 6 番 3、7 番 3、8 番 3 の各一部を調査対象地とし、調査面積は約 380㎡である。調査地は、工事対象地の北端に位置している。事前に実施した試掘調査の結果、地表下 2.5m 前後の地点にて大量の土器が出土したことから、発掘調査を実施することになった。調査期間は、平成 27 年 12 月 16 日から平成 28 年 1 月 29 日である。なお、本調査は余戸柳井田遺跡 3 次調査と併行して実施した。以下、調査工程を略記する。

平成 27 年 12 月 16 日、調査事務所の設置と発掘機材の搬入後、重機を使用して表土の掘削作業を開始する。地表下 2.4 m の地点（標高 2.3m）にて、黒色土の堆積を確認した。その後、作業員により黒色土の掘り下げを行った結果、黒色土上位から古墳時代の土器や石器が大量に出土した。12 月 26 日、遺物の出土状況を図化し、調査区内に 2m 四方のグリッドを設定後、グリッド毎に遺物を取り上げた。なお、黒色土掘り下げ時には、半円状に巡る溝を検出している。溝の掘削や測量終了後、1 月 18 日より調査区中央部にトレンチを設定し、黒色土下位部分の掘り下げを進めた。その結果、黒色土下層からは弥生土器が大量に出土した。調査期間の都合上、黒色土の掘り下げはトレンチ部分のみとなり、測量や写真撮影を行った。1 月 26 日より重機の使用により、埋め戻し作業を開始する。1 月 29 日、調査事務所の撤去と発掘機材の搬出を行い、本日にて発掘調査を終了する。



第 206 図 調査地位置図

第 2 節 層 位 (第 207・208 図、図版 49)

調査地は、調査以前は造成地及び水田であった。調査で確認した土層は、以下の 5 層である。なお、調査では第 2 章で説明した基本層位のうち、第 I 層、第 II 層、第 III 層及び第 IV 層を検出した。

第 I 層：近現代の造成土や耕作土で、土色・土質の違いにより 3 種類に分層される。

第 I ①層 - 造成土で、地表下 180cm まで開発が行われている。

第 I ②層 - 耕作土〔灰黄色土 (2.5Y 7/2)〕で、層厚は 15～20cm である。

第 I ③層 - 耕作土〔浅黄色土 (2.5Y 7/4)〕で、層厚は 6～10cm である。

第 II 層：中世段階の土壌で、土色・土質の違いにより 4 種類に分層される。

第 II ①層 - 浅黄色砂質土 (10YR 6/1) で、層厚は 8～12cm である。

第 II ②層 - 明赤褐色砂 (5YR 5/6) と灰白色砂 (5Y 8/1) の互層堆積層で、層厚 20～40cm である。

第 II ③層 - 浅黄色微砂 (5Y 7/3) で、層厚は 2～20cm である。なお、土層観察の結果、本層は洪水砂の可能性があり、本層下面にある第 II ④層上面には足跡と思われる遺構を数箇所確認した。

第 II ④層 - 暗青灰色粘質土 (10BG 3/1) で、層厚は 12～18cm である。平面調査は実施していないが、調査壁の土層観察により本層上面にて足跡と思われる遺構が数箇所で見られている。検出層位や土壌より、本調査検出の第 II ④層は、余戸柳井田遺跡や東垣生八反地遺跡で検出した水田層と同時期の可能性がある。

第 III 層：古代の堆積層もしくは河川、自然流路に伴う堆積物で、層厚は 60～80cm である。色・質の違いにより 6 種類に分層される。

第 III ①層 - 淡黄色微砂 (5Y 8/4) であり、層厚は 3～20cm である。

第 III ②層 - 青灰色粘質土 (10BG 5/1) で、層厚は 30～40cm である。

第 III ③層 - 青灰色粘質土 (10BG 5/1) にオリーブ灰色砂 (2.5GY 5/1) が少量混入する土層で、層厚は 6～25cm である。

第 III ④層 - 灰色粘質微砂 (10Y 6/1) で、層厚 4～15cm である。

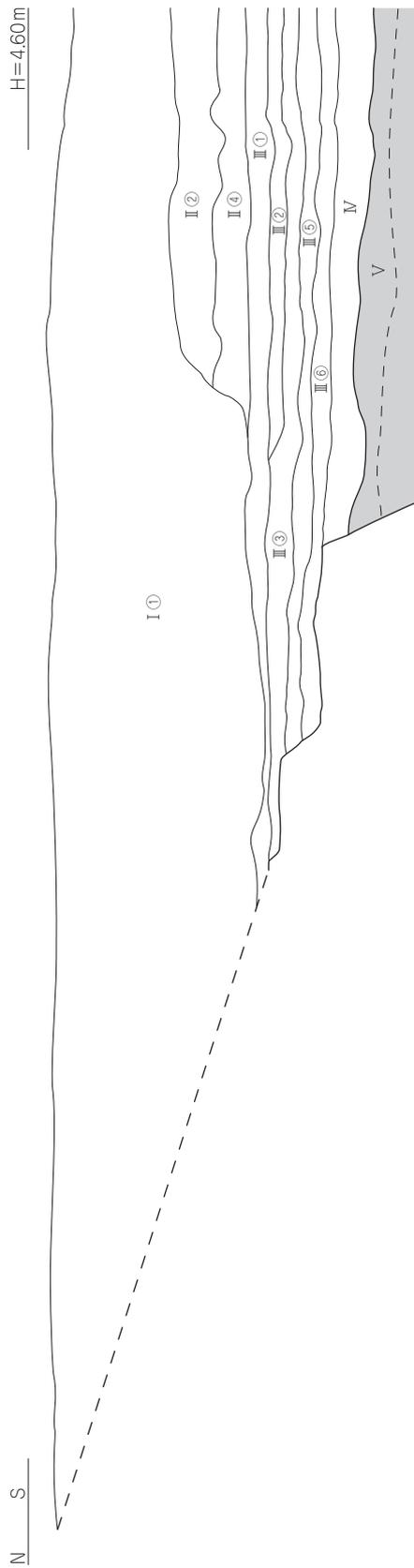
第 III ⑤層 - 暗灰色粘質微砂 (N3/) で、層厚 8～25cm である。

第 III ⑥層 - 灰色粘質微砂 (N6/) で、層厚 10～30cm である。

第 IV 層：黒色粘質土 (N2/) で、層厚 40～50cm である。本層掘り下げ時に、溝を検出した。なお、本層中からは弥生時代前期から古墳時代までの土器や石器が大量に出土している。

第 V 層：緑灰色砂質土 (7.5GY 5/1) で、層厚は 50cm 以上である。

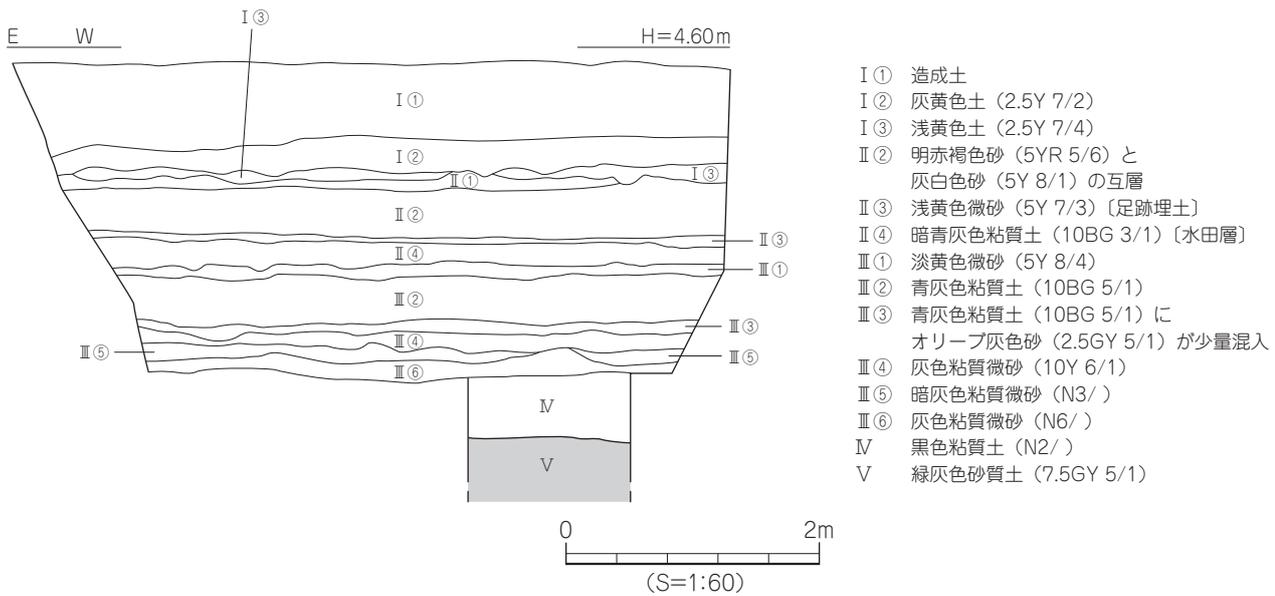
検出遺構や出土遺物より、第 IV 層は弥生時代から古墳時代までに堆積した土壌と考えられる。なお、調査にあたり調査区内を 5 m 四方のグリッドに分けた。グリッドは北から南へ 1・2・3……6、東から西へ A・B・C……F とし、A1・A2……F6 区といったグリッド名を付した。グリッドは、遺構の位置表示や遺物の取り上げ等に利用した。本調査地の座標値は、X=91172～91198、Y=-72537～-72562 である。



層 位

- I① 造成土
- I② 灰黄色土 (2.5Y 7/2)
- I③ 浅黄色土 (2.5Y 7/4)
- II② 明赤褐色砂 (5YR 5/6) と
灰白色砂 (5Y 8/1) の互層
- II③ 浅黄色微砂 (5Y 7/3) (足跡埋土)
- II④ 暗青灰色粘質土 (10BG 3/1) (水田層)
- III① 淡黄色微砂 (5Y 8/4)
- III② 青灰色粘質土 (10BG 5/1)
- III③ 青灰色粘質土 (10BG 5/1) に
オリーブ灰色砂 (2.5GY 5/1) が少量混入
- III④ 灰色粘質微砂 (10Y 6/1)
- III⑤ 暗灰色粘質微砂 (N3/)
- III⑥ 灰色粘質微砂 (N6/)
- IV 黑色粘質土 (N2/)
- V 緑灰色砂質土 (7.5GY 5/1)

第 207 図 東壁土層図



第 208 図 南壁土層図

第 3 節 遺構と遺物

南吉田南代遺跡 1 次調査では、溝 1 条を検出した。遺物は遺構内や第 IV 層中より、弥生時代前期から古墳時代の土器や石器のほか木製品や種子等が出土した。なお、遺物の出土量は収納箱 (44 × 60 × 14cm) 約 12 箱分である。

1. 溝

SD1 (第 210 図、図版 50)

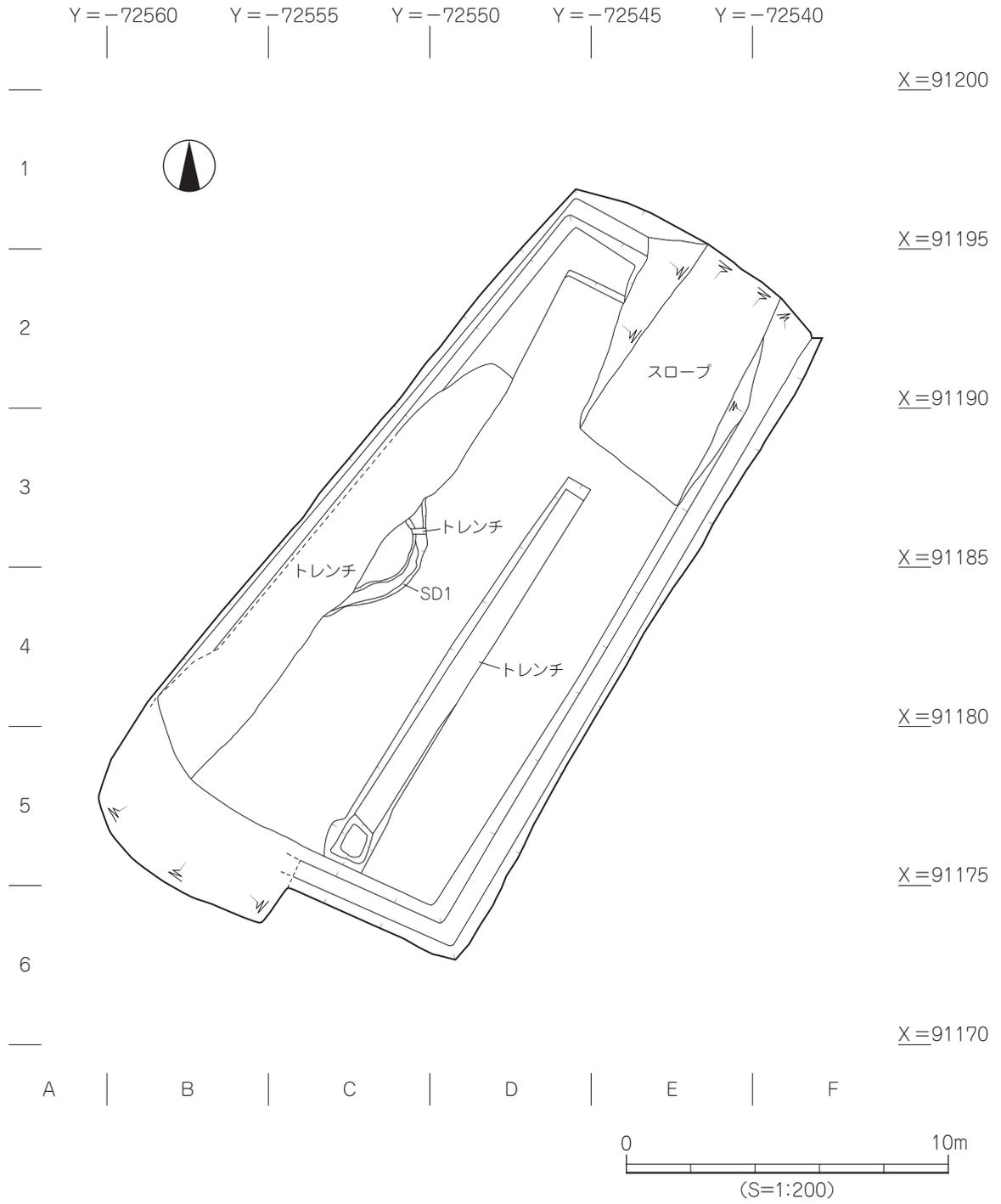
調査区中央部西寄り C3・4 区で検出した半円状の溝で、溝西半部は調査区外に続く。SD1 は、第 IV 層掘り下げ時に検出した溝である。SD1 検出面は黒色粘質土の中位付近であり、調査区全面には土器や石器が散在する状況であった。規模は検出長 4.85 m、幅 0.35 ~ 0.70 m、深さは 6 ~ 10cm である。断面形態は皿状をなし、埋土は第 IV 層と同様の黒色粘質土 (N2/) 単層である。溝基底面には凹凸があり、僅かに北側から南側へ向けて緩傾斜をなす (比高差 3cm)。溝からは土器片が少量出土したほか溝中央部付近からは板材 (幅 19.4cm、長さ 69.8cm、厚さ 2.3cm) が出土し、溝全体からは木片が散在して出土した。なお、種子 (モモ) 3 点の出土もある。

出土遺物 (図版 51)

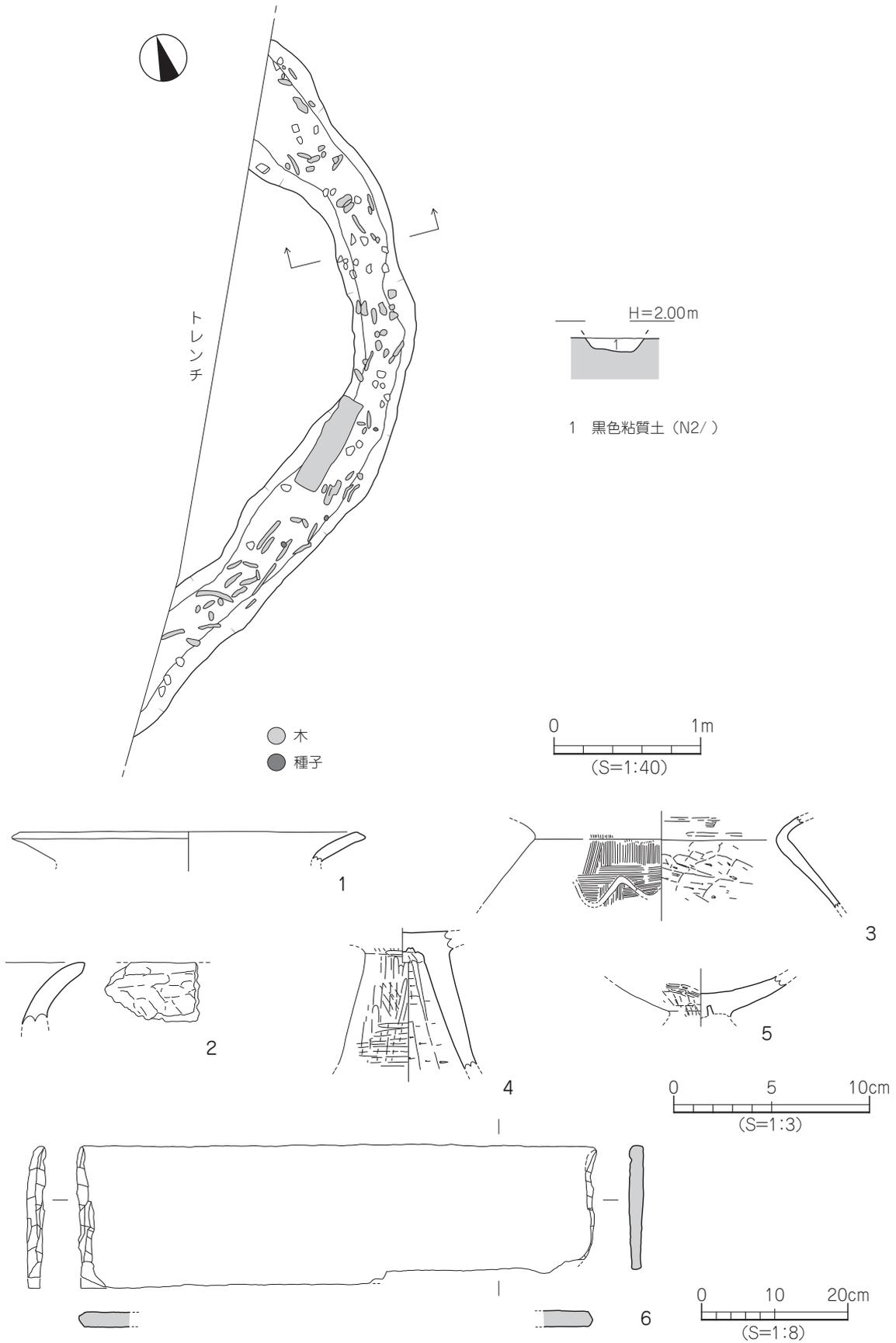
1 ~ 3 は甕。1・2 は口縁部片で、1 の口縁端部は外傾する。3 は胴部片で、ヘラ状工具による波状文を施す。外面はタテ方向のハケメ調整、内面は口頸部境界よりやや下がった位置からヨコ方向のヘラケズリを施す。4 は高坏の脚部片で、外面にはタテないしヨコ方向のヘラミガキがみられる。5 は小型器台。受部片で、底部には径 0.3cm 大の孔を穿つ (未貫通)。6 は板状の木製品で、残存長 69.8cm、幅 19.4cm、厚さ 2.3cm である。用途は断定できないが、構造物の部材と考えられる。

時期：出土遺物の特徴より、SD1 は弥生時代末から古墳時代初頭の溝と考えられる。

遺構と遺物



第 209 図 遺構配置図



第 210 図 SD1 測量図・出土遺物実測図

2. 包含層出土遺物

第Ⅳ層中からは、弥生時代前期から古墳時代までの遺物が大量に出土した。主に第Ⅳ層上位からは古墳時代後期、6世紀代の土師器や須恵器が出土し、中位からは弥生時代末から古墳時代初頭、下位からは弥生時代前期から後期までの遺物が出土している。

なお、発掘調査時は第Ⅳ層検出時に土層堆積状況を確認するため、調査区の南壁及び西壁沿いに先行トレンチを掘削した。その際、第Ⅳ層掘り下げ中に、中位付近にて調査区全面に大量の土器が出土したことから、番号を付けて取り上げを行った（第Ⅳ層取上遺物）。なお、第Ⅳ層の完掘作業は調査の進行上、困難であったため、調査区の中央部にトレンチを設定し、第Ⅳ層下層部分の掘り下げを行った。下層からは主に弥生時代前期末から中期中葉に時期比定される土器片が比較的少量に出土した。

(1) 第Ⅳ層取上遺物（第211図、図版51・52）

7・8は甕。口縁端部は外傾し、内方へ僅かに肥厚する。7の胴部外面にはタテないしヨコ方向のハケメ調整がみられ、内面は口頸部境界より下がった位置からヨコ方向のヘラケズリを施す。8の外面にはタタキ調整後、ハケメを施す。9～11は高坏。9はほぼ直角に屈曲する段をもち、内外面には赤橙色の塗彩がみられる。10・11は脚部片で、脚裾部には4箇所径0.9～1.1cm大の円孔を穿つ。なお、外面にはヨコ方向のヘラミガキを施し、11の内面にはヘラケズリを施す。12～14は小型器台。12・13は椀形の受部で、脚部には径0.7～0.8cm大の円孔を穿つ。12の内外面には、赤橙色の塗彩が一部にみられる。14は口縁部が上方へ屈曲し、口縁端部は尖り気味に仕上げる。15～17は鉢。15は脚付鉢の脚部片。短い柱部で、脚裾部には4方向に径0.7cm大の円孔を穿つ。16・17は大型品。口縁部は外反し、16の口縁端部には沈線状の凹みが巡る。18は製塩土器。外面には、ヨコ方向のタタキ調整がみられ、器壁は薄い。

(2) 中央トレンチ出土遺物（第212～214図、図版52～54）

19～29は甕。19～22の口縁端部は外傾し、21・22は内方へ僅かに肥厚する。23の口縁端部は上方につまみ上げられている。なお、19の外面にはヨコ方向のハケメ調整がみられ、19～22の内面には口頸部境界よりやや下がった位置からヨコ方向のヘラケズリを施す。24は吉備系の甕で、口縁部に沈線文7条を施す。外面にはタテ方向のヘラミガキがみられ、内面はヨコないしナナメ方向のヘラケズリを施す。25～29は胴部片。25・26にはハケ状工具による刺突文があり、27～29には波状文を施す。外面はタテないしヨコ方向のハケメ調整、内面にはヨコ方向のヘラケズリ調整がみられる。30～33は高坏。30は坏下部に稜をもち、口縁部は直立気味に立ち上がる。31は明瞭な段をもち、口縁端部は上方に肥厚する。内外面共に、丁寧なヘラミガキを施す。31の口縁部内面には、放射状のヘラミガキがみられる。32は段をもち、柱部は円筒状をなす。内外面共に、丁寧なヘラミガキを施す。脚裾部には、径0.9cm大の円孔を穿つ。33の脚裾部には径1.1cm大の円孔を穿ち、坏脚部接合部には、径0.3cm大の孔がみられる。34～36は壺。34の口縁部は直立気味に立ち上がり、口縁端部は丸く仕上げる。35・36は二重口縁壺で、35の口縁部は欠損している。36は口径23cmを測る大型品で、口縁端部は丸く仕上げる。37～41は鉢。37～39は口径37cm以上の大型品で、37の外面にはハケメ調整、37・38の体部内面にはヘラケズリを施す。40・41は直口口縁の鉢で、40は僅かに平底である。41の内面には、放射状のヘラミガキがみられる。42～44は小型器台。42の口縁部は外傾し、脚部中位に径0.9cm大の円孔を3箇所に穿つ。受部内面及び脚部外面には、ヘラミガキを施す。43は椀形

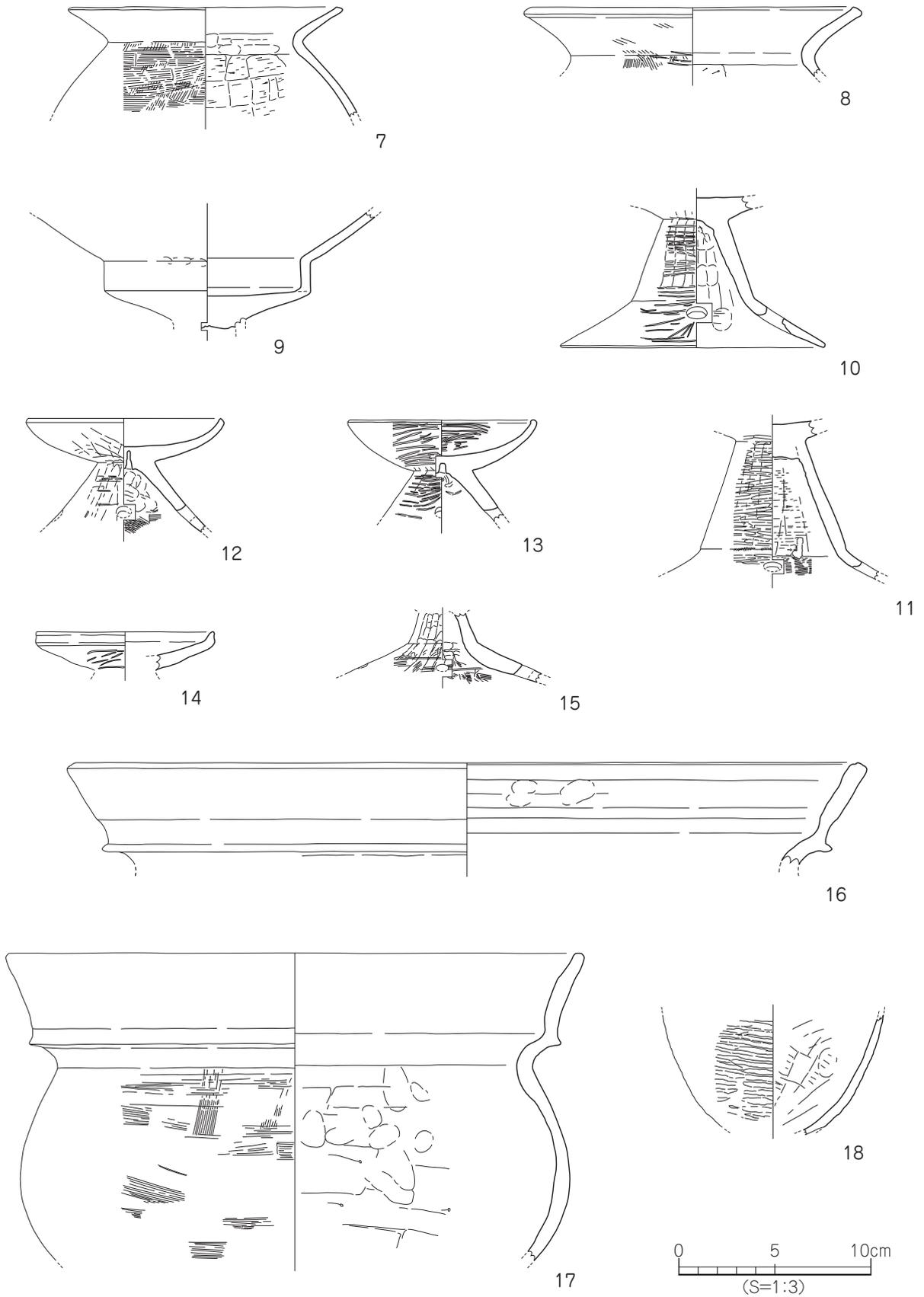
の受部片で、口縁端部は外傾する。44 は脚部片で、径 0.7cm 大の円孔を 4 箇所につ。45 は甑形の土器で、底部は肥厚し、端面はナデ凹む。46 は弥生時代前期末の壺。口縁端面には沈線文 1 条と刻目、口縁部内面には貼付凸帯文 2 条と竹管文を施す。47 は弥生時代中期中葉の高坏。口縁部は水平にのび、内方へ肥厚する。内外面共に、丁寧なヘラミガキを施す。

(3) 南壁トレンチ出土遺物 (第 215・216 図、図版 55)

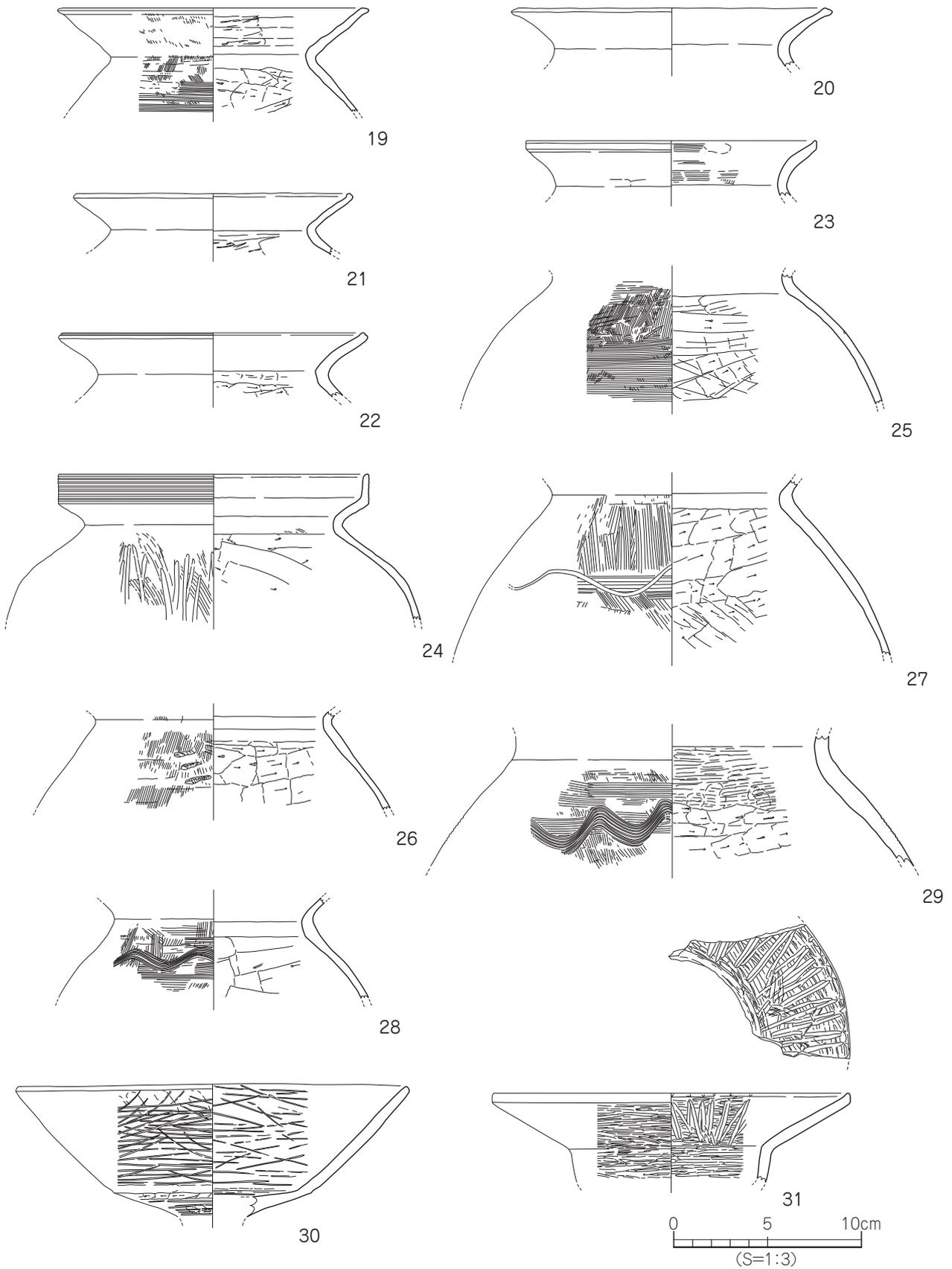
48～51 は甕。48・49 は口縁端部が外傾し、内方へ肥厚する。胴部外面はハケメ調整、内面は口頸部境界より下がった位置からヘラケズリを施す。50・51 は胴部片。胴上部外面には、ヘラ状工具による波状文を施す。52～54 は壺。52 は小型品で、口縁部は内湾し、口縁端部は尖り気味に仕上げる。胴部内面には、ナナメないしタテ方向のヘラミガキがみられる。53 は直口壺で、口縁端部は丸い。54 は二重口縁壺で、口縁部は直立し、頸肩部内面にはヨコ方向のヘラケズリを施す。55～57 は鉢。55 は直口口縁で、底部外面にはヘラケズリ調整がみられる。56 は口径 26.4cm の大型品で、口縁端部は「コ」字状をなす。57 は脚付鉢。短い柱部で、脚裾部には円孔を 2 箇所看守する。58 は高坏で、脚柱部に径 0.8cm 大の円孔をつ。59～63 は須恵器。59・60 は坏蓋で、天井部と口縁部の境界には凹線状の凹みが巡り、口縁端部は内傾する。なお、天井部内面には円弧叩きがみられる。61 は坏身片で、たちあがり端部は内傾する。62・63 は甕で、62 の口縁端部は内傾し、口縁部及び頸部には波状文を施す。63 は胴部の完形品で、径 1.6cm 大の孔をつ。64～72 は弥生土器。64・65 は弥生時代前期末の甕。64 は折曲口縁で、口縁上端部に刻目、胴部にはヘラ状工具による沈線文 7 条を施す。65 は上げ底の底部で、側面から底面にかけて径 0.9cm 大の孔を 2 箇所につ。66～70 は壺。66・67 は弥生時代中期中葉の広口壺で、口縁端部は「コ」字状をなす。67 の肩部には、刺突列点文がみられる。68 は胴部片で、ヘラ状工具による沈線文 7 条を施す。内外面には、ヨコ方向のヘラミガキ調整がみられる。69 は肩部小片で、クシ状工具による斜線文と沈線文を施す。70 は底部片で、平底をなす。68～70 は弥生時代前期末～中期初頭。71 は弥生時代中期中葉の高坏。口縁部は下外方へのび、内方へ肥厚する。内外面共に、丁寧なヘラミガキを施す。72 は弥生時代後期の脚付鉢で、脚端部は丸く仕上げる。73 は土錘。完形品で、長さ 7.7cm、幅 3.8cm、孔径 2.0cm を測る。

(4) 西壁トレンチ出土遺物 (第 217・218 図、図版 56)

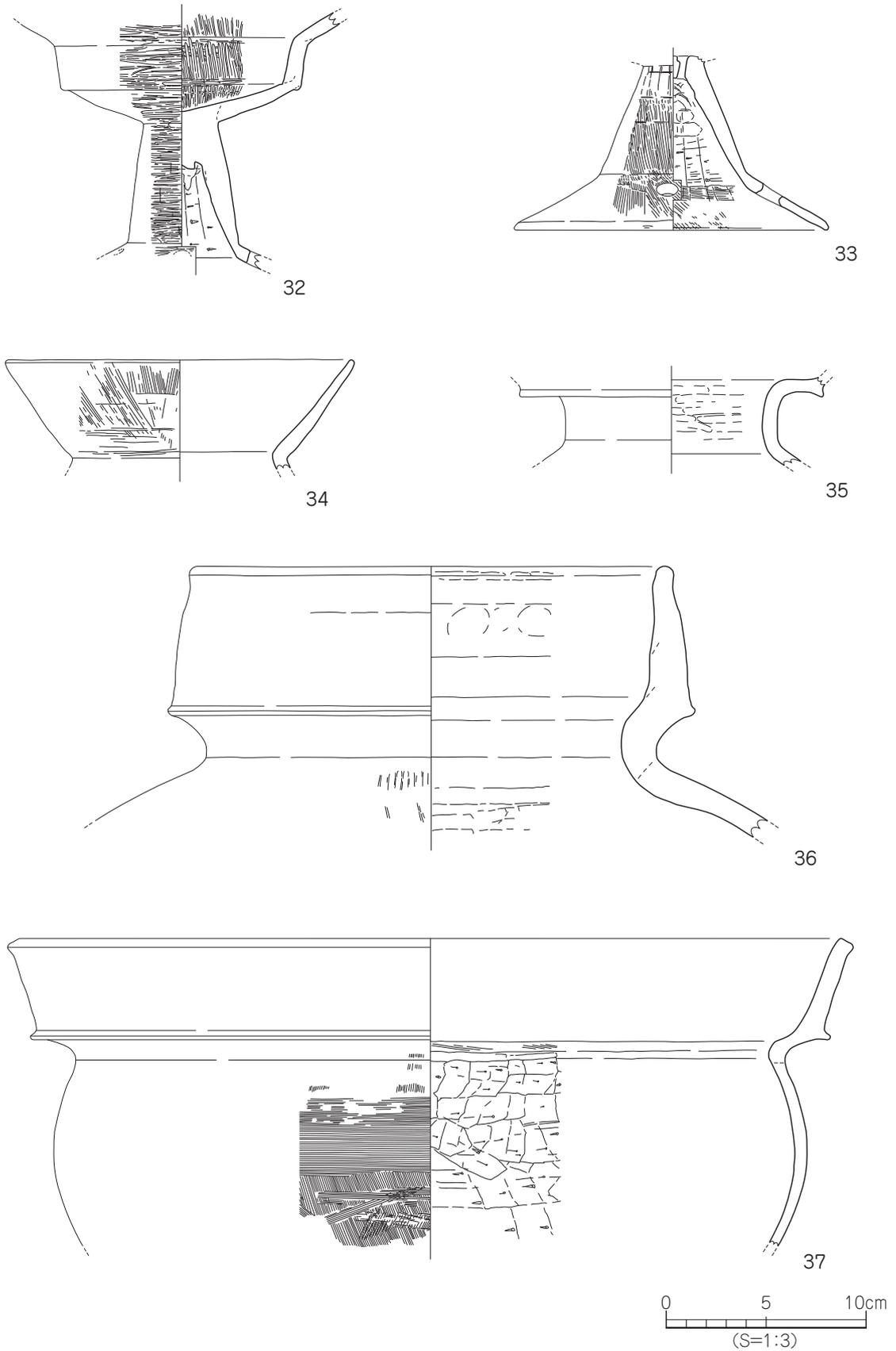
74～76 は甕。74 は口縁端部が内方へ肥厚し、胴部外面にはハケメ調整、内面にはナナメ方向のヘラケズリがみられる。75 は吉備系の甕で、口縁部は直立し、沈線文 7 条を施す。胴部外面にはハケメ調整後にタテ方向のヘラミガキを加える。胴部内面は、ヨコ方向のヘラケズリ調整がみられる。76 は胴部片で、波状文を施す。77～82 は壺。77・78 の口縁部は内湾し、口縁端部は尖り気味に仕上げる。77・79・81 の胴部外面にはヘラケズリ調整、77・79 の口縁部内面にはハケメ調整がみられる。82 は完形品。口径 5.8cm、器高 6.2cm で、小さな平底をなす。83～86 は高坏。83 の坏下部は段状の明瞭な稜をもち、内外面にはヘラミガキを施す。84 は坏下部に稜をもち、内面にはヨコ方向のハケメ調整がみられる。85 の坏部は段をなし、脚裾部には円孔を 3 箇所看守する (本来は 4 箇所)。内外面には、赤橙色の塗彩が残る。86 は脚部片で、脚裾部には径 0.6cm 大の円孔をつ。87 は大型の鉢で、口縁部は外反する。88 は須恵器甕。胴部の完形品で、径 1.5cm 大の孔をつ。89～94 は弥生土器。89 は弥生時代前期末の甕で、口縁部より下がった位置に凸帯を貼り付け、凸帯上に刻目を施す。90 は弥生



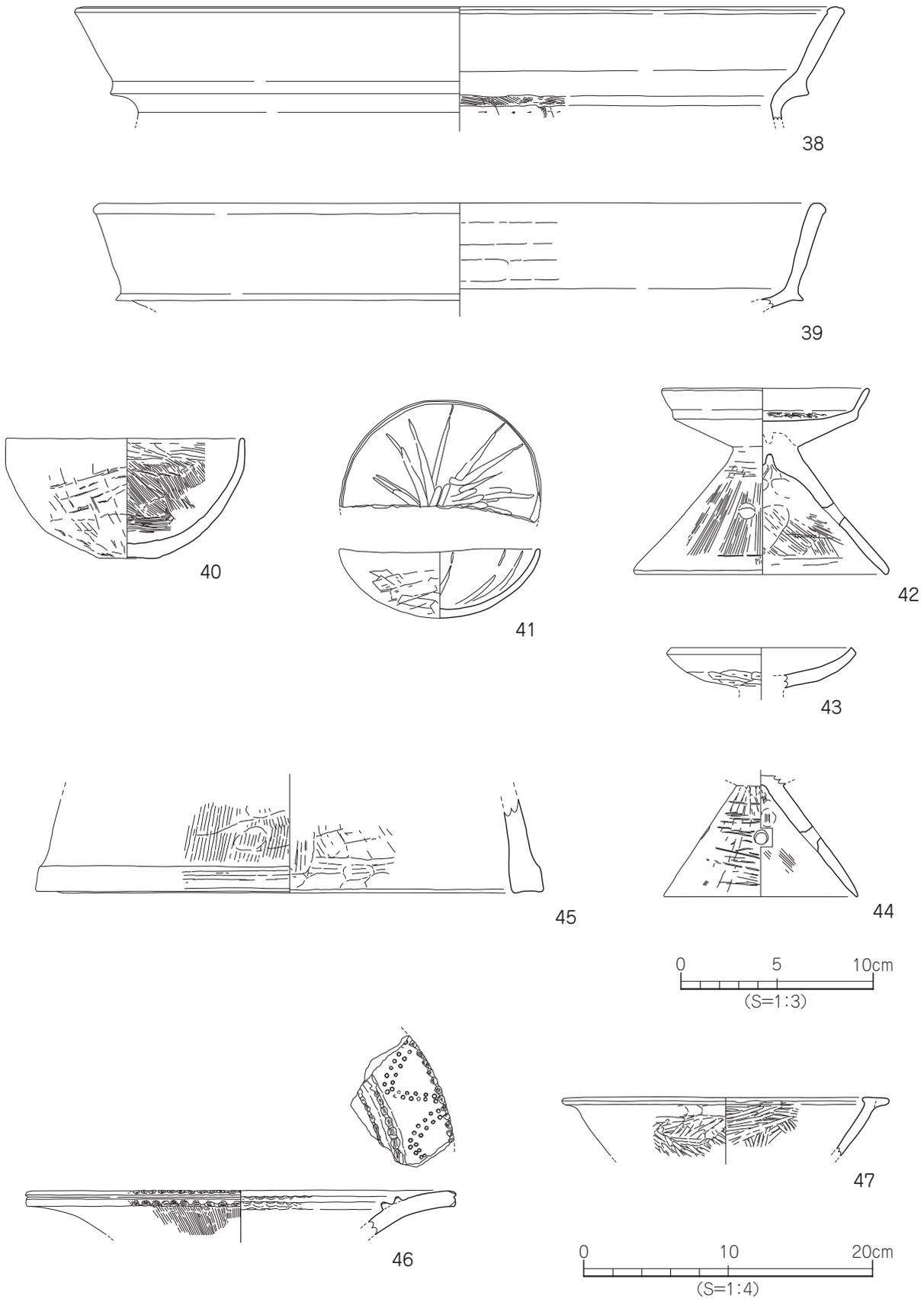
第 211 図 第Ⅳ層取上遺物実測図



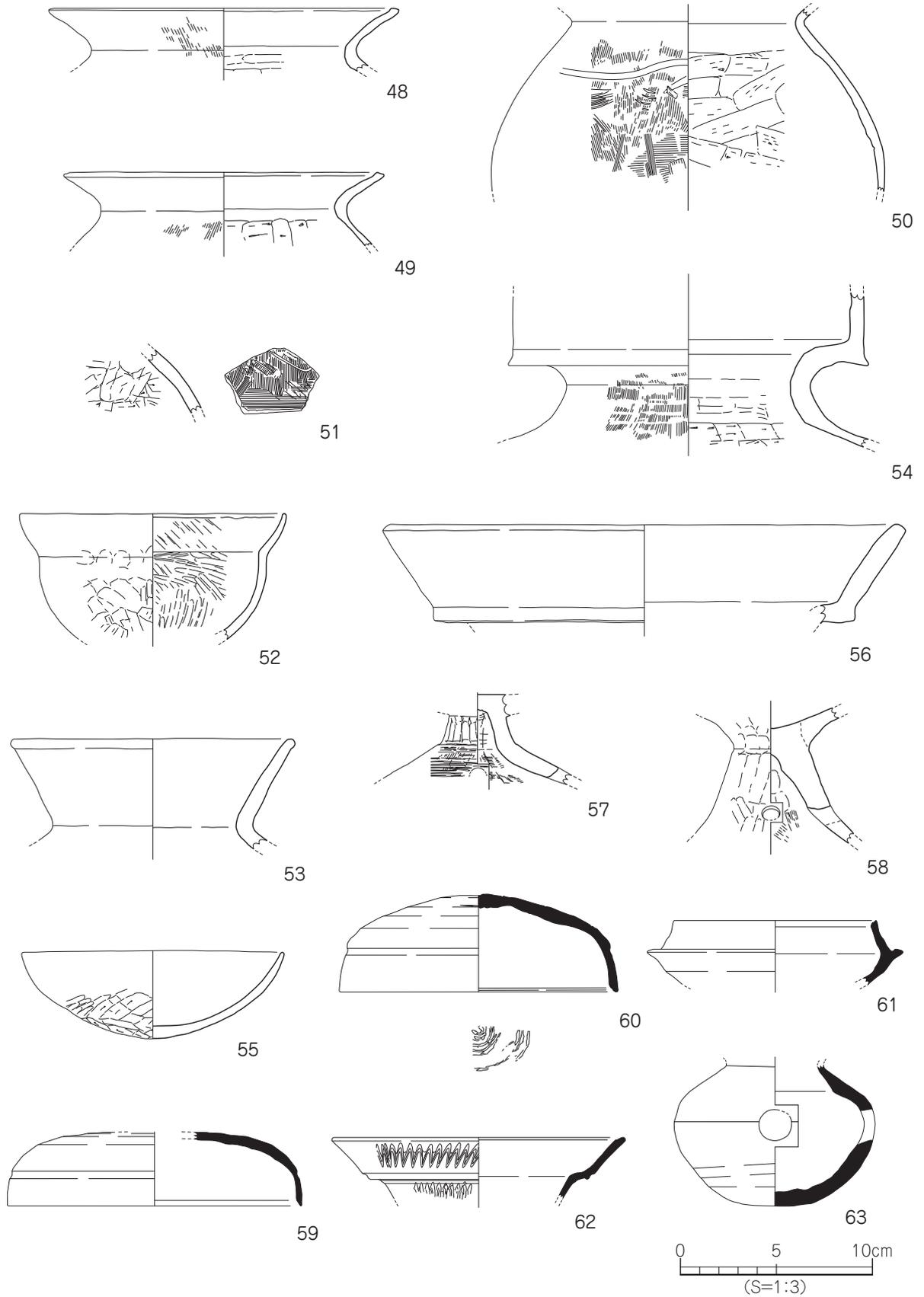
第 212 図 中央トレンチ出土遺物実測図 (1)



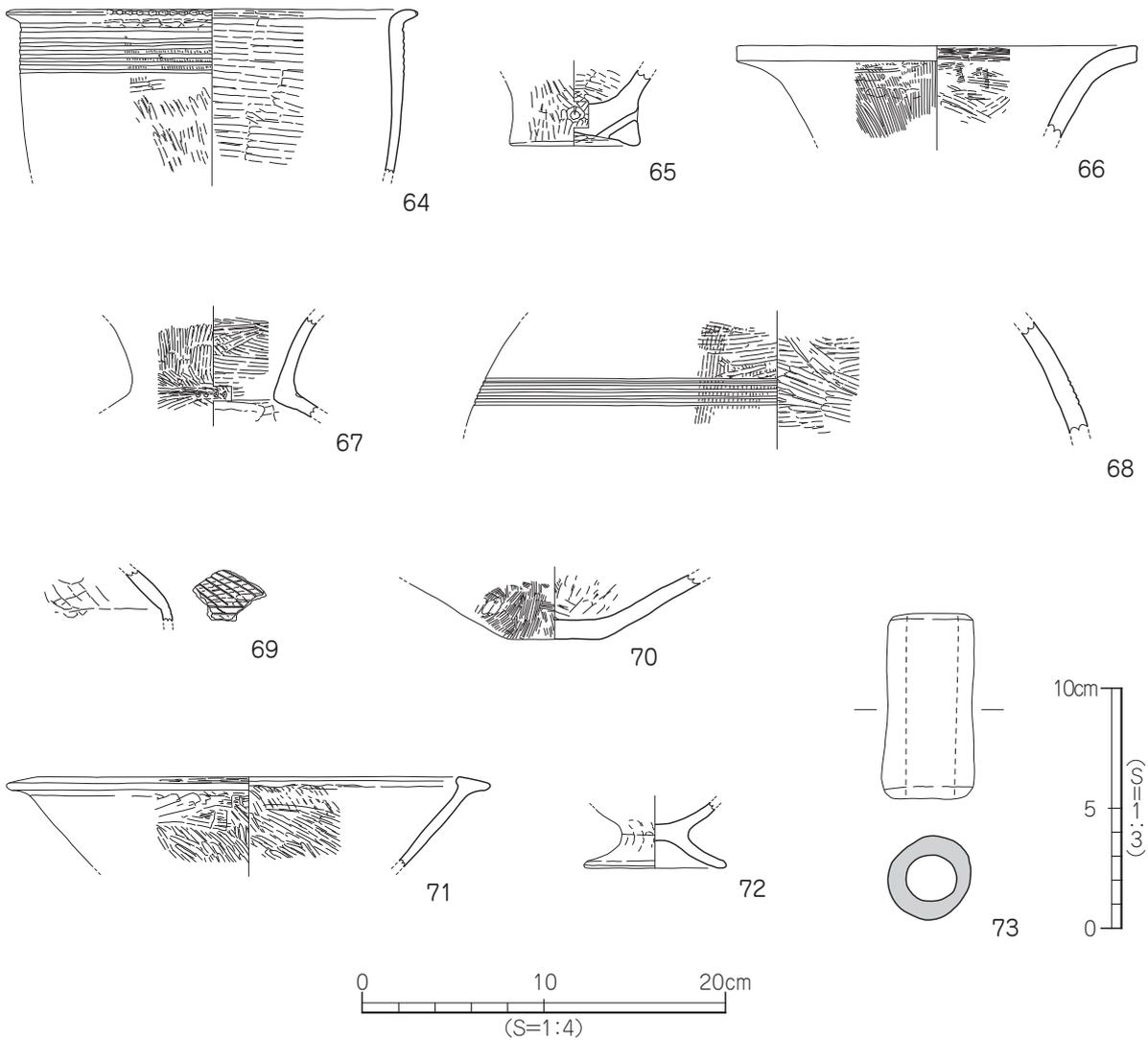
第 213 図 中央トレンチ出土遺物実測図 (2)



第 214 図 中央トレンチ出土遺物実測図 (3)

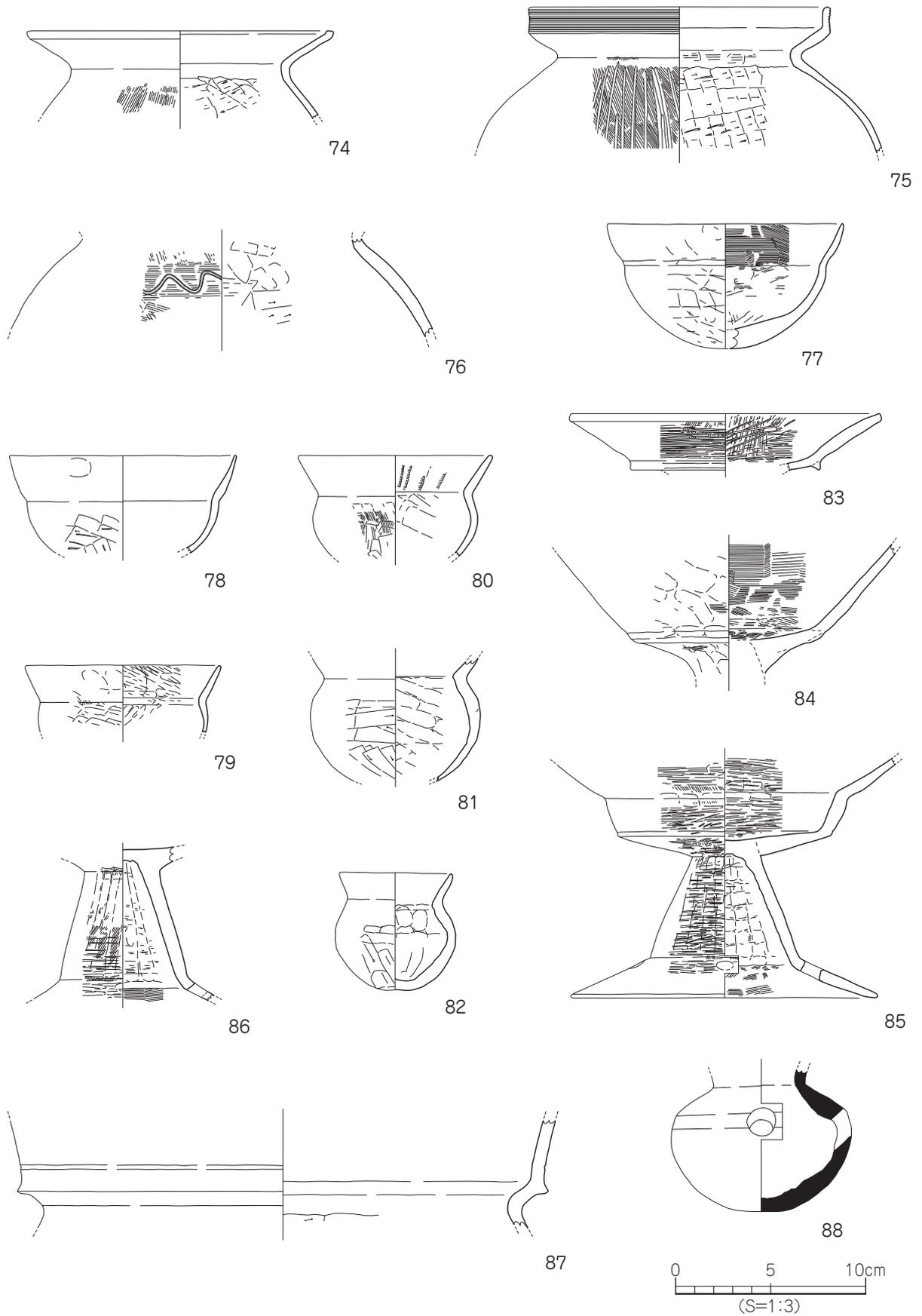


第 215 図 南壁トレンチ出土遺物実測図 (1)

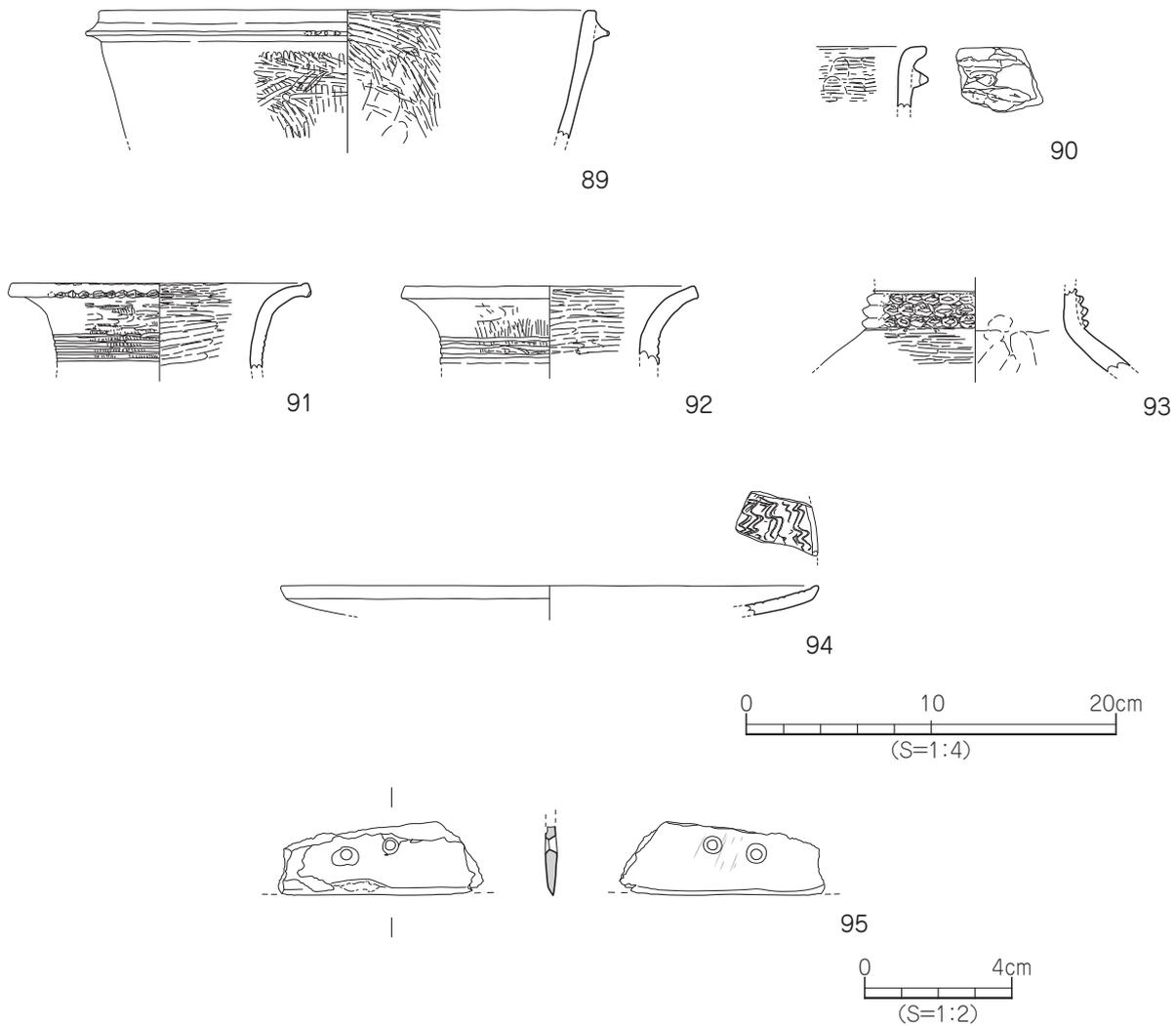


第 216 図 南壁トレンチ出土遺物実測図 (2)

時代中期中葉の甕。折曲口縁で、断面三角形の凸帯を貼り付け、凸帯上に押圧を加える。91～93は弥生時代前期末の壺。91・92は広口壺で、91の口縁下端部には刻目、頸部にはヘラ状工具による沈線文5条を施す。91・92の内面には、ヨコ方向のヘラミガキを施す。93は肩部片で、頸部に断面三角形の凸帯3条を貼り付け、凸帯上に押圧を加えた後に刻目を施す。94は弥生時代後期の器台。口縁部内面には、クシ状工具による波状文を施す。95は磨製の石庖丁。長さ2.0cm、幅5.4cmで、側面は破損している。結晶片岩製。



第 217 図 西壁トレンチ出土遺物実測図 (1)



第 218 図 西壁トレンチ出土遺物実測図 (2)

第 4 節 小 結

調査では、古墳時代前期の遺構と弥生時代から古墳時代までの遺物を確認した。SD1 は弥生時代末から古墳時代初頭の溝で、溝からは該期の土器や板材、木枝、種子などが出土した。半円状に廻る溝であるが、全容や用途については不明である。また、SD1 検出時には調査区全域に該期の遺物が散在しており、これらの状況から、調査地や近隣地域には該期の集落が存在しているものと考えられる。SD1 の検出面は標高 2m 前後であるが、このような標高の低い地点の集落が存在していたことは、松山平野における海岸沿いの集落様相を知るうえで大変貴重な遺跡といえよう。また、第Ⅳ層下層部分からは弥生時代前期末から中・後期までの土器が出土しており、古墳時代のみでなく弥生時代にも調査地近隣地域に該期の集落が存在している可能性が高いと思われる。

本調査においては、平面調査は実施していないが、調査壁の土層観察により第Ⅱ④層上面には足跡と思われる痕跡があり、本来、調査地や近隣地域には水田が営まれていたものと推測される。時期特定は難しいが、既往の調査結果より室町時代の水田址と思われる。

出土品では、第Ⅳ層中より弥生時代末から古墳時代初頭に時期比定される土器が大量に出土した。器種構成をみると、甕形土器、壺形土器、高坏形土器、鉢形土器、器台形土器、支脚形土器がある。甕形土器は口縁端部が肥厚するものが多く、胴部外面には波状文を施すものもみられた。調整方法では胴部外面はハケメ、内面は口頸部境界より、やや下がった地点からヨコ方向のヘラケズリを施している。壺形土器は小型壺のほかに直口壺や複合口縁壺がみられた。なお、出土品には近畿系の有段高坏や吉備系の甕のほかに出雲地方の影響を受けたと思われる大型鉢などが比較的多く含まれている。出土品の特徴から、第Ⅳ層出土品は庄内Ⅲ式（新相）から布留Ⅰ式に相当するものと考えられる。

遺構一覧・遺物観察表 - 凡例 -

以下の表は、本調査地検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。

(1) 遺構一覧表

- 地区欄 グリッド名を記載。
- 規模欄 () は現存値を示す。
- 出土遺物欄 遺物名称を略記した。
例) 土→土師器、木→木製品

(2) 遺物観察表

- 法量欄 () : 復元推定値
- 調整欄 土器の各部位名称を略記した。
例) 天→天井部、口→口縁部、た→たちあがり、坏→坏部、坏上→坏上部、坏下→坏下部、受→受部、頸→頸部、肩→肩部、体→体部、胴→胴部、柱→柱部、脚→脚部、裾→裾部、底→底部
- 胎土欄 胎土欄は混和剤を略記した。
例) 石→石英、長→長石、金→金ウンモ、赤→赤色酸化土粒
() 中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。
例) 石・長 (1~4) → 「1~4mm大の石英・長石を含む」である。
- 焼成欄 焼成欄の略記について
◎→良好

表 131 溝一覧

溝 (SD)	地区	方向	断面形	規模 長さ×幅×深さ (m)	埋土	出土遺物	時期	備考
1	C3・4	南北	皿状	(4.85) × 0.70 × 0.10	黒色粘質土	土・木・種子	弥生時代末～古墳時代初頭	

表 132 SD1 出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
1	甕	口径 (16.8) 残高 1.6	口縁端部は外傾する。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	褐灰色 褐灰色	長 (1) ◎		
2	甕	残高 3.0	外反口縁。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	暗褐色 暗褐色	石・長 (1~4) ◎		
3	甕	残高 4.6	胴上部外面にヘラ状工具による波状文1条あり。小片。	ハケ (8本/cm)	ヘラケズリ	灰褐色 褐灰色	石・長 (1) 金 ◎		

SD1 出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
4	高坏	残高 7.0	脚部片。3/4 の残存。	ヘラミガキ →ナデ	ヘラケズリ	黄灰色 黄灰色	石 (1) ◎		
5	器台	残高 2.1	小片。脚部上端に径 0.3cm 大の孔あり。	ヘラミガキ	マメツ	灰褐色 灰褐色	密赤 ◎		

表 133 SD1 出土遺物観察表 木製品

番号	器種	遺存状態	樹種	法量			備考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)		
6	板材	ほぼ完形	—	69.8	19.4	2.3		51

表 134 第IV層取上遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
7	甕	口径 (13.5) 残高 5.7	口縁端部は外傾し、僅かに内方へ肥厚する。小片。	㊦ヨコナデ ㊧ハケ (7~8本/cm)	㊦ヨコナデ ㊧ヘラケズリ	茶褐色 茶褐色	石・長 (1~3) 金 ◎		51
8	甕	口径 (16.7) 残高 3.6	口縁端部は外傾し、僅かに内方へ肥厚する。小片。	㊦ヨコナデ ㊧タタキ→ハケ	㊦ヨコナデ ㊧ヘラケズリ	茶褐色 茶褐色	石 (1) 赤 ◎		
9	高坏	残高 6.0	坏下部に段をもち、内外面には赤色塗彩を施す。畿内系。	ヨコナデ	ヨコナデ	橙色 橙色	密 ◎		51
10	高坏	底径 (13.6) 残高 7.9	脚裾部に径 1.1cm 大の円孔 (4 箇所) を穿つ。1/3 の残存。	ヘラミガキ	ハケ・ナデ	黄褐色 黄褐色	密金・赤 ◎		51
11	高坏	残高 8.3	脚裾部に径 0.9cm 大の円孔 (4 箇所) を穿つ。	ハケ ヘラミガキ	ヘラケズリ	黄褐色 黄褐色	長 (1) ◎		
12	器台	受部径 10.0 残高 5.9	椀形の受部。口縁端部は外傾する。脚部に径 0.8cm 大の円孔 (3 箇所) を看取。赤色塗彩あり。2/3 の残存。	㊦ヨコナデ ㊧ケズリ ㊧ヘラミガキ	㊦マメツ ㊧ナデ・ハケ	橙色 橙色	石・長 (1) ◎		51
13	器台	受部径 9.4 残高 5.3	椀形の受部。口縁端部は内方へ肥厚する。脚部に径 0.7cm 大の円孔を看取。	ヘラミガキ	㊦ヘラミガキ ㊧ヨコナデ	茶褐色 茶褐色	石・長 (1) 金・赤 ◎	黒斑	52
14	器台	受部径 (9.0) 残高 2.0	口縁部は上方へ屈曲し、口縁端部は尖り気味に仕上げる。1/4 の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	茶褐色 茶褐色	石・長 (1) 金 ◎	黒斑	
15	鉢	残高 3.6	脚部片。脚裾部に径 0.7cm 大の円孔 (4 箇所) を穿つ。	ハケ→ ヘラミガキ	ヨコナデ・ハケ	暗褐色 暗褐色	密 ◎		
16	鉢	口径 (40.6) 残高 5.3	大型品。口縁部は外反し、口縁端部には沈線状の凹みが巡る。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰褐色 灰褐色	石・長 (1~2) 金 ◎		
17	鉢	口径 (30.0) 残高 16.0	口縁部は外反し、口縁端部は丸い。胴部は扁球形をなす。1/5 の残存。	㊦ヨコナデ ㊧ハケ (8本/cm)	㊦ヨコナデ ㊧ケズリ→ナデ	灰褐色 灰褐色	長 (1~2) ◎		52
18	製塩土器	残高 6.3	胴部片。器壁は薄い。1/4 の残存。	タタキ	ハケ→ナデ	灰褐色 黄褐色	石・長 (1) 金 ◎	黒斑	52

表 135 中央トレンチ出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
19	甕	口径 (15.6) 残高 5.5	口縁端部は外傾する。1/4 の残存。	㊦ハケ→ヨコナデ ㊧ハケ(10本/cm) →ナデ	㊦ヨコナデ ㊧ヘラケズリ	灰黄色 灰黄色	石・長 (1~2) 金 ◎	黒斑 煤付着	52
20	甕	口径 (16.2) 残高 3.1	口縁端部は外傾する。1/4 の残存。	ヨコナデ	㊦ヨコナデ ㊧ヘラケズリ	灰黄色 灰黄色	石・長 (1~2) ◎		
21	甕	口径 (14.7) 残高 3.3	口縁端部は内方へ肥厚する。小片。	ヨコナデ	㊦ヨコナデ ㊧ヘラケズリ	灰黄色 灰黄色	長 (1) ◎	黒斑	
22	甕	口径 (16.0) 残高 3.4	口縁端部は内方へ肥厚する。1/4 の残存。	ヨコナデ	㊦ヨコナデ ㊧ヘラケズリ	灰褐色 灰黄色	石・長 (1) ◎	黒斑	

遺物観察表

中央トレンチ出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
23	甕	口径 (15.4) 残高 2.9	口縁端部は上方につまみ上げる。 1/4の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰白色 灰白色	石 (1~2) 金◎		52
24	甕	口径 (16.5) 残高 7.8	口縁部は直立し、沈線文7条を施す。 1/4の残存。吉備系。	㊦ヨコナデ ㊧ハケ (8本/cm) →ミガキ	㊦ヨコナデ ㊧ヘラケズリ	灰褐色 灰褐色	石・長 (1~2) ◎		52
25	甕	残高 7.0	胴上部外面にハケ状工具による刺突 文あり。小片。	タタキ→ ハケ (10本/cm)	ヘラケズリ	灰黄色 灰黄色	石・長 (1~2) 金◎	黒斑	
26	甕	残高 5.3	胴上部外面にハケ状工具による刺突 文あり。小片。	ハケ (7~8本/cm)	ヘラケズリ	黄橙色 黄橙色	石・長 (1~2) 金◎		52
27	甕	残高 9.3	胴上部外面にヘラ状工具による波状 文1条あり。1/6の残存。	ハケ (7~8本/cm)	ヘラケズリ	褐色 褐色	石・長 (1~2) 金◎	黒斑	53
28	甕	残高 5.4	胴上部外面にクシ状工具による波状 文7条あり。小片。	ハケ (7~8本/cm)	ヘラケズリ	黄橙色 黄橙色	石・長 (1~5) ◎		
29	甕	残高 6.9	胴上部外面にクシ状工具による波状 文7条あり。小片。	ハケ (7本/cm)	ヘラミガキ ヘラケズリ	灰褐色 灰褐色	石・長 (1) ◎	黒斑	53
30	高坏	口径 (20.6) 残高 7.1	口縁部は直線的に立ち上がり、口縁 端部は丸く仕上げる。坏下部に明瞭 な稜あり。1/2の残存。	ヘラミガキ	ヘラミガキ	橙色 橙色	密 ◎		53
31	高坏	口径 (18.8) 残高 4.7	坏下部は段をなし、口縁端部は上方 に肥厚する。1/4の残存。	ヨコナデ ヘラミガキ	ヘラミガキ	灰褐色 灰褐色	密 ◎	黒斑	53
32	高坏	残高 12.8	坏下部は段をなし、脚裾部に径0.9 cm大の円孔を穿つ。1/3の残存。	ヘラミガキ	㊦ヘラミガキ ㊧ヘラケズリ	橙色 橙色	石・長 (1~3) 金・赤 ◎		53
33	高坏	底径 (15.5) 残高 8.7	脚裾部に径1.1cm大の円孔を穿つ。 坏脚部接合部に径0.3cm大の孔あり (焼成前穿孔)。	ヘラミガキ →ハケ	㊦ヘラケズリ ㊧ハケ	黄褐色 黄褐色	石・長 (1~2) 赤 ◎		53
34	壺	口径 (17.0) 残高 5.5	直口壺。口頸部内面に稜あり。小片。	ハケ (8本/cm)	ヨコナデ	褐色 褐色	密 ◎		
35	壺	残高 4.1	二重口縁壺。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰黄色 灰黄色	石・長 (1~3) ◎		53
36	壺	口径 (23.0) 残高 13.5	二重口縁壺。口縁端部は丸く仕上 げる。大型品。1/8の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰黄色 灰黄色	石・長 (1~6) ◎		53
37	鉢	口径 (41.0) 残高 15.3	大型品。口縁部は外傾し、口縁端部 は「コ」字状に仕上げる。1/4の残存。	㊦ヨコナデ ㊧ハケ (11本/cm)	㊦ヨコナデ ㊧ヘラケズリ	灰黄褐色 灰黄褐色	石・長 (1~3) 金◎	黒斑	54
38	鉢	口径 (38.9) 残高 5.9	大型品。口縁端部は内方へ肥厚する。 小片。	ヨコナデ	㊦ヨコナデ ㊧ヘラケズリ	灰黄褐色 灰黄褐色	石 (1) 金◎	黒斑	
39	鉢	口径 (37.4) 残高 5.5	大型品。口縁端部は丸く仕上げる。 小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰褐色 灰褐色	石・長 (1) 金◎		
40	鉢	口径 12.2 底径 3.0 器高 6.2	直口口縁。底部は僅かに平底。2/3 の残存。	ヨコナデ	㊦ヨコナデ ㊧ハケ (8本/cm)	灰褐色 灰褐色	石・長 (1~3) ◎	黒斑	54
41	鉢	口径 10.3 器高 3.6	直口口縁。口縁端部は丸く仕上げる。	ヨコナデ	ヨコナデ ヘラミガキ	灰褐色 灰褐色	長 (1) ◎	黒斑	54
42	器台	口径 10.5 底径 12.9 器高 9.7	口縁部は外傾し、脚部中位に径0.9 cm大の円孔を3箇所に穿つ。	㊦ヨコナデ ㊧ミガキ→ハケ	㊦ヘラミガキ ㊧ハケ (9~10本/cm)	黄褐色 黄褐色	長 (1) ◎		54
43	器台	口径 (9.3) 残高 2.1	口縁端部は「コ」字状に仕上げる。 1/2の残存。	㊦ヨコナデ ㊧ヘラケズリ	ヨコナデ	橙色 橙色	密 ◎		
44	器台	底径 10.0 残高 6.3	脚部中位に径0.7cm大の円孔を4箇 所に穿つ。	ヘラミガキ →ヨコナデ	ハケ→ナデ	黄褐色 黄褐色	密 ◎		54
45	甌	底径 (23.4) 残高 4.9	甌形土器の底部か。底端部は僅かに 凹む。小片。	ハケ (5本/cm)	ナデ	灰黄色 灰黄色	石・長 (1~3) 金◎		54
46	壺	口径 (29.7) 残高 3.1	広口壺。口縁面に沈線文1条と刻 目文。口縁部内面に凸帯文2条と竹 管文あり。小片。	ハケ (5~7本/cm)	ヨコナデ	灰褐色 灰褐色	石・長 (1) ◎		54
47	高坏	口径 (19.0) 残高 4.1	口縁部は水平にのび、口縁端部は内 方へ肥厚する。小片。	ヘラミガキ	ヘラミガキ	茶褐色 茶褐色	石・長 (1) ◎		54

表 136 南壁トレンチ出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
48	甕	口径 (17.3) 残高 3.3	口縁端部は外傾し、内方へ肥厚する。小片。	ハケ→ヨコナデ	㊶ヨコナデ ㊷ヘラケズリ	灰白色 灰白色	密 ◎		
49	甕	口径 (15.8) 残高 3.9	口縁端部は外傾し、内方へ僅かに肥厚する。小片。	㊶ヨコナデ ㊷ハケ (8本/cm) →ヨコナデ	㊶ヨコナデ ㊷ヘラケズリ	灰褐色 灰褐色	石・長 (1~2) ◎		
50	甕	残高 9.5	胴上部外面にヘラ状工具による波状文1条あり。1/6の残存。	タタキ →ハケ (8~10本/cm)	ヘラケズリ	灰褐色 灰褐色	石・長 (1~2) 金 ◎	黒斑 煤附着	55
51	甕	残高 3.4	ヘラ状工具による波状文あり。小片。	タタキ→ハケ	ヘラケズリ	灰黄色 灰黄色	密 ◎		
52	壺	口径 (13.6) 残高 6.6	内湾口縁。口縁端部は尖り気味に丸く仕上げる。1/4の残存。	㊶ヨコナデ ㊸板状工具によるナデ	ヘラミガキ →ヨコナデ	橙色 橙色	石・長 (1~2) 赤 ◎		55
53	壺	口径 (14.2) 残高 5.6	直口壺。口縁端部は丸い。小片。	ヨコナデ	マメツ	灰白色 灰白色	石・長 (1~3) ◎		
54	壺	残高 8.1	二重口縁壺。1/4の残存。	㊶ヨコナデ ㊷ハケ (8本/cm) →ヨコナデ	㊶ヨコナデ ㊷ヘラケズリ	灰黄色 灰黄色	石・長 (1~3) 赤 ◎	黒斑	
55	鉢	口径 13.4 器高 4.6	直口口縁。口縁端部は尖り気味に丸く仕上げる。3/4の残存。	㊶ヨコナデ ㊸ヘラケズリ	ヨコナデ	茶褐色 茶褐色	石・長 (1) 金・赤 ◎	黒斑	55
56	鉢	口径 (26.4) 残高 5.1	大型品。口縁端部は「コ」字状に仕上げる。小片。	ヨコナデ	マメツ	灰黄色 灰黄色	石・長 (1~3) ◎		
57	鉢	残高 4.7	脚部片。脚裾部に円孔2箇所看取。	ヘラミガキ	ハケ・ナデ	黄橙色 黄橙色	石・長 (1~2) 金・赤 ◎		
58	高坏	残高 7.1	脚柱部に径0.8cm大の円孔あり。	ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	黄橙色 黄橙色	石・長 (1~2) 金 ◎		
59	坏蓋	口径 (15.0) 残高 3.9	天井部と口縁部の境界は凹線が巡る。1/4の残存。	㊸回転ヘラケズリ ㊶回転ナデ	㊸円弧叩き ㊶回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		55
60	坏蓋	口径 (14.2) 器高 5.1	天井部と口縁部の境界は凹線が巡る。1/4の残存。	㊸回転ヘラケズリ ㊶回転ナデ	㊸円弧叩き ㊶回転ナデ	暗灰色 暗灰色	密 ◎		
61	坏身	口径 (10.4) 残高 3.4	たちあがり端部は内傾する。小片。	㊸回転ナデ ㊸回転ヘラケズリ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		
62	甕	口径 (15.0) 残高 3.2	口縁部と頸部に波状文あり。小片。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		55
63	甕	底径 6.0 残高 7.4	胴部中位に径1.6cm大の孔を穿つ。1/2の残存。	㊷回転ナデ ㊸回転ヘラケズリ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		55
64	甕	口径 (21.0) 残高 9.0	折曲口縁。口縁端部に刻目、胴部にヘラ状工具による沈線文7条あり。小片。	㊶ヨコナデ ㊷ヘラミガキ	ヘラミガキ	茶褐色 茶褐色	石・長 (1~3) 金 ◎	煤附着	55
65	甕	底径 6.6 残高 4.2	上げ底。底部側面に径0.9cm大の孔を2箇所穿つ。	ヘラミガキ	ヘラミガキ	にぶい黄色 にぶい黄色	石・長 (1~4) ◎	黒斑	55
66	壺	口径 (21.8) 残高 5.1	広口壺。口縁端部は「コ」字状に仕上げる。1/5の残存。	㊶ヨコナデ ㊷ハケ (6本/cm)	㊶ハケ (6本/cm) ㊷ハケ→ ヘラミガキ	褐色 褐色	石・長 (1~5) ◎		
67	壺	残高 5.5	肩部に刺突列点文あり。小片。	ヘラミガキ	ヘラミガキ	にぶい黄色 にぶい黄色	石・長 (1~2) 赤 ◎		
68	壺	残高 6.2	ヘラ状工具による沈線文7条あり。小片。	ハケ →ヘラミガキ	ヘラミガキ →ナデ	茶褐色 茶褐色	石・長 (1~3) ◎		
69	壺	残高 3.4	クシ状工具による斜線文と沈線文あり。小片。	ナデ	ナデ	灰褐色 灰褐色	石・長 (1~2) ◎	黒斑	
70	壺	底径 (4.8) 残高 3.6	平底。1/3の残存。	ハケ (6本/cm)	ハケ→ナデ	褐色 褐色	石・長 (1~3) ◎	黒斑	
71	高坏	口径 (23.0) 残高 5.0	口縁部は下外方へのび、口縁端部は内方へ肥厚する。小片。	ヘラミガキ	ヘラミガキ	茶褐色 茶褐色	石・長 (1~3) ◎		
72	鉢	底径 (7.6) 残高 3.6	脚部片。脚端部は丸い。	ヨコナデ	ナデ	灰白色 灰白色	石・長 (1~2) 金 ◎		
73	土錘	長さ 7.7 幅 3.8 厚さ 0.8	ほぼ完形。径2.0cmの孔あり。	ナデ	ナデ	赤褐色 赤褐色	石・長 (1~5) ◎		55

遺物観察表

表 137 西壁トレンチ出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
74	甕	口径 (15.4) 残高 4.6	口縁部は内方へ肥厚する。小片。	㊶ヨコナデ ㊷ハケ	㊶ヨコナデ ㊷ヘラケズリ	褐色 褐色	石・長 (1~2) 金 ◎		
75	甕	口径 (15.4) 残高 7.7	口縁部に7条の沈線文あり。2/3の残存。吉備系。	㊶ヨコナデ ㊷ハケ(10本/cm) →ヘラミガキ	㊶ヨコナデ ㊷ヘラケズリ	黄褐色 黄褐色	石・長 (1) 金 ◎		56
76	甕	残高 5.1	胴上部外面にクシ状工具による波状文あり。小片。	ハケ→ナデ	ヘラケズリ	灰白色 灰白色	石・長 (1) 赤 ◎		
77	壺	口径 (12.2) 器高 6.6	内湾口縁。口縁部は尖り気味に仕上げる。1/4の残存。	ヨコナデ・ナデ ヘラケズリ	㊶ハケ(10本/cm) ㊷ナデ	灰黄色 灰黄色	石 (1) ◎		
78	壺	口径 (11.7) 残高 5.1	内湾口縁。口縁部は尖り気味に仕上げる。小片。	㊶ナデ ㊷ヘラケズリ	ヨコナデ	橙色 橙色	密 金 ◎		56
79	壺	口径 (10.0) 残高 3.5	直口口縁。口縁部は丸い。小片。	㊶ヨコナデ ㊷ヘラケズリ	㊶ハケ(6本/cm) ㊷ヨコナデ	橙色 橙色	石・長 (1~2) ◎		56
80	壺	口径 (10.0) 残高 5.3	直口口縁。口縁部は丸い。小片。	㊶ヨコナデ ㊷ハケ (8~10本/cm)	㊶ヨコナデ ㊷ナデ	橙色 橙色	密 ◎		
81	壺	残高 6.5	胴部片。1/4の残存。	ヘラケズリ	工具によるナデ	橙褐色 褐色	石 (1) 赤 ◎		
82	壺	口径 5.8 底径 1.5 器高 6.2	小型品。完存。僅かに平底。	㊶ヨコナデ ㊷ナデ	ヨコナデ	灰黄色 灰黄色	密 ◎		56
83	高坏	口径 (16.0) 残高 3.0	坏下部に段をもち、口縁部は「コ」字状に仕上げる。1/5の残存。	ヘラミガキ	ヘラミガキ	橙色 褐色	密 赤 ◎		
84	高坏	残高 6.8	坏下部に稜をもち。1/3の残存。	ヨコナデ	ハケ (8~10本/cm) ナデ	灰黄色 灰黄色	石・長 (1) 赤 ◎		56
85	高坏	底径 (15.8) 残高 12.7	坏下部に段をもち、脚裾部に径1.0cm大の円孔を3箇所で見取(本来は4箇所)。赤色塗彩あり。	㊸ヘラミガキ ㊹ヘラケズリ→ ハケ→ヘラミガキ	㊸ヘラミガキ ㊹ハケ→ナデ	褐色 褐色	密 赤 ◎		56
86	高坏	残高 8.1	脚部片。脚裾部に径0.6cm大の円孔を3箇所で見取(本来は4箇所)。	ハケ →ヘラミガキ	ハケ→ナデ	褐色 褐色	密 ◎		
87	鉢	残高 5.6	大型品。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰白色 灰白色	石・長 (1~3) ◎		
88	甕	底径 2.0 残高 7.4	胴部上位に径1.5cm大の孔あり。胴底部完形。	㊺回転ナデ ㊻回転ヘラケズリ	回転ナデ	暗灰色 暗灰色	密 ◎	自然釉	56
89	甕	口径 (26.8) 残高 7.0	口縁部より下がった位置に断面三角形の凸帯を貼付け、凸帯上に刻目を施す。小片。	㊶ヨコナデ ㊷ヘラミガキ	ヘラミガキ	暗灰褐色 暗灰褐色	石・長 (1~2) 金 ◎		56
90	甕	残高 3.3	折曲口縁。胴部に断面三角形の凸帯を貼付け、凸帯上に押圧を加える。小片。	ヨコナデ	ヘラミガキ	灰黄色 灰黄色	石・長 (1) ◎		
91	壺	口径 (15.8) 残高 4.6	広口壺。口縁下端部に刻目、頸部にヘラ描き沈線文5条あり。1/4の残存。	㊶ヨコナデ ㊷ハケ(9本/cm) →ナデ	ヘラミガキ	茶褐色 茶褐色	石・長 (1~3) 赤 ◎		56
92	壺	口径 (15.5) 残高 4.2	広口壺。頸部にヘラ状工具による沈線文3条あり。1/5の残存。	㊶ヨコナデ ㊷ハケ	ヘラミガキ	茶褐色 茶褐色	石・長 (1~4) ◎		
93	壺	残高 4.0	頸部に凸帯3条を貼付け、凸帯上に押圧→刻目を施す。1/8の残存。	㊸ナデ ㊹ヘラミガキ	ナデ	暗褐色 暗褐色	石・長 (1~3) ◎		56
94	器台	口径 (29.0) 残高 1.6	口縁部内面にクシ状工具による波状文あり。小片。	ナデ	ナデ	褐色 褐色	密 金 ◎		

表 138 西壁トレンチ出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
95	石庖丁	1/2	緑色片岩	2.0	5.4	0.3	5.918	破損品	56

第 15 章 調査の成果と課題

余戸中ノ孝遺跡 1・2・4・5 次調査、余戸柳井田遺跡 1・2・3・6 次調査、東垣生八反地遺跡 1・3・4 次調査、南吉田南代遺跡 1 次調査では、弥生時代から近世までの遺構や遺物を確認した。

ここでは 12 遺跡の調査成果をもとに時代毎の集落の様相や集落の変遷についてのまとめを行う。

1. 集落の様相

(1) 弥生時代～古墳時代

南吉田南代遺跡 1 次調査の第 IV 層の遺物は、下位からは弥生時代前期から後期、中位からは弥生時代末から古墳時代初頭、上位からは古墳時代後期の遺物が大量に出土したことは、調査地近辺の集落の展開が窺えるものである。試掘調査で同層の堆積を確認し、その範囲は東西約 95m、南北約 75m に広がり、層厚 40～80cm 以上の厚い堆積であることから、同層は低地に弥生時代前期から古墳時代後期にかけて徐々に堆積したものとする。周辺の現地地形は、調査地より北側がやや高位であることや遺物がローリングを受けていることなどから、調査地より北側の比較的近い場所に集落の存在を推定する。また、同層中からの出土遺物には土錘や製塩土器などが含まれており、海岸線に近い集落での漁労や塩生産などの行為を検討する必要がある。同層中位で検出した SD1 は、弥生時代末から古墳時代初頭にかけての溝であり、海岸線から約 1.8km 内陸の標高約 2m で遺構を検出したことは、同層の堆積する過程において集落が及んでいたことを示すものである。

(2) 古墳時代

余戸中ノ孝遺跡 5 次調査 SB1 から出土した須恵器には、松山平野南部の丘陵上に展開する伊予市市場南組窯址で生産された市場系須恵器が多く含まれており、松山平野で出土例が少ない市場系須恵器の流通を考える上で貴重な資料である。また、同遺跡の 6 世紀後半の溝や柱穴は、調査地南隣や東隣の余戸中ノ孝遺跡 3・6 次調査の竪穴建物や掘立柱建物で構成される集落とつながるものと考えられ、調査地一帯に同時期の集落が展開していたことを示すものである。

(3) 古代

余戸柳井田遺跡 3 次調査 SD2 や SD3 など平安時代後期の集落遺構は僅かであることから、余戸中ノ孝遺跡に集中していた弥生時代末から古墳時代後期にかけて継続的な集落は、古代になると調査地外のエリアに移動したことも想定する。

(4) 中世

報告した 12 遺跡の東端に位置する余戸中ノ孝遺跡 2 次調査から西端の南吉田南代遺跡 1 次調査までの距離は約 1.2km を測り、その大半の遺跡で鎌倉時代の集落址や室町時代の水田耕作を主体とする生産址を検出した。余戸中ノ孝遺跡 1 次調査の集落内から検出した 13 世紀後半の土壙墓 1 は周溝を伴うもので、中世の土壙墓で周溝を伴うものは松山平野において初例であり、墓の構造を解明する上で重要なものである。また、副葬された吉備系土師器碗は松山平野では流通が未確認であり、吉備地方との関連をもつ人物の墓と考えられる。余戸中ノ孝遺跡 4 次調査の掘立柱建物や溝・土坑・井戸・鋤跡などの配置状況や稀薄な遺構密度などから、小屋的な建物の傍に井戸を伴う生産地としての様相が強い。このことは余戸中ノ孝遺跡 4 次調査から北北西約 50 m の余戸柳井田遺跡 7 次調査において集落或いは生産地の縁辺部と考えられているが、同 7 次調査から北北西約 350m の余戸柳井田遺跡 1

次調査までの間は、試掘調査で砂礫層や粘土層の堆積を確認しており、東西に西流する旧河川の影響を受け土地利用が無かったと考える。余戸柳井田遺跡1次調査から東垣生八反地遺跡1次調査までの南北方向約150m区域では、鎌倉時代を中心とした建物址や区画性の高い溝、室町時代の水田址を検出し、集落や生産域をもつ区域が旧河川の北側に展開することが分かった。余戸柳井田遺跡2次調査のSD2～4は地割や区画性をもつ東西溝で、この区域を南限付近と考える。同3次調査で検出した13世紀前半から13世紀後半にかけての掘立柱建物址や溝、土坑、柱穴など集落遺構は調査区南側に集中した状況である。また、西隣の同6次調査1区では同時期の溝、土坑、井戸、柱穴などの集落遺構の北側に砂層に覆われた自然流路の南岸を検出し、北岸は東垣生八反地遺跡3次調査となり、河幅約25mで北東方向から南西方向に西流する自然流路であることが分かった。東垣生八反地遺跡1次調査は、地形の高い南側を中心に掘立柱建物址、溝、土坑、井戸、土壙墓などで構成された集落遺構であり、掘立1は総柱構造をもつ周辺遺跡のなかでも規模の大きな建物で、その建物の東や北側には東西方向にSD8・12、南北方向にSD2・3が配置され、これらの溝は建物を区画するものと考えられる。この掘立1から南方約10mの土壙墓1は、墓壙内に据えられた長方形の木棺内に南枕の仰臥屈葬された被葬者の頭部付近に空間を伴っており、その空間には副葬品が置かれていたと想定する。また、余戸中ノ孝遺跡2次調査の土壙墓1や余戸柳井田遺跡3次調査の土壙墓1などの様に松山平野の中世墓では、被葬者の埋葬方法として側臥屈葬の北枕西向き傾向が強いが、南枕の仰臥屈葬を検討する上での貴重な資料である。東垣生八反地遺跡4次調査で隣接する鎌倉時代の2基の井戸はSE2の廃絶後にすぐ隣にSE1を構築しており、当時の豊富な水源を裏付けるものである。また、SE2は堀方内から完形品の土器が多数出土しており、これらは井戸構築時の祭祀行為と考える。同遺跡1次調査の1区、2区の北端付近は地形が北向きに傾斜し遺構も希薄なことなどから、SD8は集落の北限付近と考えられ、同調査地から北約110mの洗地川との間は、試掘調査において砂層や粘土層などの河川堆積を確認しており、この間は旧河川が存在していたことを裏づけるものである。

室町時代の水田は、余戸柳井田遺跡や東垣生八反地遺跡一帯で検出しており、当地一帯は生産域として利用されていたが、洪水砂に覆われて水田は放棄されたと考える。水田には無数の根株痕に混じり牛や人の足跡を検出し、余戸柳井田遺跡6次調査や東垣生八反地遺跡3次調査では水田内を規則性をもち移動する人の足跡を確認した。また、東垣生八反地遺跡1次調査北端では、低地に洪水砂で覆われた鎌倉時代から室町時代にかけての水田址も検出し、中世期には低地部分で2時期に跨り生産域が存在していたこと分かった。

(5) 近 世

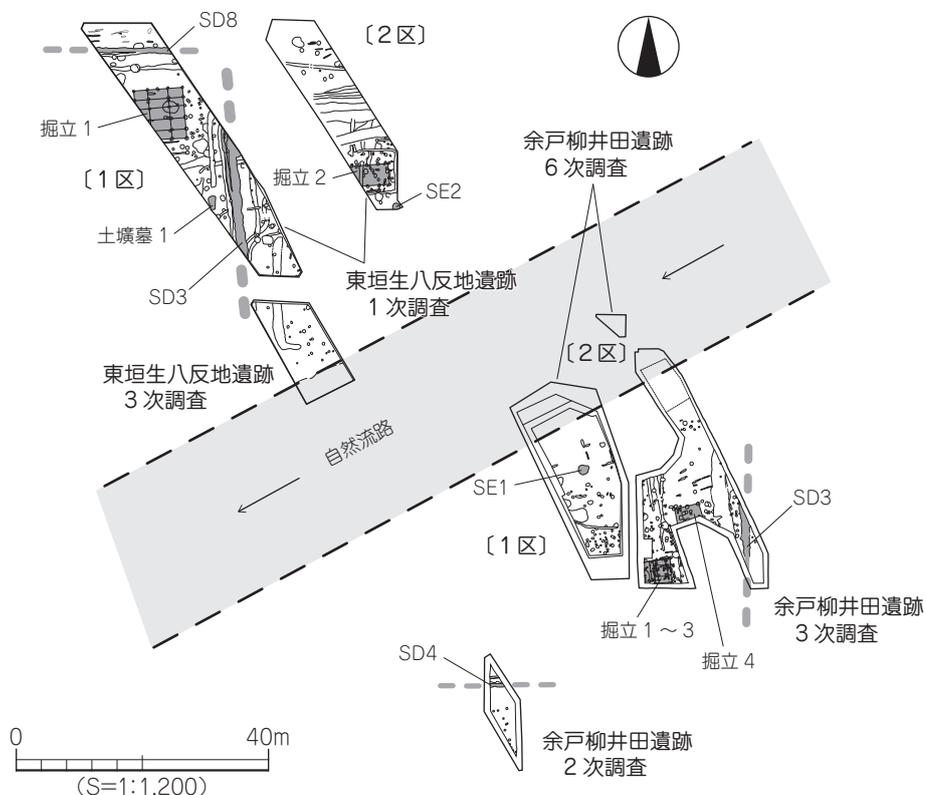
余戸中ノ孝遺跡4次調査のSD1は、東西方向に延びる地割や区画性をもつ溝で、瓦質製品や陶磁器類などが多数出土したことから、調査地から南に展開する集落が存在していたと考える。

2. 集落の変遷

前述のとおり、松山平野西部の沿岸部における弥生時代前期から中世にかけての地理的環境と遺跡との関係を解明する資料を得ることが出来た。南吉田南代遺跡1次調査で堆積層から出土した遺物から、弥生時代前期末から中期初頭と弥生時代末から古墳時代初頭の2時期を中心に集落が海岸線から約1.8km内陸の微高地上に展開し、漁労具や製塩土器など海との関わりをもつ集落の存在を想定する。同調査地より約3km内陸の余戸弘川遺跡にも、この2時期頃の掘立柱建物や溝・土坑で構成される集落があり、沿岸部にかけて集落が点在していたことを示すものである。海岸線から約3km内陸の

余戸中ノ孝遺跡5次調査の古墳時代中期の竪穴建物や古墳時代後期の集落の区画性をもつ溝は、余戸中ノ孝遺跡3・6次調査の集落に関連しており、両遺跡に展開する弥生時代末から古墳時代初頭、古墳時代前期から古墳時代後期にかけての継続的に集落が経営されたものと推定する。また、竪穴建物内で出土した市場系須恵器は、松山平野内での出土例が希少であるが、少なくともこの集落で消費していることを証明するものであり、市場系須恵器の流通や消費を考える上での貴重な資料である。この様に弥生時代前期から古墳時代後期までの人々の営みの痕跡は確認出来たが、古代前期から中期にかけての資料は不明であり、当該期には調査地一帯は土地利用が無かったことを推定する。余戸中ノ孝遺跡、余戸柳井田遺跡、東垣生八反地遺跡の調査成果から、平安時代後期に出現した集落は鎌倉時代が中心となるもので、余戸柳井田遺跡2次調査SD2～4や同3次調査SD3、東垣生八反地遺跡1次調査SD3・8などの溝は、集落の区画や地割の構造を考える上で重要なものである。集落は自然流路を挟んで余戸柳井田遺跡と東垣生八反地遺跡に分かれており、両遺跡のSD3の東と西に展開する区画を想定する(第219図)。また、東垣生八反地遺跡1次調査の掘立1は総柱構造の建物で屋敷墓や周囲で出土した貿易陶磁器などから、平野沿岸部を拠点とする高階級層の施設であることを視野に入れる必要がある。室町時代には、居住域から水田耕作を主とした生産域として土地利用されており、何らかの要因による集落の拠点移動が行われたものと考えられる。

調査地周辺の沖積低地上に位置する余戸、垣生、南吉田地区は遺跡の空白地であったが、今回報告した12遺跡や周辺の調査により沿岸部低地における弥生時代前期から中世にかけての集落の展開を解明する重要な資料が得られた。今後、周辺の発掘調査の事例を増やすことで、松山平野で見つからない沿岸部の集落展開の様相が解明されるものと期待する。



第219図 余戸柳井田遺跡・東垣生八反地遺跡合成図

写真図版

写真図版 1 ～ 5 : 余戸中ノ孝遺跡 1 次調査

写真図版 6 ・ 7 : 余戸中ノ孝遺跡 2 次調査

写真図版 8 ～ 12 : 余戸中ノ孝遺跡 4 次調査

写真図版 13 ～ 17 : 余戸中ノ孝遺跡 5 次調査

写真図版 18 ・ 19 : 余戸柳井田遺跡 1 次調査

写真図版 20 ～ 22 : 余戸柳井田遺跡 2 次調査

写真図版 23 ～ 29 : 余戸柳井田遺跡 3 次調査

写真図版 30 ～ 33 : 余戸柳井田遺跡 6 次調査

写真図版 34 ～ 40 : 東垣生八反地遺跡 1 次調査

写真図版 41 ・ 42 : 東垣生八反地遺跡 3 次調査

写真図版 43 ～ 48 : 東垣生八反地遺跡 4 次調査

写真図版 49 ～ 56 : 南吉田南代遺跡 1 次調査



1. 調査地全景（東より）



2. 2区完掘状況（西より）



3. 1区完掘状況（北西より）



1. 堀立 2 検出状況 (東より)



2. 土墳墓 1 検出状況 (北東より)



3. 土墳墓 1 断面 (北東より)



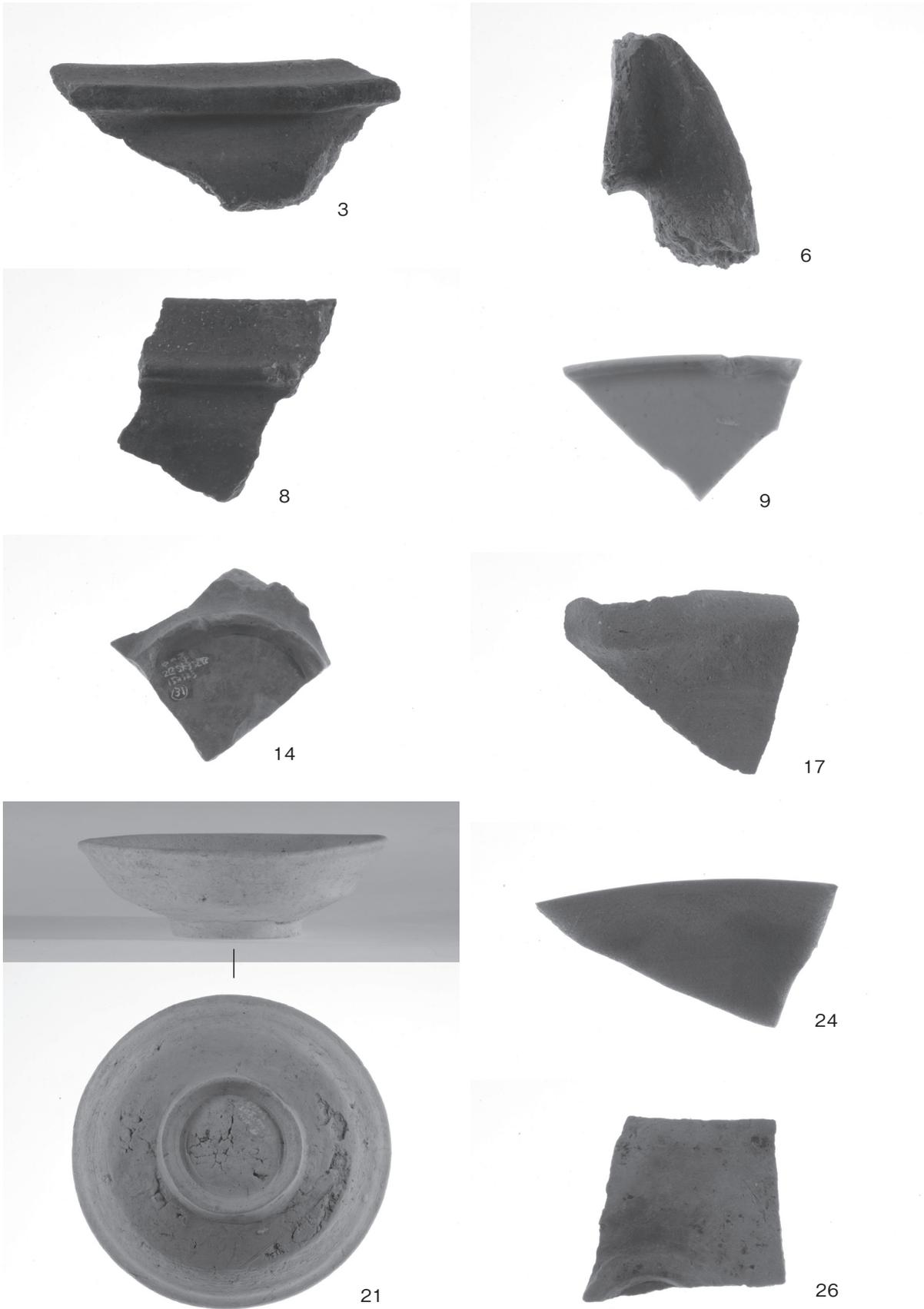
1. 土壙墓1 人骨出土状況①
(南より)



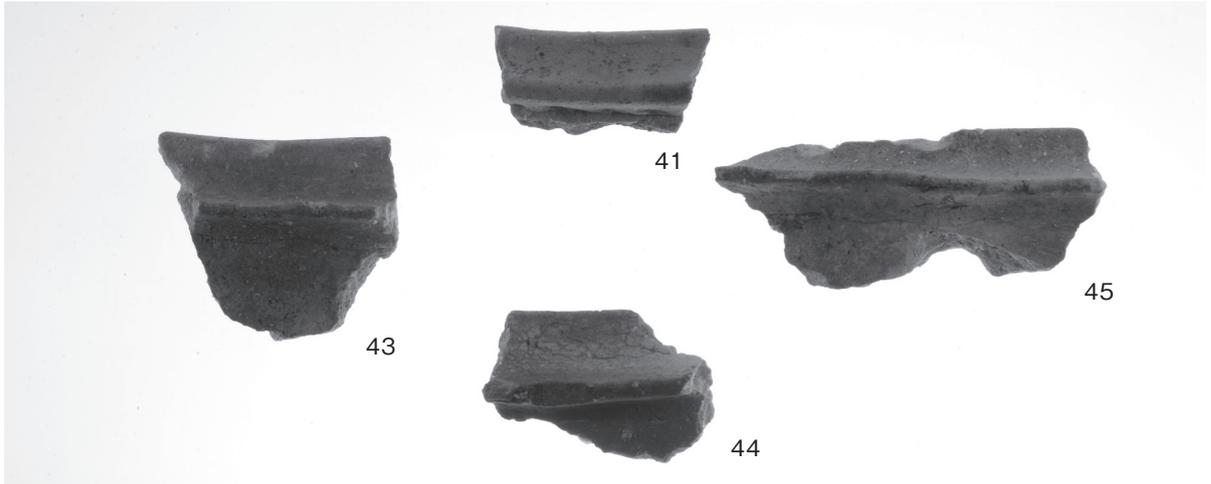
2. 土壙墓1 人骨出土状況②
(南より)



3. 現地説明会風景 (北より)



1. 出土遺物 (SD1 : 3・6、SD2 : 8・9、SK1 : 14・17、土壙墓 1 : 21・24、周溝 1 : 26)



1. 出土遺物 (SP56 : 30、包含層 : 36・41・43～45・48～50)



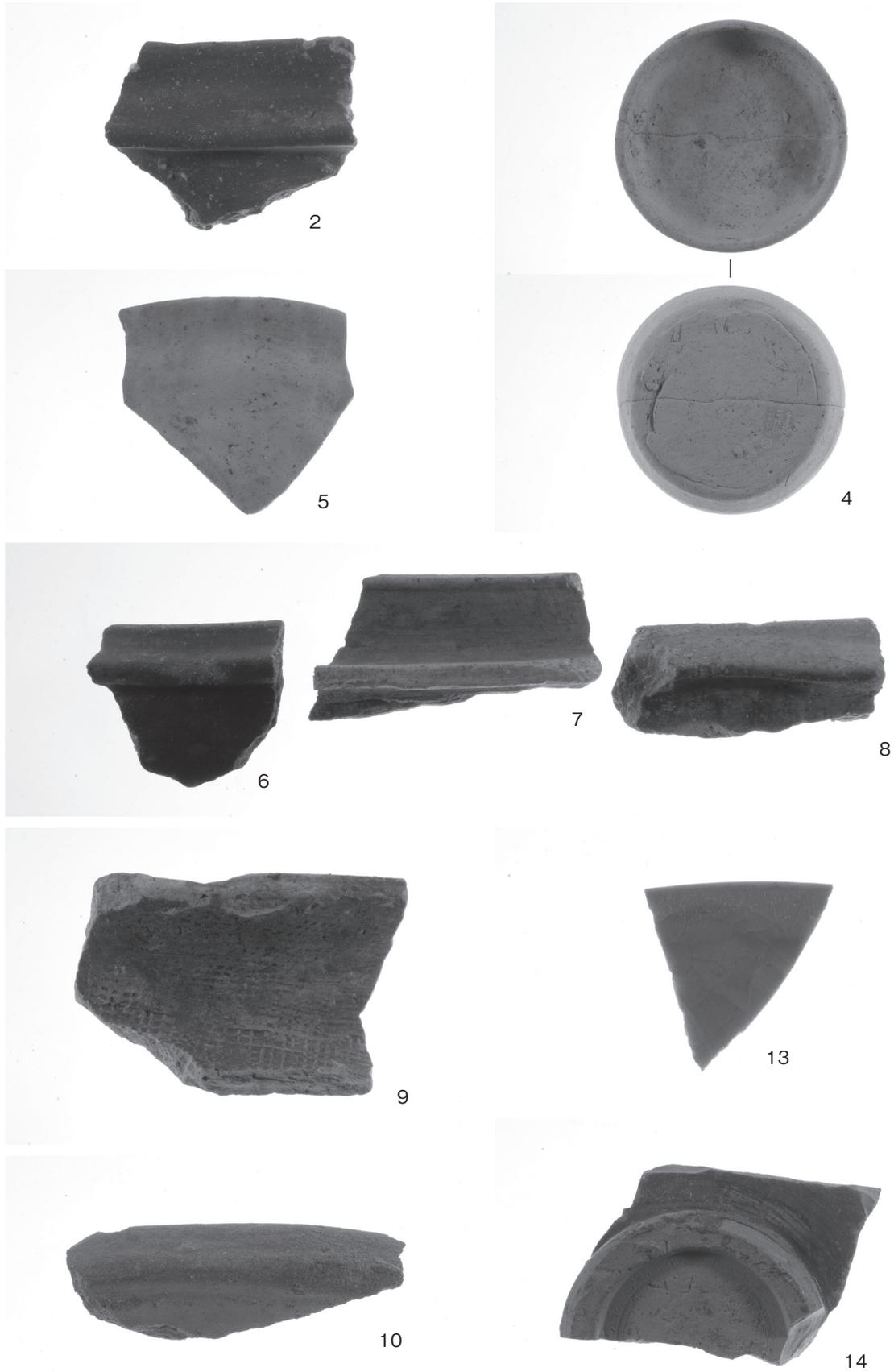
1. 表土掘削状況（北より）



2. 南壁土層（北より）



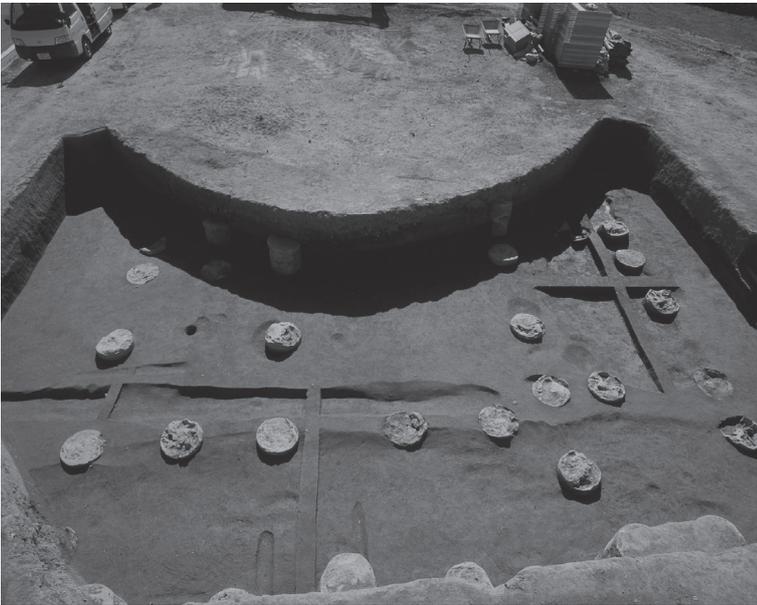
3. 完掘状況（南西より）



1. 出土遺物 (SK1 : 2、包含層 : 4 ~ 10・13・14)



1. 調査地から余戸柳井田遺跡を望む
(南東より)



2. 1区遺構完掘状況(北より)



3. 2区遺構完掘状況(北より)



1. 2区 SD1 遺物出土状況(北より)



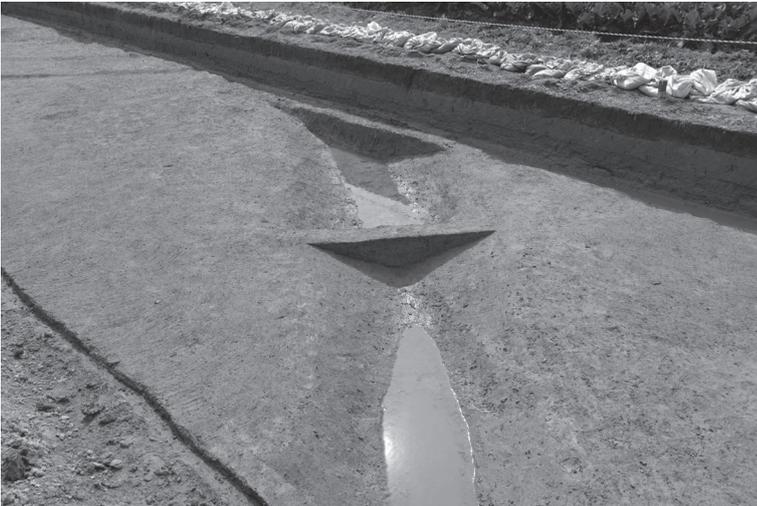
2. 3区掘削状況(東より)



3. 4区遺構完掘状況(南東より)



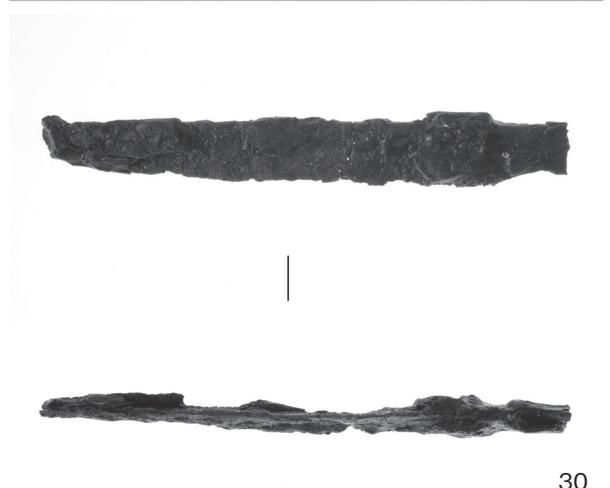
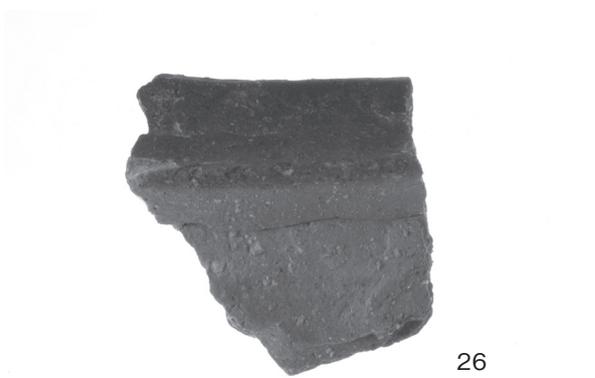
1. 4区掘立1 完掘状況（東より）



2. 4区SD11 完掘状況（南より）

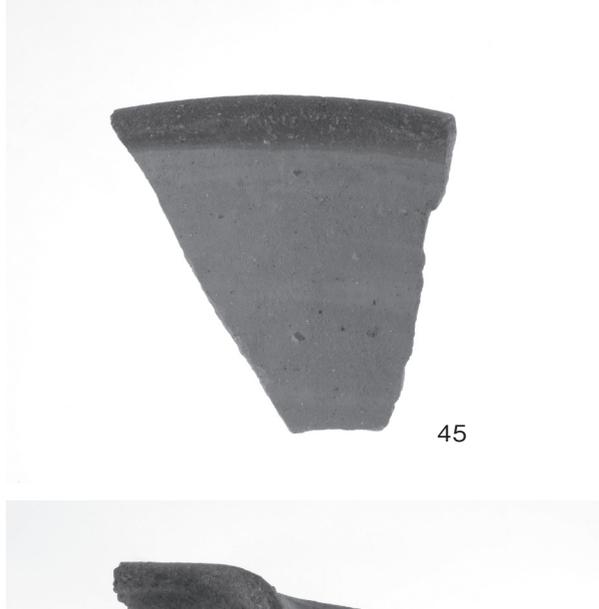


3. 4区SE1 半截状況（南より）



1. 出土遺物 (SD1 : 3、SD5 : 12、SD6 : 18、SD10 : 22、SD11 : 23・24・26、SK3 : 30)

図
版
12



1. 出土遺物 (SE1 : 32、SX2 : 41・43・45、SP15 : 48、SP17 : 51)



1. 1区完掘状況（東より）



2. 2区完掘状況（東より）



3. 3区完掘状況（東より）



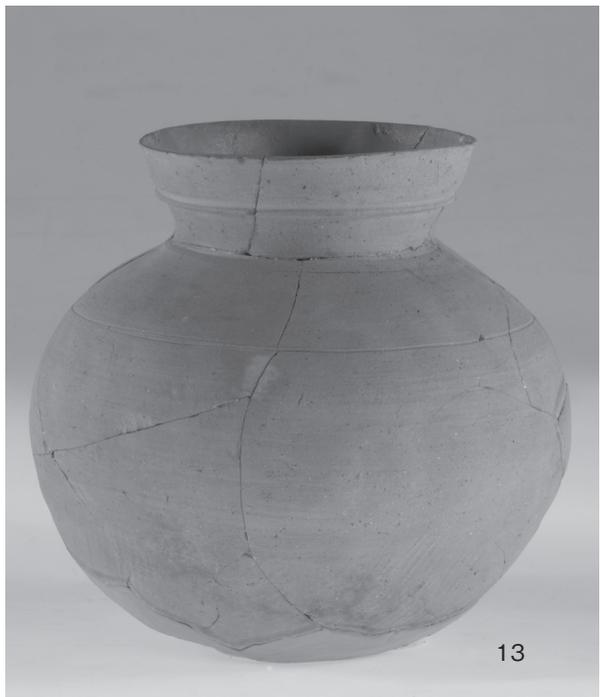
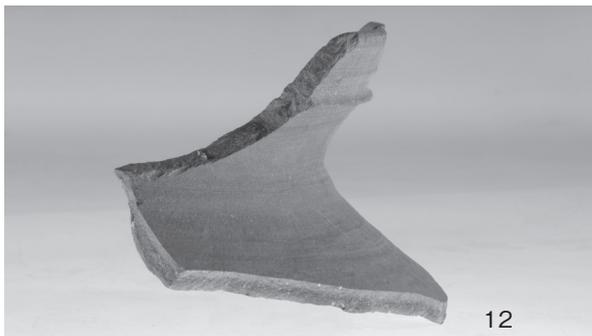
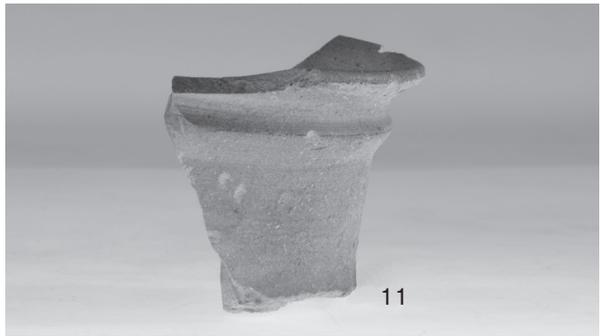
1. 3区西壁土層（東より）



2. SB1 検出状況（東より）

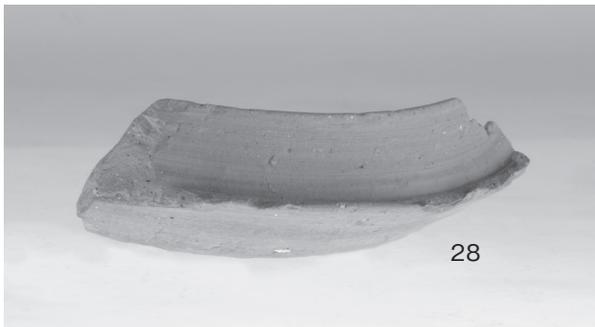
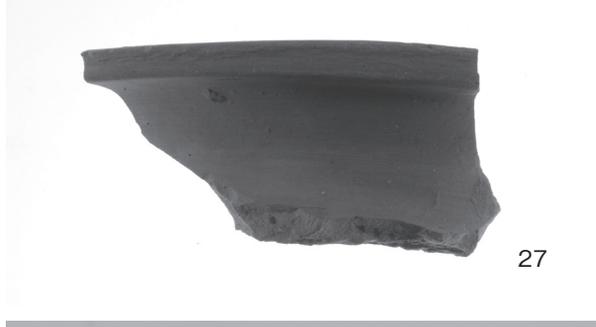
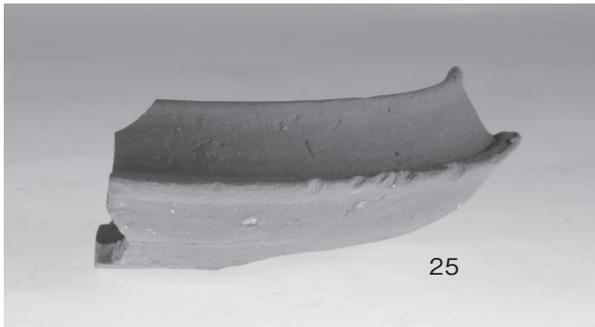
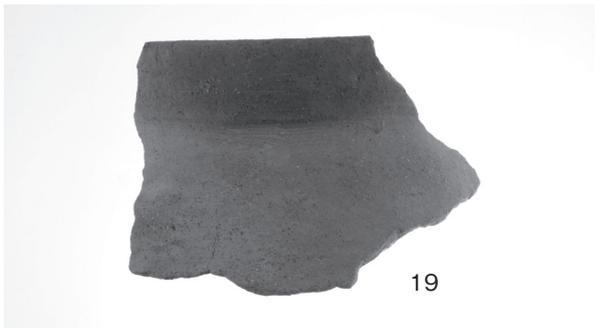
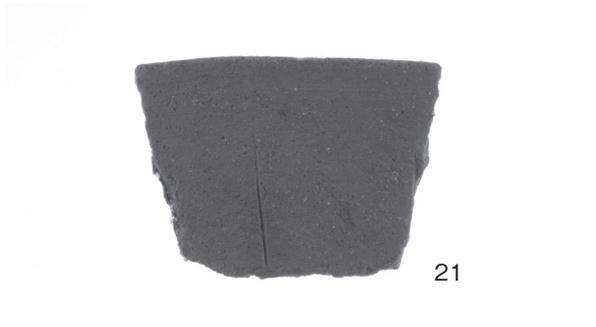
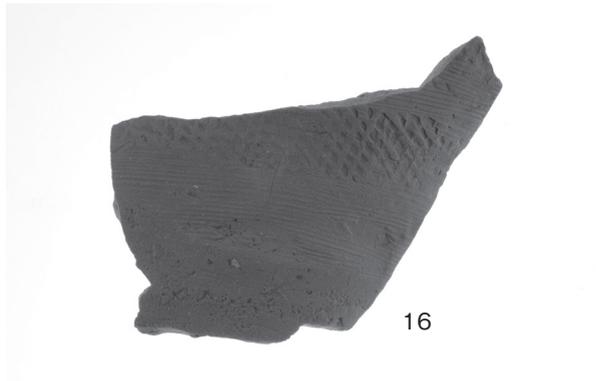


3. SB1 遺物出土状況（北より）



1. SB1 出土遺物①

図
版
16



1. 出土遺物 (SB1 ② : 15 ~ 17、SD1 : 19・21・23・25・27、SP5 : 28・30)



1. 包含層出土遺物



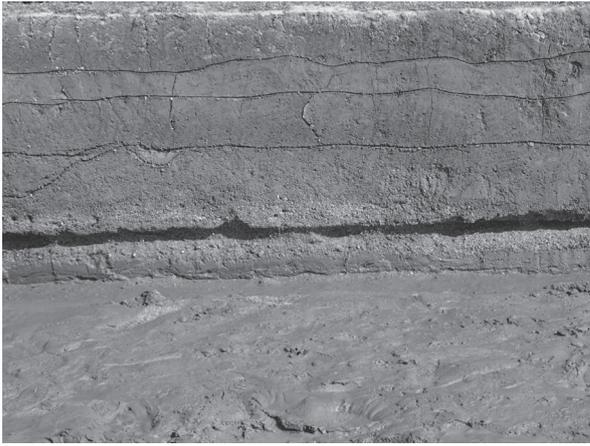
1. 調査地全景（南東より）



2. 1区完掘状況（南より）



3. 2区完掘状況（北より）



1. 1区東壁土層（西より）



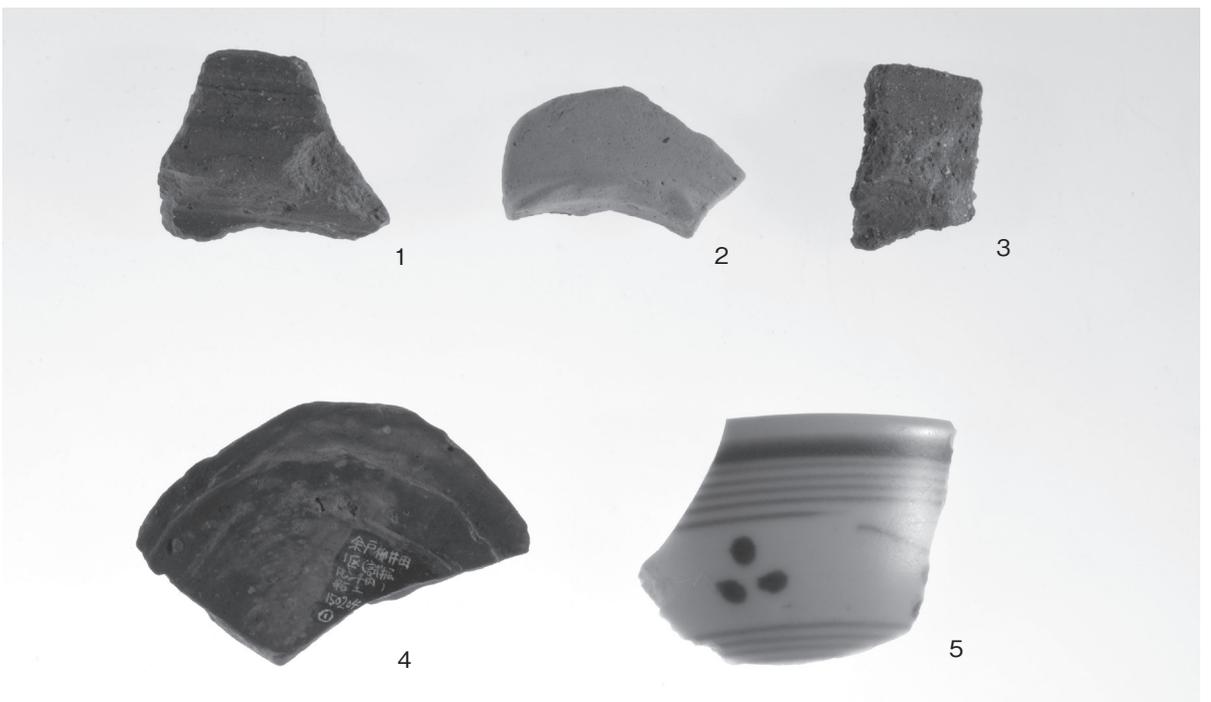
2. 2区足跡完掘状況（西より）



3. 1区足跡検出状況（南より）



4. 作業風景（北西より）



5. 出土遺物（第Ⅱ②層：1、第Ⅱ④層：2・3、第Ⅱ⑦層：4、1区トレンチ：5）



1. 1面完掘状況（南より）



2. 2面完掘状況（北より）



3. 西壁土層（東より）



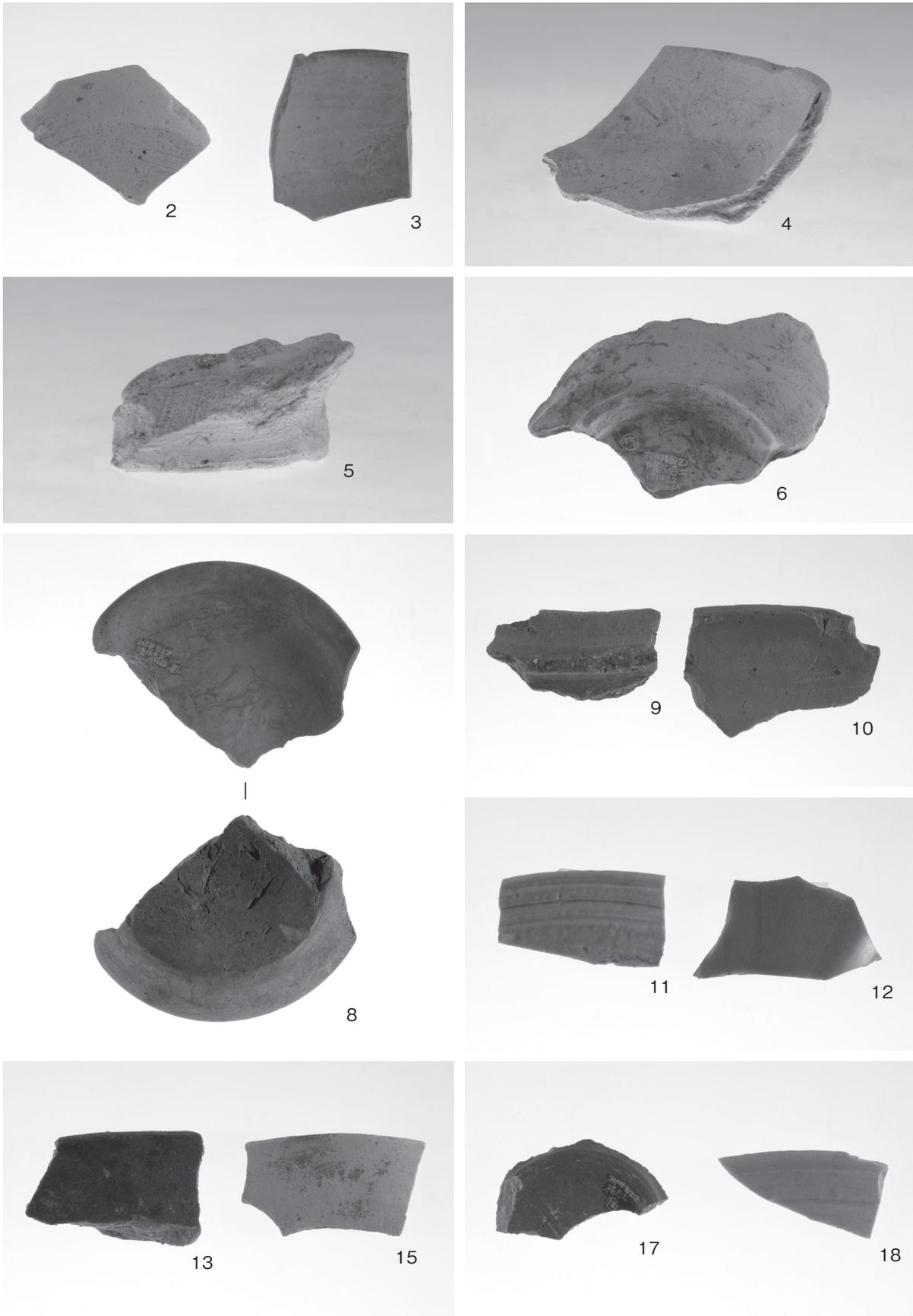
1. 1面足跡検出状況（北より）



2. SD2～4断面（東より）



3. SD2～4検出状況（南東より）



1. 出土遺物 (SD2 : 2、SD3 : 3、SD4 : 4、第Ⅱ⑫層 : 5・6・8～12、第Ⅱ⑭層 : 13・15・17・18)



1. 調査前全景（南より）



2. 1面足跡検出状況（北より）



3. 1面足跡検出状況（西より）



1. 2面完掘状況（北より）



2. 掘立1～3検出状況（北より）



3. 掘立柱材検出状況（南より）



1. SD1 ~ 3 検出状況 (北より)



2. SD1 ~ 3 断面 (南より)



3. SD1 遺物出土状況 (南より)



4. SK4 検出状況 (南より)

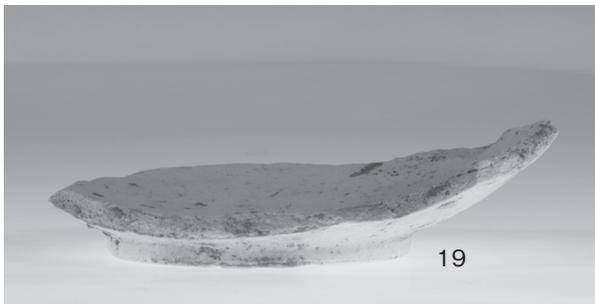
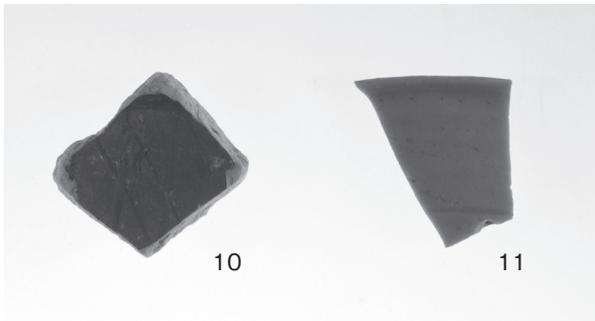
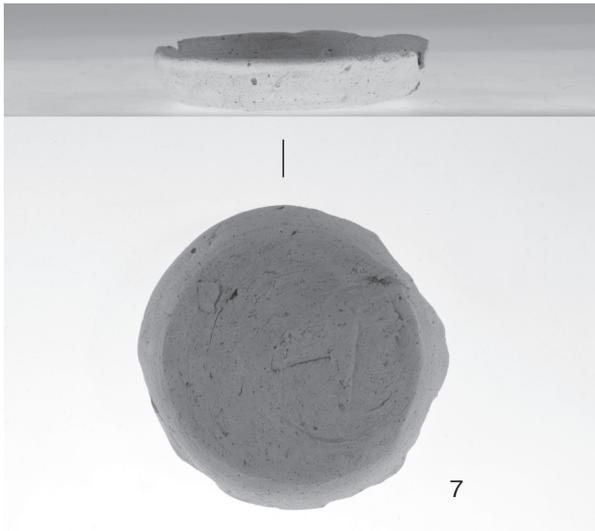


5. 土壇墓 1 検出状況① (西より)

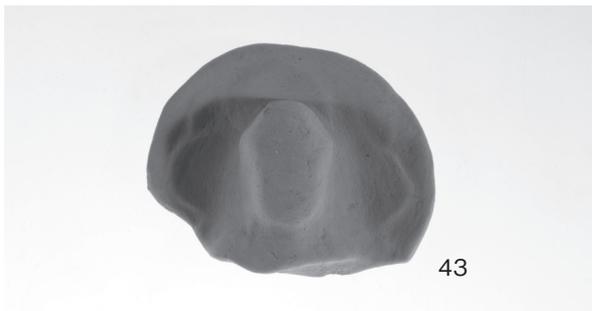
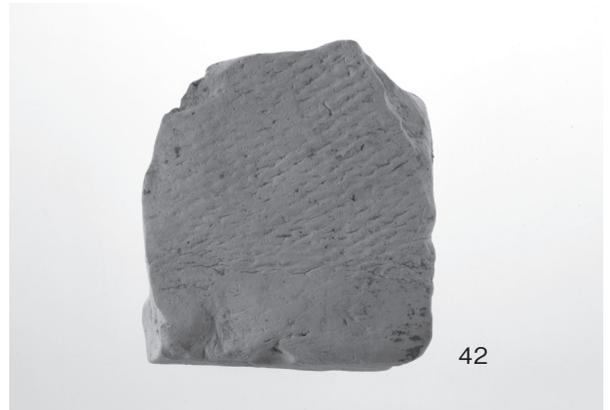
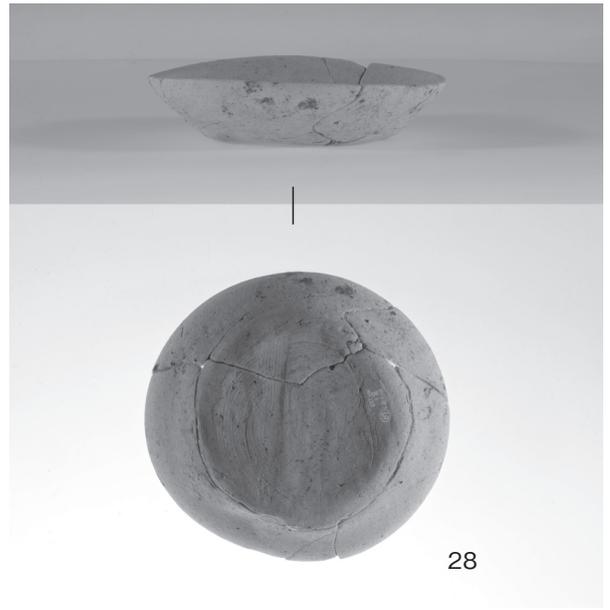
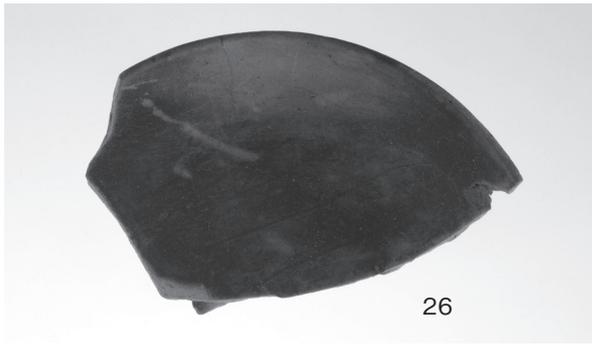


6. 土壇墓 1 検出状況② (南より)

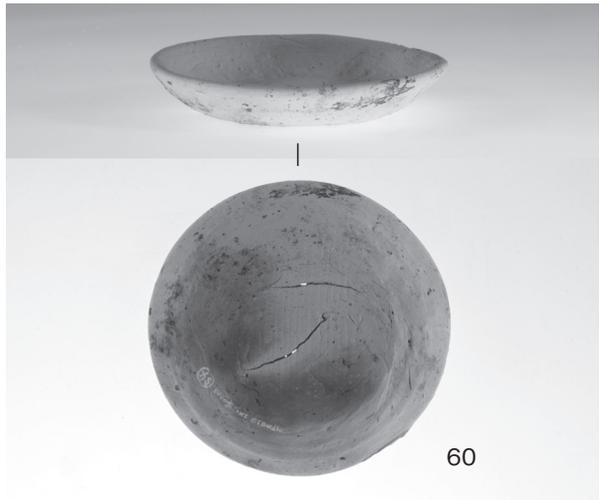
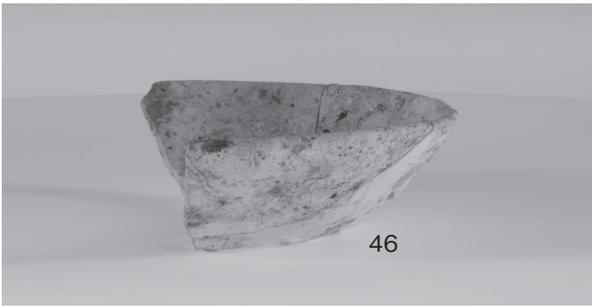
図
版
26



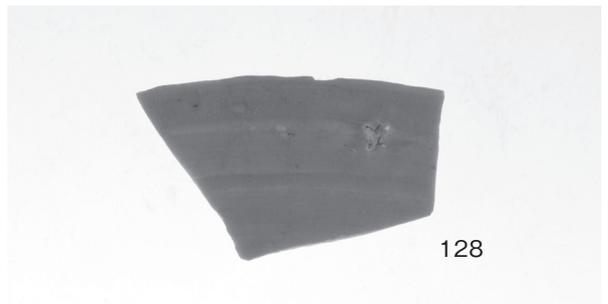
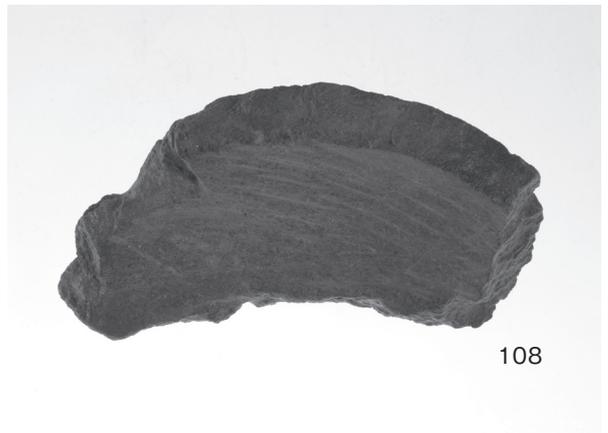
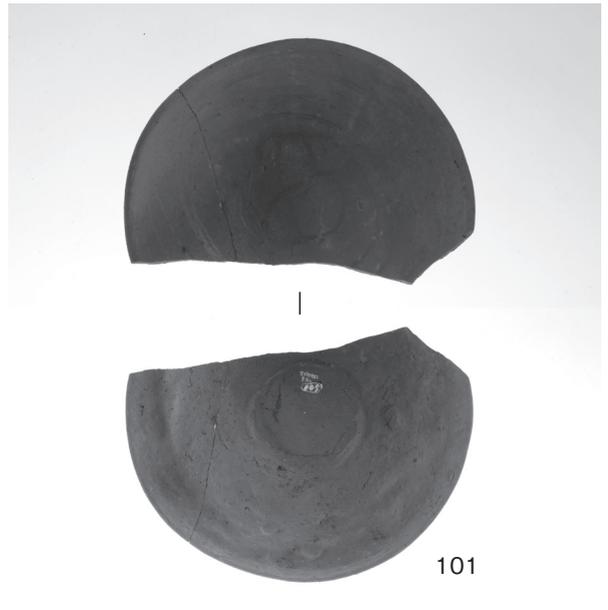
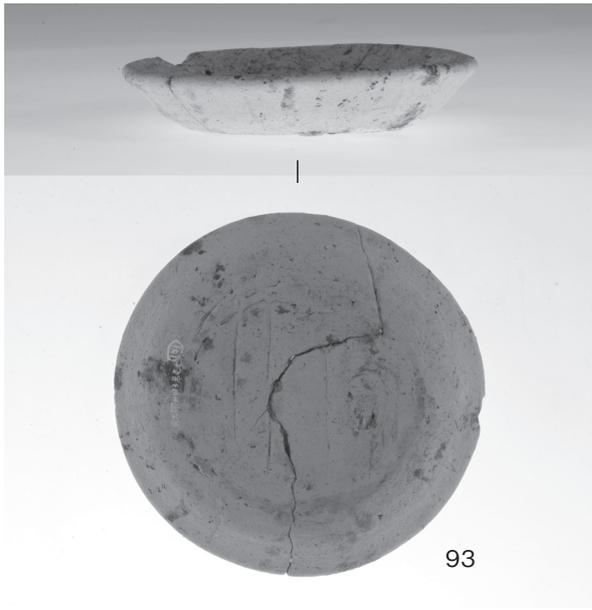
1. 出土遺物 (掘立3:4、SD1:7・10・11、SD3:19・21・25)



1. 出土遺物 (SK3 : 26、SK4 : 27、土墳墓 1 : 28・29、SP92 : 35、SP113 : 42、SP39 : 43 ~ 45)



1. SX1 出土遺物



1. 出土遺物 (第II⑤層: 93・101・104・106・108、第II⑥層: 128～130)



1. 調査地全景（北西より）



2. 1区水田面完掘状況（北より）



3. 1区西壁土層堆積状況（東より）



1. 1区SE1掘下げ状況(北より)



2. 1区SE1の木組材



3. 1区柱穴内から出土した瓦器碗(北より)



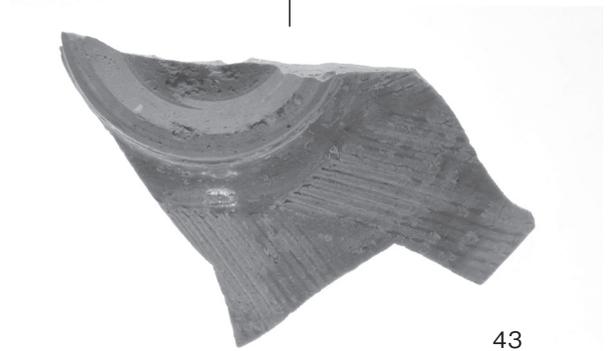
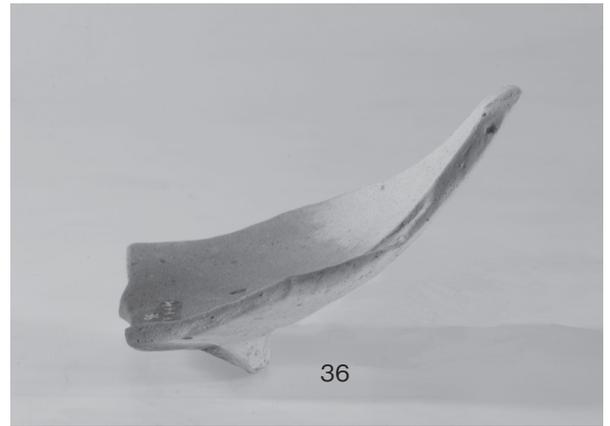
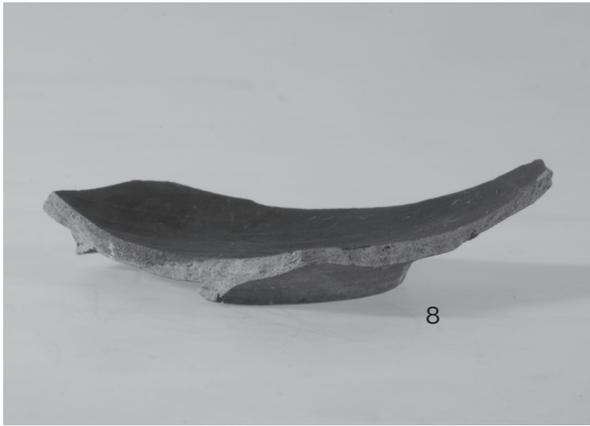
1. 1区遺構完掘状況（北より）



2. 1区南側遺構完掘状況（西より）



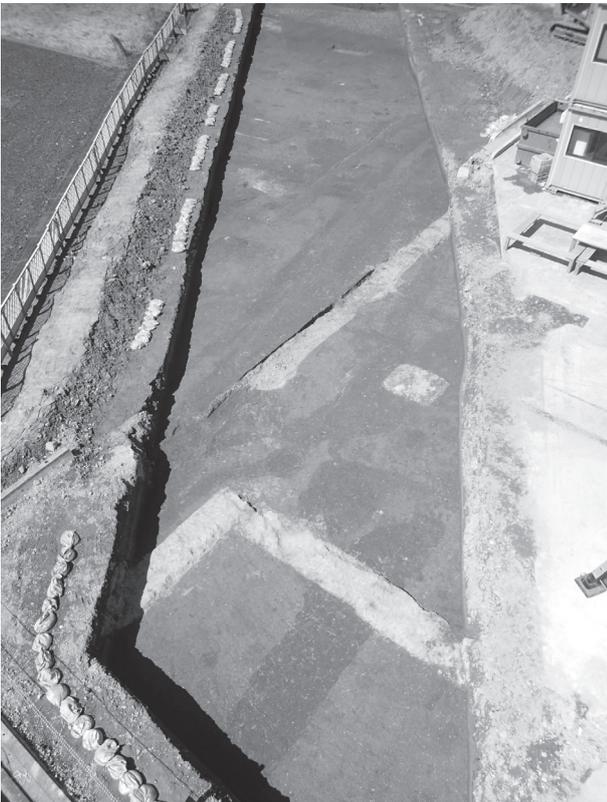
3. 2区掘削状況（北より）



1. 出土遺物 (SE1 : 8・10、SX1 : 25、包含層 : 36・37・43)



1. 調査区全景（南東より）



2. 1区遺構検出状況（南東より）



3. 1区西北隅壁土層（南東より）



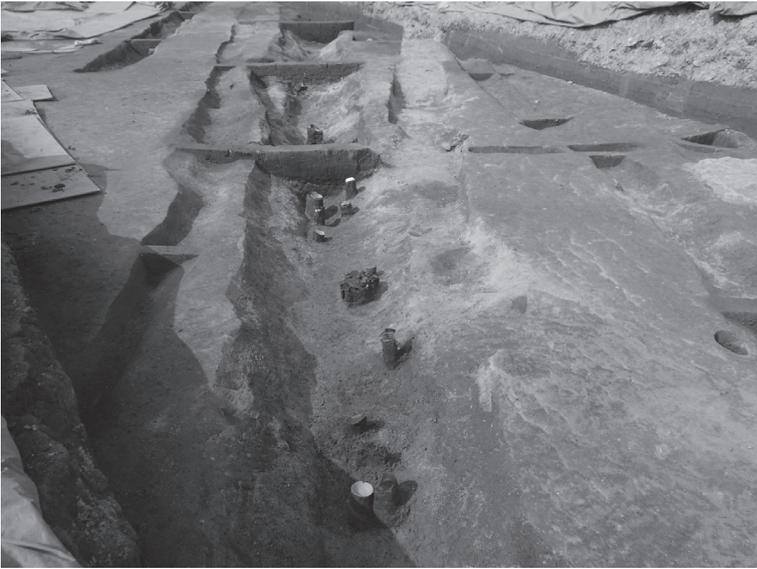
1. 1区第2面水田面完掘状況
(西より)



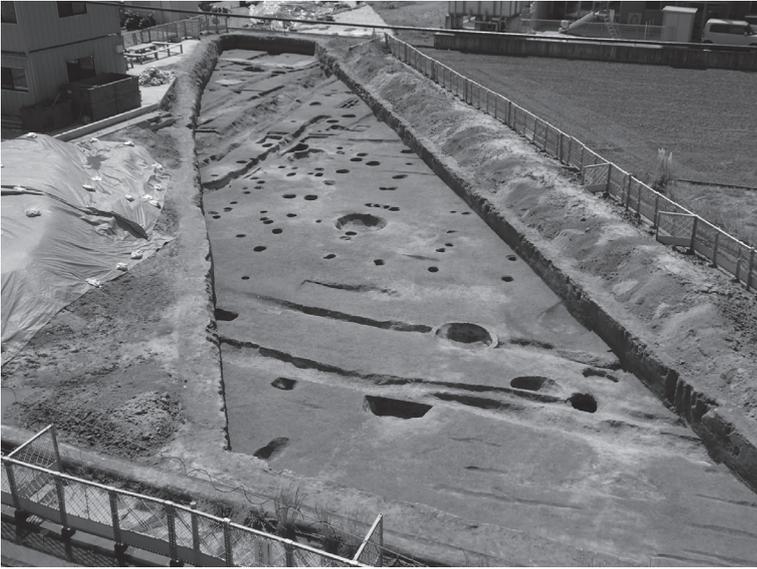
2. 土壙墓1人骨・木棺検出状況
(西より)



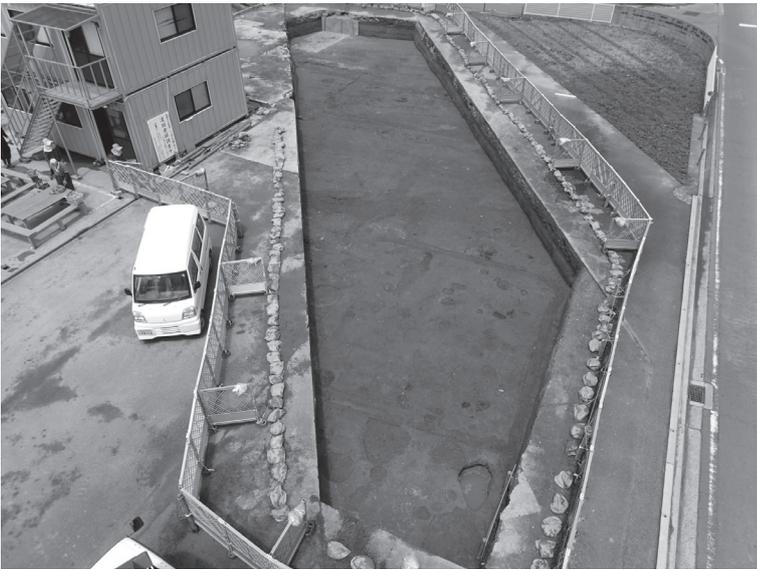
3. 土壙墓1棺外遺物出土状況
(北より)



1. SD3 遺物出土状況（南より）



2. 1区遺構完掘状況（北西より）



3. 2区遺構完掘状況（南東より）



1. SE1 木片出土状況（北より）



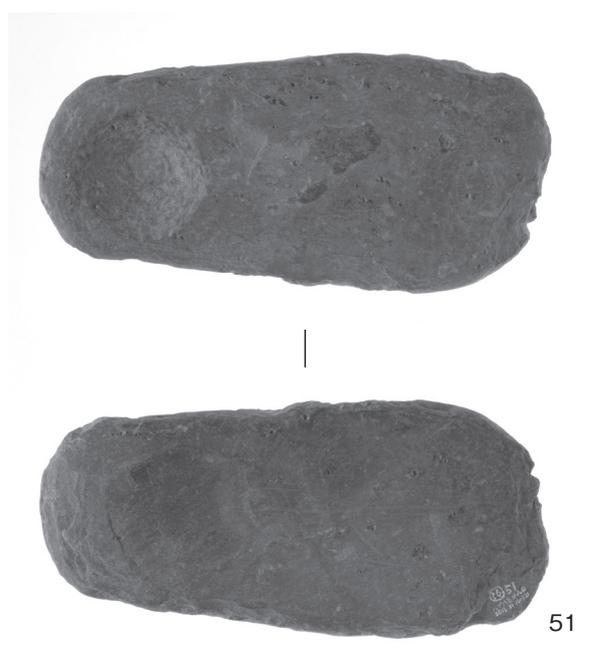
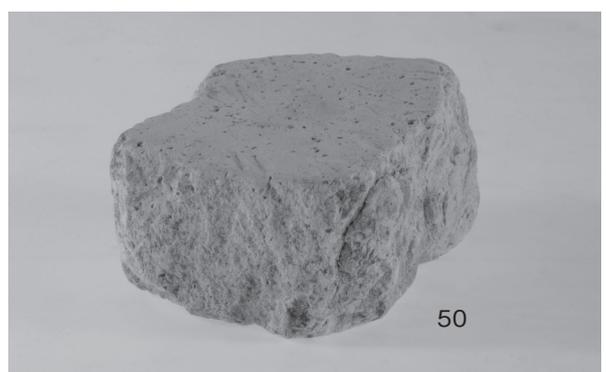
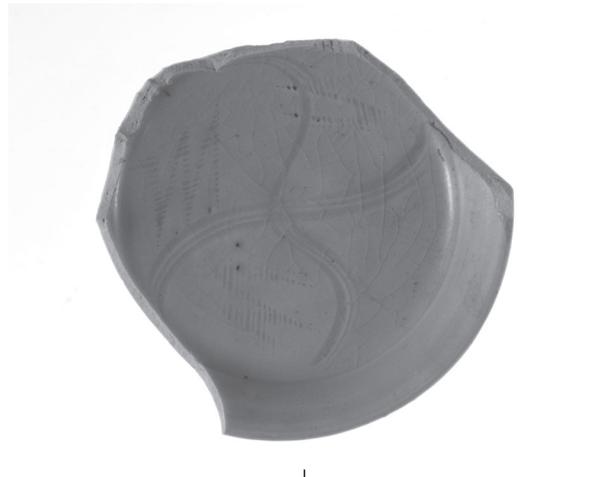
2. 2区遺構完掘状況（南より）



3. 2区掘立2完掘状況（西より）

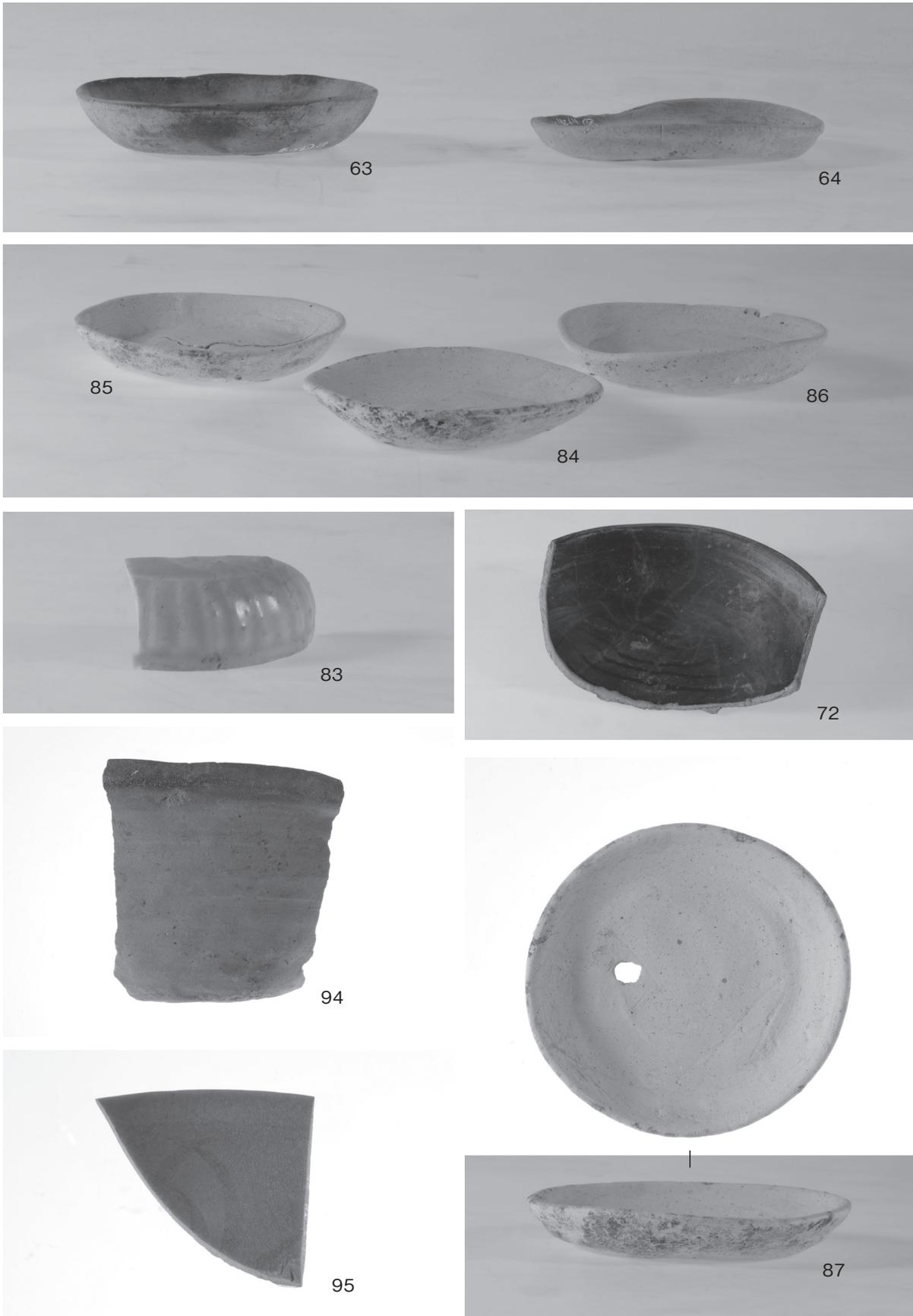


1. 出土遺物 (掘立1: 3、SD3①: 18・20・22・23・26・27・29)



1. 出土遺物 (SD3 ② : 30・36、SD4 : 38・40、SD10 : 50・51、SD12 : 58)

図
版
40



1. 出土遺物 (SD14 : 63・64、SD22 : 72、SK7 : 83、土壙墓1 : 84～87、SP152 : 94、SP138 : 95)



1. 水田面足跡完掘状況（北より）



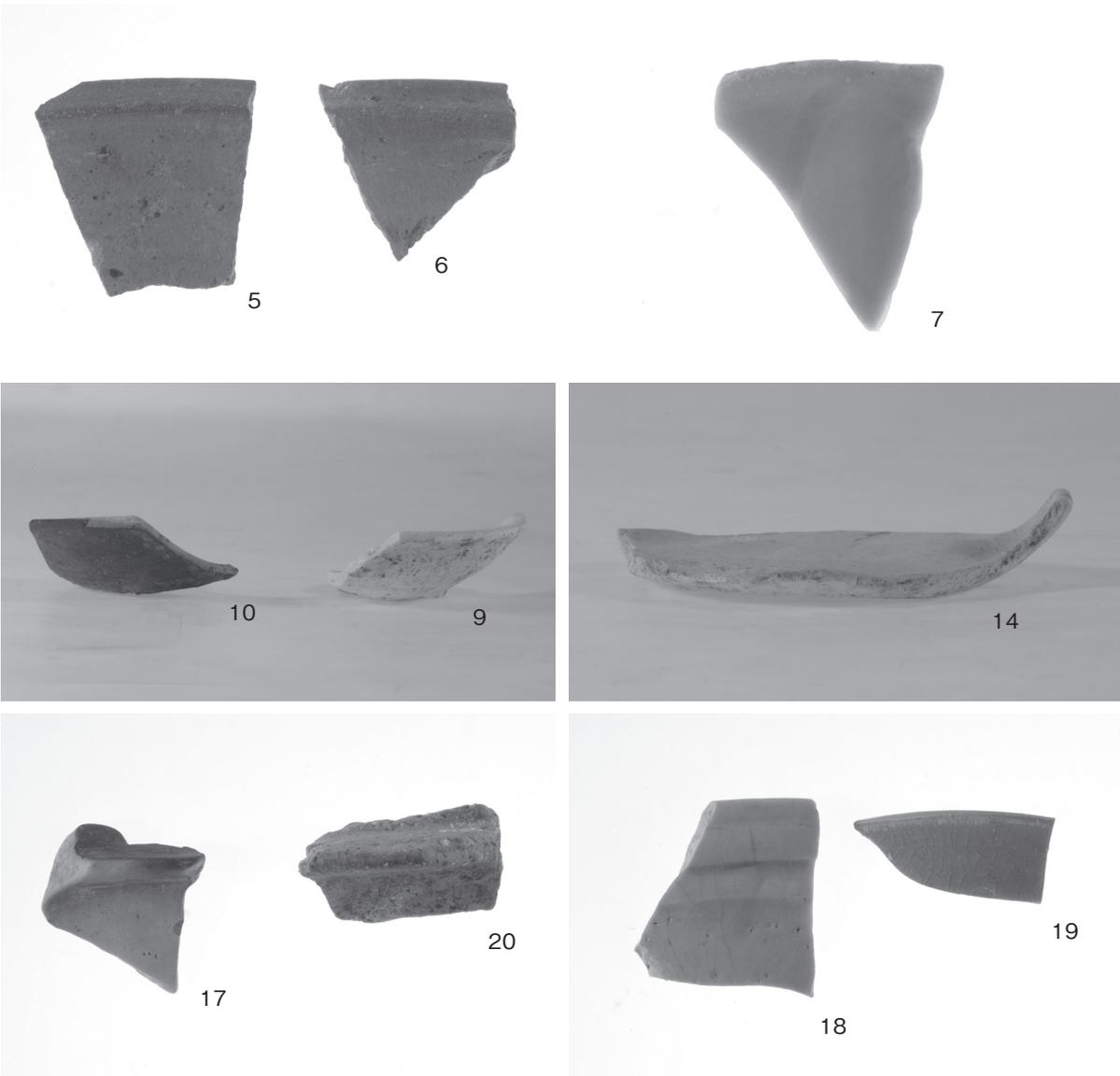
2. 遺構検出状況（北より）



3. 第2面遺構完掘状況（北より）



1. 第2面遺構完掘状況（南より）



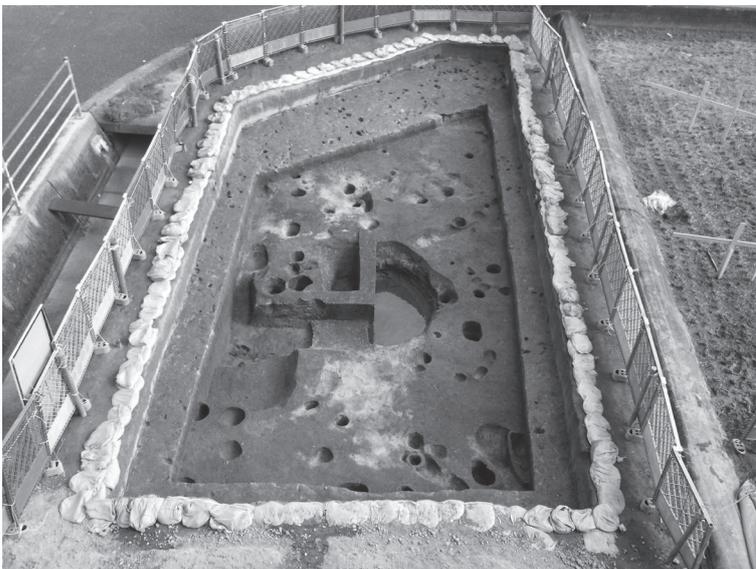
2. 出土遺物（SD1：5～7、SX1：9・10、包含層：14・17～19、水田面上：20）



1. 調査前全景（南東より）



2. 1 面目遺構完掘状況（西より）



3. 2 面目遺構完掘状況（西より）



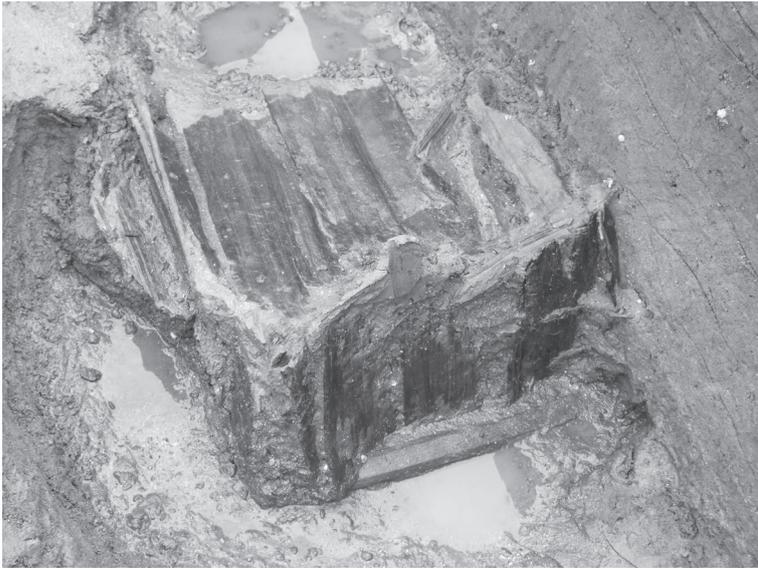
1. SE1 半截状況（北より）



2. SE1 完掘状況（北より）



3. SE2 検出状況（北西より）



1. SE2 木枠検出状況（南より）



2. SE2 曲物出土状況（南より）



3. SE2 曲物取り上げ状況（西より）



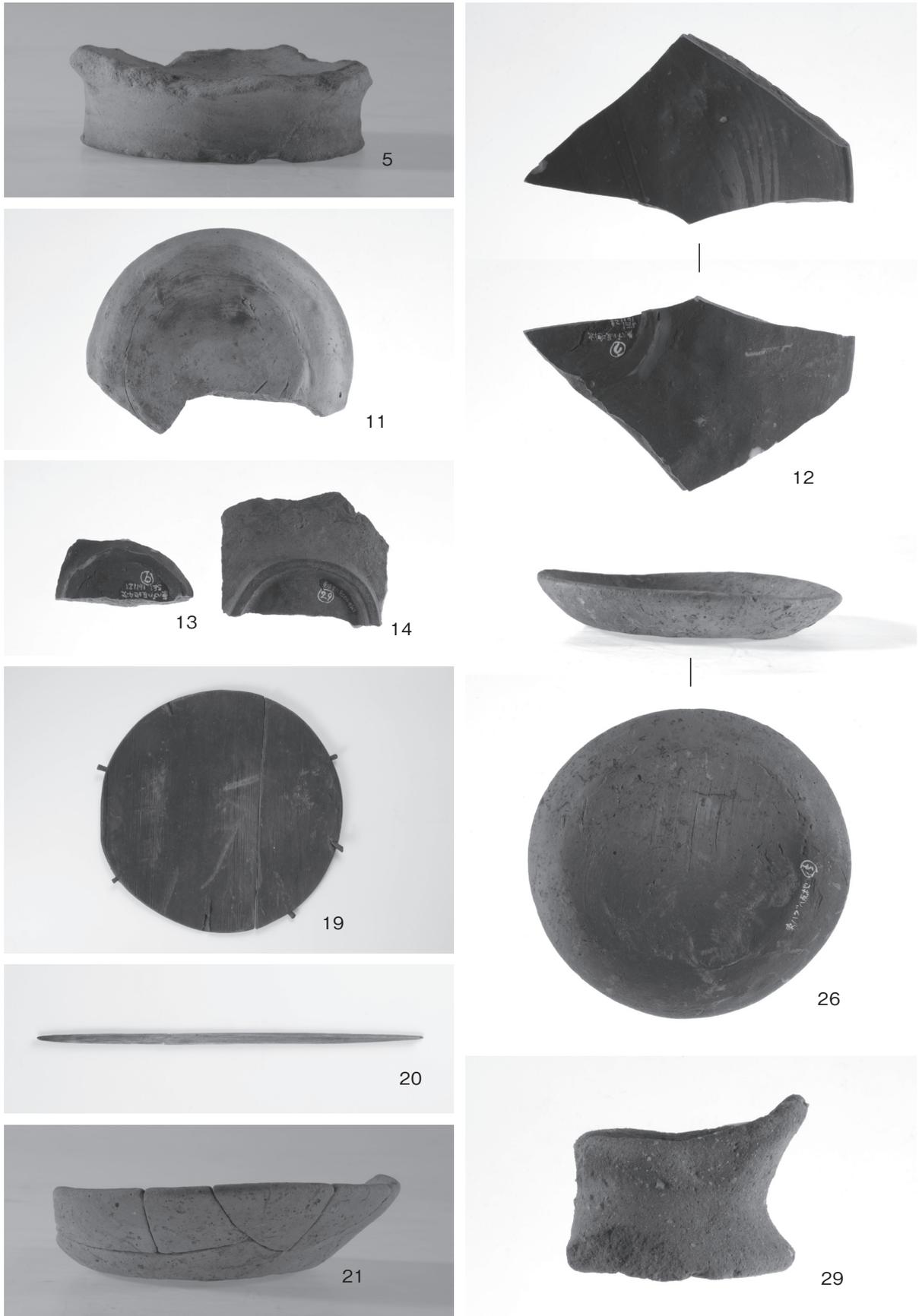
1. SP26 遺物出土状況（東より）



2. SP20 遺物出土状況（南より）

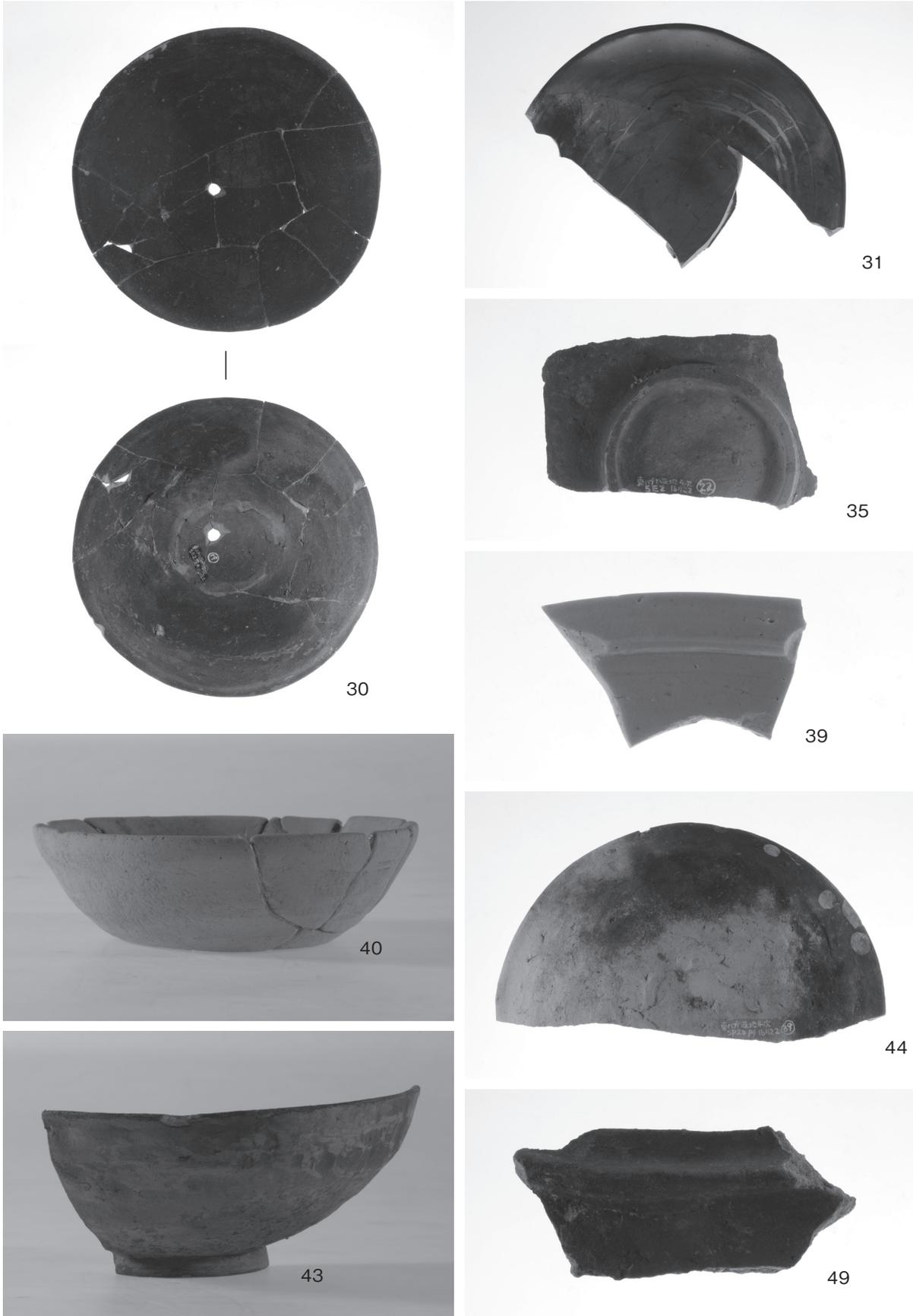


3. 現地説明会風景（東より）



1. 出土遺物 (SE1 : 5・11～14・19・20、SE2 ① : 21・26・29)

図
版
48



1. 出土遺物 (SE2 ② : 30・31・35・39、SP47 : 40、SP19 : 43、SP20 : 44、第Ⅱ③層 : 49)



1. 調査地全景（東より）



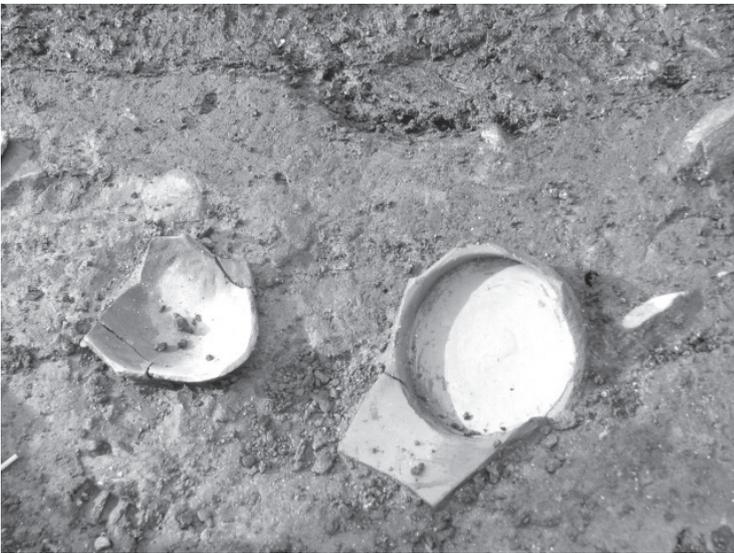
2. 東壁土層（西より）



3. 遺物出土状況①（南より）



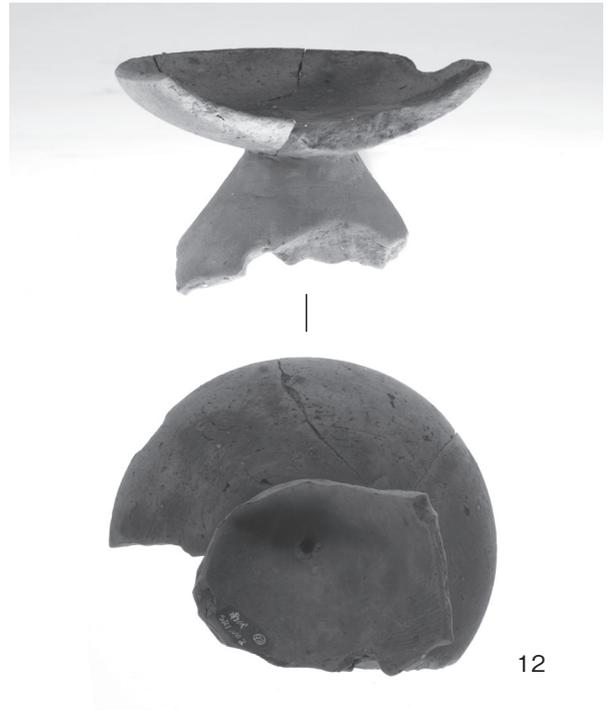
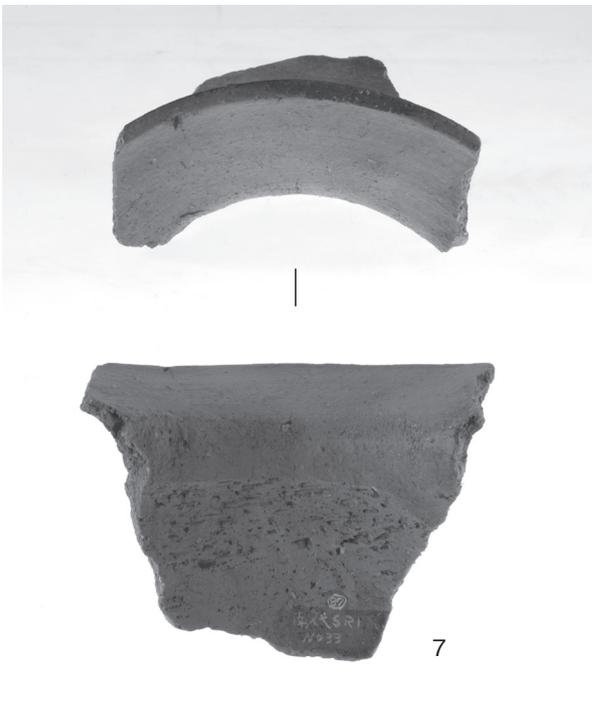
1. 遺物出土状況② (西より)



2. 遺物出土状況③ (南より)



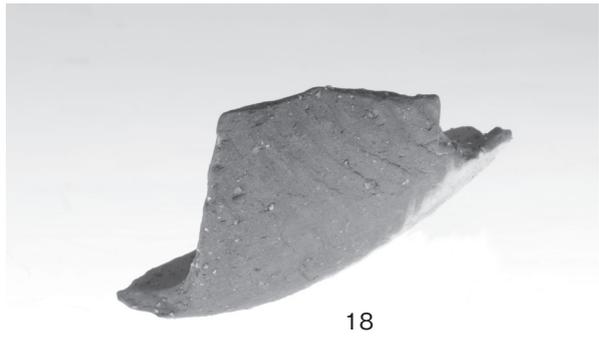
3. SD1 検出状況 (東より)



1. 出土遺物 (SD1 : 6、第IV層取上遺物① : 7・9・10・12)



13



18



17



23



|



19



24

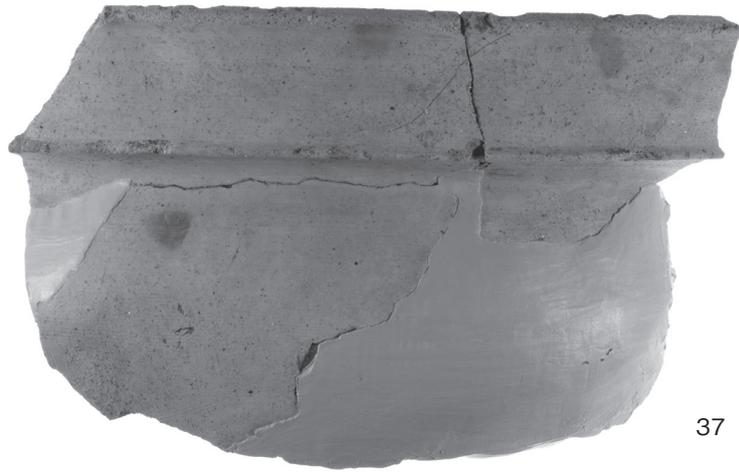


26

1. 出土遺物 (第IV層取上遺物②: 13・17・18、中央トレンチ①: 19・23・24・26)



1. 中央トレンチ出土遺物②



37



40



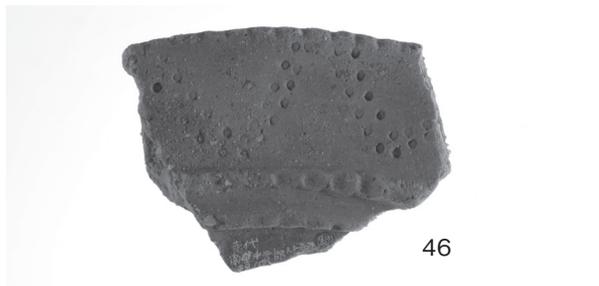
41



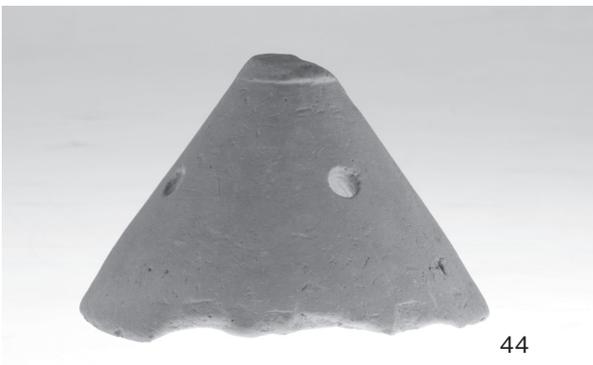
42



45



46

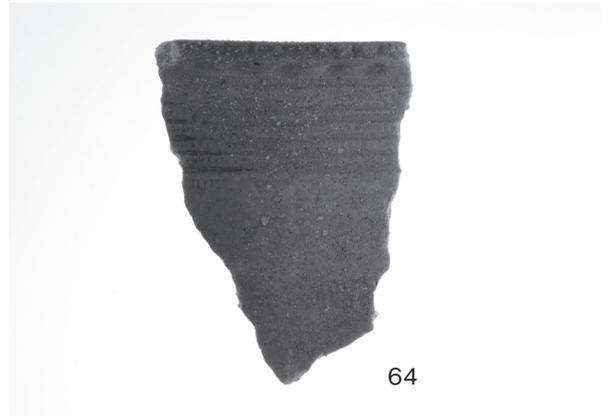
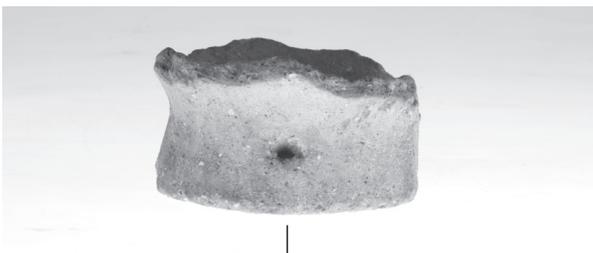
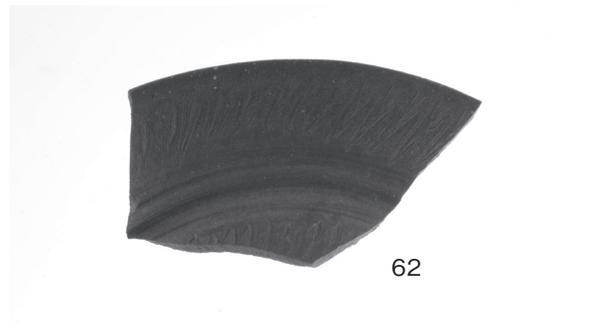
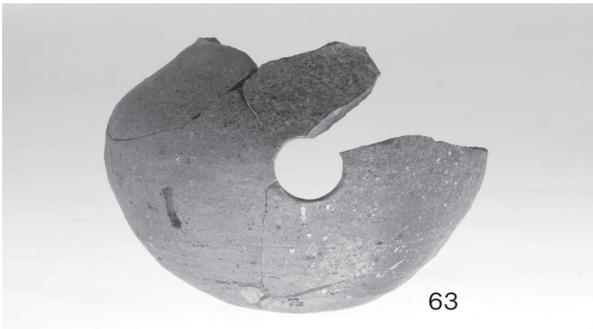
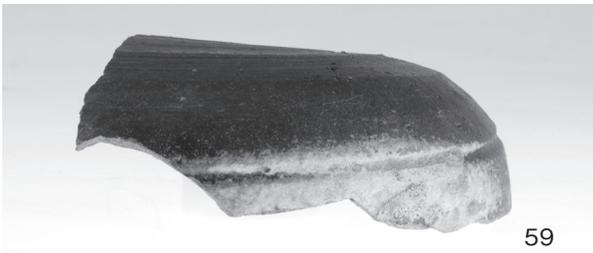


44



47

1. 中央トレンチ出土遺物③



1. 南壁トレンチ出土遺物



1. 西壁トレンチ出土遺物

報 告 書 抄 録

ふりがな	ようごなかのこいせき、ようごやないだいいせき、ひがしはぶはったんじいせき、みなみよしだみなみだいいせき							
書名	余戸中ノ孝遺跡1・2・4・5次調査、余戸柳井田遺跡1・2・3・6次調査、東垣生八反地遺跡1・3・4次調査、南吉田南代遺跡1次調査							
副書名	松山外環状道路（空港線）整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	松山市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第196集							
編著者名	河野 史知・宮内 慎一							
編集機関	公益財団法人 松山市文化・スポーツ振興財団 埋蔵文化財センター							
所在地	〒791-8032 愛媛県松山市南斎院町乙67番地6 TEL089-923-6363							
発行年月日	西暦2019（平成31）年3月22日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °' "	東経 °' "	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ようごなかのこ 余戸中ノ孝1次	まつやましようごにし 松山市余戸西	38201	583	33°48'43"	132°43'25"	20150113~20150331	140	道路整備
ようごなかのこ 余戸中ノ孝2次	まつやましようごにし 松山市余戸西	38201	584	33°48'42"	132°43'26"	20150316~20150331	110	道路整備
ようごなかのこ 余戸中ノ孝4次	まつやましようごにし 松山市余戸西	38201	605	33°48'47"	132°43'16"	20160125~20160229	803	道路整備
ようごなかのこ 余戸中ノ孝5次	まつやましようごにし 松山市余戸西	38201	606	33°48'43"	132°43'25"	20160105~20160229	250	道路整備
ようごやないだ 余戸柳井田1次	まつやましようごにし 松山市余戸西	38201	585	33°49'2"	132°43'10"	20150113~20150331	400	道路整備
ようごやないだ 余戸柳井田2次	まつやましようごにし 松山市余戸西	38201	598	33°49'2"	132°43'9"	20150924~20151031	190	道路整備
ようごやないだ 余戸柳井田3次	まつやましようごにし 松山市余戸西	38201	600	33°49'3"	132°43'10"	20151101~20160219	450	道路整備
ようごやないだ 余戸柳井田6次	まつやましようごにし 松山市余戸西	38201	619	33°49'3"	132°43'10"	20160623~20160930	715	道路整備
ひがしはぶはったんじ 東垣生八反地1次	まつやましひがしはぶちよう 松山市東垣生町	38201	612	33°49'5"	132°43'7"	20160301~20160531	874	道路整備
ひがしはぶはったんじ 東垣生八反地3次	まつやましひがしはぶちよう 松山市東垣生町	38201	617	33°49'4"	132°43'8"	20160601~20160725	236	道路整備
ひがしはぶはったんじ 東垣生八反地4次	まつやましひがしはぶちよう 松山市東垣生町	38201	623	33°49'2"	132°43'8"	20161024~20161129	177	道路整備
みなみよしだみなみだ 南吉田南代1次	まつやましみなみよしだちよう 松山市南吉田町	38201	604	33°49'11"	132°42'58"	20151216~20160129	380	道路整備
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
ようごなかのこ 余戸中ノ孝1次	集落墓	中世	掘立柱建物・溝・土坑・土壙墓・柱穴		土師器・須恵器・瓦質土器・陶磁器・石製品・木製品・骨・種子		中世の周溝を伴う土壙墓	
ようごなかのこ 余戸中ノ孝2次	集落	中世	土坑・柱穴		土師器・須恵器・瓦質土器・陶磁器		鎌倉時代の土坑を検出	
ようごなかのこ 余戸中ノ孝4次	集落墓	中世	掘立柱建物・溝・土坑・井戸址・柱穴		土師器・須恵器・瓦質土器・陶磁器・鉄製品		鎌倉時代の掘立柱建物や溝・土坑・井戸を検出	
ようごなかのこ 余戸中ノ孝5次	集落	古墳	竪穴建物・溝・柱穴		土師器・須恵器・石製品		市場系須恵器を伴う建物を検出	
ようごやないだ 余戸柳井田1次	水田	中世	足跡		土師器・須恵器・瓦質土器・陶磁器		室町時代の水田址	
ようごやないだ 余戸柳井田2次	水田	古代 中世	溝・足跡・柱穴		土師器・須恵器・瓦質土器・陶磁器		鎌倉時代の地割か区画のための溝を検出	
ようごやないだ 余戸柳井田3次	墓 水田	中世	足跡・掘立柱建物・溝・土坑・土壙墓・柱穴		土師器・須恵器・瓦質土器・陶磁器・木製品・種子		鎌倉時代の掘立柱建物や区画溝を検出	
ようごやないだ 余戸柳井田6次	集落水田	中世	足跡・溝・井戸址・土坑・柱穴・鋤跡		土師器・須恵器・瓦質土器・陶磁器		鎌倉時代の井戸や河川を検出	
ひがしはぶはったんじ 東垣生八反地1次	集落水田	古代 中世	足跡・掘立柱建物・溝・土坑・土壙墓・井戸址・柱穴・鋤跡		土師器・須恵器・瓦質土器・陶磁器・石製品・種子		鎌倉時代の掘立柱建物や区画溝を検出	
ひがしはぶはったんじ 東垣生八反地3次	集落水田	中世	足跡・溝・土坑・柱穴		土師器・須恵器・瓦質土器・陶磁器		鎌倉時代の自然流路や室町時代の水田址を検出	
ひがしはぶはったんじ 東垣生八反地4次	集落水田	中世	溝・土坑・井戸址・柱穴・足跡		土師器・須恵器・瓦質土器・陶磁器・木製品・種子		鎌倉時代の河川や室町時代の水田址を検出	
みなみよしだみなみだ 南吉田南代1次	集落	古墳	溝		弥生土器・土師器・須恵器・石製品・木製品・種子		弥生時代・古墳時代の土器や古墳時代の溝を検出	
要約	調査では、弥生時代前期から中世までの遺構や遺物を確認した。南吉田南代遺跡1次調査では、包含層からの出土遺物により弥生時代前期から古墳時代初頭の集落が近辺に展開することが窺えた。余戸中ノ孝遺跡5次調査で出土した市場系須恵器は伊予市南組窯跡の流通を考える上での貴重な資料である。余戸中ノ孝遺跡1次調査の土壙墓は周溝を伴っており、中世墓では県下で初例となる。余戸柳井田遺跡2・3・6次調査や東垣生八反地遺跡1・3・4次調査で平安時代後期から鎌倉時代の集落や室町時代の水田址を検出した。これらの調査成果は松山平野沿岸部での集落の様相を解明する上で貴重な資料となる。							

松山市文化財調査報告書 第196集

余戸中ノ孝遺跡1・2・4・5次調査
余戸柳井田遺跡1・2・3・6次調査
東垣生八反地遺跡1・3・4次調査
南吉田南代遺跡1次調査

平成31年3月22日 発行

編集 公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団
発行 埋蔵文化財センター
〒791 - 8032 松山市南斎院町乙67番地6
TEL (089) 923 - 6363

印刷 明星印刷工業株式会社
〒790 - 0056 松山市土居田町500番地
TEL (089) 971 - 7111
